2018-2022 年度 文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究（研究領域提案型）

研究成果報告 2020 年度

都市文明の本質

The Essence of Urban Civilization

古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究

An Interdisciplinary Study of the Origin and Transformation of Ancient West Asian Cities



3

山田重郎 編

科研費新学術領域研究
都市文明の本質：
古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究
3
研究成果報告 2020 年度

山 田 重 郎　編

2021 年 3 月

例言

本書は、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）平成 30 年度〜 令和 4 年度「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」による 2020 年度研究成果報告書である。

文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）平成 30 年度〜令和 4 年度
「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」
領域略称名：西アジア都市
領域番号：5001
領域代表者：山田重郎（筑波大学人文社会系）
URL: http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city/

MEXT Grant-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas 2018-2022
The Essence of Urban Civilization: An Interdisciplinary Study of the Origin and Transformation of Ancient West Asian Cities
Number of Research Area: 5001
Head Investigator: Shigeo Yamada (University of Tsukuba, Faculty of Humanities and Social Sciences)
URL: http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city_EN

目　次

2020 年度年次報告書　巻頭言 …… 山田重郎　1

A01 計画研究 01　西アジア先史時代における生業と社会構造

新石器化から都市化へ
　―イラク・クルディスタン、シャカル・テペ遺跡の発掘調査と出土土器― …… 小髙敬寛　7

考古学からみたメソポタミア銅石器時代と都市化―研究の現状と課題― …… 下釜和也　15

西アジアの都市化と遊牧民交易 …… 足立拓朗　25

前 3 千年紀のインダス文明とアラビア半島の交流関係に関する考古学的研究
　―研究成果概要報告― …… 上杉彰紀　29

A02 計画研究 02　古代西アジアにおける都市の景観と機能

シリア、テル・タバン出土、鉄剣副葬の中期アッシリア土壙墓 …… 沼本宏俊　49

ラガシュ（ギルス）出土のエ・ミ文書から読み取れる園丁組織 …… 唐橋　文　63

エマル文書における「主」とは誰か …… 山田雅道　69

前１１・１０世紀におけるアッシリア王国の衰退 …… 柴田大輔　87

アダド・ニラリ 2 世による都市 Naṣibina の征服 …… 佐野克司　95

紀元前 1 千年紀バビロニアの都市の景観と社会 …… 渡井葉子　101

『バビロン天文日誌』に見る衛生危機・社会危機 …… 三津間康幸　113

A02 計画研究 03　古代エジプトにおける都市の景観と構造

計画研究 03「古代エジプトにおける都市の景観と構造」
　2020 年度活動報告 …… 近藤二郎・河合 望　119

テーベの祭礼と宗教都市景観 …… 深谷雅嗣　133

The New Kingdom Royal City: Deir El-Ballas and Malqata …… Peter Lacovara 143

ヘレニズム時代のエジプト領域部における都市の概念と景観 …… 周藤芳幸 161

Interim Report on the Recovery of City/Village Landscape at
the Hinterland Waterfront of Alexandria …… So Hasegawa 179

B01 計画研究 04　古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源

肥沃な三日月地帯北縁部に分布する新石器時代〜鉄器時代遺構の
堆積物柱の元素濃度 …… 安間 了・西山伸一・三宅 裕・常木 晃・横尾頼子 195

ヤシン・テペ遺跡の石室内の金属濃集堆積物の分析 …… 黒澤正紀・池端 慶・安間 了 205

イラン北東部サンギ・チャハマック遺跡の祭壇に見られる
黒色物の地球化学的特徴とその起源物質 …… 中野孝教・古里節夫・倉田恵美子
千本真生・石田温美・常木 晃・三宅 裕 217

C01 計画研究 05　中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究

ガズナとフィールーズクーフ
—歴史的アフガニスタンにおける「都」についての覚書— …… 稲葉 穣 231

15 世紀のヘラートにおける聖者墓群の形成
—イードガーフを事例として— …… 杉山雅樹 245

職人のまちイスファハーン
—19 世紀の手工業者一覧にみる伝統産業— …… 守川知子 255

C01 計画研究 06　西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究

CIAM アルジェの展示パネル（1953）にみるマヒーッディンの
ビドンヴィルのトポロジー …… 松原康介 269

オールド・ダマスクスの交通解析 …… 岡野圭吾・松原康介・谷口 守 279

西アジア及び周辺都市に尽力したフランスの都市計画家ユルバニストに関する研究の成果報告
－アンカラとイスタンブールにおける 3 つの都市計画案に関する考察－ …… 三田村哲哉 293

植民地期後期アルジェのカスバのイメージ …… 渡邊祥子 303

長期化・複雑化した紛争における平和構築アプローチ
—シリア紛争を事例に— …… 武藤亜子 323

Post-Conflict Reconstruction and the Decline of Urban Vitality in
Downtown Beirut …… Allam Alkazei・Kosuke Matsubara 329

カッパドキア遺跡・凝灰岩製の岩窟群の保全とその課題 …… 谷口陽子 337

2020 年度に開催した研究会・シンポジウム・講演会 …… 341

平成 30 ～令和 4 年度 文部科学省科学研究費補助金「新学術領域研究（研究領域提案型）」
都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究

研究組織

領域代表

山田 重郎（筑波大学人文社会系・教授）

総括班「西アジア都市文明論」

研究代表者

山田 重郎（筑波大学人文社会系・教授、全体の統括・研究連携支援）

研究分担者

前田 修（筑波大学人文社会系・准教授、総務・研究連携支援）
松原 康介（筑波大学システム情報系・准教授、研究会・シンポジウム企画）
守川 知子（東京大学大学院人文社会系研究科・准教授、研究会・シンポジウム企画）
柴田 大輔（筑波大学人文社会系・准教授、研究会・シンポジウム企画）
近藤 二郎（早稲田大学文学学術院・教授、広報・教育活動）
河合 望 （金沢大学新学術創成研究機構・教授、広報・教育活動）
谷口 陽子（筑波大学人文社会系・准教授、広報・教育活動）
三宅 裕（筑波大学人文社会系・教授、編集・出版活動）
安間 了（徳島大学大学院社会産業理工学研究部・教授、編集・出版活動）
黒澤 正紀（筑波大学生命環境系・准教授、編集・出版活動）

事務局

上原 妙子（会計・総務）
廣永 尚子（会計・総務）

領域評価委員

月本 昭男（上智大学神学部・教授、古代オリエント宗教文化史・楔形文字学関連の評価担当）
藤井 純夫（金沢大学歴史言語文化学系・教授、西アジア考古学関連の評価担当）
鈴木 寿志（大谷大学文学部・教授、文化地質学関連の評価担当）

研究項目 A01「都市文明への胎動」
計画研究 01「西アジア先史時代における生業と社会構造」

研究代表者

三宅 裕（筑波大学人文社会系・教授、新石器時代社会）

研究分担者

常木 晃（筑波大学・名誉教授、銅石器時代社会）
本郷 一美（総合研究大学院大学先導科学研究科・准教授、動物考古学）
丹野 研一（龍谷大学文学部・准教授、植物考古学）
有村 誠（東海大学文学部・教授、先史時代の専業化）
前田 修（筑波大学人文社会系・准教授、先史時代の物資流通）
下釜 和也（古代オリエント博物館・研究員、西アジア考古学）

研究協力者

千本 真生（筑波大学人文社会系・研究員、土器の生産と流通）
板橋 悠（筑波大学人文社会系・助教、食性分析・人や物の移動の研究）
久田 健一郎（筑波大学、地質学・先史時代における石材利用）

研究項目 A02「古代西アジア都市の景観と構造」
計画研究 02「古代西アジアにおける都市の景観と機能」

研究代表者

山田 重郎（筑波大学人文社会系・教授、楔形文字学・歴史研究）

研究分担者

唐橋 文（中央大学文学部・教授、楔形文字学・シュメル研究）
池田 潤（筑波大学人文社会系・教授、セム語学）
西山 伸一（中部大学人文学部・准教授、西アジア考古学・青銅器・鉄器時代）
柴田 大輔（筑波大学人文社会系・准教授、楔形文字学・宗教文化史）
春田 晴郎（東海大学文化社会学部・教授、古代イラン史）

研究協力者

前川 和也（京都大学・名誉教授、楔形文字学・シュメル研究）
沼本 宏俊（国士舘大学体育学部・教授、メソポタミア考古学）
渡辺 千香子（大阪学院大学国際学部・教授、メソポタミア美術・環境史）
三津間 康幸（筑波大学人文社会系・助教、セレウコス朝期の歴史）
下釜 和也（古代オリエント博物館・研究員、西アジア考古学）
渡部 展也（中部大学人文学部・准教授、考古学・地理情報学）
高井 啓介（関東学院大学国際文化学部・准教授、北西セム語文献）
渡井 葉子（中央大学人文科学研究所・客員研究員、楔形文字学・新バビロニア時代）
前田 徹（早稲田大学・名誉教授、楔形文字学・前三千年紀メソポタミア史）
森 若葉（国士舘大学・研究員、楔形文字学・シュメル語学）
辻田 明子（ライデン大学・大学院生、楔形文字学・メソポタミア宗教史）
中田 一郎（中央大学・名誉教授、楔形文字学・前二千年紀前半メソポタミア史）
山田 雅道（中央大学文学部・非常勤講師、楔形文字学・前二千年紀後半メソポタミア史）

佐野 克司（筑波大学人文社会系・学振特別研究員、楔形文字学・アッシリア史）
伊藤 早苗（上智大学神学部・学振特別研究員、楔形文字学・アッシリア史）
辰巳 祐樹（奈良県立橿原考古学研究所調査部・技師、考古学・地中探査）
ジーナ コンスタントポロス（カリフォルニア大学ロサンゼルス校・助教、楔形文字学）
津本 英利（古代オリエント博物館・主任研究員、考古学・青銅器・鉄器時代）
長谷川 修一（立教大学文学部・教授、旧約学・聖書考古学）
菊地 咲（ハイデルベルク大学哲学部前方オリエント言語文化学科・大学院博士課程、楔形文字学・アッシリア学）

計画研究 03「古代エジプトにおける都市の景観と構造」

研究代表者
近藤 二郎（早稲田大学文学学術院・教授、エジプト学・エジプト考古学）

研究分担者
河合 望（金沢大学新学術創成研究機構・教授、エジプト学・エジプト考古学）
高宮 いづみ（近畿大学文芸学部・教授、エジプト考古学・先王朝時代）
中野 智章（中部大学国際関係学部・教授、エジプト学・エジプト考古学）
内田 杉彦（明倫短期大学歯科衛生士学科・准教授、エジプト学・文献研究）
田澤 恵子（古代オリエント博物館・主任研究員、エジプト学・宗教文化史）
長谷川 奏（早稲田大学総合研究機構・客員教授、エジプト考古学・ヘレニズム～古代末期）
周藤 芳幸（名古屋大学人文学研究科・教授、古代ギリシア史・考古学）
西本 真一（日本工業大学建築学部・教授、古代エジプト建築史）
柏木 裕之（東日本国際大学エジプト考古学研究所・客員教授、古代エジプト建築史）
辻村 純代（古代学協会・研究員、プトレマイオス朝の都市研究）
矢澤 健（東日本国際大学エジプト考古学研究所・客員教授、エジプト考古学）

研究協力者
馬場 匡浩（早稲田大学総合研究機構、エジプト考古学・先王朝時代）
惠多谷 雅弘（東海大学情報技術センター・主任研究員、衛星画像解析）
高橋 寿光（東日本国際大学エジプト考古学研究所・客員教授、エジプト考古学）
藤井 信之（関西大学、前 1 千年紀のエジプト都市研究）
和田 浩一郎（國學院大学、プトレマイオス朝の都市研究）

研究項目 B01「西アジアの環境と資源」
計画研究 04「古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源」

研究代表者
安間 了（徳島大学大学院社会産業理工学研究部・教授、地質学・研究の総括）

研究分担者

黒澤 正紀（筑波大学生命環境系・准教授、鉱物学・微少領域分析）
池端 慶（筑波大学生命環境系・准教授、鉱床学・金属同位体分析）
荒川 洋二（筑波大学生命環境系・教授、岩石学・金属同位体分析）
丸岡 照幸（筑波大学生命環境系・准教授、地球化学・硫黄同位体分析）
八木 勇治（筑波大学生命環境系・教授、地震学・災害科学研究）
中野 孝教（総合地球環境学研究所・名誉教授、環境科学・環境同位体分析）
横尾 頼子（同志社大学理工学部・助教、環境科学・水質および土壌化学分析）
昆 慶明（産業技術総合研究所地圏資源環境研究部門・主任研究員、地球化学・ICP-MS 分析）
佐野 貴司（国立科学博物館地学研究部・グループ長、岩石学・XRF 全岩組成分析）
若狭 幸（弘前大学地域戦略研究所・助教、Al, Be および Cl 同位体を用いた地形面年代測定）
下岡 順直（立正大学地球環境科学部・特任准教授、地球年代学・OSL 年代測定）
淺原 良浩（名古屋大学環境学研究科・准教授、岩石学・同位体分析）
堀川 恵司（富山大学学術研究部理学系・准教授、古環境学・鍾乳石の分析）
申 基澈（総合地球環境学研究所研究基盤国際センター・准教授、ICP-MS による微量組成分析および金属同位体分析）

研究協力者

南 雅代（名古屋大学宇宙地球環境研究所・教授、文化財科学・放射性炭素年代測定）
笹 公和（筑波大学数理物質系・准教授、加速器分析学・加速器分析）
渡辺 千香子（大阪学院大学国際学部・教授、メソポタミア美術・環境史研究）
辻 彰洋（国立科学博物館植物研究部・研究主幹、微化石学・珪藻分析）
パークナー トーマス（筑波大学生命環境系・助教、地形学・GIS およびリモートセンシング）

研究項目 C01「中世〜現代の西アジア都市」
計画研究 05「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」

研究代表者

守川 知子（東京大学大学院人文社会系研究科・准教授、西アジア史：イラン・ペルシア湾岸の都市）

研究分担者

中町 信孝（甲南大学文学部・教授、アラブ中世史：エジプト・シリアの都市）
稲葉 穣（京都大学人文科学研究所・教授、中央アジア史：アフガニスタン・中央アジアの都市）
深見 奈緒子（国士舘大学イラク古代文化研究所・共同研究員、イスラーム建築史：イラク・エジプト都市）
山口 昭彦（上智大学総合グローバル学部・教授、クルド史研究：クルド山岳地域の都市）

研究協力者

黒木 英充（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授、中東地域研究：シリア・レバノンの都市）

計画研究 06「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」

研究代表者

松原 康介（筑波大学システム情報系・准教授、都市計画学：シリア、レバノン、アルジェリアの都市）

研究分担者

谷口 陽子（筑波大学人文社会系・准教授、文化財科学：アフガニスタン、トルコ、エジプトの都市）
木村 周平（筑波大学人文社会系・准教授、文化人類学：トルコ、シリアの都市）
田中 英資（福岡女学院大学人文学部・教授、文化財学：トルコ、ギリシアの都市）
谷口 守（筑波大学システム情報系・教授、近未来交通研究）
山内 和也（帝京大学文化財研究所・教授、文化財研究）
川本 智史（金沢星稜大学教養教育部・講師、トルコ都市建築研究）
塩谷 哲史（筑波大学人文社会系・准教授、中央アジア都市との比較）
杉本 悠子（早稲田大学文学学術院・助手、アレッポ都市史研究）
田中 暁子（後藤・安田記念東京都市研究所・主任研究員、ダマスカス マスタープラン研究）
中島 直人（東京大学大学院工学系研究科・准教授、アジアと西アジアの比較）
中野 茂夫（大阪市立大学大学院生活科学研究科・教授、都市計画史）
廣井 悠（東京大学大学院工学系研究科・准教授、防災・復興計画）
藤田 康仁（東京工業大学環境・社会理工学院・准教授、アナトリア地域との比較）
守田 正志（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院・准教授、トルコ、エジプト都市論研究）
武藤 亜子（国際協力機構・主任研究員、国際協力分野）
柳沢 究（京都大学工学研究科・准教授、南アジア都市との比較）
渡邊 祥子（日本貿易振興機構アジア経済研究所 地域研究センター中東研究グループ・研究員、北アフリカ地域研究）

研究協力者

志摩 憲寿（東洋大学国際学部・准教授、国際協力分野）
藤川 昌樹（筑波大学システム情報系・教授、都市建築史）
新保 奈穂美（筑波大学生命環境系・助教、ランドスケープ研究）
アルカズィー アッラーム（筑波大学システム情報工学研究科・大学院生、都市計画）
三田村 哲哉（兵庫県立大学環境人間学部・准教授、建築史）
佐倉 弘祐（信州大学工学部・助教、都市計画）
伊庭 千恵美（京都大学工学系・准教授、建築環境）
池田 昭光（明治学院大学教養教育センター・助教、社会人類学）
村上 薫（ジェトロ・アジア経済研究所新領域研究センター・主任研究員、トルコ地域研究）
安田 慎（高崎経済大学地域政策学部・准教授、観光研究）
山本 沙希（お茶の水女子大学・大学院博士課程、文化人類学）

公募研究 2019-2020 年度

研究項目 A01 関連

足立 拓朗（金沢大学国際文化資源学研究センター・教授）
「西アジアの都市化と遊牧民交易」

板橋 悠（筑波大学人文社会系・助教）
「化学分析で評価する西アジア先史社会のヒト・穀物・動物の移動と社会構造」

上杉 彰紀（金沢大学国際文化資源学研究センター・特任准教授）
「前３千年紀におけるインダス文明とアラビア半島の交流関係に関する考古学的研究」

小髙 敬寛（金沢大学国際文化資源学研究センター・特任准教授）
「メソポタミア外縁における新石器化から都市化への移行に関する研究」

研究項目 A02 関連

青木 健（静岡文化芸術大学文化芸術研究センター・教授）
「サーサーン朝時代の都市とキャラバン・ルートに於けるゾロアスター教拝火神殿」

研究項目 B01 関連

南 雅代（名古屋大学宇宙地球環境研究所・教授）
「イランの石筍・トラバーチンを用いた西アジアの古気候復元の試み」

研究項目 C01 関連

阿部 尚史（お茶の水女子大学基幹研究院・助教）
「「寛容」と先例：近世・近代のタブリーズにおけるアルメニア教徒とムスリム社会」

大稔 哲也（早稲田大学文学学術院・教授）
「イスラーム期の西アジアにおける墓地と都市」

杉山 雅樹（京都外国語大学・非常勤講師）
「１５世紀後半のヘラートにおけるタリーカの活動と都市文化の発展」

伊庭 千恵美（京都大学大学院工学研究科・准教授）
「トルコ・カッパドキアの都市文化・景観保全に向けた岩窟教会の風化対策に関する研究」

佐倉 弘祐（信州大学工学部・助教）
「近代化にともなう灌漑水路と都市拡張の関係についての地中海都市比較研究」

三田村 哲哉（兵庫県立大学環境人間学部・准教授）
「西アジア及び周辺都市に尽力したフランスの都市計画家ユルバニストに関する研究」

2020 年度年次報告書
巻頭言

領域代表・山田重郎
筑波大学人文社会系

1. 新型コロナウイルス感染症流行の中で

昨年（2020 年）1 月初頭、中国武漢で原因不明の肺炎が確認されたことについて厚生労働省が注意喚起をおこない、その後、1 月半ばには、WHO が新型コロナウイルスの確認を通知した。その段階で、新型コロナウイルス流行が、現状のような世界的な疫病禍に転じていくことを即座に予想した者は多くなかったと思う。ところが、2 月中に日本各地の都市で次々と感染が確認され、3 月には WHO が「パンデミック宣言」を発して、調査のための海外渡航や海外からの研究者招聘もほとんどが見送りになった。日本では、新設の新型コロナウイルス対策の特別措置法にしたがって 4 月 7 日には東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の 7 都府県に緊急事態宣言が発出され、まもなく国内の感染者は 700 人を超えて、4 月 16 日に宣言の対象は全国に拡大された。一方、ヨーロッパとアメリカでは、それぞれ 3 万人もの感染者が出ていると報道されるにいたって、パンデミックの深刻さは、疑いようのないものとなった。

その後の騒動は、皆さんご承知の通りで、私たちは未だその渦中におり、正常化への出口は、はっきりと見通せない。思えば、疫病は古代メソポタミアやヒッタイトの楔形文字で書かれた宗教文学文書や歴史記録にもしばしば言及され、ペストや天然痘のような歴史を揺るがす疫病の脅威は十分に記録されてきたはずである。しかし、ワクチン、抗生物質、サルファ薬などの発明をはじめとする医療技術のめざましい進歩と衛生環境の向上という恩恵に浴して、現代人の多くは感染症の脅威を忘れていた。そこに生じた今回の事態で、新しい感染症がグローバル化した人間社会を地球規模で麻痺させる生々しい現実を目撃し、驚くしかなかった。同時に、我々が研究対象としていたはずの都市と都市文明が生み出す、人の集住と密接な交流は、文化的・経済的ダイナミズムを生みつつ、社会的不平等や環境破壊をもたらすだけでなく、感染症に脆弱な空間でもあったことに気づかされた。

想定外の事態をうけて、我々の「西アジア都市」領域研究の活動にも大きな影響が生じている。昨年度末 2020 年 3 月 1 日に予定していた領域全体研究会は中止せざるを得なくなり、今年度 2020 年 6 月 20 － 21 日に海外から研究者を招聘して行うはずだった国際シンポジウムも中止に追い込まれた。以後、緊急事態宣言と移動自粛勧告が各地で出され、在宅勤務も各所で常態化する中、急速に普及したオンライン会議ツールを利用して研究会や会議を重ね、海外調査の中止で生じた時間を他の研究活動に振り向けて活動を継続してき

た。変更を重ねて生じた時間とエネルギーのロスは少なくなく、ストレスは大きかったが、皆さんのご協力を得て、なんとか実績を積み重ねてこられたことをありがたく思う。

2. 中間評価

そんな異常な状況下ではあったが、本領域研究の 3 年目に当たる 2020 年度は中間評価の年度にあたり、これもまた大型科研費事業の宿命とはいえ、年度初めから容赦ない義務としての報告書作成のために皆さん煩わせた。お陰様をもって、6 月末には、各計画研究の報告書を 93 頁の中間報告書にまとめ文科省に提出した。そして、11 月 20 日に、考古学分野の三宅裕先生（筑波大学）と地球科学・物質科学分野の安間了先生（徳島大学）にご一緒いただき、総括班メンバーの皆さんにもご検討いただいたプレゼンをひっさげて、オンラインで中間評価ヒアリングを受けた。

2021 年の 1 月、中間評価の結果が通達され（文科省 HP にも公開されているとおり）A-（エー・マイナス）の評価であった。中間評価を受けた領域 18 件のうち、最高評価の A+ が 4 件、A が 10 件、A- が 4 件（B、C は該当なし）という結果を見れば、とても胸を張れる結果ではない。記号的な評価に一喜一憂しても始まらないが、通達された所見のポイントは、備忘録としてここに記して、領域で共有していく必要はあろうと思う。所見の主旨は、政情不安やコロナ渦などの困難の中、工夫して奮闘していることへのねぎらいの文句を除くと、「今後は、導入された分析機器を有効に活用しながら、領域代表者のリーダーシップの下、都市文明という全体テーマの解明に向けて、さらなる研究の進展を期待したい」ということにつきる。「留意事項」、「参考意見」として記されたことも、ほとんど全て、（1）領域を貫く「都市」についての認識の深化と（2）導入した機材の領域全体での積極的活用の 2 点に関連しており、認識していた問題が、予想通りに指弾された形である。我々の活動が、領域外の学識者や社会にどのように評価されるのかは、ある程度予想されたこととは言え、この機会に再認識して、先に進みたいと思う。

3. 結び

いささか、憂鬱な書きぶりになったが、残された 2 年間は、領域の活動の終盤ということで、全体として何を達成したかが求められる。この 2 月には、皆さんのご協力のおかげで、今後２年間に実施される新たな公募研究の審査も終了した。「都市とは何か」をめぐり、建築学やイスラーム学分野の研究者の発表を中心に据えた総括班主導の研究会の企画も次々と立ち上がってきている。5 巻のシリーズ本の企画の具体化も進展しているし、ワクチンの導入をうけて、今年度の後半には、海外のフィールドワークや国際的研究協力に向けた環境も次第に改善されていくものと期待したい。

我々のプロジェクトの専任助教であった板橋悠さんと Gina Konstantpoulos さんが、今年度、それぞれ筑波大学人文社会系とカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）で専任教員のポストを得て活動しはじめたほか、研究員として参画してくださっている皆さんにも素晴らしいポストを得て活躍の場を広げている方々がいる。この領域研究がスプリングボードになって、関係者が新しいキャリアや研究を切り開いてくださるなら、領域代表者として望外の喜びである。

領域研究の開始時に確認したように、各自の専門研究推進にこの領域活動が助けになることを心から願うとともに、総括班主導の分野横断的な企



筑波大学西アジア文明研究センターの前で、領域メンバー（一部）とコロナ時代の記念撮影
（2020 年 6 月 23 日）

画にも皆さんの協力を得たいと切に思う。そうした活動が、皆さんの知的好奇心をいささかでも掻きたてるものになっていたら、領域代表者としては救われる気持ちがする。皆さんの引き続きのご支援とご協力とあらためて請う次第である。

（2021 年 2 月 19 日）

研究項目 A01「都市文明への胎動」

計画研究 01

西アジア先史時代における生業と社会構造

新石器化から都市化へ

―イラク・クルディスタン、シャカル・テペ遺跡の発掘調査と出土土器―

小髙敬寛
金沢大学国際文化資源学研究センター

研究の背景と目的

古代の西アジアのなかでも、ティグリス・ユーフラテス両河の下流域にあたるメソポタミア低地は、いち早く都市化（Urbanisation）が進み、前4千年紀末に都市文明が成立したことで知られる。その前提にあったのが、新石器化（Neolithisation）と呼ばれる、定住化や生産経済の確立などといった一連の革新である。新石器化の最初の舞台はメソポタミア外縁の丘陵部、「肥沃な三日月地帯（Fertile Crescent）」であり、前7千年紀半ばまでにその各地で農耕社会が発展した。ところが、前7千年紀後葉になると「新石器の崩壊（Neolithic Collapse）」といわれる広域的な社会再編が始まる。考古学的には、集落規模の階層性が解体され、多くの小集落に分散する現象として捉えられてきた。また、簡便な建築、拡散する遺物、物流管理の発達などの形で、ヒトやモノの移動性の高まりが認められる。そして、結果的に農耕社会は「三日月地帯」の外部にまで広がったと考えられている。その一端として、メソポタミア低地は前6千年紀半ばまでに開発され、最古の都市文明の舞台が用意された。

よって、新石器化から都市化への移行には、前7千年紀後葉に始まる社会再編が決定的な役割を果たしたとの予測が成り立つ。そして、これを検証し、都市誕生までのプロセスを理解するためには、新石器化の舞台＝「肥沃な三日月地帯」から都市化の舞台＝メソポタミア低地へと通じる地域で、この時代の社会再編がどのように作用したのかを把握することこそ、追究すべき重要な課題である。

学史上、先史考古学の主要テーマである新石器化や都市化に比べ、その狭間の時代に関するこうした研究が活発であったとは言い難い。また、政情変化や戦禍により、長らく現地調査の困難な地域でもあった。しかし、この十年余りは、治安の回復したイラク・クルディスタン地域で遺跡調査活動が再興し、こうした研究を今日的水準で展開する絶好の機会が巡ってきている。とりわけ、スレイマニヤ県シャフリゾール平原は、「三日月地帯」東翼からメソポタミア低地へと流れるディヤラ川流域の山間盆地にあたることから、地理的に恰好の調査対象といえる（図1）。現在、治安上の問題が少ない範囲ではメソポタミア低地に最も近いこともあり、諸外国隊はこの地域の遺跡調査を意欲的に進めている（cf. Kopanias et al. eds. 2015）。だが、メソポタミア低地の開発期にあたる前7千年紀後葉から前6千年紀半ばの考古学的証拠はほとんど知られておらず、発掘による出土資料に至っては、皆無のままであった。

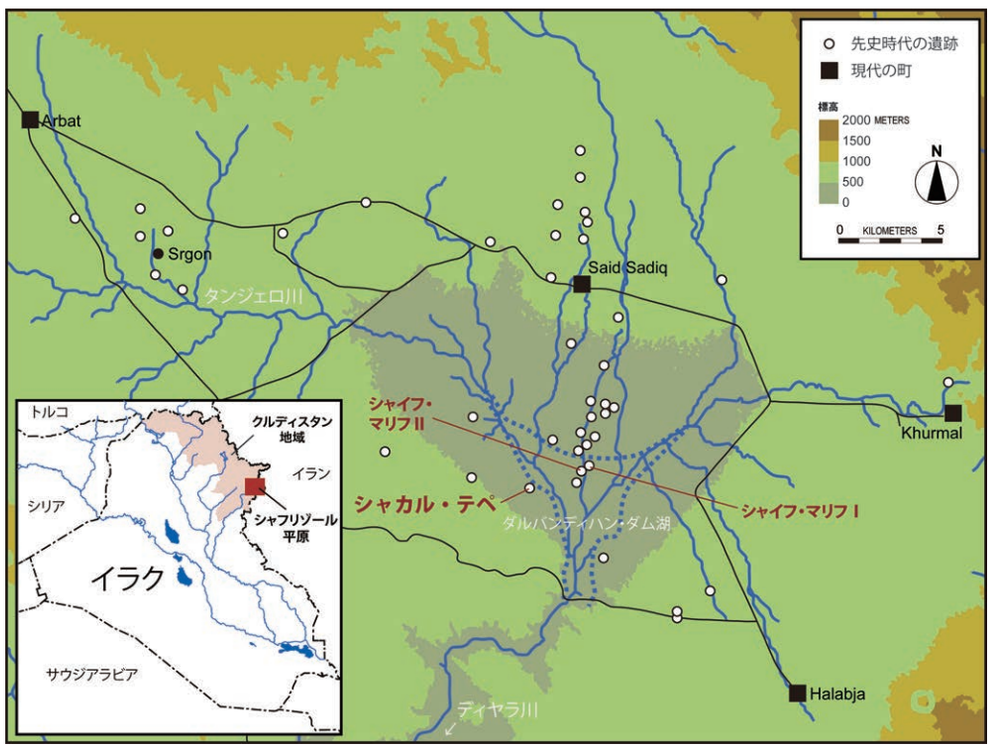


図 1　シャフリゾール平原と調査対象遺跡の位置（S. ミュール氏による図を改変）

公募研究「メソポタミア外縁における新石器化から都市化への移行に関する研究」は、遺跡の発掘調査を通じてこの考古学上の空白を埋め、シャフリゾール平原における物質文化の通時的変遷について、特に固有の地域性と他地域からの影響を中心に評価していくことを期して計画された。また、こうした作業を通じ、最終的には「三日月地帯」の農耕牧畜民がなぜこの時期にメソポタミア低地の開発に乗り出し、都市化への道が切り拓かれたのか、その理由を知るうえで有効な手掛かりを得ることを目標とした。

遺跡調査

研究代表者を務める筆者は、シモネ・ミュール氏（ミュンヘン大学）の率いる国際合同隊がシャフリゾール平原内 33 件の先史時代遺跡で表面採集した考古資料を 2013 年から分析しており（cf. Altaweel et al. 2012; Nieuwenhuyse et al. 2016）、前 7 千年紀後葉から前 6 千年紀半ばの空白を埋める可能性の高い遺跡として、ダルバンディハン・ダム湖畔に所在するシャイフ・マリフ（Shaikh Marif）を見出していた（Odaka et al. 2019）。公募研究の採択を受けて、筆者の他、計画研究 1 の研究分担者である前田修（筑波大学）と下釜和也（古代オリエント博物館）、更には早川裕弋（北海道大学）、板橋悠（筑波大学）、西秋良宏（東京大学）から成るプロジェクトチームが立ち上がり、イラク・クルディスタン地域政府スレーマニ文化財局のカマル・ラシード局長との連携のもと、2019 年 9 月にこの遺跡の発掘調査を実施すべく、準備を進めた。

ところが、この年はダム湖の水位が極めて高

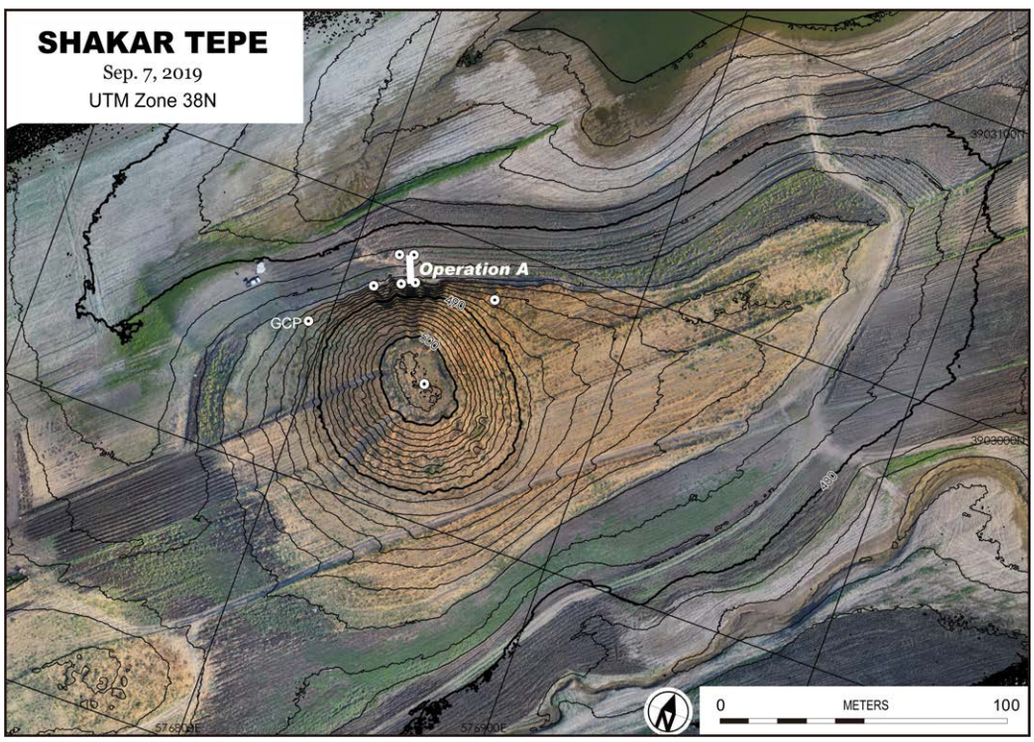


図 2　シャカル・テペ遺跡の地形と発掘区の位置（早川裕弌作成）

く、乾季の終盤にあたる 8 月末になっても遺跡は完全に水没したままであった。そこで急遽、代替となる調査対象を選定するため、遺跡踏査を実施した。

踏査した遺跡の一つが、シャカル•テペ（Shakar Tepe）である。この遺跡はダム湖の南西側の畔、標高およそ 480 m の平坦面に立地し、北東 ― 南西方向に長い約 300×150 m の平面楕円形を呈すマウンドから成る（図 2）。マウンド南西半が平面円形、断面台形に一際高くなっており、周囲と頂部との比高差は約 20 m を測る。遺跡を挟んで 2 条のワディが南西から北東へと流れており、遺跡のすぐ北や東でダム湖に注ぐ。また、近隣には複数の湧水が存在する。遺跡は急斜面などを除いて畑地として利用されており、北西側には湖の侵食のためか、ほぼ標高 483 m の等高線に沿って崖がみられる。その崖の西寄りには、原因不明ながら、マウンドが大きく抉れている部分が 3 か所並んでいた。踏査時、地表面に散布していた遺物の多くは前期～中期青銅器時代の所産と思しきものであったが、この抉れた部分から崖下の緩やかな斜面を北北西に下った範囲でのみ、先史時代の土器片の散布を確認できた。これらはほぼ、型式学的に後期新石器時代のハッスーナ標準土器に類するものと、ウバイド土器として識別できるものに二分でき、それぞれ前 7 千年紀末と前 5 千年紀頃の年代が推定された。

踏査の結果は、シャカル・テペ遺跡がシャフリゾール平原における編年上の「空白」を埋める可能性を示した。先史時代の遺物散布は希薄だが、そもそも平原内において、前 7 千年紀末を前後する年代と思しき遺物が相当数散布している遺跡

は、シャイフ・マリフの他にない。シャカル・テペ遺跡の場合､その散布範囲が限られているので、私たちの狙いに即した発掘地点の選択はかえって容易である。しかも、遺跡は破壊が進んでおり、早急な救済措置が望まれる。よって、私たちは発掘調査の実施を決断した。

発掘調査は 2019 年 9 月 2 日から 20 日まで実施した。発掘区（Operation A）は、マウンド西寄りの北裾崖下から緩やかに下る北北西方向へと、長さ 9.5 m× 幅 2 m の階段状トレンチとして設定した。正味 17 日間の発掘により、地表面の一番高い所から 5 m 少々掘り下げることができ、地山にまで到達した。あくまでも暫定的ではあるが、発掘区内の文化堆積は、上部から順に次の三つの時期に区分できると見込まれる（図 3; Odaka et al. 2020）。

ウバイド層：発掘区の南西側上部に堆積する、北方ウバイド土器が多く出土する硬く締まった土層。遺構は検出されなかった。出土土器は前 5 千年紀に年代づけられる。ただし、1 点の試料につき放射性炭素年代測定を試みたものの、測定範囲外の非常に古い年代が出てしまった。遺構も検出されていないので、この層が二次堆積である可能性を考慮する必要がありそうだ。

後期新石器時代上層：発掘区全体で確認された分厚い土層。検出された 2 基の遺構から、おそらく 3 つの層に細分できる。その上層では、発掘区南西隅で焼成遺構（Str. 1）がみつかり、中層は幅 0.3 m､残存高 1 m を測る練土（*tauf*）の壁（Str. 2）を伴う。22 点の試料につき放射性炭素年代測定を行ない、結果はほぼ前 6240 ～ 6000 年の間に収まった。3 点のみ、より古い年代を示しているが、これらの試料は炭素量が少ないなどの問題があり、外れ値としてみなしてよいだろう。

後期新石器時代下層：発掘区の北端、深く掘り下げた 2 m×2 m の範囲で検出された、地山直上に堆積する黄褐色土層。炭化物や灰混じりの土層が繰り返し挟まっている。明確な遺構は検出できなかったが、出土遺物、特に土器の様相から、後期新石器時代上層と区分できると思われる。放射性炭素年代は、測定した 4 点すべてがおおよそ前 6400 ～ 6220 年の間という結果であった。

発掘範囲が限られていたせいか、残念ながらわずかな遺構しか検出できなかった。それでも、深さ 5 m に及び地山にまで達する層序、そして層位学的情報を伴う出土遺物が豊富に得られた。加えて、放射性炭素年代測定により、これらが前 6400 ～ 6000 年の所産であることが確かめられた。したがって、シャフリゾール平原における考古学的空白のうち、前 7 千年紀後葉の部分を埋めることができた。

後期新石器時代の土器

しかしながら、昨今の情況下、現地に保管してある出土遺物の分析は滞っている。ただ、出土遺物中、数量的に大半を占めるのは土器片であることは確かである。次いで石器が多く、一方で動物骨や植物遺存体といった、いわゆる自然遺物は極端に乏しかった。他には、石製のスタンプ印章や刻線装飾のある扁平ビーズ、土製紡錘車、骨製ヘラ等が目立った出土遺物としてあげられる。

主な出土遺物のうち、石器については昨年度の報告書で前田が暫定的な見解を述べた（前田 2020）。また、ウバイド層出土土器をはじめとする銅石器時代以降の土器については下釜が分析を担当している。そこで、本稿では後期新石器時代の土器についての型式学的な所見に触れておきたい。ただし、本格的な観察・分析の結果でなく、

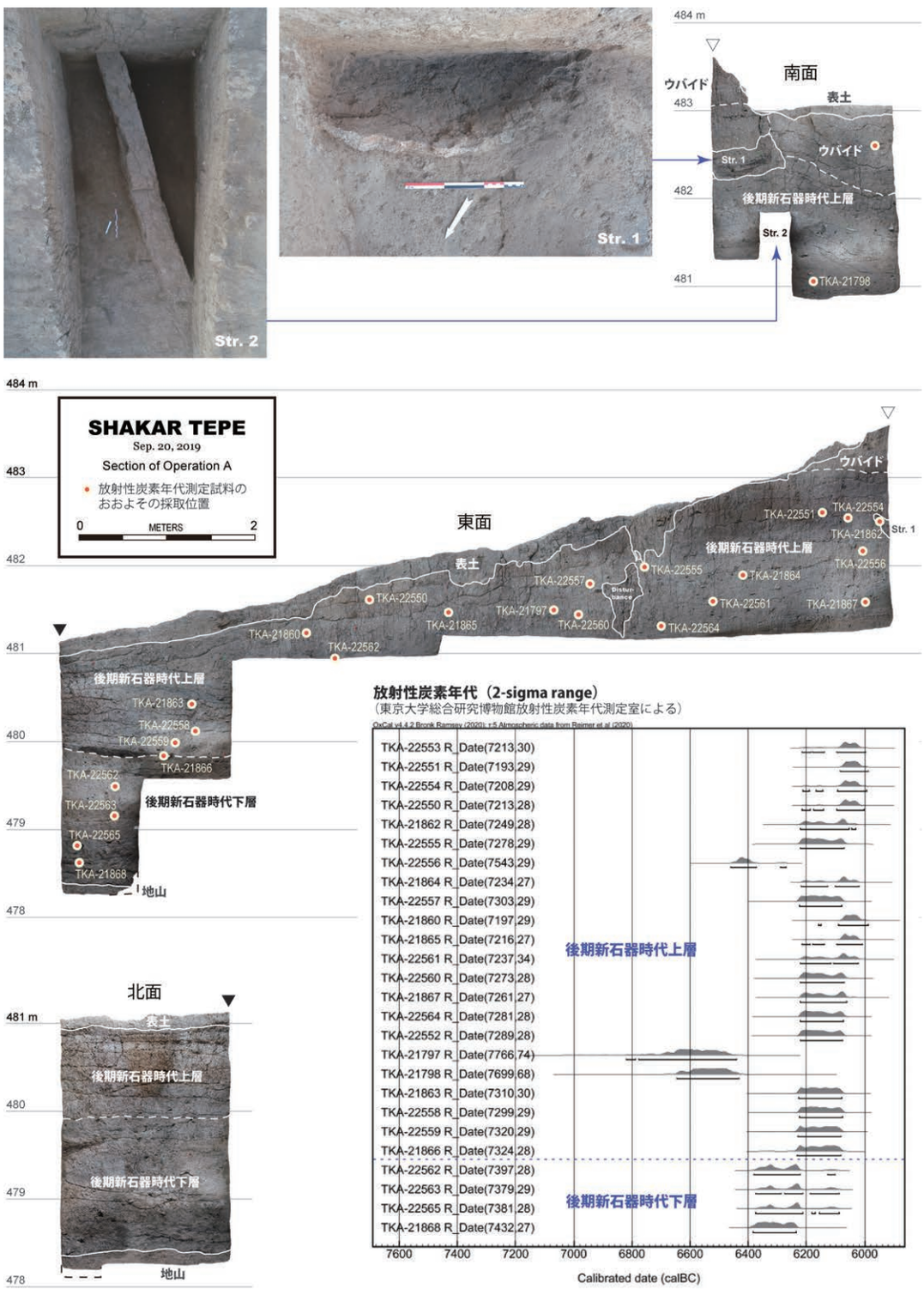


図 3　シャカル・テペ遺跡発掘区の出土遺構・土層断面・放射性炭素年代

あくまで発掘調査時の現場で得られた暫定的な所見に過ぎないことを申し添えておく。

後期新石器時代上層からの出土土器は多様で、少なくとも次の三つのウェアグループに分けられる。

グループ 1　砂粒を少量含む緻密な胎土で作られ、丁寧にナデ調整された淡黄色の土器（図 4: 1-9）。しばしば刻文装飾が施されており、一見すると北メソポタミア地方で知られるハッスーナ標準土器（Hassuna Standard Ware）に類似する。ただし、短い斜線の列の多用といった文様構成の傾向などは、シャイフ・マリフやキルクーク近郊のマタッラ（Matarrah）といった近隣のごく限られた遺跡の類例（Braidwood et al. 1952; Odaka 2019; Odaka et al. 2019）に近く、典型的なハッスーナ標準土器とは一線を画す。

グループ 2　細かいスサが混和され、橙色から褐色を呈す、軽く磨かれた器面をもつ土器（図 4: 10-12）。シャイフ・マリフやカラート・サイド・アハマダン（Qalat Said Ahmadan）といったスレイマニヤ県内の遺跡でみつかっている土器と比較可能と思われる（Odaka et al. 2019; Tsuneki et al. 2015）。

グループ 3　いわゆる「ハスキング・トレイ（husking tray）」を含む、多量のスサが混和された粗製の土器（図 4: 13-17）。北メソポタミア地方を中心に、同時代の遺跡からほぼ普遍的にみつかる類のものである。

後期新石器時代下層からは、上層のグループ 3 に相当する粗製土器だけが排他的に出土した。ただし、総じて上層のグループ 3 の土器より脆く、赤色の器面と断面にみえる黒芯が顕著である。また、「ハスキング・トレイ」が含まれていたかどうかは定かでない。両者を分類すべきかどうかは、今後の検討課題である。

なお、当初、発掘調査を予定していたシャイフ・マリフ遺跡でも、グループ 1 から 3 に相当する土器片が採集されている。同遺跡は I から III の番号が振られた三つのマウンドで構成されるが、後期新石器時代の土器片が散布しているのはシャイフ・マリフ I と II である。そのうち、シャイフ・マリフ I ではグループ 3 が最も多くみられ、グループ 2 が続き、グループ 1 は数少ない。一方、シャイフ・マリフ II ではグループ 1 が圧倒的に多く、グループ 3 も存在するが、グループ 2 は皆無である。したがって、シャイフ・マリフ II の表面採集資料は、シャカル・テペ遺跡でみつかっていないアセンブリッジを示している可能性がある。グループ 3 ないしそれに類する粗製土器がシャカル・テペ遺跡の後期新石器時代下層で排他的に出土した事実を考慮すると、おそらく、それはシャカル・テペ遺跡の後期新石器時代上層よりも新しい時期、すなわち前 6 千年紀前葉に下るものと予想される。ただし、その検証には、発掘調査の実施が不可欠であることは言うまでもない。

まとめと展望

シャカル・テペ遺跡は、出土遺物の型式学的特徴だけでなく、確かな層位学的情報が付帯した試料の理化学的年代測定によっても、編年上の空白の一部、前 7 千年紀後葉を埋めることが確認された。これはまさに、メソポタミア低地の開発が始まった時期に重なる。新石器化から都市化への移行プロセスの解明に向けて、まずは貴重な研究資料を得ることができた。

出土遺物の観察からは、周辺で知られていた土器アセンブリッジ（そして石器インダストリー）には必ずしも当てはまらない、シャフリゾール平

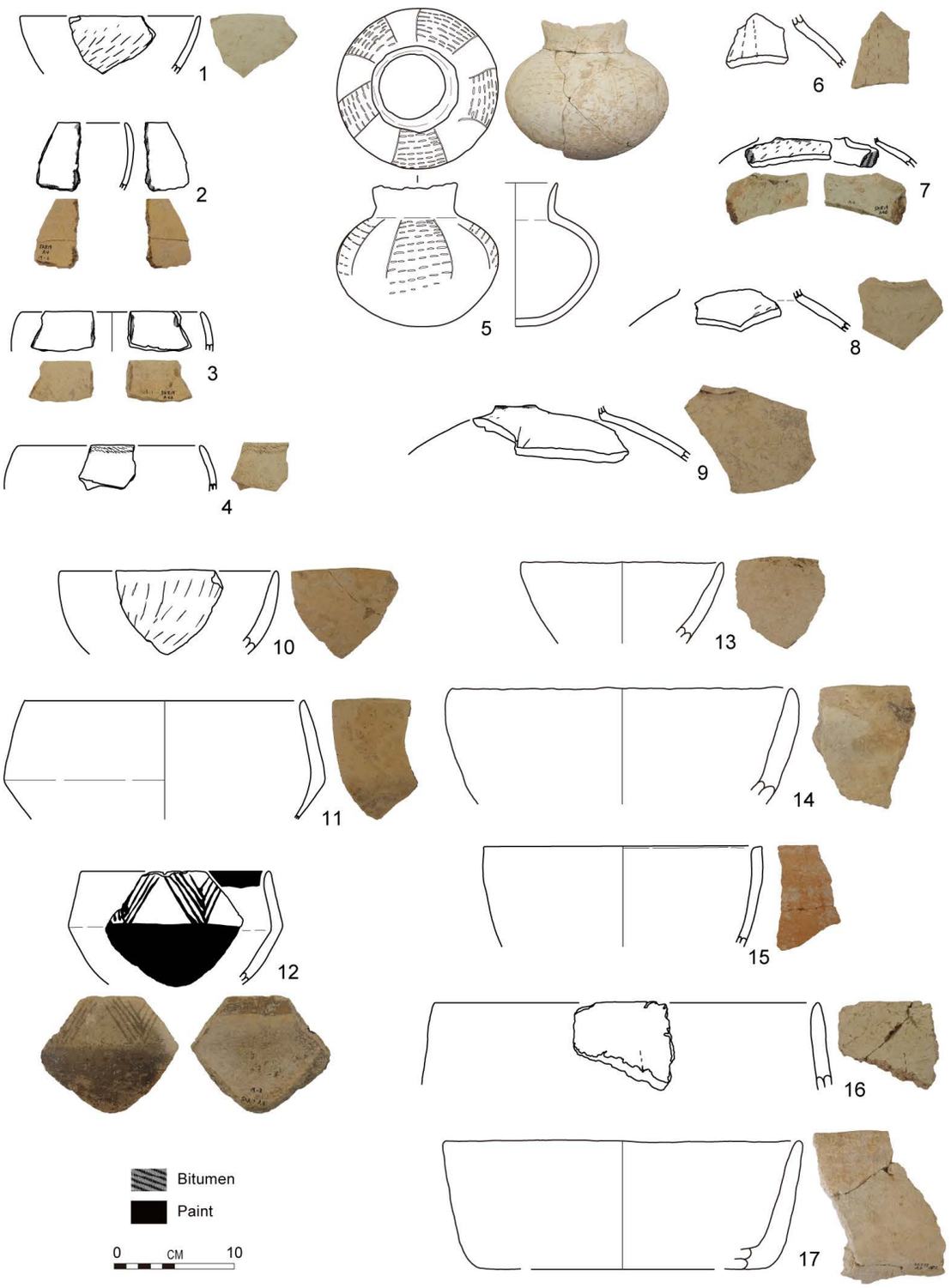


図 4　シャカル・テペ遺跡出土、後期新石器時代の土器

原とその近隣に特有な地域性が浮かびつつある。次なる課題は、こうした地域的な物質文化の内容をいっそう明らかにし、広範な時空間的枠組みの中に正しく位置づけ、他地域との通時的な関係を考察していくことである。そのために、まずは現地保管されている出土遺物を詳細に研究しなければならない。そして、層位学的情報を伴う資料をより充実させるため、シャカル・テペ遺跡の調査を継続していきたい。

また、残る前 6 千年紀前半の考古学的空白については、シャイフ・マリフ II によって埋められる可能性が示唆された。このことは表面採集土器の分析からすでに推測していたものの（Odaka et al. 2019）、シャカル・テペ遺跡の発掘調査によって、この仮説を強く肯定する結果が得られたといえる。無論、これを検証するため、シャイフ・マリフ遺跡の発掘調査にも着手したい。

なお、本公募研究の遂行にあたっては、先述したプロジェクトチームのメンバーの他、次の方がたに多大なご支援やご協力をいただいた。末筆ながら、記して謝意を表する。

カイフィ・アリ氏（クルディスタン地域政府文化財局局長）、カマル・ラシード氏（スレーマニ文化財局局長）、ナシルワン・A.・ムハンマド氏（スレーマニ文化財局局員）、ハシム･H.･アブドゥラ氏（スレーマニ博物館館長）、シモネ・ミュール氏（ミュンヘン大学リサーチフェロー）、フェリックス・ヴォルター氏（ベルリン）、沼本宏俊氏（国士舘大学教授）

引用文献

Altaweel, M., A. Marsh, S. Mühl, O. Nieuwenhuyse, K. Radner, K. Rasheed and S. A. Saber 2012 New Investigations in the Environment, History, and Archaeology of the Iraqi Hilly Flanks: Shahrizor Survey Project 2009-2011. *Iraq* 74: 1-35.

Braidwood, R. J., L. S. Braidwood, J. G. Smith and C. Leslie 1952 Matarrah: A Southern Variant of the Hassunan Assemblage, Excavated in 1948. *Journal of Near Eastern Studies* 11(1): 1-75.

Kopanias, K., J. MacGinnis and J. Ur (eds.) 2015 *Archaeological Projects in the Kurdistan Region of Iraq*. Erbil: The Directorate of Antiquities of Kurdistan.

Nieuwenhuyse, O., T. Odaka and S. Mühl 2016 Halaf Settlement in the Iraqi Kurdistan: The Shahrizor Survey Project. In K. Kopanias and J. MacGinnis (eds.), *The Archeology of the Kurdistan Region of Iraq and Adjacent Regions,* 257-266. Oxford, Archaeopress.

Odaka, T. 2019 Neolithic Potsherds from Matarrah, Northern Iraq: The Collection of the University Museum, the University of Tokyo. In S. Nakamura, T. Adachi and M. Abe (eds.), *Decades of Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in Honour of Sumio Fujii,* 251-260. Tokyo, Rokuichi Syobou.

Odaka, T., O. Maeda, K. Shimogama, Y. S. Hayakawa, Y. Nishiaki, N. A. Mohammed and K. Rasheed 2020 Late Neolithic in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: New Excavations at Shakar Tepe, 2019. *Neo-Lithics* 2020: 53-57.

Odaka, T., O. Nieuwenhuyse and S. Mühl 2019 From the 7th to the 6th Millennium BC in Iraqi Kurdistan: A Local Ceramic Horizon in the Shahrizor Plain. *Paléorient* 45(2): 67-83.

Tsuneki, A., K. Rasheed, S. A. Saber, S. Nishiyama, R. Anma, B.B. Ismail, A. Hasegawa, Y. Tatsumi, Y. Miyauchi, S. Jammo, M. Makino and Y. Kudo 2015 Excavations at Qalat Said Ahmadan, Slemani, Iraq-Kurdistan: First Interim Report (2014 Season). *Al-Rāfidān* 36: 1-50.

前田修 2020「イラク・クルディスタン地方シャカル・テペ遺跡出土石器の検討」山田重郎（編）『科研費新学術領域研究 都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究　研究成果報告 2019 年度』57-63 頁：筑波大学。

考古学からみたメソポタミア銅石器時代と都市化
―研究の現状と課題―

下釜和也
古代オリエント博物館

はじめに

古代メソポタミアにおける都市の起源は、人類史上最古の都市発展であったという事実とともに、都市形成のメカニズム、初期の都市の構造と政治・経済・文化との関わり、国家や文明という新たな統治体制や文化制度の成立とも相関したと考えられ、長らく考古学的な検証の対象となってきた。「都市の集まる中枢地（heartland of cities）」とも形容されるように（Adams 1981）、いわゆるメソポタミア文明の発展を牽引してきたのが都市で育まれた文化であったことを否定する者は少ない。そのため、その都市形成論はメソポタミアという一定の地域における特殊事例という枠組みを超えて、人類史における先駆的な都市発展のモデルとして取り上げられることも多い（Renfrew and Bahn 2016 他）。しかし、古代メソポタミアにおける初現期の都市と、他の時代、あるいは他の地域の都市が共通する性格と基盤をもっていたかどうかは別個に考えるべき課題であり、おそらく本領域研究における最終的な研究射程となるだろう。また、19 世紀人類学のパラダイムのなかで理論化され、20 世紀後半の新進化主義による人類史の発展段階論へと昇華した文明・国家史観も、都市形成と因縁が深い。国家形成と都市形成は本来別物であるにもかかわらず（Jennings 2016; Jennings and Earle 2016）、都市の成立すなわち国家形成という暗黙の同定が無批判に受け入れられてきた経緯がある。歴史上、国家なき都市もあれば、都市なき国家もあり得るからである（Jennings and Earle 2016; Green 2020）。このような近年の古代都市研究の到達点は、古代西アジア都市の形成と発展過程はどのように関連してくるのだろうか。

本稿では、2020 年 12 月 26 日、A01- 計画研究 01 第 14 回研究会において研究発表した内容を基にして、最近の考古学的議論を紹介しながら、メソポタミア都市形成期に相当する銅石器時代に関するデータの現状と課題、そして今後の展望をまとめる。

都市形成と都市の考古学をめぐって

一般的に都市とは、周辺の集落に比べて相対的に高い密度で人口が集中居住した集落を指す。これと同様の説明は、すでに 20 世紀初頭に都市の社会学的な定義が提出されていて、大きな人口規模、高い人口密度、そして居住人口の社会的多様性をそろって備えた恒常的集落とされている（Wirth 1938）。人口規模という視点に対して、都市には食料生産を行わない集団が高密度集住しているにもかかわらず、都市民は飢えることなく、

彼らを支える後背地農村を必然的に伴うとする視点も重要である（藤田 1993; Storey 2006 他）。これに付随して、都市は政治権力の座として、都市民の生活保障と安全維持を管掌する機構があること、また著しい人口集中ゆえに環境汚染や伝染病などといった生活環境の悪化がみられることも都市を特徴づけるものと考えられる。

だが、古代や先史時代の集落について都市か否かを見究め、形成・発生期の都市を考古学的に検証するとなると非常に難しい問題が生じる。チャイルドの「都市革命論」はあまりに有名であるが、彼の認識の根柢にあったのは、生産余剰や奢侈財など工芸生産の複雑化を前提とし、支配エリート層の主導による生産物の管掌など、古代の都市集落の生産経済的側面を強調したものであった（Childe 1950; 小泉 2013）。また彼の都市定義は、長距離交易やモニュメント、文字記録システムの存在を組み込んでいた点で、考古資料からの検証作業と親和性があって、古代都市を考える考古学において支配的な影響力を及ぼしてきた。しかし、古代都市を理解する上で有意義な見方は、経済的観点のほかにも多くある。ある集団の宗教観・世界観が集落形成に投影されている点を重要視する都市論（Wheatley 1971）や、恒常的な移入人口と物資の流通と生産に関わる輸入代替という観点から南メソポタミアにおける都市文明の特異性を強調する説もある（Algaze 2008; 2018）。かつて、新石器時代のチャタルホユック遺跡や城壁をもつイェリコ遺跡が最古の都市であったかどうかをめぐって激しい論争が行われたことも古くて新しい課題とも言える。その他、東西のユーラシアの都市形成を比較して、経済に基づく西の都市集落を「都市」、政治管理主導による東のそれを「都城」と捉え、形成要因の如何によって都市の形態構造や展開に大きな違いがあったとする見方も傾聴すべきであろう（藤本 2007）。つまり、都市の定義と要件をどこに定めるか、どの要素に重点を据えるかによって、研究者間で都市の構造や形成過程、都市の本質に関する理解に食い違いが生じると言えよう（Smith 2020）。

都市形成とその歴史的過程を世界的にみると、そこにはかなりの多様性があったことがただちに了解される。第一に、都市形成の様態に着目すれば、それが意識的（計画的）であったか無意識的（自然発生）であったかという観点が立ち現れる。藤本が論じた東アジアの都城や（藤本 2007）、ノヴァクのいう residential cities（Novák 2014）とは王権が都市形成に与った前者の謂いである。ノヴァクはこれに重点を置いて、長期的な時間幅のなかで考古学的な都市の本質を理解しようとする（2020 年 11 月 28 日の A02- 計画研究 02 第 14 回研究会における同氏のオンライン発表）。このような都市の物理的構造は都市の形成過程と密接に関わる要素である上、考古学的にも弁別しやすいので、都市論では必ずといってよいほど多くの紙幅が割かれる傾向が強い（Wilhelm 1997; Gates 2011）。また、そうした遺構分析を通じて、都市内の構造が一極集中型（単核型）か散逸型（多核型）かを評価できる場合もある。例えば、アフリカ、サハラ以南のヨルバ王国都市にみられるムバンザ（*mbanza*）と呼ばれる集落構造のように低密度の広域集落として、人口規模からみると都市とみなせる特殊な集落も知られる（Kusimba et al. 2006）。我々がふつうイメージする都市とは異なる低密度都市のあり方は、成立期の都市の姿を解釈する上でも興味深いデータを提供してくれる。しかしな

がら、こうした都市の形態構造を知るのに、古代の都市集落全域を完全に発掘してデータを得ることは不可能事にちかい。そのため、都市構造の把握は限定的な地区の調査によらざるを得ないという大きな制約がある。

第二点として、考古学的に都市をみるとき、都市における機能と都市民の生活を支えるインフラ施設（public amenity）の存在に注目する方法もある（Cowgill 2004; 小泉 2013, 2016）。大規模な人口を支えるためには、給水・排水・貯水施設、ゴミ処理施設、道路などの交通基盤、信仰の場、市場、会合の場、浴場・劇場などの娯楽施設、避難所、城壁が必須となる場合が多い。こうした物質的痕跡を残す遺構は考古学的に認識しやすく、古代集落を都市かどうか判定する指標として今なお強調されることが多い。

第三に、20 世紀前半の都市社会学者がつとに指摘していたように（Wirth 1938）、都市に居住する集団がどのような由来をもっていたかという形成原理も都市を議論する上で見逃せない。そもそも都市にみるような大規模な人口集団はどこから来たのか。都市集落を構成する居住民の社会構造はどのようなもので、それは政治や生産経済、宗教とどのような関係にあったのか。こうした研究視座は考古学的に検証が成功しているとは言いがたい点であるように思われる。

さらに、都市集落を支える周辺の後背農村との関係も、都市を捉えるには非常に有効な方法である（van de Mieroop 1997; Storey 2006）。都市単独での政治経済構造のみならず、文化・宗教体制も含めて、都市の存続を成り立たしめている地域社会の実態を理解すべきである。

以上のような都市考古学研究のアプローチを踏まえて、世界各地における前近代の都市を定義する試みは近年でも盛んである。例えば M・E・スミスは、従来千差万別に定義されてきた都市定義を大枠で継承しつつ（Wirth 1938; Trigger 1972 他）、サイズ、機能、生活社会などといった 6 つの指標群を取り上げて都市論の再構築を模索する（Smith 2020）。ところが、都市という現象を要素還元式の指標に分かつ方法は、伝統的な研究手法の再解釈あるいは焼き直しともいえ、今後の都市研究に効力を発揮できるか心許ない。

考古学からみたメソポタミア銅石器時代と都市化

メソポタミアにおける都市化研究は、西アジア各地の政情不安に阻害されつつも、この 20 年間で一定の進展をみせている（Lawrence et al. 2016; Algaze 2018; McMahon 2020 他）。ここでは（1）集落規模と集落間関係、（2）社会・政治構造を示す社会階層性や公共建築群、（3）経済的な指標となる工芸専業化という点で、最近の研究事例が豊富な主に北メソポタミア地域の都市化について考古資料の一端を紹介する。

（1）集落規模と集落間関係：

都市を評価する重要な指標の一つである集落規模については、遺跡の発掘や分布調査（サーヴェイ）のデータを基にして検討されてきた。北メソポタミアにおける集落遺跡の規模の年代別分布をみたローレンスらによれば、紀元前 5 千年紀末から前 4 千年紀前半の後期銅石器時代になってはじめて、20 ha を超える集落が出現するという（Lawrence et al. 2016）。特に顕著なのが北東シリアのテル・ブラク遺跡で、前 4 千年紀前半（後期銅石器時代前半）には最大 130 ha に達したこ

とが報告されている（Ur 2014a）。また、各地のサーヴェイ情報を集成して通時的に検証した研究によると、北メソポタミアにおける銅石器時代集落の大型化は、後背地の小規模集落（農村）の規模が大きくなるとともに、拠点集落の規模も連動して増大する「順調発展型（Hubs）」の様相を示している（Lawrence and Wilkinson 2015 など）。これは、後背地農村から一部の集落に人口流入することで拠点集落が成長する前 3 千年紀の都市形成（Endogenous Upstarts）や、後背地集落が希薄な地域に突如として都市的拠点集落（Exogenous Upstarts）が出現するあり方と、極めて明瞭な対照を見せていて興味深い（Lawrence and Wilkinson 2015 他）。ただこうした集落群のふるまいを検証する研究は集落の変遷を歴然と示してくれるが、表面採集によるデータに依拠している性格上、遺物散布状況が当時の集落規模を過不足なく示しているかという疑念と、採集遺物の年代比定の信頼性には問題もある。発掘による出土データを用いて絶えずモデルを補完しつつ実証していく努力をつづける必要があるだろう。

（2）社会階層性や公共建築群

銅石器時代にあたるウバイド期のメソポタミア各地では、規模と出土遺物の点で他と区別される大型遺構（テル・アバーダ遺跡の大型遺構 A）（Jasim 1985）や、共同体用とみられる共同倉庫（テル・エル＝ウェイリ遺跡の例）（Huot 1996）、著名なエリドゥやテペ・ガウラ遺跡の神殿群が登場する（Safar et al. 1981; Tobler 1950）。これらは集落内の階層性や宗教権力の成立を示す証拠とみなされることもあるが、ウバイド期におけるこれら特殊建造物は平等性を前提とした共同体利用の産物であって、集団内で他と隔絶した有力階層の存在を想定し、都市化の徴候とする見解はあまりない。しかし、後期銅石器時代前半になると、一部の遺構の規模や構造にも顕著な変化がみられるようになることが知られている。小規模な集落ながら、他の住居遺構とは別格の大型建築が現れるテペ・ガウラの遺構群や貴金属製の副葬品を含む厚葬墓（Tobler 1950）、テル・フェレス・アル＝シャルキー遺跡の周壕を備えた大型遺構（Vallet 2014）、アルスランテペ遺跡の「宮殿」・神殿群（Frangipane 2018 他）は、集落内の社会関係が変容した姿を物語っている。こうした大型遺構群には印章や封泥、黒曜石などの稀少財などが共伴することは、その居住者が長距離交易と関わる特殊な地位にあったことを裏付ける。こうした小規模集落はそれ自体で「都市」集落とみなされることはないが、都市化に向けた多様な社会複雑化過程の一端を示す物証として重要である。こうした首長層集団が都市の形成過程に果たした役割に関して、伝統的な世帯原理である「イエ」を基盤にして、政治・経済・宗教的に都市支配が確立されていったとする最近の所説（Ur 2010, 2014b）は、先行するウバイド期の三列構成建物とこの時期の大型遺構とのつながりと社会的連続性を評価する点でも大変示唆的である。

先に述べた大規模な拠点集落の出現とリンクして社会階層性が露わになるのが、再びテル・ブラク遺跡の事例である。後期銅石器時代前半にあたる同遺跡の TW 区 20 層からは、厚さ約 2 m の大壁をもつことから首長層のものと推定される大型遺構に近接して、土器をはじめとした工芸生産の工房址が見つかっている（Oates et al. 2007; Al Quntar and Jayyab 2014）。同じ地点からは特殊な

黒曜石製の盃形容器やライオンを表現した印章封泥も出土した。あたかも従属専業生産の場を想起させるような稀有な事例で、これを集落社会内でかなり有力な地位にある集団の邸館と考える見方はあながち間違ってはいないであろう。テル・ブラクの集落規模が肥大化し、都市的集落へと成長するこの時期には、同程度の大規模遺構が連続して発見されている他、「眼の神殿」と呼ばれる広壮な宗教建築もこの時期に比定されている。さらに、テル・ブラクに隣接するテル・マジュヌーナ遺跡からは、巨大集落内での集団間関係の歪みの結果としての暴力（戦争か）を示唆する集団埋葬も出土した（McMahon et al. 2011）。

（3）工芸専業化

集落規模の大型化、社会階層性の顕在化とともに、出土遺物からは工芸生産の専業化をうかがわせる証拠も議論されている。土器生産をみると、後期銅石器時代前半には先行時期の彩文土器が漸減し、大量生産や大量消費を窺わせる無文の繊維質土器群が主流を占めるようになる。そうした顕著な技術変容は地域を超えて斉一的にみられ、都市的集落の出現や社会構造の変化と同期して、生産技術と土器利用のあり方も転換していったことを示唆している（Al Quntar and Jayyab 2014; Shimogama 2019）。また、ウバイド期の独立専業体制とは異なる大規模な土器工房址がテル・フェレス・アル＝シャルキーで確認されているのもこれを証する事例であろう（Vallet 2014）。後期銅石器時代中頃にはロクロ水挽き成形による規格的な土器群も出現し、増大する需要に応える大量生産の傾向が進展していったことを示す。

土器のみならず、遠隔地から搬入する黒曜石の流通と石器生産についても集約化されつつあったことが最近指摘されている。北東シリアのヒルベト・アル＝ファッハール遺跡では、約 300 ha もの広範囲に黒曜石をはじめとする大量の遺物が散布しており、黒曜石の石刃生産と消費、そして流通を担う一大市場センターであった可能性が提起された（Al Quntar et al. 2011）。この遺跡では堆積層が単独時期に広範囲に広がっていたことから、上述のアフリカの例のような都市化初期における低密度大規模集落の様相を示し、一部の物資の流通経済との関連もうかがえて貴重な事例であろう（McMahon 2020）。また、後期銅石器時代に生産活動が本格化されたとみられる銅製品などの金属生産は、出土資料は依然少ないものの、一部の集落で専業職人が携わったと考えられている。

以上に述べてきたような考古学的証拠からみられる多彩な変化の過程は、後期銅石器時代前半における集落規模の増大とほぼ同時に展開していたことが年代的にも確実視されるようになってきた（図 1: Ur 2010; Stein 2012）。こうした都市化への胎動が、チャイルドや多くの研究者が真正の都市成立の画期とみなすウルク後期（後期銅石器時代後半）の都市集落に先だって確認できたということになろう。しかし、前 5 千年紀後半から前 4 千年紀にかけてのどの段階をもって、本当の都市化（「都市化」「原都市化」などの用語で表現される）の開始とみるのかをめぐっては、上述の都市定義の問題と絡めて、研究者間に齟齬があるのが現状である。ただ、スタインが指摘するように、北メソポタミア地域においては、ウバイド期とウルク中〜後期の二つのエクスパンションの中間にあたる時期、すなわち南メソポタミアの物質文化の影響が極小であった時代に都市化が進展したことは注目される（Stein 2012）。無論、本稿で取り上げたそれぞ

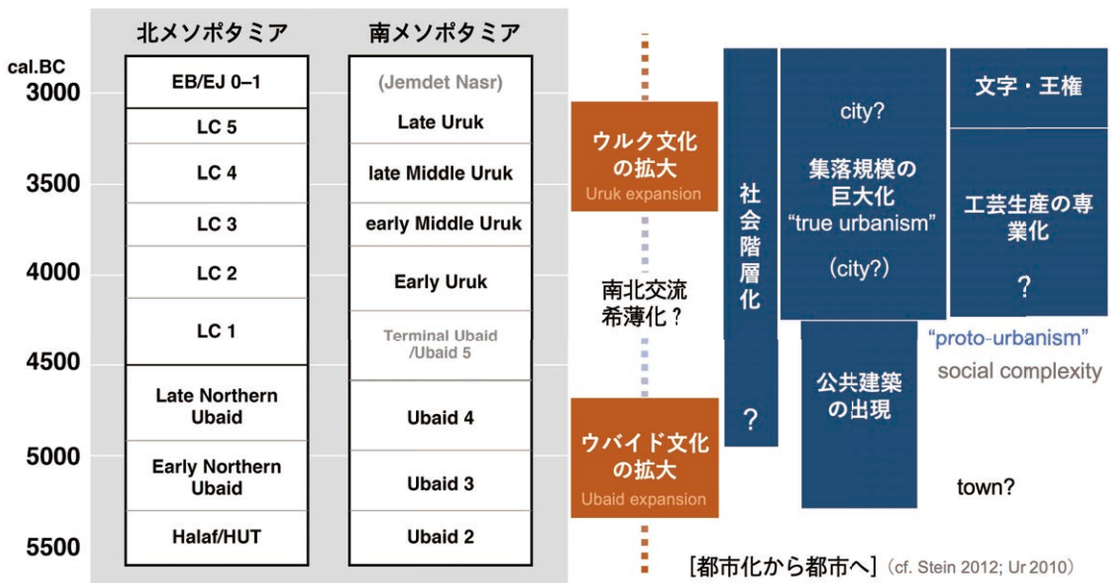


図 1　メソポタミア銅石器時代の編年と都市化（Ur 2010; Stein 2012 を基に作成）

れの考古学的指標が都市化と直接、間接にどのように関連していたのかを検証する作業は今後の課題である。

終わりに：今後の研究の課題と展望

メソポタミア銅石器時代のデータは、依然として時代と地域にも欠失や不足が多く、質量ともに充実しているとは言いがたいのが現状である。とはいえ、都市化や都市をどのように定義するかにもよるが、都市化に関わる銅石器時代の時代区分は以前よりも精緻になるとともに、基本的な資料データが蓄積されてきた。しかし、都市化と都市形成の過程を議論するには、まだ多くの問題が残されている。

第一、前 4 千年紀前半の後期銅石器時代に、なぜ一部の遺跡で人口集中が始まるのか。何が人口増および人口集中を引き起こしたのかという疑問は未だ説明されぬままである。また上述のように、これまでの都市化は、集落規模と人口規模の推定による都市化の同定や、社会の階層性や複雑化の証拠と関連させて、城壁をはじめとする都市の構造的要素が存在するかどうかを中心として論究されてきた。しかし、なにより都市を特徴づける都市内の構成集団の多元性と社会経済構造（Stone and Zimansky 1992; Stein and Rothman 1994 他）と、地域内における集落間の相互依存関係、つまり都市と農村の関係性をめぐる議論（Storey 2006 他）の 2 点の実証は、私見によれば不十分である。

現代都市の成り立ちをみても明らかなように、都市内における社会集団構造の多様性は、都市の本質的特徴を把握する上で重視されるようになっている。例えば、テル・ブラク遺跡のような成立期における巨大集落は、単一の均質な集団から構成されていたのか、もしくは出自を異にする複数の集団群が一つの場所に集住したも

のなのか（もしくはコナーベーションか）。考古学的には集落内空間や生産流通の分節化、集落内における集団行動の違い、エスニシティをはじめとして集団意識の差などを復元することができれば、このことを実証できるものと期待される。これまでに議論されてきた集落内の階層性（hierarchy）とともに、そうした集落内における社会構造の多元性（heterarchy）に迫まるアプローチもメソポタミア都市形成論には問われていると考える。

2 つ目の都市化における集落間の依存関係に関連して、都市人口学的にみれば、都市集落では相対的に居住人口の死亡率と人口流入率が高いこと（urban graveyard effect）が知られている。このことは先史時代集落が都市化しているかどうか判定する定量指標となり得るだろう。その他にも居住者の男女構成比バランスの変化や、集落内の居住集団間の栄養状態や発達条件の差異など、集落遺跡から十分な人骨データが得られる場合、都市化の程度を評価する糸口になるかもしれない。さらに、都市を包摂する領域では、物資輸送、政治支配、宗教的参詣といった多様な要因にかかわって地域内の人間集団が頻繁に移動することも特徴的である（Storey 2006 他）。動態として集落間の分布が判明していても、拠点集落と周辺の小規模集落との間の関係性はどうだったのか。そのような従来見過ごされてきた観点をもって、考古データを再検証してみることは今後の展望として有益かもしれない。都市化を示すと考えられる指標を設定し、例えば、都市成立以前の新石器時代の大規模農耕村落（例えば PPNB 期の巨大集落）（Tsuneki 2012; 常木 2020）と本稿で紹介した銅石器時代の形成期の都市集落とを比較することもできるだろう。さらに、それらを青銅器時代の「真正」都市集落や北メソポタミアの環状城郭都市（Castel et al. 2020）、鉄器時代の巨大な帝都や属州都市、ヘレニズム都市、そしてイスラーム期の中近世都市と、考古学的に通時的比較を試みてみるのも意味がないとはいえない。さらに、古代西アジアの場合、都市民集団と農村集団と、そして遊牧・牧畜民との間の有機的関係についても検討することが今後必須となるだろう。

とはいえ、考古学的なアプローチでは、数十 ha を優に凌駕する都市集落を対象にした広範な発掘調査には時間や資金がかかるなど、さまざまな制約もあって、上記のような視点からみた都市化研究は立ち後れているように思われる。上で示したデータのほかにも、これまでに分析単位となってきた集落構造や公共建築の特徴、宗教祭祀空間、工芸生産と技術的特徴、動植物資源の利用のあり方などについて、共通の指標で考古学的データを回収し、通時的に比較検証することで新しい課題が浮き彫りになってくることも想定される。こうした方法論によって、都市形成・都市の起源に関わる諸問題だけでなく、さらには「脱」都市化、すなわち都市の衰退や消滅という現象も合わせて、俯瞰的に都市文明の本質を検証できるのではないだろうか。

最後に、都市をめぐる近年の考古学的研究は、中世都市や近代都市を含めて、汎世界的に都市という現象を解釈し、時空間を超えた比較研究を志向するようになってきている（Jennings 2016; Smith 2020）。そのため、考古学が得意とする物質文化研究だけでなく、歴史人口学や社会学、地理学をはじめ異分野と密接に連携した都市論モデルや学際的な研究が要請される段階に来ているといっても言い過ぎではなかろう。そ

うした新しい都市論が示す成果を、先史時代から歴史時代にかけての西アジア古代都市の理解にどのように応用できるのか、またはそれとは似て非なる西アジア固有の都市論、そして文明論を展開できるのかどうかも将来的には視野に入れておかねばならない。

参考文献

Adams, R. McC. (1981) *Heartland of Cities: The Surveys of Ancient Settlement and Land Use on the Central Floodplain of the Euphrates*. Chicago: The University of Chicago Press.

Al Quntar, S. and K. A. Jayyab (2014) The Political Economy of the Upper Khabur in the Late Chalcolithic 1–2: Ceramic Mass-Production, Standardization and Specialization. In A. McMahon and H. Crawford (eds.), *Preludes to Urbanism: The Late Chalcolithic of Mesopotamia*, pp: 89–108. Cambridge: McDonald Institute for Archaeological Research, University of Cambridge.

Al Quntar, S., L. Khalidi and J. Ur (2011) Proto-Urbanism in the Late 5th Millennium BC: Survey and Excavations at Khirbet al-Fakhar (Hamoukar), Northeast Syria. *Paléorient* 37(2): 151–175.

Algaze, G. (2008) *Ancient Mesopotamia at the Dawn of Civilization: The Evolution of an Urban Landscape*. Chicago: The University of Chicago Press.

Algaze, G. (2018) Entropic Cities: The Paradox of Urbanism in Ancient Mesopotamia. *Current Anthropology* 59(1): 23–54.

Castel, C., J.-W. Meyer, and P. Quenet (eds.) (2020) *Circular Cities of Early Bronze Age Syria*. Subartu XLII. Turnhout: Brepols Publishers.

Childe, V. G. (1950) The Urban Revolution. *The Town Planning Review* 21(1): 3–17.

Cowgill, G. L. (2004) Origins and Development of Urbanism: Archaeological Perspectives. *Annual Review of Anthropology* 33: 525–549.

Frangipane, M. (2018) Different Trajectories in State Formation in Greater Mesopotmia: A View from Arslantepe (Turkey). *Journal of Achaeological Research* 26: 3–63.

Gates, C. (2011) *Ancient Cities: The Archaeology of Urban Life in the Ancient Near East and Egypt, Greece, and Rome*. Second edition. London and New York: Routledge.

Green, A. S. (2020) Killing the Priest-King: Addressing Egalitarianism in the Indus Civilization. *Journal of Archaeological Research*. https://doi.org/10.1007/s10814-020-09147-9.

Huot, J.-L. (ed.) (1996) *Oueili: Travaux de 1987 et 1989*. Paris: Éditions Recherche sur les Civilisations.

Jasim, S. A. (1985) *The Ubaid Period in Iraq: Recent Excavations in the Hamrin Region*. 2 volumes. BAR International Series S267. Oxford: BAR.

Jennings, J. (2016) *Killing Civilization: A Reassessment of Early Urbanism and Its Consequences*. Albuquerque: University of New Mexico Press.

Jennings, J. and T. Earle (2016) Urbanization, State Formation, and Cooperation: A Reappraisal. *Current Anthropology* 57(4): 474–493.

Kusimba, C., S. B. Kusimba and B. Agbaje-Williams (2006) Precolonical African Cities. In G. R. Storey (ed.), *Urbanism in the Preindustrial World: Cross-Cultural Approaches*, pp: 145–158. Tuscaloosa: The University of Alabama Press.

Lawrence, D., G, Philip, H. Hunt, L. Snape-Kennedy and T. J. Wilkinson (2016) Long Term Population, City Size and Climate Trends in the Fertile Crescent: A First Approximation. *PLoS ONE* 11 (3): e0152563. doi:10.1371/journal.pone.0152563.

Lawrence, D. and T. J. Wilkinson (2015) Hubs and Upstarts: Pathways to Urbanism in the Northern Fertile Crescent. *Antiquity* 89: 328–344.

McMahon, A. (2011) Early Urbanism in Northern Mesopotamia. *Journal of Archaeological Research* 28: 289–337.

McMahon, A., A. Sołtysiak and J. Weber (2011) Late Chalcolithic Mass Graves at Tell Brak, Syria, and Violent Conflict during the Growth of Early City-States. *Journal of Field Archaeology* 36(3): 201–220.

Novák, M. (2014) The Phenomenon of Residential Cities and City Foundations in the Ancient Near East. In J. F. Osborne (ed.), *Approaching Monumentality in Archaeology*, pp: 311–332. New York: State University of New York Press.

Oates, J., A. McMahon, P. Karsgaard, S. Al Quntar and J. Ur (2007) Early Mesopotamian Urbanism: A New View from the North. *Antiquity* 81: 585–600.

Renfrew, C. and P. Bahn (2016) *Archaeology: Theory, Methods, and Practice*. Seventh edition. London: Thames & Hudson Ltd.

Safar, F. M. A. Mustafa and S. Lloyd (1981) *Eridu*. Baghdad: Republic of Iraq Ministry of Culture and Information.

Shimogama, K. (2019) The Chalcolithic Ceramic Sequence of Telul eth-Thalathat II, Northern Iraq. In I. Nakata, Y. Nishiaki, T. Odaka, M. Yamada and S. Yamada (eds.), *Prince of the Orient: Ancient Near Eastern Studies in Memory of H.I.H. Prince Takahito Mikasa*, pp: 1–19. Tokyo: The Society for Near Eastern Studies in Japan.

Smith, M. E. (2020) Definitions and Comparisons in Urban Archaeology. *Journal of Urban Archaeology* 1: 15–30.

Stein, G. (2012) The Development of Indigenous Social Complexity in Late Chalcolithic Upper Mesopotamia in the 5th–4th Millennia BC - An Initial Assessment. *Origini* XXXIV: 125–151.

Stein, G. and M. S. Rothman (eds.) (1994) *Chiefdoms and Early States in the Ancient Near East: The Organizational Dynamics of Complexity*. Madison: Prehistory Press.

Stone, E. C. and P. Zimansky (1992) Mashkan-shapir and the Anatomy of an Old Babylonian City. *Biblical Archaeologist* 55(4): 212–218.

Storey, G. R. (ed.) (2006) *Urbanism in the Pre-industrial World: Cross-Cultural Approaches*. Tuscaloosa: The University of Alabama Press.

Tobler, A. J. (1950) *Excavations at Tepe Gawra. Vol. II: Levels IX–XX*. Philadelphia: The University of Pennsylvania Press.

Trigger, B. G. (1972) Determinants of Urban Growth in Pre-industrial Societies. In P. J. Ucko, R. Tringham, and G. W. Dimbleby (eds.), Man, Settlement, and Urbanism, pp: 575–599. Cambridge: Schenkman.

Tsuneki, A. (2012) Tell el-Kerkh as a Neolithic Mega Site. *Orient* 47: 29–65.

Ur, J. (2010) Cycles of Civilization in Northern Mesopotamia, 4400–2000 BC. *Journal of Archaeological Research* 18: 387–431.

Ur, J. (2014a) Urban Form at Tell Brak Across Three Millennia. In A. McMahon and H. Crawford (eds.), *Preludes to Urbanism: The Late Chalcolithic of Mesopotamia*, pp: 49–62. Cambridge: McDonald Institute for Archaeological Research, University of Cambridge.

Ur, J. (2014b) Households and the Emergence of Cities in Ancient Mesopotamia. *Cambridge Journal of Archaeology* 24(2): 249–268.

Vallet, R. (2014) Tell Feres 2010: Recent Discoveries on the Ubaid and Late Chalcolithic in North Syria. In P. Bielinski et al., *Proceedings of the 8th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, Volume 2: Excavation and Progress Reports*, pp: 271–287. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

van de Mieroop, M. (1997) *The Ancient Mesopotamian City*. Oxford: Oxford University Press.

Wheatley, P. (1971) *The Pivot of the Four Quarters: A Preliminary Enquiry into the Origins and Character of the Ancient Chinese City*. Chicago: Aldine.

Wilhelm, G. (ed.) (1997) *Die orientalische Stadt: Kontinuität, Wandel, Bruch. 1. Internationales Colloquium der Deutschen Orient-Gesellschaft, 9.–10. Mai 1996 in Halle/Saale*. Saarbrücken: SDV Saarbrücker Druckerei und Verlag.

Wirth, K. (1938) Urbanism as a Way of Life. *American Journal of Sociology* 44: 1–24.

小泉龍人（2013）「都市論再考 — 古代西アジアの都市化議論を検証する —」『ラーフィダーン』XXXIV：83–116 頁。

小泉龍人（2016）『都市の起源 — 古代の先進地域＝西アジアを掘る』講談社選書メチエ 講談社。

常木晃（2020）「西アジア新石器時代のメガサイト再考」『西アジア考古学』21 号：83–94 頁。

藤田弘夫（1993）『都市の論理』中公新書　中央公論社。

藤本強（2007）『都市と都城』市民の考古学 2 同成社。

西アジアの都市化と遊牧民交易

足立拓朗
金沢大学国際文化資源学研究センター

研究の目的

西アジアにおいて都市が誕生する時期の遊牧民の交易活動をヨルダン、サウジアラビアの砂漠地域を対象地域として研究する。先史時代の遊牧民の交易活動が都市の発生に与えた影響を明らかにすることが目的である。都市の成立以前の新石器時代から様々な長距離交易活動が確認されているが、どのような人々が交易活動に従事し、都市に資源を搬入していたのかは明らかになっていない。本研究ではこの問題に対して、砂漠地域の先史・古代遊牧民の研究を行う。

調査予定と実際の研究内容

2020 年度初頭には、以下の調査をヨルダン、サウジアラビアで計画していた。

ヨルダンでは、東部沙漠のバーイル地区を踏査し、前期青銅器時代の立石遺構群の位置を GPS により把握する。また、これまで金沢大学がヨルダンで調査した遺跡から出土した貝製品の調査を行う。

サウジアラビアにおいては、北西部タブーク州のワディ・グバイ遺跡において銅石器時代の集落遺跡の踏査、試掘調査を行う。また、これまで金沢大学がサウジアラビアで調査した遺跡から出土した貝製品の調査を行う。

そして、両国に入国できない場合は、すでに実測が終了しているハラート・ジュハイラ遺跡の遺物研究を実施する、と計画していた。

年度ぎりぎりまで調査の実施を検討したが、結局、今年度の現地調査は断念した。そのため、本研究の具体的な成果としては、ハラート・ジュハイラ遺跡の遺物研究とサウジアラビアの遺跡出土の貝製品研究が主体となった。そして、コロナ禍の今年度中の終息が難しいと判断した 10 月頃には、調査を予定したヨルダンのバーイル地区の衛星画像を入手することにした。その後、この衛星画像を分析して、遺構の配置図を作成する作業を開始した。また、バーイル地区のオスマン・トルコ時代の利用状況について調査し、今後の現地調査に備える文献学的調査も行った。以下に、研究の概要を述べる。

ハラート・ジュハイラ遺跡のスプーン形土製品について

ハラート・ジュハイラ遺跡はヨルダン南部の砂漠地帯に立地する銅石器時代遺跡である。放射性炭素年代の測定結果や出土土器の分析からガッスル文化の遺跡であることが判明している。ガッスル文化が乳製品の利用が確実視されている文化期であり、西アジアの遊牧民研究にとって重要な時

期である。本遺跡はガッスル文化の領域の南東縁辺に立地しているが、住居と祭祀遺跡がセットで検出されており、注目に値する遺跡である。本研究では、この遺跡から出土するスプーン形土製品に着目して研究を行った。このスプーン形土製品は南レヴァントでは後期新石器時代と銅石器時代に特有の遺物であり、この遺物の形態と分布の分析から南レヴァントの先史時代集団の地域性を明らかにすることを目指した。出土分布は図 1 のようになり、ヨルダンの東部砂漠地帯からはスプーン形土製品は出土していないことが明らかになった。また、形態分類から、ハラート・ジュハイラ遺跡の出土品はガッスル文化の中心であるテイラト・ガッスル遺跡の類例に近いことが明らかになった。

本研究の成果は国際ヨルダン歴史考古学会の論文集 14 号に投稿した。2011 年度中に刊行される予定である。

サウジアラビアの新石器時代遺跡から出土した貝製品の研究

サウジアラビア北西部、紅海沿岸のワディ・シャルマ 1 遺跡の出土貝製品の研究を実施した。本遺跡は放射性炭素年代と出土石器群の分析成果から先土器新石器時代 B 期に年代づけられる。紅海沿岸であるため、紅海産の貝製品の出土が主体であるが、地中海産の貝製品が一定量存在することから、新石器時代の交易活動を考察できる遺跡と

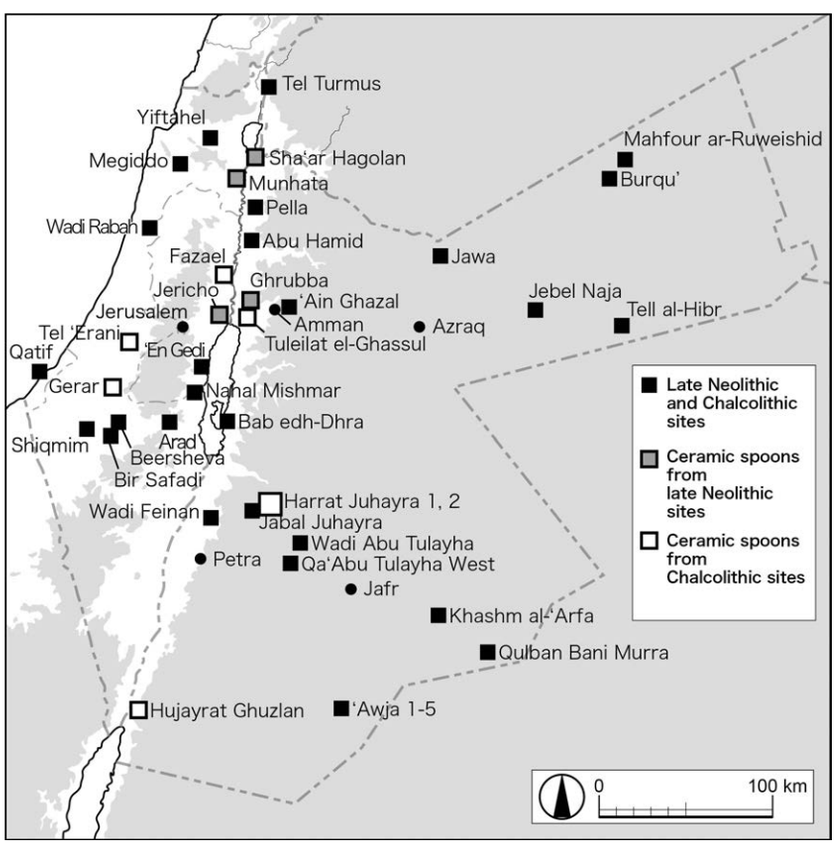


図 1　ヨルダン、先史時代のスプーン形土製品出土分布図

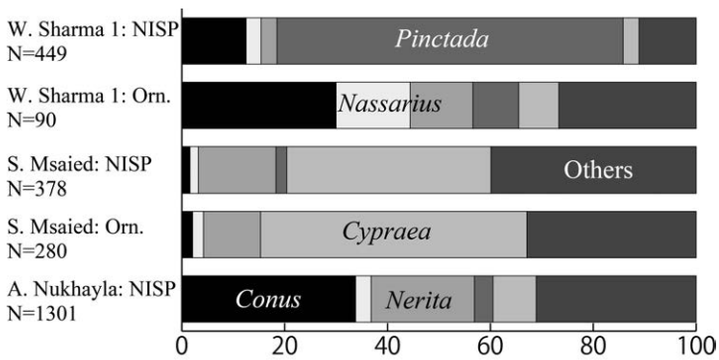


図 2　ワディ・シャルマ 1 遺跡、S. ムサイエダ、A. ネヘイラ遺跡出土貝製品の種別割合比較

して重要である。本研究では、出土した貝製品の生物学的な種別リストを作成するとともに、南レヴァントの新石器時代遺跡の出土貝製品の状況と比較して（図 2)、ワディ・シャルマ 1 遺跡が先土器新石器時代 B 期の貝製品交易ネットワークの重要な一部分であることを論じた。本研究の成果は、国際動物考古学会議の貝セッションの論文集で発表する予定である。

ヨルダン東部、バーイル地区の研究

ヨルダン東部には古くからアズラクとジャフルという大規模集落が存在し、現代の地方行政都市として発展している。その間に位置するバーイル地区は伝統的に駱駝のキャラバン隊が立ち寄る重要な井戸として知られていた。数十年前までは、多くの遊牧民のテントが設営されていたと考えられるが、現在は主要交通路から離れており、少数の遊牧民が井戸を利用するだけである。しかし、長い間にわたって遊牧民の拠点として使用されてきたことは確実である。

この地域の明確な遺跡には、イスラーム初期の城塞遺跡が遺っている。また、多くの先史時代の立石遺構が観察できる。悉皆的な考古学的踏査を実施すれば、相当数の遺跡の存在が判明すると期待される。今年度はコロナ禍のため、現地調査はできなかったため、高精度の衛星画像から遺構の配置図を作成した（図 3)。

また、バーイル地域の歴史的重要性を検討するため、本地域の文献史料からの研究にも着手した。12 月 12 日に金沢大学の国際文化資源学研究センターで開催された公開シンポジウム「西アジアにおける先史遊牧民と古代文明の成立」において、「東ヨルダンの遊牧民拠点のバーイル地域について：オスマン・トルコ期の記録を中心として」と題する研究発表を行い、オスマン・トルコ期にはバーイル地区が、前述したアズラクやジャフルよりも重要な遊牧民拠点であったことを明らかにした。

まとめと展望

予定していた現地調査は実施できなかったが、銅石器時代のスプーン形土製品、新石器時代の貝製品交易についての 2 本の論考を作成することができた。また、バーイル地域については、高精度の衛星画像の観察により、多くの新発見の遺構を発見することができた。今後の調査の

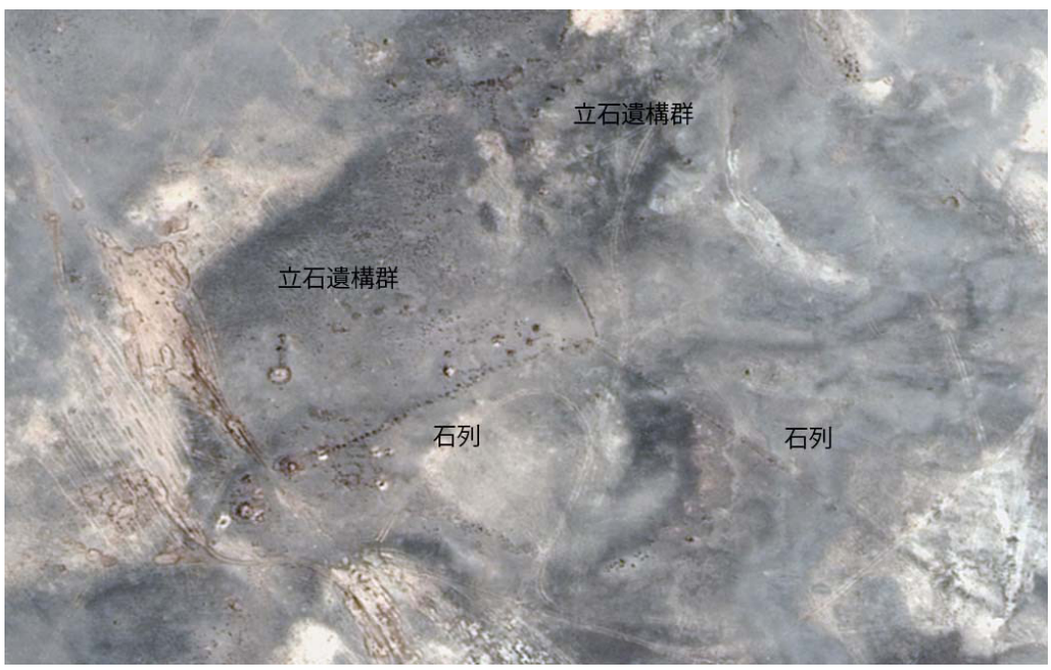


図 3　バーイル地域、クレイヤ遺跡の衛星画像と遺構

活用が期待できる。

また、当初は全く予定していなかったが、バーイル地域の文献史料の集成・検討作業に着手した。その結果、現在は使用されていない多様な遊牧民の交易ルートの存在が明らかになった。今後はイスラーム期の交易ルートの検討を進め、有望な地域の高精度衛星画像を入手して、新たな遺構を探索し、今後の調査に備えていきたい。

前 3 千年紀のインダス文明とアラビア半島の交流関係に関する考古学的研究

－研究成果概要報告－

上杉彰紀
金沢大学国際文化資源学研究センター

1. はじめに

本稿は新学術領域研究（研究領域提案型）の公募研究（研究課題番号：19H05043、研究期間：2019 ～ 2020 年度）に関する成果の概要をまとめたものである。

前 2600 ～前 1900 年頃に南アジア北西部に展開したインダス文明は、都市と文字によって特徴づけられる文明社会である。この文明がメソポタミアと交流関係を有していたことは 1920 年代から知られていたが（Gadd 1932; Gadd and Smith 1924; Mackay 1925 など）、その後、1950 年代以降にはアラビア半島やイラン高原もその交流関係の一部をなしていたことが明らかにされ（Bibby 1958; Lamberg-Karlovsky and Tosi 1973）、さらに近年では中央アジア南部も交流関係の中に組み込まれていたことが証拠づけられるようになってきた。この交流関係に関与していた各地域は相互に関係しあっていたこともわかっており、「西南アジア文明世界」と呼びうる広域的交流ネットワークを形成していたことがわかる（図 1）。

しかしながら、これまでは形態的類似性を示す遺物の分布による議論が中心で（Chakrabarti 1990; Edens 1993; Possehl 1986, 1996; Ratnagar 1981）、具体的なモノの流れや交流関係が各地の社会に与えた影響については十分に議論されてこなかった。また、インダス文明に限っていえば、この文明が消長した約 700 年の時間幅を細分する研究に乏しく、周辺地域との交流関係を動的に捉えようとする試みはなされていない。

本研究ではアラビア半島で出土するインダス系器物の形態的・技術的分析を行い、それを筆者自身が組み上げてきたインダス文明の細分編年と照らし合わせながら、インダス文明とアラビア半島の交流関係をより動的に理解することを試みた。

2. 研究目的

上述のように、本研究では「交流関係」として一言で捉えられてきたインダス文明と周辺地域の関係を時空間軸に沿って動的に把握し、交流関係がインダス文明の展開に与えた影響について考察することを目的としている。

未だ十分に確定しているとは言い難いものの、G. クィヴロンや筆者自身の土器研究によってインダス文明期は前・中・後の 3 時期に大別されることが明らかになりつつある（Quivron 2000; Uesugi 2013, 2019）。この編年案の妥当性を検証するには、インダス地域内で出土する資料の分析が不可欠であるが、その一方で周辺地域で出土するインダス系土器の検討による交差編年法も重要なアプローチである。双方の分析結果を相互に照

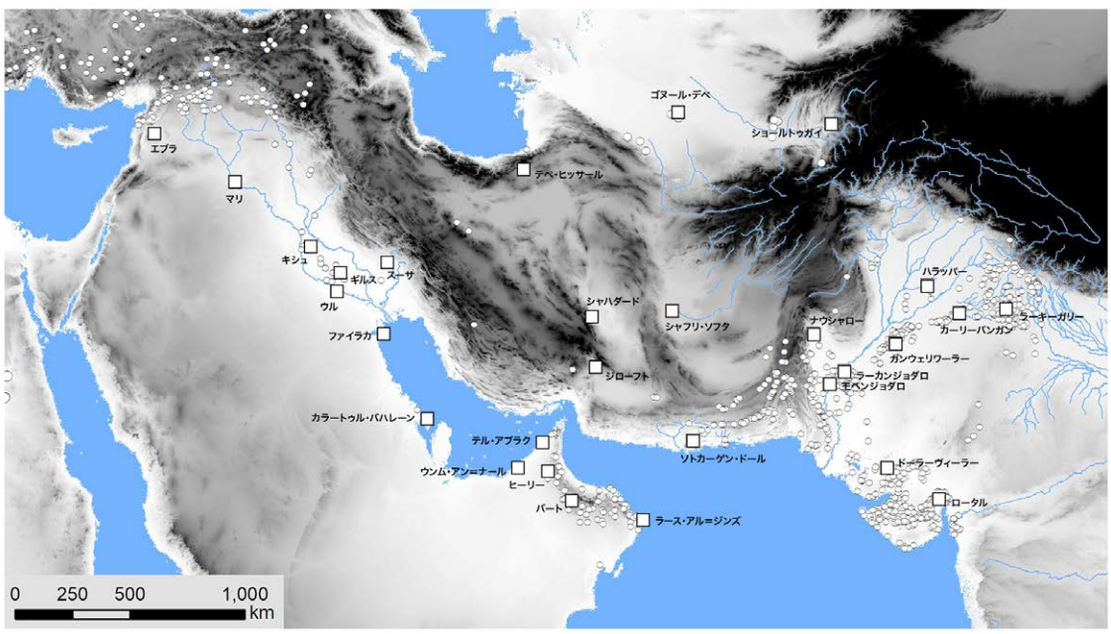


図 1　前 3 千年紀の西南アジア

らし合わせることで、より具体的な編年を確立することが可能になる。

土器による編年がある程度構築できれば、それに準拠するかたちで他の考古資料の検討も可能になる。インダス文明を特徴づける器物として評価されてきた印章や石製ビーズについても、これまでは時間軸を考慮することなく議論されてきたところがある。これらの器物はインダス文明と交流関係をもった地域でも出土しており、インダス文明期の編年を念頭に検討することで、より具体的に交流関係を議論することができるようになる。

アラビア半島でも土器に加えて、印章やビーズにおいてもインダス系と目される資料が知られてきたが（Bibby 1958; Blackman and Méry 1999; De Waele and Haerinck 2006; Méry and Blackman 2005; Reade 1979）、インダス地域における物質文化の時空間的変化が判然としないために、なかなか具体的な議論が難しいという状況にあった。アラビア半島で出土するインダス系器物がインダス文明期編年に照合したときにいつ頃の時期に位置づけられるものであるのか、それらのインダス系器物がインダス地域のどの地域からもたらされたのか、さらにはインダス地域とアラビア半島の関係が時間軸上でどのように展開したのかという基本的な問題さえも十分に議論されていないのが実状である。

そこで、本研究ではアラビア半島各地で出土するインダス系器物の分析を通して、アラビア半島各地の文化編年とインダス地域の編年を相互に検証しつつ、交流関係の実態の解明および時間軸上での変遷の過程を明らかにすることを試みることとした。

3.　研究の成果の概要

当初の研究計画では、オマーン、アラブ首長国連邦、バハレーンの 3 ヶ国で資料調査を実施し、

インダス地域とアラビア半島の交流の全体像を明らかにすることを目的としていたが、コロナ禍のため 2020 年度には現地調査を実施することが難しくなったため、2019 年度に実施したバハレーン政府文化古物局での資料調査で得たデータ・サンプルを中心に研究を行うこととした。

バハレーン島における前 3 千年紀後葉から前 2 千年紀前葉の時代（図 2，3）は、前期ディルムン時代と呼ばれ、さらに前半期（＝カラートゥル＝バハレーン I 期、前 3 千年紀後葉）と後半期（＝カラートゥル＝バハレーン II 期、前 2 千年紀前葉）に分けられている（Højlund and Andersen eds. 1994）。両者の時代で社会の様相は大きく異なることから、それぞれの時期の出土資料を分けて分析・評価することが必要である。

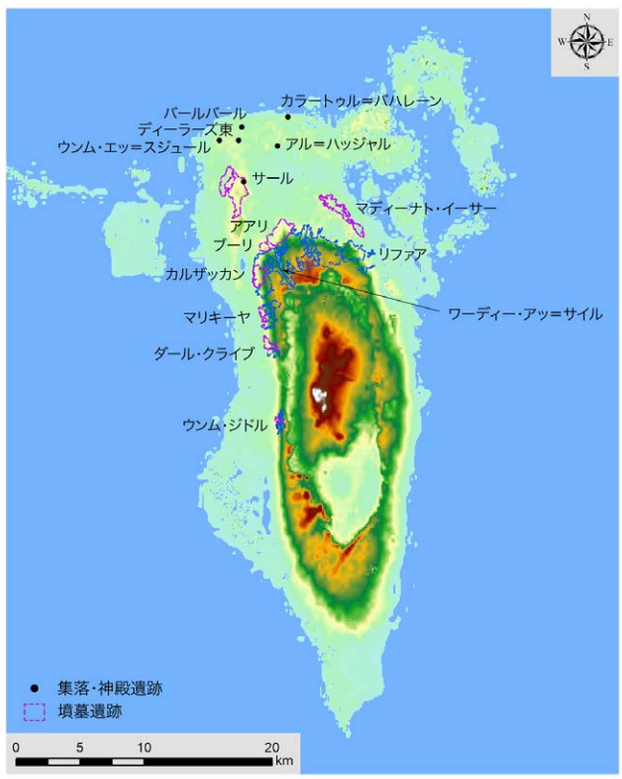


図 2　バハレーン島における遺跡の分布

3.1.　土器

2019 年度の資料調査で、55 点のインダス系土器を確認した（図 4）。バハレーン政府文化古物局に収蔵される土器資料は膨大であり、すべてを資料を実見・記録化することは叶わなかったが、今回記録化した資料でバハレーン島出土のインダス系土器の特徴を把握することは可能である。その特徴を列記すると、以下のようになる。なお、これらのインダス系土器はいずれも前期ディルムン時代後半期を中

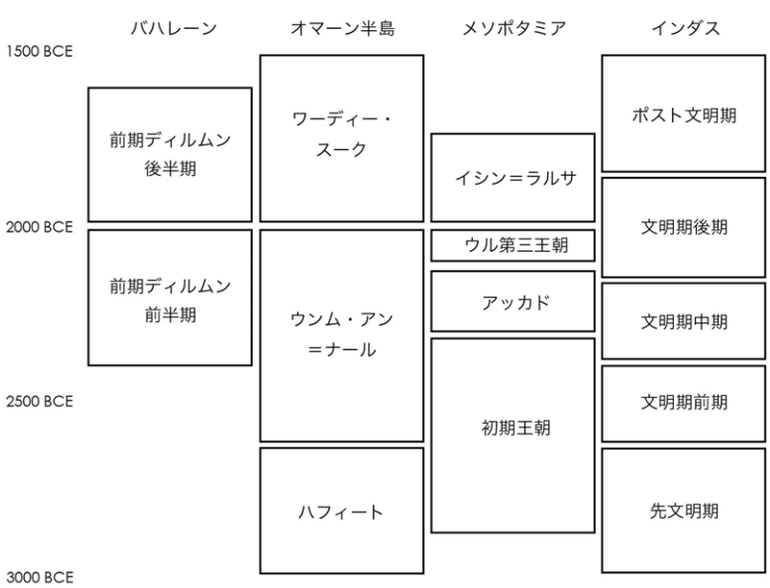


図 3　編年表

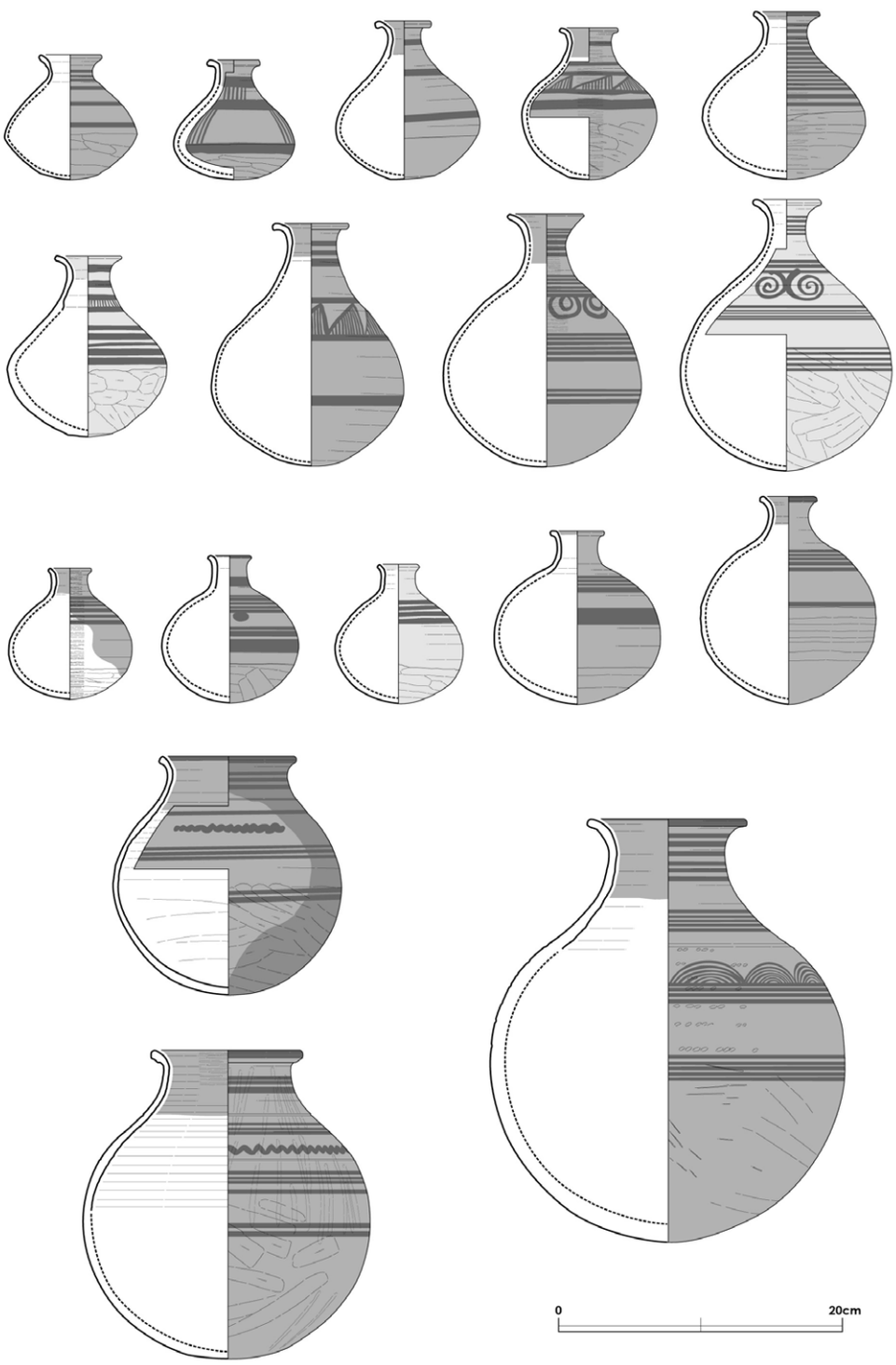


図 4　バハレーン島、前期ディルムン時代後半期の墳墓から出土した土器

心とする墳墓から出土したものであり、前半期の墳墓では、確実にインダス系と判断できる土器は出土していない。

①器種においては、小形・中形細頸壺、中形広口壺を中心とし、若干の半球形鉢が含まれる。
②器形においては、丸底の底部形態が特徴的であり、一部に丸みを帯びた平底を有するものがある。口縁部は肥厚させない単純口縁が多い。胴部は細頸壺においては球形もしくは中位に屈曲部をもつ算盤形、広口壺においては球形を呈する。
③装飾においては、外面全体に赤色スリップを施すものが多く、一部に白色を呈するスリップを施したものが存在する。黒色彩文が一般的であるが、その中心をなすのは横位平行線文で、横位平行線文を多段に施してその間の空間に螺旋文、波状文、半同心円文、斜格子充填三角文、縦位平行線文、斜位平行線文、円点付放射状文などを配する例が含まれる。
④製作技法についてみると、内面から外面上半部は回転ナデ調整、外面下半部は不定向断続ケズリもしくは回転ケズリによって仕上げる。一部には外面をミガキ調整で仕上げる例も確認できる。

こうした特徴は同時期のバールバール式土器だけでなく、先行時期のメソポタミア系やウンム・アン＝ナール系とも明確に異なっており、類似する資料はインダス地域の中でもグジャラート地方に見出すことができる。グジャラート地方の遺跡では、インダス文明前・中期にはハラッパー式土器と在地のアナルタ式土器、後期にはハラッパー式土器、ソーラート・ハラッパー式土器、アナルタ式土器、黒縁赤色土器が共存する様相がみられるが、後期には異系統の土器群が様式的な融合現象をみせ、新たな土器様式の形成へと変化する様子をみてとることができる（Uesugi, in press）。

この段階をそれぞれの遺跡で一つの時期として画定することは現有資料では難しいが、スールコータダー遺跡 IC 期（Joshi 1990）およびロータル遺跡 B 期（Rao 1985）の資料には、ソーラート・ハラッパー式土器とアナルタ式土器のそれぞれの要素をあわせもつ資料が存在しており、後期の中でも新しい段階の特徴とみることができる。特に顕著なのは壺で、ソーラート・ハラッパー式土器の器形にアナルタ式土器系統の彩文が描かれる例や、本来アナルタ式土器に特有であった細頸壺がソーラート・ハラッパー式土器の中に取り込まれるといった現象が認められる。また、丸底は本来アナルタ式土器の形態的特徴であったが、ソーラート・ハラッパー式土器にも丸底の底部をもつ資料が存在する。

バハレーン島出土のインダス系土器はこうしたグジャラート地方の土器の系統に属するものと考えられるが、形態変化の方向性からみれば、スールコータダー遺跡 IC 期やロータル遺跡 B 期よりもさらに進んだ段階で、ラングプル IIC 期土器様式（Rao 1962）が成立するよりも前の段階、すなわち前 2 千年紀初頭の段階に措定することが可能である。この年代観はバハレーン島における前期ディルムン時代後半期のそれと一致しており、大枠の年代観として評価することができるであろう。

アラビア半島南東部においてこれまでに報告されているインダス系土器についてみると、シマール遺跡では前 3 千年紀末にさかのぼる可能性のあるソーラート・ハラッパー系土器が出土しているが（De Cardi 1989）、それ以外はハラッパー式土器の系統に属するものであり（Cleuziou

and Tosi 1987; Cleuziou and Vogt 1985; Frenez et al. 2016; Méry et al. 2004）、その搬入にはシンド地方の社会が関わっていた可能性が高い。とりわけ、シンド産と考えられる黒色スリップがけ大形甕（Blackman and Méry 1999; Méry and Blackman 2005）がアラビア半島南東部に広く分布する現象は、シンド系集団による穀物など大量消費財の輸送を伴う、交易を含めた移動を伴う活動を示唆している。

一方、前 2 千年紀前葉に位置づけられるインダス系土器は現在のところバハレーン島に分布が集中しており、さらに小・中形の彩文土器が主体となるのはきわめて顕著な特徴である。先に紹介したグジャラート系土器は墳墓出土資料であり、副葬品として特別の意味をもった器種が選択的に副葬されていた可能性が高いが、個人墓が多数築かれた前 2 千年紀前葉のバハレーン島での需要に特化するかたちで、グジャラート系土器が流通していた可能性を示唆している。一方、カラートゥル＝バハレーン遺跡やサール遺跡の集落址では、大形のグジャラート系壺も出土しているが、量的には小〜中形壺に劣っており、アラビア半島南東部の様相とは対照的である。

こうした状況からみると、前 3 千年紀後葉におけるインダス地域とアラビア半島との関係と、前 2 千年紀前葉におけるバハレーン島との関係は、同じペルシア湾を経由するとはいっても、交流関係の性質が大きく異なっていた可能性が浮上する。その違いとは①インダス地域側における交流関係への関与主体が、前 3 千年紀後葉にはシンド系集団であったのに対し、前 2 千年紀前葉にはグジャラート系集団に変化したこと、②前 3 千年紀後葉の段階では黒色スリップがけ大形甕の広域分布に示されるように、交流関係において物資の大量輸送が深く関わっていたと考えられるのに対し、前 2 千年紀前葉にはバハレーン島における副葬品としての需要に応えるかたちで小・中形壺の流通が交流関係の中で大きな意味をもつようになったこと、に集約される。

3.2　石製装身具

前期ディルムン時代前半期における石製ビーズについては、ワーディー・アッ＝サイル遺跡の墳墓出土資料の分析を行なった。この遺跡から出土したビーズは、①紅玉髄・瑪瑙製のビーズを素材とする、②紅玉髄製ビーズには表面に白色加工を施したものが含まれる（図 5）、③形態的には Aa 類、Ab 類、Ad 類によって構成され（図 5）（ビーズの形態分類については（Uesugi et al. 2018）を参照されたい）、短型のみが出土する墳墓と中型以上のビーズが出土する墳墓が存在する、⑤穿孔技術においては、円筒形の孔形態＋きわめて平滑な表面形状によって示されるくびれ状円柱型ドリルを用いた回転穿孔によるものと、敲打技法によるものが含まれる（図 6）、といった特徴がある。

一方、後半期については、これまでのところ、マディーナト・ハマド遺跡の 2 基の墳墓から出土した 17 点（内訳は 22 号墓出土資料 4 点、32 号墓出土資料 13 点）、サール遺跡の 1 基の墳墓出土の 22 点、アアリ遺跡の 1 基の墳墓出土の 40 点の資料について分析を行なっている。詳細は別稿に譲るが、これらの後半期出土資料の特徴としてあげられるのは、①白色がかった縞瑪瑙／碧玉が大部分を占め、それに紅玉髄製が加わる（図 5）、②紅玉髄製ビーズの中にも白色加工を施したものが含まれる（図 5）、③形態的には Aa 類、Ad 類を主体として Ba、Bb、Ed 各類が加わり、Aa 類には短型が中心となっている（図 5）、④穿孔技

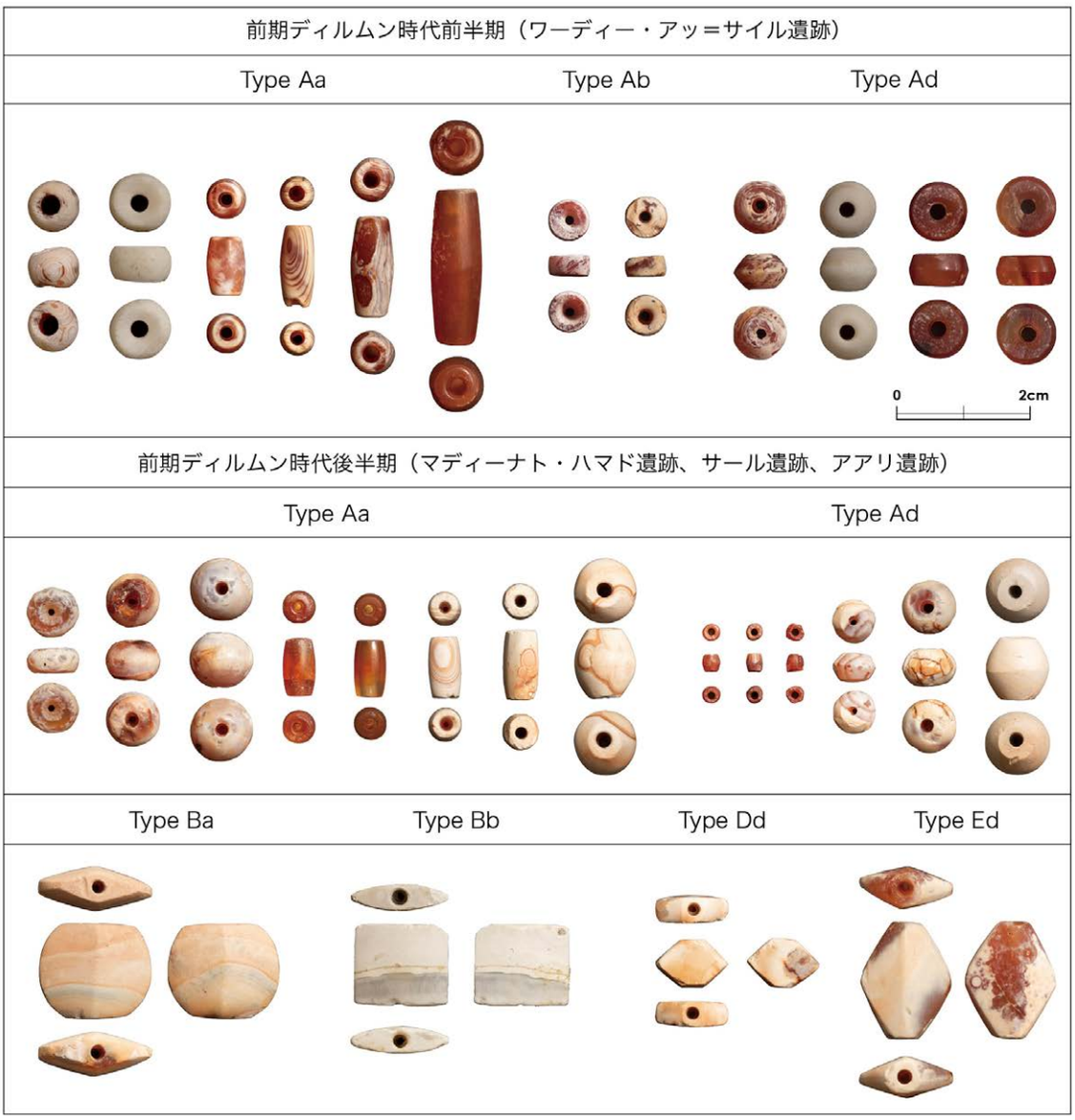
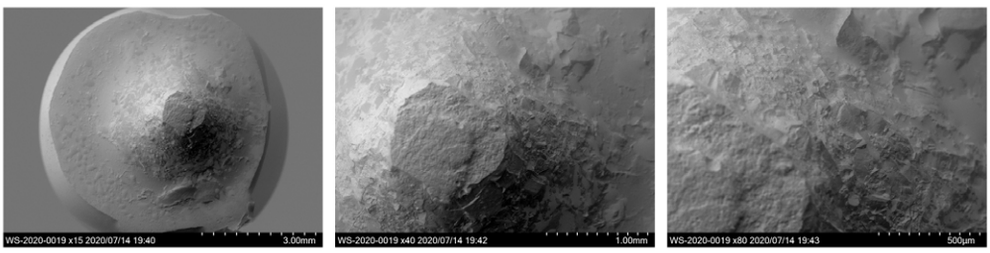


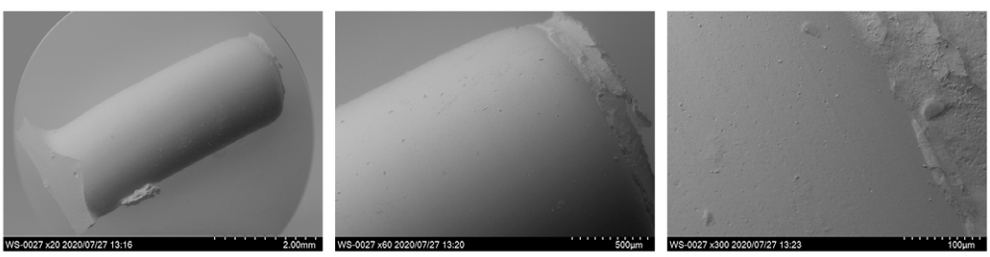
図 5　バハレーン島、前期ディルムン時代の石製ビーズ

術の点では、円筒形の孔形態＋きわめて平滑な表面形状をもつものと、先細型の孔形態＋顕著な平行凹線を特徴とする表面形状をもつものが混在する（図 6）、ことである。

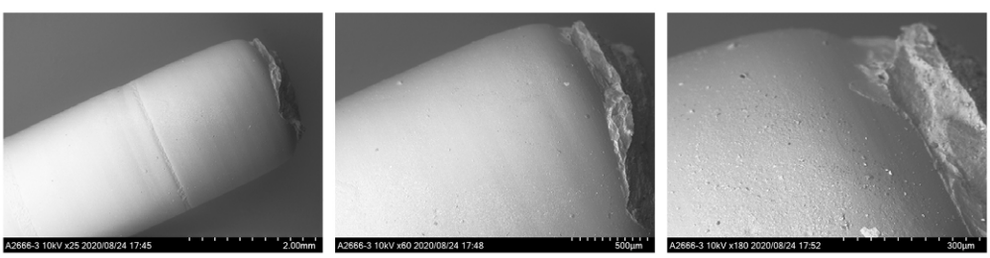
石材組成はインダス地域のそれとは大きく異なっており、特定の外観をもつ石材がバハレーン島に持ち込まれていたことがわかる。また、後半期に特徴的に含まれる白色がかった縞瑪瑙／碧玉は管見ではインダス地域にはほとんどみられないものであり、ある特定の産地の石材が用いられている可能性を示唆している。こうした外観をもった石材が卓越している状況は、単に特定の産地と



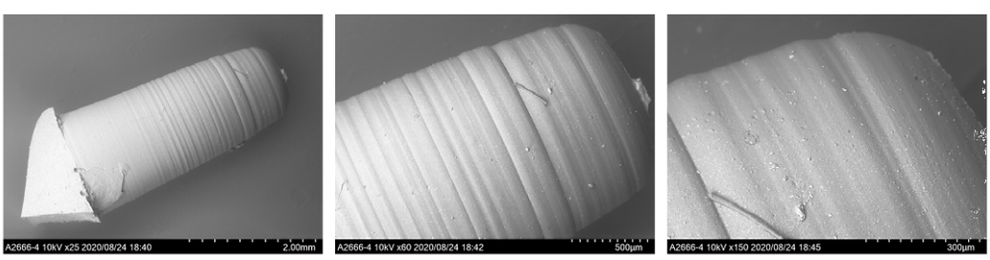
敲打技法（ワーディー・アッ＝サイル 23 号墓 5 号付属小型墳、no. 13）



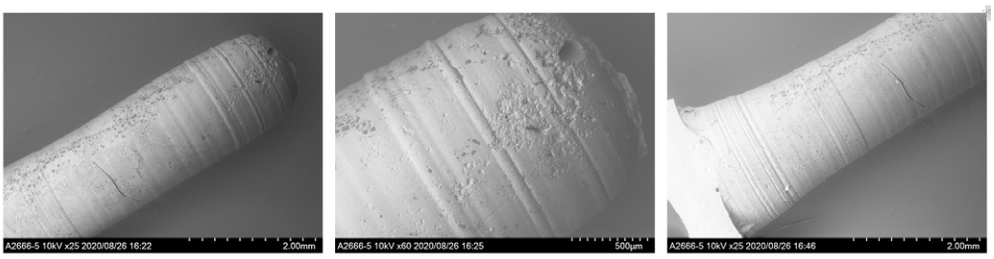
アーネスタイト製くびれ状円柱型ドリルによる回転穿孔（ワーディー・アッ＝サイル 21 号墓、no. 27）



アーネスタイト製くびれ状円柱型ドリルによる回転穿孔（マディーナト・ハマド遺跡、A2666）



先細型ドリルによる回転穿孔（マディーナト・ハマド遺跡、A2666-4）



先細型ドリルによる回転穿孔（マディーナト・ハマド遺跡、A2666-5）

図 6　前期ディルムン時代におけるビーズの穿孔技術

の関係だけでなく、バハレーン側における特定の外観への志向性をうかがわせている。それは石材本来の色調だけでなく、紅玉髄に白色加工を施したものが存在することによって示される。インダス地域においては白色加工は紅玉髄の表面に文様を施すために用いられるが、紅玉髄製ビーズの表面全体に施されたバハレーン島の例は文様としてよりも、表面を白色に仕上げようとした意図を示唆している。

形態・法量の点においても、インダス地域の例とは際立った違いをみせている。石材が限定されていることも関係してか、形態・法量組成はきわめて単純である。長型以上の長さをもつ例が含まれないのも特徴的である。また、検討を行なったのは 4 基の墳墓から出土した資料だけであるが、形態・法量構成がおおむね共通しているのも注目すべきところである。少なくともこれらの例については、特定の地域あるいは工房で生産されたものが搬入され、墳墓の副葬品として用いられている可能性が考えられる。

ビーズの生産地を推測する上での大きな手がかりとなる穿孔技術についてみると、前半期・後半期にみられる円筒形の孔形態＋きわめて平滑な表面形状をもつもの、前半期の資料にみられる敲打技法によるもの、後半期に確認される先細型の孔形態＋顕著な平行凹線を特徴とする表面形状をもつもののいずれもがインダス地域に共通する穿孔技術の使用を示すものであり、少なくとも系統的にはインダス地域に連なっている可能性が高い。

インダス地域におけるドリルの種類や穿孔技術の実態が十分に明らかになっていない中で、バハレーン島出土資料の生産地がインダス地域のどこなのか特定することは難しいが、前期ディルムン時代前半期のワーディー・アッ＝サイル遺跡ではくびれ状円柱型ドリルと敲打技法によるビーズが主体であったのに対し、後半期になるとくびれ状円柱型ドリルに加えて先細型ドリルによるものが加わっている点は、同時期のインダス地域における穿孔技術の変化を反映している可能性が高い。この時期に先細型ドリルの使用が普及していたグジャラート地方が供給地であった可能性も考えることができるであろう。

この点に関しては、インダス地域各地での分析事例の蓄積することによって、穿孔技術の時空間的変異を明らかにすることが最も大きな課題である。同時に、アラビア半島を含めた周辺地域における資料の分析がインダス地域の事例の解釈に重要な手がかりを与えてくれるところも大きく、双方向での検証が求められるところである。特にバハレーン島出土ビーズは、インダス文明期のビーズ生産が大きく変化する時期に生産されたものであると考えられ、技術変化のみならず生産・流通システムの変化を明らかにする上でも重要性を有していると評価することができるだろう。

3.3　印章

印章は、土器や石製装身具とは異なり、行政や交易のシステムに深く関わる器物である。ペルシア湾岸地域では、前 3 千年紀末～前 2 千年紀前葉の時期に、湾岸式印章とディルムン式印章という 2 つの印章様式が知られている。

湾岸式印章は円盤状の本体とつまみによって構成されるスタンプ式印章であり（図 7）、メソポタミアの円筒印章とは明確な違いを有している。スタンプ式という形式上の共通性だけでなく、二瘤形のつまみを有する特徴は、インダス式印章との共通性を示している。また、凍石を素材とし、加熱処理によって白色に仕上げるという素材加工



図 7　前期ディルムン時代のインダス系湾岸式印章

の点、印面の図像に短角ウシとインダス文字を刻んだものが含まれるという点においても、インダス式印章との深い関係を示している。

一方、ディルムン式印章は全体的な形態は湾岸式印章に類似するが、背面のつまみがドーム形になるという違いがある。また、つまみには中央に平行刻線が 2 〜 3 条刻まれ、その左右に円点文が配されており、湾岸式印章にみられる二瘤形とは大きく異なっている。印面に表現される図像は、湾岸式印章の動物を中心にした単純な構成から、人物・動物・器物を含む複数の要素を組み合わせたより複雑な構成へと変化しており、この点においても湾岸式印章との明確な違いを示している。その一方で、凍石を加熱して白色に仕上げる技術は湾岸式印章に共通しており、インダス式印章の素材加工技術を継承している。

湾岸式印章とディルムン式印章については、これまでに多くの研究が蓄積されている（David-Cuny and Azpeitia 2012, 2016; Gadd 1932; Bibby 1958; Hallo and Buchanan 1965; Kjærum 1983, 1986, 1994; Laursen 2010a; Mitchell 1986; Olijdam and David-Cuny 2018）。これらの研究成果を総合すると、湾岸式印章からディルムン式印章への変遷を以下のようにまとめることができる。

①前 2300 年前後に典型インダス式印章がメソポタミア南部の都市遺跡において散在的ながら出現する（インダス文明期中期〜後期）。

②前 2100 年頃（インダス文明後期）にインダス系図像（短角ウシ）と銘文をもった湾岸式印章（便宜的にインダス系湾岸式印章と呼ぶ）がイラン高原南西部からメソポタミア南部に出現する。

③前 2000 年頃（インダス文明終末期）までに湾岸式印章はファイラカ島、バハレーン島を含むペルシア湾岸西半部に広がり、バハレーン島を中心にインダス系とは異なる在地系の湾岸式印章が出現する。この段階にはインダス系の図像要素はほとんどみられなくなり、メソポタミア系の図像要素を取り込みながら、独自の図像・様式の創出へと向かう。

④前 2000 年頃には背面の形式（3 条の刻線と 4 個の円点文からなる低平なドーム型）と定型化した人物・動物を主図像要素としたディルムン式印章 Ia 式が生み出される。

⑤これ以降（インダス文明終末期～ポスト文明期）、ディルムン式印章はメソポタミア以北の影響を受けながら様式変化を遂げる。

各段階の実年代については厳密に確定することが難しい点があるが、おおむね流れとしてはこのように整理することができる。問題となるのは、こうした湾岸地域からメソポタミア南部にかけての地域における印章の変遷に、インダス地域との交流関係がどのように関わっているのかという点である。メソポタミア南部のいくつかの遺跡では、典型的な凍石製方形印章が出土しており、直接インダス地域からもたらされたものと考えられるが、インダス系湾岸式印章では、表現される動物が短角ウシのみで、多様な動物が描かれたインダス式印章とは大きく異なっている。また、インダス系湾岸式印章に描かれる短角ウシの表現は著しく簡略的であること、また、A. パルポラ（Parpola 1994）らによって指摘されてきたように、湾岸式印章に刻まれるインダス文字銘文における文字配列はインダス地域の例と異なっていることなど、インダス式印章との差異が著しい。こうしたインダス系湾岸式印章とインダス式印章の違いを彫刻技術の点から検討するのが本研究の目的である。

バハレーン政府文化古物局にはこれら 2 つのタイプの印章が多数所蔵されているが、今回の資料調査では湾岸式印章 7 点（うちインダス系湾岸式印章は 3 点）、ディルムン式印章 11 点に関して記録化を行うとともに印面（彫刻面）のシリコンレプリカを作成し、走査型電子顕微鏡（SEM）による彫刻技術の分析を行なった。ここではインダス系湾岸式印章 3 点の分析結果について紹介する。なお、いずれも凍石を素材とし、加熱処理によって表面を白色に仕上げており、インダス系の素材処理技術が用いられていることがわかる。

ここで報告する 3 点のインダス系湾岸式印章（図 7）は、いずれも円形の印面上部にインダス文字 4 ～ 5 文字を弧状に配し、下半部に左向きの短角ウシを刻む。背面には半球形のつまみをつくるが、A10175、A1177 はインダス式印章に共通する二瘤形つまみをつくるのに対し、A9186 では 4 条の平行刻線を刻む。短角ウシの表現についてみると、A1177 は目などの細部表現への配慮もなされているが、A9186、A10175 では簡略化が著しい。彫刻技術についてみると（図 8）、A9186 では文字は比較的整った形状に仕上げられているが、短角ウシについては曲線部分の彫出が粗く、彫刻面の整形も行われていない。A10175 では文字も短角ウシも細部の仕上げが粗雑である。

資料調査で実見することができたインダス系湾岸式印章はこれら 3 点だけであったが、形態、図像要素の表現、彫刻技術の各点に差異が顕著であ

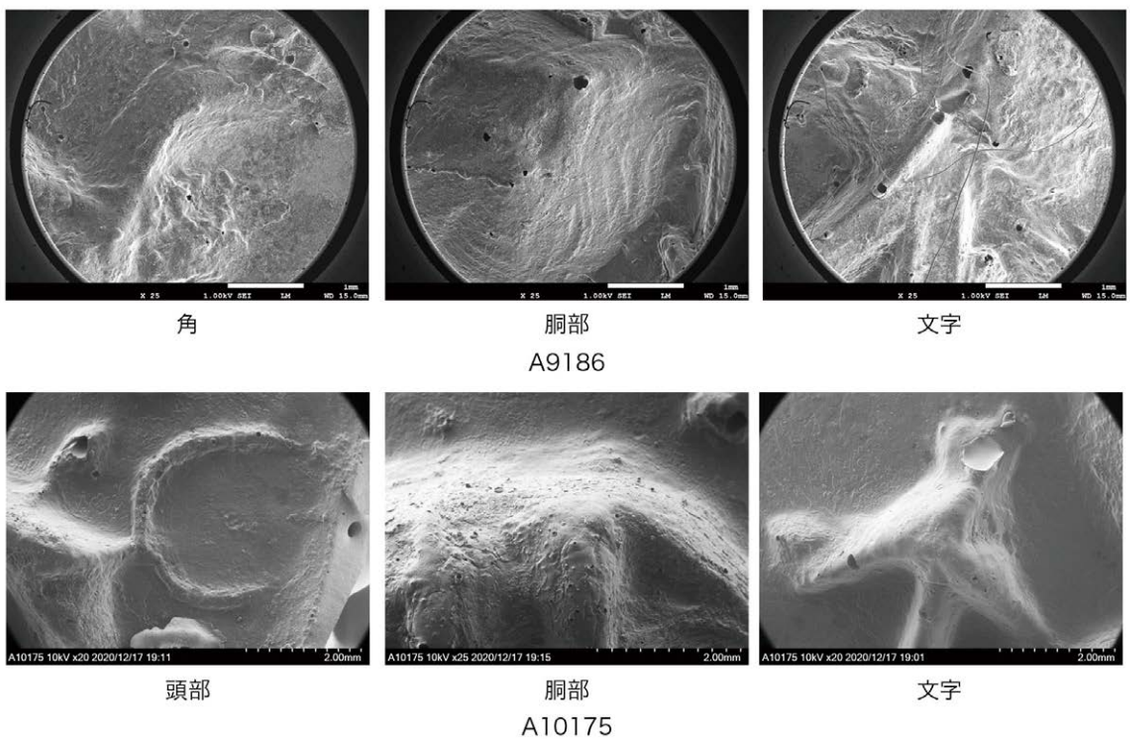


図 8　前期ディルムン時代のインダス系湾岸式印章の彫刻技術

る。A1177 はよりインダス式印章の祖型に近く、A10175 と A9186 はインダス式印章との類似性が著しく低下しているということができる。湾岸式印章における時期的な変化を示す可能性が高いが、いずれにしてもインダス文字と短角ウシというインダス式印章の要素を採用しながらも、インダス式印章の祖型との形態、表現、技術上の距離はきわめて遠いと評価できる。これらの印章を製作した工人はインダス式印章の祖型を間接的にせよ認識していた可能性は十分にあるが、祖型に近づけるための十分な知識や技術を有していなかったということになろう。その一方で、文字については、配列の違いが先行研究において指摘されてはいるものの、各文字の形態はインダス式印章のそれに準じており、完全に意味を失って単なる図像の一部と化しているわけではないことが推測できる。

バハレーン島のカラートゥル＝バハレーン遺跡では、湾岸式印章を製作していた痕跡が確認されている。今回検討した 3 点の資料がバハレーン島産かどうか断定できないが、凍石という素材が輸入されて印章製作が行われていたことは確実であり、そこにインダス系の技術をもった工人が関与していたことも可能性もきわめて高いであろう。

4　まとめ

現段階で本研究において得たデータおよびサンプルの分析がすべて完了したわけではなく、本稿でまとめたのは研究の展望にとどまるところも多いが、インダス文明とアラビア半島の交流関係に

ついて一定の見通しを得ることができた。その成果を前稿（Uesugi 2019）で示した諸点と総合してまとめると、以下のようになる。

①現有データでは、インダス地域とアラビア半島の交流を示す最古の資料は、オマーン半島東半部のラス・アル＝ジンズ遺跡で出土したインダス文明期中期のハラッパー式彩文土器とそれに伴うハラッパー式土器で、オマーン半島各地で出土している黒色スリップがけ大型甕もこの段階からインダス文明期後期にかかる資料である。アラブ首長国連邦のヒーリー北遺跡出土のハラッパー式彩文を描いた土器は後期に位置づけられる。オマーン半島各地で出土している紅玉髄製ビーズもおそらくこの時期を中心とするものであろう。

②このようにオマーン半島ではインダス文明期中期から後期の遺物が多く出土しているのとは対照的に、バハレーン島では後期から終末期にかけての資料のみが知られている。後期の段階の資料としては前期ディルムン時代前半期の墳墓から出土する石製ビーズがあり、副葬品として用いられている。インダス文明終末期に相当する前期ディルムン時代後半期になると、石製ビーズの出土数量の増加と、石材、形態、穿孔技術の各要素において変化が認められるが、穿孔技術からみればやはりインダス系のものと判断される。

③湾岸式印章は、前期ディルムン時代前半期末から後半期初頭の時期にバハレーン島に出現する。注目されるのは石製ビーズがおそらくは東のインダス方面からもたらされたのに対し、湾岸式印章は北西のメソポタミア方面から導入された可能性があることである。ラウルセン（Laursen 2010a）によれば、湾岸式印章の中で古い例はイラン高原からメソポタミア南部で出土しており、バハレーン島出土例はそれよりも新しい段階に位置づけられている。湾岸式印章の起源は依然として判然としないが、湾岸式印章に先行すると考えられるインダス式印章がメソポタミア南部で出土していることを勘案すると、メソポタミアに移住していたインダス系集団が湾岸式印章を創出し、それがバハレーン島を含めたペルシア湾岸地域に広がった可能性がある。バハレーン島出土の湾岸式印章では文字はインダス式印章の祖型に準じるが、図像では簡略化を軸とした変容が著しいことを踏まえると、インダス地域とのつながりをアイデンティティとしつつも、湾岸地域で在地化したインダス系集団が湾岸式印章の製作者であった可能性が高い。在地化の過程でインダス式印章において駆使された高度な彫刻技術は失われ、図像の変容が生じたと解釈することができる。バハレーン島のカラートゥル＝バハレーン遺跡で印章を製作した工人はそうしたインダス故地を離れたインダス系集団であった可能性が高いであろう。

④前 2 千年紀前葉になると、バハレーン島がペルシア湾交易の中心として発展したことが、マルトゥ＝アモリ系の王をいただく王国の樹立（Zarins 1986）やその権威の象徴たる王墓の造営（Laursen 2010b）、独自のディルムン式印章の出現（Kjærum 1986）にみることができる。その時期にインダス系、特にグジャラート系の土器が増加し、副葬品としても使用されるようになること、紅玉髄・瑪瑙を中心とする石製ビーズが増加することは重要である。石製ビーズの生産地を特定することは難しいが、穿孔技術において同時期のグジャラート地方で普及していた先細型ドリルを用いたものが確認されるようになることは、グジャラート系土器の存在と合わせて、インダス地域の中でもグジャラート地方との交流が強化されたことを

示している。土器、石製装身具ともにグジャラート地方ではなく、バハレーン島で製作された可能性も否定はできないが、同時期のグジャラート地方と強い結びつきをもつ集団がバハレーン島に存在したことは確かであろう。

⑤このバハレーン島とグジャラート地方の結びつきが強化された前 2 千年紀前葉は、インダス文明社会が衰退した時期に相当している。衰退の過程は明確になっているとは言い難いが、前 2000 ～前 1900 年頃の時期に文明社会を特徴づけた都市が規模の縮小や都市空間利用の変容から廃絶にいたっている。同時に土器様式の変化や遺跡分布パターンの変化（東のガッガル地方やグジャラート地方での遺跡数の増加）といった現象を認めることができる。印章においても、変化の実年代を特定することはできないながら、文明期を特徴づけた凍石製方形形象文印章が用いられなくなり、バローチスターン地方中央部からシンド地方の一部で土製幾何学文印章が用いられるだけとなる。グジャラート地方でもドーラーヴィーラー遺跡は前 2000 年前後に都市の機能を失っている可能性が高いことから（Bisht 1999）、この地域が文明社会の衰退と無縁であったとは考えにくいが、そうした状況にあっても西方のペルシア湾方面との交流活動を継続していたことは、インダス文明社会の衰退現象の複雑さを物語っている。

⑥メソポタミアの粘土板文書ではオマーン半島に比定される銅資源の一大産地「マガン」、バハレーン島からさらに湾奥に近いファイラカ島に比定される「ディルムン」は、東のインダス地域に相当すると考えられる「メルッハ」を含めてペルシア湾交易において重要な役割を果たしたことが知られている。インダス地域とアラビア半島の交流関係を通時的に検討すると、先行研究でも指摘されているように、全体的な流れとしてはオマーン半島からバハレーン島へと交流の拠点が移動していることがわかる。しかしながら、オマーン半島とバハレーン島のそれぞれでインダス地域との関わり方は異なっていた可能性が高い。オマーン半島は銅という稀少資源を有しており、その開発から流通を支えるネットワークが半島内に形成されていたと考えられる。この地域でのインダス系土器の分布範囲や器種構成などからみると、インダス地域に出自する集団が半島に移住して在地集団とともに資源開発・流通に関わっていた可能性がある。実際の交流の拠点は、内陸部のネットワークに接続するウンム・アン＝ナール島など沿岸部に設けられていたと考えられる。一方、バハレーン島はそれ自体に資源は乏しく、あくまでも交易の拠点として特化している。そこにインダス系集団は交易の仲介者あるいは工芸品の製作工人として関わっていたと推定される。また、バハレーン島を中心に活動したインダス系集団はインダス地域に直接的出自をもつ人々とメソポタミア南部から湾岸地域に在地化していた人々など、多様な性格・来歴をもつ人々によって構成されていた可能性があることにも注意しておく必要があろう。こうした多様なインダス系集団のアラビア半島との関わり方の違いが、インダス文明社会にどのような影響を与えていたのか判然としないが、交流関係の実態には時空間軸変化・変異のみならず、複雑な集団間、地域間の関係性が内包されていたと考えられるであろう。

謝辞

本研究の実施にあたっては、多くの方々から御協力、御高配を得た。末筆ながらご芳名を明記して感謝申し上げます。特に、故・後藤健先生にバ

ハレーンの考古学に携わる機会を頂戴したことが、インダス文明とアラビア半島の交流関係に関する研究を着想・実施することにつながりました。ご冥福をお祈りするとともに、その御学恩に御礼申し上げたいと思います。

Shaikh Khalifa Al-Khalifa，Pierre Lombard，Salman Almahari，Jonathan Mark Kenoyer，P. Ajithprasad，Rajesh SV，Abhayan GS，Fasalu K Muhammad，Gregg Jamison，西藤清秀，安倍雅史，中山誠二，神谷嘉美（敬称略）

参考文献

Bibby, G. 1958. The 'Ancient Indian Style' Seals from Bahrain. *Antiquity* 32: 243-246.

Bisht, R.S. 1999. Dholavira and Banawali: Two Different Paradigms of the Harappan Urbis Forma. *Purātattva* 29: 14-37.

Blackman M.J. and S. Méry 1999. Les importations de céramiques harappeéennes en Arabie orientale: état de la question. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 29: 7-28.

Chakrabarti, D.K. 1990. *The External Trade of the Indus Civilization*. Munshiram Manoharlal, New Delhi.

Cleuziou, S. and M. Tosi 1987. *The joint Hadd Project: Summary Report on the Second Season November 1986 - January 1987*. The Joint Hadd Project, .

Cleuziou, S. and B. Vogt 1985. Tomb A at Hili North (United Arab Emirates and Its Material Connections to Southeast Iran and the Greater Indus Valley. in: J. Schotsmans and M. Taddei (eds.) *South Asian Archaeology 1983*. Istituto Universitarion Orientale, Naples. pp. 249-277.

David-Cuny, H. and J. Azpeitia 2012. *Failaka Seals Catalogue*, vol. 1: *Al-Khidr*. National Council for Culture, Arts and Letters, State of Kuwait, Kuwait City.

David-Cuny, H. and J. Azpeitia 2016. *Failaka Seals Catalogue*, vol. 2: *Tell F6 - The Palace*. National Council for Culture, Arts and Letters, State of Kuwait, Kuwait City.

De Cardi, B. 1989. Harappan Finds from Tomb 6 at Shimal, Ras al-Khaimah, United Arab Emirates. in: K. Frifelt and P. Sørensen (eds.) *South Asian Archaeology 1985*. Curzon Press/The Riverdale Company, London/Riverdale. pp. 9-13.

De Waele, A. and E. Haerinck 2006. Etched (carnelian) beads from northeast and southeast Arabia. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 17(1): 31-40.

Edens, C. 1993. Indus-Arabian Interaction during the Bronze Age: A Review of Evidence. in: G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization: a Contemporary Perspective*. Oxford IBH and the American Institute of Indian Studies, New Delhi. pp. 335-363.

Frenez, D., M.D. Esposti, S. Méry and J.M. Kenoyer 2016. Bronze Age Salūt (ST1) and the Indus Civilization: Recent Discoveries and New Insights on Regional Interaction. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 46: 107-124.

Gadd, C.J. 1932. Seals of Ancient Indian Style Found at Ur. *Proceedings of the British Academy* 18: 191-210.

Gadd, C.J. and S. Smith 1924. The New Links between Indian and Babylonian Civilizations. *Illustrated London News*, 4 October 1924: 614-616.

Hallo, W.W. and B. Buchannan 1965. A "Persian Gulf" Seal on an Old Babylonian Merchantile Agreement. in: Hans G. Güterbock and T. Jacobsen (eds.) *Studies in Honor of Benno Landsberger on His Seventy-Fifth Birthday*. The Oriental Institute of the University of Chicago, Chicago. pp. 199-209.

Højlund, F. 1994. Pottery from the Pre-Barbar and Barbar Periods (I-II). in: Højlund, F. and H.H. Andersen (eds.) *Qala'at al-Bahrain 1: the Northern City Wall and the Islamic Fortress*. Jutland Archaeological Society, Moesgaard. pp. 73-177.

Højlund, F. and H.H. Andersen (eds.) 1994. *Qala'at al-Bahrain, vol. 1: the Northern City Wall and the*

Islamic Fortress. Jutland Archaeological Society Publications 30:1. Jutland Archaeological Society, Moesgaard.

Joshi, J.P. (ed.) 1990. *Excavation at Surkotada and Exploration in Kutch*. Memoirs of the Archaeological Survey of India 87. Archaeological Survey of India, New Delhi.

Kjærum, P. 1983. *Failaka/Dilmun: The Second Millennium Settlements*, vol. 1:1 *The Stamp and Cylinder Seals*. Jutland Archaeological Society Publications 17:1. Jysk Arkæologisk Selskab, Aarhus.

Kjærum, P. 1986. The Dilmun seals as evidence of long distance relations in the early second millennium B.C. in: Shaikha Haya Ali Al Khalifa and M. Rice (eds.) *Bahrain through the Ages: Archaeology*. The Ministry of Information, State of Bahrain/KPI, London. pp. 269-277.

Kjærum, P. 1994. Stamp seals, seal Impressions and seal blanks. in: F. Højlund and H.H. Andersen (eds.) *Qala'at Bahrain 1: the Northern City Wall and the Islamic Fortress*. Jutland Archaeological Society, Moesgaard. pp. 319-350.

Lamberg-Karlovsky, C.C. and M. Tosi 1973. Shar-i Sokhta and Tepe Yahya: Tracks on the Earliest History of the Iranian Plateau. *East and West* 23(1-2): 21-57.

Laursen, S.T. 2009. The decline of Magan and the rise of Dilmun: Umm an-Nar ceramics from the burial mounds of Bahrain, c. 2250-2000 BC. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 20(2): 134-155.

Laursen, S.T. 2010a. The westward transmission of Indus Valley sealing technology: origin and development of the 'Gulf Type' seal and other administrative technologies in Early Dilmun, c. 2100-2000 BC. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 21(2): 96-134.

Laursen, S.T. 2010b. The emergence of mound cemeteries in Early Dilmun: new evidence of a proto-cemetery and its genesis c. 2050-2000 BC. in: L. Weeks (ed.) *Death and Burial in Arabia and Beyond: Multidisciplinary perspectives*. BAR International Series, Oxford. pp. 115-139.

Laursen, S.T. 2011. Mesopotamian ceramics from the burial mounds of Bahrain, c. 2250-1750 BC. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 22: 32-47.

Mackay, E. 1925. Sumerian Connections with Ancient India. *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, Oct., 1925, no. 4: 697-701.

Mackay, E. 1933. Decorated Carnelian Beads. Man 33: 143-146.

Méry, S. and J. Blackman 2005. Socio-economical Patterns of a Ceramic Container: the Harappan Black Slipped Jar. in: C. Jarrige and V. Lefèvre (eds.) *South Asian Archaeology 2001*. Editions Recherche sur les Civilisations, Paris. pp. 226-235.

Méry, S., K. McSweeney, S. Van Der Leeuw and W.Y. Al-Tikriti 2004. New approaches to a collective grave from the Umm an-Nar period at Hili (UAE). *Paléorient* 30: 163-178.

Mitchell, T.C. 1986. Indus and Gulf type seals from Ur. in: Shaikha Haya Ali Al Khalifa and M. Rice (eds.) *Bahrain through the Ages: Archaeology*. The Ministry of Information, State of Bahrain/KPI, London. pp. 278-285.

Olijdam, E. and H. David-Cuny 2018. Dilmun-Meluhhan Relations Revisited in Light of Observations on Early Dilmun Seal Production during the City IIa-c Period (c. 2050-1800 BC). in: D. Frenez, G.M. Jamison, R.W. Law, M. Vidale and R.H. Meadow (eds.) *Walking with the Unicorn: Social Organization and Material Culture in Ancient South Asia, Jonathan Mark Kenoyer Felicitation Volume*. Archaeopress, Oxford. pp. 406-427.

Parpola, A. 1994. *Deciphering the Indus script*. Cambridge University Press, Cambridge.

Possehl, G.L. 1986. *Kulli: an Exploration of Ancient Civilization in Asia*. Carolina Academic Press, Durham.

Possehl, G.L. 1996. Meluhha. in: J. Reade (ed.) *The Indian Ocean in Antiquity*. Kegan Paul International, London/New York. pp. 154-157.

Quivron, G. 2000. The Evolution on the Mature Indus Pottery Style in the Light of the Excavations at Nausharo, Pakistan. *East and West* 50(1-4): 147-190.

Rao, S.R. 1962. Excavation at Rangpur and other explorations in Gujarat. *Ancient India* 18/19: 5-207.

Rao, S.R. 1985. *Lothal: a Harappan Port Town 1955-62*, vol. 2. Memoirs of the Archaeological Survey of India 78. Archaeological Survey of India, New Delhi.

Ratnagar, S. 1981. *Encounters: The Westerly Trade of the Harappan Civilization*. Oxford University Press, Delhi.

Reade, J. 1979. *Early etched beads and the Indus-Mesopotamia trade*. British Museum Occasional Paper 2. British Museum Press, London.

Uesugi, A. 2013. A Note on the Diachronic Changes of the Harappan Pottery - A Preliminary Analysis. *Heritage: Journal of Multidisciplinary Studies in Archaeology* 1: 356-371.

Uesugi, A. 2019. A Note on the Interregional Interactions between the Indus Civilization and the Arabian Peninsula during the Third Millennium BCE. in: S. Nakamura, T. Adachi and M. Abe (eds.) *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in honour of Sumio Fujii*. Rokuichi Shobo, Tokyo. pp. 337-355.

Uesugi, A. in press. Ceramics in Gujarat during the Pre-Urban and Urban Indus Periods. in: *Ancient India, New Series: Recent Advances in Harappan Archaeology*. Archaeological Survey of India, New Delhi.

Uesugi, A., Manmohan Kumar and V. Dangi 2018. Indus Stone Beads in the Ghaggar Plain with a Focus on the Evidence from Farmana and Mitathal. in: D. Frenez, G.M. Jamison, R.W. Law, M. Vidale and R.H. Meadow (eds.) *Walking with the Unicorn: Social Organization and Material Culture in Ancient South Asia, Jonathan Mark Kenoyer Felicitation Volume*. Archaeopress, Oxford. pp. 568-591.

Vidale, M. 2004. Growing in a Foreign World: For a History of the "Meluhha Villages" in Mesopotamia in the 3rd Millennium BC. in: A. Panaino and A. Piras (eds.) *Schools of Oriental Studies and the Development of Modrn Historiography. Proceedings of the Fourth Annual Symposium of the Assyrian and Babylonian Intellectual Heritage Project, Held in Ravenna, Italy, October 13-17, 2001*. Università di Bologna & IsIao, Milan. pp. 261-280.

Wooley, C.L. 1934. *Ur Excavations*, Vol. II: *The Royal Cemetery*. The University Museum, Philadelphia.

Zarins, J. 1986. MAR-TU and the land of Dilmun. in: Shaikha Haya Ali Al Khalifa and M. Rice (eds.) *Bahrain through the Ages: Archaeology*. KPI, London. pp. 233-250.

Zettler, R.L. and L. Horne (eds.) 1998. *Treasures from the Royal Tombs of Ur*. University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology, Philadelphia.

研究項目 A02「古代西アジア都市の景観と構造」

計画研究 02

古代西アジアにおける都市の景観と機能

シリア、テル・タバン出土、鉄剣副葬の中期アッシリア土壙墓

沼本宏俊
国士舘大学体育学部

はじめに

本研究計画班の研究対象の一つであるメソポタミア北部の歴史時代遺跡（前 2 ～ 1 千年紀）の日本調査隊による調査は、東京大学イラク・イラン調査団のイラク、モースル北部のテル・サラサート I 号丘の調査 (1965 ～ 66,76 年) を皮切りに、古代オリエント博物館によるシリア、ユーフラテス中流域のテル・ルメイラ調査 (1975 ～ 80 年)、国士舘大学隊によるイラク、ティグリス川上流域エスキ・モースル地区の調査 (1983 ～ 86 年) 及び、シリア、ハブール川中流域のテル・タバン調査 (1997 ～ 99、2005 ～ 10 年) が実施された。さらに 2016 年からは日本合同調査隊（筑波大学・中部大学・国士舘大学）がイラク、クルド自治区スレマニア県の大型拠点遺跡ヤシン・テペの調査を行っている (図 1)。

これらの調査の中で特筆すべきはテル・タバン調査であり、我が国の調査隊としては初の大量楔形文字資料が発見された。粘土板に書かれた行政記録、焼成レンガに刻まれた建築記念碑文など、前 13 ～ 11 世紀 (中期アッシリア時代) と前 18 世紀後半 (古バビロニア時代) の文字資料合計約 500 点が出土した。文字資料の記述内容から、マリ文書や中・新アッシリア文書に頻出するハブール川中流域の統括拠点タバトゥム (古バビロニア)、タベトゥ (中・新アッシリア) であったことが実証された。これまで欧米隊が調査した遺跡からは、同時代のこれほど纏まった量の考古・文字資料の発見例はなく、今後、テル・タバン資料と他地域遺跡と資料を詳細に分析し、比較検討し研究成果を公表することになれば、北メソポタミアの未だ不明瞭な前 19 ～ 7 世紀の歴史文化の解明に、大きな貢献を果たすと期待されている。

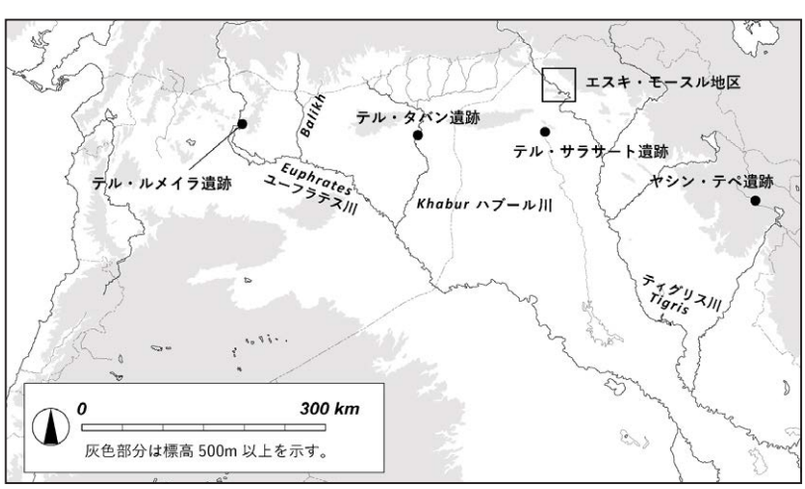


図 1 日本隊が発掘調査した北メソポタミアの歴史時代 (前 2 ～ 1 千年紀）の遺跡

テル・タバンの調査は計 10 回が実施され、希少かつ貴重な歴史時代の遺構・遺物が数多く発見されたが、その大半は未公表である。報告書の出版は調査代表者 (筆者) の責務であり、出来るだけ早急に出版できるよう努めたい。本稿では、主にテル・タバンの 2008 年度発掘調査で発見した未公表の中期アッシリア末期の鉄製短剣が副葬された土壙墓について報告する。なお、報告は 2019 年度計画研究 02 第 11 回研究会の研究発表「テル・タバン出土、中・新アッシリアの遺構と土器変遷」の一部である。

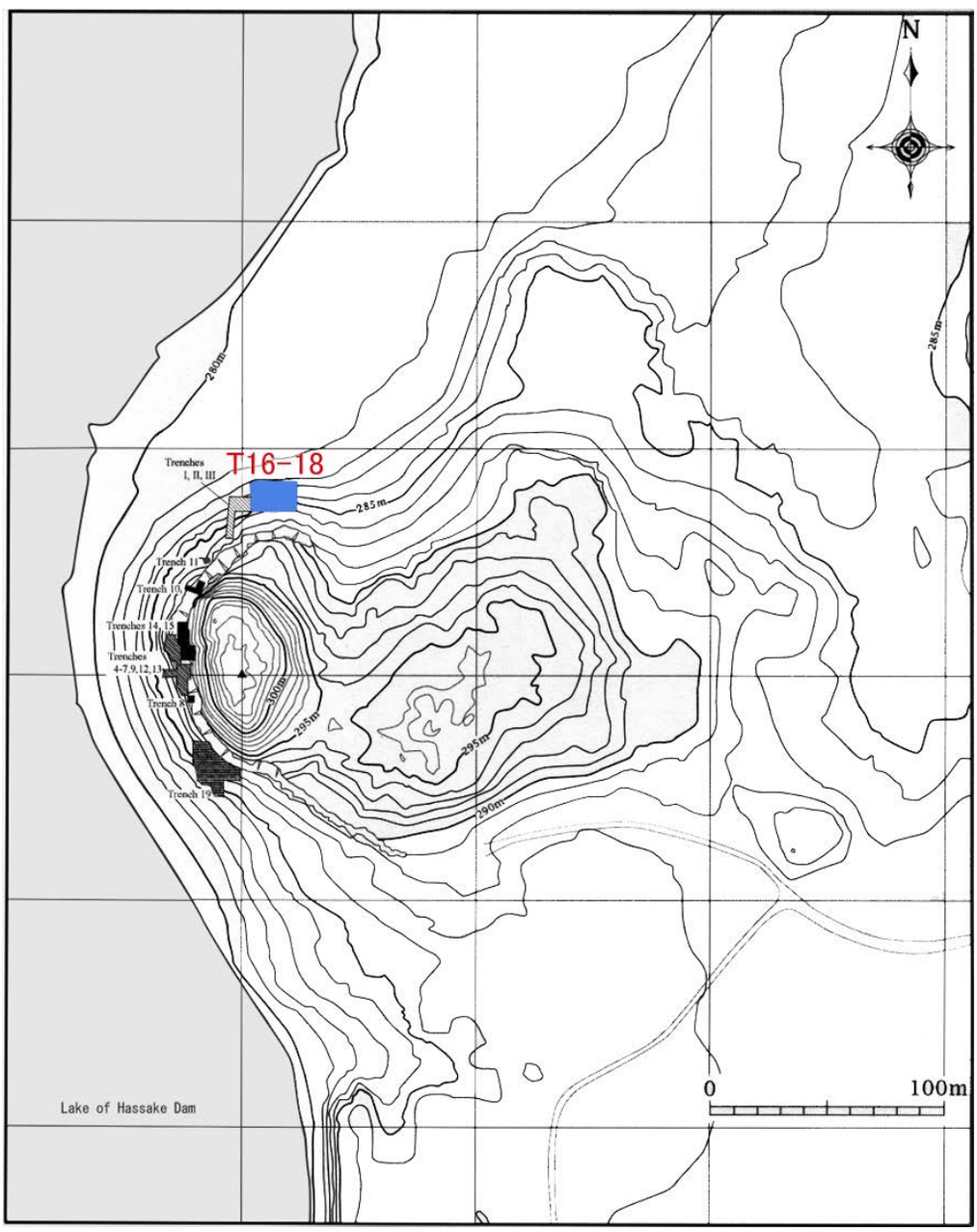


図 2　テル・タバンの全体図・発掘区域

1. 2008 年度の調査

99 年度に発掘調査したテル北側裾部の T-III トレンチで確認した中期アッシリアの日乾煉瓦造の巨大壁跡（HW1,2）の詳細を究明するため (Ohnuma and Numoto 2000)、同トレンチの東側に東西 24m、南北 20m の T16 － 18（Trench 16 ～ 18）を設定し発掘を行った (図 2, 3)。調査の結果、厚さ約２ｍから７ｍの中期アッシリア時代 (前 13 ～ 11 世紀) の日乾煉瓦造壁跡が重複した状態で検出された。建物跡の他に中期アッシリアの土壙墓 2 基、新アッシリアの巨大土器焼き窯・甕棺墓 4 基等が出土した (図 4)。

中期アッシリアの重複した日乾煉瓦造壁跡は、その規模や生活層から文字資料が出土していることから公的建物であったことは間違いない。これらの建物跡は前時期の壁を再利用して、建て替えが繰り返し行われており、中期アッシリアのタバンの歴代領主の代替わりにより、増改築が繰り返されたことを示唆している。壁跡は複雑に重複しており各時期の建物の詳細なプランと変遷は不明瞭であったが、2009，10 年の調査でこれらの壁を上層から取り外した結果、建物跡は大きく 10 期に分けられることが明らかになった（図 4)。

この建物の変遷ついては、土壙墓の出土層や年代に関連する 8 層の HW1 壁と 7 層の HW2 壁の様相についてのみ簡単に記す (図 4- ⑦～⑩)。

HW1: 8b 層出土の日乾煉瓦造巨大壁跡 HW1 は特筆すべき構造をしている (図 4, 5)。HW1 は 9a 層の W1 壁に W2 壁を付け足し、東西の壁の厚さを約 5 ｍに増築したことがわかった。同壁の崩壊土中からは、中期アッシリア王ティグラト・ピレセル 1 世 (前 1114-1076 年) に従属したタバン領主アッシュル・ケタ・レシェル 2 世の円筒形定礎記念碑文や土製鋲が 98,99,2008 年度調査で多数出土した (Ohnuma et al.1999, Ohnuma and Numoto 2000, 沼本　2009)。注目すべきは、これらの碑文には、「上市」の壁を「煉瓦 13 枚分の幅で 80 枚分の高さまで」新設したとする記述もある (Shibata and Yamada 2009, Tab T07-4)。上述の付け足し壁 W2 の厚さも、使用された煉瓦数が概ね 13 枚で一致しており (図 5)、同領主が建設した壁に相当する可能性が極めて高いと考えられる。こうした壁の建設は、西方から侵入するアラム人の攻撃



図 3　2008 年の発掘区 T16-18 と出土した日乾煉瓦造巨大壁 HW1,HW2

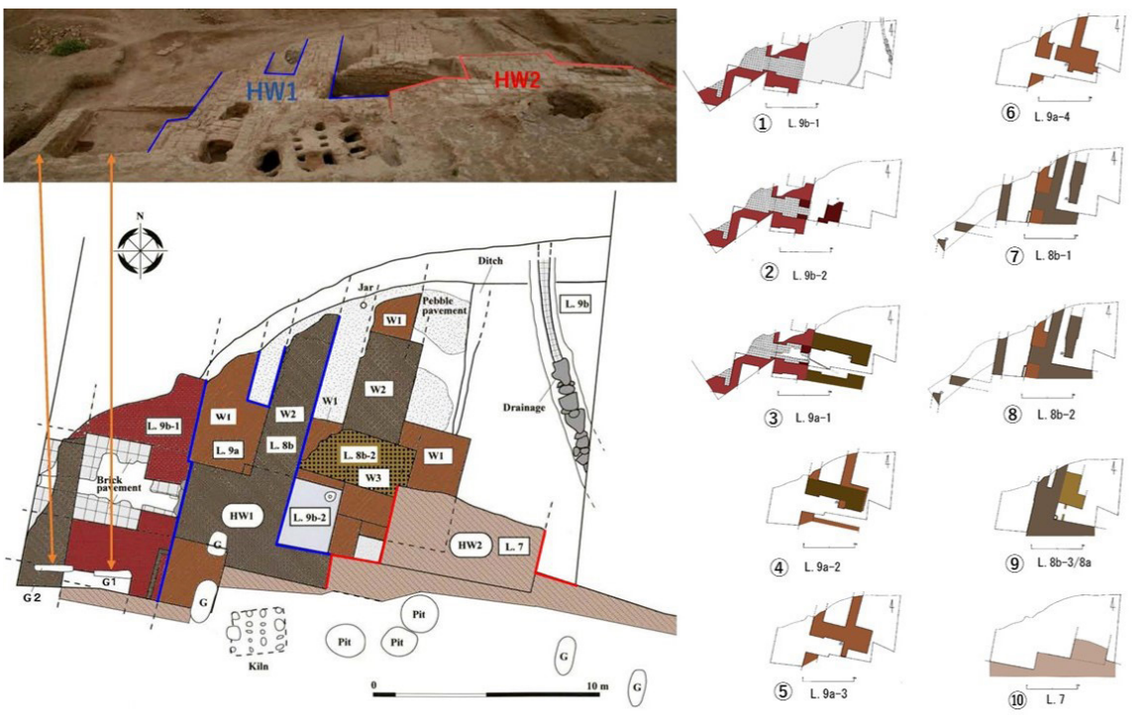


図 4　T16-18 出土の中期アッシリアの日乾煉瓦壁跡と建物の変遷

から町を防御するためのものであったことも、タバン出土のなお未公刊の円筒碑文断片（Tab T06-20）から示唆される。

HW2: 7 層の HW2 壁は HW1 が埋没した後に、その東側に東西幅約 7 m、南北残長約 3．5 mの壁が建設される。この壁と一連の壁は発掘区南端では東西約 30m に認められ、W2(HW1) の南北壁に直行するように構築され、8 層壁を利用しその直上に積み上げられている。土壙墓が出土した近くの西端部の壁は、HW1 が崩壊した残骸の上に積まれており、基底部の据付レベルから中期アッシリアで最も新しい時期に年代付けられる (図 5, 6)。建物のプランは 9, 8 層期と大きく異なることや、使用煉瓦も全く異質で暗灰色で脆く質が悪いことから、歴代の領主とは異なる支配者、つまり、碑文のアラム人がタバンを制圧した後に建造した可能性もある。

2. 土壙墓 (G1, G2)

土壙墓 2 基（G1, G2）は 7 層の HW2 壁の北側で検出した (図 4, 6)。上述の 8 b 層 HW1 壁の青灰色、オレンジ色、白色等様々な日乾煉瓦の残骸土の堆積層に、東西方向に並列し掘り込まれ設置されていた。HW2 壁の屋外の生活面から掘り込まれていたと思われるが、墓壙の掘方は確認できなかった。生活面から墓壙底面までの深さは 1.3 m以上あったと推測される。因みに同時代の土壙墓は 99 年度調査した Trench III で二基が出土している (Ohnuma and Numoto 2000)。

G1 (図 6, 7, 8）：墓壙は長さ約 190㎝、幅約 45㎝で伸展葬の成人人骨が出土した。頭頂部側には乳首底甕 (図 7, 8 ― No.4) が置かれ、発掘時には

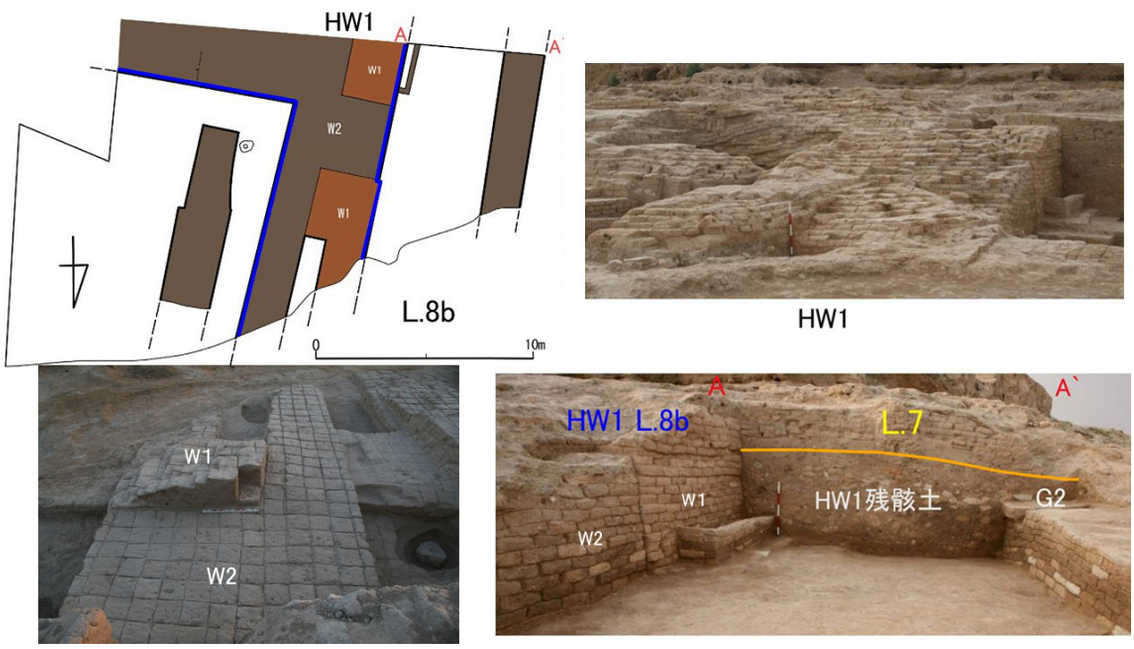


図 5　8 層の巨大壁 HW1 と残骸土の堆積

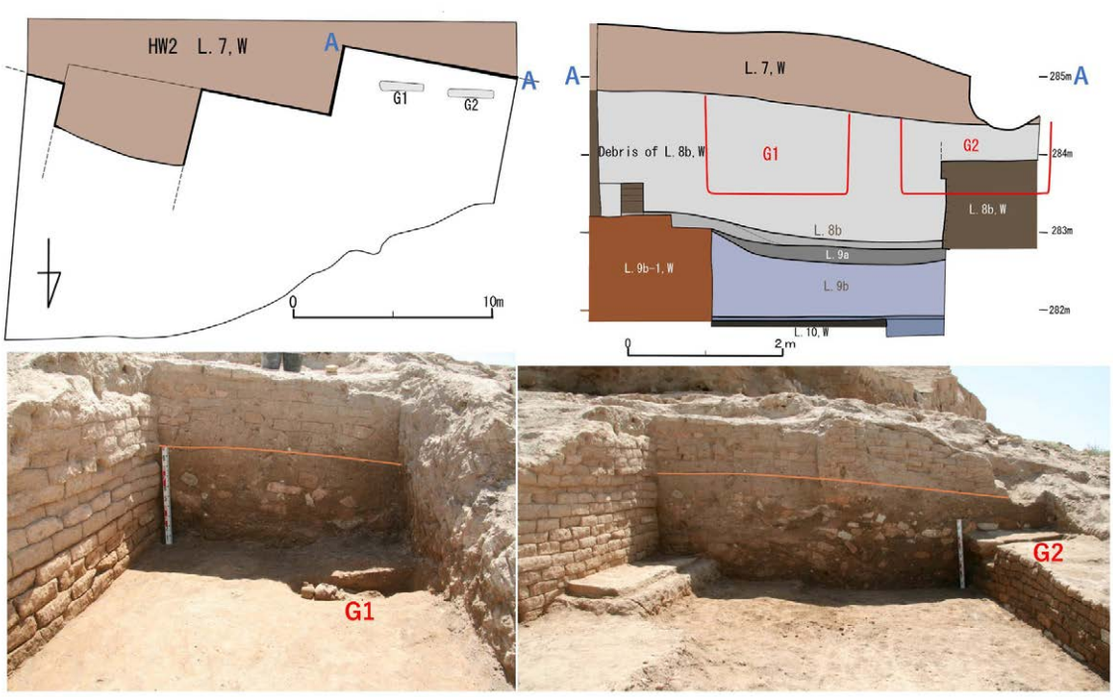


図 6　土壙墓 G1, G2 の出土位置と層位

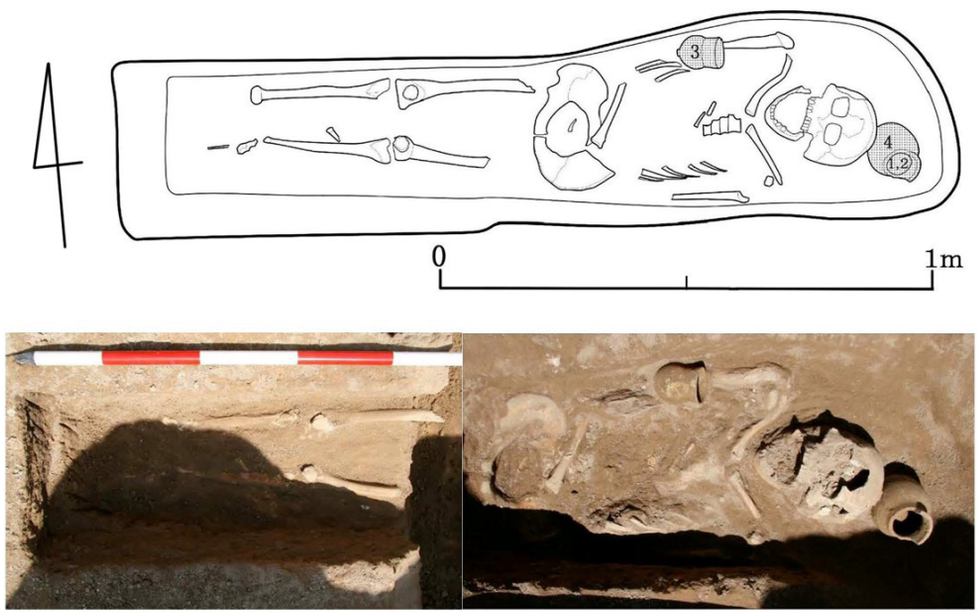


図 7　土壙墓 G1



図 8　土壙墓 G1 の副葬土器

甕の口縁部に乳首底カップ (図 7, 8 － No.2) その上に小型ボール (図 7, 8 － No.1) が重ねられた状態で出土した。右腕からは完形の乳首底カップ (図 7, 8 － No.3) が出土した。他の副葬品は出土しなかった。

G2 (図 6, 図 9 ～ 15）：G1 の約 1m 西側で検出した。墓壙は長さ約 190㎝、幅 40 ～ 45㎝の長方形で、8b 層の南北壁に直行するように東西にほぼ垂直に掘り込んでいる。伸展葬の成人人骨が認められた。頭部の東脇には完形刻文甕が置かれ (図 9, 11-4)、内部には乳首底カップ (図 9,11-3) が収められていた。右上腕部からは刻文紋章入り乳首底カップが、右手部からは完形小型ボール、鉄製短剣、携帯用砥石、青銅製槍先が出土した。胸部からは青銅製鏃、リング、腹部から青銅製リング、膝部からもリング状青銅製品が出土した。

土器は 4 点が副葬されていた。右上腕部出土の乳首底カップの体部には、方形の台座に先端が三又に分かれた棒を二本立てた紋章が焼成後に彫刻されている (図 10)。一族もしくは被葬者の紋章と考えられ、被葬者が生前愛用していたカップだったのであろう。紋章が刻まれた土器は、6 層出土の新アッシリアの甕棺に二例が確認され、文様には何れも方形の台座が認められた。完形刻文甕は頸部と肩部に波状文が施され、底部には分厚い高台が付く。完形小型ボールと乳首底カップ 2 点は精製された胎土である (図 11)。

鉄製短剣は全長 33.2㎝、最大幅 3.6㎝、厚さ約 1.5 ～ 1.0㎝で、柄頭部は銀杏状につくり出されている (図 12, 13)。腐食が激しく遺存状態は悪い。柄頭と柄には板を留めた二本の鋲 (径 0.8 ～ 0.5㎝) と木地の一部が遺っていることから、柄部の長さは約 11㎝と推測される。柄頭の鋲の残存長から柄の厚さは約 3㎝あったと推測される。タバンでは、新アッシリア層から鉄器は頻出しているが、中期アッシリア層ではこれが最初の出土である。現在の刃物と同様の鋲留め柄をもった精巧な鉄製短剣の出土は、同時代の他遺跡の出土例を調べていないが、恐らく類例がないと思われる。また、この短剣が鋲留め柄の起源になる可能性もあると推測される。鉄製短剣の直下からは長さ 14㎝の砥石が出土した (図 12 ,14)。短剣を研ぐための携帯用で、頂部に孔があけられている。

青銅製品は 8 点が認められた (図 15)。右手部から出土品は長さ約 10㎝の小型槍先で、特異な形状をしている。胸部からの出土品と出土位置不明品（No. 9）は、小型の槍先もしくは鏃と思われるが詳細は不明である。

人骨の分析をしていないため性別や年齢は不明だが、副葬品から被葬者は明らかに男性で、この時代には希少な鉄製短剣や紋章入りカップ等、副葬品が豊かなことから支配者階級の人物であったと考えられる。

3. 土壙墓の年代

テル・タバン調査では古バビロニア時代から新アッシリア時代 (前 19 ～ 7 世紀) までの連綿と継続した層序が確認され、土器変遷を把握することができた (図 16) (Numoto et al. 2013)。これらの層序出土の文字資料には日付や王名が多数認められ、遺構・遺物の正確な年代を提示することが可能であるため、テル・タバンの土器編年がハブール川流域及び北メソポタミアの当該期の考古学的研究を行う際の標準編年になる可能性がある。

土壙墓の副葬土器は 7 層期に属すが、テル・タバンの中期アッシリアの土器変遷で、7 層土器の大きな特色としては、8 層には認められなかった高台付きのボールが出現することである。この 7 層の土器はタバンの土器変遷では中期アッシリア

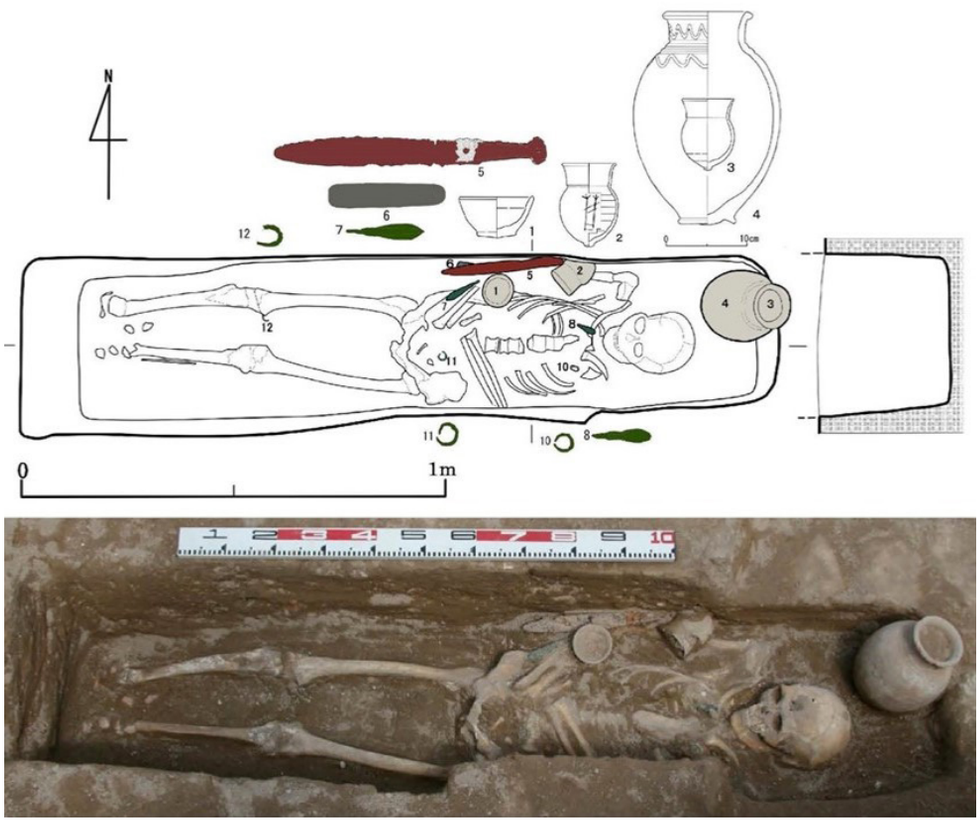


図 9　土壙墓 G2

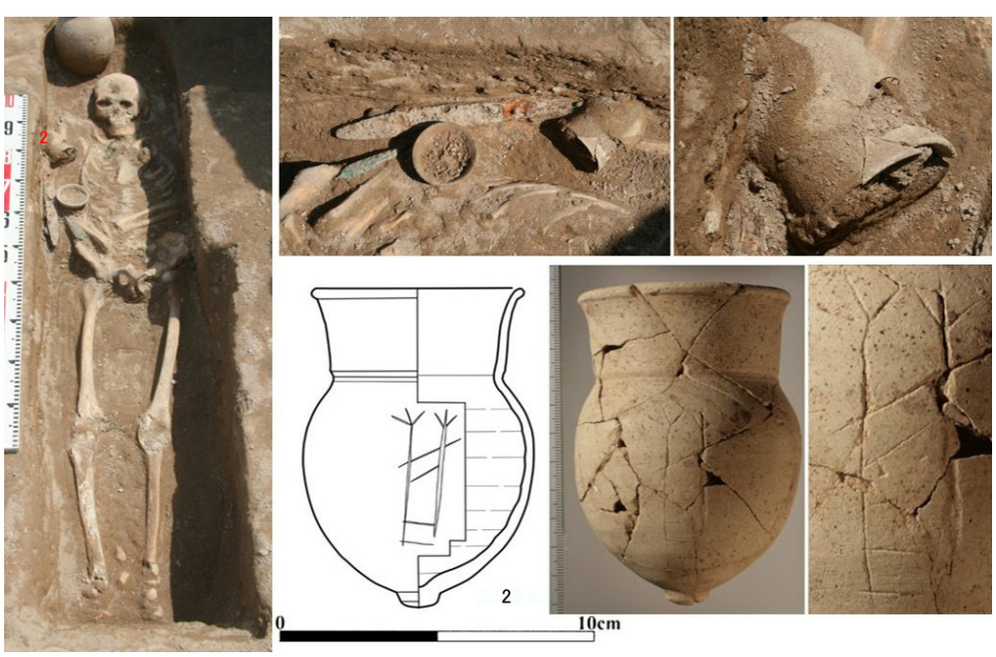


図 10　土壙墓 G2 の副葬刻文入り土器



図 11　土壙墓 G2 の副葬土器



図 12　土壙墓 G2 の副葬鉄製短剣と砥石

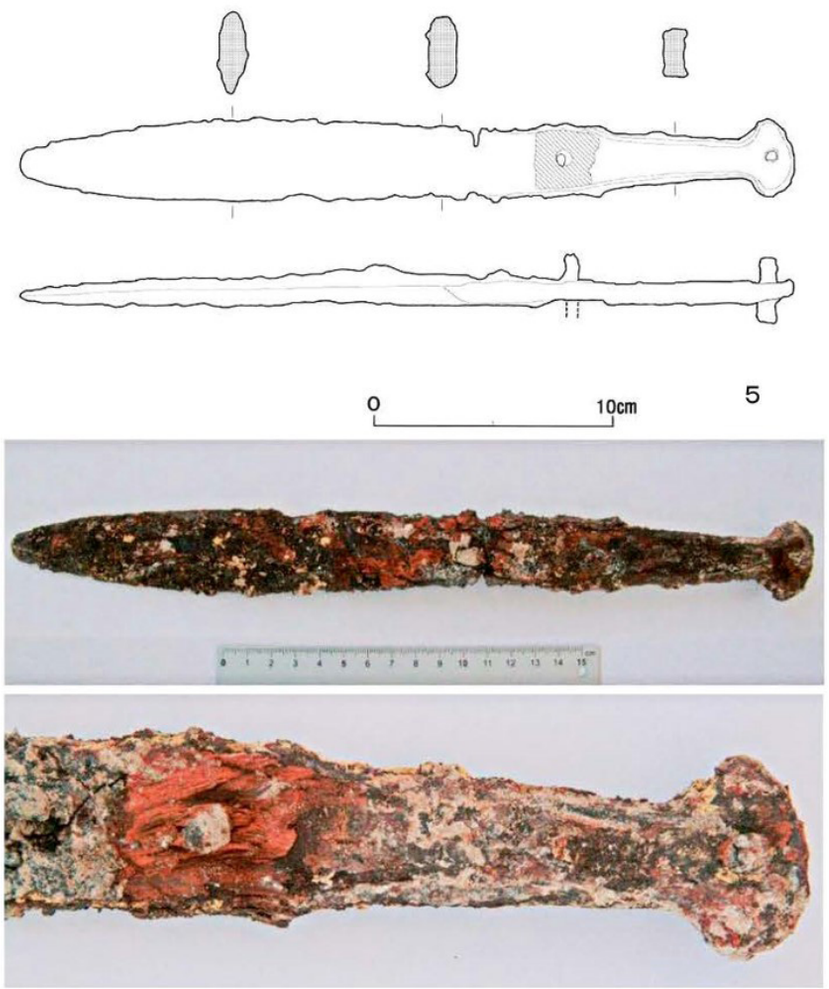


図 13　土壙墓 G2 の副葬鉄製短剣



図 14　土壙墓 G2 の副葬砥石



図 15　土壙墓 G2 の副葬青銅製品

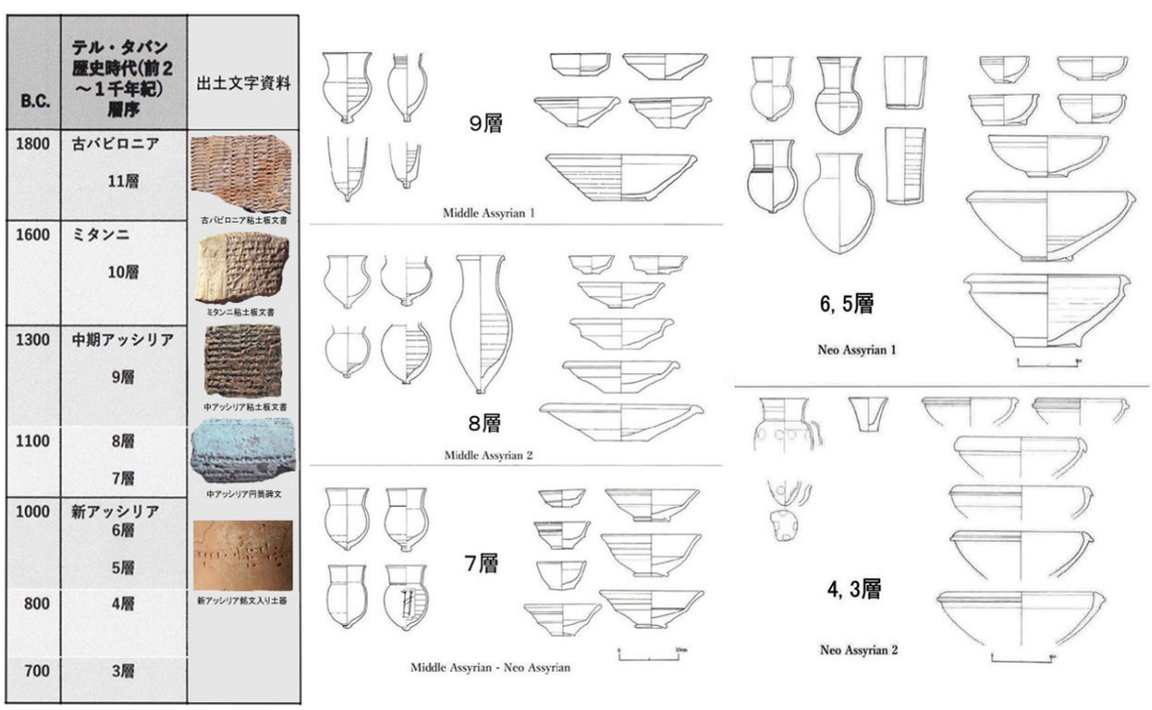


図 16　テル・タバンの歴史時代年表と中・新アッシリアの土器の変遷

最終末期に年代付けられ (図 16)、中期アッシリアと新アッシリアの過渡期に相当すると考えていたが、他遺跡からの類似品の出土例がこれまで殆どなかったため断定することができなかった。しかし、ドイツ隊が 2015 年から調査を行っているクルド自治区ドホーク県のティグリス川上流域にある拠点都市遺跡バッセトキ (Bassetki、古代名 Mardama) や、エスキ・モースルダム湖畔の遺跡から同タイプの土器が確認された (Pfalzner and Hasan 2018)。同隊の中期アッシリア土器分析担当者は、出土層序から中期から新アッシリアの過渡期に編年付け、タバンの 7 層出土土器も同時代に相当すると考えている。この調査成果により 7 層の土器は過渡期に属すことが明確になったと言えよう。

7 層の年代であるが、8 層建物が上述のアッシュル・ケタ・レシェル 2 世在位時の創建とすれば、8 層はティグラト・ピレセル 1 世治世時の前 12 世紀末から 11 世紀初頭頃に比定される (Shibata and Yamada 2009)。7 層建物は 8 層建物壁の日乾煉瓦残骸土の直上に築かれているが、残骸土層は自然崩壊によるものではなく人為的に破壊され、7 層建物を造るため地均した堆積状態を示している (図 5, 6)。この証拠から 8 層と 7 層には大きな時期差はないと判断できることや、6, 5 層の年代は出土土器から確実に新アッシリアの前 10 世紀後半から 9 世紀前半に位置付けられることから、7 層建物と土器及び土壙墓・副葬品は 8 層と 6 層の中間、前 11 世紀末期から 10 世紀初頭に年代付けられると推測する。

最後に副葬品の鉄製短剣についてであるが、北メソポタミアではヒッタイト帝国崩壊後の前 12 世紀以降から鉄生産が始まり、特に、ティグラト・ピレセル 1 世がトルコ東南部の主要な鉄鉱山を掌握してから盛んになったと考えられている (Haidar 2011)。しかし、首都アッシュール等の中期アッシリア遺跡からの鉄器出土の報告は未だなく、北メソポタミアでの鉄器の初出の年代は明らかになっていない。現状では新アッシリアの帝都ニムルドから出土した前 9 世紀初頭頃の鉄製品が、北メソポタミアでは最古とされている (Erb-Satullo 2019)。したがって、前 1000 年前後と推測するこの短剣を、北メソポタミア最古の鉄器と見做すことも可能ではなかろうか。

参考文献

Erb-Satullo,N.L. 2019:“The Innovation and Adoption of Iron in the Ancient Near East”, *Journal of Archaeological Research* 27, 557–607.

Haidar,D. 2011:“Assyrian Iron Working Technology and Civilization”, The University of Wisconsin-Madison, Website,1-20.

Numoto,H.(ed.)2008:“Excavations at Tell Taban, Hassake, Syria: Preliminary Report on the 2005 and 2006 Seasons of Excavations, and the Study of the Old Babylonian and the Middle Assyrian Texts”, Kokushikan University, pp.1–86 and pls.1–53.

Numoto,H.(ed.)2009:“Excavations at Tell Taban, Hassake, Syria: Preliminary Report on the 2007 Season of Excavations, and the Study of Cuneiform Texts”, Kokushikan University, pp.1-32, and pls.1-53.

Numoto,H., D.Shibata, and S.Yamada 2013:“Excavations at Tell Taban: Continuity and Transition in Local Traditions at Ṭābatum/Ṭābetu During the Second Millennium B.C.,” in: D. Bonatz and L. Martin (eds.), *100 Jahre archäologische Feldforschung in Nordost-Syrien*, Harrassowitz, 167–179.

Ohnuma,K., H.Numoto, and Y. Okada 1998: “Excavations at Tell Taban, Hassake, Syria: Report of the 1997 Season of Work”, *al-Rafidan* 20, 1–47.

Ohnuma,K., H.Numoto, and M.Shimbo

1999:“Excavation at Tell Taban, Hassake, Syria (2): Report of the 1998 season of Work”, *al-Rafidan* 21, 1–50.

Ohnuma,K.and H.Numoto 2000:“Excavation of Tell Taban, Hassake, Syria (3): Report of the 1999 Season of Work”, *al-Rafidan* 22, 1–63.

Pfalzner,P.and A.Hasan 2018:“Urban Developments in Northeastern Mesopotamia from the Ninevite V to the Neo-Assyrian Periods. Excavtions at Bassetki in 2017”, *Zeitschrift fur Orient Archaologie* 11,42–87.

Shibata,D.and S.Yamada 2009: “The Cuneiform Texts from the 2007 Excavations at Tell Taban: A Preliminary Report” Excavations at Tell Taban, Hassake, Syria: Preliminary Report on the 2007 Season of Excavations, and the Study of Cuneiform Texts”, in: H. Numoto(ed.)2009, Kokushikan University, 87-109.

沼本宏俊　2009:「アッシリア帝国の拠点遺跡－シリア、テル・タバン遺跡の第 8 次発掘調査 (2008 年) －」『考古学が語る古代オリエント第 16 回西アジア発掘調査報告会報告集』64 － 69 頁、日本西アジア考古学会。

ラガシュ（ギルス）出土の エ・ミ文書から読み取れる園丁組織

唐橋 文
中央大学文学部

紀元前 3 千年紀末、ウル第三王朝の始祖ウルナンマは、「果樹園（$^{giš}kiri_6$）を造り、王の園丁（šandana）を配置した」（ll. 158-161）と『ウルナンマ法典』序文に記す（Frayne 1997: 49）。国の制度や設備を整えた一連の記述の中にこれが特筆されているということは、果樹園とその管理運営に携わる人々が社会においてかなり重要な役割を果たしていたということが言えるであろう。

本研究は、都市の風景の一部として、植物の占める空間、すなわち、果樹園や庭園、および、それらを管理運営する園丁などが、どのような社会的・経済的機能を果たしていたのかという大枠の中で、ラガシュ第一王朝時代に遡るエ・ミ文書から当時の園丁組織の概容を明らかにすることを目的とする。現在まだ考察途上にあるこの研究テーマの中間的なレポートとして本稿を提出したい。

1. 文学テキストにおける果樹園と園丁

エ・ミ文書の考察に入る前に、古代メソポタミアの文学テキストが果樹園や園丁をどのように描いているのか、その中のいくつかを以下に概観したい。

1.1. 果樹園

1.1.1. ウルクの王ギルガメシュは、永遠の命を求める旅から、目的を果たせないまま帰途につくのであるが、故郷に送り返してくれた舟師ウルシャナビに、ウルクの城壁に上り、城壁の素晴らしさをとくと見よと言う（標準バビロニア語版『ギルガメシュ叙事詩』11 書板）。A. George（2003: 446）が指摘するように、この呼びかけによって、聴衆（と読者）の視点も城壁の上に引き上げられる。そして、ギルガメシュは、城壁から眼下に見えるウルクの風景を次のように描写する。

> ウルクの町 1 シャル、果樹園 1 シャル、粘土をとる低地 1 シャル、イシュタル神殿半シャル。ウルク、（その）規模 3 シャル半。（George 2003: 724-5）

この描写から、「町」（居住地区）（*ālu*(uru)^{ki}）や「果樹園」（*kirātu*($kiri_6$)^{meš}）、粘土を取る空き地、イナンナ神殿が城壁の中に位置していたことが読み取れるであろう (新バビロニア時代の 1 シャルは約 3.9 平方キロメートルに相当)。

1.1.2. シュメール語で記された『ギルガメシュ・エンキドゥ・冥界』では、ウルクの果樹園から物

語が展開する。すなわち、イナンナ女神はユーフラテス河畔からオークの若木をウルクに持ち帰り、果実が宝石のように輝く自分の「きらめく果樹園」（^{giš}kiri$_6$ gi-rin）（l. 35）に植え、丹精込めて育てるのであった（ll. 34-37）[1]。（ギルガメシュはこの木を切って、女神に木材をプレゼントした後、余った部分から球と打球槌を作って、若者を相手に遊び呆ける。それに困った人々の嘆きから、遊び道具が冥界に落ちてしまい、ギルガメシュが泣き悲しむ。そこでエンキドゥがそれらを拾うために冥界に下り、捕らえられてしまう。）

1.2. 園丁

1.2.1. ギルガメシュは、イシュタル女神の求婚を拒絶する際に、イシュタル女神の不幸な愛人の中に「園丁」（^{lu}$_2$*nukarribbu* (nu.^{giš}kiri$_6$)）イシュラーヌを挙げている（『ギルガメシュ叙事詩』6 書板）。

> あなたはまた、あなたの父の園丁イシュラーヌを愛した。
> 彼はたえずあなたのため、椰子の葉で編んだ籠を担ぎ、
> 日毎、あなたの食卓を輝かせていた。（月本 1996: 71-72）

このエピソードは、菜園の世話をするシュカレトゥダが、木陰で眠っているイナンナ女神を強姦して彼女の怒りを買い、彼女に殺害されるというシュメール語神話『イナンナ女神とシュカレトゥダ』に言及していると考えられる（Volk 1995: 56）。

1.2.2. シュメール王名表は、アッカド王朝の始祖サルゴンの父親を「園丁」（nu-kiri$_6$）[2] とする（ll. 266-267）[3]。アッカド語で記された『サルゴン誕生伝説』では、サルゴン自身が園丁とされる。すなわち、「水汲み人」“water-drawer”（lu$_2$.a.bal）が瀝青を塗った葦のカゴを川辺で見つけ、その中の赤子を拾って育てる。サルゴンは成長して養父を助ける「園丁」となり、イシュタル女神の寵愛を得る（Goodnick Westenholz 1997: 40-41）。

2. エ・ミ文書における果樹園関連テキスト

2.1. 本研究では、オオムギの支給、ウールの支給、ババ女神祭りにおける食べ物・飲み物や塗油用の油の支給、果樹の納入、耕地の割り当て、人員の分配等、「果樹園」（kiri$_6$）と「園丁」（nu-kiri$_6$）に言及する文書を果樹園関連テキストと見なす。それらのテキストは、数に差はあるが、都市国家ラガシュの最後三代の支配者とその妃たち（エンエンタルジと妃ディムトゥル、ルーガルアンダと妃バラナムタラ、ウルカギナと妃ササ）の治世に年代づけられる[4]。

2.2. エ・ミ文書において、果物（ナツメヤシ、リンゴ、イチジク；ワインも含む）が献げられたり、支給されたりするのは、神々（e.g., DP 196）、王家の祖先（e.g., RTC 60）、高い位にある人々（e.g., RTC 61）などに限られている。それらの果物はエ・ミ文書の園丁たちによって供給された。彼らは果樹園でどのような作業をしていたのであろうか。文書はそれを詳述する

1　テキストは A. Gadotti 2014; ETCSL 1.8.1.4 を参照；しかし、ll. 34-37 の解釈は Civil: forthcoming に従う。
2　ePSD は nu-kiri$_6$ に “gardener” または “horticulturalist” という訳語を当てている。
3　ETCSL 2.1.1.
4　本研究で用いるテキストは Cuneiform Digital Library Initiative (CDLI) https://cdli.ucla.edu でアクセス可能。

ことはしないが、その文言と内容から、彼らが果樹だけでなく、木材となる樹木も管理していたことが明らかにされている（Selz 2011）。

2.3. テキスト（e.g., DP 107）は、「ラガシュの果樹園」（kiri$_6$ Lagaš^{ki}）や「ギルスの果樹園」（kiri$_6$ Gir$_2$-su^{ki}）などに言及するが、それらの地点をラガシュやギルスの遺跡地図に書き入れることはできない。「何某の果樹園」（kiri$_6$ PN）というように園丁の名前（PN）で呼ばれる果樹園（e.g., Nik 1, 280）も、その地点を同定することはできない（Prentice 2010: 25）。また、kiri$_6$ id$_2$ LAK175-ka という果樹園（e.g., DP 105）は、ある水路（id$_2$）[5] の近くに位置していたと想定されるが、やはりそれ以上はわからない。

3. エンエンタルジ・ディムトゥルの時代

エンエンタルジと妃ディムトゥルの時代に遡る果樹園関連テキストは非常に少ないため、園丁についての情報は限られるが、次の２点が興味深い[6]。

- TT 5, 9243（エンエンタルジ 2 年）は、「神の園丁たち」（nu-kiri$_6$ dingir-ra-me）と「エンシの園丁たち」（nu-kiri$_6$ ensi$_2$-ka-me）が、それぞれナツメヤシ（zu$_2$-lum）やその他の果物（果物名破損）とワイン（geštin）を収めたことを記録している。
- エンエンタルジの息子 Ur-tar-sir$_2$-sir$_2$ の「人員」（lu$_2$ u$_2$-rum）へのウールの支給を記す DP 173（エンエンタルジ 3 年）と VS 14, 86（エンエンタルジ 4 年）は、それぞれ 6 人の園丁に言及する（名前の明記はない）。

4. ルーガルアンダ・バラナムタラの時代〜ウルカギナ・ササの時代

4.1. ルーガルアンダ 1 年の文書に見られる果樹園の作業チームは、（例外はあるが）通常園丁 1 名をリーダーとし、その下に「盲人」（igi-nu-du$_8$）と「水量調節係」とも呼べる作業員 “openers of the ‘regulators’ of a water (conduit)”[7]（kak-a-ku$_5$）を配置する。これらの「盲人」（igi-nu-du$_8$）と「水量調節係」（kak-a-ku$_5$）がひとまとめに「木（に関わる作業）の盲人たち」（igi-nu-du$_8$ giš-me）とオオムギ支給リストで呼ばれている。おそらく「水量調節係」（kak-a-ku$_5$）（の一部）も盲人であった可能性が高い。この組織形態が、拡大したり縮小したりしながら、ウルカギナ 6 年末まで継続した。

4.2.「盲人・運搬人・個別に登録された人々へのオオムギ支給」（še-ba igi-nu-du$_8$ il$_2$ ša$_3$-dub-didli）を記すオオムギ支給タイプ II 文書（Maekawa 1973-74: 92）とババ女神の祭りの支給リストから、チームリーダーの園丁たちの名前と在職の期間、各年のチーム数をまとめると、表 1 のようになる（関連文書が現存しない年は空白）。

- オオムギ支給のタイプ II リストでは、園丁たちは、表 1 で示された順番（上から下へ）

5　初期王朝時代のラガシュ、ウンマ、ザバラン、バドティビラ周辺の水路網については、Rey 2016: 45 fig. 19 参照。

6　その他の文書は、BIN8, 347（エンエンタルジ 2 年、園丁 2 人にエンマーコムギ支給）と VS 25, 86。

7　Civil: forthcoming に従う。

で登場する。

- Dingir-a-mu、E_2-ku_4、E-ta-e_{11}/Lugal-e-ni-$še_3$、Ur-ki はルーガルアンダとウルカギナの両治世をまたいで継続している。ある時点で Lugal-e-ni-$še_3$ が E-ta-e_{11} を引き継いだが、支給リストの順番に変化はない。
- Dingir-a-mu は、ウルカギナ・ルーガル 6 年第 11 支給（11ba）リストと第 12 支給（12ba）リストに言及される唯一の園丁である。E_2-ku_4、Lugal-e-ni-$še_3$、Ur-ki、En-kisal-si も同年の第支給リスト（8ba）に言及されているが、同年第 9 支給リストと第 10 支給のリストが現存しないため、どの時点で彼らがリストから消えたのはわからない。いずれにしても、園丁の率いるチーム数は 5 から 1 に激減した（Prentice 2010: 24-25）。

4.3. 表 2 は、オオムギ支給のタイプ II リストを用いて、それぞれの園丁が何人の「盲人」（A）と「水量調節係」（B）、および、稀に園丁（C）[8] を率いているかをまとめたものである（表の中の括弧に入った数字は、各人が受け取るオオムギの量をシラ単位で表したもの）。

- それぞれのチームリーダーが率いる「盲人」（A）と「水量調節係」（B）の数はある程度一定している。Dingir-a-mu のチームにのみ 2~3 人の園丁（C）が含まれる。
- 果樹園で作業をする人員は 40 人代で推移するが（表 2-1、2-3、2-4）、ウルカギナ・ルーガル 2 年第 8 支給リスト（表 2-2）で 58 人を数え、その後もしばしば 50 人を越えている。しかし、ウルカギナ・ルーガル 6 年第 11 支給リストと第 12 支給リストでは、12 人に激減している（表 2-5）。
- 「盲人」へのオオムギの支給量が、ある時点で 48 シラから 36 シラに減少した。現存する文書の中で、それを示す最も早い文書が DP 115（表 2-4）である。

表 1 園丁の名前と在職が証明されている年

園丁の名前	在職が証明されている年												
	ルーガルアンダ治世						UE	ウルカギナ・ルーガル治世					
	1	2	3	4	5	6	1	1	2	3	4	5	6
Dingir-a-mu	+		+			+	+	+	+	+	+	+	$+_{12ba}$
E_2-ku_4	+		+			+	+	+	+	+	+	+	$+_{8ba}$
E-ta-e_{11}	+		+			+	+	+	+	+	+		
Lugal-e-ni-$še_3$												+	$+_{8ba}$
Ur-ki	+		+			+	+	+	+	+	+	+	$+_{8ba}$
En-kisal-si						+	+	+	+	+	+	+	$+_{8ba}$
Nimgir-abzu									+	+	+	+	
$Ur\text{-}tul_2$									+	+			
Za_3-mu									+	+			
チーム数	4		4			5	5	5	8	8	6	6	5_{8ba}; 1_{12ba}

UE = ウルカギナ・エンシ（ウルカギナがエンシのタイトルを用いた年）
ウルカギナ・ルーガル（UE の後、ウルカギナはタイトルをルーガルとした）

8　チームリーダの「園丁」と同じ職名であるが、そのランクが異なる。

表 2-1

Type II	Dingir-a-mu	E_2-ku_4	E-ta-e_{11}	Ur-ki	En-kisal-si	計	計 (A+B+C)
VS 25 71 L6.9ba	A: 8 (48)	9 (48)	8 (48)	5 (48)	5 (48)	35	42
	B: 1 (48)	1 (48), 1 (36)	1 (36)	1 (48), 1 (36)	1 (36)	7	
	C: Ø					0	

表 2-2

Type II	Dingir-a-mu	E_2-ku_4	E-ta-e_{11}	Ur-ki	En-kisal-si	Nimgir-abzu	Ur-tul_2	Za_3-mu	計	計 (A+B+C)
DP 113 UL2.8ba	A: [8] (48)	8 (48)	6 (48)	[7] (48)	5 (48)	6 (48)	2 (48)	4 (48)	46	58
	B: [1] (36)	1 (48), 1(36)	1 (36)	1 (48), 1 (36)	1 (36)	1 (36)	1 (36)	Ø	9	
	C: 3 (48)								3	

表 2-3

Type II	Dingir-a-mu	E_2-ku_4	E-ta-e_{11}	Ur-ki	En-kisal-si	Nimgir-abzu	計	計 (A+B+C)
TSA 14 UL4.4ba	A: 8 (48)	8 (48)	5 (48)	6 (48)	5 (48)	3 (48)	35	45
	B: 1 (36)	1 (48), 1 (36)	1 (36)	[2 (36)]	1 (36)	1 (36)	8	
	C: 2 (36)						2	

表 2-4

Type II	Dingir-a-mu	E_2-ku_4	Lugal-e-ni-$še_{11}$	Ur-ki	En-kisal-si	計	計 (A+B+C)
DP 115 UL6.3ba	A: 12 (36)	6 (36)	5 (36)	6 (36)	4 (36)	33	42
	B: 1 (36)	2 (36)	1 (36)	2 (36)	B: 1 (36)	7	
	C: 2 (36)					2	

表 2-5

Type II	Dingir-a-mu	計	計
HSS 3, 18 UL6.12ba	A: 12 (36)	12	12
	B: Ø	0	
	C: Ø	0	

A: igi-un-du_8「盲人」; B: kak-a-ku_5「水量調節係」; C: un-kiri$_6$「園丁」;
L*n*：ルーガルアンダ *n* 年
UL*n*：ウルカギナ・ルーガル *n* 年
*n*ba = 第 *n* 支給

・ ウンマ / ウルクの支配者ルーガルザゲシによってもたらされたウルカギナ治世末の政治的・軍事的危機（Bartash 2020: 553）が、人員とオオムギ支給量の削減に反映していると考えられる。

4.4. 作業チームで働く人々のオオムギ支給がタイプ II リストに記されるのに対し、チームを率いる園丁たちのそれはタイプ I リスト「割当地を保有する人々へのオオムギ支給」（še-ba lu_2 šuku-dub_5-ba）に記される（Maekawa 1973-74: 88-92）。タイプ I リストにおいて、園丁たちは、名前と職業を明記する記入方法によってではなく、各人が受け取る量とその人数の後に、名前なしでまとめて「園丁たち」（nu-kiri$_6$-me）と記されている（e.g., HSS 3, 6）。

4.5. ウルカギナ・ルーガル 4 年の文書 DP 339 は、ウルカギナが、「イリアズの出身者たち」（dumu Iri-az^{ki}-ka-me）である盲人 12 名を王宮の管理から

妃ササの管理に移し、園丁たちに分配することが記されている（rev. ii 1-iii 5）。妃ササの盲人 3 名、王女 $Geme_2$-^{d}Ba-ba の盲人 3 名、王女 $Geme_2$-tar-sir_2-sir_2 の盲人 3 名、王子 A-en-ne_2-ki-ag_2 の盲人 3 名は、それぞれ園丁 Dingir-a-mu、E_2-ku_4、Lugal-a-ni-$še_3$、Ur-ki の配下に組み入れられた[9]。すなわち、王家のメンバーはそれぞれ果樹園を所有し、その係りの園丁が配下の盲人労働者を使って手入れをしていたことが読み取れる。「王子・王女へのオオムギ支給」（še-ba lu_2-di_4-di_4-la-ne）を記録するタイプ IV リストも、王女 $Geme_2$-^{d}Ba-ba の園丁を E_2-ku_4、王女 $Geme_2$-tar-sir_2-sir_2 の園丁を Lugal-a-ni-$še_3$、王子 A-en-ne_2-ki-ag_2 の園丁を Ur-ki と記している（これらの園丁に関しては表 1 を参照）。

4.6. 今後は以下のような点を中心に資料の収集・分析を進めていきたい。

- オオムギ支給のタイプ I、II、IV リストに言及される園丁と彼らの作業チームに関する整合性
- 土地割当文書における園丁たちの記録
- 果樹園の名称
- 園丁によるエ・ミへの果物納入
- 木材の取り扱い
- いわゆる「gar リスト」における園丁たち
- その他の文書における園丁たち

以上のような点を含めて、エ・ミ文書に記された園丁たちと作業チームがどのように組織され、どのような社会的・経済的役割を果たしていたかを総合的に考察していく予定である。

参考文献表

Bartash, Vitali. 2020. The Early Dynastic Near East. Pp. 531-611 in *The Ancient Near East: From the Beginnings to Old Kingdom Egypt and the Dynasty of Akkad*, ed. Karen Radner, Nadine Moeller, and Daniel T. Potts. Oxford: Oxford University Press.

Civil, M. forthcoming. "'*Watering by Foot': GEN 36-37 and Parallels*."

Frayne, Douglas R. 1997. *Ur III Period (2112–2004 BC)*. RIME 3/2. Toronto: University of Toronto Press.

Gadotti, Alhena. 2014. "*Gilgamesh, Enkidu, and the Netherworld" and the Sumerian Gilgamesh Cycle*. Untersuchungen zur Assyriologie und Vorderasiatischen Archäologie, Band 10. Boston and Berlin: De Gruyter.

George, Andrew R. 2003. *The Babylonian Gilgamesh Epic: Introduction, Critical Edition and Cuneiform Texts*. 2 vols. Oxford: Oxford University Press.

Goodnick Westenholz, Joan. 1997. *Ledgends of the Kings of Akkade*. Winona Lake, IN.: Eisenbrauns.

Maekawa, Kazuya. 1973-74. The Development of the é-mí in Lagash during Early Dynastic III. *Mesopotamia* 8-9: 77-144.

Prentice, Rosemary. 2010. *The Exchange of Goods and Services in Pre-Sargonic Lagash*. AOAT 368. Münster: Ugarit-Verlag.

Rey, Sébastien. 2016. *For the Gods of Girsu: City-State Formation in Ancient Sumer*. Oxford: Archaeopress.

Selz, Gebhard J. 2011. Zur Holzwirtschaft im altesumerischen Lagaš. Pp. 213-246 in U_4 DU_{11}-GA-NI SÁ MU-NI-IB-DU_{11}: *Ancient Near Eastern Studies in Memory of Blahoslav Hruška*, ed. L. Vacín. Dresden: ISLET-Verlag.

Volk, Konrad. 1995. Inanna und Šukaletuda: *Zur historisch-politischen Deutung eines sumerischen Literaturwerkes*. SANTAG 3. Wiesbaden: Harrassowitz.

月本昭男 1996『ギルガメシュ叙事詩』岩波書店 .

9　盲人は「園丁何某とともに生活する」（PN nu-$kiri_6$-da e-da-se_{12}）と表現されている。

エマル文書における「主」とは誰か

山田雅道
中央大学文学部

I. はじめに

エマル文書[(1)]には、人が自分の「主」(*bēlu*) に対して罪を犯したため、その罰としてエマルの市神たるニヌルタが彼の不動産ないし遺産相続分を没収したと述べる文書が少なくとも 7 点存在する。さらにこのうち 6 点では、同神と市の長老たち —— 以下、筆者は両者を合わせて「市当局」と呼ぶ —— がそれを売却している。他方、人が自分の「市」と「主」に対して勲功をあげたため、その褒賞として王とエマル市が彼の子孫を神殿祭司その他聖職に任命したと記す文書も 1 点認められる。功罪ともにおそらく同じ「主」を指すものと思われるが、いずれの場合もそれが具体的に誰を指すのかがテクスト中に明示されず、エマル文書出版以来の問題となってきた。

もっとも文脈上、同定の可能性が高いのはエマル王と市神ニヌルタの 2 者に限られ、実際に彼らは他のエマル文書において、それぞれ一度はエマル人の「主」と呼ばれている。前者に関し、*Emar* VI 17 (S = シリア型) を見てみよう。

[1] *i-nu-ma*! [m]*zu-aš-tar-ti*! ˹DUMU˺ [d]IM-GAL [2] LUGAL URU.*e-mar*.KI *i-na* ŠÀ-*bi* URU.*e-mar*.KI [3] ÉRIN.[M]EŠ URU.*e-mar*.KI *ḫu-up-šu* [4] ˹*ù*˺ LÚ.MEŠ.*AḪ*.ḪÁ *ša* LUGAL-*ri* [5] *ša* ZAG ZABAR *a-na* UGU-*ḫi* LUGAL!-*ri na-šu* [6] *ki-iṣ-ra ir-ku-šu-ma* [7] *a-na* UGU-*ḫi be-li-šu-nu*

[d]IM-kabar の息子、エマル王 Zu-Aštarti がエマル市内にいた時、王に対し軍役を果たしていた (直訳：青銅の槍を担っていた) エマル市の軍勢、*ḫupšu* および王の「兄弟たち」は、彼らの主 (君) に対し (反乱) 勢力を形成した[(2)]。

1　本稿で使用する文献略号は the Cuneiform Digital Library Initiative (http://cdli.ox.ac.uk/wiki/abbreviations_for_assyriology) に従うが、エマル史料 (文書と印影) に関しては以下の略号を使用する：***ASJ* 12-T** = Tsukimoto 1990; ***ASJ* 13-T** = idem 1991; ***AuOr* 5-T** = Arnaud 1987; ***BLMJE*** = Westenholz 2000; ***Emar* IV** = Beyer 2001; ***Emar* VI** = Arnaud 1985–86; **LN-104** = Cohen and Viano 2016; ***RE*** = Beckman 1996; ***TS*** = Arnaud 1991; ***ZA* 107-T** = Endesfelder 2017.

2　D. アルノー訳 (Arnaud 1985–86/3, 27) に準ずる。文法的には「[d]IM-kabar の息子 Zu-Aštarti がエマル王であった時、王に対し軍役を果たしていたエマル市の軍勢、*ḫupšu* および王の『兄弟たち』は、エマル市内において彼らの主君に対し (反乱) 勢力を形成した」も可。しかし *Emar* VI 17 の第一証人が Zu-Aštarti 王 (41 行) 本人であるので、これが彼の同時代文書であることは疑いえない。よって筆者はこの回顧的な訳を採らない。

後者に関しては、*BLMJE* 24 (H = シリア・ヒッタイト型) においてエマルの有名な内臓占い師 Zu-Baʿla の直系の孫でその家の当主 ^{d}IM-malik が次のように述べている。

[1] *a-na-ku* ^{md}IM-*ma-lik* [2] *a-na* ^{d}NIN.URTA EN-*ia* SISKUR.MEŠ [3] *ak-ta-ra-ab-me*
私、^{d}IM-malik は我が主ニヌルタ神に捧げ物を捧げた。

本稿では、上記合計 8 文書に 3 点を加えた史料 (全て S) の分析を通してエマル文書における問題の「主」とは誰かについて考察し、筆者なりの合理的解答を示したい。

II.「主」に対する罪

1. 史料

「主」に対する罪を扱う場合、私見によればこれに関係するエマル文書は最大で 10 点を数える。それらを文書の類型に従って分類すれば、以下の通り。

(a) 不動産売買契約：*ASJ* 12-T 7: 9–11; *Emar* VI 1: 11–16a; 144: 10–13; *RE* 16: 10–14; 34: 10–13; *TS* 13: 9–12; また cf. *Emar* VI 11: ?–21a; 145: 1′–4′ (断片)
(b) 遺言書：*Emar* VI 197: 13b–17, 19′–21′a
(c) 不明：*Emar* VI 154: 5′–7′a? (断片)

大多数を占める (a) には、本稿冒頭で触れた 6 点の他、「罪」への言及はあるが「主」へのそれを欠く *Emar* VI 11 と両語への言及を欠く断片 *Emar* VI 145 を加えた。*Emar* VI 11 と同様の (c) の断片 *Emar* VI 154 もまた、本来はこの種の文書であったのではないかと推察される。不完全ながらも元々は両語への言及を含んでいたものと判断して、以下、これら 3 文書も参考史料として使用したい。残る *Emar* VI 197 のみが (b) 遺言書という全く別の文書類型に属すものの、以下に示すように問題となる没収の箇所は (a) と並行的である。まずは (a) から *TS* 13 の該当箇所を引用しよう。

[8] KI *er-ṣe-tu*$_4$ *ša* ^{m}*sú-li-mu* DUMU *a-ḫi-mì* [9] *ḫi-ṭá* KALA.GA *a-na* UGU-*ḫi be-li-šu* [10] *i-pu-uš ki-ma* [11] *ḫi-ṭì-šu* ^{d}NIN.URTA [12] KI *er-*^{r}*ṣe*^{1}*-tu*$_4$ *il-qè* [13] KI ^{d}NIN.URTA *ù* LÚ.MEŠ.*ši-bu-ut* URU.*e-mar*.KI [14] *be-lu-ú* KI *er-ṣe-ti* [15] ^{m}*ḫa-a-ia* DUMU *i-*^{r}*túr-*^{d}KUR^{1} DUMU *nu-ka*$_4$*-ri* [16] *a-na* 51 GÍN *ṣár-pu* [17] ŠÁM TIL.LA [18] KI *er-ṣe-tì* [19] *i-ša-am*
(この) 地所 (/ 廃屋)[(3)] は Aḫi-mi の息子 Sulimu のものであった (が)、彼は彼の主に対して大罪を犯した。彼の罪故にニヌルタ神は (この) 地所を取 (り去) った。(この) 地所の所有者たるニヌルタ神とエマル市の長老たちから、Nukaru の息子 Itur-Dagan の息子 Ḫaya は全額精錬された (銀) 51 シクルで (この) 地所を買った。

(a) におけるテクストの異同については後で触れることにして、(b) の *Emar* VI 197 から該当する 2 箇所を抽出すれば以下の通り。

[^{m}DINGIR-*lu*$_4$*-ba-ni*] [14] *ḫi-ṭá-am a-na b*[*e-li-šu*]

3　エマル (およびエカルテ) 文書における特殊用語 KI = *erṣetu* (直訳：地) に関しては、先行研究を含め Yamada 2017, 125–126 参照。

[15] *e-pu-uš ki-*[*mu-ú ḫi-ṭì-šu*] [16] *ša* ⌜*e-pu*⌝*-u*[*š*] [17] [Ḫ]A.LA-[*šu* [d]NIN.URTA *il-qè*] [18] x […][(4)] (欠損) [19′] [x] x […] x [20′] *ḫi-ṭá a-na b*[*e-li-šu e-pu-uš ki-m*] *u*[!]*-ú* [21′] *ḫi-ṭì-šu* ḪA.LA-*šu-*⌜*ma* [d]⌝N[IN.URTA *il-q*]è DUB-⌜*pa*⌝ [22′] *ša* [m]DINGIR-*lu*$_4$*-ba-ni ú-*<*uḫ*>*-ta-ap-pí*

[(我が息子) Ilu-bani は彼の] 主に対して罪を犯した。彼が犯し [た罪] 故 [にニヌルタ神は彼の相] 続分を [取 (り去) った]。[…]。 (欠損) [… 彼は彼の] 主に対して罪を [犯した]。彼の罪 [故] にニ [ヌルタ神は] 彼の相続分を [取 (り去)] り、Ilu-bani の (相続分を定めた) 文書を壊した [(5)]。

Ilu-bani はおそらく遺言者 Ikun-ra (1 行) の息子の一人であろう。*Emar* VI 197 は、この遺産相続予定者が罪を犯した結果、彼の相続分がニヌルタ神によって没収され、相続権も正式に抹消されたことを記す。

以下、(a) の残りと (c) の文書中、「没収」部分のテクスト翻字を列挙する。*TS* 13 におけると同様、前者では全文書において市当局による不動産売却の記事がこれに続く [(6)]。

ASJ 12-T 7a (= 1–20 行)：[9] [m]⌜[d]⌝[IM-*g*]*a-mil ḫi-ṭá* KALA.GA$_{14}$ *dá-an-na* [10] *a-na b*[*e-l*]*i-šu i-pu-uš ki-mu-ú ḫi-ṭì-šu* [11] *ša* ⌜*i*⌝-[*p*]*u-uš* [d]NIN.URTA É.Ḫ*Á-šu il-qè*

Emar VI 1: [11] [m]*il-l*[*a-t*]*i ḫi-ṭám* K[ALA(.GA)] [12] *a-na be-*⌜*li*⌝*-šu* [*i-pu-uš*] [13] *ki-mu-ú ḫi-ṭí* [14] *ša i-pu-*⌜*šu*⌝ [15] [d]NIN.URTA GIŠ.K[IRI$_6$.GEŠTIN] [16] *il-qè*

Emar VI 144: [10] [m]*ir-i-bu ḫi-ṭá* KALA[?] ⌜*a*⌝-[*n*]*a be-l*[*i*]*-š*[*u* (Ø)] >AŠ< [11] *i-pu-uš ki-mu-ú* [12] *ḫi-ṭì-šu ša i-pu-uš* [13] [d]NIN.URTA É *tu-ug-gu*$_8$*-rù* ⌜*il-qè*⌝

RE 16: [10] [m]*a-*⌜*mur*⌝*-ša ḫi-ṭám dan-*⌜*na*⌝ [11] *a-na be-li-šu ù* URU.*e-mar*.KI [12] *i-pu-uš ki-mu-ú* ⌜*ḫi*⌝*-ṭì-šu* [13] *ša i-pu-uš* É.ḪÁ ⌜A.ŠÀ.ḪÁ⌝ [14] *a-na* [d]⌜NIN⌝.URTA ⌜*id*⌝-*d*[*i-i*]*n*

RE 34: [10] *ḫi-ṭám a-na* URU.KI-*šu ù be-li-šu* [11] *i-pu-uš ki-mu*[!] *ḫi*[!]*-ṭi-šu* [12] *ša i-pu-šu* É-*šu* [13] [d]NIN.URTA *il-qè*

Cf. *Emar* VI 11: […] [19] [*ki-m*]*a* ⌜*ḫi-ṭì*⌝-[*šu*] [20] [[d]N]IN.URTA[!] GIŠ.KIR[I$_6$.GEŠTIN] [21] [*i*]*l-qè*

Cf. *Emar* VI 145: (欠 損) [1′] KI-*t*[*u*$_4$ …] [2′] *ša* […] [3′] [d]NIN.U[RTA …] [4′] *il-*[*qè* (Ø)]

Cf. *Emar* VI 154: [5′] [*ù* [md]I]M-*ma-lik ḫi-ṭ*[*á* …] [6′] [*ki-mu*]*-ú ḫi-ṭì-šu* x […] [7′] [x x] x x [m]*i-ni-*[…] (欠損)

4 18 行は ⌜KI[?]⌝ [[d]NIN.URTA[?] …]「[ニヌルタ神とエマル市の長老たちか] ら (?)」と復元しうるが、以下で説明するように筆者はこれを採らない。

5 Cf. “La tablette (筆者注：アルノーの読みは *ṭup-pí*) d’Ilu-bani a été <b>risé” (Arnaud 1985–86/3, 208). しかしそれならば文法的には DUB-*pu* (nom.) が期待されるが、ハンドコピー (op. cit./1, 129 [Msk. 731051]) を見る限り、-⌜*pu*⌝ と読むことは困難である。ちなみに動詞は文法的に *uḫtappi* (*ḫepû* D pf. 3.sg.) で間違いあるまいが、もしもその綴り *ú-ta-ap-pí* が実際の発音 (/uḫtappi/ > /uʾtappi/ >) /ūtappi/ を反映しているのであれば、*-uḫ-* の補いは不要となる。

6 ただし表現上、唯一の例外が *RE* 34 に認められる。そこでニヌルタ神とペアを組む売却者は、通常の [lú.meš]*šībūt* [uru]*Emar*[ki]「エマル市の長老たち」(例えば上記 *TS* 13: 13) ではなく、[lú.meš]*rabût*(GAL.GAL) [uru]*Emar*[ki]「エマル市の大人(たいじん)たち」(14–15 行) とされている。これを素直に捉えれば両者は同一団体を指す別表現と見なされようが、この件に関しては本稿末で触れる。なお (a) に属する断片 *Emar* VI 145 に関し、下記引用部分に続く 5′ 行が KI [d]N[IN.URTA …]「ニ [ヌルタ] 神 [とエマル市の長老たち (?)] から」であるので、市当局が没収した地所 (KI = *erṣetu*) の売却は確実と思われる。

ここでテクストの異同に関し、以下の 3 点が注目される。

(1) 罪の表現：*ḫīṭa*(*m*)「罪」(*Emar* VI 197: 14, 20′; *RE* 34: 10; cf. also *Emar* VI 154: 5′) と *ḫīṭa*(*m*) KALA(.GA/GA_{14})/*danna*「大罪」(*ASJ* 12-T 7: 9; *Emar* VI 1: 11; 144: 10; *RE* 16: 10; *TS* 13: 9) の 2 種類が認められる。しかし実質的な意味上の違いがあるのかは疑わしい。「罪」の具体的な内容については記載が一切なく、不明である。

(2) 罪を犯した相手：通常の *bēlišu*「彼の主」単独以外に、*bēlišu u* ^{uru}*Emar*^{ki}「彼の主とエマル市」(*RE* 16: 11) および *āli*^{ki}*-šu u bēlišu*「彼の市と彼の主」(34: 10) が認められる。「エマル市」と「市」が同一であることは言うまでもないが、これらの異形については以下で扱う。

(3) 没収の表現：通常の ^{d}NIN.URTA *ilqe* (罪人の不動産 / 遺産相続分を)「ニヌルタ神は取 (り去) った」(例えば上記 *TS* 13: 11–12) に代わり、唯一 *RE* 16: 14 では *a-na* ^{d}NIN.URTA *idd*[*i*]*n* (家々と耕地を)「彼 (罪人)[7] はニヌルタ神に与 [え] た」となっている。これは、同じ没収行為を単に主語を変えて表現し直したものと考えられる。何らかの特別な見返りでもない限り、自分の財産を自発的に差し出す者など、エマルをはじめ古代西アジアには皆無であったろうからである。

2. 考察：「主」の同定

これらのテクストに言及された「主」に関し P. シュタインケラーは、ウガリトを例に取り、上記エマル文書における「主」とは同国の最終的な土地所有者としてのエマル王 (ないしカルケミシュ王) 以外ではありえないと主張した (Steinkeller 1999, 314–315 n. 22)[8]。これに対し J. D. シュレンは、たしかにウガリトとアララハの王はそのような存在であったとしながらも、同じ前 2 千年紀後半のシリアでもエマルについては判断を保留する (Schloen 2001, 230–231, 309–310)。しかしシュタインケラー説がそもそも通用しないことは、罪人の財産没収者が市神「ニヌルタ」であるという事実によって明らかである。彼の主張が成り立つためには、ここは当然「(エマル) 王」でなければなるまい[9]。この点において彼の議論は自己撞着的である。また M. R. アダムスウェイトはこの「主」を、王ではなく罪人が個人的に仕えていた主人、「無名の私人」(unnamed private person) であったとする (Adamthwaite 2001, 91ff., esp. 97)。しかしそれならば被害を被ったその「主人」(master) に対し何らかの補償がなされるべきであろうが、ここにはそれが皆無である。

そこで逆に没収者が「ニヌルタ神」であることから出発すると、罪を犯された「主」もまた同じ

7 罪人の「主」(11 行) を *iddin* の主語と見なす人がいるかもしれないが、この動詞 (14 行) と同じ文に属する、その前の *ḫīṭi-šu*「彼の罪」(12 行) と *īpuš*「彼が犯した」(13 行) における「彼」とは罪人に他ならないので、ここもまた同様と判断した。

8 特に理由の説明はないが、「主」をエマル王とする見解は Fleming 2002, 77–78; Démare-Lafont 2008, 208–210; Niedorf 2008, 253; Westbrook 2010, 455; Magdalene 2014, 218; idem et al. 2019, 191 にも見られる。

9 有名な「ナボトの葡萄園」事件 (列王記上 21 章) において、(陰謀によって) 神と王に対する反逆罪に問われ処刑されたナボトの嗣業 (*naḥălāh*) を没収したのはイスラエル王アハブであったこと (cf. 15–19 節) を想起せよ。さらに王を同様の罪に対する財産没収者とするアッカド語史料としては、BM120021 (Weidner 1954–56 および Jursa 2001/D) ならびに *AlT* 17 (= Niedorf 2008, 248–255 [no. 31.3]) が挙げられよう。これらに関し、先行研究を含め Na’aman 2008, 203–204; Magdalene 2014, 217–219 (ただし 2 点のアララハ文書に非ず) 参照。

神であると考えるのがむしろ自然であろう。この場合、上記テクストの異同 (2) で指摘した「彼の主」の異形「彼の主とエマル市」(*RE* 16: 11) と「彼の市と彼の主」(34: 10) は、市神と市のペアということになる。ここで想起されるのは、エマル市当局が売り手となった不動産売買文書であろう。王ないし王子が第一証人とならない場合[10]、そこでは通常 (A) 不動産の所有者：「ニヌルタ神」、(B) 不動産の売却者：「ニヌルタ神とエマル市の長老たち」、(C) 契約違反者による罰金の支払い先：「ニヌルタ神」と「市」が言及される[11]。(A) と (B) が実質的に同じであることは論を待つまい。他方で (B) と (C) を比較すると、「エマル市の長老たち」と「市」の並行性が導かれる。これらを総合すると「ニヌルタ神」//「ニヌルタ神とエマル市の長老たち」とは、まさに上記した「彼の主」//「彼

表 1「主」に対する罪 → ニヌルタ神による財産没収 (とその売却)

文書	類型	没収 (	) 売却物件		型式	売却者	罰金	第一証人	公的印章		書記	
									NS	DS	名前	系統
ASJ 12-T 7a	売買	家 & *ḫablu* 家屋			R&U	市当局	N/1 & C/1	R3b	+	+	Abi-kapi	RSc
Emar VI 1	売買	葡萄園			R&U	市当局	N/1 & Emar/1	R[2?]	+	+	[?]	RSc
Emar VI 144	売買	*tugguru* 家屋			R&U	市当局	N/1 & C/1	R2	+	+	Abi-kapi	RSc
Emar VI 197	遺言	相続分	[Ø]		R′	[Ø]	[?]	[R?]	–	+	[?]	RSc
RE 16	売買	家々 & 耕地	葡萄園		R&U	市当局	N/1 & C/1	R1!	+	–	Abi-kapi	RSc
RE 34	売買	家			R&U	市当局!	C/1 & N/1	R1	+	–	Alal-abu	USc
TS 13	売買	地所			R&U	市当局	N/1 & C/1	R5x	+	+	EN-malik	RSc
Cf. *Emar* VI 11	売買	葡萄園			R&U	市当局	C/1 & P/1	R3x	+	[+]	[?]	RSc
Cf. *Emar* VI 145	売買!	地所			?	市当局	[?]	[?]	[+?]	[?]	[?]	?
Cf. *Emar* VI 154	[売買?]	果樹園(?) & *ḫablu* 家屋			?	[?]	[?]	[?]	[?]	[?]	[?]	?

略号：C = city; DS = dynastic seal; N = ^{d}NIN.URTA; NS = ^{d}NIN.URTA seal; P = palace; R = royal & non-urban document; R&U = royal & urban document; RSc = royal scribe; s. = son of; USc = urban scribe; 1 = 銀 1,000 シクル

第一証人 (王/王子)：R1 = Yaṣi-Dagan (s. ^{d}IM-malik); R2 = ^{d}IM-kabar (s. R1); R3b = Pilsu-Dagan (s. R2); R3x = 王子 Abbanu (s. R2); R5x = 王子 ^{d}IM-kabar (s. Elli = R4 s. R3b)

10 筆者はこの型式を「U 文書」と呼ぶ。この他、市当局が売り手で王 (子) が第一証人となるものを「R&U 文書」、市当局以外が売り手で王 (子) が第一証人となるものを「R 文書」とする。後者 2 型式の文書に関し、王 (子) が売買の当事者となることは必ずしも要件ではなく、実際に稀である。これら不動産売買文書に関する筆者の型式分類法については、Yamada 2013, 131; 山田 2014, 43–44 参照。

11 山田 1998, 148–149 参照。U 文書は Yamada 2014, 105 にリスト化されているが、これに *ZA* 107-T を加える。(A) と (B) に関しては、例えば「(これは) ニヌルタ神の耕地である。(この) 耕地の所有者 (*be-lu-ú* A.ŠÀ) ニヌルタ神とエマル市の長老たちから (人は耕地を買った)」(*TS* 17: 17–18) のように、実際のテクストでは (B) が「所有者」として言及されている点に注意せよ。

の主とエマル市」ないし逆順の「彼の市と彼の主」に対応することが明らかであろう。

以上の検討からは、理論的には「主」を市神ニヌルタと理解する方がエマルではむしろ合理的であるとの結論が得られる。しかし、果たして本当にそうであろうか。本節が扱う文書の特徴を表 1 に整理したので、以下これを検討しながら改めて「主」の同定問題を考えたい。

まずは新たに確認しておくべき基本事項の整理から始めよう [12]。

(1) 第一証人：これらの史料はエマル文書の最初期 (R1 治世) から末期 (R5x：R4 治世) まで、全時代におよんでいる。短い治世に終わった Zu-Aštarti (R3a s. R2) 自身の文書は認められないものの、その兄弟 Abbanu (R3x) を第一証人とする *Emar* VI 11 は彼の時代に年代づけられよう [13]。なお、前に注目した異形の拡張表現 (*RE* 16: 11; 34: 10) は、いずれも最初期に属する (cf. Fleming 2002, 78)。

(2) 没収・売却物件：*RE* 16 では「大罪」(10 行) 故に没収されたのが「家々と 耕地」(13 行) であるのに、売却されたのは「葡萄園」(1, 8, 16, 23 行) と、物件が一致していない。これは、実際には全財産 ——「家々」が市内の、「耕地」が市外の財産をそれぞれ提喩的に表す —— が没収されたものの (cf. *Emar* VI 197)、そのうち今回はこの「葡萄園」のみが売却されたことを述べているのだと解される。こうした状況は、没収物件と売却物件が一致する他の文書においても同様であったろう。特に *Emar* VI 1 の「葡萄園」、*TS* 13 の「地所」など、「大罪」に対して財産のほんの一部のみが没収されたとは到底考えられないからである。

(3) 文書型式：それが判明する場合にはほとんどが R&U 文書であり、U 文書は皆無、*Emar* VI 197 のみが R′ 文書と見なされる [14]。ここで同史料に関し、市当局による没収財産の売却を想定することは不可能ではないが (上記注 4 参照)、筆者はこれを採らない。何故なら遺言書において、既に没収によって失われた自分の財産の一部がその後どうなったかに関して遺言者が何か述べるということは、そもそも期待されないからである [15]。

(4) 罰金の受領者：表 1 において例えば「N/1 & C/1」は、この売買契約に異議を唱える者は「ニヌルタ神に銀 1,000 シクル、市に銀 1,000 シクルを支払う」の意である。1 例 (*Emar* VI 11) を除き全て市当局が罰金の受領者に指定されているが、

12 まことに遺憾ながら、以下、筆者が公的印章と書記に関して用いる術語の日本語表記は、「ニヌルタ神の印章」(^{d}NIN.URTA seal) を除き、英語表記と厳密には一致しないことをお断りしておく：「王家の印章」(dynastic seal)、「王宮系書記」(royal scribe)、「市当局系書記」(urban scribe)。

13 説明簡略化のために略号を使用するが、R3x が証人として登場しうるのは、理論的には父 R2、兄弟 R3a と R3b、さらに甥 R4 治世の文書であろう。しかしこれまでに確認される限り、彼は R3a 治世の文書には登場するが (例えば *Emar* VI 256: 36; *RE* 9: 30)、それ以外の 3 治世の文書には登場しない (R2 の場合は王子全員) ので、R3a 治世限定という結論が導かれる。

14 不動産売買文書の分類用語を、ここでは遺言書にも適用する (よってダッシュ付き)。

15 またもしも市当局による何らかの関与があったならば「ニヌルタ神の印章」が文書に押印されたはずであるのに (下記参照)、それが認められない点も指摘しておきたい。シリア型文書において印章が押印される場所は基本的に粘土板の上面と左面 (時に表面上部および左部) であるが、ハンドコピー (上記注 5 参照) を見る限り、これら全てが欠損を免れているにもかかわらず、D. ベイエが作成した公的印章の押印リストでは *Emar* VI 197 の欄に E2 =「王家の印章」のみが表示されている (Beyer 2001, 433)。

これは R&U 文書における標準パターンとなっている (Yamada 2014, 102–105 参照)。

(5) 書記の系統：その名前 (ないし系統) が判明する限り、これらの文書を書いた書記は一般に「王宮系」(RSc) であるのに対し、唯一 *RE* 34 では「市当局系」(USc) である [16]。この文書で注目すべきは、罪を犯した相手の表記「彼の市と彼の主」(10 行) であろう。ここで「主」の拡張表現において「主」よりも「市」を優先させたことは (cf. *RE* 16: 11)、Alal-abu が市当局系書記であったことと何か関係があるのであろうか。

(6) 公的印章の押印：エマルでは「王家の印章」(DS) が王宮 (王家) の権威を、「ニヌルタ神の印章」(NS) が市当局の権威を、それぞれ代表していた。したがって R&U 文書には両方の印章が、R 文書には王家の印章のみが押印されるのが原則である [17]。しかしこの原則に反する場合が *RE* 16 と 34 に認められる。どちらも R&U 文書であるのにニヌルタ神の印章のみが押印されているのは何故なのか。この問題から議論を始めよう。

まず *RE* 34 に関して注目すべきは、上記したその書記の系統である。Alal-abu (36 行) のような市当局系の書記は、エマル文書の初期にのみ確認され (R1 とおそらく R2 治世)、通常は U 文書か私的契約文書を作成し、R 文書はもちろん論外として、R&U 文書を書くことも稀であった [18]。この文書末 37 行には市当局系書記の文書に特徴的な月名と「エポニム年」! [19] の記載も認められる。通常の R&U 文書は王宮系書記が担当するので、これは非常に特殊な事例である。*RE* 34 に王家の印章を排してニヌルタ神の印章のみが押印されたことも、自分が帰属する市当局の権威を優先した結果と見ることはできないだろうか。

しかしこの解釈に対しては、直ちに次の反論が提出されよう。同じニヌルタ神の印章押印のみの *RE* 16 を書いたのは、王宮系の書記 Abi-kapi (36 行) ではないか、と。この問題に対しては、同文書末 37 行の月名とエポニム年 ⌜ITI⌝ ^{d}EN MU x x x x x「ベール (/ バァル) 神月、… の年」をもって答えたい。王宮系書記が特定の年に言及する場合が時折見られるが、その際には事件に基づく「年名」型の年表記 —— ただし多くは略記で示され、それらが正式の年号であったかは疑わしい —— を用いるのが常であった。しかもここでのように文書末に置かれた例はなく、本文末に置かれた場合 (*Emar* VI 139: 42) でも月名への言及は認められない。MU の後をどう読むかは問題ながら、少なくとも従来知られているどの年名の事例とも合致しないことは確実である。他方、G. ベックマン (Beckman 1996, 29) が読んだように DUMU (「(PN の) 息子」) はたしかに有力な候補であり、現在の筆者はこれを ⌜*i*⌝- と読む可能性も留保するが、

16 これら書記の系統分類に関し Yamada 2013, 131–137; idem 2014, 74–76 参照。

17 先行研究を含め Yamada 2014, 76–77; 山田 1998, 149–150 参照。Cf. Beyer 2001, 430–437. これら二つの印章の押印情報については以下を参照：Beyer 2001, 432–434 (*Emar* VI 1, 11, 144–145, 154, 197; *TS* 13 [ME 21]); Ishida 2017–18, 24 (*ASJ* 12-T 7)。なお *RE* 文書 (ここでは nos. 16, 34) に関しては、コーネル大学の D. I. オーウェン (Owen) 教授より資料をご提供いただいた。記して感謝申し上げる。

18 Yamada 2014, 96–101 (*s.v.* Alal-abu, Dagan-baʿli, Dagan-EN, Eḫli-Kuša, Marduk-muballiṭ, Rašap-ili) 参照。そのような例外的 R&U 文書は、他では Dagan-EN が書いた *RE* 2 と *TS* 1 の 2 点にとどまる。

19 ITI *ḫal-ma* M[U …]「ハルマ月、[… の] 年」。年の部分はほとんど欠損しているが、市当局系書記が使用するのはエポニム年に限られるので、欠損部に人名表現が書かれていたことはまず疑いえない。

MU 以下をエポニム年と見なすことに同意する。この理解が正しいとすると、*RE* 16 は王宮系書記がエポニム年を使用した唯一の例外的文書だということになる。筆者はこれを、王宮系書記 Abi-kapi が市当局系の「流儀（マナー）」に従って文書を書いた結果と考えたい。であれば王家の印章を排除したことも、同じ流儀 [20] に従った結果として説明がつくのではないだろうか [21]。

ここで提出した仮説については後で再び触れることにして、以上を踏まえた上で改めて表 1 を見てみよう。すると最初に気がつくのは、王宮 (王家) の安定した存在感である。たしかに本文を読んでいると不動産を没収・売却するニヌルタ神と長老たちに目を奪われがちであるが、テクストが欠損していない限り、第一証人には常に王ない王子が立っており、*Emar* VI 197 に至っては文書作成に市当局が関与しない R′ 文書である。また罰金の受領者の中にも 1 例のみながら ⌜É⌝.G[AL]⌜王 [宮]⌝」が言及されている (*Emar* VI 11: 35)。この点に関して指摘すべきは、実は R&U 文書において受領者が市当局でないのは王子 Abbanu を第一証人とする 3 文書に限られ、しかもここ以外では受領者の記入もれ (*Emar* VI 3: 35) か「市」が単独で言及される (*TS* 5: 45) 事例しかないということである。この事実は、*Emar* VI 11 における罰金の受領者「王宮」への言及がいかに特別であるかを物語る。

断片文書を除き、本稿が扱う文書に共通し、かつ強い存在感を示すものが王宮 (王家) であるということは、何を意味するだろうか。もう一つの共通点、すなわちエマル人が罪を犯した相手「主」とは彼らの「王」を指すということだと筆者は考える。前に触れた書記 Alal-abu がその相手を拡張表現で示した際、「彼の市と彼の主」(*RE* 34: 10) として「市」を優先させたのは、彼の市当局系書記としての矜持、すなわち王宮 (王家) に対する対抗意識がそうさせたのであろう。おそらくは拡張表現自体が市当局系の流儀であり、しかも同系統の書記は「市」を優先させて使用したものと思われる [22]。そもそも彼にとって「主」が市神ニヌルタであったならば、語順を逆転させることなどあるはずもなかった。このように考えると、*RE* 34 および 16 における王家の印章の排除もまた、同じ動機に基づく市当局系の流儀 [23] と見てよさそうである。

20 ここで筆者は公的印章の押印をも議論の対象としているため、文書の「書式」よりも広い概念を表す語として「流儀」を採用する。

21 もう一つの反論として、市当局系の書記 Dagan-EN が書いた R&U 文書 (*RE* 2 と *TS* 1) には両方の公的印章が押印されている事実 (*TS* 1 [ME 2] に関し Beyer 2001, 434 参照) が指摘されるかもしれない。しかしこれら 2 文書に関しては、注目すべき奇妙な共通点が存在する。すなわち月とエポニム年への言及の欠如である。市当局系書記がこれを欠くことは例外的であり、事実 Dagan-EN はその他の彼の文書 (*AuOr* 5-T 4, *Emar* VI 150, *RE* 91, *ZA* 107-T [後者 3 点は U 文書]) では月とエポニム年を記している。上記 R&U 文書にのみ言及がないのは何故か。彼が *RE* 2 と *TS* 1 を王宮系の流儀に従って書いた結果であろう、と筆者は考える。であれば両方の公的印章が押印されても何の不思議もあるまい。

22 この点に関し、同様の拡張表現の使用を強いられて (?) も王宮系書記 Abi-kapi は *RE* 16: 11 で「エマル市」を優先させなかった点に注意せよ。

23 ただし同じ流儀に従いながらも、*RE* 34 の場合には書記も市当局系、*RE* 16 の場合には書記が王宮系という違いが指摘される。

III.「市と主」に対する勲功

1. 史料

以上の議論を心に留めて、残る史料 LN-104[24] を読んでみよう。果たしてここでも「主」をエマル王と取れるであろうか。文書の主要部分は以下の通り。

[1] *i-na* UD-*ma*-[*t*]*i ša* [m]*li*-LUGAL [2] DUMU *ir-ib*-[d]IM A.ŠÀ.Ḫ*Á ṣí*-[*ip*]-*ḫu* [3] 1 IKU GÍD.DA-*ši* 1 IKU *ru-up-ši* [4] *ù* [d]NÈ.IRI$_{11}$.GAL *ir-am-ši* [5] É[!]-*šu i-na* A.ŠÀ.Ḫ*Á ir-ṣi-ip* [6] *ù* A.ŠÀ.Ḫ*Á ša* [m]*ir-ib*-[d]IM DUMU *la-a-la … ù* 4 DUMU.MÍ.MEŠ-*šu* [10] *qa-du* NA$_4$.*nu-bi-šu-nu* 4 *li-im* KÙ.BABBAR [11] 4 *me-at* KÙ.GI *a-na* LUGAL KUR *ḫur-ri ú-ul-te*[!]-[*li*] [12] *ù* [m]*ir-ib*-[d]IM DUMU *la-a-la* [13] LUGAL KUR *ḫur-ri iš-tu* É.GAL *i-ta-pa-al* [14] *ù* 4 DUMU.MÍ.MEŠ LUGAL 4 *li-im* KÙ.BABBAR [15] 4 *me-a*[*t* K]Ù.GI *a-na* URU-*lì-šu* <*ù*> *be-li-šu* [16] *ut-te-er-šu ù ma-na-aḫ-ta* GAL [17] *liṭ-ṭi* URU-*lì-šu ù be-li-šu* [18] *e-te-pu-uš ù ki-i-mu-ú ma-na-aḫ-ti-šu* [19] *ša liṭ-ṭi* URU-*lì-šu ù be-li-šu* [20] *ša i-pu-šu* LUGAL *ù* URU.*e-mar* [21] *a-na* LÚ.SANGA *ša* É [d]NÈ.IRI$_{11}$.GAL [22] *ša* KI.LAM *ù a-na ra-be bi-ti* [23] DUMU-*šu* DUMU.DUMU-*šu* NUMUN-*šu* [24] NUMUN.NUMUN-*šu iš-ku-un-šu* [25] *a-na da-ri-ti* LÚ.SANGA-*ma* [26] *ù* GAL É *ša* [d]NÈ.IRI$_{11}$.GAL [27] *ù a-na* LÚ.*qáb-ba-ri šu-ut-ma*

Irʾib-[d]IM の息子 Li-šarra の時代に。(この) 平地 (ひらち) —— その長さ 1 イクー、その幅 1 イクー ——(に関して)、ネルガル神はそれを愛し、彼の神殿 (直訳：家) を (この) 土地に築いた。(この) 土地は Lala の息子 Irʾib-[d]IM のものであった。 (中略：神殿域の四囲の状況説明) 彼 (Irʾib-[d]IM) は彼の娘 4 人ならびに彼女たちの宝石、銀 4,000(シクルおよび) 金 400(シクル) をフリ国の王のもとへ運んで行 [った]。そして Lala の息子 Irʾib-[d]IM は王宮から (の金銀を) フリ国の王に支払い、王の娘 4 人、銀 4,000(シクルおよび) 金 40[0](シクル相当の財宝) を彼の市 (と) 彼の主に返還した。(このように) 彼は彼の市と彼の主の人質 (奪還) という大きな働きを為した。彼が為した彼の市と彼の主の人質 (奪還) という彼の働きに対し、王とエマル市は彼の息子、彼の孫、彼の子々、彼の孫々を、市場のネルガル神殿の祭司および (その) 神殿長に任命した。彼は永遠にネルガル神殿の祭司および神殿長であり、また埋葬人に (任命された)。

注解：

1 行：この Li-šarra という人物は、Irʾib-[d]IM の息子として通常は *li-mi*-LUGAL (例えば *TS* 17: 29; 87: 26)、他に *li-im-šar-ra* (*ASJ* 12-T 2: 9′; cf. *Emar* VI 153: 22) と表記される [25]。よって以下、中立的に彼に言及する際には Li(mi)-šarra を用いる。

2 行：E. J. ペンティアク (Pentiuc 2001, 163–164) に従って *ṣipḫu* (“broad, flat surface”) と取り、それと A.ŠÀ.Ḫ*Á* との関係も同格 (“a field, a flat area”) と理解するが、訳語としては一語の「平地」を

24 この文書は最初、写真に基づき Sigrist 1993, 176–178, Pl. VII (no. 6) に出版されたが、今回用いる新たな改訂版は実物の粘土板に基づく。

25 市当局系書記の書いた文書に付された証人リスト (Yamada 2013, 148–152) 参照。なお父名を欠くが、cf. *li-mi-šar-ra* (*ASJ* 13-T 33: 14)。

採用した。また 5–6 行の A.ŠÀ.ḪÁ 単独を「土地」と訳した。明らかにエマル市内でありながらここで A.ŠÀ (狭義訳：耕地) が使用されたのは、1 平方イクー (3 行) という、その神殿域の広さ故であろう [(26)]。

5 行：文書を再出版した Y. コーヘンと M. ヴィアーノはこの文の主語を (正式には次行に初めて登場する) Irʾib-^{d}IM と取るが (Cohen and Viano 2016, 59, 61)、支持できない。ネルガル神がこの土地を気に入ったため、そこに自分の神殿を「築いた」と解するのがむしろ自然であろう [(27)]。もっともそうした神意を実行に移したのが人間であるのは当然で、*TS* 87 によると実際にこの É ^{d}NÈ.IRI$_{11}$.GAL *ša* NA$_4$「石のネルガル神殿」(4, 9 行 ; cf. 11, 14 行) を建てた人物は [X-m]alik の息子 Pilsu-Dagan である (3–5 行)。なおこの功績により、彼とその子孫 (すなわち彼の長子に始まる直系家族代々の当主) は、エマル市の長老たちによってこの神殿の祭司に任命されている [(28)]。

11 行：Cf. *ú-ul-te*$^{!}$-[*li/ṣi*], “He *presented*” (Cohen and Viano 2016, 58–59, 62).

13 行：コーヘンとヴィアーノは「フリ国の王」をヒッタイトによる征服以前のエマルの宗主ミッタニ王と考えるが (2016, 64)、筆者は第一証人 Li-šarra (36 行) を R1 = Yaṣi-Dagan と同時代人と捉えるので、その 1 世代前の Irʾib-^{d}IM と同時代の彼を、ミッタニ滅亡後のフリ系後継国家ハニガルバトの王 (おそらく Šattuara 1 世) と考える (Yamada 2013, 140)。

彼らはまた *ištu* É.GAL を “instead of the palace” と訳すが (Cohen and Viano 2016, 59)、そのような前置詞 *ištu* の用法は知られていない。高額な金銀の支払いを Irʾib-^{d}IM が個人で引き受けられたとは考えがたいため [(29)]、筆者は、娘と宝石を提供したのは彼ながら、それら金銀は文字通り「王宮から」支出されたと理解する。

14–15 行：ここに言及された人と物は、フリ国の王がエマルを攻撃した際にエマルから奪った人

26 エマルにおける長さの単位イクーに関し、二つの異なる見解が提出されている：(a) 1 *ikû* = 120 *ammatu* (Mori 2003, 105) = 約 60 m; (b) 1 GÁN = 240 *ammatu* (Chambon 2008, 150) = 約 120 m。

27 神による神殿建設地の選びという点に関し、例えば cf. 詩編 132 編 13 節。

28 Limi-šarra の時代に (1 行)、神殿完成後 LÚ.MEŠ.*ši-b*[*u-ut*] URU.*e-mar*.KI ^{6} *ú-še-ši-ib-ma* DUB-*pa-*ʳ*am*¹ *an-ni-a-am* ^{7} *iš-ṭú-ru iš-tu* UD-*mi an-ni-i-im* $^{8\,m}$ *píl-sú-*^{d}*da-gan* LÚ.SANGA ^{9} *ša* É ^{d}NÈ.IRI$_{11}$.GAL *ša* NA$_4$ ^{10} DUMU.DUMU-*ri-šu a-na da-ri-ti* ^{11} LÚ.SANGA-*ma ša* É ^{d}NÈ.IRI$_{11}$.GAL「彼 (Pilsu-Dagan) はエマル市の長 [老] たちを座らせ、彼らはこの文書を書いた。本日より Pilsu-Dagan は石のネルガル神殿の祭司、彼の子孫も永遠にネルガル神殿の祭司である」。文脈上、7 行最初の動詞の主語 (3.m.pl.) は非人称ではなく、Pilsu-Dagan が招集した長老たちである点は疑いえない。物理的に *TS* 87 を書いたのは書記 Eḫli-Kuša (35 行) 1 人であるので、長老たちが「書いた」(*išṭurū*) とは、素直に考えれば彼らが文書に記された事柄を定めたと理解されよう (cf. Cohen and Viano 2016, 66)。であれば彼ら (の少なくとも一部) が証人として言及されたとしても不思議ではあるまい。実際、*TS* 87 の証人たち、特に上位 5 人 (26–31 行) は、Eḫli-Kuša が作成した他の U 文書の証人として頻繁に登場する (Yamada 2013, 128 n. 16, 150–151 参照)。特にこの *TS* 87 (26–37 行) と LN-104 (36–45 行) を比較すると、第一証人の表記に若干の違いがあるものの (Irʾib-^{d}IM の息子 Limi-LUGAL [*TS* 87: 26] vs. Li-LUGAL とエマル市 [LN-104: 36])、証人リストと月名およびエポニム年は同一である。ここからは両文書が同時に作成された状況が窺われる一方、後者における「エマル市」(^{uru}*Emar*) への言及は、今述べた証人に関する筆者の解釈を直接的に裏付けるものと見なせよう。

29 Cf. ヒッタイトが属国に課した年貢額：対アムル金 300 シクル、対ウガリト金 500 シクル (詳細は Yamada 2017, 132 n. 39 参照)。金の額だけでも国家級である点に注意せよ。

質と戦利品であろう。しかし「銀 4,000(シクルおよび) 金 400(シクル)」を奪還するのに同じ金銀を支払うということは考えがたいので、彼が奪ったのは評価額が上記金銀に相当する品々、それも容易に代替がきかない貴重な財宝であったと推定される [30]。エマルが被った実際の損害は、ここに記されたもの以上であった可能性が高い。

16 行：*uttēr-šu* の接尾代名詞 *-šu* は一見すると前行の *ana ālišu bēlišu* に対応する「それ / 彼に」(3.m.sg. dat.) と解されるが、17 および 19 行からは *ālišu* と *bēlišu* が同格でないこが明らかである (よって接続詞 *ù* を 15 行の両語間に補う)。この *-šu* が何を指すかという問題については、下記を参照。

17, 19 行：*liṭṭu* (*līṭu*) をコーヘンとヴィアーノの訳 “(releasing) the hostages” (2016, 59) に準じて訳したが、これは Irʾib-^{d}IM による身代わりの「人質」としての娘 4 人 (さらに彼自ら人質になった可能性も排除できない) の提供を指すとも考えられる。この場合、それぞれ前行の *mānaḫtu* は「労苦、苦労」(*CAD* M/1, 203 [mng. 1]; cf. *AHw*, 601b [mng. 1]) と理解することも可能である。

21–22 行：この神殿名は神殿域右側の KI.LAM「市場」(7 行) に因むのであろう。*TS* 87 では同じ神殿が別の名称で呼ばれている (上記 5 行に対する注解参照)。

24 行：筆者は *iškun-šu* の接尾代名詞「彼を」を Irʾib-^{d}IM (Cohen and Viano 2016, 59, 63) ではなく、前行の DUMU-*šu* 以下列挙された彼の子孫 (ただし各世代に 1 人) を受け直していると理解する。

以下、Irʾib-^{d}IM の子孫を神殿および埋葬人 (職) から排除することの禁止と、これに違反した者に対する呪いが続く (28–35 行)[31]。次の証人リスト中、第一証人は「Li-šarra とエマル市 (^{uru}*Emar*)」(36 行)、最終証人でもある書記は市当局系の Eḫli-Kuša (43 行)、そして文書末には月名とエポニム年が記されている (44–45 行)。またこの文書に押印されているのは、ニヌルタ神の印章のみである (Cohen and Viano 2016, 67–68 参照)。不動産売買文書ではないが、LN-104 が市当局の主導下に作成されたことは明白であろう。他方、内容的には王と市の双方が関わるも、王ないし王子は証人として言及されない。これらの点を考慮して、筆者はこれを型式としては U′! 文書と見なす。

この文書は、Irʾib-^{d}IM の偉業を顕彰するため、彼の息子 Li(mi)-šarra の時代に書かれたものであり (1–2 行)、前者の後継者たる長子 (おそらく Li[mi]-šarra) に始まる直系家族代々の当主を新築された神殿の祭司その他に任命している [32]。こ

30 全体としてそれ以上の価値のものが奪われたとしても、例えば家畜などは奪還の対象にはなるまい。また、他に捕虜がいた可能性も否定できない。

31 呪いには *ša ú-na-kàr-šu* ^{32} ^{d}*da-gan* ^{d}NIN.URTA ^{33} *ù* ^{d}NÈ.IRI$_{11}$.GAL MU-*šu* NUMUN-*šu* ^{34} *ú-ḫal-li-qu* NA$_4$.*si-kà-nu* ^{35} *a-na* É-*šu li-iz-qu-up*「彼を排除する者 (に関して) は、ダガン神、ニヌルタ神およびネルガル神が彼の名と彼の子孫 (直訳：種) を滅ぼし、彼 (排除者) の家に対し彼 (Irʾib-^{d}IM の後継者) は石柱を立てるべし」とある。ここに見える、家系が絶えた後その印として石柱を立てるという風習は、父王ダビデに対し反乱を起こすも戦死した一王子の次のエピソードを思い起こさせる：「アブシャロムは生前、王の谷に自分のための石柱 (*maṣṣeḇeṯ*) を建てていた。『自分の名を記憶してくれる息子が私にはいない』と思ったからである。彼はその石柱に自分の名を付け、今日に至るまで、それはアブシャロムの碑 (*yaḏ ʾaḇšālōm*) と呼ばれている」(サムエル記下 18 章 18 節 [聖書協会共同訳])。

32 残念ながら現在のエマル文書研究において主流を占める年代学的枠組 (Cohen and d’Alfonso 2008) に従い、コー

の顕彰が Irʾib-^{d}IM 本人ではなく彼の息子の時代に行われた理由は、石造の神殿故、その建設に長時間を要した結果であろう [33]。

2. 考察：「主」の同定

LN-104 における「主」とは誰か。この問いに答える際に基本となるのは、第一に何が Irʾib-^{d}IM の重要な功績と見なされるかという問題である。彼は「彼の娘 4 人ならびに彼女たちの宝石、銀 4,000(シクルおよび) 金 400(シクル)」(9–11 行) と引き換えに、フリ国の王から王女 4 人と銀 4,000(シクルおよび) 金 400(シクル相当の財宝) の奪還に成功したという (14–16 行)。これが Irʾib-^{d}IM による返還交渉の成果であることは間違いないが、それとは別に物質面に注目すると、金銀は「王宮から」(13 行) 支出されたため、この点での彼の功績とは、それを運搬してフリ国の王に支払ったことに限定される。他方、王女の奪還に関しては、彼は自分の娘 4 人と宝石 (および彼自身？) を提供したのであるから貢献度は 100% で、功績全体の大部分をこの点が占めるであろう。実際テクストにおいても、彼の働きのうち *liṭṭu*「人質」奪還 (および提供) が特に重要視されていることは明白である (16–20 行参照)。

第二の基本的な問題は、「彼の市と彼の主」(15, 17, 19 行) に対する勲功とされているが、一体誰が真の受益者であったかという点である。筆者が理解したように奪還された「銀」と「金」が財宝であるならば、それは市よりも王宮所属であった可能性が高いと思われる。しかしこの場合、代償として支払われた金銀は王宮支出であるため、特に受益者といったものは存在しないことになろう。これに対し王女奪還の場合は、エマル王が受益者であることに疑いの余地はない。

このように第一、第二の問題ともに、Irʾib-^{d}IM の勲功の核心は王女の奪還に関わる。真の受益者が王であれば、「市」と「主」のうち後者は王を指すに違いない。事実、彼の勲功に対し褒賞を下したのは「王とエマル市」(20 行) であり、この解釈と合致する。「市」はここで二義的である [34]。

しかしもしそうであるならば、受益者が言及された際に何故「市」が「主」に先行したのであろうか。ここで想起すべきは、LN-104 を書いた書記 Eḫli-Kuša (43 行) が市当局系であったという点である。同系統の書記 Alal-abu による R&U 文書 *RE* 34 に関して筆者は、罪を犯した相手の表記「彼の市と彼の主」(10 行) で「市」が優先されたこと、また通常の押印パターンに反し王家の印章を排してニヌルタ神の印章のみが押印されたことを、彼が帰属する市当局の権威を優先した結果と考え

ヘンとヴィアーノは Li-šarra (LN-104: 1, 36) をエマル王と考える (2016, 64)。しかしここで注意すべきは、彼の父は Irʾib-^{d}IM (LN-104: 2; cf. *TS* 87: 2, 26) だという点である。すなわち彼らは LN-104 で勲功をあげた Irʾib-^{d}IM とこの王父は別人だという解釈をしているのであるが、実に不自然である。エマル文書において Li(mi)-šarra とその親族は一度として「王」と呼ばれたことはなく、ここに 2 人の Irʾib-^{d}IM の存在を想定すべき理由は全く認められない。

33 もし Irʾib-^{d}IM 本人も人質になったのだとすると、彼がフリ国へ行った時点で代替わりは行われたであろう。しかしその場合も、息子の祭司任命は神殿が実際に完成するまで待たねばならなかったという点に変わりはない。

34 同様に懸案の *uttēr-šu* (16 行) では、*-šu* が「市」と「主」のうち後者を指す「彼に」と理解されよう。この点は、王が王女たちの直接の返還先であったことからも支持される (王宮の財宝の場合も同様)。

た。これとまさに同じ二つの特徴が、王を真の受益者および主要な褒賞授与者とする LN-104 においても認められる。この一致は偶然ではあるまい。ここに文書を作成した書記の意図 —— より正確には彼に文書を書かせた市当局の流儀 —— を読み取ることは、もはや容易であろう。この文書は、筆者の仮説の正しさを裏付ける重要な史料として評価される。

Eḫli-Kuša が「市」を優先させて受益者を「彼の市と彼の主」と書いたのならば、褒賞を与えた者もまた「エマル市と王」とすべきだと誰しも思うであろう。それがそうなっていないのは何故なのか。この点に関し筆者は、王に対する勲功の褒賞として祭司に任命する場合、その任命権は王にあったからだと考える [35]。この点は、LN-104 以外にも、*Emar* VI 17 から明瞭に理解される。これによると、エマル市内で反乱が発生した際、2 人のエマル人がその旨を Zu-Aštarti 王に急報したため、王は速やかな反乱鎮圧に成功した (1–21 行)。その後彼は当然 2 人の功に報いたと思われるが、*Emar* VI 17 ではそのうちの一方に関し、次の記述が認められる。

> [22] *ù* [[m]*k*]*u-na-za* DUMU *t*[*u-ra-* …] [23] *a-*⌜*na*⌝ ÌR [d][…] x [24] *um*[!]*-ta-dì*
> 彼 (Zu-Aštarti 王) は T[ura-…] の息子 [K]unazu を […] 神の僕に任命した [36]。

ここで神名は不確かながら、「[…] 神の僕」とは一種の祭司 (それも高位の) を指すと考えてまず問題なかろう。文書は残っていないが、もう 1 人の通報者もまた同様に処遇されたに違いない。

この王による祭司任命を記す *Emar* VI 17 は王宮系書記 Imlik-Dagan (47–48 行) によって書かれ、第一証人は Zu-Aštarti 王 (41 行) と、型式的には R′ 文書に分類されよう。ただし公的印章に関しては、王家の印章 (*Emar* IV E2c) は当然として、ニヌルタ神の印章 (E1b) までも押印されている点 (Beyer 2001, 432) が注目される。しかも後者の b 型はこの文書にしか押印されておらず (ibid., 432–435 参照)[37]、筆者はこれが Zu-Aštarti 王によって偽造された可能性もあると考える (Yamada 2014, 78 n. 25; 山田 2014, 51–52)。何故ここでニヌルタ神の印章が押印されたのか。それはもちろん王による祭司任命に対し、市当局が同意したという証拠が必要とされたからであろう。

そこで LN-104 に目を戻すと、王が祭司を任命したなら本来は絶対に必要となるはずの王家の印章が排除され、ニヌルタ神の印章のみが押印されていた。これは市当局系書記が自分の属する公的権威の流儀に従ってこの文書を作成した結果と理解されるが、後者の押印に関してはもう一つ説明が加えられると思われる。すなわち *Emar* VI 17 におけると同様、市当局による同意の証拠である。もしこの解釈が正しいならば、我々はここから、王による「任命」のみでは不十分で、市当局によ

35 ただし筆者の理解が正しければ、*TS* 87 は王が全ての祭司の任命権を独占していたわけではないことを示す (下記注 38 参照)。

36 Yamada 2014, 77 n. 24 参照。Cf. *a-na ìr* [d][nin-hur-sag]-*gá at-ta-din*, “(Lors, Kunaza, fils de Tura…) au service de la déesse Šalaš j’ai donné” (Durand and Marti 2003, 142).

37 王家の印章の c 型も同様ながら、これは四つある型 (a–d) の一つで a 型と b 型は併用されたのに対し、ニヌルタ神の印章の場合、ここ以外は全て a 型が使用されているという点で、その対照性は際立っている。

る「承認」を得てはじめて正式決定に至るという、エマルにおける祭司任命制度を読み取ることができるかもしれない[38]。しかし任命の主体はあくまでも王であったことから、さしもの市当局系書記といえども任命者に言及する際に「王」と「エマル市」を逆転させることはできなかったのであろう。

3. Irʾib-^{d}IM 家の人々

人質と戦利品の奪還において、金銀は王宮から支出されたため、実質的な Irʾib-^{d}IM の負担は自分の娘4人と宝石 (および彼自身？) の提供であったと考えられる。しかしこれが王女 4 人に対応したということは、王ならぬ彼の身分の高さを強く示唆しよう。エマル市において彼の家系はどのような存在であったのか。本稿を閉じる前に、この問題に触れておきたい。検討対象とするのは、市当局系書記が書いた U 文書その他の証人リストである[39]。

まず Irʾib-^{d}IM 自身 (とその父 Lala) は、他のエマル文書に言及されない。この点は、LN-104 など同文書初期の U 文書が彼の 1 世代後に年代づけられることから了解されよう。なお、他の U 文書に証人として登場する Asda-aḫi の息子 Irʾib-^{d}IM (Yamada 2013, 151 [no. 4] 参照) は、父名が異なるため同一人物とは見なせない (*pace* Cohen and d'Alfonso 2008, 5)。

Irʾib-^{d}IM には 3 人の息子 Igmil-Dagan、Li(mi)-šarra、Rašap-ili がいたことが知られる (ibid. 参照）[40]。彼らは 3 人で (例えばリスト 2C)、2 人で (3B, 5A–B)、あるいは単独で (2F, 3F) 言及されるが、その場合には常に Igmil-Dagan か Li(mi)-šarra が第一証人であり、複数で言及された場合には第一証人以外の兄弟も上位の位置を占めている。彼らと U 文書の密接な関係を考慮すると、この事実は彼らが市当局において重要な地位を占めていたことを示唆する。父 Irʾib-^{d}IM に関して予想された身分の高さは、彼の一族が長老会の中心的存在であったことによって説明されよう。

Igmil-Dagan と Li(mi)-šarra の関係では、前者が後者よりも上位の証人である場合が多いが (リスト 2C–D, 5B)、1 例のみ逆順も認められる (5A)。また、この家の次世代者 (Li[mi]-šarra の息子たち) に言及する書記 Eḫli-Kuša の文書 (3A–I) には Igmil-Dagan が現れない。これらの事実からは、当初は Igmil-Dagan が長子であったが、途中で Li(mi)-šarra に取って代わられ、自らは早世した状況が窺われる。LN-104 (3G) が書かれた段階で

38 もっともこれは重要な祭司に限られていたと思われる。Pilsu-Dagan をネルガル神殿の祭司に任命した上記 *TS* 87 (ME 22) では、ニヌルタ神の印章 (*Emar* IV E1) が押印されていないからである (Beyer 2001, 434 参照)。この文書には複数の印章が押印されているが (*Emar* IV D7, D8, D17, D27 [Beyer 2001, 176–177, 181, 186 参照 ; cf. pp. 183–184, 483])、唯一 Limi-šarra が印章押印者として言及されている (最終 38 行)。おそらく彼がネルガル神殿の「神殿長」(LN-104: 26) に任命されたことと合わせて考えると、Pilsu-Dagan の祭司—おそらくは平祭司であろう—任命は神殿長 Li(mi)-šarra の権限において行われた可能性が高い。なお暫定的にではあるが、筆者は彼の印影を *Emar* IV D17 であろうと考える。

39 Yamada 2013, 148–152 (Appendix 3) 参照。これに書記 Dagan-EN の手になる *ZA* 107-T の証人リスト (20–32 行) をリスト 2G として加えるが、これは 2C (= *RE* 91: 20–34) から Itur-Dagan、Dagan-malik、Milki-Dagan (28–32 行) の 3 人を抜いたものに等しい。なお、ここで扱うリストのうち、非 U 文書のものは 1B、3H、5D の 3 点である。また 3G = *GsK*-T 6 は LN-104 に要変更。

40 彼らが言及されるリストは、2C–G、3A–H、5A–C である。

は、長子権の移行 (と Igmil-Dagan の死亡) が既に完了していたのであろう。

次の第 3 世代からは、Li(mi)-šarra の息子たちのみが知られる。Irʾib-^{d}IM の息子たちに言及した書記 Eḫli-Kuša の文書 (リスト 3I) から第一〜第四証人 Išbi-Dagan、Riḫṣi-Dagan、Amur-ša-Dagan、Šadi-Dagan の 4 人、同じく Rašap-ili の文書 (5D) からおそらく ^{d}IM-GAL がこのグループに該当すると思われる。さらに、第 2 世代への言及はないが、書記 Alal-abu は上記 Riḫṣi-Dagan とともにその兄弟 Ili-abi に言及しているので (1A; また cf. 1B)、後者もこれに加えられよう (cf. Cohen and d'Alfonso 2008, 5)。なお、1A = *TS* 19 においてこれら 2 人に先行する第一証人 Išbi-Dagan の息子 Zu-Baʿla (23 行) を Li(mi)-šarra の孫と見なす (ibid.) か否かに関し、筆者は判断を保留する。

以上の検討から、Irʾib-^{d}IM の一族、特にその当主はエマル市当局の幹部、すなわち長老会の中心メンバーであったと結論づけてよいであろう [41]。LN-104 が市当局系の書記により、その流儀に従って —— つまりは市当局の主導下に —— 作成されたのは、そうした Irʾib-^{d}IM と Li(mi)-šarra の存在があったからと考えられる。

IV. おわりに

エマル文書において功罪の対象となった匿名の「主」とは誰か。それはエマル王に他ならない。この結論はしかし、実に奇妙な結果をもたらす。すなわち王に対する罪に対し、王ではなく市神ニヌルタが罪人の財産を没収したという事態である。古代西アジアにおいてきわめて特異なこの制度は、エマルにおける市当局の権威の強さを物語る。ここで指摘すべきは、筆者の理解によると Zu-Aštarti (エマル文書中期) は市当局の権威を貶めて過激な中央集権化を進めた王であり、その後の王たち (同中期〜後期) も彼ほどではなかったが王権優位の体制を維持した (Yamada 2014, 80–83; 山田 2014, 45, 47–53 参照) という点である。そのような時代にも上記の没収制度が存続していたことは、驚くべきことと言えよう。ここからは、体制の変化にもかかわらず、市当局は王宮に対する自立性を完全には喪失しなかったことが窺われる (下記も参照)。

また、史料のうち初期の文書分析の過程においては、二つの公的権威間の関係を考える上で重要な「発見」があったので、これも整理しておこう。第一に、両者が関与する R&U 文書を作成する際、どちらの系統の書記が書くかばかりか、どちらの系統の「流儀」に従うかも重要であることが挙げられる。上記した *RE* 16 で市当局系の流儀に従った王宮系書記 Abi-kapi と *RE* 2 および *TS* 1 で王宮系の流儀に従った市当局系書記 Dagan-EN の事例 (II.2 および注 21) は、書記の系統だけに注目したのでは説明困難である。これらは同じ R&U 文書であっても、いや両方の権威が重なる R&U 文書だからこそ、どちらの系統主導で作成するかによって文書の仕上がり方に差異が生じたことを我々に教えてくれる。

第二は、二つの公的権威間に見られた確執である。特に市当局系の文書では、王宮系が用いた「主」(すなわち王) 単独ではなく、「市」と「主」という形で「市」が付され、しかも「主」に優

41 しかし ^{lú}*ḫazannu*「市長」(LN-104: 42; *TS* 87: 33–34) ではなかった。筆者は、Irʾib-^{d}IM 家の当主でない Rašap-ili は市当局系書記であったろうと考える (Yamada 2013, 128 n. 16)。

先されていた[42]。また R&U 文書であっても、王家の印章が押印されることはなかった (*RE* 16, 34; また cf. LN-104)。これらの点からは市当局が王宮に対し強い対抗意識を有していた状況が看取され[43]、彼らはまるでエマルを二元的体制 (それも市当局優位の) と見なしていたかの如くである。他方、上記 Abi-kapi が *RE* 16 を書いた際、「彼の主とエマル市」(11 行) と拡張表現を用いつつも「主」を先行させたことは、こうした動きに対する王宮系側の反発として理解される。また同文書では財産没収が「彼 (罪人) はニヌルタ神に与 [え] た」(14 行) と表現されているが、おそらくこれも市神を没収行為の主体として描くことを忌避した結果であろう。

エマル文書の時代を通じて、王は常にエマルの頂点に君臨する「主 (君)」であった。これは市当局自身も認めるところである。しかし彼らは王宮の単なる下部機関ではなかった。今見たように少なくとも初期には、両者が相互に対抗関係にあった状況が窺われるのである。ただし、王に対する勲功に報いるため王自らが Irʾib-^{d}IM の子孫を高位の聖職に任命した際には、任命権者が王であったため、市当局といえども任命の際の言及は「王とエマル市」(LN-104: 20) と、「エマル市」は付与しても逆順にはできなかった模様である。とはいえその任命が正式決定されるには市当局の「承認」が必要であったと考えられ、この「エマル市」への言及とニヌルタ神の印章の押印は、こうした状況を反映するものと見なせよう。

これに関連して最後に強調しておくべきは、*Emar* VI 17 に対する同神の印章の押印である。上記の如く Zu-Aštarti は過激な中央集権化を進めた王であったが、その彼をもってしても祭司任命に際しニヌルタ神の印章を無視することができなかった (しかも偽造までして押印した？) という点は重要である。この事実は、市当局による「承認」の伝統がそれだけ強かったことを示唆しよう。今回の研究は、エマルにおける頑強な市当局の権威の存在および存続を再確認させることにもなったのである。

参照文献

Adamthwaite, M. R. 2001: *Late Hittite Emar: The Chronology, Synchronisms, and Socio-Political Aspects of a Late Bronze Age Fortress Town*, ANESS 8, Leuven.

Arnaud, D. 1985–86: *Recherches au pays d'Aštata: Emar* VI.1–3, Paris.

Arnaud, D. 1987: "La Syrie du moyen-Euphrate sous le protectorat hittite: contrats de droit privé," *AuOr* 5, 211–241.

Arnaud, D. 1991: *Textes syriens de l'âge du Bronze récent*, AuOrS 1, Sabadell.

42 LN-104 (U′! 文書) では勲功の実質的な受益者が王であったにもかかわらず、この表現が認められる。この事例に関しては直接的な比較材料を欠くものの、*Emar* VI 17 には「(エマル人は) 彼らの主 (君) に対し (反乱) 勢力を形成した」(6–7 行 [上記 I 参照]) および「彼ら (2 人の通報者) はエマル王、彼らの主 (君) (*be-li-šu-nu*) Zu-Aštarti のもとに行った」(12–13 行) とある。これらの記事から見て、この R′ 文書において彼らの勲功が「主 (君)」単独に対するものとして捉えられていたことは疑いえない。

43 *RE* 34 において家の売却者に言及する際、Alal-abu が通常の「長老たち」の代わりに「大人たち」(14 行) を使用したことは既に注 6 で指摘した。U 文書 *TS* 19: 11 で彼自身が使用しているように、「長老たち」は市当局系書記にとっても通常の用語である。この点を考慮すると、ここでの「大人たち」の使用は「長老たち」の何らかの誇大表現であった可能性がある。

Beckman, G. 1996: *Texts from the Vicinity of Emar in the Collection of Jonathan Rosen*, History of the Ancient Near East/Monographs II, Padova.

Beyer, D. 2001: *Emar* IV: *Les sceaux*, OBO/Series Archaeologica 20, Fribourg and Göttingen.

Chambon, G. 2008: "L'écriture des mesures de longueur à Emar," in d'Alfonso et al. 2008, 141–151.

Cohen, Y., and L. d'Alfonso 2008: "The Duration of the Emar Archives and the Relative and Absolute Chronology of the City," in d'Alfonso et al. 2008, 3–25.

Cohen, Y., and M. Viano 2016: "A Land-grant Document from Emar: A (Re-)edition and Discussion of LN-104 (AKA Gs-Kutscher 6)," *Kaskal* 13, 57–71.

d'Alfonso, L., et al. (eds.) 2008: *The City of Emar among the Late Bronze Age Empires: History, Landscape, and Society*, AOAT 349, Münster.

Démare-Lafont, S. 2008: "The king and the Diviner at Emar," in d'Alfonso et al. 2008, 207–217.

Durand, J.-M., and L. Marti 2003: "Chroniques du Moyen-Euphrate 2: relecture de documents d'Ekalte, Émar et Tuttul," *RA* 97, 141–180.

Endesfelder, M. 2017: "Die Institutionen in den syrischen Immobiliartransaktionen aus Emar," *ZA* 107, 35–88.

Fleming, D. E. 2002: "Schloen's Patrimonial Pyramid: Explaining Bronze Age Society," *BASOR* 328, 73–80.

Ishida, K. 2017–18: "Seal Impressions on the Cuneiform Tablets from the Middle Euphrates Region in the Hirayama Collection," *BAOM* 37, 13–86.

Jursa, M. 2001: "Kollationen," *NABU* 2001/102.

Magdalene, F. R. 2014: "Trying the Crime of Abuse of Royal Authority in the Divine Courtroom and the Incident of Naboth's Vineyard," in A. Mermelstein and S. E. Holtz (eds.), *The Divine Courtroom in Comparative Perspective*, Leiden and Boston, 167–245.

Magdalene, F. R., et al. 2019: *Fault, Responsibility, and Administrative Law in Late Babylonian Legal Texts*, MC 23, University Park, Pa.

Mori, L. 2003: *Reconstructing the Emar Landscape*, Quaderni di Geografia Storica 6, Rome.

Na'aman, N. 2008: "Naboth's Vineyard and the Foundation of Jezreel," *JSOT* 33, 197–218.

Niedorf, C. 2008: *Die mittelbabylonischen Rechtsurkunden aus Alalaḫ (Schicht IV)*, AOAT 352, Münster.

Pentiuc, E. J. 2001: *West Semitic Vocabulary in the Akkadian Texts from Emar*, Harvard Semitic Studies 49, Winona Lake, Ind.

Schloen, J. D. 2001: *The House of the Father as Fact and Symbol: Patrimonialism in Ugarit and the Ancient Near East*, Winona Lake, Ind.

Sigrist, M. 1993: "Seven Emar Tablets," in A. F. Rainey (ed.), kinattūtu ša dārâti: *Raphael Kutscher Memorial Volume*, Tel Aviv, 165–187, Pls. II–VIII.

Steinkeller, P. 1999: "Land-Tenure Conditions in Third-Millennium Babylonia: The Problem of Regional Variation," in M. Hudson and B. A. Levine (eds.), *Urbanization and Land Ownership in the Ancient Near East*, Cambridge, Mass., 289–329.

Tsukimoto, A. 1990: "Akkadian Tablets in the Hirayama Collection (I)," *ASJ* 12, 177–259.

Tsukimoto, A. 1991: "Akkadian Tablets in the Hirayama Collection (II)," *ASJ* 13, 275–333.

Weidner, E. 1954–56: "Hochverrat gegen Nebukadnezar II.: Ein Grosswürdenträger vor dem Königsgericht," *AfO* 17: 1–9.

Westbrook, R. 2010: "Law in Kings," in A. Lemaire and B. Halpern (eds.), *The Books of Kings: Sources, Composition, Historiography and Reception*, VTS 129, Leiden and Boston, 445–466.

Westenholz, J. Goodnick 2000: *Cuneiform Inscriptions in the Collection of the Bible Lands Museum Jerusalem: The Emar Tablets*, CM 13, Groningen.

Yamada, M. 2013: “The Chronology of the Emar Texts Reassessed,” *Orient* 48, 125–156.

Yamada, M. 2014: “The Royal and Urban Authorities in Emar: A Diachronic Analysis of Their Relations,” *al-Rāfidān* 35, 73–108.

Yamada, M. 2017: “The Arana Documents from Emar Revisited,” *Orient* 52, 121–133.

山田雅道 1998:「エマル市とヒッタイト帝国：シリアの都市社会における自治と支配」『オリエント世界　–7 世紀』(岩波講座 世界歴史 2)、岩波書店、145–162.

山田雅道 2014:「エマルにおける王権拡大と市民反乱：ズ・アシュタルティ改革の衝撃」柴田大輔 (編)『楔形文字文化の世界』(月本明男先生退職記念献呈論文集 3)、聖公会出版、41–61.

前１１・１０世紀におけるアッシリア王国の衰退

柴田大輔
筑波大学人文社会系

はじめに

紀元前１２世紀の前半ごろ、西アジアにおいて破滅的な大変動が起こった。後期青銅器時代（前１５～１２世紀）において西アジアに覇権を握ってきた国々の多くが滅亡、あるいは急激に衰退したのである。気候変化との関連も推測されるこの大変動の震源地は、地中海沿岸部、そしてアナトリアだったようだ。この地域を支配していた超大国のヒッタイト帝国が急激に瓦解したほか、例えばウガリトのような有力な地方政権もこの時期に滅亡してしまった。大変動の余波は徐々に西アジアと北東アフリカ全域に及んで権力構造が劇的に交代し、やがて前１千年紀初頭における新しい国々の成立へと展開した。

一方、この大変動を生き延びた勢力もあった。その代表格が北東の覇者アッシリア王国である。アッシリア王国は前１１世紀後半から前１０世紀前半にかけて一時的に衰退したものの、なんとか艱難辛苦を乗り越えて前１０世紀後半～９世紀前半に劇的な復興を遂げた。その後の前８～７世紀、アッシリアが西アジア全域を支配するに至ったことは周知のとおりである。このエッセイはそのようなアッシリアの一時的な衰退について推察と憶測を交えながら予備的な考察を行いたい。まず、（１）衰退が本格的に進行したティグラトピレセル１世（前1114–1076年ごろ）の治世後半の状況について検討する。つぎに、（２）前１１世紀後半～１０世紀前半の衰退期においてアッシリア王国がどの程度の地域をどのような形で支配していたのかを考察する。この科学研究費年度報告書では、佐野克司と山田重郎がアッシリア王国復興のプロセスについて報告を重ねているが、そもそもいかなる状態から復興したと考えられるのかを検討することにより、遅ればせながらこの討論に私も参加してみたい。

ティグラトピレセル１世の治世後半における衰退の始まり

前述のマクロな大変動のほか、前１２世紀にはアッシリア国内において少なくとも三度のクーデターが起こり、隣国バビロニアを巻き込んだ「お家騒動」が連続した。この内外の難題ゆえにアッシリア王国は辺境領土の支配や近隣小国への影響力をこの時期に喪失したが、少なくとも王国中心部たるティグリス・両ザブ川の流域とハブール川の流域におけるその支配は前１２世紀を通じて揺るぎなかったようだ。このように堅固だったアッシリア王国の属領統治体制の要は、その行政州制度にあったといってよい。前１４世紀から１３世紀にかけて、新興の領域国家アッシリア王国は征

服した領土を行政州に分割し、アッシュル中央政府から知事を派遣してそれぞれ統治した。この行政州制度の崩壊と再建こそが、アッシリアの衰退と復興における重要主題になる。

連続したクーデータも関係するのであろう、トゥクルティ・ニヌルタ 1 世（前 1233–1197 年ごろ）の暗殺以後、どうやらアッシリア軍は大規模な軍事遠征を活発には行えなかったようだ。しかし、アッシュル・レシャ・イシ 1 世（前 1132–1115 年ごろ）の治世より各地への遠征が復活し、続くティグラトピレセル 1 世の治世前半には大王トゥクルティ・ニヌルタ 1 世の最盛期をも凌駕する大遠征が次々に実施された。北はヴァン湖の北岸、東はザグロス山脈の内奥、南はバビロニア、そして西は地中海に至る広大な領域で軍事活動が繰り広げられたのだ。皮肉にも大変動によってヒッタイト帝国をはじめとするかつての強敵たちの大半が滅亡し、その後には（バビロニアを除くと）地方領主が治める小国や緩やかな部族連合しかおらず、誰もアッシリア軍の侵略を阻むことができなくなっていた。

しかし、この大遠征にもかかわらず、ティグラトピレセル 1 世の治世にアッシリアの衰退ははじまった。その要因は他の大国の侵略などではない。アッシリアの西方領土にはストゥ人（*Suti'u*）、あるいはアフラム人（*Aḫlamû*）などと総称された季節遊牧を生業にした諸部族がおり、アッシリアの行政州は緊張関係を持ちつつも彼らとある程度共生してきた。しかし、アッシュル・レシャ・イシ 1 世が軍事活動を再開した時、これらの季節遊牧民はアッシリア軍の脅威の一つになっていた（RIMA I A.0.86.1: 6）。ティグラトピレセル 1 世もその碑文においてアフラム人、そしてアラム人（*Arumû* など）と呼ばれた武装した季節遊牧民との合戦に言及しており、そしてこれを毎度みごとに撃退したと誇っている。しかし史料からは、ゲリラ戦法を繰り返したアラム系の武装集団に対してアッシリア軍は徐々に劣勢になり、ティグラトピレセル 1 世の治世第三四半期には西方行政州の中心部であるハブール川の流域ですら戦場になったこと（A.0.89.7: iii 1–32）、第四四半期になると中心部であるティグリス川・ザブ川の流域がアラム系の武装集団に蹂躙されたことが読み取れる（Grayson 1975: 189; Glassner 2004: 188f.）。ほか、ティグラトピレセル 1 世は治世の後半になると急遽、アッシュルやニネヴェの防御施設を補強していることから、脅威はこれら中心部の大都市にも及んでいたと考えられる（RIMA II A.0.87.3: 36-44, A.0.87.10: 54–62）。なお、アラム系の季節遊牧民の大移動と都市襲撃は前１２世紀の大変動に起因すると考えられる。その意味でアッシリアの衰退は「遅れてきた大変動」とも呼べるだろう。

このように治安が徐々に悪化する中、アッシリアの領土統治はどのように変化したのだろうか。ティグラトピレセル 1 世の治世からも行政記録は発見されており、特に王宮家宰（*abarakku*）のアーカイブとアッシュル神殿の規定供物（*gina'u*）に関するアーカイブは、前１２世紀前半からティグラトピレセル 1 世治世に至る記録を内包している。分けても後者のアーカイブは、各行政州からアッシュル神殿に定期的に奉納された物資（食材）の管理に関する記録であるため、ここから、アッシリア行政州の制度と変遷をある程度解明できる。問題は個々の文書の年代になる。ティグラトピレセル 1 世の治世における紀年官（*līmu/limmu*）の正確な順番はいまだに確定していないものの、ヘルムート・フライダンクらによる地道な研究により、その大まかな位置と順番が判明しつつある。それ

によれば、ティグラトピレセル 1 世の治世中頃までは規定供物のアーカイブも記録が連続しており、そこから行政州制度の存続が確証できる。問題は記録が断絶した時期である。紀年官表 KAV 21 iii 1′–11′ にはティグラトピレセル 1 世の治世最後の１１年間における紀年官名の一部が残っているが、これらの治世末期の１１年間に作成された文書が規定供物のアーカイブには含まれないことから、アッシュル神殿の規定供物のアーカイブに内包される最末期の文書（おそらく紀年官 Sakipšunu の年に作成された MARV VIII 46）の年代は、ティグラトピレセル 1 世の治世第三四半期に推定される（Freydank 2016: 102–129）。百年ほども続いたアッシュル神殿規定供物の記録がここで途切れたことになる（なお、王宮家宰のアーカイブの方も治世第三四半期で断絶しているようだ。規定供物のアーカイブよりは若干長く続いているが）。

どうして記録は断絶したのだろうか。無論、その原因を突き止めることは難しい。何かの理由で以後の記録が別の場所に保管され、それがたまたま残らなかった、あるいは発見されなかった可能性も排除できない。しかし、上述した当時の政治状況を考慮すれば、行政州が必要な物資をもはや提供できなくなったとする解釈（Freydank 2016: 123f.）も一定の説得力を持つだろう。前１１世紀において中心部を除くアッシリア行政州のガバナンスが失われたことに間違いはないが、もしかしたら、ティグラトピレセル 1 世の治世第三四半期ごろにその大きなターニングポイントがあったのかもしれない。

さて、こういった政治的苦境に対し、ティグラトピレセル 1 世政権も手をこまねいていたわけではない。オスロの古物蒐集家スコーエンが持つ楔形文字文書の中に、ティグラトピレセル 1 世の治世３６年（前 1079 年）に年代づけられる紀年官 Aššur-ša’issunu（あるいは Aššur-ba’issunu の誤記？）の年に作成された同王の碑文があり、そこでは Pakute という名の都市の要塞化、そして「王宮」建設が記念されている（CUSAS 17 nos. 68 and 69）。マーケットを通じて表に出たこの碑文の出土地は不明だったが、近年になってジェスパー・アイデムにより、小ザブ川上流のラーニヤ盆地に建造されたドゥカン・ダム湖周辺にこの碑文が由来すること、そしてもっとも有力な出土地候補が Tell Basmusiyan 遺跡（現在はドゥカン・ダム湖の小島）であることが報告されている（Eidem 2018）。つまり、Pakute はラーニヤ盆地に位置し、おそらくは Tell Basmusiyan 遺跡と同定できる。ラーニヤ盆地は前２千年紀後半のアッシリアの勢力圏における東の辺境に相当する。この辺境にティグラトピレセル 1 世は要塞を建設したのである。

ここで想起されるものが、同じくティグラトピレセル 1 世が建設したという西の辺境ユーフラテス川大湾曲部の要塞である。後述する通り、シャルマネセル３世（前 858–824 年）の碑文によれば、ティグラトピレセル 1 世はユーフラテス川の西岸と東岸に Pitru と Mutkinu という要塞を建設したという（RIMA III A.0.102.2: ii 35–40）。ユーフラテス川大湾曲部は当時のアッシリアにとって西の辺境に相当するが、ティグラトピレセル 1 世の治世にこの地域が行政州として統治されていた可能性は極めて低い。これら Pakute、Pitru、Mutkinu は、前１０～９世紀の復興期の王たちが頻繁に建造したような前哨基地（outpost）であったと解するのが妥当であろう。つまり、アッシリアの（広い意味での）勢力圏の東と西の境界に建設され、これらの要地において地元の勢力に睨みを利かせるとともに、交易の拠点にもなった可能性のある一種

の包領（enclave）である。

後述するように、ティグラトピレセル 1 世の死後もアッシュルナツィルパル 1 世の治世（前 1049–1031 年）まではアッシリア軍も軍事活動を実施しており、アッシリアは低迷しつつも一定の領域支配をおこなっていたことがわかっている。ニネヴェやアルバイルのような中心地を除くと、かつての行政州制度は崩壊したと考えてよいが、どうやらその後も各地の要所には包領／前線基地が残り（あるいは新たに建造され）、緩やかな領域支配を継続していたようだ。面的な行政州から、点的な前哨基地・包領への転換である。周知の通り、後者はマリオ・リベラーニが 1988 年の論文で提案した領土統治モデルであり、前者はニコラス・ポストゲイトがその反論として 1992 年に提案したモデルである。もし前述した行政記録の停止に関する解釈が正しいのなら、ティグラトピレセル 1 世の治世第三四半期ごろを中心にそのような「面から点への」転換が進んでいったとも推測できる。

衰退期におけるアッシリアの領土

ティグラトピレセル 1 世の死後も、アッシュルナツィルパル 1 世の治世まではアッシリアの軍事活動もおこなわれていた。ベルリンの西アジア博物館に保管される未出版のアッシュル出土歴史文書を校訂したエッカート・フラムは、クロニクルの断片（KAL III 61）に残る山岳地帯（Ḫabḫu）への遠征の記事がこの王の治世に帰属することを明らかにしている（Frahm 2009: 118–121）。このクロニクル断片を手掛かりにしてフラムはさらに、作成した王の同定について論争が続いていたホワイト・オベリスク（RIMA II A.0.101.18）も、アッシュルナツィルパル 2 世ではなく、むしろ 1 世の碑文なのではないかと論じる（Frahm 2009: 121–122）。

しかし、このアッシュルナツィルパル 1 世を最後にアッシリア軍の活動記録が止まる。シャルマネセル 2 世（前 1030–1019 年）からティグラトピレセル 2 世（前 966–935 年）の治世までの約百年間の間、アッシリア王の記念碑文が発見されていないのだ。アッシュルからは王の記念碑文が数多く発見されていることを考えると、これが発見の偶然性に起因するとは考え難い。また、これらの王たちの中にはアッシュル・ラビ 2 世（前 1012–972 年）とティグラトピレセル 2 世（前 966–935 年）を筆頭に在位の長い王たちが含まれることも、記念碑文の欠如が異様であることを明示する。多くの専門家が論じているように、これらの王たちの治世には「記念」に値する活動（なかんずく軍事活動）が実施されなかったと解釈できそうだ（例えば Frahm 2017: 166）。

遅くともティグラトピレセル 2 世の治世末期までにアッシリア王国がかつての領土の多くを喪失していたことは、続くアッシュル・ダン 2 世の治世に開始された再征服遠征によって明示される。アッシュル・ダン 2 世の年代記（RIMA II A.0.98.1）によれば、彼はティグリス川東岸を小ザブ川の河口付近から南へと遠征し、さらに現代のジズレ市近辺の丘陵地帯 Katmuḫu 国、ニネヴェの北東に広がる丘陵地帯の Muṣru、アルバイル市の東に広がる丘陵地帯の Ḫabriuru などにも遠征をおこなった —— これらの地域は前 2 千年紀後半においてアッシリアの支配下に置かれていた。自らの軍事業績を誇るアッシュル・ダン 2 世の年代記は、当時アッシリア王国がこれらの旧領土の支配権を喪失していた事実を証言している。

さらに、前 9 〜 8 世紀の復興期の王たちは、自

らの事績を誇る傍で、シャルマネセル２世からティグラトピレセル２世の治世までの約百年間における屈辱的な失態も記録している（表 1）。

確かに王位簒奪などの経緯で即位した王は前任者の失態を捏造したりもしているが、これらの王たちは全て直系であり、自らの父祖である先王たちの失態を捏造すべき理由はない。これらの失態は実際に起こったと考えてよかろう。すなわち、前１１世紀後半～１０世紀前半にアッシリア王国の領土は徐々に喪失していったのだ。

では、この衰退期のアッシリア王国は具体的にどの地域にどの程度の広がりを領有し、またそれをどのように統治していたのであろうか。この問題の解明は極めて難しい。前述の通り、記録の停止こそがこの時期の最大の特徴であるため、どうしても後代に由来するまばらな史料から得られる情報を「空想」で補わざるを得ない。このように不確かな推論に留まることを自覚しつつ、以下に手がかりを整理する。

まず、うえにまとめたこの時期における領土喪失の記録＝記憶からは、遅くともアッシュル・ラビ２世の治世まではティグリス川中下流域の東岸、そして何よりもユーラフテス川大湾曲部（西岸を含む！）に何らかの形で領土を保持していたことが示唆される。両地域とも前２千年紀後半のアッシリア領土では辺境に相当する。カシヤリ山麓の Gidara / Raqamatu 市を強奪された王がティグラトピレセル 1 世か２世かは判然としないが、２世であった可能性も残る。いずれにせよ、衰退期になってもアッシリアは辺境まで何らかの形で領土を保持していたようだ。その一方で、首都アッシュルにより近い小ザブ川河口付近がすでにシャルマネセル２世の治世から脅威にさらされていたという情報も看過できない。これらの情報からは、衰退期におけるアッシリア王国の「領土」が中央から外部へと面的に広がるものでは「なかった」ことを読み取れるだろう。前述の通り、ティグラトピレセル 1 世がユーフラテス川の河岸に建設した Pitru と Mutkinu は行政州の州都などではなく、西の辺境における前哨基地だったと考えられる。まとめると、衰退期における領土喪失の記録は、アッシリアの前哨基地や包領が衰退期の後半まで

表１　衰退期における領土喪失に関する記録

アッシリア王の治世	事件	史料（RIMA）
シャルマネセル（２世）の治世以後	小ザブ川がティグリス川へと流れ込む河口付近（Ruqaḫu 国？：Bagg 2017: 512 sub Ruqāḫu）がある部族（名前は欠損）によって蹂躙	A.0.98.1: 16–18 (Aššur-dan II)
アッシュル・ラビ（２世）の治世以後	ティグリス川の東岸（おそらくティグリス川・Ebiḫ 山［現在のハムリン山］・Radānu 川［現在のアダイム川］の中間付近［Yaḫanu 国：Bagg 2017: 268 sub Jaḫānu 2］）の町々がアラム系の部族によって占拠	A.0.98.1: 23–25 (Aššur-dan II)
アッシュル・ラビ（２世）の治世	ユーフラテス川大湾曲部にティグラトピレセル（１世）が建設した Pitru（ユーフラテス川西岸・Sagura 川の畔）と Mutkinu（ユーフラテス川東岸）が強奪	A.0.102.2: ii 35–40 (Shalmaneser III)
ティグラトピレセル（２世もしくは１世）の治世	カシヤリ山（現在のトゥルアブディン）の麓の Gidara (aka Raqamatu)（おそらく現在の Guǧday 村付近）がアラム人によって強奪	A.0.99.2: 52–53 (Adad-nerari II)

ある程度存続していたことを示唆する。

この点で非常に興味深い別な事例が、アッシュルナツィルパル２世の遠征記録に言及される、ティグリス川上位流域の「アッシリア人」居住地である。

「シャルマネセル（１世／２世）、アッシリア王、私より前に（在位していた）君主がḪalziluḫa 市に居住させたアッシリア人の人々（と）彼らの領主 Ḫulaya が、叛乱を起こした。（そして）彼らは私の王都 Damdammusa を占領しに行った」
（LÚ.MEŠ-*e* KUR *áš-šu-ra-a-a* ^{m}*ḫu-la-a-a* ^{lú}EN-URU-*šú-nu šá* ^{m}DI-*ma-nu*-SAG MAN KUR *aš-šur* NUN *a-lik pa-ni-a* $^{(103)}$ *ina* ^{uru}*ḫal-zi-lu-ḫa ú-šá-aṣ-bi-tu-šú-nu-ni i-ta-bal-ku-tú* ^{uru}*da-am-da-mu-sa* URU MAN-*ti-a a-na aṣ-ba-te il-li-ku*）(RIMA II A.0.101.1: i 102–103)

「Sinabu 市（と）Tidu 市、（すなわち）シャルマネセル（１世／２世）、アッシリア王、私より前に（在位していた）君主がナイリ国に対処して（住民を）居住させた（が）、アラム人が力づくで奪い去ってしまった砦を私は自ら（の所有）に戻した」
（^{uru}*si-na-bu* ^{uru}*ti-i-du bi-ra-a-te šá* $^{(93)}$ $^{m.d}$DI-*ma-nu*-SAG MAN KUR *aš-šur* NUN *a-lik* IGI-*ia ana* KUR *na-i-ri ú-šá-aṣ-bi-tú-ni šá* KUR *a-ru-mu ina dan-na-ni e-ki-mu-ni a-na* $^{(94)}$ *ra-me-ni-ia ú-ut-te-ra*）（RIMA II A.0.101.19: 92–94）

両方の記録とも、シャルマネセル１世あるいは２世がこの地に建設した植民都市について言及している。特に前者は、居住させられた住民が「アッシリア人」であったことを明言したうえで、アッシュルナツィルパル２世の治世（正確には治世２年［前 882 年］）までこれらの住民の子孫がその領主（*bēl āli*）の統治のもとに居住し続けていたこと、しかし叛乱を起こして別なアッシリアの前哨基地である Damdammusa 市を占拠してしまったことを証言している。もちろん、シャルマネセルが植民させたとされるこの「アッシリア人」がエスニックな意でのアッシリア系住民なのか、それともアッシリア王国に服属する人民程度をさしているのかで、この情報の意味はかわる。しかし何れにせよ、かつてアッシリア王国がこの地域に植民させた共同体の子孫が何らかの形でアッシュルナツィルパル２世の治世初期まで存続していたこと、ただしアッシリア王国との関係は不安定であったことが示される。後者の事例に言及される Sinabu 市と Tidu 市はこの後にティグリス川上流域の重要な前哨基地、さらには行政州都になる都市だが、これらの両都市も、もともとはシャルマネセルが住民（おそらくは前者の Ḫalziluḫa 市と同様の「アッシリア人」）を植民させた居住地であり、ただ、こちらは（時期は不明だが）アラム人の手によってすでに陥落していたという。断片的な情報だが、シャルマネセルがこの地域に住民（少なくとも一部は「アッシリア人」）を植民させており、その一部は衰退期を生き残って前９世紀初頭まで存続していたようだ。

この記録に関するもう一つの重要な論点は、これらの植民居住地を建設したシャルマネセルの正体である。前１３世紀中頃に在位し、領土拡大を成した遂げた王の一人であるシャルマネセル１世（前 1263–1234 年ごろ）か、あるいは衰退期最初の王のシャルマネセル２世かで、衰退期におけるティグリス川上流域の状況は大きく変わる。残念ながらこの論点についても決定的な情報はな

く、専門家の見解も別れている（e.g. Radner and Schachner 2001: 757f. [first]; Parker 2001: 167 with fn. 772 [second]）。もしシャルマネセル２世がティグリス川上流域における居住地建造を成し遂げていたのなら、それを碑文に書き残したのではないか、という消極的な論拠から、私はどちらかというとシャルマネセル１世説に惹かれる。

前１０世紀後半以降における王の遠征先も、衰退期におけるアッシリア領土を考察する手がかりになる。アッシュル・ダン２世たちが遠征「しなかった」地域である。もちろんこれも消極的な論拠に過ぎないが、これらの地域は復興期に至るまでアッシリアの支配下にあり続けた可能性がある。すくなくとも、遠征の出発地にもなっているニネヴェやアルバイルのような中心地の大都市とその後背地は衰退期を通じてアッシリアの領土だったと考えてよいだろう。この点で不確かではあるものの、考察に値する地域がハブール三角州の東部と南部である。周知の通り、アダド・ネラリ２世は前 901 年から 894 年にかけてハニガルバトに対する大遠征を行っており、彼の年代記はその戦果を高らかに誇っている（RIMA II A.0.99.2: 39–90 and 97–119; cf. e.g. Fales 2012: 106–110）。ただし、この遠征で激しい戦闘が繰り広げられたハニガルバトとは、実質的にハブール三角州北端のカシヤリ山麓と同山中の町々であり、どうやらハブール三角州のほかの地域における戦闘はおこなわれなかったようだ。続くトゥクルティ・ニヌルタ２世の治世においてもこの地域における戦争の記録は皆無なのだが、その一方で、この地域の拠点である Kaḫat 市（現在の Tell Barri 遺跡）からはトゥクルティ・ニヌルタ２世の短い碑文が発見されており、この王が同都市に地方行政府（「王宮」）を建設したことがわかっている（RIMA II A.0.100.9）。少なくとも、アダド・ネラリ２世やトゥクルティ・ニヌルタ２世の治世にはアッシリアに抵抗する勢力がこの地域にいなかったと解釈してよいだろう。もしかしたら、そもそもこの地域が衰退期を通じ何らかの形でアッシリアの支配下にあった可能性もある。

ただし、繰り返すようだがティグラトピレセル２世の治世末期までに旧領土の大半が他の勢力の統治下に置かれていたことは間違いない。復興期の王たちによる遠征の記録を見ると、どうやらそういった勢力の多くは細かく分化した部族（特にアラム系）であり、それら部族の柔らかな連合だったようだ。一方、地方王国とでも呼ぶべき都市国家、あるいは小規模な領域国家も各地に散在していた。それら地方王国のうち、ハブール川中下流域の (Ša)dikanni 市（Tell ʾAğağa 遺跡）、そして小ザブ川上流の北岸に位置する Idu 市（Satu Qala 遺跡）を統治していた政権については同時代の碑文が発見されている。Šadikanni の領主 Bel-ereš の碑文（RIMA II A.0.96.2001）、そして Idu の領主たちの碑文（van Soldt et al. 2013; Pappi 2018）である。両都市とも前２千年紀後半はアッシリアの行政州都になっていたが、これらの碑文によればアッシリアの衰退期にそれぞれ独立し、地元の領主によって統治され、さらにその支配は周辺にも広げられていた。うち、Šadikanni の王朝の領主たちは、アッシュル・ラビ２世、そしてアッシュル・レシャ・イシ２世に臣従していたことが碑文から判明する。つまりは、これら二人のアッシリア王が在位していた衰退期の最中にあっても、アッシリアはハブールの地方王国に一定の影響力を持っていたといえる。

以上の通り、衰退期に関する情報は極めて断片的であり、そこから何らかの決定的な結論を導くこと

は難しい。しかし、アッシリア王国が衰退期にあっても中心部の外に前哨基地や包領のような形態で何らかの領土を保持していたこと、それらの領土は徐々に喪失していったが、一部は衰退期を持ちこたえた可能性もあることは、指摘してよいだろう。

おわりに

以上、「予備的」考察ということで、一部大胆な憶測を加えながら徒然なるままにいくつかの論点をそこはかとなく書きつけた。ただし、各地域の遺跡におけるこの時代の層位から発見される物質文化についてはまったくふれなかった。実際にはそれぞれの地域におけるローカルな物質文化の出現などが報告されており（例えばティグリス川上流［Roaf and Schahner 2005］）、この問題を考えるうえで非常に重要な手がかりになる。そういった考古学の成果も含めながら、今後、紀元前２・１千年紀の交代時における社会秩序の崩壊と再建について調べてみたい。

参考文献

Bagg, A. 2017: *Die Orts- und Gewässernamen der neuassyrischen Zeit* Teil 2: *Zentralassyrien und benachbarte Gebiete, Ägypten und die arabische Halbinsel*, RGTC 7/2, Reichert Verlag

Grayson, A. K. 1975: *Assyrian and Babylonian Chronicles, Texts from Cuneiform Sources* 5, J. J. Augustin Publisher

Glassner, J.-J. 2004: *Mesopotamian Chronicles,* Writings from the Ancient World 19, Society of Biblical Literature

Eidem, J. 2018: “Pakute – an Assyrian ‘Ghost Castle’ on the Rania Plain,” *Ash-Sharq* 2/2, 30–42

Fales, M. 2012: “‘Ḫanigalbat’ in the Early Neo-Assyrian Royal Inscriptions: A Retrospective View,” in: G. Galil et al. (eds.), *The Ancient Near East in the 12th–10th Centuries BCE: Culture and History*, AOAT 392, Ugarit-Verlag, 99–119

Frahm 2009: *Keilschrifttexte aus Assur literarischen Inhalts* III: *Historische und historisch-literarische Texte*, WVDOG 121, Harrassowitz Verlag

Frahm 2017: “The Neo-Assyrian Period (ca. 1000–609 bce),” in: E. Frahm (ed.), *A Companion to Assyria, Wiley Blackwell*, 161–208

Freydank, H. 2016: *Assyrische Jahresbeamte des* 12. *Jh. v. Chr.: Eponymen von Tukultī-Ninurta I. bis Tukultī-apil-ešarra I.*, AOAT 429, Ugarit Verlag

Liverani, M. 1988: “The Growth of the Assyrian Empire in the Habur/Middle Euphrates Area: A New Paradigm,” *SAAB* 2, 81–98

Parker, B. J. 2001: *The Mechanics of Empire: The Northern Frontier of Assyria as a Case Study in Imperial Dynamics*, The Neo-Assyrian Text Corpus Project

Pappi, C. 2018: “The Land of Idu: City, Province, or Kingdom?,” *SAAB* 24, 97–123

Postgate, J. N. 1992: “The Land of Assur and the Yoke of Assur,” *World Archaeology* 23, 247–263

Radner, K. and A. Schachner 2001: “From Tušhan to Amēdi: Topographical Questions Concerning the Upper Tigris Region in the Assyrian Period,” in: N. Tuna and J. Velibeyoğlu (eds.), *Salvage Project of the Archaeological Heritage of the Ilısu and Carchemish Dam Reservoirs, Activities 1999*, Middle East Technical University, 729–776

Roaf and Schahner 2005 “The Bronze Age to Iron Age transition in the Upper Tigris Region: new information from Ziyaret Tepe and Giricano,” in: A. Çilingiroğlu and G. Darbyshire (eds.), *Anatolian Iron Ages* 5, British Institute at Ankara, 115–124

van Soldt, W. H. et al. 2011: “Satu Qala: A Preliminary Report on the Seasons 2010–2011,” *Anatolica* 39, 197–239

アダド・ニラリ 2 世による都市 Naṣibina の征服

佐野克司
筑波大学人文社会系

報告者は、新アッシリア時代になって再び勢力を回復したアッシリアがどのように領土を拡大していったのか、その詳細解明を目的とした研究を山田重郎教授と行っている。この目的を実現するためには、アッシリアが領土を拡大していく過程で支配下に置いた数多くの敵の国や都市を、それぞれどのように支配したのかを調査する必要がある。アッシリア王碑文には、アッシリア王が行った軍事遠征に関する詳細な記録が含まれていることから、「直接支配」および「間接支配」を示す表現を手掛かりとして、多くの場所におけるアッシリアの支配形態を明らかにすることが可能である。しかしながら、現代の碑文の読者には理解しがたい表現によって報告されている場所も少なからず存在しており、そのような場合には困難を伴う。理解しがたい碑文の表現に関して、われわれは必ずしも共通の見解を有しているわけではないため、今後、研究を進めていく過程において、関連する事例については議論を交わし、問題を一つ一つ解決していかなくてはならない。そこで、本報告書では、現在報告者が山田教授とは異なる見解を有している事例の一つを取り上げ、今後、われわれが具体的にどのようなことを議論していくのか、その内容の一端を公開したい。同時にこの事例を通して、われわれが行う共同研究が、新アッシリア帝国の「行政州の確立・分割」に関する研究分野にも貢献し得ることを説明したい。新アッシリア時代における「行政州の確立・分割」に関する最初の体系的な研究は、今から 100 年前に E. Forrer によって提出された（Forrer 1920）。以来、彼の研究書が長きに渡って基本文献として利用されてきたが、近年 K. Radner が *Reallexikon der Assyriologie und vorderasiatischen Archäologie*（アッシリア学・近東考古学事典）の中でアッシリアの行政州に関する項目（Provinz. C. Assyrien）を執筆したことによって、多くの研究者は新たな史料集に基づいて調査されたデータにアクセスできるようになった（Radner 2006-2008）。新アッシリア時代におけるすべての行政州の確立や分割について簡潔な情報を含む Provinz. C. Assyrien は、出版以来、多くの研究者に批判されることなく利用されているが、私見によれば、この事典項目には有益な情報だけではなく、誤りも多数含まれている。以下では、報告者の二つの目的を実現するために、前 896 年にアダド・ニラリ 2 世が攻撃した都市 Naṣibina を事例として取り上げ、この都市が陥落後どのようにアッシリアに支配されたのかを考察する。都市 Naṣibina をめぐる問題を正確に理解

するため、先に RIMA における Grayson の英訳をそのまま引用する[1]。

> **(62)** In the eponymy of Adad-dān, with the rage of my strong weapons I marched a sixth time to the land Ḫanigalbat. **(63)** I confined Nūr-Adad, the Temannu, in the city Naṣibina (and) established seven redoubts around it. **(64)** I stationed therein Aššur-dīnī-amur, the commander-in-chief. **(65)** He (Nūr-Adad) had dug a moat, which had not previously existed, in bedrock all around it (the city). He had made (it) nine cubits wide and had dug it down to water-level. The wall was next to the moat. I encircled his moat with my warriors like a flame (and) they (the enemy) screamed like children about it. [I laid] traps as strong as the destructive deluge for him [and] deprived him of grain. By the command of the god Aššur, the great lord, my lord, I carried off from his city his [...], his gold, his property, precious stone of the mountain, his gods, chariots with teams of [horses], ..., **(70)** a staff, his battle-gear, a gold throne, polished gold dishes, decorated [couches with] inlay, weapons, … arrows, a gold tent befitting his sovereignty, [...] the weight of which I did not determine, and the extensive property of his palace. **(73)** [Afterwards ...] ... ascended his lordly throne. **(74)** Within his sanctum he slaughtered holy sacrifices, offered oxen, made a libation of best beer, (and) **(75)** completed the offering with holy sweet wine of the mountain. (Thus) he made his offerings and had himself exalted with elaborate praise: ‘In all lands kings are in sore distress (and) mountains shake!’ The king spoke humbly to his nobles: ‘The young man of Aššur, praise of his warriorship is exalted; his deeds are of the god Dagan; **(78-79)** the king who magnifies his praises!’ I brought back in my presence Nūr-Adad together with his extensive troops as hostages.[2] I granted cities with people to Assyria (and) counted them (URU.MEŠ-*ni iš-tu* UN.MEŠ KUR *aš-šur áš-ruq-šú-nu mi-nu-su am-nu*). **(80-81)** In this same eponymy, on that campaign of mine on which I brought back in my presence Nūr-Adad, the Temannu, together with his extensive troops as captives, I brought him to my land (and) into Nineveh.

S. Yamada、S. Parpola、A. Fuchs、K. Radner といった有力なアッシリア学者たちは、79 行目の文（下線部）を根拠として、Naṣibina（都市 Naṣibina（首都）とその周辺諸都市から構成される）はアダド・ニラリ 2 世によってアッシリアに併合されたと考えている（Yamada 2000, 69; Parpola 2004, 9; Fuchs 2007, 47; Radner 2006-2008, 52）。Yamada、Parpola、Fuchs は、Naṣibina の併合年についてのみ簡潔に言及しているが、Radner はさらに 64 行目の文を根拠として、行政州となった Naṣibina は *turtānu*（最高軍司令官）の支配下に置かれた、と述べている。

Naṣībīna (mod. Nusaybin) liegt im Ostteil des

1 Grayson 1991, 150-152 A.0.99.2: 62-81.

2 Grayson は 78 行目の *kīma šallati* を “as hosteges” と英訳しているが、これは明らかな間違いで、“as captives” と翻訳しなければならない。

Ḫābūr-Dreiecks und nimmt eine wichtige strategische Stellung an der Route nach Westen sowie durch den Ṭūr ʿAbdīn in Richtung Oberen Tigris ein. Das Gebiet wurde unter Adad-nērārī II. dem ass. Reich einverleibt und 896 zur Provinz gemacht; diese Provinz unterstand allerdings zunächst der Autorität des Generals (*turtānu*), wie die Inschriften Adad-nērārīs zeigen (RIMA 2, 151, 2: 64).[3]

しかしながら、アダド・ニラリ 2 世は 64 行目の文において、*turtānu* を戦略上重要な拠点に配置したと述べているだけである。アッシリアがこの都市を陥落させた後どのように支配したのかに関しては、73 行目以下の文に注意を払う必要がある。73 行目からは、欠損しているものの、ある人物が Naṣibina の王位に就いたことが理解される。そして、74 行目から 78 行目までの文には、この人物が聖域で儀式を行い、彼に従属する貴族たちの前でアッシリア王を称えたことが記載されている。よって Naṣibina は、アッシリアの行政州となって *turtānu* の支配下に置かれたのではなく、現地の人物がアダド・ニラリ 2 世によって属国王に任命され、これによってアッシリアに間接的に支配された、と考えるほうが理にかなっている。Radner が Naṣibina には *turtānu* が支配者として配置されたと考えたのは、明らかに碑文の恣意的な解釈に基づいていると批判できるが、彼女が他のアッシリア学者たちと同様に Naṣibina がアッシリアに併合されたと主張したこと自体はそれほど不思議なことでない。なぜなら、79 行目の文は、これまで言語事典や史料集において、次のように翻訳されてきたからである。

1. CAD[4]
ālāni ištu nišē <ana> māt Aššur ašrukšunu
I gave the towns with their populations to Assyria.

2. Seidmann[5]
*ālāni ištu nišē <ana> māt Aššur ašru**q**šunu*[6] *minûssu<nu> amnu*
Die Städte mitsamt den Menschen schenkte ich dem Lande Assur, ihre Zahl zählte ich.

3. Grayson[7]
*ālāni ištu nišē māt Aššur ašru**q**šunu*[8] *minûssu*[9] *amnu*
I granted cities with people to Assyria (and) counted them.

4. Melville[10]
I presented them – cities with people – (to) Assyria and I counted them (among the Assyrians).

1 から 4 の翻訳は、確かに都市 Naṣibina とその周辺に位置する諸都市のアッシリアへの併合を意味している。しかしながら、報告者は、有力な

3 Radner 2006-2008, 52.

4 CAD Š/II, 43b.

5 Seidmann 1935, 26-27.

6 *áš-ruq-šú-nu* (*ašru**q**šunu*) の *ruq* は誤りである。正しくは *ruk* と表記しなければならない。

7 Grayson 1991, 151 A.0.99.2: 79.

8 脚注 5 を参照。

9 Grayson は Seidmann と同様に、*minûssu<nu>* の *<nu>* を補って翻訳しているが、テクストには *<nu>* を加えていない。

10 Melville 2006, 284.

アッシリア学者たちとは異なり、これらの翻訳を支持しない。なぜなら、当該の文について独自の解釈を有しているからである。すなわち、1 から 4 の翻訳者たちが *ālāni ištu nišē* を対格（Akkusativ）と見なしているのに対して、報告者はむしろ与格（Dativ）だと考える。加えて、*ašrukšunu* の対格接尾辞 *-šunu* が *ālāni ištu nišē* を意味していると考えている翻訳者たちとは異なり、報告者はこの *-šunu* は 78 行目で言及されている Nūr-Adad の軍隊（ÉRIN.ḪI.A.MEŠ）を指していると解釈する。かくして、報告者による 79 行目の文のノーマライゼーションと日本語訳は次のようになる。

<ana> ālāni ištu nišī[11] *māt Aššur ašrukšunu minûssu<nu> amnu*
私はアッシュル国の人々を有する諸都市（アッシリアの諸都市）に彼らを贈り、彼らの数を数えた。

報告者は、この自身の翻訳を根拠として、79 行目の文は都市 Naṣibina およびその周辺に位置する諸都市のアッシリアへの併合ではなく、Nūr-Adad の軍隊の、アッシリア内諸都市への「強制移住」を意味していると主張する。それでは、もし Naṣibina がアダド・ニラリ 2 世によって併合されなかったとすれば、いつアッシリアの行政州になったのか、という疑問が当然のことながら生じる。アダド・ニラリ 2 世に続く二人のアッシリア王、トゥクルティ・ニヌルタ 2 世（前 890-884 年）とアッシュルナツィルパル 2 世（前 883-859 年）の時代の記録には都市 Naṣibina への言及がなく、この都市が次に歴史史料の中に現れるのはシャルマネセル 3 世（前 858-824 年）の時代になってからである。具体的には、「リンム表」と「リンム年代誌」に前 852 年の名祖として現れるシャマシュ・アブーアが「都市 Naṣibina（＝行政州 Naṣibina）の総督」という肩書を有している[12]。報告者は、この記載および先に言及した 79 行目の文に関する自己の解釈に基づいて、前 896 年以降アッシリアの属国としての地位を維持してきた Naṣibina は、シャルマネセル 3 世の治世初期、すなわち前 858 年から前 852 年の間に、アッシリアの行政州に移行したと想定する[13]。もし報告者の考えが正しいのであれば、行政州 Naṣibina の確立は従来考えられてきたよりも 40 年ほど遅かったことになり、このことは M. Liverani が 2004 年の論文の中で唱えた「伝統的国境内の領土はすべてアッシュルナツィルパル 2 世の時代に州行政システムに組み込まれた」という説を批判し得る証拠の一つとなる。それゆえ、報告者は、新アッシリア時代初期におけるアッシリアの拡大プロセスを正しく理解するためにも、今後、行政州 Naṣibina の確立年代について山田教授と議論したいと考えている。

参考文献

Forrer, E. 1920: *Die Provinzeinteilung des assyrischen Reiches*, Leipzig.

Fuchs, A. 2007: “Mesopotamien und der Levanteraum im 10. und 9. Jh. v. Chr.,” in A.-M. Wittke, E. Olshausen, and R. Szydlak (eds.), *Historischer Atlas der antiken Welt*, Der Neue Pauly Supplemente Band 3, 46-47.

11　報告者は UN.MEŠ をバビロニア語で *nišī* と表記した。

12　Millard 1994, 27, 56; Glassner 166-167.

13　Naṣibina がアッシリアに反乱を起こした結果、属国から行政州に変えられたと考えられるが、シャルマネセル 3 世の王碑文はこの出来事について何も伝えていない。この理由にかんしては、Sano 2017 を参照。

Grayson, A. K. 1991: *Assyrian Rulers of the Early First Millennium BC, I (1114-859 BC)*, RIMA 2, Toronto.

Liverani, M. 2004: "Assyria in the Ninth Century: Continuity or Change?," in G. Frame and L. S. Wilding (eds.), *From the Upper Sea to the Lower Sea: Studies on the History of Assyria and Babylonia in Honour of A. K. Grayson*, Leiden, 213-226.

Melville, S. C. 2006: "Neo-Assyrian and Syro-Palestinian Texts I. Neo-Assyrian Texts I. A. Adad-nirari II," in M. W. Chavalas (ed.), *The Ancient Near East. Historical Sources in Translation*, Padstow, 280-285.

Millard, A. R. 1994: *The Eponyms of the Assyrian Empire 910-612 BC*, SAA 2, Helsinki.

Parpola, S. 2004: "Assyrian Identity in Ancient Times and Today," available at: http//www.nineveh.com/parpola.eng.pdf.

Radner, K. 2006–2008: "Provinz. C. Assyrien," in M. P. Streck (ed.) *Reallexikon der Assyriologie und vorderasiatischen Archäologie* 11, 42–68.

Sano, K. 2017. "Die Etablierung der assyrischen Herrschaft unter die Regierungszeit Salmanassars III.: Nochmalige Überlegungen zur Frage der Kontinuität des 9. Jahrhunderts v.Chr.," *StMes* 4, 125-139.

Seidmann, J. 1935: Die Inschriften Adadnirâris II., MAOG 9/3, Leipzig.

Yamada, S. 2000. *The Construction of the Assyrian Empire: A Historical Study of the Inscriptions of Shalmaneser III (859-824 BC) Relating to His Campaigns to the West*, CHANE 3, Leiden.

紀元前１千年紀バビロニアの都市の景観と社会

渡 井 葉 子
中央大学人文科学研究所

前 1 千年紀バビロニアの都市といえば、とくにバビロンの王宮、彩釉レンガで装飾されたイシュタル門や大通り、大神殿やジッグラトといったモニュメンタルな建造物がひときわ有名であるが、本稿では主として文書史料を用いた、住民の日常的な視点からの都市の景観について先行研究をまとめつつ概観したい。

1. 都市のレイアウト

都市の基本的なレイアウト（の少なくとも一部）はそれ以前の時代にすでに決まっていたと考えられる。

たとえば紀元前 1300 年頃の、粘土板に描かれたニップルの地図（図 1 ）では、３つの門など、描かれたいくつかのものは前 1 千年紀半ばにも使われていたことがわかっているという[1]。



図 1 ニップルの地図の描かれた粘土板文書
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Clay_tablet_containing_plan_of_Nippur_(Hilprecht_EBL_1903).jpg

また、ネブカドネザル 2 世の碑文には「バビロンにおけるわが王権のための住処はもはや不十分なものになっていた。（しかし）わが主人マルドゥクを怖れる気持ちが心にあったため、彼（マルドゥク）のために取り置かれた都市バビロンにおいて、わが王権の座を拡大するために、彼（マルドゥク）の街路を変更したり、彼の聖所を取り除いたり、その運河をせき止めたりすることはしなかった。…」[2] とあり、王とはいえバビロンの神殿や街路を変えることは好ましくないと考えられていたことが分かる。ネブカドネザル 2 世の時代、バビロン

1　Baker 2007, p. 75.

2　山田重郎『ネブカドネザル 2 世』82 頁より引用。

の市内はマルドゥク神の領域と考えられていたという特別な事情があるものの[3]、基本的に神殿、街路、城壁、城門などは伝統的なプランに則った配置がされていたと考えてよかろう[4]。

居住地区においても、すでにある道に合わせて家を建てられるスペースが決められたとみられる。家の売買契約書には、売買対象の家の四方の長さが記載されており、それによると家は必ずしも正方形や長方形といった規則正しい形をしているわけではない。これは道路などの空間的な束縛を受けていたと考えられる。

2. 街路

2-1. 庶民の日常の信仰の場としての道

新バビロニア時代の都市の中心には、新年祭アキートゥにおいて神々の像が通り、王が凱旋してきた際に通る大通りがあった。この道は、*sūqu rapšu mūtaq ilāni u šarri*（大通り、神々と王の通る道）と呼ばれる。バビロンではイシュタル門とエテメンアンキをつなぎ都市の南北に延びる通り Ay-ibūr-šāpû がそれにあたる。

ボルシッパの場合、都市の北部分にある「ラピスラズリ門」を通るパレードのための重要な通りがあった。C. Waerzeggers によると、ナブー神がバビロンのアキートゥに出発する際、およびバビロンから戻る際のパレードを見ようとボルシッパの住民がこの道に集まったという[5]。

神殿は公共の信仰の場ではなく、入ることを許されているのはエーリブ・ビーティ ērib bīti「神殿に入る者」と呼ばれる、ある種の神官階級とも言いうる人々のみであった。おそらくこうしたパレードは、神殿に入れない一般の人々が神や王を目にする特別な機会でもあったに違いない。紀元前二千年紀末期、イシン第 2 王朝の王ネブカドネザル 1 世は、エラムから奪還したマルドゥク神像とともにバビロンに帰還した際の状況を、

> 国の人々は彼（マルドゥク神）の高貴な、ふさわしい、威厳のある、輝かしい、そして喜びに満ち溢れた姿を見た。あらゆる人々はマルドゥク神に注目した。主人は、彼の安らかな住まいに入り、元通りにした。彼の壮麗な

3　一方、バビロンの二重の内壁（イムグル・エンリル、ネメッティ・エンリル）の外側にネブカドネザルが建造した北王宮が、王の威光を表明する場であったと F. Joannès は指摘する（Joannès 2011）。

4　バビロンの四角い輪郭がいつ決まったかに関しては議論がある。A. George は、イシン第二王朝時代の王（マルドゥク・シャーピク・ゼーリ、アダド・アプラ・イッディン）がイムグル・エンリルに言及しており、かつ後者の碑文の刻まれたレンガがザババ門の近くから発見されたことから、この城壁が紀元前 11 世紀にはネブカドネザル 2 世が再建したのと同じ場所に存在しており、バビロンの四角い輪郭はすでにこの時代には決まっていたとしている（George 1992, p. 344）。これに対して M. Van de Mieroop は、バビロンの形が決められたのはナボポラッサルとネブカドネザルの時代であり、新アッシリアの王によって着手されたのを引き継いだとする（Van de Mieroop 1997, pp. 87–88）。地誌文書 *TINTIR* = Babylon の成立を紀元前二千年紀後半とする A. George に対して、Van de Mieroop は *TINTIR* = Babylon がもっと後の時代の文書であると考える。しかし、さらにこれに対して H. D. Baker は、*TINTIR* = Babylon はアッシュルバニパルの図書館から発見されており、そのオリジナルが前二千年紀後半に書かれたものでないとする証拠はないこと、またアッシュルバニパルがイムグル・エンリルとネメッティ・エンリルを再建したと書いていることから彼の時代にはすでに２つの内壁は建てられていたと考えられ、新アッシリアの王によって新しく造られたと考える証拠がないことから、やはりバビロンの基本的レイアウトは前二千年紀後半には決まっていたという説をとる (Baker 2007, pp. 75–76)。

5　Waerzeggers 2010, p. 14.

聖所「光輝の門」は輝き、喜びに満ち溢れた[6]。

と碑文において描写しているが、これはあながち誇張とばかりは言えないであろう。

神殿に立ち入れない一般市民の信仰の場は、都市のさまざまな場所に置かれた祠や神像の設置された台座であった。地誌文書 *TINTIR* = Babylon V 82–88 には、

合計：43の偉大なる神々の「礼拝堂」(*mahāzu*)、55 のマルドゥク神の「玉座」*parakku*（神像の台座が設置された壁龕）、300 のイギギ神の「玉座」、600 のアヌンナク神の「玉座」、180 のイシュタル神の「祠（野外の壁龕）」(*ibratu*)[7]、12 のルガルイッラとメスラムタエアの「聖所」(*manzāzu*)（神像の安置された場所）、12 のセベッティ 7 神（プレアデス）の「聖所」、6 の Kūbu 神の「聖所」、4 の manzât 神（虹）の「聖所」、2 の悪神の「聖所」、2 つの「都市の番人」(*rābiṣ āli*) の「聖所」[8]。

とある。

これらの「礼拝堂」や「聖所」、「祠」は、神殿の中庭の他、道や神殿の門や都市の門にも設置されていた。A. George は、イシュタル女神の祠が多いのは一般的にこの女神の人気が高く、また祀られている他の神々が公のパンテオンであまり知られていない神々（悪い神も含む）であるのは、民衆の信仰習慣と結びついているのではないか、と指摘する[9]。実際、バビロンのメルケス地区の発掘現場では「台座」や「祭壇」が発見されている（図 2）。

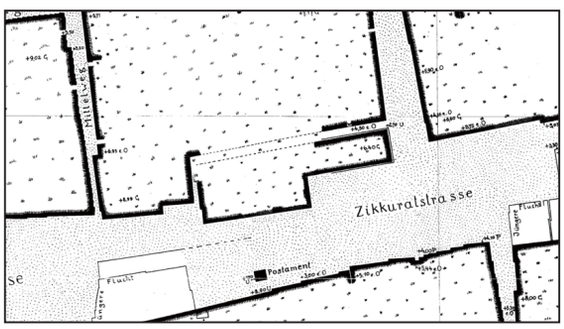


図 2　メルケス地区の道路における「台座」。Reuter 1927, Taf. 18 に基づいて H. D. Baker が作成した図版 (2017,p. 97, Fig. 4)

2-2. 人々の通行と商業の場としての道

バビロンの地誌文書 *TINTIR* = Babylon には、ウラシュ門の道、ザババ門の道、マルドゥク門の道など各門を通る道の名前がリストされており、これらはメインストリートであったとみられる。家の売買文書にはしばしば言及される *sūqu rapšu*「広い道」は、こうした通りを指すかもしれない。一方 *sūqu qatnu*「狭い道」と呼ばれる道もあった。*sūqu qatnu* は *mūtaq nišē*「人々の通り道」という言葉を伴う場合もある。つまり、人々が日常的に

6　RIMB 2: 30, B.2.4.9. (ll. 15–20). “The people of the land regarded his lofty, fitting, majestic, bright (and) joyful appearance; all of them paid attention to him. The lord entered and took up his peaceful abode. Kasulim (‘Gate of Radiance”), his lordly shrine, became bright, filled with rejoicing.”
なお史料集等の略号に関しては CDLI:wiki の Abbreviations for Assyriology (https://cdli.ox.ac.uk/wiki/abbreviations_for_assyriology) に従う。

7　*ibrati*/*ibratum u nēmediša*「壁龕とその台座」が *parakku* で言い換えられている文書がある。

8　George 1992, p.68–69.

9　George 1992, pp. 368ff., Steinert 2013, pp. 132ff.

使う道であった。

市門と、そこを通る道は、他の都市に向かう方向に位置しており、重要な商業地域だったと思われる[10]。メソポタミアの都市には、ギリシアのアゴラやローマのフォーラムのような公共の広場がなく、行商人や露天商は門に隣接する通りで商売をしていたと考えられる。しかしながら、門で商業活動が行われていたことを示す証拠は非常に少ない。

M. Jursa は、新バビロニア語において *sūqu*（「通り」）という言葉は明確に「市場」という意味を持ち、売買が行われる場所を意味すると指摘している[11]。たとえば、あるウルクの神殿職員が同僚にあてた手紙（YOS 21, 174）には「… あなた方は *sūqu* から 1/24 シェケルの銀、1 スートの大麦すら得られないでしょう。あなた方がもっている全てを計量し、サイロに入れなさい」とある。また同じくウルクの別の文書（OECT 10, 256）には、「ニサンの月 22 日、PN は *sūqu* をあふれさせた。（にもかかわらず）私は一切れのパンも、1 つの焼きナツメヤシも手に入れなかった」と書かれている。文脈は必ずしも明確ではないものの、こうした例において *sūqu* は人々が食べ物を買うために行く場所であり、ただしいつ行っても必ず必要なものがあるというわけではない、短期間での商いが行われる場であった、と Jursa は解釈している。

このような市場では、一家の主婦である女性たちが買い物に来ている風景もよく見られたかもしれない。ボルシッパで作成された文書からは、レーインドゥという女性が、おそらく一家の主婦として家計から服や食料品への支出を担当していたことが読み取れる[12]。たとえば VS 6 315: 5–6 では、文脈が明確にとらえられるわけではないが、彼女に委ねられた銀 6 1/2 シェケルのうちの 1/4 シェケルは魚、1/4 シェケルはある種の果物に支払われたとみられる。おそらく彼女は市場でこのような食べ物を購入したのであろう。

また BM 64153 (Jursa 2000) は、女性暴行事件の目撃証言に言及する。

> 「馬飼」の子孫でありベール・イブニの息子であるレームートと、「馬飼」の子孫でありベール・ウバッリトの息子であるザババ・ナプシャーティ・ウツルは、ベール神とナブー神にかけて以下のように誓った。「ニサンの月 14 日に、 1 人の男が 1 人の女性を襲い、［ザ］ンナの息子（の家）との境界の通路の隣、ベール・シャッラ・ウツルの息子ナブー・ウバッリトの家の正面にある家に無理矢理入らせたこと（を誓います）。私たちはその女性と彼女の女性の召使いになされた暴力をきいたこと（を誓います）。彼女はその家に力ずくで入らされたこと（を誓います）。」（以下略）

被害者がどのような立場の女性で、どのような用事で外出していたかについては文書からは分からないが、女性召使いを連れていることからして、一般市民家庭の主婦が買い物などのために外出していた可能性は高いのではないだろうか。

10　Baker 2009, p. 96, Steinert 2014, pp. 129–130.

11　Jursa 2010, pp. 641–643. ただし CAD S はその訳を採用していない。

12　Watai 2019.

2-3. 商店、酒場

都市には、こうした野外の市場だけでなく、もっと長期的な商業の場としての商店もあったであろう。イシン・ラルサ時代のウルの発掘では、道に面した壁が低く造られ、道に面して大きく開かれているような建物が見つかっており、発掘者の L. ウーリーと M. マローワンはこれを店か屋台と解釈した（UE 7, AH Site）。古バビロニア時代のいくつかの文書（BE 6/1 13, 51）は *bīt māhirim* という言葉に言及しており、これは「店」を表していると考えられる [13]。新バビロニア時代にはこの言葉は 1 つの文書（VS 5 113: 2）にしか出てこず、その文書も *bīt māhiri* の売買にかかわるもので、それがどのようなタイプの建物だったかは示していない。

F. Joannès は、新バビロニア時代においては、家の一部分を示す言葉 *bīt qāti* や *bīt kāri* が店を表す可能性を示唆する [14]。*bīt qāti* と *bīt kāri* が一緒に貸し出され、賃借人が毎日パンを家主に納入する賃貸契約や、「パン職人の *bīt kāri*」（*bīt kāri ša* ^{LÚ}MUHALDIM）が賃貸にされているような文書がある。著者は *bīt qāti* と *bīt kāri* を作業場と倉庫と考えたが [15]、店だとすれば、パンを作る作業場に店が併設されていたかもしれない。

一方、H. D. Baker は、セレウコス朝時代ウルクの売買文書に出てくる *kuruppu* を「店」と考える [16]。根拠としては、他の家より価値が高いこと、大通り *sūqu rapšu* に面しており、少なくとも一方は他の *kuruppu* に接していること、長方形の形をしており、道には短い辺の方が接していることなどが挙げられる。

このように店は存在していたと推測されるものの、その存在を明らかに示すような証拠はきわめて少ない。その中で、唯一その存在が文書からはっきり証明されている店は酒場である。当時の大財閥エギビ家のアーカイヴに属する一連の文書は、エギビ家の当主が、キシュ（フルサグカランマ）で女性の奴隷に酒場を経営させていた可能性を示唆する [17]。これらの文書では、エギビ家の女奴隷であるイスフンナートゥが、主人であるエギビ家の当主イッティ・マルドゥク・バラートゥからビールやナツメヤシ [18]、食器、ビール醸造用の道具、台所用品、家具、その他の道具類を受け取っており、それらの相当額（銀）を負債として負う。そして 1 ヶ月半後に、彼女はその利息を返済することになっている。この契約は、イッティ・マルドゥク・バラートゥが、イスフンナートゥに必要なものを貸し付けて居酒屋を経営させ、その利益を「利息」として回収したと解釈される。利益がいくらかは書いていないが、銀の利息は通常年率 20％であるため、1 ヶ月の利益は大体銀 2 シェケルほどになったと考えられる。

酒場の存在を証明するもうひとつの文書は、

13　Joannès 2016, p. 130.

14　Joannès 2016, p. 128, p. 131.

15　Watai 2012.

16　Baker 2010b.

17　Joannès 1992a, b, Tolini 2013.

18　この時代、一般にはナツメヤシから作ったビールがよく飲まれていたため、イスフンナートゥに与えたナツメヤシ（60 クル＝ 10800 リットル）でナツメヤシ・ビールを醸造させたとみられる。

BM 114528 (Kessler 2005) である。

> ウルクの「警官」(*paqūdu*)[19] であるナブー・シュマ・ウキンの息子バラートゥは、エアンナのシャタンム（神殿行政長官）である、ダビビの子孫ナーディンの息子ナブー・ムキン・アプリにこう申し立てた。「バビロンの王カンビュセスの治世 5 年ウルルの月 1 日、夜中、騒ぎが起こり、そのため私は（地区の）人々の要請で現場に来て、酒場の主人である、エレブシュの息子シャ・ピー・カルビの家に入りました。シャ・ピー・カルビの家から私はアヌ・イブニの息子アラド・アヌ、ベール・アハ・ウシャブシの息子ナブー・カーティル、現場の所有者であるシャ・ピー・カルビ本人、彼らと一緒にいた女性歌手リーシャヤとパパッシを出てこさせ、彼らをあなたの前に連行しました。しかし彼らと一緒に大勢の人が同時にシャ・ピー・カルビの家から出てきたので、私は彼らを見分けることができませんでした。」（後略、その後シャタンムはアラド・アヌにその場に誰がいたかを尋ね、アラド・アヌはそれに答える。）

夜中に大勢の人々が酒場に集い、女性歌手が歌や音楽を披露し、酔客同士の喧嘩が起こって警察の厄介になるようなこともしばしばあったのであろう。なお、ハンムラビ法典やギルガメシュ叙事詩から、酒場といえば女主人のイメージが強いが、この酒場の主人は男性である。

2-4. ゴミの廃棄場所、動物や危険なものが徘徊する場所としての道

さて、家庭生活で出されるゴミは、路上のゴミためのようなものに捨てられたと思われる。U. Steinert は、ギルガメシュ叙事詩の第 12 書版で、供養を受けない死者に関して「彼は器からこそぎ落とした物や通りに投げ捨てられたパンのかけらを食べていました」と描写されるように、ごみは路上に捨てられ、それを犬や豚といった動物があさっていた、と指摘する[20]。このように路上には、人だけではなく、また家畜だけでなく、犬や豚といった動物なども日常的にいた。

路上には子どもが捨てられることもよくあったが、拾われた子には Ša-pī-kalbi「犬の口にある者」, Ša-pī-iṣṣūri「鳥の口にある者」といったような名前がつけられることがよくあった。捨て子は、街をうろつく犬や鳥の餌食になる危険にさらされていたのである。

夜には、夜盗や人に呪いをかける呪術師が出没したため、灯りをもった夜警が巡回していた。A. George は、道の決まった場所に「街灯」が設置されていた可能性をも指摘する[21]。

3. 居住区、住居

3-1. 居住地区

道沿いには、日乾しレンガの家が、密集した形で建てられていた。道に面した面には窓はなかったと思われる。

家の大きさは、そこに住む家族の経済状況を反

19 Pringruber 2013 によると、少なくとも前 6 世紀の証拠から、*paqūdu* は軽犯罪を取り締まり、見張りから犯人とみなされた人の逮捕までを行っており、彼らは神殿と緊密に結びついていたという。

20 Steinert 2014, p. 142.

21 George 2015.

映する。一般的にメソポタミアの都市では、社会的・経済的立場によって住む地区が違うといったことはなかったと考えられている（たとえば古バビロニア時代のウルなどでも、大きな家の隣に小さい家がある）が、新バビロニア時代の都市、とくにバビロンの場合、地区によって住民の社会身分や経済状況が多少異なっていた可能性がある[22]。

その根拠の一つは、家の面積である。発掘された家の遺構の面積は、家の売買文書に表記される面積よりもかなり広い。これは、売買文書で言及されているのが家の一部という可能性もあるが、地区の違いもあるかもしれない。バビロンで発掘されている居住区は都市中央部の「メルケス」と呼ばれる区域である。ここで発掘されているのは、正方形の中央中庭を数多くの部屋が取り囲む基本的な構造の家であり、なかには、この構造を二重にもつ家（House X）もある。この辺りの家は、売買契約の対象として言及されることはほとんどない。代々神殿や王宮に地位をもつような一族が住んでいた可能性がある。

一方で、売買契約書に言及されている家は、シュアンナ地区やテ・エ地区に多い。両地区の家はエギビ家の文書でも頻繁に言及される。エギビ家は伝統的な都市住民ではなく、ネブカドネザル 2 世の時代に初めてバビロンに居を構えたとみられ、その後も敷地を拡大するとともに、バビロンの近隣諸都市（ボルシッパ、シャフリーン、キシュ等）にも土地を所有していく。バビロンにおいては、アケメネス朝初期の頃まではテ・エ地区の家が一族の拠点となる家であったようである[23]。この地区にはナボニドスの息子ベルシャザルの行政



図 3 バビロン市内の概略図（渡井 2013、16 頁）

22 Baker 2010a, p. 8.

23 渡井 2013。

府（「太子の館」*bīt mār šarri*）があり、エギビ家の家はこの「太子の館」に隣接していた。この「太子の館」のある土地は、もともとは即位前のネリグリッサルが手に入れた地所であったと考えられる。「太子の館」は、キュロス 2 世の時代、カンビュセスが太子であった時代までは機能していたが、その後文書に言及されなくなる。それと時を同じくして、エギビ家の主要な拠点はシュアンナの家に移ったとみられる [24]。メルケスが伝統的都市エリートの居住する地区であるなら、テ・エ地区やシュアンナ地区は新しい都市エリートの居住地といえるであろうか。

地区の重要性はおそらく家の値段にも反映している。キュロス 6 年にエギビ家が購入したシュアンナ地区の家の価格は 1 平方メートルあたり銀 6 シェケル以上であり、これは相当高額であった。またダリウス 20 年（前 501 年）には 10 マナの銀、71 グルのナツメヤシ、10 グルの大麦の債務の抵当となっており、この家に高い価値があったことがわかる。

3-2. 家の配置

家の売買や譲渡など、家の所有権の移譲に関する文書では、家の四方の隣人や接している道が明記されている。道に接している家もあるが、四方が別の人の家という場合もある。つまり、すべての家が道に面しているわけではなかった。このような場合、道路に出るための私有の通路（*mūṣû*）を備えていた。こうした私有地は、何家族かで共有される場合もあった。たとえば Camb 233 は、ボルシッパで作成された、3 つの区画から構成される土地の売買文書である（図 4）。売り手のブーイートゥ Bū’ītu は居住スペース（第 1 区画）とともに、大通りに出るための 2 つの通路（第 2 区画、第 3 区画）を売却している。この文書によると、ブーイートゥは第 2 区画の（所有権の）半分を持つ。つまり隣人と共有している。誰と共有しているかは示されていないが、あきらかにイッディン・マルドゥク Iddin-Marduk であろう。第 3 区画に関してはブーイートゥの所有権は 4 分の 1 である。ここでも、共有する隣人の名前は記されていないが、イッディン・マルドゥク、ハシュダヤ Ḫašdaya、ルーツィ・アナ・ヌーリ Lūṣi-ana-nūri であろう。つまり、ブーイートゥの第 1 区画の家と、イッディン・マルドゥクの家は第２区画に面して入り口があり、ハシュダヤとルーツィ・アナ・ヌーリの家の入り口は第３区画に面していたことになる。ハシュダヤとルーツィ･アナ･ヌーリの家は大通りに隣接していたとみられるが、通りに出るためには通路を使用していたことが分かる。

このように、通路を使って街路に出る構造は、都市を問わず、文書においては頻繁にみられる [25]。

3-3. 家族

夫婦と、子どもが２～４人くらいの核家族が基本であったとされているが、夫の母親、まだ結婚していないきょうだいが共に暮らす場合もあり、さらにほとんどの家庭には奴隷（召使い）がいたと考えられる。相続によって分割され、兄弟間で共有される場合もある。相続分割や賃貸などで複数の家族が一緒に住む場合もある。その場合

24　渡井 2013。

25　Baker 2014 も参照のこと。

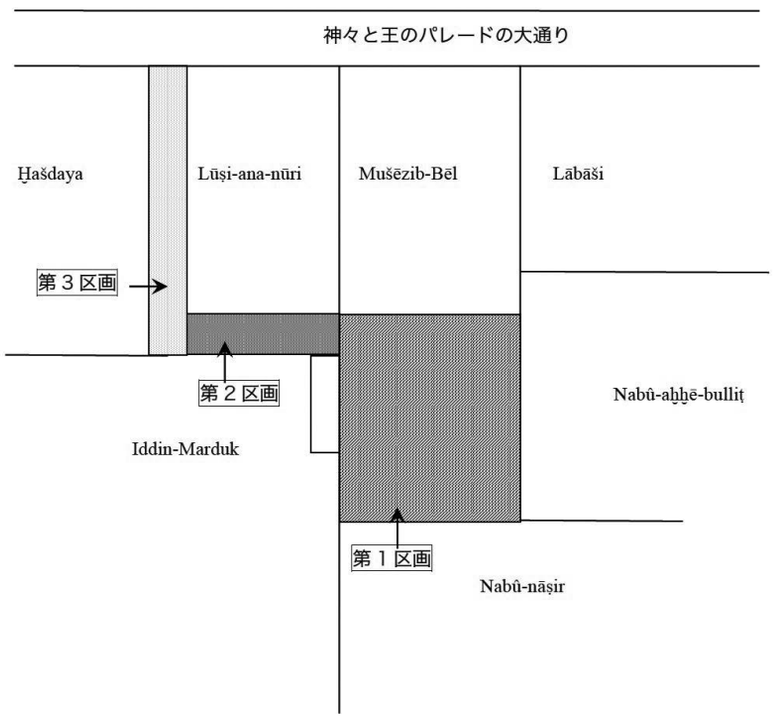


図 4　Camb 233 から復元した家の配置

は、戸口をふさぐ、新しい通路をつくるなど改築された。

夫の死後、妻は家の相続権を持たないので、夫が生前に妻に譲渡する場合もある。また親から娘に嫁資として家を与えることも多い。その場合、娘自身が家の所有権を持ち、彼女自身が賃貸に出すなどしている例もみられる。

3-4. 家を失った人々

しかし、経済的・社会的に落ちぶれたり、家族から追放されたりして身寄りがなくなれば、家を出て、路上生活を送ることになる。

BM 65722 (Wunsch 2003, No. 48) によると、幼い孫と住んでいるハマティヤという女性が、息子の死後、家を売る。しかし、彼女の家には食べる物がなく、そのため家は返され、彼女は生きている限りその家に住むことができるとされた。家を売ってしまえば女性と幼い孫は路頭に迷うことになるため、この文書では家が返されるという措置がとられたが、おそらくこのように困窮して家を失い、路頭に迷う人もいたと思われる。

しかしアッカド語には「乞食」を表す単語はなく、F. Joannès はこれに関して、上述の文書 BM 114528 に言及される *paqūdu* が街を監視し、路頭に迷う人がいたら神殿奴隷として神殿に収容し、そのためバビロニア諸都市には乞食が少なかっ

た、と指摘する[26]。実際のところ、ウルクのエアンナ神殿の裁判文書からは、動物を盗んだり、素行の悪い神殿奴隷がいたことが分かっている[27]。また、神殿奴隷には、主人によって「奉献」された年老いた元私有奴隷や、未婚の母なども含まれる[28]。神殿は、都市の浮浪者や、家族や生活基盤がなく路頭に迷う危険のある人々を収容するような役割も持っていたと解釈される[29]。

おわりに

以上、新バビロニア時代・アケメネス朝ペルシア時代の都市の景観を概観した。とくに結論というほどのものはないが、この時代の大量の文書は、当時の都市構造だけでなく、都市における人々の日々の生活の情景をも読み取ることができる貴重な史料であることを改めて指摘して結びに代えたい。

参考文献

Baker, H. D., 2007: Urban form in the first millennium BC, in: G. Leick (ed.) *The Babylonian World*, London, 66–77.

Baker, H. D., 2009: A waste of space? Unbuilt land in the Babylonian cities of the first Millennium BC, *Iraq* 71: 89–98.

Baker, H. D., 2010a: The Social Dimensions of Babylonian Domestic Architecture in the Neo-Babylonian and Achaemenid Periods, in: J. Curtis and St. J. Simpson (eds.), *The World of Achaemenid Persia. History, Art and Society in Iran and the Ancient Near East*, London, 179–194.

Baker, H. D., 2010b: Babylonian Shop, *NABU* 2010 / 88.

Baker, H. D., 2014: The Babylonian Cities: Investigating Urban Morphology Using Texts and Archeology, in: N. N. May and U. Steinert (eds.), *The Fabric of Cities, Aspects of Urbanism, Urban Topography and Society in Mesopotamia, Greece and Rome*, Leiden/Boston, 171–188.

George, A., 1992: *Babylonian Topographical Texts*, Leuven.

George, A., 2015: The Gods Išum and Hendursanga, JNES 74, 1–8.

Joannès, F., 1992a and b: Inventaires d'un cabaret, *N.A.B.U.* 1992/64., and Inventaires d'un cabaret (suite), *N.A.B.U.* 1992/89.

Joannès, F., 2011: L'écriture publique du pouvoir à Babylone sous Nabuchodonozar II, in E. Cancik-Kirschbaum, M. van Ess, and J. Marzahn (eds.), *Babylon: Wissenskultur in Orient und Okzident, Berlin*, 113–120.

Joannès, F., 2016: By the Streets of Babylon, in: B. Perello and A. Tenu (eds.), *Parcours d'Orient: Recueil de textes offert à Christine Kepinski*, 127–137.

26 Joannès 2016, pp. 132–134.「乞食」を表す単語がない一方で、貧乏人を表す単語は非常にたくさんあり、こうした語はバビロニアの語彙リストで、身体的・精神的なハンディキャップとまとめられて言及されていることから、貧困者とハンディキャップをもつ人は同様にマージナルな立場とみられていたことがわかると Joannès は指摘する。

27 たとえば YOS 7, 77: 1–7 には「鎖につながれ、王の厩舎で藁を刻むためにラバシの息子アヌ・ゼール・ウシャブシに引き渡された、ウルクの女主人の神殿奴隷であるラバシの息子シャマシュ・ベール・クラティが、もしまた酒場をうろついているのが見られたときには、彼の兄アヌ・ゼール・ウシャブシがその仕事を償う」（Achemenet (http://www.achemenet.com) の解釈にしたがう）と記されている。シャマシュ・ベール・クラティはこののち、エアンナの牢に入れられていたが番人を傷つけて脱獄を試みた（YOS 7, 97）。

28 ジョアンネス 2014。

29 ジョアンネス 2014 および Joannès 2016, p.133, p.135.

Jursa M., 2000: ṭerdu. Von Entführung in Babylon und Majestätsbeleidigung in Larsa, in: S.Graziani (ed.), *Studi sul vicino Oriente antico dedicati alla memoria di Luigi Cagni, Napoli*, 497–514.

Jursa M., 2010: *Aspect of the Economic History of Babylonia in the First Millennium BC*, AOAT 377.

Kessler, K., 2005: Zu den ökonomischen Verhältnissen von Uruk in neu- und spätbabylonischer Zeit, in: H. D. Baker & M. Jursa (eds.), *Approaching the Babylonian Economy,* AOAT 330, 269-287. Münster.

Pringruber, R. 2013: Police Forces in First millennium BC Babylonia and beyond, *KASKAL* 10, 69–87.

Steinert, U., 2014: City Streets: Reflections on Urban Society in the Cuneiform Sources of the Second and First Millennium BCE, in: N. N. May and U. Steinert (eds.), *The Fabric of Cities, Aspects of Urbanism, Urban Topography and Society in Mesopotamia, Greece and Rome*, Leiden/Boston, 123–160.

Tolini, G., 2013: The Economic Activities of Iš̩unnatu, a Slave Woman of the Egibi Family, https://refema.hypotheses.org/766

Van de Mieroop, M., 1997: *The Ancient Mesopotamian City*, Oxford.

Watai, Y., 2012: Les maisons néo-babyloniennes d'après la documentation textuelle (Thèse de doctorat de l'université Paris 1).

Watai, Y., 2019: Women involved in Daily Management in Achaemenid Babylonia: The Case of Rē'indu and Andiya, 唐橋文編「2017 年 11 月 10–11 日中央大学国際ワークショップ『古代世界における女性の宗教的・経済的役割』参加論文集」, 115–136.

Wunsch, C., 2003: *Urkunden zum Ehe-, Vermögens- und Erbrecht aus verschiedenen neubabylonischen Archiven*, Babylonische Archive 2, Dresden.

フランシス・ジョアンネス、渡井葉子訳「新バビロニア時代の神殿における女性の経済的役割」、中央大学文学部紀要（史学）第 59 号、2014 年、1–28 頁。

山田重郎『ネブカドネザル 2 世：バビロンの再建者』（世界史リブレット・人）、2017 年。

渡井葉子、「前 6 世紀バビロニアのエギビ家の都市不動産」、『オリエント』55–2、2013 年、1–16 頁。

『バビロン天文日誌』に見る衛生危機・社会危機

三津間康幸
筑波大学人文社会系

2020 年から 2021 年にかけて世界を覆っている新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の脅威により、「密閉・密集・密接」のいわゆる 3 密が習い性になってしまっていた現代の都市生活には大きな変化が生じている。大学においては講義や会議、学会などが軒並みオンラインで開催されるようになり、一面便利さはあるものの、自由な移動やコミュニケーションができないことによる弊害も生じている。コロナ禍はいずれ終息するものと思われるが、将来このような衛生危機あるいは社会危機が一定の期間をおいて生じる可能性を念頭に置き、我々は現下の情勢に対処するとともに次の危機にどのように対応すればよいのかを考えておかねばならない。そしてさらに、危機をできる限り小規模に収束させたり、危機の発生自体を食い止めたりするために、どのような原因により、どのような経過をたどって危機が発生・拡大するのかといったことも詳しく知っておく必要がある。

人類が衛生危機や社会危機にどのように向き合ってきたか、また危機はどのような環境で起こりどのように拡大したのかを知るためには、過去に作成された史料から情報を読み取り分析する必要がある。しかしある人間集団における疫病の発生などの社会状況と、同時代の環境に関する情報を比較対照することは、組織的に情報が収集されていない限りなかなか難しい。実は紀元前のバビロニア（アッカド）の都市バビロンでは、そのような情報収集が行われ、記録が作成されていた。それはバビロンの主神マルドゥクの神殿エサギルに奉職する学者たちによって作成されたアッカド語楔形文字粘土板文書群で、『バビロン天文日誌』と呼ばれている（以下では単に日誌と呼称）。そこには少なくとも紀元前 7 世紀半ばから紀元前 1 世紀半ばにかけて継続的に行われた天文観測の記録とともに、観測の妨げとなる天候の情報が記され、さらにある月の大麦やナツメヤシ、羊毛など農畜産物の価格のリストやバビロンを流れるユーフラテス河の水位の変動の情報が連綿と記録されている。前 4 世紀以降の日誌では、地上で起こった特異な事件の情報も大量に記録されるようになる。現在確認されているところでは 1500 枚程度の日誌粘土板が、主として大英博物館に所蔵され、そのうち年代の分かるものが 1988 年から 1996 年にかけて、*ADART* 1–3 に刊行された。日誌の中にある疫病（個別的な病気への言及と区別が付かないものも含む）や飢饉、さらに大量死や、社会が困難な状況に直面した時に行われた人身売買などの記録を拾い出してみると、表 1 に示すようなものが目に付く。

表 1 『バビロン天文日誌』における（疫）病、飢饉、大量死、人身売買

No	史料	統治者	年月日	事項	備考
1	-567 Obv.´ 7	ネブカドネザル II 世	I 同月	狐が市に入る。僅かな咳や *rišûtu* 病への言及	続けて記述
2	-382 ´Obv.´ 13´	アルタクシャサ II 世	II x	邦において口の病や *rišûtu* 病の蔓延	
3	-373B Upper e. 1	アルタクシャサ II 世	XII x	飢饉。民が子を(?)売る(?)	
4	-368 ´Rev.´ 8´	アルタクシャサ II 世	III x	邦において、病の民の回復(?)	
5	-366A Col. ii 10	アルタクシャサ II 世	II 同月	病の民の回復(?)	
6	-330 ´Obv.´ 4´f.	ダーラヤワウ III 世	VI 14 夜	月食の間に死や疫病が起こる。	天文事象と一緒に記述
7	-273B Upper e. 1	アンティオコス I 世	-274 x	アッカドにおける飢饉。 民が子を売る。 民が何かの原因で死ぬ。	翌年 VII–XII 月の日誌の最終セクションに記述
8	-273B Upper e. 1	アンティオコス I 世	-274 同年	*ekketu* 病が邦において(?)起こる(?)。	同上
9	-273B ´Rev. 33´	アンティオコス I 世	-273 年	*ekketu* 病が邦において蔓延	
10	-266B ´Obv.´ 3´–4´	アンティオコス I 世	VII x	多くの病人などへの言及	
11	-266B ´Obv.´15´	アンティオコス I 世	VIII 同月	多くの病人が死ぬ。	
12	-237 ´Obv. 12´	セレウコス II 世	III 同月	多数の死者。一軒の家で 2 または 3 人が死ぬ。	
13	-161A$_{1+2}$ ´Rev.´ 10´–12´	（ティマルコス？）	VI x	民が何かを飲む。 邦に何かが蔓延する。	
14	-161A$_{1+2}$ ´Rev.´ 12´	（ティマルコス？）	VI 同月	街路にある複数の死骸についての言及	
15	-153 ´Rev.´ 4´–5´	デーメートリオス I 世	V 同月	畜牛の間に *di'u* 病が起こる。	
16	-149 ´Rev.´ 3´–4´f.	デーメートリオス I 世	III x	アンティオケイアの大飢饉、軍隊への言及	伝聞情報
17	-143A ´Flake´ 21´f.	デーメートリオス II 世	IV 同月	邦における *simmu* 病、*ekketu* 病、*rišûtu* 病	
18	-137A ´Rev.´ 7´	ミフルダート I 世	IV x	スサとエラムの諸市で飢饉などが起こる。	
19	-124A ´Rev.´ 23´f.	アルタバーン I 世	V x	疫病などへの言及	
20	-117A ´Flake´ 8´	ミフルダート II 世	VIII 同月	病への言及	
21	-111B ´Rev.´ 12´	ミフルダート II 世	IV	アッカドにおいて畜牛の *di'u* 病	
22	-107B ´Rev. 15´	ミフルダート II 世	VI 同月	以前の如く多くの民が病	
23	-107D ´Obv.´ 17´	ミフルダート II 世	VIII x	邦において *rišûtu* 病(?)が大いに蔓延。多くの民への言及	
24	-107D ´Obv.´ 30´–31´	ミフルダート II 世	IX x	(ある) 市における嘆きと不安	大麦の価格の途中に記述
25	-107D ´Obv.´ 32´	ミフルダート II 世	IX 22 まで	バビロンの街路での売りが停止する。	同上、前項と関係(?)
26	-107D ´Obv.´ 36´	ミフルダート II 世	IX 同月	複数の犬が狂って死ぬ。	
27	-107D ´Obv.´ 36´	ミフルダート II 世	IX 同月	病への言及	
28	-107C ´Rev. 2´	ミフルダート II 世	XI [同]月	病への言及	
29	-107D ´Rev.´ 20´	ミフルダート II 世	XI x	複数のものが狂って死ぬ。	
30	-107C ´Rev. 21´	ミフルダート II 世	XII 同月	以前の如く邦に対して(?)病(?)	
31	-105A ´Obv.´ 46´	ミフルダート II 世	III 同月	邦における *ekketu* 病と *rišûtu* 病	
32	-93A Rev.´ 11	ミフルダート II 世	IV 同月	病と死が邦において大いに蔓延る。	
33	-93B ´Flake´ 8´f.	ミフルダート II 世	IV 同月	病(?)への言及	事例 32 と同じ(?)
34	-83 ´Obv.´ 2´	アルシャク	II 同月	邦において咳の病が蔓延	

「史料」欄には史料となる日誌の箇所を表示する。日誌粘土板の番号は、紀元前 1 年を 0、紀元前 2 年を -1 とする天文学的紀年法によってその粘土板に書かれた記録の年代を示している。ただしバビロニア暦では年の始まりは春になるため、例えば -567 は前 568 年の春に始まり前 567 年の春に終わる年の記録となる。以下、本稿本文ではこのようなバビロニア暦の年を前 568/567 年と表記する。アルファベット符号は、同一年に属する複数の日誌粘土板がある場合、早い時期の記録を載せるものから順に付けられる。また日誌粘土板各部の保存状態を、*ADART* 1: 38 にしたがって、Obv.′ といったかたちで示す。

「統治者」欄には各事項の年代におけるバビロンの統治者を示している。前 539/538 年までは新バビロニア、前 539/538 年 – 前 331/330 年はペルシア帝国、前 305/304 年 – 前 141/140 年はセレウコス朝、前 141/140 年以降はアルシャク朝がバビロンを統治した。前 162/161 年 – 前 161/160 年にはバビロニアが反乱者ティマルコスに占領されていた時期があり、事例 13 と 14 の年代はその時期に当たる可能性がある。「年月日」欄には各事項が起こった年月日を示すが、年は通常史料の番号に表示されたものと同一となるため、特別な場合以外は「年月日」欄への記載を省略している。月はニサン月を I、アヤル月を II のようにローマ数字で表す。

衛生・社会危機の高まりが特に感じられるのは、前 108/107 年という年である。表 1 に示した 34 例のうち、実に事例 22 から 30 の 9 例がこの年の記録である。すでにこの年の VI 月以前から多くの民が病に罹患していたようであり（事例 22）、VIII 月の事例 23 は邦（バビロニア）で *rišûtu* 病（*CAD* R, 381–382, s. v. rišûtu によれば、一種の皮膚病）と思われるものの蔓延が著しかったことを伝えている。さらに IX 月や XI 月の日誌にも病についての断片的、あるいは解釈困難な言及があり（事例 27, 28）、さらに XII 月の日誌には、バビロニアに対して打ち続く病の脅威が述べられているようである（事例 30）。それに並行して複数の犬が狂って死んだとの報告があり（事例 26）、事例 29 もおそらく似たような報告と考えられる。さらに IX 月の事例 24、25 はバビロンなどでの嘆きや商取引の停止といった不安な状況を伝えている。IX 月の日誌には大麦価格（銀 1 シェケルとの対価）の記録も残っており、それは銀 1 シェケル当たり 27 カ（1 カはおおよそ 1 リットルに相当）である (-107D ′Obv.′ 33′)。日誌の農畜産物価格リストを 1 つの表にまとめた van der Spek (2005) を参考に、アルシャク朝時代の IX 月という時期に限って大麦の銀 1 シェケルとの対価を抽出すると、アルシャク朝のバビロニア支配がはじまった前 141/140 年は 117–120 カ (-140C Obv. 30)、 前 138/137 年 は 48–51 カ (-137D ′Obv. 6′)、前 125/124 年は 20–20.5 カ (-124B ′Obv.′ 17′)、前 100/99 年はごく良質の大麦が 120 カ (-99B ′Flake′ 13′)、前 97/96 年は 44–45 カ (-96C ′Obv.′ 2′)、前 76/75 年は 48.25 カ (-75 ′Rev. 4′[1]) となっている。アルシャク朝時代の IX 月に限れば 27 カという価格は最も価格が高い（銀 1 シェケルとの対価が低い）前 125/124 年に迫る数値ということができる。

前 120 年代そしてまた前 108/107 年における大麦の価格騰貴はおそらくアラブ・ベドウィンの

1　ただしこの部分は粘土板の欠損が大きいため、翌 X 月以降の対価が示されている可能性も否定できない。

脅威と関係がある（春田 1998: 188, 191n18 も参照）。前 120 年代半ばから前 100 年代半ばにかけてのバビロニア (アッカド) では *Arbāya*「アルバーヤ（アラブ）」と呼ばれるラクダ遊牧民（アラブ・ベドウィン）が略奪行為をしばしば働き、交通が遮断されることも度々あった。前 126/125 年にはアラブの遊動の記述が日誌に表れ (-125A Obv.′ 21)、前 123/122 年にはアラブがアッカド全土を取り巻き、バビロンも包囲され (-122D ′Rev.′ 9′–10′)、前 119/118 年にはアラブの脅威を逃れるバビロン住民の疎開が記録される (-118A Obv.′ 22)。前 112/111 年には（おそらくアルシャク朝の）軍隊がアラブを打ち破るが (-111B ′Rev.′ 11′–12′)、前 109/108 年にもアラブの略奪が記録され (-108B ′Rev. 20′)、事態の鎮静化は、一部のアラブがユーフラテス河畔のセレウケイア（シッパルあるいはネハルデア、Lendering 2020 参照）周辺に移動する前 106/105 年 (-105A ′Rev. 22′–23′) 前後のことになる。

このように大麦の価格が高騰し、アラブの脅威もなお予断を許さなかった前 108/107 年という年に疫病がバビロニアで蔓延したとみられることは、疫病が複合的な危機の連鎖の一部として発生したことを意味しよう。今次のコロナ禍の発生原因はいまだ明らかになっておらず、発生そのものを避けることができたとは考えにくいが、ひとたび一つの危機が発生した後においては、複合危機への高まりを避けるために力を尽くすことが重要ではないかと考える。すでに 2020 年 9 月から 11 月にはコーカサスにおいてナゴルノ・カラバフ紛争のような憂慮すべき事態も起こっているのである。

今回の考察では『バビロン天文日誌』からの事例抽出と、特に事例が多い前 108/107 年の危機の予備的な分析を行ったが、大麦の価格推移についてはさらに他の農畜産物の価格も含めたデータを網羅的に活用して精緻な分析を行い、ユーフラテス河の水位変化などの要因も考慮に入れて危機を多角的に検討する必要がある。また日誌に記録される他の衛生危機・社会危機についても前後の状況や同時期の農畜産物の価格や水位の変動を考慮した考察を行い、紀元前のバビロニアにおける危機から現在・未来の危機に対処するための知恵をできる限り引き出したい。そして都市文明への大きな挑戦であるコロナ禍の今こそ、都市文明の過去と現在を正確に把握して未来を構想する取り組みを進めていきたい。

略号

CAD　A. Leo Oppenheim, Erica Reiner, et al., eds. 1956–2010. *The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*. Chicago: The Oriental Institute.

ADART　Abraham J. Sachs, and Hermann Hunger. 1988–. *Astronomical Diaries and Related Texts from Babylonia*. Vienna: VÖAW.

参考文献

Lendering, Jona. 2020. “Seleucia on the Euphrates,” Livius.org. Last modified August 14, 2020. https://www.livius.org/articles/place/seleucia-on-the-euphrates/.

van der Spek, Robartus J. 2005. *Commodity Prices in Babylon 385 - 61 BC*. Amsterdam: Inter-nationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis. http://www.iisg.nl/hpw/babylon.php.

春田晴郎 . 1998.「アルシャク朝パルティアの一次史料：バビロン天文日誌第 3 巻の公刊」『オリエント』41/2: 181–193.

研究項目 A02「古代西アジア都市の景観と構造」

計画研究 03

「古代エジプトにおける都市の景観と構造」

計画研究 03「古代エジプトにおける都市の景観と構造」2020 年度活動報告

近藤二郎[1]・河合望[2]
[1] 早稲田大学文学学術院 [2] 金沢大学新学術創成研究機構

はじめに

本稿では、計画研究 03「古代エジプトにおける都市の景観と構造」の 2020 年度の活動について、研究代表者および研究分担者の個々の研究活動を報告する。また、本計画研究の活動の一環として実施した研究会で発表していただいた Peter Lacovara 氏（第６回）、長谷川奏氏（第７回）、周藤芳幸氏（第７回）、深谷正嗣氏（第８回）による詳細な論考については別稿を参照されたい。

研究成果報告：研究代表者

近藤二郎（早稲田大学）

2020 年度は、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の感染拡大の影響を受け、海外研究者を招聘した研究会・講演会の開催ができなかったばかりではなく、国内の研究会等も対面での実施が困難であったため、ZOOM を使用したオンラインでの実施を余儀なくされた。また本計画研究班は、エジプト・アラブ共和国において、複数の調査地で継続して現地調査を行っているが、2020 年度は現地における発掘調査などのフィールド調査も、新型コロナウイルス感染症の影響のため､ほとんどの調査が中止･延期となってしまったため、当初予定していた成果を十分にあげることが出来なかった。

2020 年 7 月 18 日計画研究 03 の代表者・分担者による打ち合わせ会を ZOOM で開催し、2020 年度の計画について話し合った。

2020 年 9 月 26 日 第 6 回研究会（ZOOM による開催）
Dr. Peter Lacovara (Director The Egyptian Archaeology and Heritage Fund, USA) *The New Kingdom Royal City*

2020 年 10 月 18 日第 7 回研究会（ZOOM による開催）
長谷川 奏（早稲田大学）「アレクサンドリア後背地のウォーターフロントにみる都市村落景観」
周藤 芳幸（名古屋大学）「ヘレニズム時代のエジプト領域部における都市景観と社会構造」

2020 年 11 月 15 日第 8 回研究会（ZOOM による開催）
深谷 雅嗣（愛知県立大学）「テーベの祭礼と宗教都市景観」

研究成果報告：研究分担者

河合　望（金沢大学）

2020 年度は新型コロナ・ウィルス感染拡大ということでエジプトでの現地調査、海外での学会発表は全て中止となった。したがって、これまでの現地調査の成果を報告あるいは論考としてまとめる作業を行った。北サッカラ遺跡では、2016 年よりサーベイを実施し、新王国時代の墓地の分布について明らかにすることを試み、こ

れまで未確認であった約 10 万㎡の規模の墓地を確認したが、そのサーベイの成果の概要と結果から得られた墓地選定の意味について考察した論文を Exploring the New Kingdom Tombs at North Saqqara という題でオランダのライデン古代博物館の雑誌、*Saqqara Newsletter* vol. 18 に寄稿した。この中で墓地だけではなくメンフィスの集落からのサッカラ遺跡の中心地の 1 つで聖牛アピスの墓地、セラペウムまでの参道ルートと新王国時代の墓地の形成について考察した。また、2019 年にローマ支配時代のメンフィスの聖職者が埋葬されたと考えられるカタコンベ（地下集団墓地）を発見したため、その短報を *Egyptian Archaeology* で報告した。また、金沢大学で開催した金沢大学エジプト学研究セミナー「ファラオの権力を考える」では「王権シンボルとしてのトゥトアンクアメン王の天蓋付きチャリオット」と題した発表の中で、パレードや儀礼を目的とするチャリオットの意味をアクエンアテン王の時代の文字史料と図像資料に基づいてアケトアテン（アマルナ）の都市空間との関係で論じた。そこでは、アクエンアテン王の治世の儀礼用のチャリオットはアマルナの東のワディに向かい、そこから朝日と共に都市の中心部に向かって疾走する太陽神アテンの出現に伴う東西軸を中心とするチャリオットの走行儀礼と、世俗的な民衆への示威を目的とする南北軸を中心とするチャリオットの走行儀礼の２つの目的があることを指摘した。その他に、アブ・シール南丘陵遺跡と北サッカラ遺跡に関する計 4 本の論文を国際雑誌に投稿し、掲載が確定している。2021 年 3 月には英国エジプト調査協会からの依頼でオンライン招聘講演が予定されており、北サッカラ遺跡で発見したローマ支配時代のカタコンベについて発表する予定である。

内田杉彦（明倫短期大学）

Moreno Garcia（ ‘Marketplaces and hubs of trade in Egypt at the end of the 3rd millennium BC : Heracleopolis Magna in context’pp.185-202 in Rahmstorf, L. and E. Stratford ed. *Weights and Marketplaces*, Kiel/Hamburg 2019）は、古王国時代に交易を通じて王権に奉仕し自らも利益を得ていた地方豪族と神殿の拠点である「都市」（*niwt*）が、王権による物資集積・供給センターだった *ḫwt* の機能を、統一王朝崩壊後の第一中間期に獲得し、「港／港地区」（*dmi*）が輸送・交易の重要拠点として徐々に「町」「都市」へと発展したと論じている。彼の仮説は、同時代の資料が不足していることもあり細部ではやや強引な点も見られるが、大筋では首肯できるものと言える。彼が指摘するように、古王国後期から第一中間期にかけての地方豪族の遺した銘文資料には、多くの舟を所有し、自らの「都市」のために穀物や家畜を輸送したことを誇る記述がしばしば見られ、当時の水運と「港」が経済的・社会的に重要であり、地方豪族の権威を示す指標となっていたことが窺える。文学作品「シヌへの物語」に言及される「長角牛の *dmi*」は畜牛の輸送拠点とみられ、*dmi* の経済的意義を示す一例と言える。また、上エジプト第 15 州の州侯ジェフウティヘテプの墓銘によれば、彼は、採石場から船で運ばれた自らの巨像を「都市（*niwt*）の港（*dmi*）」で迎え、「都市の人々（*niwtyw*）」が巨像を目にして歓呼したとされており、「港（*dmi*）」が、地方豪族にとって、自らの「都市」共同体に対する権威誇示の場であったことを窺わせる。中王国の「棺柩文書」には、死者が来世で家族や「都市の人々」「港の人々（*dmiw*）」に囲まれて過ごすことを保証する呪文が含まれており、「港」が既に「港町」（集落、市街地）、共

同体の生活の場として意識されていたことが暗示されている。国土再統一が成った中王国時代には王権による神殿造営が各地で行われたことに加え、おそらく第 12 王朝初期に国内の *dmi* を占領したことを記す将軍ネスモンチュの碑文、王家によってデルタに新設された *dmi* に言及するアメンエムハト 2 世の年代記などから、王権が地方の「都市」と「港／港町」のネットワークを掌握する意図を持っていたことが読み取れる。新王国の文献資料において *niwt* が神の居所、王による祭祀・供物奉献の場とされることは以前の報告で述べたが、これは中王国の王権による *niwt* 支配政策の延長線上にあるものと言えるかもしれない。

この *niwt* と祭祀の関連については第二中間期に関する資料からも窺える。「カモセ第二石碑」では、ヒクソスの首都アヴァリスが *dmi* とされているのに対し、ヒクソス王に従ったがその直轄領ではない中部エジプト諸都市が *niwt* と呼ばれ、後者は「彼らの女主人であるエジプトを蹂躙した」ヒクソスに仕えたため荒廃させられたとされている。文学作品「アペピ王とセケンエンラー王の争い」では、セケンエンラー王が（「南の *niwt*」とされる）テーベ、ヒクソス王アペピがアヴァリスにそれぞれ君臨するなかで、「太陽神ラー・アトゥムの *dmi*」（i.e. ヘリオポリス）が災厄のさなかにあると記される。これは新王国時代の「スペオス・アルテミドス銘文」の、ヒクソスが「太陽神ラーなしに」支配したとする記述と合致し、伝統的な太陽神を蔑ろにした野蛮な侵略者としてヒクソス王朝の正当性を否定するテーベ王朝側の意図を示すが、ヘリオポリスがヒクソス王朝の直轄支配下にあったとみることもできるだろう。以上から、エジプトの神々の祭祀が維持されている（維持されて当然の）「都市」は *niwt* とされるのに対し、そのような祭祀が行われなくなった（神の居所ではなくなった）「都市」は *niwt* とはされず *dmi* と呼ばれていたとみられる。

柏木裕之（東日本国際大学）

建造物の方位がどのように決められたかは、古代エジプト建築の理念や都市構造の解明につながる重要な課題である。いくつかの神殿や墳墓については、その軸線が太陽や星の運行と強い関連性をもつことが提示されているが、その法則は同時代に作られた同種の建造物全てに合致するわけではなく、建築方位の原理は必ずしも明確になっていない。建造物の種類や建立時期ごとの方位の傾向を整理するだけでなく、例えば冬至や夏至の日の出と建築方位が一致する場合、定礎の儀式もまた時期を合わせていたのか、言い換えれば建造物を着工する時期は一年の中で決まっていたのか、といった氾濫や気候等も考慮に入れた検討が必要だろう。

筆者はこれまでに早稲田大学エジプト調査隊の一員として複数の発掘調査に関わる機会を得、出土した遺構の建築方位についても検討してきたが、未だその意味や決定方法をあぶりだせていない。古代エジプトの都市構造を探る本研究課題の一つとして、2020 年度はアブ・シール南丘陵遺跡の建築方位を検討した。

この丘陵遺跡はサッカラ遺跡の北端に位置し、これまでに頂部から 3 基の地上構造物と 1 基の岩窟墓が、丘の裾野からは 1 基の地上構造物と 2 基の岩窟遺構の、計 7 基の主要な遺構が発見された（図 1）。調査研究によって各遺構の造営時期については概ね判明し、頂部の 4 基は新王国時代に、斜面の 3 基は古王国時代および中王国時代に造営されたと考えられている。

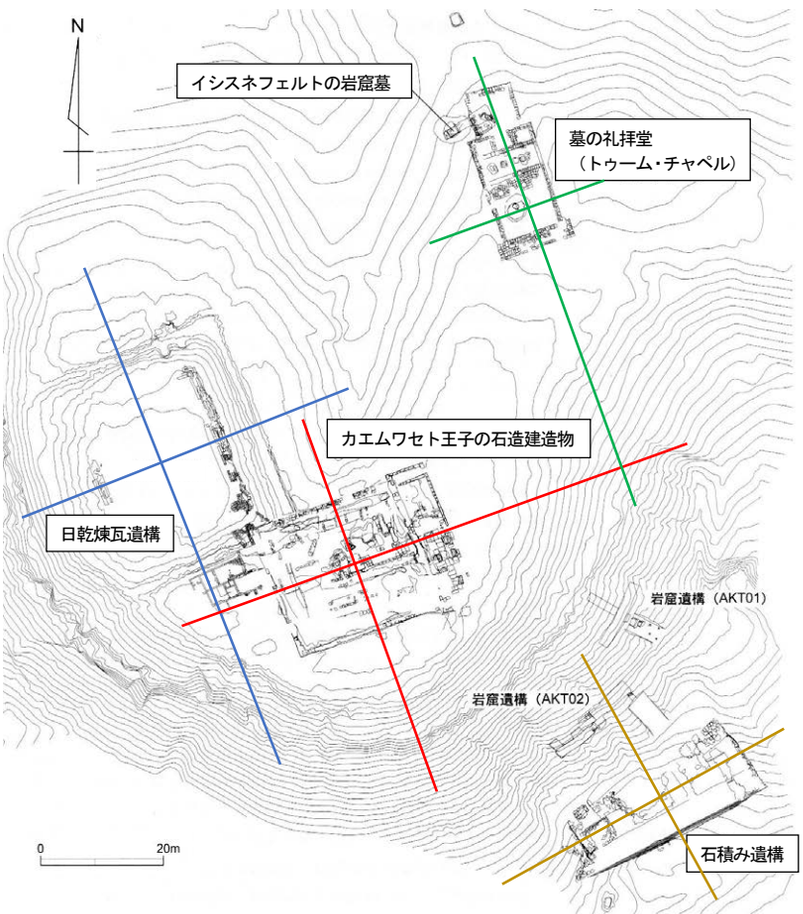


図１　アブ・シール南丘陵遺跡で発見された遺構

造営年代に対し遺構の性格と帰属する人物については不明な点が残り、特にこの両者がともにわかっているのは頂部に作られたイシスネフェルトの岩窟墓だけといってよい。丘陵頂部の残る３遺構は、アメンヘテプ２世もしくはトトメス４世の日乾煉瓦遺構、カエムワセト王子の石造建造物、さらに墓の石造礼拝堂（トゥーム･チャペル）で、前二者はその性格がはっきりせず、これに付随した埋葬施設が見つかっていないという意味で、埋葬に関わる可能性は低いというにとどまっている。一方墓の礼拝堂は、未完成で放棄されたため予定されていた被葬者が確定できていない。

丘陵裾野から見つかった石積み遺構と付属する岩窟遺構一基はジョセル王頃の建立と想定され、またもう一つの岩窟遺構は中王国時代に利用されたことが明らかになっているが、いずれも性格ははっきりせず、人骨が発見されなかったために岩窟墓ではなく、岩窟遺構と呼んでいる。

遺跡の発掘調査は既に終了しており、今後新資料が入手できる可能性は低い。そのため遺構の性

格を追求することは困難であるが、建築方位の特徴を整理する作業を通じて、特に頂部 3 基の構造物について再考を試みたい。

丘陵頂部に築かれたアメンヘテプ 2 世もしくはトトメス 4 世の日乾煉瓦遺構とカエムワセト王子の石造建造物はどちらも長方形平面をし、全体規模は類似している。ただし、後者の石造建造物は柱の並ぶ東面が正面であるのに対し、日乾煉瓦遺構の長軸は南北を示している。主軸の角度は、石造建造物の東西長軸が真東よりも約 19 度北に振れているのに対し、日乾煉瓦遺構の南北長軸は真北よりも西に約 21 度振れている。東西もしくは南北軸で比較すると近似しており、二つの長軸についてみれば、はほぼ直交している。

両者の配置関係を見ると、石造建造物は日乾煉瓦遺構を一部削って作られた。例えば長軸をもう少し北に振れば削ることなく配置することも可能であるがそうした措置をとっていない。また日乾煉瓦遺構が築かれた場所は丘陵の中で最も高く、両者の間には 150 年程度開きがある。日乾煉瓦遺構を改変あるいは覆う形でこの場所に石造建造物を建てることも可能だったはずだが、むしろ日乾煉瓦遺構を避けるように配置している。そのため石造建造物は日乾煉瓦遺構と強い関係をもち、日乾煉瓦遺構のもつ意味や機能を補完する役割も保持していた可能性が挙げられる。そうであるならば、石造建造物の軸線は、既に存在していた日乾煉瓦遺構の軸線と揃えたのではないか、と筆者は推測する。

日乾煉瓦遺構の軸線がどのような理由で決められたのかを明らかにすることはできないが、石造建造物がその軸線の意味を正しく理解し、それゆえ隣接する場所を選んだならば、両者の性格もまた互いに類似していた可能性が考えられる。日乾煉瓦遺構が少なくとも葬祭に関わる建造物ではなかったことを想起すれば、石造建造物もまたカエムワセト王子の葬祭建築ではなかった可能性が挙げられる。

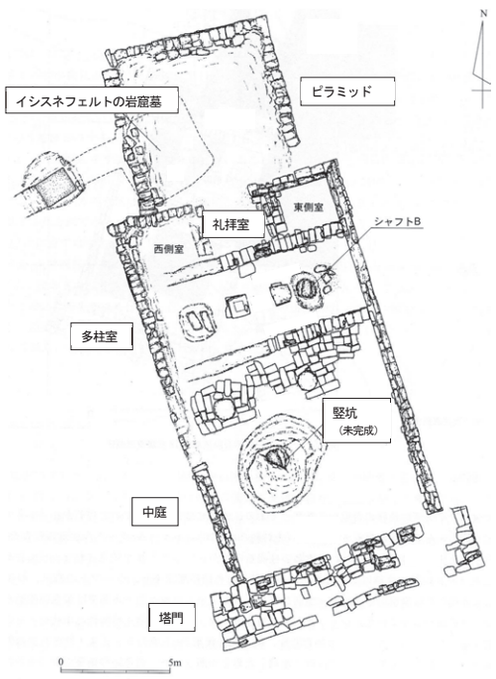


図 2　石造礼拝堂

丘陵頂部にはこの 2 基のほかに、墓の石造礼拝堂が作られた（図 2）。この建造物は未完成の状態で作業が放棄されたが、用いられた建造技術などからカエムワセト王子の石造建造物と近い時期に作られたと考えられた。また平面は、南から北に向かって塔門、中庭、横長の多柱室、3 室からなる礼拝室（至聖所）が並び、最奥にピラミッドが鎮座する構成と想定された。中庭には鉛直な竪坑が途中まで掘削され、またピラミッドを備えることから、高官墓の礼拝堂（トゥーム・チャペル）とみなしてよい。

類似した礼拝堂は、サッカラ地域で数多く発見

されているが、一方でこれらと異なる要素も見受けられる。一つが建築方位で、周辺地域の礼拝堂はいずれも東を向いているのに対し、丘陵出土の礼拝堂は南を正面とし、主軸は真南よりも約 17 度東に振れている。

もう一つが平面構成で、周辺地域の礼拝堂の場合、竪坑は壁で囲まれた中庭に穿たれ、その西側に礼拝所が接続される。規模の大きな礼拝堂では中庭に柱が立ち、庇が作られた。また礼拝所も左右両脇に一つずつ側室が加わり 3 室構造となる。この他塔門の前面に中庭が増築され、複数の中庭が並ぶケースもある。いずれにせよ竪坑を備えた中庭とそれに面した礼拝所という構成は共通している。これに対し丘陵頂部の礼拝堂では、竪坑をもつ中庭と、3 室が並ぶ礼拝所の間に、柱が並ぶ独立した部屋が設けられていた。こうした部屋は多柱室もしくは列柱室と呼ばれ、神殿建築では中庭に続く空間として広く見られる。しかし近傍の墓の礼拝堂では、3 室の中央の部屋が拡張し柱を備えた例はあるものの、独立した多柱室を持つ例はない。そのため平面構成を見る限り、墓の礼拝堂と言うよりは神殿建築に近い。

礼拝堂の軸線を頂部の 2 遺構と比べると、時代的に近いカエムワセト王子の石造建造物とほぼ直交していることがわかる。両者の強い関係性は既に河合現場主任によって指摘されているが、互いの性格が不明なため、その意味を明らかにするに至っていない。

この礼拝堂の周囲には、敷地や方位の選択を妨げるような遺構はなく、自由に設定できたと考えられる。ところが礼拝堂は北側に下る傾斜地に位置し、特に背後のピラミッドは大きく傾いた場所に築かれている。礼拝堂の塔門の前面には平坦面が広がっており、全体的に南へ移動すれば安定した平坦面に築くことが可能であり、また周辺地域の礼拝堂のように長軸を東西方向に向ければ、より開けた場所に作ることもできたと思われる。逆に言えば、そうした敷地の利点以上に方位のしばりが強く働いていたことを窺わせており、石造建造物との関係の中でその配置が決められた可能性が高い。

先にカエムワセト王子の石造建造物は日乾煉瓦遺構の軸線を踏襲し、同様の機能を持っていた可能性を述べた。その機能は名状しがたいが、少なくとも日乾煉瓦遺構は墓の礼拝堂ではないため、石造建造物も墓の礼拝堂ではなく、神ないし個人を崇拝する神殿的な建造物であった可能性が考えられる。そして墓の礼拝堂が石造建造物の軸線に強い影響を受けて建てられたならば、礼拝堂の機能もまた石造建造物と関係をもっていた可能性が挙げられる。だが、墓の礼拝堂はその機能が明らかになっており、近傍において墓の礼拝堂が葬祭建築ではない神殿的な建造物と強く結びついて建てられた例も見当たらない。むしろ互いに直交した配置は、神殿建築同士でなされることが多い。

出土した墓の礼拝堂が葬祭建築であったことは確実である。しかし、竪坑の掘削が早い段階で放棄されており、逆に言えば着手された時期は工程の後の方であった可能性が高い。またピラミッドは傾斜した地面に作られ、更に詳しく観察したところ、その軸は礼拝堂部分に対しやや振れていた。更に独立した多柱室を備える平面構成は近隣地区の墓の礼拝堂にはなく、神殿系の建造物に見られることを矛盾なく説明しようとするならば、一つの可能性として、この礼拝堂は当初カエムワセトの石造建造物と関係した神殿系の建造物として計画され、工事も着手されたが、何らかの理由によって計画変更が生じ、墓の礼拝堂に改変されたとい

う解釈ができるかもしれない。

この礼拝堂にはレリーフなどの文字史料が刻まれておらず、誰に所属する遺構なのかはっきりしない。ピラミッドの脇にイシスネフェルトの岩窟墓が造営されたが、竪坑はこの礼拝堂の外側に位置しており、この人物に直接属するとは考えにくい。それでも、この礼拝堂に急遽埋葬されることになり、だが結局遺体は安置されなかった人物とイシスネフェルトが強く結びついていたことは確からしく、カエムワセト王子の可能性も含め幅広く検討することが求められよう。

いずれにせよ、丘陵頂部の 3 遺構は互いに関連した軸線で計画されていた。この中で最も古いのが日乾煉瓦遺構で、この遺構の軸線がどのような理由で決定されたかは重要な課題である。その際考慮すべきこととして、斜面の裾野に作られた石積み遺構の存在を挙げておきたい。石積み遺構は古王国時代初期に築かれ、日乾煉瓦遺構とは 1200 年ほど離れている。新王国時代には石積み遺構の大部分が地中に埋まり、廃墟になっていたに違いない。また裾野に位置するため頂部から直接視認することもできない。そのため石積み遺構の軸線を参照した可能性は低い。だが石積み遺構の正面となる南面は真南よりも 26 度程東に振れている。日乾煉瓦遺構の長軸は真南よりも約 21 度東に振れており、大きくみれば類似した傾向と捉えることもできる。また石積み遺構は、その背後に聳える丘陵を含めた複合体の一部と考えられる。日乾煉瓦遺構が位置する場所は最も高く、その頂部を大きく削平して作られた。頂部の発掘調査では石積み遺構と関連する遺構や遺物は検出されなかったが、頂部にかつて何らかの施設が存在した可能性は低くない。そうした丘陵の持つ性格が日乾煉瓦遺構へと受け継がれたならば、その軸線の意味は古い時期にまで遡って検討する必要があるだろう。この丘陵における建築方位の分析は、サッカラ地域全体の都市構造の解明につながることが期待され、周辺から新たに発見された遺構などを取り入れた包括的な検討が望まれる。

周藤芳幸（名古屋大学）

昨年度に引き続き、パピルス文書の分析とアコリス遺跡でのこれまでの調査の成果にもとづいて、ヘレニズム時代のエジプトにおける都市の景観と構造を解明する研究に取り組んだ。Covid-19 の影響によりフィールド調査を行うことはできなかったが、2019 年度の調査を実施したのが 2020 年 1 月だったこともあり、その際に収集したデータ分析をして結果を概報に公表した。（Y. Suto, R. Takahashi, and S. Uchida, “Epigraphical Survey in the New Minya Quarry,” *Preliminary Report Akoris 2019*, Akoris Archaeological Project, 2020, 20-23）

2020 年 12 月 26 日（土）には、科研費基盤研究（A）「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」との共催により、公開シンポジウム「アコリス考古学プロジェクト 2020 - エジプト領域部研究の新展開」をオンラインで主催した。個別発表の内容は、以下の通りである。

周藤芳幸「アコリス遺跡とエジプト領域部の盛衰」
周藤芳幸・高橋亮介「2019 年度ニュー・メニア採石場調査」
森永拓光「エジプト・アコリス遺跡のニュー・メニア採石場 N 区に残る巨石に関する一考察」
清水麻里奈「プトレマイオス 2 世治世下のメンデス碑文について」
小川拓郎「ニュー・メニア採石場における地質学的及び建築学的分析（1）」

安岡義文・西本真一「アコリス南石切場の未完成巨石の掘削工程について」
花坂哲「2019 年度アコリス遺跡南区発掘調査」
辻村純代「2019 年度アコリス出土人骨と最近の人骨研究の動向」

なお、アウトリーチ活動の一環として、2021 年 1 月 22 日に、古代オリエント博物館ナイト講座で「エジプトの採石場でヘレニズムを探る」と題する一般向けの講演（オンライン配信）を行った。

高宮いづみ（近畿大学）

本年度は、昨年度に引き続き、先王朝時代・初期王朝時代・古王国時代の都市について関連文献の収集と文献からの考察を進めた。収集資料を踏まえて、古代エジプトの都市の構造と景観について、初期国家形成過程の観点から、国家による人のモビリゼーションをテーマの一つとして取り上げている。初期国家形成に伴う国家による人のモビリゼーション（古王国時代に良く知られている）が都市形成過程・都市の構造と景観にどのような影響を与えたのか、国家形成以前の先王朝時代と国家形成直後の初期王朝時代にかけての変化を追うことによって明らかにすることを念頭に置いている。

人のモビリゼーションを考察するに際して、マクロとミクロの観点がある。本年度も、マクロの観点から、先王朝時代から初期王朝時代にかけての古代エジプト南縁部（アスワン～エドフ付近）おける集落の分布とその変化の考察を試みた。この時期の集落と墓地の分布に関する基礎的データは、Hendrickx, S & van den Brink, E.C.M. 2002:”Inventory of Predynastic and Early Dynastic Cemetery and Settlement Sites in the Egyptian Nile Valley”, in van den Brink, E.C.M. & Levy, T.E.(eds.), *Egypt and the Levant. Interrelations from the 4th through the Early 3rd Millennium B.C.E.*, London/ Leicester University Press:346-399 に 2000 年頃までの情報が集約されており、それ以降の調査情報および古王国時代以降の情報を個別に収集して、分析を試みる過程にある。

ミクロの観点からは、上記地域内に位置するエレファンティネ遺跡を取り上げて、都市の成立過程・構造・景観に関する考察を試みた。該期のナイル川流域において集落の検出例は限られているが、アスワンの中州に当たるエレファンティネ島の遺跡では、ドイツ考古学研究所の発掘調査によって、先王朝時代末から王朝時代以降までにかけての集落址が層位的に検出されており、断片的ではあるが当該時期の集落の変遷に関する知見が得られている（Ziermann, M. 1993: *Elephantine XVI: Befestigungsanlagen und Stadtentwicklung in der Frühzeit und im frühen Alten Reich*. Mainz am Rhein/ Philpp von Zabern; Kopp, P. 2006: *Elephantine XXXII: Die Siedlung der Naqadazeit*. Mainz am Rhein/ Philipp von Zabern 他）。エレファンティネ遺跡は、王朝時代のエジプトの南縁国境に当たる場所に位置しており、第 1 王朝初期に国境城塞が建造されているため、国家形成に関連する人と物資のモビリゼーションを解明する手掛かりを提供する可能性が高い。

ただし、エレファンティネからの資料は限られているようであり、今後課題解明の方向性を模索する必要がある。

田澤恵子（古代オリエント博物館）

本分担者は、古代エジプト都市が有した機能に

ついて「宗教と福祉」の面から研究を進めている。2020 年度は新型コロナウィルス感染症感染拡大のためフィールド調査を実施できなかったが、これまでに実施した調査をまとめながら、下記の 2 件に取り組んだ。

① 報告「東地中海地域における女神信仰の系譜研究－キプロス調査（2018.03.13-20.）報告－」（古代ジェンダー研究会 2020 年 8 月 15 日 ZOOM 開催）

パウサニアス『ギリシア案内記』1.14.6 によれば、女神アフロディテはオリエント世界の豊穣の大女神であるシュメルのイナンナやセム系のイシュタル、アシュタルテに起源を持ち、フェニキア人を介してキプロスに広まり、ここから更に西方のギリシア世界へ伝えられた。また、ストラボン『地誌』8.6.20 は、スパルタとコリントスでは特にアフロディテ信仰が盛んで、スパルタではアフロディテは戦闘女神としても崇拝され、コリントスのアフロディテ神殿には多くの神殿娼婦がいたと述べている。

本報告では以上の 2 点に基づいて、アフロディテの起源とされるオリエントの女神たちが最初に地中海地域に伝わったと言われるキプロスをキーワードに、西アジアからギリシア世界への女神信仰の西漸と、シリア・パレスティナ経由でその流れに加わって東地中海地域へ伝わった古代エジプトの女神たち（イシス、ハトホル、エジプトのアシュタルテ、エジプトのアナト、ケデシェト）の影響について図像と属性に焦点をあてて検証した。また、2018 年に実施したキプロス巡検をもとに、同地を経由してギリシア・ローマ世界へと信仰地域を広げたオリエントの女神たちと、彼女たちが伝えられた土地（都市）における信仰の様子について調査・比較し、考察を深めた。信仰地（都市）が備えた性格がその地に伝えられた神々の属性に影響を与えるなど、都市と信仰の関係性について更なる研究の可能性を確認できた（本発表は、2018 年度－ 2022 年度科学研究費補助金基盤研究 A（一般）18H03587「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」（研究代表者：周藤芳幸）と連携している）。

② 本分担者はこれまでデンデラをケーススタディとして、サナトリウムを有する同地のハトホル神殿の医療インフラとしての役割に着目し、宗教都市の中心的存在である神殿が備えた社会福祉施設としての機能について考察をおこなってきた。本科研の研究期間も後半に入り、今後は医療問題に限定せず、幅広く一般的な弱者救済・公共福祉の視点から、都市の中で神殿や宗教が果たした社会福祉機能について検証していくこととし、本年度は文献確認等その準備を開始した。

辻村純代（古代学協会）

今年度はコロナ禍で現地アコリス遺跡での発掘調査を実施することが叶わなかったため、2019 年度冬に実施した発掘調査の概要報告、”Preliminary Report AKORIS 2019” を刊行し、第 3 中間期の都市遺跡における墓域の分析と埋葬人骨の形質学的研究を行った。その成果の一部は第 4 回アコリス研究会（オンライン）で発表した。

第 **3** 中間期の墓地構成：アコリスの墓域と比較するために取り上げた資料としては Matmar、Abydos、サッカラの Tomb of Iurudef を再利用した例など第 3 中間期の資料のほか、新王国時代のアマルナ南墓地、ファイユームの Gurob、テーベ西岸の Deir el-Medina、ローマ時代の Douch、マルカタ南・“ 魚の丘 ” 建物廃絶後の埋葬群などがある。

一般に古代エジプトでは古王国以来の核家族が長く続いたと推定され、実際、エリート層における家族墓はそのような想定にふさわしいのだが、新王国時代から第 3 中間期にかけての庶民の集団墓地では家族としてのまとまりを欠いている。Abydos における第 3 中間期に現れる子供 (胎児 / 新生児～ 5・6 歳) の墓域を取り上げた D.C.Patch は、その理由を共同体の成員権を得られていないからだろうとみている。アコリスでも同様の墓域があり、子供の年齢によって多様な棺種が選択されている。甕棺、葦やパピルスの茎で編んだ籠や小箱、箱形木棺のほか、茎を括って作ったマットを遺体に巻く方法などは既に新王国時代以降、Gurob から南部の Deir el-Medina まで広い地域で用いられており、エリート層の家族墓に納められた子供の多くに小さな人形木棺を用いるのとは異なった状況を示す。また、子供の墓域にあっても成人女性が含まれ、それ以外でも子供と成人女性の墓が近接する傾向はギリシア・ローマ時代に家族墓が普及するなか、“魚の丘”にみるようにローマ時代まで続く。

人骨の形質学的研究：アマルナ南墓地では出土人骨の 11 例に幼児期の栄養失調を示す眼窩篩 (Cribra orbitalia) が認められているが、同じ理由によるエナメル質減形成と共にアコリスにおける眼窩篩はそれほど顕著ではないことからすると食料不足は深刻ではなかったと思われる。頭蓋に発生する多孔性骨形成過多症も栄養失調を原因とする説があるけれども、これについてはマラリアや結核といった感染症による可能性も指摘されている。

アコリスでは多数の紡錘車や麻糸の塊が広く分布し、製粉と共に女性によって担われていた家内労働の一つと考えられる。織物作業が肘関節に影響を与える可能性は、エジプトの機織りが水平機、垂直機共に手前に腕を引く動作であることからさほど肘に負担はかからないようである。いっぽう、製粉は石皿を前にして跪坐で行うので脛骨遠位端と距骨近位端に蹲踞面を形成する。マルカタ南“魚の丘”出土の成人骨のほとんどに蹲踞面がみられたという指摘がある。そこには、女性だけでなく男性も含まれているのだが、男性の労働に跪坐で行う仕事は今のところ不明である。日常の仕事に結びつくこうした人骨の変異は庶民の生活を復元する上で重要で、今後とも調査を継続したい。

中野智章（中部大学）

古代エジプトにおける都市の景観と構造を明らかにするため、昨年度に引き続き、1）国家形成期における首都メンフィス域の様相、2）首都を中心とした都市における王の表象の変化、3）ギリシア世界などとの接触の中でエジプトの都市がどのような変化を遂げたか、の 3 点について研究を進めている。今年度はコロナの影響もあり、海外での調査は叶わなかったが、昨年度に案を示していた展覧会の監修や、オンラインで開催されたシンポジウム等で研究発表を行った。

1. ライデン国立古代博物館所蔵『古代エジプト展』（展覧会図録） 監著、東京新聞・中日新聞社・フジテレビジョン、2020 年 9 月、211 頁

17 世紀のオランダ人旅行者が記録したギザの大スフィンクスから最新の研究プロジェクトに至るまで、古代エジプト文明に人びとがどのように関わり、さまざまなことを明らかにしてきたかを概観する。都市との関連においては、サッカラ遺跡におけるオランダ･イタリア隊によるデジタル･サーフェスモデルの構築や第 3 中間期に制作され

たミイラ棺の地域性などを紹介している。本展覧会については、『美術の杜』や『時空旅人』などの一般向け雑誌でも記事を寄稿し、その紹介に努めた。

2. エジプトの初期王権はどのような性格を有していたか

金沢大学エジプト学研究セミナー（現地会場とオンライン） 2020 年 11 月 14 日

エジプト初期王権のあり方について、資料の状況や研究の進展を紹介しながら、首都メンフィス隣接の第 1 王朝サッカラ墓地の被葬者像から当時のメンフィス域について述べるとともに、王墓地アビドスとの差がどこにあったのかを検討した。また、連続菱形文に代表される王の表象が後のピラミッドにもどのように用いられたのかを、当時の王権とあわせて論じた。

3. エジプト最古の階段ピラミッドはなぜ造られたのか

南山大学人類学博物館 博物館講座（オンライン）2020 年 12 月 18 日

前 2650 年頃の建造とされるジョセル王の階段ピラミッドは、第 4 王朝以降の真正ピラミッドに見られるような河岸神殿などを持たず、その構造は大きく異なっている。王朝文明の開始とともにサッカラ遺跡では王族や高官層のマスタバが多く建造されたが、そこから階段ピラミッドが登場していく過程にはどのようなプロセスがあり、葬祭施設として何が重視されたのかを論じた。

西本真一（日本工業大学）

都市や建築に目を向ける前に、まず建材としての日乾煉瓦を詳しく検討することが望まれるように思われる。例えば、「建築のために必要な労働力を煉瓦という建築材料の生産にあらかじめ投入することができ、また休むことなく労働力を使うことができるわけで、煉瓦という形の中に労働力をあらかじめ貯蓄しておくことができるわけである。（中略）この工夫が建築生産を大きく変革させたのである（渡辺 1983:291-292）」といった見方がありうる。この見解は考古学者によるものではなく、建築生産史を専門とする者の意見であり、こうした考えをマルクスの亜流と片づけるのはたやすい。しかし人間の工夫が込められたものとしての煉瓦に着目した先蹤者としては、さらに遡った時代にも存在する。17 世紀生まれのアイザック・ニュートンはその代表である。

この物理学者が錬金術と古代建築研究にも勤しんでいたことはすでに伝えられており（Westfall 1983; Dobbs 2009）、従来は旧約聖書に記述が残るソロモンの神殿の姿の復原に彼は晩年を捧げていたと考えられてきた一方、ニュートンが書き遺したすべての原稿の類をオンラインで刊行することを目的とした「ニュートン・プロジェクト」が近年大いに進展した結果、かなり前からこの神殿の復原を記す形跡が手稿の中でうかがわれることが明らかとなりつつある（Morrison 2011; 2016）。ニュートンが古代建築研究において果たした功績（Newton 1744）については、おそらく３つの点を挙げることができるであろう。

ひとつめは、古代建築の基本的な部位の寸法に当時の尺度の倍数が用いられたとみなした点である。考古学の創始者のひとり F. ピートリーは、明らかにこの考えに強く影響されたことが伝記に記されている（Drower 1985:26）。ふたつめは、グリーヴスによるギザのピラミッドの実測結果（Greaves 1646）から古代エジプトの王尺の長さをかなり正確に言い当てたことである。メートル法で言うならば 1 キュービット＝ 52.4cm ほど

のこの長さの提示に対し、E. F. ジョマールは「エジプト誌」において反発した（Jomard 1809:495）が、その後に奉納に用いられた物差しが次々と出土するに及んでジョマールの説は後退せざるを得なかった。３つめは、煉瓦の大きさが当時の物差しの長さと同一であったなら、建物全体で用いられる煉瓦の総量は簡単に求められたであろうと推察したことである。W. K. シンプソンは古代エジプトの中王国時代における煉瓦総量の積算がパピルスにかなり省略されながら記されていた点を明らかにしたが、それは 1960 年のことであった（Simpson 1960）。

建築学に対するニュートンの功績は改めて見た場合、どう解釈することができるのであろうか。古代エジプトにおける煉瓦の大きさが推移する点は、果たして何を意味するのであろうか。こうした点を今一度、見直す必要があると思われる。

B. J. T. Dobbs, *The Foundations of Newton's Alchemy*. Cambridge: Cambridge University Press, 2009.

M. S. Drower, *Flinders Petrie: A Life in Archaeology*. London: Victor Gollancz, 1985.

J. Greaves, *Pyramidographia, or a Description of the Pyramids in Aegypt*. London: George Badger, 1646.

E. F. Jomard, «Mémoire sur le système métrique des anciens Égyptiens, contenant des recherches sur leurs connoissances géométriques et sur les mésures des autres peuples de l'antiquité,» in *Description de l'Égypte, ou recueil des observations et des recherches qui ont été faites en Égypte pendant l'expédition de l'armée française, publié par les ordres de sa majesté l'empereur Napoléon le Grand*. Antiquités, Mémoires I. Paris, 1809, 495-797.

T. Morrison, *Isaac Newton's Temple of Solomon and His Reconstruction of Sacred Architecture*, Basel: Springer, 2011.

T. Morrison, *Isaac Newton and the Temple of Solomon: An Analysis of the Description and Drawings and a Reconstructed Model*, Jefferson: North Carolina, McFarland & Company, 2016.

I. Newton, "Dissertatio de sacro Judaeorum cubito, atque de cubitis aliarum gentium nonnullarum; in qua ex maximae aegyptiacarum pyramidum dimensionibus, quales Johannes Gravius invenit, antiquus Memphis cubitus definitur," in *Opera* m *athematica, philosophica et philologica* III, Lausannae & Genevae: Apud Marcum-Michaelem Bousquet & Socios, 1744, 491-510.

W. K. Simpson, "The Nature of the Brick-work Calculations in Kah. Pap. XXIII, 24-40," *Journal of Egyptian Archaeology* 46:1, 1960, 106-107.

R. S. Westfall, *Never at Rest: A Biography of Isaac Newton*. Cambridge: Cambridge University Press, 1983.

渡辺保忠「マルカタ南 [I]：魚の丘 < 建築編 >」早稲田大学出版部、1983 年。

長谷川 奏（早稲田大学）

成果報告については別稿を参照されたい。

矢澤　健（東日本国際大学）

2020 年度は中王国時代におけるセトルメント・パターン分析から、古代エジプトの集落の特性を導出するための準備を実施した。

都市国家と対比して領域国家とされた古代エジプトでは、機能を異にする集落がナイル川周辺に直線的に分布し、それぞれが密接に結びついて全体が構成されていたことが、過去に指摘されていた。近年では、エジプト内のネットワークだけでなく、中部エジプトのように東西が砂漠の一見閉鎖的な環境においても、人々は東部砂漠の道やその先にある紅海、オアシス地域に続く砂漠の道を通して東西に交流しており、ナイル川による南北

の物流と交叉する国際的な交易ネットワークが形成されていた可能性が示唆されている。このネットワークで地域の中核を担っていたのが州都と考えられ、その位置と交易のルートには密接な関係があったことは想像に難くない。

古代エジプトのセトルメント・パターンについては、1976 年の K. Butzer による包括的な研究があり、N. Moeller が指摘しているように、この成果を更に進展させるデータは近年まで提出されていない。この研究は自然環境と集落との関係や人口動態に重点が置かれており、上記のような交通ネットワークの影響にはあまり触れられていなかった。M. Bietak が都市の指標として交通の要衝であることを含めていたよう、交易・交通に有利な立地の重要性は指摘されてきたが、体系的な研究は行われてこなかった。

そこで本研究は「交通」に焦点を当てて、エジプト全土の集落と資源の採掘・採取地、オアシスや紅海へ抜ける道などとの位置を GIS を利用して 1 つのデータベースに統合し、その位置関係に見られる傾向を把握することを目的とし、本年度はそのための準備を行なった。まず集落や鉱物資源の採掘地を地球座標によって記録し、オープンソースの GIS ソフト QGIS に集約した。QGIS に

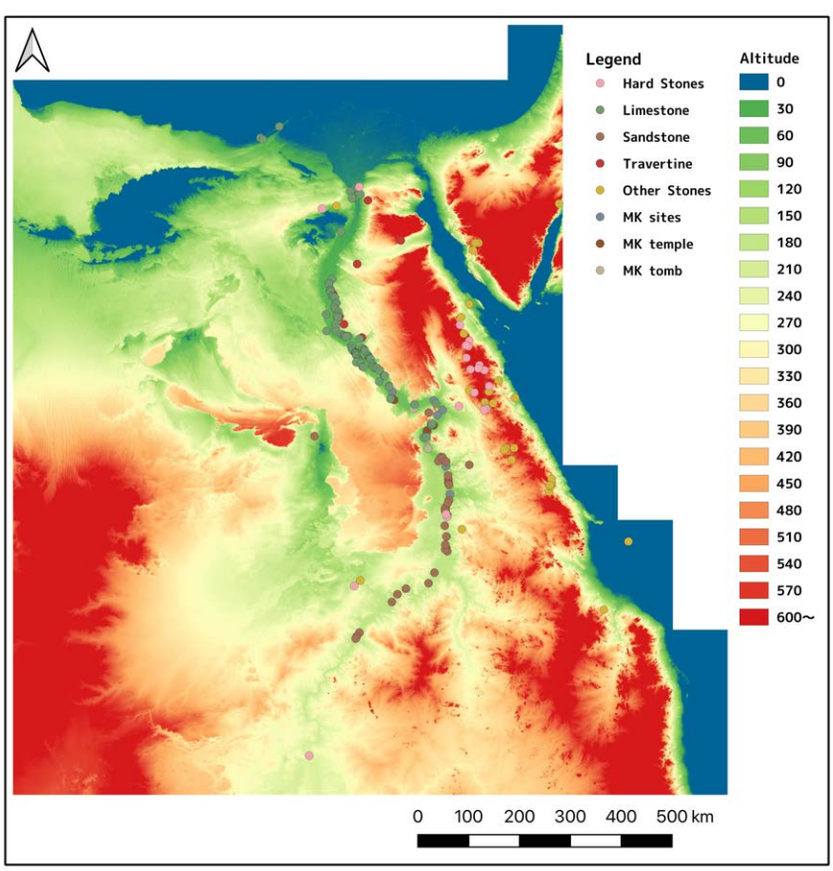


図 3　QGIS 上で統合した ALOS の DEM と中王国時代の遺跡、鉱物資源採掘地の位置

は陸域観測技術衛星 ALOS によって取得された 30m メッシュの DEM（数値標高モデル）データをレイヤとして追加した。これは将来的にナイル川周辺地域から鉱物資源採掘地へのコストパス解析や、東部・西部砂漠での交易ルートの検討に利用される。砂漠の道については、リモートセンシングによる調査成果や、近現代のキャラバンルートを記録した研究があり、これらを参考に GIS のレイヤとして加える。さらに、各地で行われていた交易に関する図像・文字資料を州侯の墓などから収集し、GIS のデータに見られる傾向と対比していくことを目標としたい。

本年度は上記の分析の開始に至るまでの先行研究の渉猟と、中王国時代の遺跡及び鉱物資源に関するデータ化の作業に終始した。本報告時までに記録できた遺跡と鉱物資源を DEM レイヤ上にプロットした図を添えた（図３）。来年度に GIS のデータベース作成を完了し、本格的な分析に着手したい。

テーベの祭礼と宗教都市景観

深谷雅嗣
愛知県立大学多文化共生研究所

テーベの都市域

宗教都市テーベの発展は、アメン信仰の興隆なくして語ることはできない[1]。南北に流れるナイル川を中心にして東西に広がる都市域は、アマルナのようにかつて境界碑で定められていたと考えられる。カルナク神殿で発見されたセンウセレト1世のステラ[2]やラムセス3世のステラ[3]は、その一例だろう。しかし、センウセレト1世が建立した通称「白の祠堂」にある州のリストのうち、テーベ州に関してアメンの名は言及されない[4]。そこには、メンチュウとソベクしか登場しない。メンチュウの信仰中心地メダムド、アルマント、トードを念頭にした古い記録をそのまま書き写したもので、当時のテーベの様子を反映してはいないのだろう。とはいえ、アメンを誰がいつからテーベの主神、ひいてはエジプトの至高神の1つとして見做すようになったのか、よく判らない。第11王朝のインテフ2世（紀元前21世紀）の時代までに、アメンはラーと集合したアメン・ラーとなり、*ʾImn-rˁ nb p.t sḫm t3 iwn w3s.t*「天空の主、地上の権威、テーベの御柱」と称された[5]。2世代後のメンチュヘテプ2世は、自身の墓所を兼ねた壮大な神殿アク・スウトをテーベ西岸のデール・エル＝バハリに建造した。最初、王とともにこの神殿に祀られたのはメンチュウ・ラーであって、アメン・ラーではなかったようだ[6]。

アメン信仰の実態が露わになるのは第12王朝になってからである。アメンエムハト1世時代に生きたと考えられるワブ神官のネフェルアベドは落書きを次のように残している[7]。

1　テーベの都市景観については、いくつか論考が発表されている（Nims 1955; Vandorpe 1995）。

2　Cairo JE 88802 (PM II^2, 108).

3　Cairo JE 41209 (PM II^2, 294).

4　PM II^2, 63; Lacau and Chevrier 1956, pp. 207–50.

5　カルナク神殿にあったインテフ2世の八角柱の銘文より。現在、ルクソール博物館に展示されるが、所蔵番号は不明（Sethe 1929, 11; Morenz 2003; Ullmann 2005）。

6　この神殿の定礎式鎮壇具のうちの木製の銘板には、「テーベの主メンチュウ・ラーに愛されし上下エジプト王ネブヘペトラー ― 永遠に生きながらえよ」と記される（MMA 22.3.187）。

7　Winlock 1947, p. 84, pl. 40, 1.



ワブ神官ネフェルアベド。アメンを讃え、神々の主のために地に接吻す。収穫季第一月の彼の祭にて。「ネブヘペトラー（メンチュヘテプ 2 世）の谷」へ渡御（*ḫni*）する日。アメンのワブ神官ネフェルアベドより。

この文中でアメンは「神々の主」に位置づけられ、その渡御とはおそらく東岸のカルナク神殿から西岸のデール・エル＝バハリまでの神輿行列を指す。そして、この東西軸はテーベの長方形の都市域のうち、北辺を象徴するようになる（図 1）。これは、ギザとヘリオポリスの位置関係を模した結果と考える研究者もいる[8]。この直線上付近のエル＝タリフ、ドラー・アブー・エル＝ナガ、エル＝コカ一帯からは、王朝時代より前の土器をはじめ[9]、古王国時代から第二中間期の貴族墓や王墓などの古い遺構が残っている[10]。また、センウセレト 1 世の時代までにカルナクの地には大型の神殿が存在したが、それより前の第 11 王朝時代の構造物も確認されている[11]。テーベの都市域は、この軸が次第に南に移動するように広がっていった。その南端がルクソール神殿とメディネト・ハブを結ぶ軸だった。ルクソール神殿はハトシェプスト以前に歴史を辿る史料が希薄だが[12]、メディネト・ハブには第 11 王朝のメンチュヘテプ 3 世が手掛けた砂岩の遺構が発見されている[13]。後者は、三柱神を祀る 3 つの空間が並ぶ神殿様式の最初の事例と見做されているようだ[14]。こうして、テーベの 4 隅にはそれぞれ大きな神殿が建ち、旅人の目にはさながら巨大な境界碑のように映っただろう。

アメンの興隆

神々が三柱にまとまって各都市で信仰され始めた経緯はよく判らない。テーベのアメン、ムウト、コンスウの親子関係は、第 18 王朝以降に明確になり、それぞれの神域が整備されるようになる。そもそも、「隠れたる者」を意味するアメンがどのような神なのか判らない上、「母」という意味のムウトも、母性や愛を司るハトホル、ネイ

8 Gundlach 2010, 88–9.

9 Ginter and Kammer-Grothaus 1998.

10 Arnold 1976.

11 Gabolde, Carlotti, and Czerny 1999, pp. 33, 48. カルナク神殿の原型は古王国時代に遡ると考える研究もあるが、この神殿で発見された古王国時代の彫像の存在をどう解釈するかによって立場が変わるだろう。筆者はそれらが運び込まれて改変を受けたか、模倣されたものだと考えている。

12 第 13 王朝時代の梁部材が発見されているが、この場所にもともと在ったのか不明（PM II^2, 338; Ryholt 1997, 336, n. 1）。

13 Hölscher 1939, p. 5, fig. 2A.

14 Shaw 2000, p. 156.

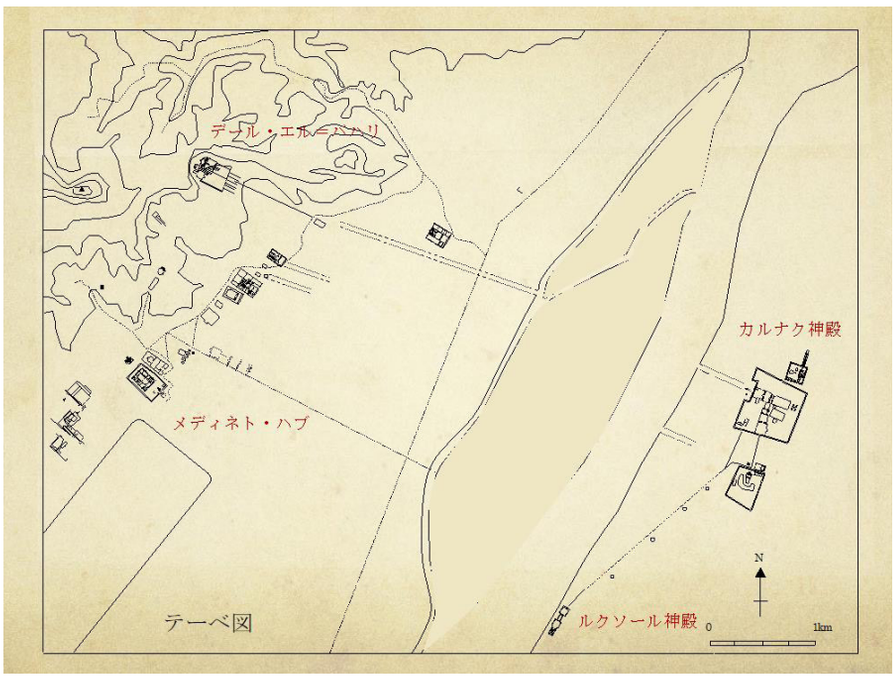


図 1 テーベ図

ト、イシスなどの古い女神の焼き直しに見える[15]。先に述べたように、アメンはラーやミンなどと習合して個性を得て、その存在感を増した。第 12 王朝の王アメンエムハトにアメンの名が取り込まれることからも明らかなように、この時代からアメンは表立って登場し、いわば全国化する。しかし、依然、王朝の中心地はテーベではなかった。

テーベの長方形を青写真として構想したのが中王国時代の王たちだったとしても[16]、それを実現したのは新王国時代初期の支配者たちだった。そこには少なからず、アメン信仰をより体系化し、王権の正当性や政治的変革に利用する意図が背景にあったように考えられる。そのような潮流は、イアフメス、ハトシェプスト、アメンヘテプ 3 世の治世下に 3 度あったと筆者は想定している。そのシナリオは次の通りである。

異民族ヒクソスを駆逐したのち、第 18 王朝は揺籃から発展に移行する。その始祖と見做されるイアフメスの時代に、アメンの「大司祭」と「第 2 司祭」は初めて登場する[17]。また、彼の母イアフヘテプと妻イアフメス・ネフェルタリは、王族として初めて「神妻」の称号を有した[18]。こうして、

15 女神ムウトは第二中間期に初めて登場するが、テーベの史料で確認されるのはアメンヘテプ 1 世以降になってからである（te Velde 1982, 246, n. 5）。

16 Gabolde 1998, 159–62; Hirsch 2004, 49.

17 大司祭ジェフウティ（葬送用コーン MMA 13.180.60–13.180.64）と大司祭ミンメンチュウ（葬送用コーン UC 37666）、第 2 司祭イアフメス・ネフェルタリ（PM II^2, 73; Harari 1959）。

18 イアフヘテプ（エドフ出土の記念碑（*Urk*. IV, 29: 13））。イアフメス・ネフェルタリ（カルナク神殿のアメン

神官の序列を設けることによってアメンの神官組織は整理され始めたが、第三中間期に大司祭が王を名乗るまでに肥大化し続けた。

人材資源の活用を行ったイアフメスとは異なって、建築事業を大胆に行なったのが女性の王ハトシェプストだった[19]。ヒクソス時代が昔のことだった時代になっても彼女はその混乱からの復興を殊更に強調し、中断されていた祭を再興すると表明する[20]。デール・エル＝バハリのメンチュウヘテプ 2 世の葬祭殿の隣に自身の記念神殿ジェセル･ジェセルウを同じ様式で建てただけでなく、カルナク神殿の聖舟祠堂（セト・イブ・アメン、通称「赤の祠堂」）と第 8 塔門、メディネト・ハブの小神殿ジェセル・セトを建造した。さらに、カルナク神殿とルクソール神殿の間に 6 つの聖舟祠堂を並べて繋いだ。この南北軸はもちろんテーベの東辺となった。若い義理の息子トトメス 3 世を退けて王位を継いだハトシェプストには、自身の正統性を強調しなければいけない理由が十分にあったのだ。彼女と娘のネフェルウラーもまたアメンの「神妻」の称号を有した[21]。もっとも重要なのは、谷の祭とオペト祭が史料に初めて登場するのが彼女の時代だという点である[22]。それぞれ、テーベの北辺と東辺を往復し、両祭は対となって言及、描写され、テーベを代表する祭礼になる。そして、古来の墓域がある西岸を目的地とした谷の祭とナイル洪水の再来に合わせて神の更新を祝ったオペト祭は、死と生を象徴し、ナイル川を挟んで位置するネクロポリスとアクロポリスの都市景観が宗教儀礼を背景にはっきりと姿を現したといえる[23]。

数世代のちのアメンヘテプ 3 世は、ハトシェプストの事業をより大きな規模で完成に導いた。西岸の辺境にマルカタ王宮とそれに付属する巨大な人工湖ビルケト・ハブを建造し、さらに巨大な記念神殿をメディネト・ハブの北東に建立した。また、東岸のルクソール神殿を現在の姿に変え、カルナクには正面玄関となる第 3 塔門を建て、ムウトとコンスウのための付属神殿も整備した。カルナクとルクソールの両神殿に彼はオペト祭の巨大なレリーフを施すよう命じている[24]。ちなみに、彼の記念神殿はナイルを挟んでルクソール神殿の対面に位置するが、その東西軸はカルナク神殿のそれと並行している。同じ並行軸を持つのは他にデール・エル＝バハリの神殿群しかない。これによって、テーベの 4 隅は幾何学的な関連を得て、ますます象徴性を帯びた。

ヘテプ 1 世の祠堂レリ ― フ（PM II^2, 134; Gitton 1975, p. 16 と表紙裏図）と由来不明の個人所有の石灰岩のステラ（Gardiner 1917, pp. 188–9））。

19 Teeter 1997, 14, n. 61; O’Connor 1998, 138; Callender 2002, 38–9.

20 スペオス・アルテミドスの銘文（*Urk*. IV, 390: 9）。

21 ハトシェプスト（アスワンのセエンムウトの落書き（Habachi 1957, pp. 92, 94, fig. 3）；イネニの墓（TT 81: PM I-1^2, 159 (2); *Urk*. IV, 60: 1）；エル＝カブのイアフメスの墓（PM V, 177 (3); *Urk*. IV, 34: 15））。ネフェルウラー（センエンムウト像（Berlin ÄM 2296: *Urk*. IV, 406: 8）；セニメンの葬送用コーン（Berlin ÄM 1537: *Urk*. IV, 418: 15）；スカラベ（MMA 27.3.325、27.3.326、27.3.328、27.3.331、27.3.333））。

22 カルナク神殿「赤の祠堂」（PM II^2, 64–71）とデール・エル＝バハリ神殿のレリーフ（PM II^2, 357– 8 (79–83)）。

23 Fukaya 2020, 12.

24 カルナク神殿第 3 塔門東面（PM II^2, 61 (183)）とルクソール神殿大列柱廊（PM II^2, 314–6 (76–89)）。

祭礼と暦

先に触れたネフェルアベドの落書きには、アメンの祭がどういうわけか、*ḥb.w=f* と複数形で言及される。これを説明するのは難しいが、のちの「*ḥb=f nfr n* ＋神名」という定型の祖型といえるだろう。この言い回しは、すでに第 12 王朝期のアビュドスにおけるオシリスとウプワウトの祭を指すときにも使われた[25]。史料で確認できる限り、アメンの聖船ウセルハトを建造した最初の王はイアフメスである[26]。アメンの神輿はその息子アメンヘテプ 1 世の時代に初めて描かれる[27]。ハトシェプストは、谷の祭とオペト祭におけるアメンの渡御の様子を神殿レリーフに残したが、そこにはまだムウトとコンスウの姿はない。三柱神が揃ったのはアメンヘテプ 3 世の時代だった[28]。その間、アメンの神託儀礼の発展も確認される。プント遠征や王位継承などの可否を神託に求めた事例はハトシェプストやトトメス 3 世の記録に残る[29]。また、王族でない人間が盗みなどの民事に関してアメンに神託を乞う記録は、第 20 王朝のラムセス 4 世の時代に初めて認められる[30]。民衆にとって、神との意思疎通はラムセス朝まで待たなければならなかったとしても、その姿を見る機会はずっと前から用意されていた。それは、ハトシェプストとトトメス 3 世以降にカルナク神殿の第 7 塔門から第 10 塔門の間に広がる露天空間が、南のルクソール神殿を向いて整備されたことと無関係でない。この空間は「銀の床」と呼ばれ、神託儀礼が行われたことが複数の史料から明らかになっている。ハトシェプストが整備した 6 つの聖舟祠堂もまた神輿行列の御旅所として機能し、神像が神輿に載って神殿の外に運び出される姿を誰でも目にすることができるようになった。それより前の祭礼のあり方は、史料の制約もあってほとんど研究されていない。

また、アメン・ラーの祭礼暦の成立も祭の公共化や世俗化と無縁でない。毎年、毎月開催される祭礼の定期性は、例えば「債務を次の祭までに返す」などと経済活動を規定しただけでなく、神輿行列の間に行われた神託の授受は事実上の司法の役割を果たすなど、社会、行政に深く関わった。また、高度に様式化した伝統儀礼を目にすることは、人々の帰属意識を刺激したに違いない。優秀な為政者ならば、そのような文化的側面も大いに利用して民心を掴むより他に良い手立てはないと考えただろう。特筆すべきは、第 18 王朝時代の末期、あるいは第 19 王朝初期に向けて年月が進むにつれて、民衆暦が理想の季節循環に再び一致するようになったことである[31]。1 年を 365.25 日ではなく、365 日と定めたエジプト民衆暦では、4 年ごとに 1 日設けるべき閏日が存在しなかったので、暦と季節循環は徐々にずれていった。これを放置すると、およそ 730 年後に真夏の祭は真冬に行われることになる。そして、1461 年後に元

25　Stela Cairo 20538 (PM V, 45). *ḥb.w=f nfr.w tpy.w ꜣḫ.t*「洪水季第 1 月の彼の祭」とある。

26　Stela Cairo 34001 (PM II^2, 179).

27　カルナク神殿の聖舟祠堂（PM II^2, 63–4）。

28　脚注 24。

29　Fukaya 2012.

30　大英博物館所蔵パピルス P. BM EA 10335（Blackman 1925; K*RI* VII, 416–8）。

31　Fukaya 2020, 8–9.

に戻る。これをソティス周期と呼ぶが、アメンヘテプ 3 世からラムセス 2 世の間に、この周期が千年以上の時を経て戻ったと推定されている（図 2）。

アメンヘテプ 3 世はおそらくこのことをよく認識していた。アメン・ラーのための祭礼暦の整備を進め、来るべきソティス周期の回帰に向けて古文書学者たちや神官たちと検討を重ねたことだろう。そして、王朝開始以来、アメン・ラー信仰を強く推す勢力とともにテーベの宗教都市景観の整備にも同時に注力した。ところが、直後のアクエンアテンの時代にアメン・ラー信仰は突然放棄され、いわゆるアマルナの一神教改革を迎える。敢えて大胆な仮説が許されるならば、アメン・ラーの宗教勢力がその権勢に任せて尊大に振る舞った結果、アメンヘテプ 3 世との間に軋轢が生じ、関係修復不能に陥った可能性がある。すでにアマルナ遷都を思い描いていたのだろう。それを間近で見つめてきた息子アクエンアテンは、テーベに神殿を建造したが、それはカルナク神殿の東に位置し、長方形からは逸脱していた上、すぐに放棄された。そして、遷都とともにアテンという神だけに没入するようになる。信仰のあり方だけでなく、彼の好んだ美術様式もまたそれまでの伝統から大きく逸脱していたが、最終的に求めたのが太陽円盤そのものであるアテンだったのは、皮肉にも思える。それは個性を持たないアメンがラーと習合して事実上の太陽神になったのと同じだ。エジプトの多神教の世界観にも何かに収斂する心のあり方はおそらくずっと前から存在し、それは天

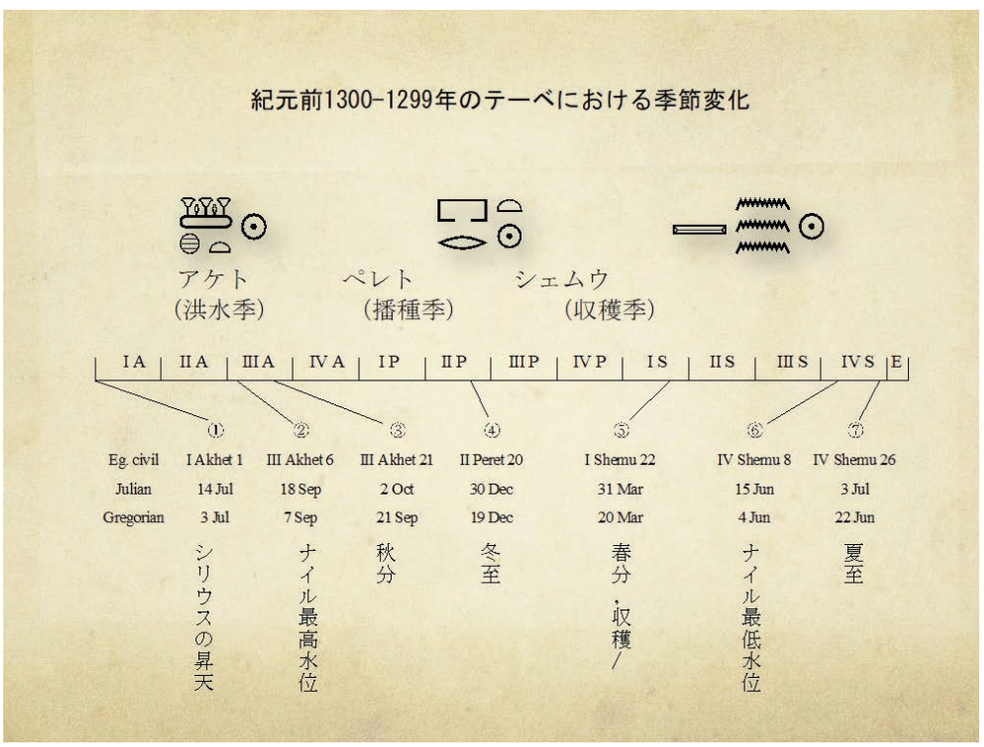


図 2 民衆暦とテーベの季節循環

空、ひいては太陽だったことは変わらなかったのだ。エジプトはトトメス 3 世時代に最大版図を実現し、その後は比較的安定した平和な時代が続いた。膨れ上がったアメン・ラー勢力に対する忌避感が刺激となって、新しい王権と宗教のあり方を模索する自由な発想を育む環境が揃っていたのだろう。アクエンアテンの登場は歴史が求めた必然だったのかもしれない。

テーベのその後

アマルナ時代はすぐに否定され、エジプトはその後、養生期間を経てラムセス朝に移行する。王家の谷の王墓建造に従事する労働者の村デール・エル＝メディーナから大量に発見された文書群によって、この時代の日常生活を垣間見ることができる。彼らがアメンとともに崇拝したのが、神格化されたアメンヘテプ 1 世だった。彼らは、この王こそがテーベの礎を築き、デール・エル＝メディーナの創始にも関わったと考えたようである。この王を祝う祭は彼らの記録に頻繁に登場し、神託儀礼も行われた[32]。しかし、西岸におけるこの祭の次第はほとんど記録に残っていない。配給や休職の記録から、彼らの生活にはおよそ 10 日の規則性があり、それを 1 週間と認識していた[33]。この時間観は祭礼にも反映され、亡くなった王たちへの供養儀礼が西岸で 10 日毎に行われたことが、第 18 王朝時代の史料に認められる[34]。ラムセス朝になると、その祭礼としての性格は顕著になり、アメンの異形の 1 つであるアメンエムオペトという神が関わるようになる。ルクソール神殿を出発して西岸に渡り、メディネト・ハブで父祖に対して献水（*wꜣḥ-mw*）したようだ[35]。このとき、テーベの西辺を除いたすべての境界は祭礼の行程と美しく重なったように見える。しかし、同時に谷の祭に関する史料は急速に減る。2 つの祭礼は性質が似ているため、併存することができなかったようだ。これ以降、西岸の中心は北辺でなく、南辺に移動したと考えてよい。ラムセス朝晩期にデール・エル＝メディーナが放棄されると、その住民はメディネト・ハブに移る。新王国時代が終わって、王がテーベに埋葬されなくなったことで、谷の祭は王祖崇拝という理念的な目的を失ったといえる。ちなみに、首府の地を受け継いだペル・ラムセスは、「南のオン（テーベ）の形を模し、その持続性はフウトカプタハ（メンフィス）のようだ」と讃えられている[36]。

一方のオペト祭は第 26 王朝（サイス朝）まで続いたと考えられる[37]。この時、一時的に谷の祭

32 Černý 1927.

33 Helck 1964.

34 Statue Cairo 576: *Urk*. IV, 411: 10.

35 Doresse 1971; *idem* 1973; *idem* 1979; Fukaya 2020, pp. 45–7, 215, table 14. *wꜣḥ-mw* の事例は次の通り：O. Cairo 25779 (K*RI* IV, 213: 10, 216: 9); O. BM 5634 (K*RI* III, 516: 5–6, 519: 3–4, 520: 15, 523: 1–2); O. Cairo 25786 (K*RI* IV, 235: 9–10), O. BM 50744 (K*RI* VII, 336: 13–4), O. Turin 57034 (Krauss 1985, 149), P. Geneva MAH 15274 ＋ P. Turin 54063 (K*RI* VI, 144: 3), O. Cairo 25290 (K*RI* VI, 143: 9), O. Cairo 25784 (K*RI* IV, 227: 11), O. Cairo 25265 (Donker van Heel 1992, 20).

36 P. Anastasi II (I, 2–3): Gardiner 1937, p. 12.

37 第 25 王朝のピアンキは、エジプト遠征への途上、オペト祭参加のためにテーベに立ち寄った（Stela Cairo JE 48862, 47086–9: Jansen-Winkeln 2008, pp. 337–50）。プサメティコス 1 世の娘であるニトクリスの神妻叙任は、

も復古的な潮流に乗った可能性があるが[38]、オペト祭とともに再び記録から姿を消す。サイス朝のあと、両祭は典礼上の言及が確認されるだけで、実行されたことが確証できない。また、アメンの神妻も同時に姿を消してしまった。アケメネス朝ペルシャの支配を受けたあとアメンの神官団がどのような運命を辿ったのか明らかでないが、一部の祭礼は変容しながら継続したと考えられる。第30 王朝のネクタネボ 1 世はカルナク神殿の長大な周壁だけでなく、ルクソール神殿までのスフィンクス街路を整備するなど、テーベの都市景観は持続し変容を重ねた。エドフ神殿のプトレマイオス朝の記録には、テーベの代表的祭礼として、オペト祭、コイアク祭、収穫季第 1 月の祭、収穫季第 2 月の祭の 4 つが挙げられている[39]。特にオペト祭は、コプト・キリスト教時代にパオペ（オペト）の月の祭として言及され、巡礼者を集めたようである[40]。そして、イスラームの時代になるとルクソールの守護聖人アブー・エル＝ハッガーグの墓廟がルクソール神殿内に建造され、その生誕祭が年に 1 度行われるようになり、現在まで続いている。すべてが古代から繋がっているのかは推測の域を出ないが、都市景観の持続性という点で、考察に値する貴重な事例といえるだろう。

引用文献

Blackman, A. M. 1925: “Oracles in ancient Egypt I”, *Journal of Egyptian Archaeology* 11, 249–55.

Callender, V. G. 2002: “The innovations of Hatshepsut’s reign”, *Bulletin of the Australian Centre for Egyptology* 13, 29–46.

Caminos, R. A. 1964: “The Nitocris adoption stela”, *Journal of Egyptian Archaeology* 50, 71–100.

Černý, J. 1927: «Le culte d’Amenophis Ier chez les ouvriers de la nécropole thébaine», *Bulletin de l’Institut Français d’Archéologie Orientale* 27, 159–203.

Donker van Heel, K. 1992: “Use and meaning of the Egyptian term *wAH-mw*”, in R. J. Demarée and A. Egberts (eds), *Village voices: Proceedings of the symposium “Texts from Deir el-Medîna and their interpretation”, Leiden, May 31–June 1, 1991*, CNWS publications 13, Leiden, 19–30.

Doresse, M. 1971: «Le dieu voilé dans sa châsse et la fête su début de la décade (I)», *Revue d’Égyptologie* 23, 113–36.

Doresse, M. 1973: «Le dieu voilé dans sa châsse et la fête su début de la décade (II)», *Revue d’Égyptologie* 25, 92–135.

Doresse, M. 1979: «Le dieu voilé dans sa châsse et la fête su début de la décade (III)», *Revue d’Égyptologie* 31, 36–65.

Fukaya, M. 2012: “Re-examination of the Egyptian oracle “, *Bulletin of the Department of Philosophy, University of Tsukuba* 30, 75–88.

Fukaya, M. 2020: *The festivals of Opet, the Valley, and the New Year: Their socio-religious functions*, Archaeopress Egyptology 28, Oxford.

Gabolde, L. 1998: *Le ‘grand château d’Amon’ de Sésostris 1er à Karnak: La décoration du temple d’Amon-Rê au Moyen Empire*, Mémoires de l’Académie des Inscriptions et Belles-Lettres 17, Paris.

おそらくオペト祭に合わせて行われた（Stela Cairo JE 36327: Caminos 1964）。また、彼女の首席執事イビの立像にはオペト祭と収穫季第 1 月の祭への言及がある（Statue Cairo JE 36158: Graefe 1994, p. 91）。

38 北辺上のアサシフに建造されたイビ（神妻ニトクリスの首席執事）の墓（TT 36）には、谷の祭への言及がある（PM I-1^2, 67 (23)）。

39 *Edfou* I, 338: 5–9, XV, pl. 9, b.

40 Wolf 1931, pp. 74–5.

Gardiner, A. H. 1917: “A stele in the MacGregor collection”, *Journal of Egyptian Archaeology* 4, 188–9.

Gardiner, A. H. 1937: *Late-Egyptian miscellanies*, BAe 7, Bruxelles.

Ginter, B. and Kammerer-Grothaus, H. 1998: *Frühe Keramik und Kleinfunde aus El-Târif*, AVDAIK 40, Mainz.

Gitton, M. 1975: *L’épouse du dieu, Ahmes Néfertary: Documents sur sa vie et son culte posthume*, Paris.

Graefe, E. 1994: „Der autobiographische Text des Ibi, Obervermögensverwalter der Gottesgemahlin Nitokris, auf Kairo JE 36158“, *Mitteilungen der Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 50, 85–99.

Gundlach, R. 2010: „Die Chapelle Blanche und das Tempelbauprogramm Sesostris‘ I. in Theben“, in M. Dolińska and H. Beinlich (eds), *8. ägyptologische Tempeltagung: Interconnections between temples, Warschau, 22.–25. September 2008*, KSG 3 (3), Wiesbaden, 81–109.

Habachi, L. 1957: “Two graffiti at Sehēl from the reign of queen Hatshepsut”, *Journal of Near Eastern Studies* 16, 88–104.

Harari, I. 1959: «Nature de la stèle de donation de fonction du roi Ahmôsis à la reine Ahmès-Nefertari», *Annales du Service des Antiquités de l’Égypte* 56, 139–201.

Helck, W. 1964: “Feiertage und Arbeitstage in der Ramessidenzeit”, *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 7, 136–66.

Hirsch, E. 2004: *Kultpolitik und Tempelbauprogramme der 12. Dynastie: Untersuchungen zu den Göttertempeln im alten Ägypten*, Achet: Schriften zur Ägyptologie A 3, Berlin.

Hölscher, U. 1939: *The excavation of Medinet Habu II: The temples of the Eighteenth Dynasty*, OIP 41, Chicago.

Jansen-Winkeln, K. 2008: *Inschriften der Spätzeit, Teil II: Die 22.–24. Dynastie*, Wiesbaden.

Krauss, R. 1985: *Sothis- und Monddaten: Studien zur astronomischen und technischen Chronologie Altägyptens*, HÄB 20, Hildesheim.

Lacau, P. and Chevrier, H. 1956: *Une chapelle de Sésostris Ier à Karnak*, Cairo.

Morenz, S. 1964: *Gott und Mensch im alten Ägypten*, 2nd. ed., Leipzig.

Nims, C. F. 1955: “Places about Thebes”, *Journal of Near Eastern Studies* 14, 110–23.

O’Connor, D. B. 1998: “The city and the world: Worldview and built forms in the reign of Amenhotep III”, in D. B. O’Connor and E. H. Cline (eds), *Amenhotep III: Perspectives on his reign*, Ann Arbor, 125–72.

Ryholt, K. S. B. 1997: *The political situation in Egypt during the Second Intermediate Period, c. 1800–1550 B.C.*, CNIANES 20, København.

Sethe, K. 1929: *Amun und die acht Urgötter von Hermopolis: Eine Untersuchung über Ursprung und Wesen des ägyptischen Götterkönigs*, APAW 4, Berlin.

Shaw, I. 2000: *The Oxford history of ancient Egypt*, Oxford.

Teeter, E. 1997: *The presentation of Maat: Ritual and legitimacy in ancient Egypt*, SAOC 57, Chicago.

Ullmann, M. 2005: „Zur Lesung der Inschrift auf der Säule Antefs II. aus Karnak“, *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 132, 166–72.

Vandorpe, K. 1995: “City of many a gate, harbour for many a rebel”, in S. P. Vleeming (ed.), *Hundred-gated Thebes: Acts of a colloquium on Thebes and the Theban area in the Graeco-Roman Period*, PLB 27, Leiden and New York, 204–39.

te Velde, H. 1982: „Mut“, in E. Otto and W. Helck (eds.), *Lexikon der Ägyptologie*, vol. 4, Wiesbaden, 246–8.

Winlock, H. E. 1947: *The rise and fall of the Middle Kingdom in Thebes*, New York.

Wolf, W. 1931: *Das schöne Fest von Opet: Die Festzugsdarstellung im grossen Säulengange des Tempels von Luksor*, VESE 5, Leipzig.

The New Kingdom Royal City:

Deir El-Ballas and Malqata

Peter Lacovara
The Ancient Egyptian Heritage and Archaeology Fund

Town or urban planning has been defined as "a human response to the environment by the direct adaptation of physical space."[1] Archaeologically, the conceptual basis and the practical operations of planning can be recognized in the regularity of architectural remains in patterns that are repeated within a site or seen replicated at other sites. While Hippodamus[2] is fabled to have invented town planning, it clearly had pre-Hellenic antecedents that are evidenced throughout the ancient eastern Mediterranean.[3]

The few early studies that addressed the subject of pharaonic Egyptian urbanism characterized town planning in ancient Egypt as rudimentary, at best. Some scholars had even argued that dynastic Egypt had no cities at all.[4] Others admitted the existence of towns but did not ascribe much sophistication to Egyptian urban design.[5] More recently, re-evaluation of the data and new excavations have given us greater insight into various aspects of ancient Egyptian urbanism.[6] Particularly important to an understanding of

1 J. B. McLoughlin, *Urban and Regional Planning: A Systems Approach* (London: Charles Hammond Ltd., 1978): 28-29.

2 F. P. Miller, et. al., *Hippodamus of Miletus* (Groningen,VDM Publishing, 2010).

3 F. Castagnoli, *Orthogonal Town Planning in Antiquity* (Cambridge, Massachusetts: M.I.T. Press, 1971): 10-17, 56-62, 66-81.

4 J. A.Wilson, "Egypt through the New Kingdom: Civilization without Cities," in *City Invincible*, in C. H. Kraeling and R. McC. Adams, eds. (Chicago: University of Chicago Press, 1958), 124-36; and *idem*, "Three Comments on Orthogenetic and Heterogenetic Urban Environments: Cities in Ancient Egypt," in *Economic Development and Cultural Change* 3 (1954-5): 74.

5 P. Lampl, *Cities and Planning in the Ancient Near East* (New York: George Braziller, 1968): 31-32.

6 Cf. K. W. Butzer, "Archaeology and Geology in Ancient Egypt," *Science* 132 (1960): 1617-24; *Early Hydraulic Civilization in Egypt* (Chicago: University of Chicago Press, 1976); M. Bietak, "Vorläufiger Bericht über die erste und zweite Kampagne der österreichischen Ausgrabungen auf Tell ed-Dabᵒa im Ostdelta Ägyptens," *MDAIK* 23 (1968): 79-114; B. J. Kemp, "Temple and Town in Ancient Egypt," in *Man, Settlement and Urbanism*, ed. P. J. Ucko, R. Tringham, and G. W. Dimbleby (London: Duckworth, 1972), 657-80; *idem*, "The Early Development of Towns in Egypt," *Antiquity* 51 (1977): 185-200; P. Lacovara and D. Valbelle, "Avant-propos deuxième table ronde du Groupe International pour l'Étude des Agglomérations dans la Vallée du Nil," *CRIPEL* 11 (1989): 13; and the articles in M. Bietak, ed., *House and Palace*

early town planning is an analysis of its physical setting,[7]

Bruce Trigger has subdivided settlement archaeology into three basic components: the "micro-spatial" level, the "meso-spatial" level and the "macro-spatial" level.[8] The most focused of these is the "micro-spatial" level, which encompasses analyses of individual structures and the sub-systems operating within them. It includes single houses, rooms, features, artifact clusters, activity areas and discreet deposits including graves. Among the possible areas of investigation at this level are studies on architectural patterning and room use,[9] assemblage variability,[10] craft specialization[11] and refuse disposal.[12] The "meso-spatial" level concerns itself with an entire community and covers topics such as residential patterning,[13] community organization,[14] intramural exchange,[15] patterns of growth, and symbolism in urban planning.[16] Lastly, there is the "macro-spatial" scale of regional settlement pattern analysis which includes investigation into resource utilization, ecological determinants,[17] and changing land use patterns.[18]

Most studies on urbanism in the Nile Valley have focused on the "macro-spatial" scale of regional settlement pattern analysis.[19] Applications on the "meso-spatial" and "micro-spatial" levels

in Ancient Egypt, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Denkschriften der Gesamtakademie, vol. 14. (Vienna: Österreichische Akademie der Wissenschaften, 1996).

7 D. L. Clarke, *Spatial Archaeology* (New York: Cambridge University Press, 1977): 9.

8 B. G. Trigger "Settlement Archaeology-Its Goals and Promise," *American Antiquity* 32/2 (1967): 149-159, esp. p. 151.

9 M. E. Whalen, "Reconstructing Early Formative Village Organization in Oaxaca, Mexico," *American Antiquity* 48 (1983): 17-43.

10 L. Binford, "The Archaeology of Place," *Journal of Anthropological Archaeology* 1 (1982): 5-31.

11 J. Hill, *Broken K Pueblo: Prehistoric Social Organization in the American Southwest,* Anthropological Papers of the University of Arizona, vol. 18 (Tucson: University of Arizona Press, 1970).

12 W. L. Rathje, "The Garbage Project: A New Way of Looking at the Problems of Archaeology," *Archaeology* 27 (1974): 236-41.

13 K. V. Flannery, *The Early Mesoamerican Village* (New York: Academic Press, 1976): 31-33, 72-75.

14 G. Bawden, "Community Organization as Reflected by the Household: A Study of Pre-Columbian Social Dynamics," *Journal of Field Archaeology* 9 (1982): 168-74.

15 R. E. Fry, "The Economics of Pottery at Tikal, Guatemala," *American Antiquity* 44 (1979): 494-512.

16 P. Wheatley, *The Pivot of the Four Quarters: A Preliminary Enquiry into the Origins and Character of the Ancient Chinese City* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 1971).

17 J. M. Wagstaff, ed., *Landscape and Culture: Geographical and Archaeological Perspectives* (New York: Charles Scribner's Sons, 1987).

18 R. McC. Adams, *Heartland of Cities: Surveys of Ancient Settlement and Land Use on the Central Floodplain of the Euphrates* (Chicago: University of Chicago Press, 1981).

19 K. W. Butzer, *Early Hydraulic Civilization in Egypt* (Chicago: University of Chicago Press, 1976); D. O'Connor, "The Geography of Settlement in Ancient Egypt," in *Man, Settlement, and Urbanism*, 681-89; M. Bietak, *Tell el-Dabᵒa II*:

are less common,[20] which in part is due to the limited amount of published data. The New Kingdom gives us a fair number of excavated habitation sites from which to infer some concepts of urban planning, although these are still few and may be far from representative. Principally these sites are the so-called "royal cities" of the New Kingdom,[21] and since these settlements tended to be occupied for a brief period of time and present the clearest picture of an urban layout. David O'Connor has defined the Royal City as one that "combined a major and permanent royal residence with the offices and residences of a substantial part of the national government."[22] As the seat of the ruling king, these royal cities had both symbolic and functional aspects incorporated into their design. Some of these features, however, may have been characteristics of Egyptian urbanism that went well beyond these royal cities. Another reason for concentrating on this class of New Kingdom settlements is that most studies of Egyptian urbanism have focused principally on Tell el-Amarna, which has become the paradigm for ancient Egyptian settlements.

Critical to our understanding of Egyptian urbanism is the question of just how representative Tell el-Amarna is of settlements in pharaonic Egypt. Fairman[23] and Badawy[24] have argued that the situation of Tell el-Amarna is unique, and "it is not a place from which generalizations about Egyptian urbanism in the New Kingdom can be safely made … and is interesting only as a contrast to the 'normal' shape of towns which, remarkably enough, remains as much a matter of imagination as of recovered evidence."[25]

On the other hand, Kemp has suggested that Amarna "exemplifies the changed form of urbanism in the New Kingdom,"[26] which he

Der Fundort im Rahmen. Einer archäologisch-geographischen Untersuchungen über *das* ägyptische *Ostdelta* (Vienna: Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1975); B. Kaufmann, "The Maximal Covering Location Problem as a Simulation of Decision Making in Ramessid Egypt" (M.A. thesis, University of Chicago, 1981); D. Patch, "Predynastic Settlement Patterns in the Abydos-Thinis Region" (Ph.D. thesis, University of Pennsylvania, Philadelphia, 1991).

20 See G. W. Murray, "An Archaic Hut in the Wadi Umm Sidrah," *JEA* 25 (1939): 38-39; S. Lloyd, "Model of a Tell el-ªAmarnah House," *JEA* 19 (1933): 1-7; B. J. Kemp, "The Window of Appearance at El-Amarna and the Basic Structure of this City," *JEA* 62 (1976): 81-99; R. Fletcher, *Space in Settlement* (Ph.D. diss., Cambridge, 1976); B. G. Trigger, *History and Settlement in Lower Nubia* (New Haven: Yale University Press, 1965).

21 P. Lacovara, *The New Kingdom Royal City.* (London: Kegan Paul, 1997).

22 D. O'Connor, "Cities and Towns," in *Egypt's Golden Age: The Art of Living in the New Kingdom,* ed. E. Brovarski, S. K. Doll and R. E. Freed (Boston: Museum of Fine Arts, 1982): 18.

23 H. W. Fairman, "Town Planning in Pharaonic Egypt," *Town Planning Review* 20 (1949): 32-51.

24 A. Badawy, *A History of Egyptian Architecture*, vol. 3: *The Empire (New Kingdom)* (Berkeley: University of California Press, 1968): 77-78.

25 B. J. Kemp, "The City of El-Amarna as a Source for the Study of Urban Society in Ancient Egypt," *World Archaeology* 9 (1977): 123-139, esp. p. 124.

26 *Ibid.*, 126.

believes to be a change not only from old loci of population,[27] but from a perceived Middle Kingdom tradition of rigid orthogonality[28] to a more open plan as exemplified by Tell el-Amarna.

If we look at some of the other New Kingdom royal cities we can see that much of the design of Tell el-Amarna is already prefigured in them. We can see that the palace-city of Amenhotep III at Malqata exhibits a number of the same features as the capital of Akhenaton, even though most of it remains unexcavated.[29] Even earlier, the campaign palace of Deir el-Ballas suggests a pattern for these New Kingdom Royal Cities had already been conceived before the end of the Second Intermediate Period.[30]

Deir el Ballas

The ancient settlement of Deir el-Ballas is located on the west bank of the Nile in northern Upper Egypt, by the modern village of Deir el-Gharbi, also known as Ed-Deir.[31] The area had been noted by early travelers as a pottery production center for a type of marl ware water jar known as a *ballas*.[32] The first archaeological record of ancient remains in the area was made by Daressy at the end of the last century, when he found a lintel inscribed for Sekenenre Ta'o re-used in the modern village.[33] During excavations at Naqada and Ballas, a brief investigation of the site was also undertaken for the Egypt Exploration Fund by Petrie and Quibell.[34]

At Quibell's suggestion, George Andrew Reisner, who had been appointed head of an expedition from the University of California, Berkeley, began working in the area of northern Upper Egypt. After some preliminary work at Quft, the ancient site of Coptos, Reisner moved his team across the river and set up camp at Deir el-Ballas in January 1900. The site was the first extended excavation of the Phoebe A. Hearst Expedition of the University of California, and George A. Reisner, as director, was assisted by

27 Kemp, "Early Development of Towns,": 192, 196.

28 *Idem*, *Ancient Egypt: Anatomy of a Civilization* (London and New York: Routledge, 1989): 178-180.

29 Cf. D. O'Connor, "The University Museum Excavations at the Palace-City of Malkata," *Expedition* 21 (1979): 52-53.

30 P. Lacovara, "Deir el-Ballas" in M. Bietak and S. Prell eds., *Ancient Egyptian and Ancient Near Eastern Palaces Vol. I: Proceedings of the Conference on Palaces in Ancient Egypt held in London 12th-14th 2013* (Vienna: Austrian Archaeological Institute, 2018): 283-292.

31 It should be noted that the site has frequently been confused with the town of *Ballas* which is approximately five kilometers to the south.

32 P. Lacovara, "The Ethnoarchaeology of Pottery Production in an Upper Egyptian Village," in *Ceramics and Civilization I*: *Ancient Technology to Modern Science,* ed. W. D. Kingery (Columbus, Ohio: The American Ceramic Society, 1984): 51-60.

33 G. Daressy, "Notes et remarques," *RT* 16 (1894): 44.

34 W. M. F. Petrie, *Naqada and Ballas* (London: The Egypt Exploration Fund, 1896), 1. I would also like to thank Barbara Adams for the opportunity of examining Petrie's notebooks at University College, London. Unfortunately, they record nothing about the work at Deir el-Ballas.

Albert M. Lythgoe and F. W. Green. During the campaign, the Hearst Expedition uncovered a large royal palace, a settlement and a series of cemeteries dating to the late Second Intermediate Period and early Eighteenth Dynasty. Except for a brief mention in William Stevenson Smith's *Art and Architecture of Ancient Egypt*[35] and a catalog of some of the inscribed material discovered, now in the Phoebe A. Hearst Museum of Anthropology at Berkeley,[36] the excavations at Deir el-Ballas remained unpublished.

In order to clarify and interpret the record of the Hearst Expedition and to enable the synthesis and eventual publication of the original excavations, it was necessary to return to the site to conduct the basic fieldwork essential to an informed understanding of the existing records.[37] Recently we have returned to the site to continue to refine and to publish the results of the Hearst Expedition and to restore recent damage to the monuments and develop a site management plan for its protection.[38]

The ancient settlement at Deir el-Ballas is situated in a natural amphitheater formed in the limestone cliffs bordering the high desert to the west. The two ends of this bay circumscribe the area of settlement which ran along the desert edge of the cultivation for a distance of approximately two kilometers. The terrain is a low gravel plain dissected by wadi beds. For our purposes, the site has been divided into six main areas as defined by topographic features. Running from north to south they are: the North End, the North Hill, the North Wadi, the Central Wadi, the South Hill and the South Wadi (Fig. 1). Occupation stretches back only a few hundred meters from the edge of the cultivation. There are indications however, that it originally extended under the present edge of the modern settlement and surrounding agricultural lands.[39]

Situated at the approximate center of the bay are the remains of the largest and most prominent structure at the site. The importance of this building was immediately recognized and it was termed the North Palace. It is a large mud brick structure surrounded by a large enclosure wall which measured approximately 150 meters wide

35 W. S. Smith, *The Art and Architecture of Ancient Egypt*, rev. with additions by W. K. Simpson (Harmondsworth: Penguin Books, 1981): 278-81.

36 H. F. Lutz, *Egyptian Tomb Steles and Offering Stones of the Museum of Anthropology and Ethnology of the University of California*. (Leipzig: J. Hinrichs, 1927), pls. 32 no. 62; 33, 35 nos. 68 and 69; nos. 64 and 65; 40 no. 79; 41 no. 80. See also the commentary in H. G. Fischer, *Inscriptions from the Coptite Nome, Dynasties VI-XI* (Rome: Analecta Orientalia, 1964), 4, 43-49, 103. It should be noted that these inscriptions were on blocks transported from elsewhere, probably Dendera, and their texts record nothing having to do with the site of Deir el-Ballas itself.

37 P. Lacovara, *Deir el-Ballas: Preliminary Report on the Deir el-Ballas Expedition, 1980-1986*, American Research Center in Egypt Reports, vol. 12 (Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns, 1990).

38 P. Lacovara, "Rescue Archaeology at Deir el-Ballas,*"Scribe* (forthcoming).

39 During the 1983 season, soundings on the periphery of the modern town made by the Egyptian Antiquities Organization revealed traces of mudbrick and Second Intermediate Period/early New Kingdom ceramic material.

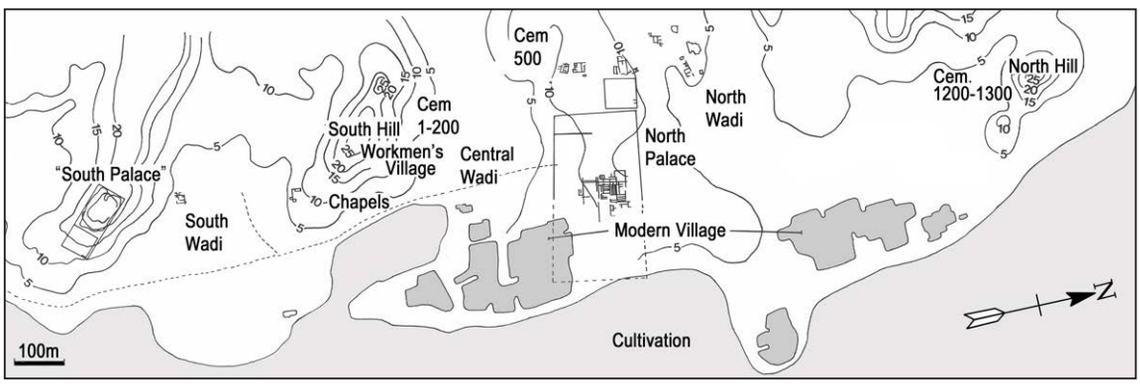


Fig.1 Map of Deir el-Ballas (Drawing by Andrew Boyce)



Fig. 2 The North Palace at Deir el-Ballas (After W.S. Smith, *The Art and Architecture of Ancient Egypt*. Fig. 52)

by over 300 meters long. The eastern end of the enclosure which ran under the modern cultivation and has never been traced. A smaller walled court, roughly sixty meters square, is appended to the northwest corner of the main enclosure (Fig. 2). The main enclosures cover an area of 45,000+ square meters. The North Palace itself was built of large, unbaked mud bricks which averaged 54 x 27 x 18 centimeters each. These bricks were made of a dense gray alluvial clay with a small amount of straw added. Bricks of a similarly large size have been noted elsewhere in monumental structures dating to the Second Intermediate Period and Early Eighteenth Dynasty.[40]

40 Helen Jacquet, personal communication, and A. J. Spencer, *Brick Architecture in Ancient Egypt* (Warminster: Aris and

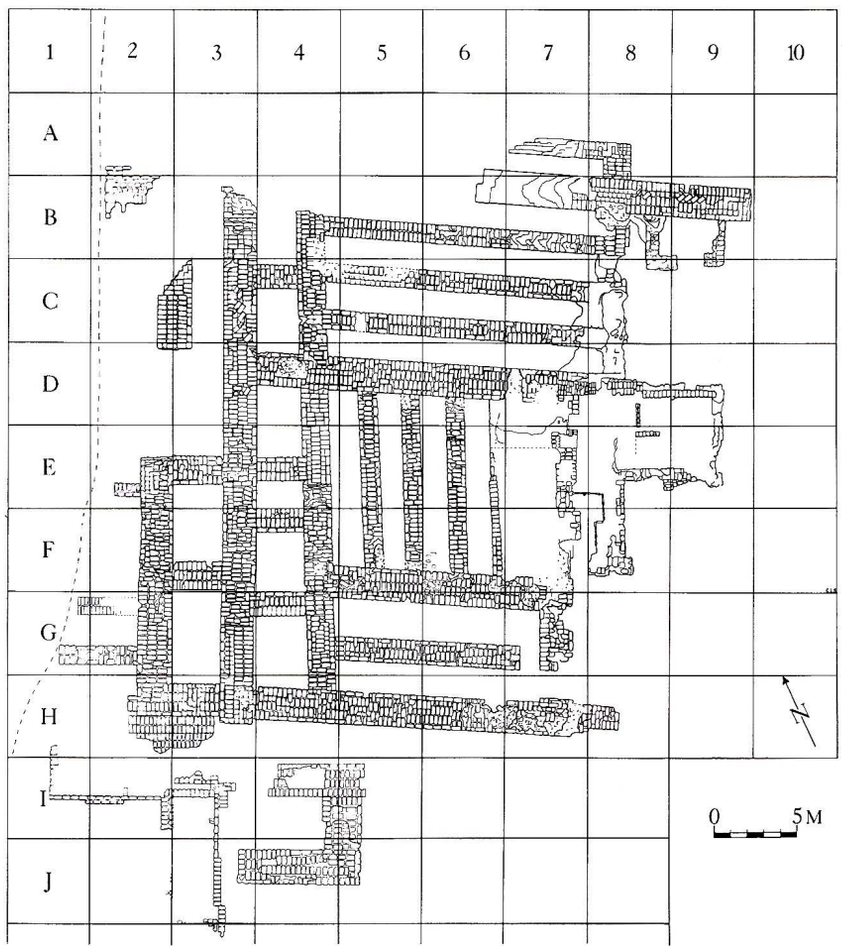


Fig. 3 North Palace casemate foundations (Drawing by Charles Evers)

The North Palace was positioned at the approximate center of the enclosure and was laid out as a series of courts with a long entrance corridor (Fig. 3). The whole complex was grouped around an elevated platform constructed on casemate foundations which consisted of long mud brick chambers filled in with rubble and capped by a mud brick pavement.[41] Some of these casemates are preserved to a height of approximately five meters, and since traces of pavement were found above them, this must have been their original height. Presumably, this core of casemates

Phillips, 1979): 147-48.

41 On casemates in Egyptian architecture, see P. Lacovara, review of *Brick Architecture in Ancient Egypt*, by A. J. Spencer, in *JNES* 42/2 (1983): 158-60.

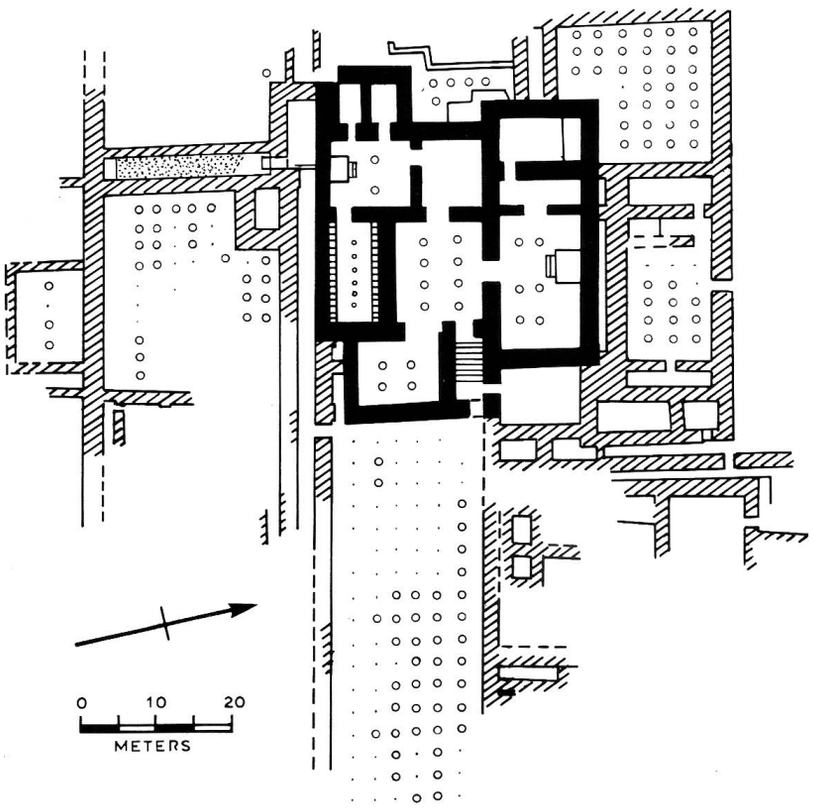


Fig. 4 Theoretical reconstruction of the upper floor of the North Palace
(Drawing by Lisa Heidorn)

supported the raised private apartments of the palace.[42]The original excavators, unfamiliar with this type of architecture, removed the upper stories of the structure which had been reoccupied in the Roman/Coptic Period. No record exists of what this area of the building looked like, though we might hazard a guess based on the patterns of the foundations themselves.[43] If we take the thicker casemate walls as load bearing walls mirroring the architecture above, they suggest a large central room fronted by a rectangular vestibule with a number of smaller chambers surrounding the other three sides (Fig. 4). This pattern is found in other royal palaces such as the Palace of Merenptah at Memphis[44] and the palace of Amenhotep III at Malqata.[45] As with these other

42 This could have given it the appearance of a “migdol” tower. For evidence regarding the appearance of the palace as such, see Kemp, “Window of Appearance at El-Amarna,”: 81-99, esp. p. 97.

43 For a similar attempt to reconstruct the upper levels of Minoan palaces, see J. W. Graham, “Further Notes on Minoan Palace Architecture,” *AJA* 83/1 (1979): 49-69.

44 Fischer, *Inscriptions*, fig. 79.

45 Smith, *Art and Architecture*: 286-92.

royal residences, the North Palace was decorated with wall paintings. In this case, however, the decoration consisted of armed men carrying battle axes.[46] The Hearst Expedition also discovered fragments of gold leaf and faience tiles, which appear to have embellished the structure. Fronting the casemate core of the palace was a long, columned hall 20 meters wide and over 60 meters long. Access to this central hall was presumably afforded by a long entrance corridor which ran parallel to the hall and was connected at its western end to a perpendicular corridor opening to the south. To the east of the entrance corridor were a square columned hall and the remains of a long extension running parallel to the central hall. To the north of the central hall were two other columned courts, and perhaps another corridor plus a series of casemates. Unfortunately, many of these features were altered by Romano-Coptic additions, and it is difficult to recreate a plan of the original architecture.

The site of Deir el-Ballas seems to have been occupied for only a very brief period of time. As mentioned above, a lintel of Sekhenenre Tao II was discovered which had probably came from the North Palace.[47] The ceramic material, likewise, seems to be of exclusively late Second Intermediate Period types.[48] Jar sealings of Ahmose and votive models of ships and weapons were found in a level of post-abandonment debris..[49] The "Storm Stela" of Ahmose mentions a city known as Sdf(3) T3wy, that has been suggested to be the residence at Deir el-Ballas.[50] Graves which cut through the Workmen's Village date to the early Eighteenth Dynasty, suggesting that this part of the site was also vacated at this date with perhaps some squatter occupation continuing on into the early Ramesside Period.[51]

There is much at Deir el-Ballas that prefigures the features found at Malqata, Gurob, and Tell el-Amarna. All are short-lived communities, built on virgin ground at the desert edge of the cultivation, and all have the royal palace as the central element. Both at Amarna and Deir el-Ballas the builders have taken advantage of the local topography to enhance the symbolism of the setting and have positioned the palace at the midpoint of a large semicircle formed by the limestone cliffs bordering the low desert.

46 The location of this scene in the entrance corridor may have reflected the purpose of this feature to guard the entry into the palace; this is the only surviving figural decoration found in the palace. See *ibid*: 281.

47 The Hearst Expedition notes record that the palace was being used as a quarry for building materials by residents of the village.

48 J. Bourriau, "The Pottery," in Lacovara, *Preliminary Report*:15-22.

49 Hearst Expedition field notes.

50 C. Vandersleyen, "Une tempête sous le règne d'Amosis," *RdE* 19 (1967): 123-59.

51 V. Jensen, *The Cemeteries of Deir el-Ballas: Non-elite burials of the 17th -19th Dynasties and their relationship to the royal palace,* (Ph.D. Dissertation, University of California, Berkeley, 2020).

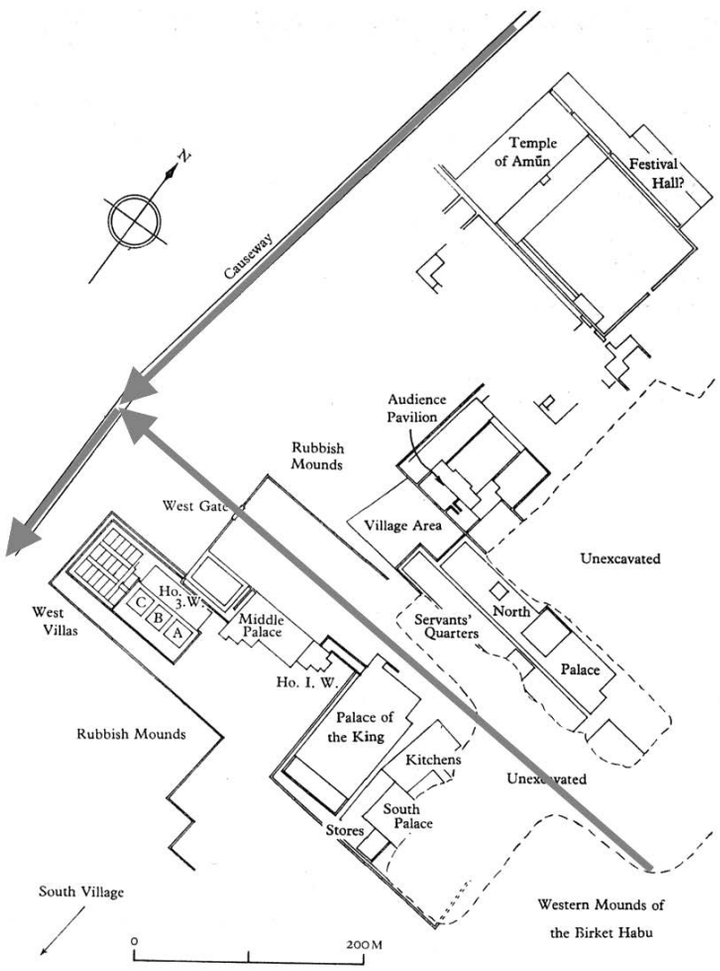


Fig. 5 Plan of the Palace-City of Amenhotep III at Malqata
(After W.S. Smith, *The Art and Architecture of Ancient Egypt*. Fig. 54)

Malqata

Another well documented New Kingdom Royal City is the Palace-City of Amenhotep III in Western Thebes (Fig. 5). Located on the sandy edge of the cultivation at the southern end of the great necropolis the site today is marked only by low mud brick ruins and the bare hillocks that border the ancient harbor known as the Birket Habu. The first archaeological investigation of the site was conducted by the Egyptian Antiquities Service in 1888 and directed by Georges Daressey,[52] he found fragments of the mural paintings that decorated

52 G. Daressey, “Le Palais d’Aménophis III et le Birket Habou” *Annales du Service des Antiquités de l’Egypte*..4 (1903): 165-70.

the palace and removed them to Cairo to display in the Museum. In 1901-2 Robb De Peyster Tytus, a wealthy American, along with British Egyptologist, Percy Newberry, undertook a season of excavation at the site. They uncovered much of the northern end of the palace and re-excavated the Daressy court as well as exposing the central hall and the eastern set of "*harim*" suites. The work of the Tytus Expedition was remarkably thorough and careful for its day and a privately published a report of the excavations with many fine and detailed renderings of the mural fragments that had been discovered was promptly issued[53]

The Metropolitan Museum Expedition excavated the site off and on for five seasons beginning in 1910 and ending in 1921.[54] Herbert E. Winlock and his associates exposed the remainder of the palace and the half of the palace enclosure not destroyed by cultivation. They also excavated and mapped much of the surrounding area including the North Palace, several groups of private houses, a glass factory, a great "festival hall" and a mud brick temple dedicated to Amon. They also recovered a large number of inscribed potsherds, principally from wine jars imported for the King's jubilee or *sed*-festival.[55]With growing interest in settlement archaeology in Egypt, The University of Pennsylvania conducted a re-examination of the site under the direction of David O'Connor and Barry J. Kemp. They conducted five seasons of work at the site between 1971 and 1977. They were able to determine that the town associated with the palace was far larger than originally thought and that the Birket Habu, was created as part of the overall design of the complex. They concluded that the great mounds of dirt that had been dug from the lake bed were laid out and landscaped to create a beautiful waterfront and harbor for the palace-city.[56] More recently, a team from Waseda University conducted research in the Malqata area including the ruins of the palace of Amenhotep III. [57] Beginning in 2008 a team from the Metropolitan Museum along with the writer has undertaken some further exploration of the site

53 R. deP. Tytus, *A Preliminary Report on the Re-excavation of the Palace of Amenhotep III* (New York, 1903). (also see reprint by Van Siclen Books, San Antonio, TX 1994).

54 *The Bulletin of the Metropolitan Museum of Art* (1912): 184-89; (1915): 253-256; (1918 - March Supplement): 8-14; (1920 - Part II: December):12.

55 William C. Hayes, "Inscriptions from the Palace of Amenhotep III" *Journal of Near Eastern Studies*_ (10) no. 1 (1951): 35-37; 82-104; no. 3:. 156-183; and no. 4:. 231-242.

56 David O'Connor, "The University Museum Excavations at the Palace-City of Malkata" *Expedition* (Winter 1979): 52-53.

57 Shin-ichi Nishimoto, "Restoration of the Hieroglyphic Inscriptions on the Ceiling of Room H at Malkata Palace" *Bulletin of Science and Engineering Research Laboratory Waseda University* 129 (1990):.58-79; "Reconstruction of the Figure of Nekhbet on the Ceiling of the Great Columned Hall at the Malkata Palace: Studies on the Malkata Palace I" *Journal of Architecture, Planning and Environmental Engineering,* 416 (1990): 111-121; Reconstruction of the "Scroll Pattern" on the Ceiling of the Great Columned Hall at the Malkata Palace: Studies on the Malkata Palace II" *Journal of Architecture, Planning and Environmental Engineering*, 425 (1991):.101-112.

and conservation work in the palace.[58]

The local topography was taken into consideration in the layout of the settlement at Malqata. The edge of the cultivation provided easy access to food, water and transportation while the flat desert strand provided an ideal "clean slate" on which to set out the associated buildings free from dangers of flooding, or interference from other structures, field boundaries, drainage basins and canals. The king's palace, of course, was the single most important element, as in the all the royal cities. It was not only the residence and ceremonial setting for the pharaoh, but also for the storerooms, magazines, stables, offices, courts, audience halls, chapels, kitchens and bakeries, gardens and pools, *harims* and residences for the members of the court.

The whole palace complex was called the "House of Rejoicing" of the Pharaoh and does not appear to have been built until around the king's thirtieth year, possibly replacing an earlier palace, whose remains have been discovered in the mounds of debris around the great harbor knowns as the Birket Habu.[59]. Since there were a number of structures built around the palace for the king's jubilee, it clearly must have functioned principally as a temporary residence for the *Sed* festials celebrated by the king in the latter years of his long reign.

At the northern end of the site was a large mudbrick temple designated as "The Mansion of Amen in the [Estate of] Neb-maat-Ra is in the house of rejoicing" and build by the king to celebrate his second *Sed* festival in the 34th year of his rule. An ancient road skirts the west end of this temple and the rest of the settlement. To the south of the temple was a large festival or audience hall composed of a large open court with a raised platform at one end, possibly used as a "Window of Appearance" by Amenhotep III. [60] Backed along the south wall of the "Festival Hall" was a conglomeration of small, contiguous dwellings that formed a sort of "Workmen's village." Running parallel to these rude huts, immediately to the southeast, was a large and lavish "twinned" building designated by the Metropolitan Expedition as the "North Palace." Situated to the west of the palace of Amenhotep II itself was a series of very regular buildings designated as the "West Villas." These, however, may not have been houses after all, but administrative buildings, as evidenced by the large amounts of official dockets found here.[61] We do not know the exact extent of the Malqata settlement, but it must have been considerable. Isolated houses that probably belonged to it have been discovered in

58 P. Lacovara, "Recent work at Malqata" in M. Bietakand and S. Prell eds., *Ancient Egyptian and Ancient Near Eastern Palaces Vol. I: Proceedings of the Conference on Palaces in Ancient Egypt held in London 12th-14th 2013* (Vienna: Austrian Archaeological Institute, 2018): 275-282.

59 Barry J. Kemp and David O'Connor, "An ancient Nile Harbour: University Museum Excavations at the 'Birket Habu" *International Journal of Nautical Archaeology and Underwater Exploration* 3 (1974): 101-136.

60 On the chronology of the settlement, see especially: Hayes, "Inscriptions,": 35-37.

61 Hayes, op. cit.

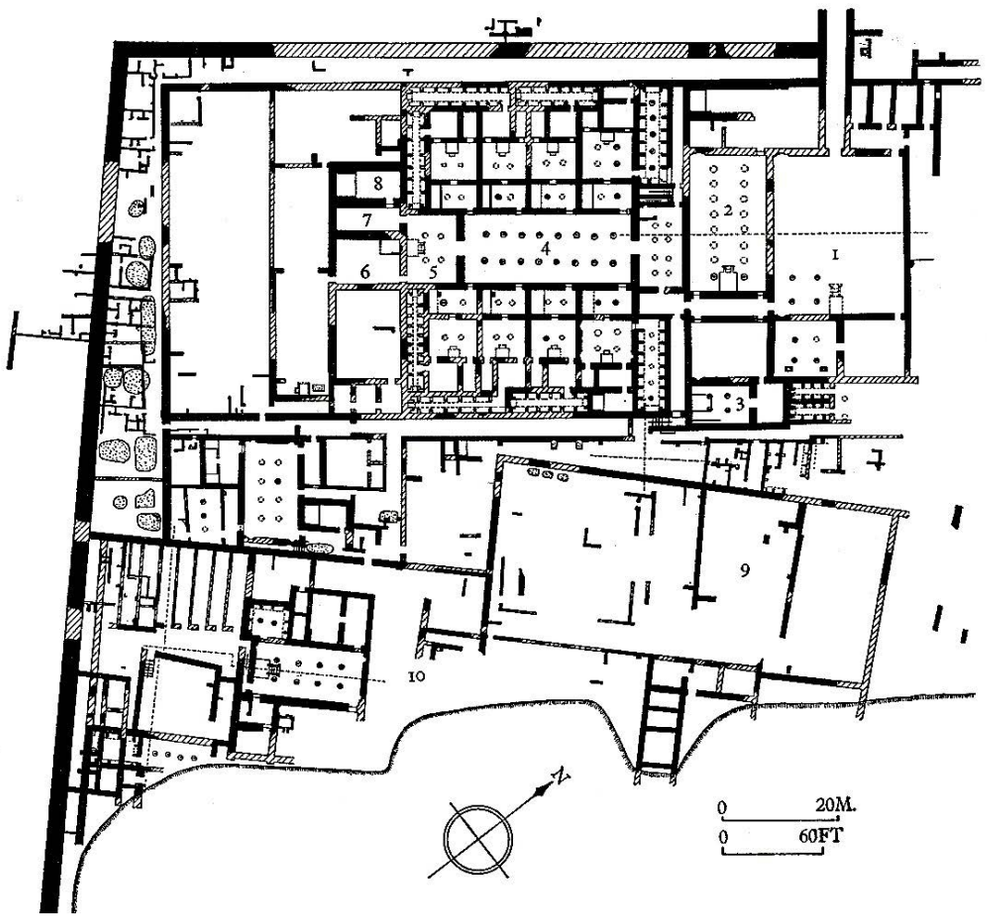


Fig. 6 Plan of the Palace of Amenhotep III at Malqata
(After W.S. Smith, *The Art and Architecture of Ancient Egypt*. Fig. 55)

the area of the Mortuary Temples of Aye/Horemeb and of Amenhotep son of Hapu, a kilometer to the north. In the Wadi to the south of the King's Palace, was a large expanse of habitation remains, part of which was known as the "southern village." It consisted a number of houses as well as workshops for producing glass and faience.[62]

The main palace, the palace complex of Amenhotep III was the focal point of the community. It was surrounded by a vast enclosure wall which contained kitchens, storehouses, and smaller dwellings as well as the king's residence itself. The entire complex appears to have gone through several stages of rebuilding (Fig. 6). This included not only changes to the palace, but the creation of a number of additional structures.

62 C. A. Keller, "Problems in dating glass industries of the Egyptian New Kingdom: Examples from Malkata and Lisht" *Journal of Glass Studies* (25) 1983. pp. 19-28.



Fig. 7 Reconstruction of the interior paintings in the great hall of the Palace of Amenhotep III (Illustration by Franck Monnier)

There even appears to have been a complete re-orientation of the entire building program. These phases perhaps corresponding to the three *Sed* Festivals of Amenhotep III.[63] Indications are that the Palace of the King, the West Villas and the North Village were all part of the original concept of the site. Later, the enclosure walls of both the West Villas and the Palace of the King were partially re-aligned to conform to a new axis.

One of the most important features of the palace was the remarkably well preserved painted decoration of the floor, walls and ceilings(Fig. 7).[64] Done in bright colors, some of these are designs, such as running spirals, block borders, buchrania or rosettes, while others are representations of plants and animals. The floor of the central hall was decorated with scenes of a pool filled with lotuses and fish. The lower part of many of the walls were painted with panels of color imitating the age-old niched-brick facade. In the royal bedchamber, these panels alternate with large *s3* and *ankh* signs to insure the king's health and well-being, while vultures are shown flying overhead. In the other parts of the palace, the ceilings were also elaborately decorated with flying vultures, ducks or doves. Some of the wall paintings that bear the name of Amon in the cartouches of the king have been smeared with mud indicating that the palace was still open in Akhenaten's time. However, little in the way of inscriptional evidence was recovered from the palace belonging to the period after the death of Amenhotep III and we may surmise that

63 Cf. Kemp and O'Connor "Birket Habu...,": 12-25.

64 Cf. P. Lacovara and Alexandra Winkles, "Malqata - The Painted Palace" in J. Becker, ed., *Tracing Technoscapes: The Production of Bronze Age Wall Paintings in The Eastern Mediterranean*. (Vienna: Austrian Archaeological Institute, 2018).

the site was largely abandoned when the court moved with Akhenaten to Tell el-Amarna, taking with them many ideas about the conceptual design of a royal city with them.

Conclusion

The layout and juxtaposition of the architectural elements common to these sites indicate adherence to a standard pattern, implying an existing tradition of urban planning, albeit a rather loose one (Fig. 8).[65] Clusters of habitation are located north and south of the central palace at Deir el-Ballas, as they are at Malqata, Amarna, and at Gurob.[66] Workmen's villages are found at Malqata and Amarna, as well as at Deir el-Ballas, and similar complexes of administrative buildings flanked by storage magazines are found at all three sites.

While Tell el-Amarna may be distinct from what we assume would have been the usual type of settlement in ancient Egypt—a long-lived, sprawling, densely populated city (i.e., an "organic town")[67]—nevertheless, one can see in its layout a basic pattern which is repeated in bits and pieces at Deir el-Ballas and in the other pharaonic royal cities discussed above. For these sites, at least, we can state that there was indeed an archetype, whether actual or conceptual, to which they conformed. It is also clear that the design of these communities, as in many other cultures,[68] combined both functional and symbolic aspects unique to the society that created them. Though such community organization is easiest to discern in the single-period royal cities, it is not improbable that the state could have imposed such an order on existing urban centers as well. Recent excavations at Memphis[69] and at Thebes[70] provide a tantalizing clue that even organic towns in pharaonic Egypt may have been far more regularized and planned than previously thought. Buildings at both sites have been found to be ordered on the cardinal points of the compass, and there is some evidence that they were "zoned," at least with regard to areas of craft production.[71] Whether this regularization was the result of the initial design or "urban renewal" is difficult to discern.[72]

Certainly, planning on a grand scale is evident in the great temple and mortuary complexes

65 Cf. B. J. Kemp "Bricks and Metaphor" *Cambridge Archaeological Journal* 10:2 (2000): 335-346.

66 Thomas, *Gurob*, 5.

67 Bietak, "Town Problem," 97-144.

68 See, for example, J. Rykwert, *The Idea of a Town: The Anthropology of Urban Form in Rome, Italy and the Ancient World* (Cambridge, Massachusetts: M.I.T. Press, 1988).

69 D. G. Jeffreys and L. Giddy, "Memphis, 1988," *JEA* 75 (1989): 1-12.

70 Mohammed el-Saghir, personal communication

71 Jeffreys and Giddy, "Memphis, 1988," and E. Pusch, personal communication.

72 "It is doubtful if a single, autonomous, causative factor will ever be identified in the nexus of social, economic and political transformations which resulted in the emergence of urban forms . . . whatever structural changes in social organiza-

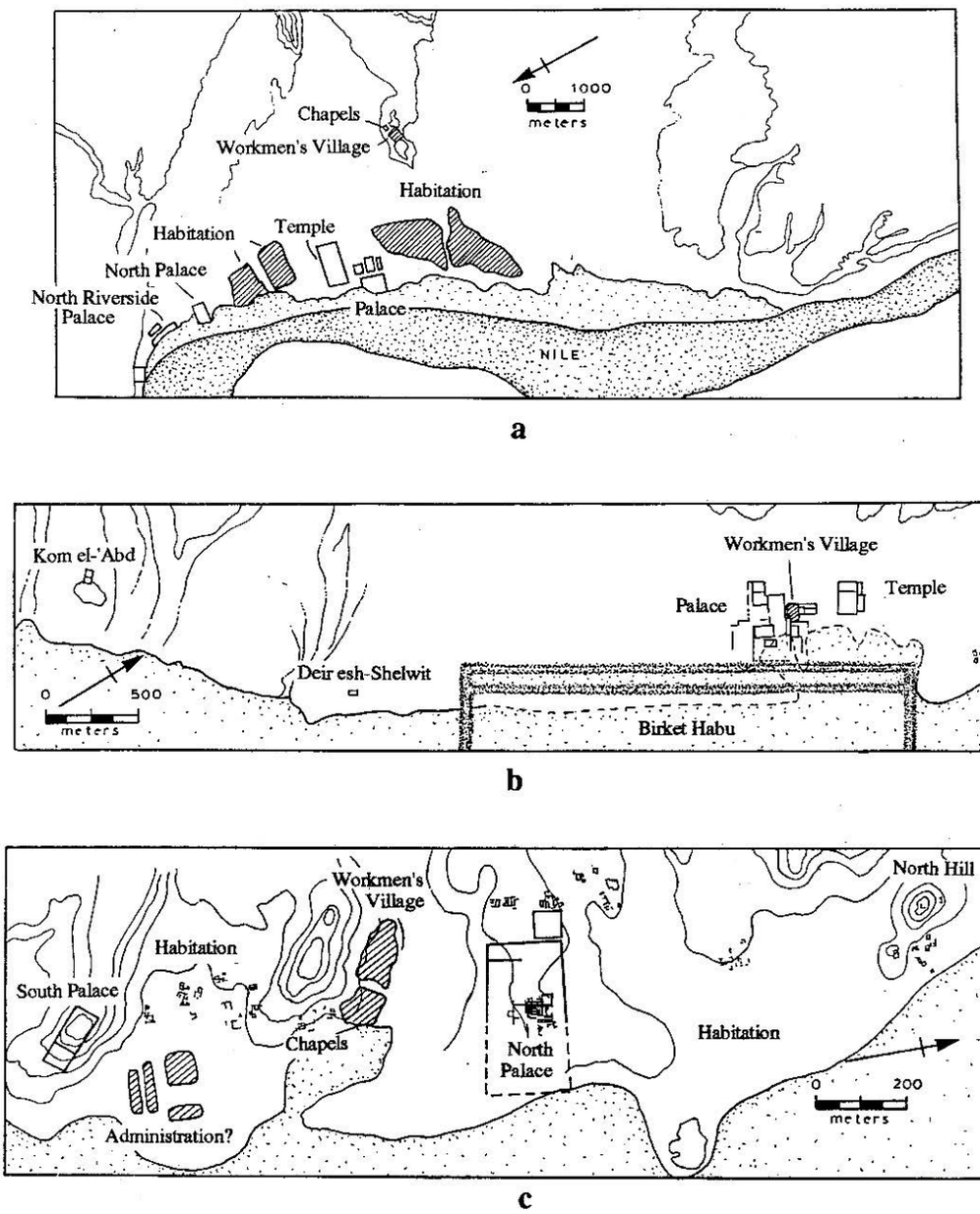


Fig. 8 Comparative town plans (a) Tell el-Amarna, (b) Malqata, (c) Deir el-Ballas (Drawing by Lisa Heidorn)

tion were introduced by commerce, warfare or technology, they needed to be validated by some instrument of authority if they were to achieve institutionalized permanence"; from P. Wheatley, "Proleptic Observations on the Origins of Urbanism," in *Liverpool Essays in Geography*, ed. R. W. Steel and R. Lawton (London: University of Liverpool Press, 1967): 315-41.

of pharaonic Egypt, where orthogonal grid patterns are regularly employed. It is not, then, unreasonable to assume that there would have been a similar systematic approach to the layout of urban centers.[73] While many of our identifications must be considered tentative, recent fieldwork in Egypt, including that done by the writer at the sites of Deir el-Ballas and Malqata, along with the information compiled here on other sites, indicates that, indeed, there was a tradition of town planning in ancient Egypt. Although it was rudimentary in comparison with the Greek model, it was more sophisticated than much of the contemporary ancient world.

A notably similar set of circumstances is found in early Japan, where a model for this kind of settlement system can be found. Japan experienced what Paul Wheatly termed "urban imposition,"[74] that is, a set of cities and towns was created by the earliest rulers of the island kingdom inspired by existing Chinese patterns of urbanism. Each of the early Japanese kings created his own royal city upon his ascent to the throne, and "the generalized urban form that resulted from this process was essentially a square or rectangular walled enceinte exhibiting cardinal orientation, axiality and a powerful aesthetic generated by the authority vested in a central place."[75]

One can postulate a similar pattern in Archaic Period Egypt, where the Thinite kings grafted the inspiration of Mesopotamian urban generation onto the indigenous settlement pattern of towns and camps of predynastic Egypt, as is evidenced in the tradition of the founding of Memphis by Menes. I would suggest that the New Kingdom royal city is perhaps the grandest expression in domestic architecture of this imperial aesthetic. Such settlements had a variety of purposes and were, to a certain extent, mutable in form. Yet they adhered to a basic set of symbolic and functional aspects. This underlying standardization can be observed in the architectural town plans presented above.

The settlement at Deir el-Ballas can be seen as representing a significant step in the evolution of the New Kingdom royal city. Deir el-Ballas also indicates that there was no major change in New Kingdom urbanism, such as that postulated by Kemp, and that the royal city was part of an older tradition of court-centered communities in ancient Egypt. The indications are that this type of settlement had roots far earlier than Deir el-Ballas and the Second Intermediate Period. We might suggest that this pattern of recreated royal capitals designed on a cosmological scale was mirrored for eternity in the great royal necropoli of pharaonic Egypt and dates back to the onset of the Dynastic era.

73 A. Badawy, "Orthogonal and Axial Town Planning in Egypt," *ZÄS* 85 (1960): 1-2.

74 P. Wheatley and T. See, *From Court to Capital: A Tentative Interpretation of the Origins of the Japanese Urban Tradition* (Chicago: University of Chicago Press, 1978): ix.

75 *Ibid:* 116.

ヘレニズム時代のエジプト領域部における都市の概念と景観

周藤芳幸
名古屋大学人文学研究科

はじめに

1993年からM. H. ハンセンの主導で開始されたコペンハーゲン・ポリス・センターの大規模な共同研究は、ギリシアのポリスに関する伝統的な理解を一新することで、古代ギリシア史研究にめざましい進展をもたらすことになった[1]。このプロジェクトの特徴は、何よりも「古代ギリシア人による自らの集落組織と政治システムについての認識」と「現代の研究者による古代ギリシアの集落組織と政治システムについての分析」とを峻別した上で、研究対象を前者、すなわち前古典期と古典期（前7世紀から前4世紀）の史料中で「ポリス」と名指される概念に限定した点にある。別の機会に指摘したように、このような方法は、現代の研究者がこれまで都市国家の要件として設定してきた基準（自治、都市壁、独自のコインなど）ではなく、あくまで同時代の人々があるコミュニティをポリスと呼んでいるか否かに決定的な意義を与える点で、きわめてエミックな研究アプローチと評することができるであろう[2]。当然ながら、この方法には様々な問題が付随しているが、それでも古代ギリシアのポリス概念を再考するにあたり、ハンセンらがこのアプローチを採用することで画期的な成果をあげることができたのは事実である。それでは、この方法を古代エジプトの都市研究に応用するならば、そこからいかなる新たな知見が得られるであろうか[3]。

古代エジプト人が一般に自らの集落をどのように認識していたのかという問題をめぐっては、本計画研究においてもすでに内田杉彦によって新王国時代の状況が検討されている。それによれば、新王国時代の集落は、農村や一時的な居住地を含むウェヒトとより上位の集落であるデミとに大別され、デミはさらに上位のニウトを含んでいる。さらに、デミが広く「人間の居住地」を意味していたのに対して、ニウトは「人間とともに神が住む居住地」としての意味を持っており、主神を祀る神殿を中核とする都市を指す概念だったとされる。一方、その後のエジプトでは、前7世紀にサイス朝の成立を機としてギリシア人傭兵がデル

1　コペンハーゲン・ポリス・センターによる研究成果の概要については、Hansen (2003) を参照。

2　周藤（2010）14-15。

3　近年におけるプトレマイオス朝からローマ帝政期のエジプト都市研究では、むしろ都市の面積や人口からその規模を推測し、それを現代の基準で分類するエティックな方法が主流となっている。Alston and Alston (1997) 199, n.1; Mueller (2006) 88-104.

タに定住するようになり、前 4 世紀の末にプトレマイオス朝による支配が確立されると、ギリシア各地から新天地を求めて到来したさらに多くのギリシア人たちがナイル流域の各地に居住するようになった。実質的にギリシア都市であった首都のアレクサンドリアはさておくとしても、とりわけ前 3 世紀の中頃に湖の大規模な干拓が進められたファイユームでは、入植したギリシア人が在地のエジプト人とさまざまな関係を取り結びながら暮らす生活空間が現出していた。この時代の膨大な数のギリシア語パピルス文書は、ポリス文化のもとで育ちギリシア語を母語としていた彼らと、婚姻関係などを通じてエジプト在地社会に溶け込んでいったその子孫たちによって書き残されたものであるが、そこには、この時代の人々が自分たちの集落をどのように認識していたのかを知る上で貴重な手がかりが少なからず含まれている。

そこで、本論文では、ヘレニズム時代のエジプトにおける都市の姿を探るために、コペンハーゲン・ポリス・センターの研究手法に倣い、まずは先行する末期王朝時代についての同時代史料であるヘロドトスの『歴史』におけるポリスという語の用法を検討する（以下、古典史料やパピルス文書に関して「都市」と表記する際、対応するギリシア語の原語は常にポリスである）。次に、その結果を踏まえて、ヘレニズム時代のエジプト都市について考えるにあたり文字史料と考古学的データとをある程度比較検討する作業の可能な二つの時空間、すなわち前 3 世紀のファイユームと前 3 世紀から前 2 世紀の中エジプトを対象として、それぞれ文字史料から窺われる都市の概念と考古学的な知見から推測される集落景観について明らかにしていきたい。

1. ヘロドトスとエジプトの都市

コペンハーゲン・ポリス・センターによるポリス研究では、エジプトの都市は「バルバロイのポリス」として分析対象としては一顧だにされていないが[4]、対照的に古典史料は一致してエジプトに数多くの都市が存在していたことに言及している。

まず、古代エジプトに関するもっとも重要な古典史料である前 5 世紀のヘロドトスの『歴史』（2. 177）には、エジプトがアマシス王（在位 570-526 年）の治世下で最大の繁栄を迎えたとする有名な記述に続いて、人々の居住する都市の総数がエジプト全土で 2 万に達したことが指摘されている。ヘレニズム時代に入ると、前 3 世紀の詩人テオクリトスがプトレマイオス 2 世を讃える『牧歌』第 17 番のなかで、「しかし、エジプトの低地ほど実らせるところはどこにもない、あふれるナイルが土くれを湿らせほぐすとき。またどこにもこれほど多くの都市に熟練の民が住みはしない。3 百もの都市が建てられて、それに 3 千と 3 万が加わって、そのうえ 2 かける 3、この都市すべての王が勇ましいプトレマイオスで、フェニキア、アラビア、シリア、リビア、黒人のエチオピアから領土を切り取った」とうたっている（17. 79-87）[5]。こ

4　ハンセンは、ヘロドトスが『歴史』のなかでポリスと呼んでいる 254 のコミュニティのうち、194 が「ギリシア人のポリス」であるのに対して、残りの 60 が「バルバロイのポリス」であると指摘するが（Hansen (1996) 9）、彼の方法論に照らすならば、このようなエティックなポリスの分類は意味を持たないはずである。周藤（2010）16。

5　日本語訳は、古澤ゆう子訳（テオクリトス『牧歌』、京都大学学術出版会 2004、42-143 頁）に従い、「町」の

の 33.333 という数字は明らかに修辞的なものであるが、プトレマイオス 2 世による支配圏のスケールが何よりも膨大な都市の数によって表現されていることは注目に値する。これに対して、前 1 世紀のディオドロスは都市と村（コーメー）とを一括し、「神聖文書によれば、古い時代には 1 万 8 千を超える都市と村があったが、ラゴスの子プトレマイオス（1 世）の時代にその数は 3 万に達し、その多くが現在まで存続している」と述べている (1. 31. 6-9)[6]。後述するように、「都市と村」というセットでエジプト全土を示す表現はヘレニズム時代の行政文書でも確認することができ、ディオドロスの記述が（そこにあげられた数字の信憑性はさておき）実際に同時代のエジプトの文書に依拠するものだったことは確かである。

これらの古典史料のうち、格段に豊かな情報を提供するのがヘロドトスの『歴史』である。ヘロドトスが明確にポリスとして言及する（多くの場合に固有名詞の属格にポリスの語が後置される）エジプトの都市は 23 あるが、その中ではエレファンティネ（16 箇所の言及のうち 9 回ポリスと呼ばれる、以下同）、ブト（13、9）、サイス（13、8）ヘリオス（9、9）、ブバスティス（8、7）の 5 つが頻度において際立っている。これらのなかでは、唯一エレファンティネだけが上エジプトに位置しているが、残りの下エジプトの 4 つの都市については、いずれもそこで行われる神への祭典が紹介される文脈でポリスと呼ばれていることは示唆的である。

逆に、ヘロドトスがまったく、もしくは稀にしかポリスと呼んでいない重要な集落もあることは、きわめて興味深い。ギリシア人とも縁の深いメンフィスは、ヘロドトスが訪れた当時にはまさに都市と呼ぶにふさわしい偉容を誇っていたにもかかわらず[7]、40 箇所にわたる言及のなかで 2 回しかポリスと呼ばれていない。これと対応するかのように、上エジプトのテーベにいたっては、ポリスとしての言及は皆無である。また、ヘロドトスがアマシス王によってギリシア人の交易拠点（エンポリオン）として創設されたと説明するナウクラティスも、意外なことに 7 箇所の言及のなかで 1 回しかポリスと明記されていない。

前 4 世紀の状況については不明であるが、ギリシア語パピルス文書が急増する前 3 世紀中頃までには、先にディオドロスの記述で見たように、エジプトの集落は公的には都市と村とに大別されるようになっていた。この点をもっとも端的に示しているのが、前 259 年の日付をもつプトレマイオス 2 世のいわゆる収税法パピルスである[8]。そこでは、たとえばワインの徴税請負の告知は「それぞれが居住する都市か村」で行われるべきこと（col. 26. 14-15）、ゴマ油とヒマ油が「領域部のすべての都市と村」で販売されるべきこと（col. 40. 17-18）、王室銀行が「都市か村にある」こと（col. 75.1）が言及されており、いずれの文脈でもこれがおそらくアレクサンドリアを除く「エジプト全土の集落」を意味していることは明白である。

それでは、ヘレニズム時代のエジプトでは、なぜこのような都市と村との区別が生じたのであろうか。直接的な証拠はないが、アレクサンドロス

表記のみ都市に変更した。

6　3 万ではなく 3 千とする写本もあり、この数字とテクストの理解に関しては議論がある。Rathbone (1990) 104.

7　Hdt. 2.136; 153 など。

8　Grenfell and Mahaffy (1896).

大王による征服後（前 332/1 年）、もしくは大王の死後にプトレマイオスがエジプトの実質的な支配権を手にした際（前 323 年）、おそらく行政上の目的で、それまでのノモスの中心市には公式にポリスの名称が与えられ、それにともなって、それまでは漠然とポリスと呼ばれていた多くの集落は村として位置づけられたと考えられる[9]。というのも、やはりコペンハーゲン・ポリス・センターの研究によって明らかにされているように、村（コーメー）という呼称は古典期のギリシアでは決して一般的なものではなく、地理的にもマケドニアや小アジアのエーゲ海岸など、ヘレニズム時代の初期にエジプトへの移民を多く送り出した地域に限定して見られるからである[10]。

いくつかのノモスの中心市は、すでにヘロドトスがエジプトを訪れた前 5 世紀の段階でしばしばギリシア人からはそこで祀られている主神の名を冠したポリスと呼ばれているが、このような慣行はヘレニズム時代にも継承された。実はギリシア的な都市として建設されたアレクサンドリアとプトレマイスの場合も基本原理は同一であり、これらの都市名は神格化された支配者の名に由来すると考えるのが妥当であろう[11]。結果として、プトレマイオス朝時代のエジプトにおける都市とは伝統的な意味でのニウトに他ならず、それ以外の集落、すなわちデミがコーメーと呼ばれるようになったのである[12]。

このような都市の名称については、さらに以下の 2 点を指摘しておきたい。まず、ポリスという語が後接することによって都市名が 3 音節よりも長くなってしまう場合には、次第にそこからポリスが省略されるようになった（エレファンティネやオクシュリュンコスの場合など）。また、とりわけアルシノイテス州の場合には、他のノモスの中心市などからの移住者が新たな居住地でもそれまで暮らしていた都市名をそのまま維持した結果、一見矛盾しているようではあるが、名称にポリスを含む村が少なからず存在することになった（ヘルムウ・ポリス、ヘリウ・ポリスなど）[13]。データベースから地名を検索する現代の研究者にとっては紛らわしいこのような事態も、当時の人々にとってはそれほど問題とはならなかったようである。

なお、ヘレニズム時代の居住地に関しては、都市と村以外にも、注目すべきタームが存在する。一つが前 2 世紀以降に増加する要塞（フルウリオン）であり、これらは要塞長官（フルウラルコス）によって管理される軍事拠点として機能して

9　周知のように、セレウコス朝とは対照的に、プトレマイオス朝はプトレマイス・ヘルミウを唯一の例外としてナイル流域に都市を建設することはなかった。Mueller (2016) 3.

10　Hansen (1995) 69, 80. そもそも、ヘロドトスはエジプトに関する叙述のなかでは 1 箇所（2. 48. 2）でしかコーメーの語を使用していない。

11　この基本原理は、さらに時代が下って、ハドリアヌス帝の時代にアンティノウ・ポリスが建設された際にも継承されている。

12　クラリュスとトムソンも、コーメーとデミはおそらく同義であったと指摘している。Clarysse and Thompson (2006) II, 103.

13　Clarysse (2016) 164-5. プトレマイオス朝時代のパピルスに限定すれば、そこに言及されているヘルムウ・ポリスは、そのほぼすべてがアルシノイテス州の小邑ヘルムウ・ポリスであり、いわばその母市にあたる中エジプトのヘルモポリスの方は、前 3 世紀には「上のヘルムウ・ポリス」（P. Col. 4. 83）、また前 2 世紀になると「テーバイスのヘルムウ・ポリス」（SB 5. 7632. 28）と呼ばれて区別されていた。

いた[14]。これらの要塞は、「ソクノパイウ・ネソスにある要塞」（P. Amh. 2. 43）、あるいは「ヘラクレスのポリスの港の要塞」（P. Berl. Zill. 1. 36）といった言及からも、しばしば既存の都市や村の一部に置かれていたようである。同様に注目すべきタームが港（ホルモス）であり、アルシノイテス州のプトレマイス・ホルムウなどでは、これが地名の一部となっている。単独の港はアレクサンドリアへの穀物輸送の文脈で頻出するが、これはデミが「波止場」を意味する語から派生して波止場から発展した居住地も指すようになり、新王国時代までにはそれ以外の居住地をも意味するようになったという内田の指摘を参照するならば[15]、ヘレニズム時代においても、領域部から首都への穀物輸送というモノの動きが集落組織の形成に関与していたことを示唆している。

2. 前 3 世紀のアルシノイテス州における都市の概念

ナイルから分岐したバール・ユーセフによって潤されるファイユームの内陸盆地は、中王国第 12 王朝のファラオであるアメンエムハト 3 世の時代に開発が進められたが、ヘレニズム時代に入ると、プトレマイオス 1 世から 2 世の時代にモエリス湖が大規模に干拓された結果、そこには1500㎢にも及ぶ肥沃な耕作地が現出することになった[16]。前 267 年頃からその直前に亡くなったプトレマイオス 2 世の姉であり妻でもあったアルシノエ 2 世にちなんでアルシノイテス州と呼ばれるようになったこの地は、クロコディロン・ポリスを中心市として、北東部のヘラクレイデス地区、南部のポレモン地区、北西部のテミストス地区という三つの行政単位に区分されていた（図 1）。地名分析の結果は、ヘラクレイデス地区にはデルタの諸都市の地名が、ポレモン地区には中エジプトの諸都市の地名が、またテミストス地区にはギリシア語の地名が多いことを示しており、おそらくこの時期のファイユームには各地から組織的な入植が行われたものと考えられている[17]。そのなかでも、盆地の東端に位置するヘラクレイデス地区のフィラデルフィア（フィラデルフェイア）については、その近くにプトレマイオス 2 世から宰相アポロニオスに与えられた贈与地が存在し、その管理人を務めていたゼノンが膨大な関係書類（ゼノン文書）を手許に集めていたことから、パピルス史料を通じて詳細な情報を得ることが可能となっている[18]。

このアグレオフォンの子ゼノンは、前 285 年頃にカリアの都市カウノスに生まれ、前 261 年秋から前 258 年春にかけて宰相アポロニオスの代理人としてパレスティナ方面を拠点に活躍した。やがてエジプトに呼び戻された彼は、アポロニオスに

14　Fischer-Bovet (2014) 269f.

15　内田（2019）146.

16　Bagnall and Rathbone (2004) 127f.

17　Clarysse (2008)56; Id. (2016) 165. ヘラクレイデス・メリスに存在したデルタの集落名としては、アトリビス、ブバスティス、ヘリウ・ポリス、レトゥス・ポリス、メンデス、ネイル・ポリス、セベンニュトス、タニスがあり、ポレモン・メリスで確認される中エジプトの集落名には、メンフィス、アフロディテ・ポリス、キュノン・ポリス、オクシュリンカ、上エジプトの集落名にはアポロノス・ポリスがある。

18　この宰相アポロニオスの贈与地については、ロストフツェフによる古典的な研究（Rostovtzeff 1922）に詳しい。ゼノンとそのアーカイヴについては、Pestman (1981) 、Clarysse and Vandorpe (1995) などを参照。

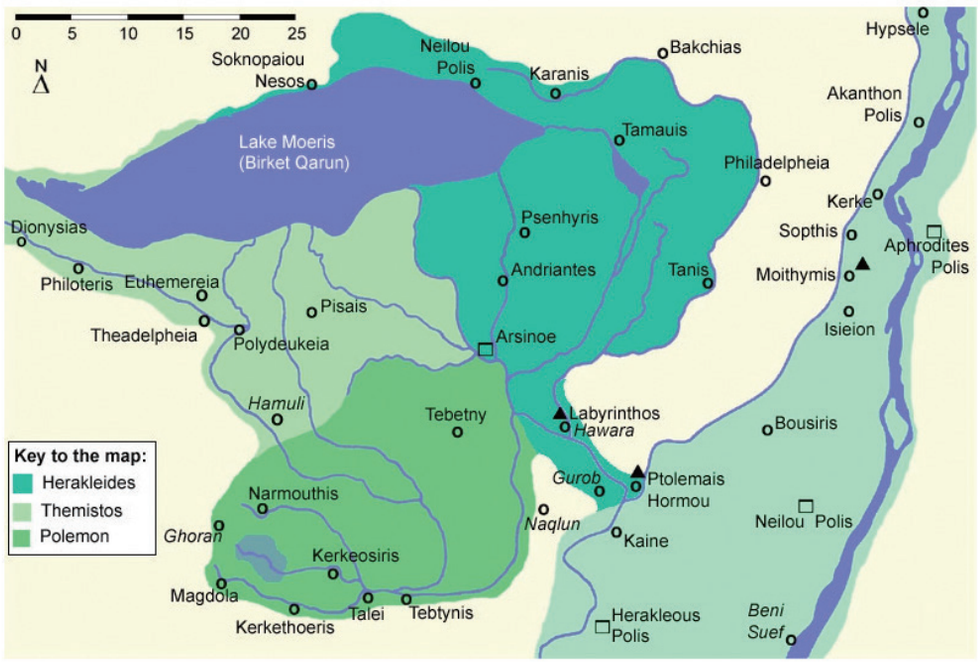


図 1　ヘレニズム時代のファイユーム（Trismegistos, Fayum Project Map）

随行して下エジプト各地を巡検した後、前 256 年の春にファイユームでアポロニオスの贈与地の管理人となる。ゼノン文書のなかで中心的な位置を占めているのが、このときから前 248/7 年までの 8 年間に彼が蒐集した書簡などの書類である。

このような経歴からも明らかなように、ゼノンは移民一世としてギリシア的な世界観を強く保持していた。それをよく示しているのが、前 257 年の 5 月に 3 人のカウノス人がアポロニオスに文書を送るにあたってゼノンによる口添えを依頼した書簡である（P. Col. Zen. 1.11）。この書簡のなかで、彼らが「ポリスと私たちにとって有益な事柄」についてアポロニオスの助力を得ることが重要であり、もしそれが実現すればこの件でゼノンが尽力してくれたことをカウノスの民会に報告すると約束していることは、このテクストにおいてポリスという語が完全にギリシア的な意味で用いられていることを示している[19]。ゼノンのほぼ一世代上にあたるアテネ人スフェットス区のカリアスがそうであったように[20]、ゼノンはプトレマイオス朝の宮廷の中枢において地歩を築いてからも祖国カウノスと密接な関係を保っていた。従って、少なくとも彼の周辺では、ギリシア的な意味でのポリスとエジプトのポリス（上述したニウトとしての

19　もちろん、ここでのポリスはエジプトの都市ではなくカウノスのことを指しているため、ポリスの語がギリシア的な意味で使われているのはある意味で当然ではある。しかし、ここで注目したいのは、前 3 世紀半ばのエジプトというこの書簡のコンテクストそのものである。

20　Shear (1978). なお、カウノス人たちが約束する「民会への報告」は、カリアスの場合と同様に、民会における「善行者」としての顕彰決議を伴うものだったと考えられる。Westermann and Hasenoehrl (1934) 47.

都市）とが概念的に区別されることは、おそらくなかったと考えられる。

しかし、ゼノン文書のなかには、行政的には村であるフィラデルフィアをあえて都市と呼ぶことによって、そこに何らかの特別な意味を込めようとしている例も見られる[21]。とりわけ興味深いのが、女性衣料製造業を営む 2 人の兄弟がアポロニオスの贈与地で職を得るためにゼノンに送った前 256 年 11 月の書簡である（PSI 4. 341）[22]。そのなかで彼らは、自分たちが母親や妻とともにフィラデルフィアに来ることを希望しているのは、「この都市の名声について、またその代表者であるあなたが優れた公正な方だということについて聞いているため」と述べている。ここで名声と訳したクレオスは、主として墓碑銘などにおいて死者の栄光を讃える際に用いられる雅語であるが、この兄弟がゼノンの歓心を買うために、その人柄についての評判に加えてフィラデルフィアの「都市のクレオス」に言及しているのは、都市の語そのものが独自のポジティヴなニュアンスを伴っていたためではないかと推察される。

同様にフィラデルフィアが都市と呼ばれることもあったことを示す興味深い史料が、前 257 年の秋にヘリオポリテス州からアポロニオスの贈与地に出稼ぎに来ていた農民たちがアポロニオス宛に送った書簡である（P. Lond. 7. 1954）[23]。この農民たちは、おそらく季節労働者としてアポロニオスの贈与地の一部の開墾と耕作にあたることになっていたようであるが、ダミスなる者によってそれを差し止められ、さらには「邪悪なエジプト人の書記」からこの都市に住むことを許されず追い払われたらしい[24]。この書簡の冒頭では、農民たちは自分たちがいる場所を「アルシノイテス州のフィラデルフォスの村」と明記しているので、書簡中でフィラデルフィアを都市と呼んでいるのは、先の史料の場合と同様、プトレマイオス 2 世とその宰相であるアポロニオスに対する敬意の表れと解するべきであろう。

これらのパピルス文書からは、移民一世を含む多数のギリシア系の人々が居住していた前 3 世紀中頃のアルシノイテス州では、少なくとも彼らにとっての都市の概念は依然としてギリシア世界におけるそれを継承するものである一方で、行政的に村ではあっても、フィラデルフィアのような特殊な性格の集落はある種の価値観を込めて都市と呼ばれることもあった様子が窺われる。

3. 前 3 世紀のアルシノイテス州における集落景観

ヘレニズム時代におけるファイユームの集落景観については、当時の居住地の多くがローマ帝政期から古代末期にいたるまで継続的に利用され、なかには現代の居住地によって完全に覆われてしまっているため（クロコディロン・ポリスなど）、また、これまでに発掘調査の対象とされた遺跡であってもそれが比較的早い段階で実施されたため

21　行政的には、アルシノイテス州ではクロコディロン・ポリスだけが都市であり、それ以外は村（デモティックのデミ）もしくはエポイキアだった。Mueller (2006) 99.

22　Clarysse and Vandorpe (1995) 63-8; Rowlandson (1998) no. 201.

23　ostovzeff (1922) 73-74.

24　この「邪悪なエジプト人の書記」とは、フィラデルフィアの「村の書記」を務めていたアノシスであろうと推測されている。Skeat (1974) 45.

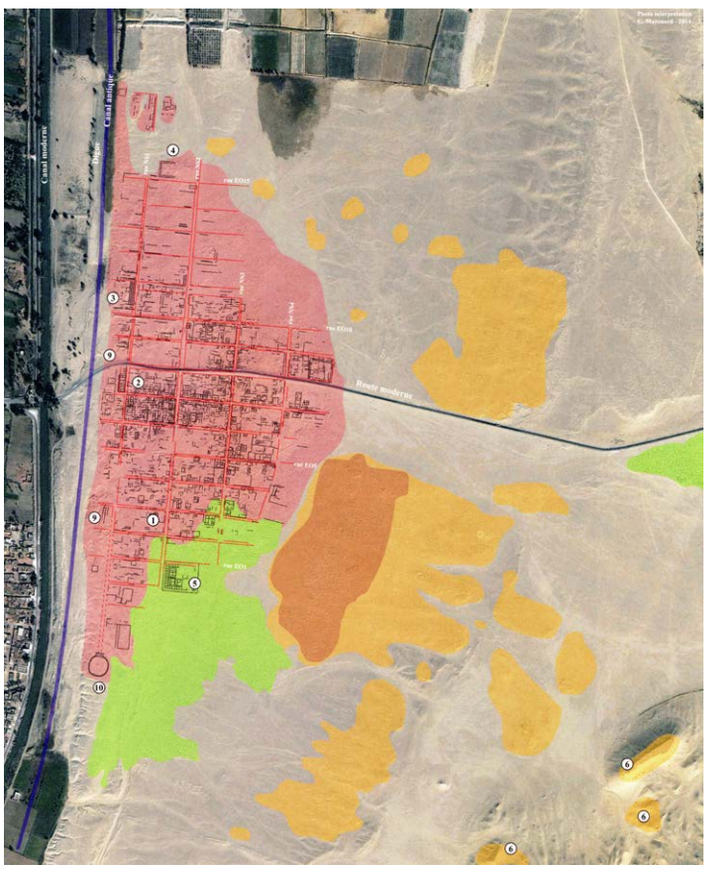


図 2　衛星写真から復元されたフィラデルフィアの市街図
（Marouard 2017, Fig.9.6）

（カラニスなど）、パピルス文書と比較対照することができるような考古学的証拠を得ることが困難な状況にある。そのため、ここでは近年になってから発掘ないしは再調査が行われているフィラデルフィアとバッキアスをとりあげて、その集落景観を概観する。

フィラデルフィアは、宰相アポロニオスがプトレマイオス 2 世から「一万アルーラ」を与えられたのを機として前 256 年頃に創設されたが、その主たる目的はおそらくクレールーコイの入植にあった[25]。衛星写真からは、集落域は盆地の東縁の砂漠上、南北約 1300m、東西約 1000 ～ 1300m の範囲（約 60ha）に造成され、その東にはネクロポリスが広がっていたことが分かる（図 2）。この地点でファイユームの盆地はもっともナイル谷と近接しており、現代と同様、フィラデルフィアとナイル谷のケルケ（現代のゲルゼ）とを直線で結ぶ砂漠道は、古代にも重要な交易ルートとなっていた[26]。

このようなフィラデルフィアの成立過程は、その独特な景観にも反映されている。エジプト領域部の他の集落とは異なり、フィラデルフィアの居住区は典型的なヒッポダモス様式で設計されていた。一つの街区は 100 m ×50m の広がりをもち、このような街区が少なくとも 60 ほど存在したことが推測されている[27]。街区を隔てる道の幅は、通常で約 5 m、二本の主要道路で 10 mとなっていたが、同時代に東地中海屈指の大都市であったロドス（都市域約 120ha）の道幅がそれぞれ 5.3 ～ 5.5m と 9 mであったことに照らすならば、十分それに匹敵するものだった。集落域では神殿と考えられる遺構も確認されているが、その配置も街区のグ

25　Marouard (2017) 122.

26　Viereck (1928) 7.

27　1924 年に作成されたボルヒャルトのプラン（Viereck 1923, Fig.3）では 27 の街区に番号が付されているが、その後 Marouard が衛星写真の観察によって南北にさらに街区が広がっていたことを示している。Marouard (1917) 125, Fig. 9.3.

リッドに従っている。

これに対して、アルシノイテス州の北端、ちょうどフィラデルフィアとカラニスの中間に位置するバッキアスは、従来、フィラデルフィアと同様にプトレマイオス 2 世の時代に創設されたと考えられていた（図 3）。しかし、近年のイタリア隊による調査によって、その居住の開始は中王国時代にさかのぼり、末期王朝時代に一時廃絶された後、プトレマイオス 1 世時代に再建されたものであることが明らかになっている[28]。

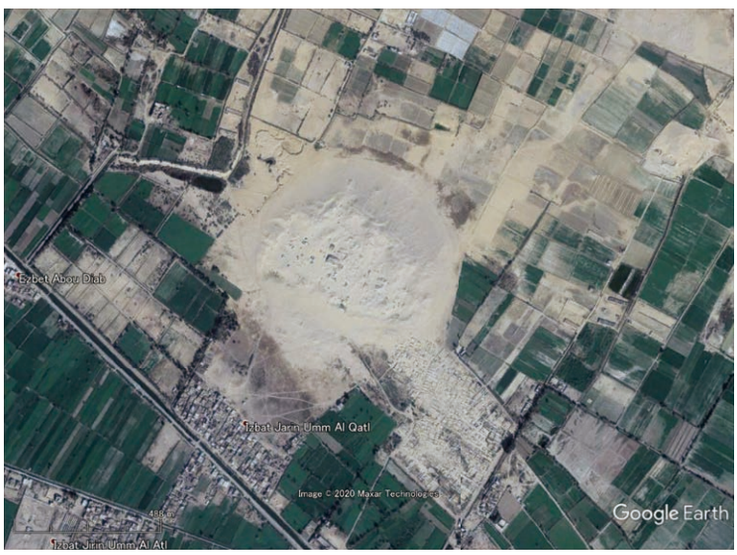


図 3　Google Earth で見る現在のバッキアス

ヘレニズム時代初期のバッキアスでは、集落域の南西を流れる大運河を主軸線として、これと直行する参道の延長上に神殿 B が存在した。しかし、この参道と同時期の家屋群は主軸の方位が異なっているため、集落全体（とりわけその西半）のプランがどの程度この参道によって規定されていたのかは明らかではない。これに対して、前 3 世紀末から 2 世紀になると、大運河の主軸線と平行にソクノブコンネウスを主神とする神殿 A が築かれ、その内部は何回かにわたって改修が繰り返されたものの、これは後 3 〜 4 世紀まで使用され続けた。前 1 世紀にはこれと 90 度直行する形で神殿 C も構築されたが、これは入り口から 4 つの部屋が連続するプランを特徴としている。

このように、パピルス文書が豊富に残存する前 3 世紀中頃の状況に限って見ても、王朝時代から断続的に居住されていた集落とプトレマイオス朝の支配下に新たに創設された都市との間には、根本的な景観の相違があったことを確認できる。バッキアスでは、都市景観の要となるのはこの地で崇拝されていたソベク神の神殿であり、その長軸とこれにいたる参道によって示される主軸線が集落全体のプランに一定程度影響を与えていたが、そこに同時代の地中海の諸都市の特徴的な空間構造を見て取ることはできない。これに対して、フィラデルフィアでは、アレクサンドリアも含めた同時代のギリシアの都市には不可欠の都市壁こそ存在しなかったものの、当時の慣例に従って長辺と短辺の比が 2 対 1 で設計された街区が規則的に配され、道幅の広い主要道路が直交する典型的なギリシア都市の姿が再現されていた。こうした異なる構成原理に基づく集落が一つの地域のなかで共存していたことは、これらが在地のエジプト人とギリシア系移民とが協調しながら新しい状況に対応しようとしていた時代の産物であったことをよく示している。

28　Buzi and Giorgi (2020) 21-24.

4. 前 3 世紀から前 2 世紀にかけてのヘルモポリテス州における都市概念

古代を通じてエジプト世界はナイル谷に沿った上エジプトとデルタの下エジプトとに二分されていたが、現代では上エジプトの北半部、ベニ・スエフからソハーグまでの地域は、ルクソールを中心とする上エジプトとは区別して中エジプトと呼び慣わされている。その中エジプト屈指の都市が、ギリシア人がヘルメス神と同一視した知識と文字の神トト信仰の中心地で上エジプト第 15 ノモスの中心市だったクムヌ、すなわちヘルモポリス・マグナ（ヘレニズム時代の表記ではヘルムウ・ポリス、現在のマラウィ近郊に位置するエル・アシュムネイン）である。ナイルの沖積平野のただ中にある微高地に広がるその遺跡は、現在ではすっかり荒廃してしまっているが、ヘレニズム時代からローマ帝政期のヘルモポリスは、領域部でもひときわギリシア・ローマ的な色彩の強い都市だったことが知られている。

そのヘルモポリスで現在目にすることができるもっとも大規模な遺構はコリントス様式の列柱が立ち並ぶ古代末期（5 世紀中頃）のバシリカであるが、ヘレニズム時代にはこの地点に領域部ではきわめて珍しい王朝祭祀のための神殿や列柱館が存在していた。その証拠となるのが、ここから出土したギリシア様式の建築物のアーキトレイヴであり、表面には 3 行にわたって流麗なギリシア語の碑文が刻まれている（図 4）[29]。テクストによれば、これはプトレマイオス 3 世の治世初期（前 240 年代の後半）にヘルモポリテス州に駐屯していた定住騎兵隊（カトイコイ・ヒッペイス）が刻ませたものであり [30]、彼らはプトレマイオス 3 世による善行に報いるために、祭神像（複数形であり、おそらく神格化されたプトレマイオス 3 世夫妻の像であろう）、神殿、そのほかの神域内のもの、さらに列柱館をも寄進したとされる。ヘルモポリスでは、その墓域であるトゥナ・エル・ジェベルで前 4 世紀末に造営された「ペトシリスの墓」の前室を飾る彩色レリーフが示すように [31]、領域部としては早くからギリシア文化が浸透していたが、このアーキトレイヴ碑文は、前 3 世紀の後半には、この都市に同時代のギリシア都市と共通する様式の神殿や列柱館が造営されていたことを、テクストとモニュメントそのものを通じて証言している。ただし、当時のヘルモポリスの具体的な都市景観については、ローマ帝政期に行われた大規模な再開発のために、ほとんど分かっていない [32]。



図 4　ヘルモポリスのギリシア語アーキトレイヴ碑文

29　*I. Herm.* 1; Pfeiffer (2015) Nr. 15. 周藤（2014）216-233.

30　これは、定住騎兵隊が王朝祭祀に関与したことを示す唯一の証拠となっている。Scheuble-Reiter (2012) 288-290.

31　周藤（2014）200-215.

32　ローマ都市としてのヘルモポリスについては、Alston (2002) 238-243 を参照。

ヘルモポリスから出土しているパピルス文書の多くはローマ帝政期のものであり、そこからアルシノイテス州の場合のようにヘレニズム時代の人々の都市概念を窺うことは難しいが、これを補う情報を提供してくれるのが、前 2 世紀の末にヘルモポリスの北約 45km に位置するアコリスに暮らしていた傭兵ケファラスの子ディオニュシオスの家族文書集積である [33]。20 世紀の初めに蒐集されたこのパピルス文書群は、8 点のデモティック文書と 33 点のギリシア語文書からなるが、それらはディオニュシオスの父親ケファラス（本人の表記ではケファロス）の文書 2 点を除き、前 117 年から前 104 年にかけてディオニュシオスが行った経済活動（小麦などの賃貸借の契約）を記録している。この時代にしばしば見られるように、ディオニュシオス本人とその家族はギリシア語名とエジプト語名を併用しているが [34]、これは彼とその妻が属していた家系が、ギリシアから渡来した傭兵の子孫が現地の女性と通婚を重ねることによって形成されたものであることを示している。

そのディオニュシオスが暮らしていた集落の名称は、ギリシア語文書では以下の 9 通りで表記されている（括弧内は省略されている語を示す）。

（1）ヘルモポリテス州にあるモキテス地区のアコリスの（村）とも呼ばれるクロコディロン・ポリス [35]
（2）ヘルモポリテス州のモキテス地区のアコリスの（村）とも呼ばれるテーニス村 [36]
（3）ヘルモポリテス州のモキテス地区のアコリスの（村）とも呼ばれるテーニス（村）[37]
（4）ヘルモポリテス州のモキテス（地区）のアコリスの（村）とも呼ばれるテーニス村 [38]
（5）ヘルモポリテス（州）のアコリスの（村）とも呼ばれるテーニス村 [39]
（6）ヘルモポリテス（州）のアコリスの（村）とも呼ばれるテーニス（村）[40]
（7）モキテス（地区）のアコリスの（村）とも呼ばれるテーニス村 [41]
（8）モキテス（地区）のテーニス村 [42]
（9）アコリスの（村）[43]

33 周藤（2014）176-197. 以下、現在アコリスの名で知られている遺跡のある場所のことをアコリスと呼ぶ。

34 プトレマイオス朝エジプトの二重名については、Coussement (2016) を参照。同書のカタログではディオニュシオスには 86 番という整理番号が与えられている。

35 P. Dion 17, 14-15; P. Dion 20. 9-10. ただし、クロコディロン・ポリスという読みは補いであり、パピルスでは Kro までしか読むことができない。ただし、これ以外の読みが考えにくいことも確かである。

36 P. Dion 19, 9-10

37 P. Dion 15, 12-13; P. Dion 16, 13-14.

38 P. Dion 18, 4-5; 39-40

39 P. Dion 21, 13; 37-38; P. Dion 22, 11-12.

40 P. Dion 14, 14-15.

41 P. Dion 11, 3-4; P. Dion 12, 6; P. Dion 17, 41.

42 P. Dion 12, 2; P. Dion 13. 37-38; P. Dion 14, 39; P. Dion 18, 36; P. Dion 19, 35; P. Dion 21, 36; P. Dion 22, 32-33; P. Dion 32, 21; P. Dion 34, 17.

43 P. Dion 16, 50.

この一覧からも明らかなように、(1) の 2 例でのみこの集落は都市と呼ばれ、その他のすべての事例においては「ヘルモポリテス州のモキテス地区のアコリスの（村）とも呼ばれるテーニス村」という表現が「州」、「地区」、「村」の語を様々に省略する形で用いられている。(1) の 2 例で、いずれも「州」と「地区」の語が省略されていないことは、むしろこちらが公式名称であった可能性を示唆しているが、それ以外の例ではアコリスはあくまで「テーニス村」であり、州都ヘルモポリスとの関係から見ても、これが行政的に村であったことは確かである [44]。しかし、校訂者も認めているように、なぜこの村にクロコディロン・ポリスなる別名が存在したのか、その理由は定かでない。もちろん、アコリスでは鰐の神ソベク（スーコス）がとくに崇拝されていたので、この集落がそれにちなむ名で呼ばれていたとしても不自然ではないが、なぜその際に限って「村」ではなく「都市」の語が採用されたのだろうか。もちろん、この問いに対して確答を与えることは困難であるが、この経緯に関して「人間とともに神が住む居住地」はデミではなくニウトであるという在地のエジプト人たちの観念が影響した可能性は、一考に値するであろう。

ディオニュシオスの家族文書集積の中核部分を占めているのは、上述したように小麦の賃貸借に関する契約文書であるが、興味深いことに、そこには決められた日に借りていた分の小麦を利子分とともに返却する場所として「アコリスの港（ホルモス）」が繰り返し言及されている。規定量の小麦の返済の場として港が指定されていることは、その小麦がさらに港から船によって積み出され、別な場所に運ばれていたことを示唆しており、上述した集落の発展と港との関係に照らしても興味深い。

また、ディオニュシオスの家族文書集積からは、アコリスと関係のあったさまざまな集落についても情報を得ることができる。もちろん、もっとも重要な集落は「テーバイスのヘルムウ・ポリス」、すなわち州都のヘルモポリスであり、そこには公証人に相当するアゴラノモスなどの重要な役人が駐在していたので、そのもとで契約書の登記を行うことができた。アコリスとヘルモポリスとの間には、キルカやアイトノスなどの村も点在しており、おそらくアコリスからあまり遠くないところには、クレオパトラと呼ばれるクレールーキア、すなわち土地を与えられて定住している兵士たち（クレールーコイ）の居住地（村）も存在した。クレオパトラという名称は、これがプトレマイオス 6 世の時代になってから創設された比較的新しい軍事入植による集落だったことを示している [45]。

この点に関連して興味深いのは、ディオニュシオスの契約文書で小麦などを貸し付けた債権者あるいは契約文書 (6 証人文書) の証人として名を連ねている人々のほぼすべてが、軍の関係者であるという事実である。まず証人 28 名について見ると、「ペルシア人」あるいは「マケドニア人」

44　テーニスという名称は「額のようにそびえ立つ岩」を意味するエジプト語の *dhnt* に由来しており、アコリス遺跡のある現代の村の名称テヘネも、この古代名を引き継いでいる。Drew-Bear (1979) 291-296.

45　クレオパトラは、後 5 世紀の初めまでこの地域の重要な経済的・軍事的拠点として存続し続けた。Drew-Bear (1979) 141-143.

という擬制的エスニックを伴うクレオパトラの定住兵士が 10 名でもっとも多く[46]、定住騎兵（カトイコイ・ヒッペイス）の 7 名がこれに続いている。債権者 12 名についても、2 名がクレオパトラの定住兵士、2 名が定住騎兵、少なくとも 2 名がアコリスに駐屯している百人隊長（ヘカトンタルコス）となっており、これらの軍の関係者がアコリスを部隊とするディオニュシオスの経済活動と深く関わっていたことを示している。もちろん、ディオニュシオスの経済活動は、この時期にアコリスで行われていた人々の活動の全体から見れば氷山の一角であるが、それでもこのような史料的知見は、集落としてのアコリスの景観について考察する上でも参考となるものであろう。

5. 前 2 世紀末のアコリスにおける集落景観の発展

本節では、これまでアコリス遺跡で行われてきた現地調査の成果にもとづいて、ディオニュシオスの家族文書集積の年代に相当する前 2 世紀末段階におけるアコリスの集落景観について考察する（図 5）。

アコリスでは都市壁の存在から末期王朝時代にすでに都市化が進んでいたことが明らかになっているが、アコリス周辺の岩石砂漠上でも、遅くとも前 3 世紀の中頃までに石灰岩の組織的な採掘が始まっていた[47]。とりわけアコリス南採石場に残されている未完の巨像ブロック、及び採石のための横穴ギャラリー天井部に朱筆で書かれたギリシア語とデモティックを併記するグラフィティは、この採石場がプトレマイオス 3 世の治世に操業していたことの有力な証拠となっている。アコリスの南約 12km の地点に位置する同時代のニュー・メニア古代採石場のデータからは、採石場の労働者には農閑期にだけ作業に従事する人々が多く含まれていたことが推測されているため、アコリスにおいても、前 3 世紀の中頃までには、現代と同様、採石業がこの集落の住民にとって重要な生業の一つとなっていたと考えられる。

当時、アコリス南採石場から切り出された大型石材は、東のワディに向かって下ろされ、集落域の北端まで運ばれた後に、そこで搬出のために整形されていた。この石材加工場での作業は、やがて何らかの理由により中止されたが、そこに放置されていた石材は、前 1 世紀の初め頃までに近隣の火災で出た焼土によって埋められることになった。この焼土層からロドス産をはじめとする前 2 世紀の地中海系のアンフォラの破片が膨大に出土していることは、アレクサンドリア経由でもたらされたそれらの物資が石材加工場の近くで船から陸揚げされ、代わりに整形された大型石材が下流に向かう船に搭載されていたことを示唆している。現在では、この地点はナイルから 2㎞ほど隔たっているが、かつては増水期の川の水がこの地点にまで達していたはずである。

テーベ管区のエジプト人が独自のファラオを推戴してプトレマイオス朝に反旗を翻していた南部大反乱中の前 190 年代中頃、集落域から岩山を挟んで南西に位置する崖面に、ヘルゲウスの子ハコリス（アコリス）がプトレマイオス 5 世のためにイシス・モキアス女神の神殿を奉納することをギリシア語で告げる巨大な磨崖碑文が刻まれた。こ

46 擬制的（あるいは法的）エスニックをめぐる研究動向については、Coussement (2016) 139-207 に詳しい。
47 周藤（2014）146-167.

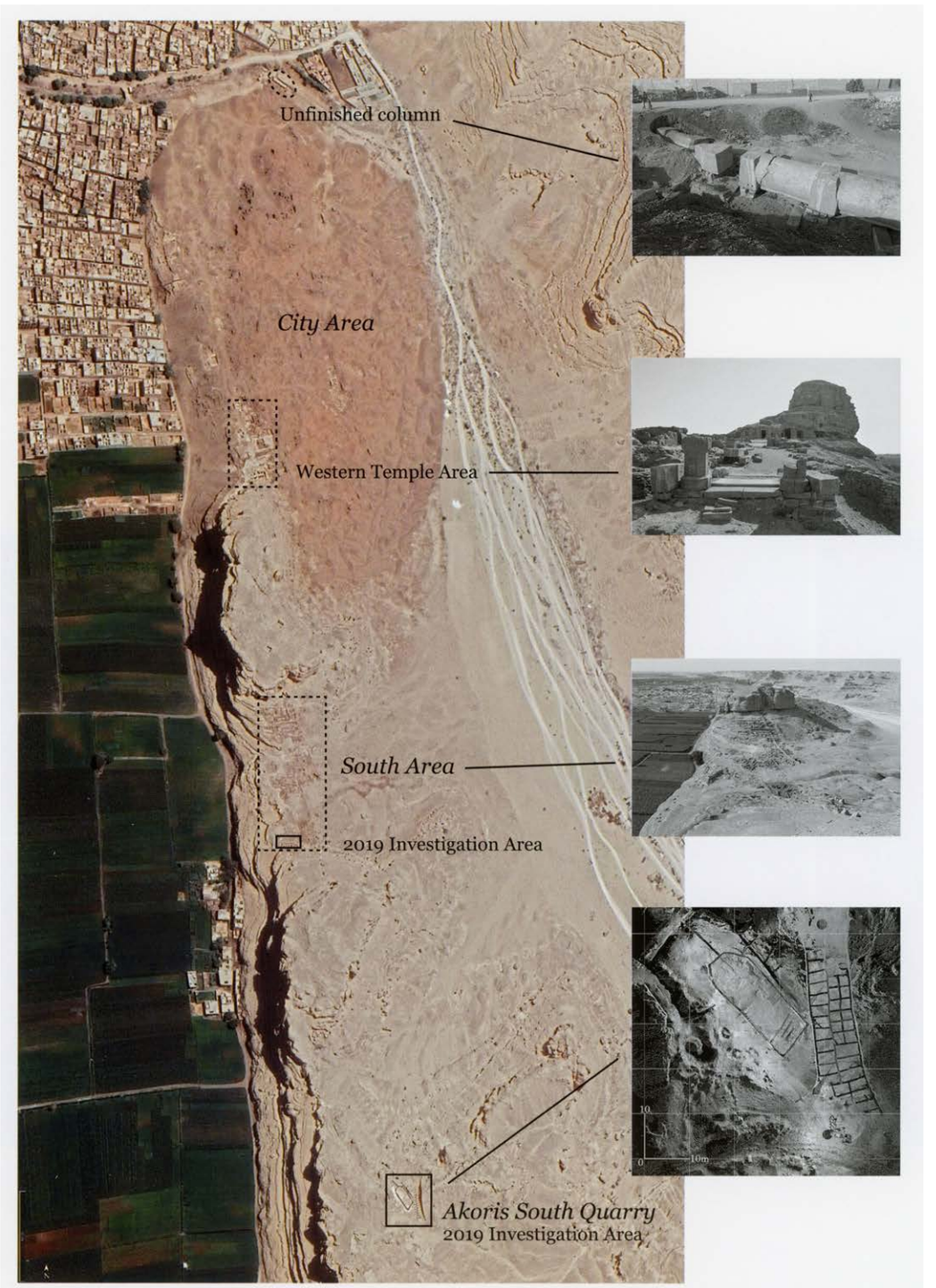


図 5　アコリス遺跡の全体図（Preliminary Report Akoris 2019, Fig. 20）

れは、この地の有力者であったエジプト人のハコリスが反乱軍ではなくプトレマイオス朝の側に与することをアピールするものだったが、それはやがてこの村が上述したように「アコリスの（村）」と呼ばれる契機ともなった。というのも、南部大反乱の終結後、南部ではテーベの南約 30㎞に位置するパテュリスとその近隣のクロコディロン・ポリスにプトレマイオス朝の軍事拠点が設置されたが[48]、中エジプトでこれに対応する軍事拠点が置かれたのがアコリスだったからである。

前 2 世紀後半になると、上エジプトでは「傭兵（ミストフォロイ）」と呼ばれる在地で徴集された兵士がプトレマイオス朝の軍の中核を占めるようになるが[49]、早くからギリシア人の入植が進んでいた中エジプトで「傭兵」となったのが、ケファラスのディオニュシオスのようなギリシア人傭兵と在地のエジプト人女性との通婚によって生まれた子たちがさらに互いに通婚を重ねることで形成された社会集団、すなわち「エジプト生まれのギリシア人」だった[50]。こうして、それまでの採石業の拠点に加えて「傭兵」たちの要塞となることで、アコリスは新たな発展の時期を迎えた。アコリスでは、都市域北端部だけではなく、ワディに近い都市域の東側でもプトレマイオス朝期の土器片が集中する区域が確認されているが、これらは従来の集落域の周縁部で彼らが生活していたことを示すものかもしれない。

ローマ帝政期のアコリスでは、集落域の中心にサラピス神を祀る聖域（中央神殿）が創設され、この神殿とナイルの沖積平野に近い西方神殿とのそれぞれから北に延びる 2 本の参道を軸線として、さらに都市化が進むことになる。このような 2 本の軸線（とりわけ東側の中央神殿から北に延びる線）の起源がヘレニズム時代にさかのぼるものであるか否かは現段階では不明であるが、前 2 世紀の石材加工場がまさにこの軸線上に位置していることは、その可能性を示唆するものとも考えられる。

おわりに

以上の分析からは、ヘレニズム時代のエジプトにおける都市の概念とその景観について、以下のような見通しを示すことができる。

エジプトの領域部に点在する集落は伝統的にデミと呼ばれていたが、そのなかでも特に拠点的な神殿を中心に発展した都市は「人間とともに神が住む」ニウトと観念されていた。末期王朝時代にエジプトに到来したギリシア人たちは、当初これらをひとしなみにポリスと呼んでいたが、プトレマイオス朝の統治下ではニウトのみが公式にポリスとみなされ、その他のデミはマケドニアや小アジアのギリシア都市で集落を指すのに用いられていたコーメーの語で呼ばれることになった[51]。こうして、プトレマイオス朝がアレクサンドリア（とプトレマイス）から支配するエジプトの領域部は、観念的には「都市と村」によって構成されるようになったのである。ニウトの多くは一般的なデミよりも規模が大きく、またしばしば宗教的な儀礼

48 Vandorpe and Waebens (2009) 18.

49 Vandorpe (2014) 117-133.

50 Fischer-Bovet (2014) 188-191.

51 なぜ、ギリシアの核地域でより一般的なポリスの下位概念であるデーモスが採用されなかったのは興味深い論点であるが、ここでは立ち入らない。

を通じて神官団による自律的な統治が行われていたことも、それらがポリスとみなされた一つの理由であったのかもしれない。一方で、前 3 世紀段階ではギリシア世界からの移民や傭兵のエジプトへの流入が続いており、彼らの多くは依然としてポリスの語をギリシア世界における一般的な都市の概念として用いていた。さらに、ギリシア人の割合が相対的に高かったアルシノイテス州において、フィラデルフィアのような村がしばしば特殊なニュアンスを込めてギリシア人から都市と呼ばれていたことは、上述した通りである。このようなギリシア的な都市概念がエジプト領域部でいつまで存続し続けたのかは明らかでないが、ディオニュシオスの家族文書集積においてアコリスがクロコディロン・ポリスと呼ばれている例からは、ある集落が特定の神への崇拝との関係で名指される場合にはこれをニウトとみなす（ギリシア語ではポリスの語を用いる）慣習が、前 2 世紀の末にいたっても依然として残っていた状況を想定してもよいかもしれない。

他方、都市景観については、ポリスと呼ばれた州都のなかには、ヘルモポリスのようにギリシア人の騎兵隊が定住し実際にギリシア的な神殿や列柱館が建造されたところも存在した。村のレヴェルでも、フィラデルフィアのようにポリス的な都市計画で新たに創設された集落もあったが、多くの集落では、在地の中心的な神殿とその参道がプランを規定する伝統的な景観が保持された模様である。アコリスについては上述したとおりであるが、アルシノイテス州においてさえ、テプテュニスやソクノパイウ・ネソスからは神殿と参道を軸として構成される景観が維持され続けていたことが報告されている[52]。ローマ帝政期の場合とは対照的に、ヘレニズム時代のエジプトの都市景観については依然として不明な点が少なくないが、本計画研究では、パピルス文書の情報の分析と考古学的な知見の蓄積を通じて、さらにこの時代の都市と社会についての理解を深めていく予定である。

参考文献

Alston, R. (2002) *The City in Roman and Byzantine Egypt*, London.

Alston, R. and Alston. R.D. (1997) “Urbanism and the Urban Community in Roman Egypt,” *JEA* 83, 199-216.

Bagnall, R. S. and D. W. Rathbone (2004) *Egypt from the Alexander and the Copts: An Archaeological and Historical Guide*. London.

Bingen, J. (1975) “Le milieu urbain dans la chôra égyptienne à l’époque ptolémaïque,” *Proceedings of the XIV International Congress of Papyrologists*, London 1975, 367-73 (Bingen, 2007, 114-131)

Bingen, J. (2007) *Hellenistic Egypt: Monarchy, Society, Economy, Culture*. Edinburgh.

Boswinkel, E. and P. W. Pestman (1982) *Les archives privées de Dionysios, fils de Kephalas*. Leiden.

Braunert, H. (1964) *Die Binnenwanderung: Studien zur Sozialgeshichte* Ägyptens *in der Ptolemäer- und Kaiserzeit*. Bonn.

Buzi, P. and E. Giorgi (2020) *The Urban Landscape of Bakchias: A Town of the Fayyūm from the Ptolemaic – Roman Period to Late Antiquity*. Oxford.

Clarysse, W. (2008) “Graeco-Roman Oxyrhyncha, a Village in the Arsinoite nome,” S. Rippert and M.

52　テプテュニスについては Hadji-Minaglou (2015)、ソクノパイウ・ネソスについては Davoli (2008) を参照。

Shentuleit (ed.) *Graeco-Roman Fayum, Texts and Archaeology*, Wiesbaden, 55-73.

Clarysse, W. (2016) "Village Names in Greco-Roman Egypt and in the Fayum", S. Dhennin and C. Somaglino (ed.) *Décrire, imaginer, construire l'espace: Toponymie egyptiennne de l'Antiquité au Moyen Âge*, RAPH 39, 155-166.

Clarysse, W. and K. Vandorpe (1995) *Zenon, un home d'affaires grec à l'ombre des pyramides*. Leuven.

Clarysse, W. and D. Thompson (2006) *Counting the People in Hellenistic Egypt*, vols. 1 & 2. Cambridge.

Cohen, G. M. (1983) Colonization and Population Transfer in the Hellenistic World, E. Van' T Dack et al. (eds.) *Egypt and the Hellenistic World, Proceedings of the International Colloquium Leuven 24-26 May 1982*, Studia Hellenistica 27, 63-74.

Coussement, S. (2016) *'Because I am Greek' Polyonymy as an Expression of Ethnicity in Ptolemaic Egypt*. Studia Hellenistica 55. Leuven.

Daniel, R. W. (1986) "Two Rare Words," *ZPE* 66, 59-60.

Davoli, P. (2008) "Nuovi risultati dale Campagne di Scavo 2004 – 2006 a Soknopaiou Nesos (Egitto)," S. Rippert and M. Shentuleit (ed.) *Graeco-Roman Fayum, Texts and Archaeology*, Wiesbaden, 75-92.

Drew-Bear, M. (1979) *Le Nome Hermopolite: Toponymes et Sites*. Ann Arbor.

Fischer-Bovet, Ch. (2014) *Army and Society in Ptolemaic Egypt*. Cambridge.

Grenfell, B. P. and J. P. Mahaffy (1896) *Revenue Laws of Ptolemy Philadelphus*. Oxford.

Hadji-Minaglou, G. (2015) "Le développement urbain de Tebtynis à l'epoque gréco-romaine d'après les fouilles récentes," N. Quenouille (ed.) *Von der Pharaonenzeit bis zur Spätantike: Kulturelle Vielfalt im Fayum*. Wiesbaden, 39-54.

Hansen, M. H. (1995) "*KOME*: A Study in How the Greeks Designated and Classified Settlements Which Were Not Polis," M. H. Hansen and K. Raaflaub (eds.) *Studies in the Ancient Greek Polis*, Historia Einzelschriften 95, 45-81.

Hansen, M. H. (1996) "Pollachos polis legetai (Arist. Pol. 1276a 23): The Copenhagen Inventory of Poleis and Lex Hafniensis de Civitate," *CPCActs* 3, 7-72.

Hansen, M. H. (2003) "95 Theses about the Greek Polis in the Archaic and Classical Periods: A Report on the Results Obtained by the Copenhagen Polis Centre in the Period 1993-2003," *Historia* 52, 257-282.

Jouguet, P. (1897) "Documents ptolémaïques, Ptolémaïs et sa constitution," *BCH* 21, 184-208.

Jones, A. H. M. (1937) *The Cities of the Eastern Roman Provinces*. Oxford.

Kessler, D. (1981) *Historische Topographie der Region zwischen Mallawi and Samalut*. Wiesbaden.

Marouard, G. ""Completamente distrutte" Réévaluation archéologique de Philadelphie du Fayoum, Égypte," in R. K Ritner (ed.) *Essays for the Library of Seshat: Studies Presented to Janet H. Johnson on the Occasion of her 70th Birthday*, Chicago, 121-153.

Maehler, H. (1983) "Die griechische Schule im ptolemaïschen Ägypten," E. Van' T Dack etal. (eds.) *Egypt and the Hellenistic World, Proceedings of the International Colloquium Leuven 24-26 May 1982*, Studia Hellenistica 27, 191-203.

Mueller, K. (2006) *Settlements of the Ptolemies: City Foundations and New Settlement in the Hellenistic World*, Studia Hellenistica 43, Leuven.

Pestman, P. W. (eds.) (1981) *A Guide to the Zenon Archive* (P. L. Bat. 21). Leiden.

Pfeiffer, S. (2015) *Griechische und lateinische Inschriften zum Ptolemäerreich und zur römischen Provinz Aegyptus*. Münster.

Rathbone, D. W. (1990) "Village, Land and Population in Graeco-Roman Egypt," *PCPS* 36, 103-142.

Rostovtzeff, M. (1922) *A Large Estate in Egypt in the Third Century B.C.: A Study in Economic History*.

Madison.

Rowlandson, J. (2003) “Town and Country in Ptolemaic Egypt,” in A. Erskine (ed.) A *Companion to the Hellenistic World*, Oxford, 249-263.

Rowlandson, J. (eds.) (1998) *Woman and Society in Greek and Roman Egypt*. Cambridge.

Scheuble-Reiter, S. (2012) *Die Katökenreiter im ptolemäischen Ägypten*. München.

Skeat, T.C. (1974) *Greek Papyri in the British Museum (Now in the British Library) Vol. VII, The Zenon Archive.* London.

Thompson, D. J. (2012) *Memphis under the Ptolemies*, sec. ed. Princeton.

Vandorpe, K. (2008) “Persian Soldiers and Persians of the Epigone. Social Mobility of Soldiers-herdsmen in Upper Egypt”, *Archiv für Papyrusforschung* 54, 87-108.

Vandorpe, K. (2014) “The Ptolemaic Army in Upper Egypt (2^{nd} – 1^{st} Centuries BC),” in A.-E. Veïss and S. Wackenier (eds.) *L’armée en Égypte aux époques perse, ptolémaïque et romaine*, Haues Études du monde Gréco-Romain 51. Genéve: Droz, 105-135.

Vandorpe, K. and S. Waebens (2009) *Reconstructing Pathyris’ Archives: A Multicultural Community in Hellenistic Egypt.* Brussel.

Viereck, P. (1928) *Philadelpheia: Die Gründung einer hellenistischen Milituarkolonie in* Ägypten. Leipzig.

Westermann, W. L. and E. S. Hasenoehrl (1934) *Zenon Papyri: Business Papers of the Third Century B.C. Dealing with Palestine and Egypt.* New York.

内田杉彦（2019）「新王国時代の文字資料にみられる「居住地」の呼称について」山田重郎編『科研費新学術研究「都市文明の本質」研究成果報告 2019 年度』145-150.

川西宏幸（1996）「エジプトにおける都市文明の誕生」『講座文明と環境 4　都市と文明』朝倉書店、42-62.

小谷野晃（1998）『古代エジプト　都市文明の誕生』古今書院

周藤芳幸（2014）『ナイル世界のヘレニズム　エジプトとギリシアの遭遇』名古屋大学出版会

周藤芳幸（2010）「ロドス島ヴルリア遺跡と前古典期の東地中海世界」桜井万里子・師尾晶子（編）『古代地中海世界のダイナミズム　空間・ネットワーク・文化の交錯』山川出版社、14-31.

周藤芳幸（2019）「エジプト地方都市の通時的盛衰　―アコリスの場合―」山田重郎編『科研費新学術研究「都市文明の本質」研究成果報告 2019 年度』151-156.

辻村純代（1996）「アコリスの都市生活」『講座文明と環境 4　都市と文明』朝倉書店、173-189.

Interim Report on the Recovery of City/Village Landscape at the Hinterland Waterfront of Alexandria

So Hasegawa
Visiting Professor, Waseda University,
Higashinippon International University

Introduction

This is an interim report of the newly established study on the recovery of site landscape[1], based on a series of survey results by the Japanese mission at the hinterland waterfront of Alexandria[2] (Fig.1). The area has previously been overlooked in the history of classical archaeology because it has been viewed as a low-production wetland, made swampy by the annual inundation. The ancient Canopic branch connecting the Rashid tributary with the Mediterranean Sea ran west of Lake Idku (Fig.2), and no attention was paid to the role of this area, which was always described as a "transitional point" of circulation[3].

In fact, this coastal area was covered by the advancing sea during the 6,000–5,000 BC period[4], and it became a difficult place to perform basin irrigation because of the high salt content[5] (Fig.3-1).

1 As a membership study in the "A02: Landscape and Structure of Ancient West Asian Cities" (Principal Researcher/ Prof. Jiro Kondo, Waseda University) / MEXT Grant-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas (research in a proposed research area) 2018-2022, "The Essence of Urban Civilization: An Interdisciplinary Study of the Origin and Transformation of Ancient West Asian Cities" (Supervisor/ Prof. Shigeo Yamada, Tsukuba University).

2 The project entitled "Archaeological research of Kom al-Diba', West Delta, Egypt" by So Hasegawa (National Grant-in-Aid (B) by JSPS, 2017–2021) is an ongoing project. It has been preceded by several other studies by the same representative, including "Study of the intermittent historical layers from the development of the <barren lagoon area>: In the case of Lake Idku, Egypt" (Grant-in-Aid by Sumitomo Foundation, 2015–2016) and "Historical and environmental approach to the lagoon of West Delta, Egypt, using satellite and geological data" (National Grant-in-Aid (A) by JSPS, 2011–2014). In this paper, a great part of the work is owed to Prof. Shin-ichi Nishimoto (Nippon Institute of Technology), including the drawing of the reconstructed images.

3 This tendency is especially based on the historical topic of the trade network between Naucratis and Canopus, including Thonis (east of Canopus) and Heracleion.

4 Lake Idku appears to have been formed approximately 7,500 years ago (Stanley et al. 1993: 630–634). Since then, the balance of the sea level and the discharge of the Nile River have caused changes in the sediment distribution (Flaux et al. 2013: 22–23).

5 Until the end of the 19th century, the irrigation system lay at the line between Bilbais and Dilingat (Richard 1982: 10–11). Then, although land reclamation was promoted, the Lake Idku area remained a white, vacant place (Tousson 1934: Map).

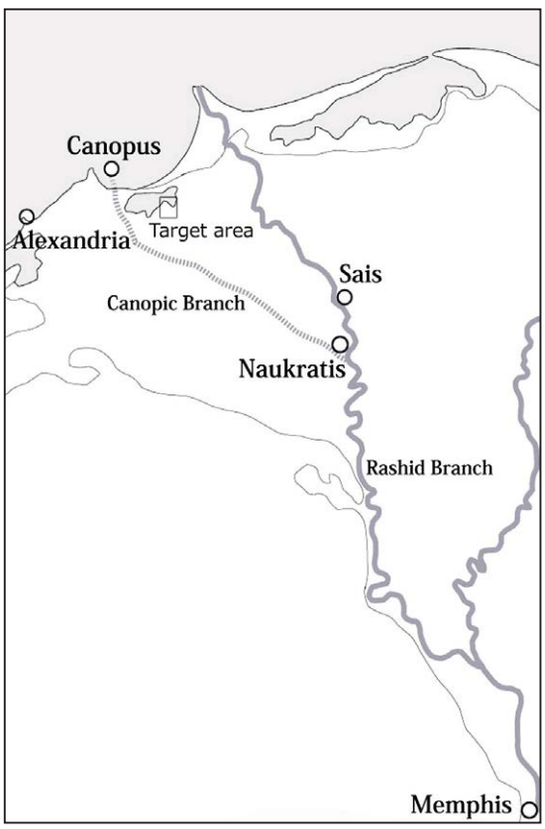


Fig. 1 Location of the target area area at the hinterland of Alexandria

On the other hand, on the old topographical map (Mahmud Bay 1872: Map), many archaeological sites dating back to the late period were depicted around the lake area[6]. According to a geographical observation, the N–S axis, including the sea, coastal sand dunes, brackish lakeside, inland sand dunes, freshwater lakeside, and green belt, is considered to have been the background of economic activity, while a flat section along the E–W axis may have helped the distribution of the same life style (Fig.3-2). Thus, daily economic life might have been based on a "composite livelihood" model, dependent on part-time farming, fishing, hunting (mostly of birds), production (of pottery, glassware, and braided works made of reeds and palms), and transportation by boat[7] (Fig.3-3). Then, the archaeological sites of Kom al-Diba' in the target area were chosen as an area of focus, and excavations were planned to reveal the ancient lifestyle. After carrying out a geophysical survey, it was surmised that the site was a village chronologically located in the Hellenistic period (Hasegawa 2017: 59–61).

1. Site landscape

The archaeological site of Kom al-Diba' is located in the target area and registered by the government in the lakeside area. Although an English expedition performed a simple survey in 2010 (Wilson et al. 2012: 99–101), the site has remained essentially untouched. There is a north hill and a south hill; the top of the south hill is 10 m higher than the foothill, with a rough occupancy of about 6 ha. Careful observation of the strata section led us to understand the sites were formed on the sand dune, although the surface of the south

6 The English mission surveyed most of the site area of the map by Mahmud Bay and provided rough chronological dating (Wilson 2010: 119–124, Figure 9.1, Table 9.1).

7 Manning mentions a pharaonic concept of Nile cultivation in "the land of Horus of Edfu" in which "the island land" is imagined as a place lying closer to the Nile, lower on the flood plain, and irrigated by the flooding of the Nile, against a higher-lying land and a central courtyard irrigated by artificial means (Manning 1999: 97), which indicates a different image, when compared with the case of our target area in West Delta.

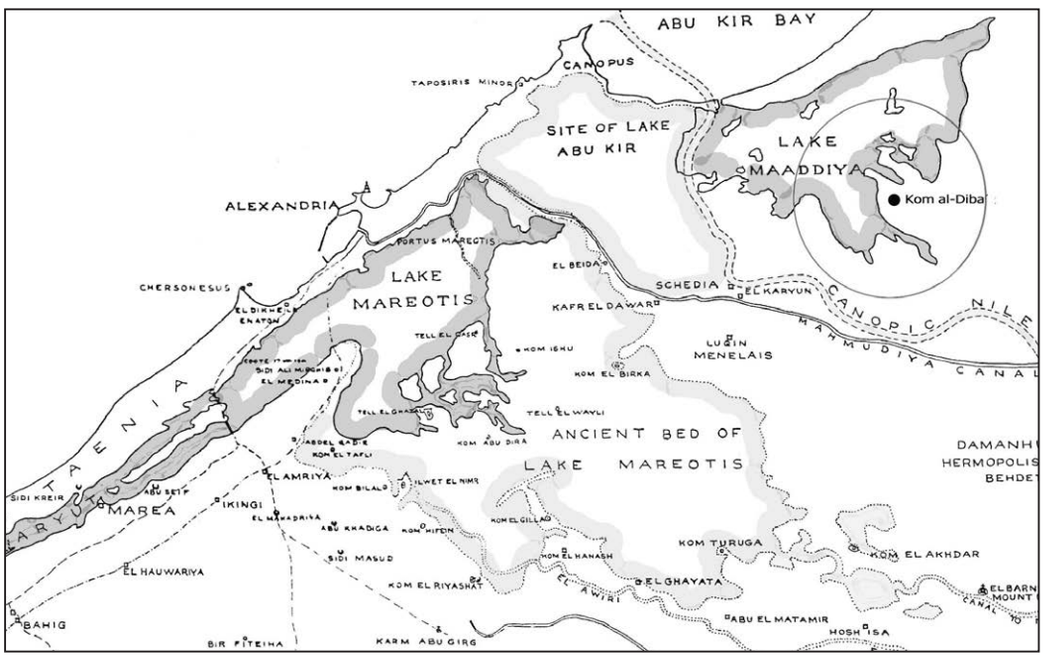


Fig. 2 Map of the hinterland waterfront of Alexandria

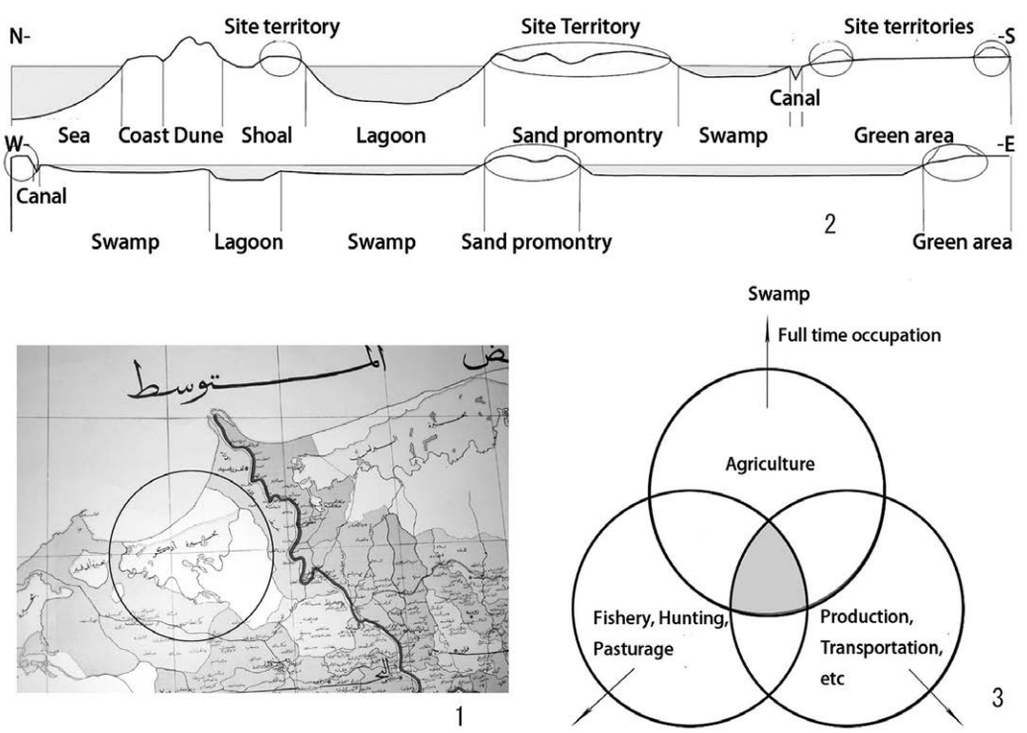


Fig. 3 1. Geographical section; 2. Irrigation map (1930s); 3. Model of the life style



Fig. 4 Snap of geophysical research

hill was covered by thick silt.

A series of geophysical studies using mechanical equipment were carried out (Fig.4). During this process, a conspicuous reflection was obtained by the magnetic survey (Grad 601, 60 HZ) on the south hill. As some reflections were recognizable on the surface, the image appeared to show that a lower part of mud brick remained, consistent with a settlement, including houses, storage facilities, animal pens, streets, and squares. A dense distribution of remains was seen at the south and west of the south hill, with a shallow east–west axis, although the southern part had a different steep east–west axis. Careful architectural observation revealed a 144 cm thick wall built of mud bricks, measuring 36 cm in length and 19 cm in width, at the middle of the hill; and, at the top of the hill, the base of a wall of a naos, with a width of 660 cm, and a 76 cm thick wall built of bricks, measuring 38 cm in length and 20 cm

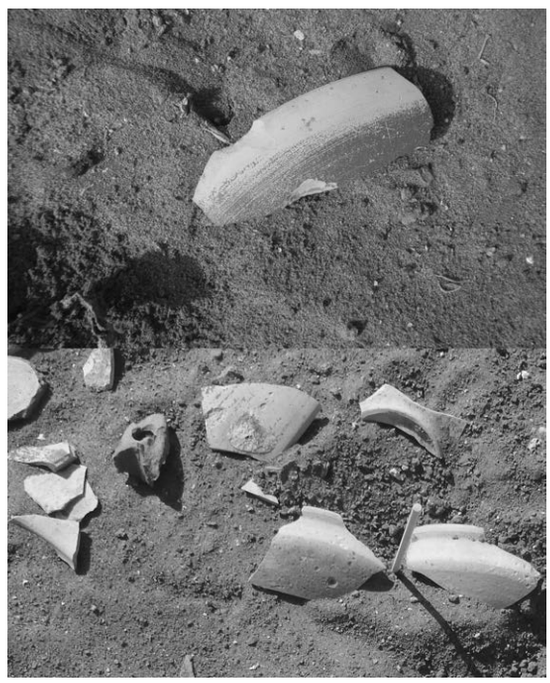


Fig. 5 Eastern Sigillata A wares

in width. Both sets of remains may be part of the same temple construction. The naos was composed of a single chamber, and its entrance was oriented southward, with rather heavy walls—of two-brick thickness—for its small size. The construction date was uncertain, although the Ptolemaic period was a reasonable deduction considering the size of the bricks, which were quite different from the smaller ones (ca. 24 cm long) from the Roman period (Phase I). The relics collected from the surface of this area were chronologically dated as being from the first to the third century AD, or even somewhat earlier, as indicated by an assemblage of Eastern Sigillata A wares[8] (Fig.5) and silt wares, including

8 Eastern Sigillata A wares, produced in Asia Minor–Palestine and imported to Egypt via the Mediterranean–Indian Ocean sea trade in the early Roman period, indicate the active period at the site. According to the results of the analysis of excavations at Alexandria by the French mission (CE Alex), it accounted for the largest share of all Sigillata wares in the Mediterranean area (63%; Ėlaigne 1998: 75–114), with only a few examples reported from Schedia (Martin 2008: 14).

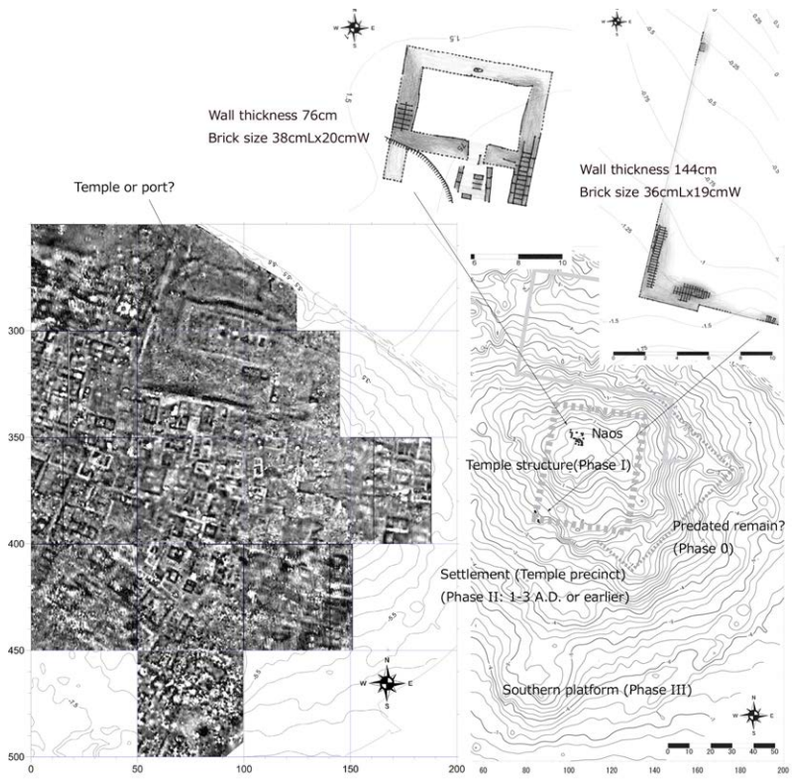


Fig. 6 Detected plan of the south hill of Kom al-Diba'

amphorichus, ungentrium, black polished wares, and a Hellenistic lamp.

From the results of the architectural research, the settlement was considered to be a typical "temple precinct" formed around the naos construction at the higher point of the hill, with its most active phase in the early Roman period (Phase II). It should be noted that ground-penetrating radar detected signs of construction at the southernmost platform, where an extremely sparse distribution of relics and a dense distribution of red brick ware was recognized; these may date from the Byzantine period (fourth to seventh century AD) (Phase III). In addition, several raised mounds were observed in the lower area of the naos construction, located at the east and south of the south hill, where the existence of a "late period" was mentioned by the English expedition (Phase 0)[9]. Henceforth, the south hill is considered to consist of multiple layers dating back to the era from the late period to the Byzantine period, with its active phase centered on the Hellenistic period (Fig. 6). Here, a reconstructed image of Kom al-Diba', where an access routs are open at both

9 Based on the observations and the results of the coring survey, Wilson mentions that the north hill, probably dating to the Ptolemaic and Roman periods, may have been founded on an earlier site of the Late Dynastic period, as may also have occurred at the eastern and southern area of the south hill. The author adds that the north hill settlement has a slightly different character from that of the south hill, which may indicate that the north hill was a cemetery or harbor installation (Wilson 2010: 119–124)

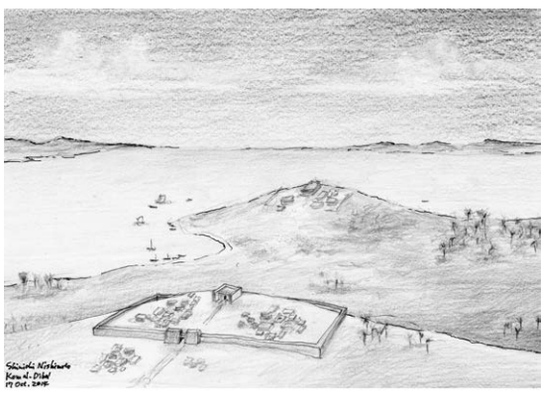


Fig. 7 Reconstructed image of Kom al-Diba' by Prof. S. Nishimoto

southwards and northwords, is tentatively shown (Fig. 7).

2. Sand dune deposits

The central area of the inland sand dune area, within a 1 m contour above the sea level, seems to have the potential to reveal the landscape during the season of inundation, as it shows a similar range to that of Lake Idku, as depicted on the map by Mahmud Bay (1872). When a 1 m contour line is drawn on the 1920–30s' map of Egypt developed by the Department of Measurement, it reveals several large sand dune deposits with a northwest–southeast axis and shows the inner bay of Lake Idku extended further south than the current Ghiṭṭās Bay, reaching almost to the north of Abū Ḥummuṣ[10]. The sand deposits are higher, reaching over 6–10 m, where settlements are considered to have stood. The landscape is recovered where Jazīra Raqm forms an island, Kom Tallūz, Kidwa al-Ghazāl at Deposit 1; 'Izba Zaghaiba, Kom Ḥāsshim 'Izba Shābūn (Mansūr Bahnās) at Deposit 2; Kom al-Diba', Kom 'Azīza, 'Izba Mūsa Banūna at Deposit 3; and 'Izba Mikhāil al-Khairy at Deposit 4 (Fig. 8).

In the lower cultivation areas, floodwater may have penetrated narrow recesses between deposits, and these are viewed as inlets of the inner bay. One of which is Bāb al-Ghazāl, Bāb al-Ṣa'īdy or Bāb Ṣabāḥ al-Khair, which separates the target area from another sand dune deposit, where the well-known old villages of Nakhla Baḥrīya and Bisantwāy are located[11]. Now, the key features are sand deposits located at the southern end of the lake expansion and the coastal sand dunes accumulated in the area between Rashid and Idku, which is considered to have been formed at the period between the late Pleistocene and the early Holocene. A Corona satellite image taken in 1964 shows the sand deposit still existed at this period (Hasegawa 2017: 56, 63) and since then, most of the characteristic sand dunes have been replaced by orchards or fish farms. At the ancient lakeside, only Kom al-Diba', Kom 'Azīza seem to have

10 When considering the lake expansion, Lake Idku shrank to almost one-quarter for 200 years, as was also the case for Lake Mariyut, and the natural environment completely changed. Then, the subject of the research became the reconstruction of the lost landscape around the site.

11 The village names, such as Bisantwāy and Nakhla Baḥrīya, were found in a document from the Mamluke period (Halm 1982: 409, 436) but not around the lakeside area. Archaeologically, there is no positive proof to support the view that it recovered during the Islamic period.

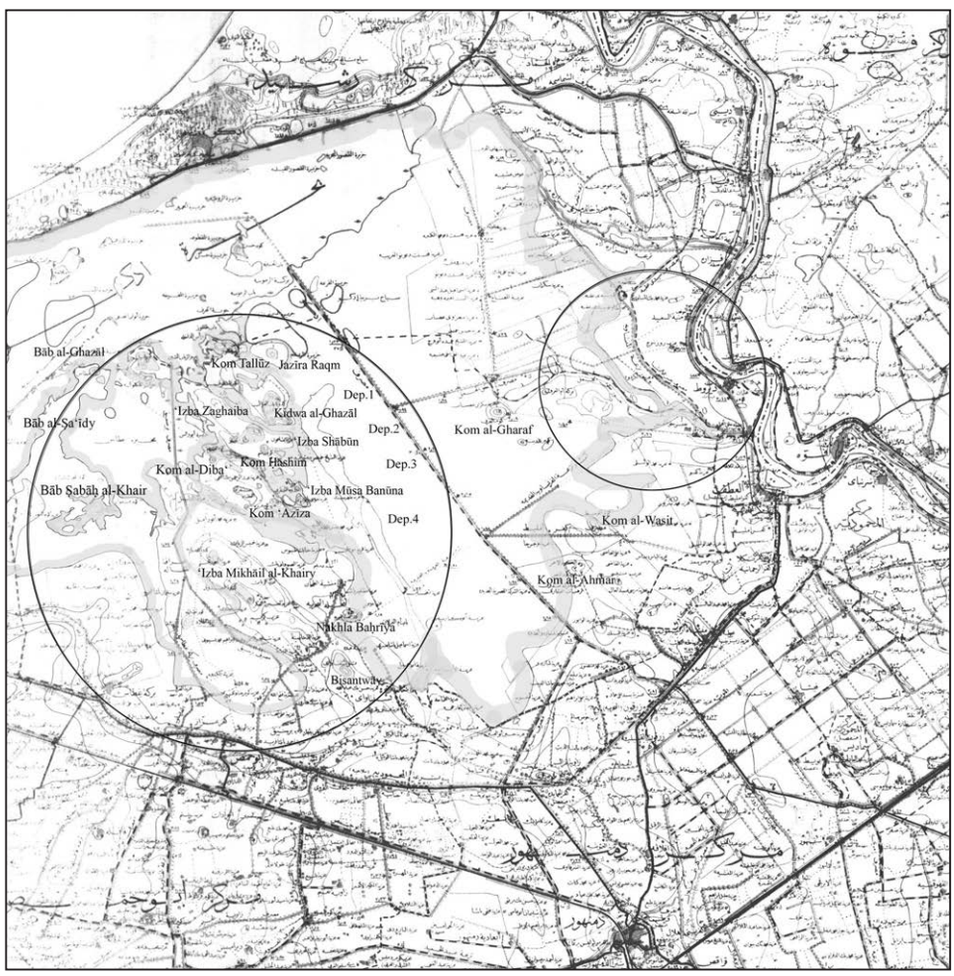


Fig. 8 Area A and Area B at the east of Kom al-Diba'

remained and been registered by the Antiquity Department[12] (Wizāra al-thaqāfa wa wizāra al-ittiṣālāt wa ma 'lūmāt 2002: 99). WorldView-2, with its high resolution, indicates only a small part of this sand dune deposit in the orchard of 'Izba Zaghāiba remains. The surface and plausible traces of the lower part of the vestitude are observed, indicating the ancient use of the higher points of

12 Only two archaeological sites on the south lakeside are registered by the government (Wizā ra al-thaqāfa et al. 2012), among which, Kom 'Azīza was excavated in the 1980s. A Byzantine burial site was revealed (Aḥmad 'Abd al-Fattāḥ 2004; Kenawi 2014: 86-88), while Kom al-Diba' remained untouched (P. Wilson et al. 2012: 109–116; Kenawi 2014: 89–91). Strabo described this area when he sailed to Memphis from Schedia. He found the place called Kabria (η Χαβριου κωμη καλουμενη), probably identified with the current Abū Ḥummuṣ (Ramzy 1994: 240), and reported a series of villages on the right-hand side (the south but not the north of the canal). Strabo seems to have described this area when he sailed from Schedia to Memphis, and the local name of Kabria (η Χαβριου κωμη καλουμενη) is tentatively identified with the current Abū Ḥummuṣ (Ramzy 1994: 240). Strabo reported a series of villages on the right-hand side (the south) but made no remarks on the north side of the canal of that waterfront area (Strab.17.1. 23 c803).



Fig. 9 Reconstructed image at the east of Kom al-Diba' by Prof. S. Nishimoto

the sand dune hills[13]. This suggests the existence of a group of similar village sites at the top of the sand dune deposits, which may have played a leading role in the east area of Kom al-Diba', while only a standard village distribution has been discussed so far in relation to the Nile sediment at the most part of Delta greenbelt (Fig. 9).

3. Marshland

Further east, beyond the sand dune settlements, is a lowland at the large marshland. Based on an analysis of Landsat satellite images, encroachment as a result of dumping landfill and leveling for land reclamation has greatly reduced the size of the lake, from 152 km^2 in 1946 to 114 km^2 in 1984 and only 57 km^2 in 2017 (El-Bastawesy et al. 2017: 49–50), which is roughly in-line with the development process. The irrigation map (1958) indicates that an area of 10,000 feddan (1 feddan = 0.42 ha.) to the east of Maṣraf Idku was promoted as the New Idku development area, while a total area of 28,000 feddan to the west and the north was incorporated into the Zaghlūl and Barsīq development areas[14]. Given these facts, we assume that extensive development of this area was promoted in the 1950s and 1960s[15]. The noteworthy points in the area are the canals or small Nile branches, most of which are distributed in the southeast and out of the target area. Several branches parting from the area between al-Raḥmanīya and Zāwīyat al-Baḥr are reconstructed, as is represented by the Alexandria Canal (Khalīj al-Iskandrīya). The only major line is Naṣitīya Canal, parting from Maḥmūdīya, and it played a significant role as the main canal connecting

13 From a geological perspective, the coastal area is divided into a "coastal dune with palms and other indigenous vegetation" area and the "coastal dune, mostly barchan-type" area. The inland sand dune area is described as the "Hills (kom sands), largely cultivated" area and the green belt as the "irrigated and cultivated" area (Stanley et. al. 2007: 9; Figure 2.4).

14 The irrigation map (Taftīsh 'ām mashru 'āt raī al-wajuh al-baḥrī, 1/250,000, 1958) indicates that an area of 10,000 feddan to the east of Maṣraf Idkū was exploited as the New Idku development area (Miṇṭaqa Idkū al-jadīda), while a total area of 28,000 feddan to the west (and the south) became the Zaghlūl and Barsīq development areas. From this, we assume that the extensive development of the target area was promoted in the 1950–60s.

15 The traces of the lower parts of the walls are observed to follow a dry surface pattern, surrounded by weeds, and measuring approximately 4 m × 6 m square, showing the vestiges of ancient construction (Hasegawa 2017: 56, 63). These were observed by the Ground-Truth survey, and the higher points of the sand dune deposit are thought to be a site territory. The island on the sand dune called Gezīra Ḥassan is located at the north, inside the lagoon and beyond the sand deposits. At the northernmost sand dune deposit, Kom Tallūz was located on the former island called Gezīra Raqm at the east and the mouth of Ghiṭṭās Bay, with two inlets called Kom Ghiṭṭās and Kom Faghnūn at the east.



Fig. 10 Water channels of Area B in *Description*

the Nile and Alexandria in the former half of the 16th century (Kumakura 2017: 75–76). It is also mentioned that the historical records suggest that the region (north area of Naṣirīya Canal) was active in producing summer crops, especially sugarcane, through the use of waterwheels. It seems obvious that the area was irrigated by canals and waterwheels, as short canals are seen in the *Description* (Fig. 10), and summer crops and fruit trees were planted in these areas (*ibid*, 83–85).

This may indicate the flood plain, which can be viewed beyond the sand dune deposit, was divided into barren marshland and fluvial terrace. When considering the background of the area, the ancient site locations should be discussed. Some



Fig. 11 Reconstructed image at the Rashid tributary by Prof. S. Nishimoto

archaeological sites are depicted at the waterfront on the map of Mahmud Bay, and, based on an understanding of the 1 m contour line mentioned above, the tentative recovery of the location of some sites is noteworthy, including Kom al-Wasit (al-Wasiṭ) and Kom al-Ahmar (al-Aḥmar) on the lake's edge at the easternmost end, with the villages of Bisantwāy and Nakhla Baḥrīya, mentioned in the Mameluke document, at the westernmost end (Halm 1982: 409, 436), and Kom al-Gharaf (al-Gharaf), which stood in the water where there must once have been an island[16] (Fig.11).

Beside Naṣirīya Canal, regarding the location of Kom al-Diba', the focal point is the Nile branch running toward the northernmost sand dune village, Kom Tallūz (Fig.12). The radar satellite image captures traces of this early Canopic branch

16 The scale of the sites of Area B, including Kom al-Gharaf (830 m x 755 m, highest point 15 m), Kom al-Wasit (420 m x 420 m, highest point 8 m), and Kom al-Ahmar (730 m x 475 m, highest point 13 m), is generally larger on the Idku lake-side. The sites are identified as an ancient Metris, supposedly a capital of a nome, and are only attested to in historical documents (Kenawi 2014: 99, 100–101, 106, 112–113).



Fig. 12 Water channels by Makhzumy

(Fig.13)[17], which might have brought rich fresh water and might have been the basis of the local economic activity in the target area.

4. Tentative Conclusion

In this short report, the site landscape of Kom al-Diba', located south of Lake Idku, Buhaira, is studied. It is surmised as a typical "temple precinct settlement," formed around the naos at the higher point of the hill, with its most active phase in the Hellenistic period highlighted. In the adjacent east area, the sand dune deposit accumulation is conspicuous, and the higher part used for settlements might have played a leading

17 Tousson's reconstructed image of the branch parting from the Alexandria Channel is based on the text by al-Makhzūmy (1183). The radar satellite image captures this early Canopic branch running from the north of Damanhur toward Kom Tallūz, located at the northernmost sand dune village (Stanley et al. 2006: 503–514; 509, Figure 3). Its mouth connected to the Mediterranean Sea, which was the easternmost mouth of the Canopic branch (Tousson 1926: (1) 213–27, (3) Pl.XV) / Cooper 2015: 275, Figure A1.13 in Appendix 1).

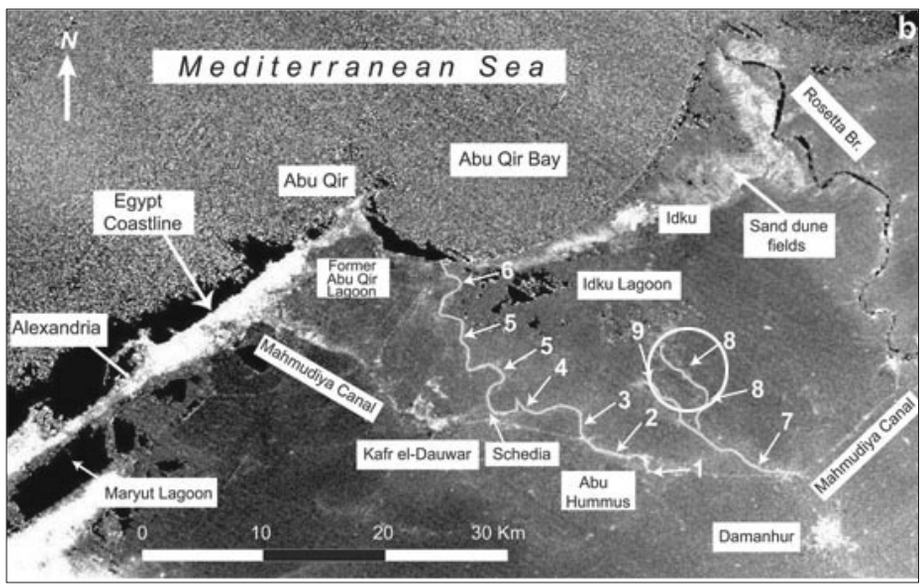


Fig. 13 Water channels on the satellite image by D. Stanley

role in daily activity. In addition, in the area beyond this large sand dune deposit, a lowland of vast marshland expanded, and some city/village sites are reconstructed on the lake edge. Although the views proposed in this paper will be revised with a subsequent series of excavations, this tentative trail encourages a discussion on the distribution and scale of cities/villages at the hinterland waterfront of Alexandria[18]. In the next paper, the study is expected to proceed to the north area of Kom a-Diba', where well-known seaside sand dunes expand at the inland edge between the Mediterranean Sea and Lake Idku.

References

Aḥmad 'Abd al-Fattāḥ 2004: *Taqrīr mabda'ī a 'māl al-tanqīb bi-Kūm 'Azira al-'atharī bi-markaz Abū Ḥummuṣ- al-Buḥaira khilāl al-fitra min 1988/3/4–1988/3/31,* Hawliyāt al-majlis al-a 'lā li-l-āthār 2004, 17-24.

El-Bastawesy, M. et al. 2017: "Adaptation of Anthropogenic Activities to the Landforms and Hydrological Processes in Idku Lake Area, Northwest of the Nile Delta" *Sophia Journal of Asian, African, and Middle Eastern Studies* 35, 41–52.

Cooper J.P. 2015: *The Medieval Nile: Route, Navigation, and Landscape in Islamic Egypt*, Cairo.

de Cosson, A. 1935: *Mareotis*, London.

18 Tentatively, the scale of the site of Kom al-Diba' is considered a village with several hundreds of inhabitants, while a larger scale city/village of Kom al-Gharaf, having several thousands, and another group including Kom al-Wasit or Kom al-Ahmar is located by the Italian missions at the intermediate level at the lakeside. Further, at the green belt, a mega-city of several tens of thousands, Damanhur (present prefectural capital), the center of Horus cult, is located, which formed an economic network at the eastern part of the hinterland of Alexandria. When the total result of the current archaeological research is considered, including the site of Naucratis by the English mission and the site of Schedia by the German mission, with the result of the Japanese mission mentioned in this paper, a new perspective on the practical image of city/village distribution can be positively grasped.

Ėlaigne, S. 1998: “Alexandrie- Étude Préliminaire d’un Contexte Céramique du Haut-Empire,” *Alexandrina* 1, 75–114.

Flaux et al. 2013: “A 7500-year Strontium Isotope Record from the Northwest Nile Delta (Maryut lagoon, Egypt)” *Quaternary Science Reviews* 78, 22–33.

Hairy, H. (ed.) 2009 : *Du Nil à Alexandrie: Histoires d’Eaux*, Paris.

Halm, H. 1982: *Ägypten nach den mamlukischen Lehensregistern, II. Das Delta*, Wiesbaden.

Hasegawa, S. 2017: “Recovering Evidence of Ancient Economic Activity in the Lowlands of the West Delta: A Hellenistic Village Site and Its Surrounding Landscape” *Sophia Journal of Asian, African, and Middle Eastern Studies* 35, 53–66.

Hasegawa, S. and S. Nishimoto 2019: “Lost landscape of the waterfront on the Mediterranean coast of Egypt: East of Lake Idku”, Nakamura, S., T. Adachi, M. Abe (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Western Asian Archaeology in Honor of Sumio Fujii*, Tokyo, 329–336.

Kenawi, M. 2014: *Alexandria’s Hinterland*, England.

Kumakura, W. 2017: “A Resaerch Note for the Topography of Medieval Buhaira” *Sophia Journal of Asian, African, and Middle Eastern Studies* 35, 67–86.

Mahmud Bay 1872: *Mémoire sur l’antique Alexandrie: Ses faubourgs et environs découverts, par les fouilles, sondages, nivellments et autres recherches*, Copenhague.

Manning, J.G. 1999: “The Land-Tenure Regime in Ptolemaic Upper Egypt,” in eds. Bowman A.K. and E. Rogan, *Agriculture in Egypt from Pharaonic to Modern Times, Oxford*, 83–105.

Martin, A. 2008: “Pottery from Schedia near Alexandria (Egypt)” 14, *http://www.schedia.de/schedia_pottery.pdf*.

Ramzy, M. 1994: *al-Qamūs al-jughrāfī: li-l-bilād al-Miṣrīya min ‘uṣūr qudmā’ al-Miṣraini ’ilā sana 1945, al-juz’ al-thānī, mudīriyāt al-Gharbīya wa al-Minūfīya wa al-Buḥaira*, al-Qāhira, 240.

Richard, A. 1982: *Egypt’s Agricultural Development, 1800-1980*, Westview, 10–11.

Stanley, J.-D. et al. 1993: “Nile Delta: Recent Geological Evolution and Human Impact” *Science* 260, 630–634

Stanley, J.-D. et al. 2006: “Short Contribution: Buried Canopic Channel Identified Near Egypt’s Nile Delta Coast With Rader (SRTM) Imagery, *Geoarchaeology: An International Journal* 21-25, 503–514.

Stanley J.D. and A. G. Warne 2007: “Nile Delta Geography at the Time of Herakleion and East Canopus,” in Stanley J.D. et.al. (eds) *Underwater Archaeology in the Canopic Region in Egypt*, Oxford, 5–22.

Tousson O. 1926: *La Géographie de l’Égypte à l’Époque Arabe, Tome 1: La Basse-Égypte*, Le Caire, (1) 213–27, (3) Pl.XV.

Tousson, O. 1934: *Aṭlas tārīkhī: al-asfal al-’arḍ (al-wajh al-baḥrī), al-Qāhira,* 1934.

Universita’ degli Studi di Rome 2009:“MABE: Missione archeologica in basso Égitto: Kom el-Ghoraf ” ‘La Sapienza’ *http://www.komelghoraf.it/home_gen.html*.

Universita’ degli Studi di Siena 2009-2011: Missione archeologica Kom al-Ahmer *http:// www.komahmer.com/ita-ildelta.html*.

Wilson, P. 2010: “Settlement Connections in the Canopic Region”, *Alexandria and the North-Western Delta*, Oxford, 111–126.

Wilson, P. and D. Grigoropoulos 2012: *The West Nile Delta Regional Survey, Beheira and Kafur el-Sheikh Provinces*, London.

Wizāra al-thaqāfa wa wizāra al-ittiṣālāt wa ma ‘lūmāt 2002: *Mashrū‘ niẓām al-ma‘lūmāt al-jughrāfī: aṭlas al-muwāqi‘ al-āthārīya bi-muḥāfiẓa al-Buḥaira 3,* al-Qāhira.

Map references

Fig. 2: de Cosson, *op.cit.*: Map of Mareotis.

Fig. 3-2: Tousson, O. 1934: *Aṭlas tārīkhī: al-aṣfal al-'arḍ,* al-Qāhira, 1934: kharīṭa al-wajh al-baḥrī (1/500,000).

Fig. 5: Damanhur, hayya al-misāḥa al-Miṣrīya, 1926 (1/100,000).

Fig. 10: *Description de l'Ėgypte*, Paris, 1798-1805: Menouf, Tant (1/100,000).

Fig. 12: Cooper *op.cit.*: 275, Fig.A 1.13 in Appendix 1.

Fig. 13: Stanley, J.D. et al. 2006: Fig.3

研究項目 B01「西アジアの環境と資源」

計画研究 04

古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源

肥沃な三日月地帯北縁部に分布する新石器時代〜鉄器時代遺構の堆積物柱の元素濃度

安間 了[1]・西山伸一[2]・三宅 裕[3]・常木 晃[3]・横尾頼子[4]

[1] 徳島大学社会産業理工学研究部 [2] 中部大学人文学部 [3] 筑波大学人文社会系 [4] 同志社大学理工学部

はじめに

本論では、二つの視点から肥沃な三日月地帯北縁部に分布する先土器新石器時代から鉄器時代の遺構の土壌元素濃度の測定を行った。一つ目の視点は都市化に伴う有用金属の集積過程であり、もう一つの視点は塩害をもたらすような地表付近での元素の濃集である。

計画研究 4 では、都市化を資源集積システムの発生としてとらえ、古代都市文明の発達過程を客観的に示す指標として、銀や鉛、銅や錫・亜鉛など希金属・有用金属の人口稠密地帯への集積度が利用できるのではないか、という提案をしているところである（黒澤ほか , 2020）。ことに古代都市形成期の初期においては、金属製錬に必要な高温利用技術レベルが土器の焼成技術などで到達されているにもかかわらず、金属の出土報告がみられない時代があり、腐食されやすい金属が土壌中に拡散される可能性も考えられる。本研究の目的の一つは、「西アジアにおける都市の発達過程を、土壌に残された金属元素の痕跡（土壌汚染の程度）から推定することができるか？」という作業仮説を検証することである。

計画研究 4 のもう一つの大きなテーマとして、水と土と都市の相生・相克を挙げている。乾湿を繰り返す中での水と土の相互作用は、時として表層部への塩類の濃集、すなわち塩害を引き起こし、それが都市人口を支える周辺地域の土壌劣化、ひいては都市そのものを衰退させる一因となることもあり得る。表層部への塩類濃集の実体を理解するため、さまざまな環境における堆積物柱の元素濃度分布を明らかにする。

これらの目的を達成するため、筑波大学および中部大学で発掘調査を主導する、時代の異なる 3 つの遺構（図 1）で切り出された堆積物の垂直断面で、可搬型蛍光 X 線分析装置（pXRF）を用いて元素濃度を測定した。

1. 遺構周辺の地質と遺構の堆積物断面

堆積物柱の元素濃度調査を行った 3 つの遺構（図 1A）は、トルコ国南東部バットマン県に位置するハッサンケイフ遺跡（図 1B）、イラク国北東部のクルド人自治区スレマニ市西方 40 km 地点のチャルモ遺跡（図 1C）、スレマニ市南東 30 km に位置するヤシン・テペ遺跡（図 1D）である。測定は、乾期の堆積物が乾ききった状態で実施された。

ザグロス山脈褶曲帯北縁部を東流するチグリス川の北岸に位置するハッサンケイフ遺跡付近の地質は、古第三紀石灰岩とそれらを不整合に覆って新第三紀以降に堆積した河川堆積物からな

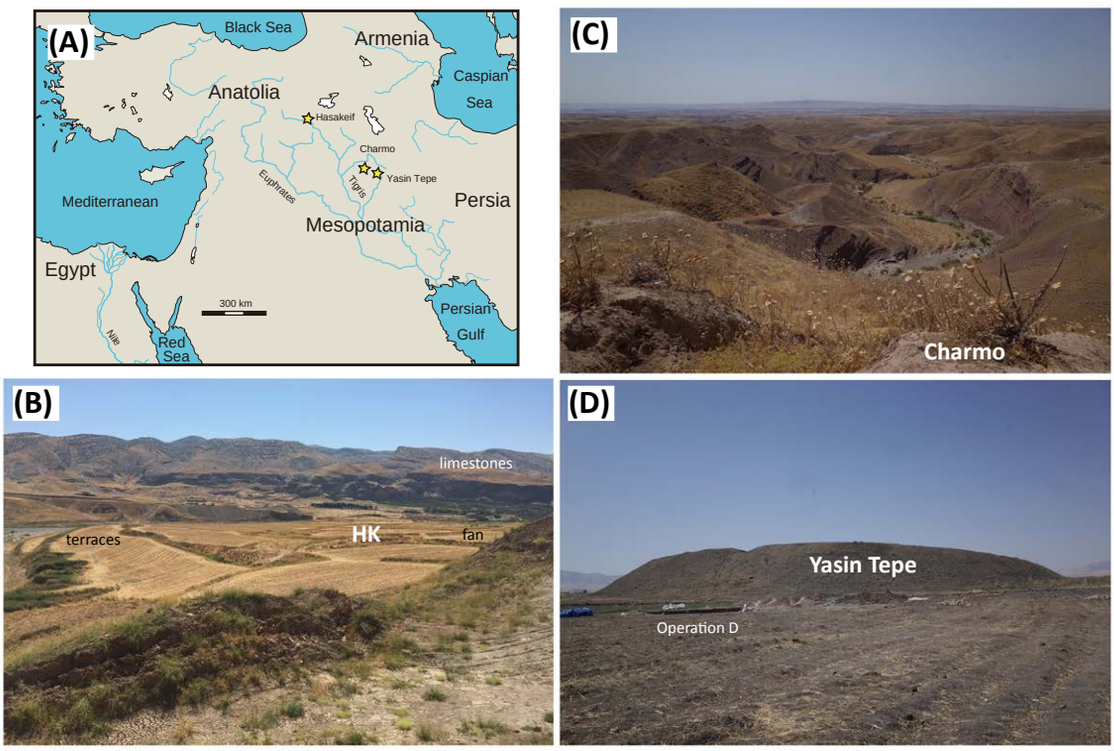


図 1 トルコ国南東部のハッサンケイフ遺跡（B: HK, 先土器新石器時代）、イラク国北東部のジャルモ遺跡（C: 土器新石器時代），ヤシン・テペ遺跡（D: 青銅器〜鉄器時代）とその位置図 (A)

る。チグリス川をはさんだ南側の丘陵地には始新世から漸新世の浅海性石灰岩および蒸発岩が広く分布しており、石灰岩の一部は遺跡の西側でチグリス川北岸にも露出していた。一部の石灰岩はドロマイト化しており、白色のドロマイトはハッサンケイフ遺跡の円形構造物内壁の化粧土としても用いられていたようである。この石灰岩は、チグリス川北岸丘陵地に広く分布する後期中新世の河川堆積物によって不整合に覆われる。中新世河川堆積物北側の山稜最上部には始新世石灰岩の露頭が再びあらわれ、北岸露頭との間には緩やかな向斜構造と断層の存在が推定された。遺跡そのものは、中新世河川堆積物を浸食する季節性河川がチグリス川に合流する扇状地の末端部に築かれた（図 1B）ようであり、遺跡の南側はチグリス川によって浸食されていた。また、遺跡の東西に発達する現世のチグリス川河岸段丘堆積物の上では、小麦の栽培が行われていた（図 1B）。

2011 年以降に筑波大学主導で行われた緊急発掘調査の結果、遺構全体として先土器新石器時代（9,500~9,000 cal. BC）を示す ^{14}C 年代が得られている（Miyake et al., 2012）。堆積物柱の元素濃度測定は、発掘現場北東端にある G15 トレンチの 5 m 深まで掘り込んだ東端部（図 2）で実施した。基底部の礫の並びや、堆積物の組織、石積構造物の分布に基づいて、ここでは表土の下に L1~L8 の 8 層を識別した。L5~L7 層まではフリントや骨片を含み、石積構造物が分布する文化層であるが、L8 は淘汰の良い細粒砂からなり、遺構の基盤である河川堆積物に到達したものと考えられ

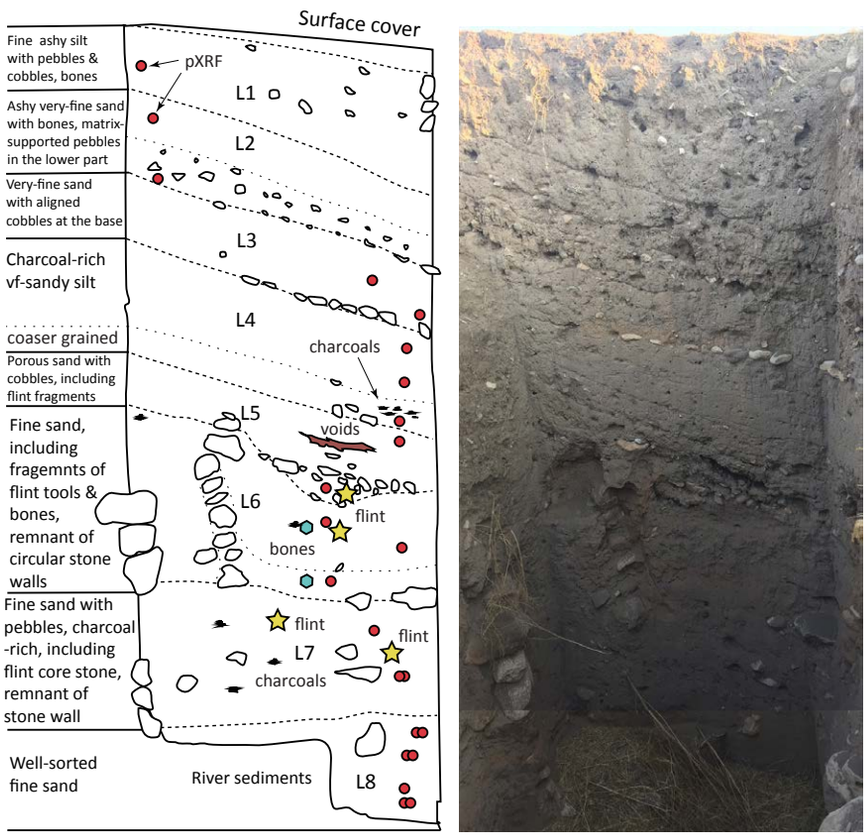


図 2　ハッサンケイフ遺跡 G15 トレンチのスケッチと写真。pXRF 測定点を赤丸で示した

る。2021 年 2 月現在、遺跡とその周辺の露頭は Ilisu ダム湖の水面下に没している。

チャルモ遺跡は南流する季節性河川のチャム・ガウラ東岸の丘陵に位置する。チャム・ガウラは遺跡から 9 km 北東に位置する始新世石灰岩（Pila Spi 層）山地が源流となっており、アルアイン川水系を経てサマッラ南でチグリス川に合流する。チャム・ガウラは、後期中新世の石灰質砂岩とシルト質泥灰岩の互層（Injana 層）がケスタ地形を呈する丘陵地帯を、遺跡からの比高にして 40 m ほど下刻している（図 1C）。チャルモ遺跡は始新世石灰岩山地から南に向かって次第に緩やかな南傾斜になる地層面が、向斜を経て北傾斜になる位置にあり、付近の透水性砂岩層の基底部では数カ所で地下水の湧出がみられる（Tsuneki et al., 2019）。周囲の台地上では現在も麦を中心とする耕作が行われている。

チャム・ガウラに浸食された遺跡の直下には、基盤の Injana 層が露出しており、文化層は厚くはない。堆積物断面で測定を行った JII トレンチ（図 3）では、表土の下に L1~L8 の文化層が認められ（図 4）、土器新石器時代（7,200~6,800 cal. BC）の ^{14}C 年代が得られている（常木ほか , 2021）。

調査した中でもっとも若い遺跡はヤシン・テペである（図 1 D）。前述の二つの遺跡と異なり、ヤシン・テペは広闊なシャフリゾール平原の北西部、平原の中央を東流するタンジェロ川北岸に位



図 3　チャルモ遺跡 JII トレンチでの発掘風景

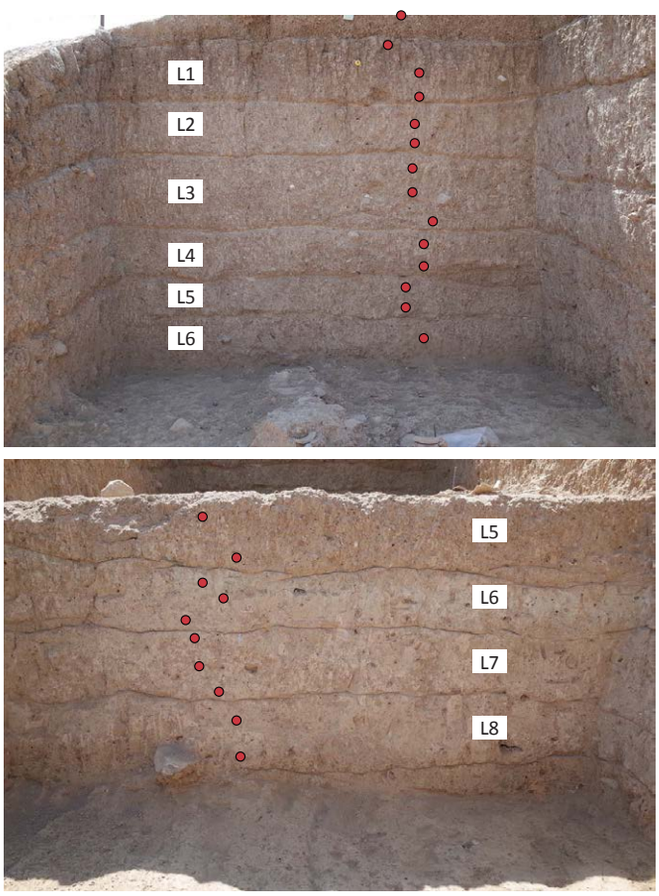


図 4　チャルモ遺跡 JII トレンチ断面と pXRF 測定点（赤丸）

置する。タンジェロ川は、シルーワン川を経て、バグダッドでチグリス川に合流する。シャフリゾール平原の北部にはアンモナイトなどの化石をふくむ白亜紀石灰岩からなるアズマール山地、南部の貨幣石を含む暁新世～始新世石灰岩からなるベラナン山地があり、平原はこれらの山地からもたらされる石灰質堆積物とタンジェロ川がもたらす河川堆積物によって埋め立てられている。遺跡付近は水が豊富で、水稲栽培すら行われている。

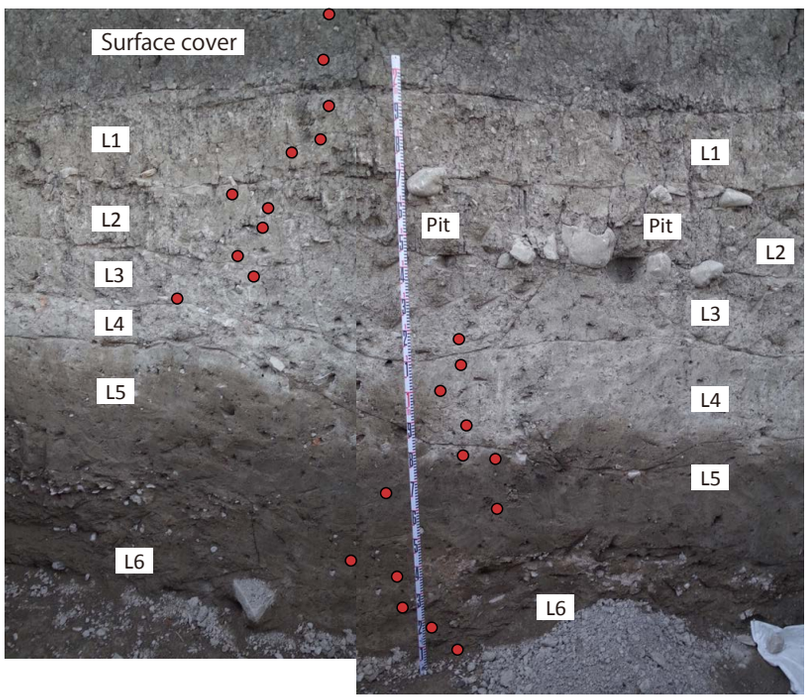


図 5　ヤシン・テペ遺跡のオペレーション D 堆積物断面と pXRF 測定点（赤丸）

テペ（小高くなった人造の丘）自体は厚いイスラム期の遺構に覆われているが、テペ南西の平坦部での表採で鉄器時代から青銅器時代の土器片が見つかり（Nishiyama, 2016）、その後 2016 年と 2017 年に実施された発掘調査では、鉄器時代（紀元前 7~8 世紀）遺構が地表からわずか 30 cm 程度の深さに分布していることが発見された（Nishiyama, 2020）。2018 年に行われた磁力探査では発掘された鉄器時代遺構の西側に、都市部からの排水および交通路としての機能も担っていたと推定される、水路跡らしき線状の磁気異常構造が発見された（Nishiyama, 2020）。水路跡を横断するように 2.5 m の深さまで開削されたトレンチ（オペレーション D）では、現在も栽培が行われている耕作土の下に，L1~L6 の文化層が認められた（図 5）。^{14}C 年代は得られていないものの、遺物の分布から L5 層までは鉄器時代の文化層であり、最深部の L6 層は青銅器時代（おそらく前 2 千年紀中頃）まで到達しているものと推定される（Nishiyama, 2020）。

オペレーション D のトレンチ中央部（図 5 の中央より右側）には、石灰岩の大礫を含むピット状の凹構造が認められ、大礫は L1 と L2 の境界および L2 と L3 の境界に沿って分布していた。pXRF 測定はピット部を避け、周囲の連続性のよい地層を選んで行った（図 5）。

研究方法

可搬型蛍光 X 線分析装置（pXRF）が普及してきた現在、発掘現場での測定が手軽に行えるようになってきた。本研究では 2017 年にリリースされた可搬型蛍光 X 線分析装置 Olympus VANTA

VCR-CCC 型（Rh ターゲット・4W X 線管）を使用し、それぞれの発掘現場で切り出した堆積物の垂直断面に機材を直接押し当てて測定を行った。今回利用した Geochem2 分析メソッドでは、管電圧 10 kV の Beam 2 で Mg，Al，Si，P，S，K，Ca，Ti，Mn の濃度を，管電圧 40 kV の Beam 1 で Ti，V，Cr，Mn，および Fe よりも重い 23 元素（Fe，Co，Ni，Cu，Zn，As，Se，Rb，Sr，Y，Zr，Nb，Mo，Ag，Cd，Sn，Sb，W，Hg，Pb，Bi，Th，U）の濃度を測定することができる。検出器には高感度のシリコンドリフト検出器（SDD）が用いられているが、原子番号 11 の Na より軽い元素は測定できず、それらの元素は LE（軽元素）としてまとめて表示される。Geochem2 分析メソッドでは、マトリックスの影響を自動補正するファンダメンタルパラメーターアルゴリズムが採用されており、大気圧補正も自動化されている。分析スポットの径は 3 mm で、照射時間として Beam 1 に 60 秒、Beam 2 に 120 秒を割り当てた。繰り返し測定精度を確認するため、産業技術総合研究所が配布する火成岩標準試料 JG-1（花崗岩）および JGb-1（斑れい岩）の測定を適宜行った。

結果と考察

各遺跡における堆積物柱のケイ素、アルミニウム、カルシウム、鉄濃度と LE 量を図 6 に、銅・亜鉛・スズ・鉛の金属元素濃度を図 7 に示す。測定された元素のうち、スズと鉛は標準試料の含有率が低く、また標準試料の測定はプロレンフィルム越しに行っているので、分析の確度（真値との乖離）は担保できない。鉛については土壌柱の中で安定した値を示しているので、繰り返し測定の精度には問題ないものと思われる。スズはヤシン・テペの 1 箇所以外では検出されなかったので、ハッサンケイフおよびチャルモのデータからは省いている。銅と亜鉛については、別途行った繰り返し測定精度の検討から、実用的な検出限界はそれぞれ 20 ppm 以下と 15 ppm 以下と見積もられ、20% 以内の誤差で測定できているものと考えられる（高山 , 2021）。ケイ素、アルミニウム、カルシウム、鉄については、検出限界は測定値を大きく下回っており、Si と Al は 10% 以内、Ca は 5% 以内、Fe はそれより小さな誤差で測定できている。

ヤシン・テペ、チャルモ、ハッサンケイフの全ての堆積物柱で、LE は最下部で大きくなる。ヤシン・テペでは下側の 7 地点で LE が大きくなっているが、この区間は湿気によって堆積物が褐色をおびている層準（図 5 の L6）に相当しており、LE は堆積物の含水比に大きく影響を受けることが示唆される。LE の大きさは測定面の平滑度によっても影響を受け、凸凹の面で隙間が大きくなると LE が大きくなる傾向がある。

もっとも含有率の高いケイ素の濃度には、LE の大きさに対して負の相関が見られる。アルミニウムと鉄の濃度にも同様な傾向が認められるので、今後含水比補正等を行う必要がある。本論の議論では補正していない生データの値を使用しているが、各遺跡の元素濃度を比較する場合には、LE が 65% 程度の測定点で比較する。

石灰岩質の地質を反映してヤシン・テペ、チャルモ、ハッサンケイフの全てで堆積物柱のカルシウム濃度は 6%~18% であり、平均的な地殻存在度（3.6% 〜 5%）を大きく上回っている。相対的に、ケイ素およびアルミニウムの濃度は平均地殻存在度に比べて低い。ケイ素の濃度が最も高いのはハッサンケイフの堆積物で、ここでは珪質砕屑性堆積物の量が比較的大きい。ハッサンケイフ堆

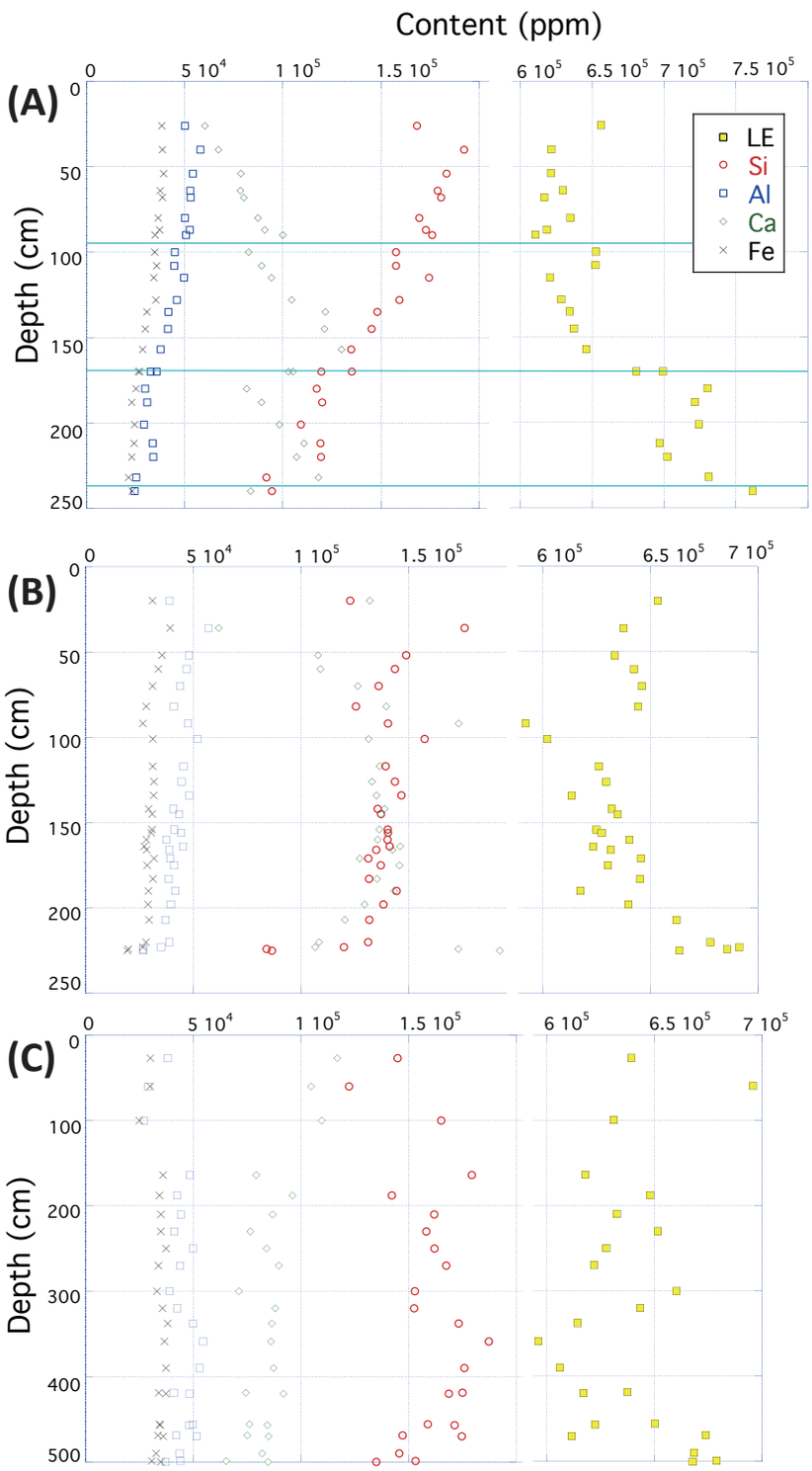


図 6　ヤシン・テペ（A），チャルモ（B），ハッサンケイフ（C）における堆積物柱の主要元素の垂直分布

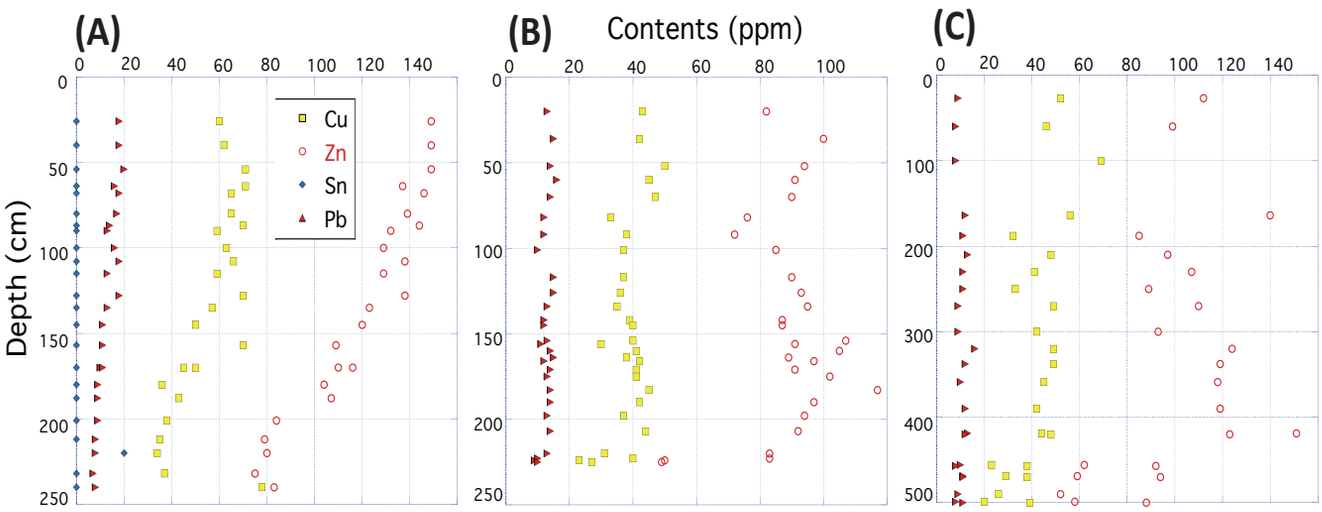


図 7　ヤシン・テペ（A），チャルモ（B），ハッサンケイフ（C）における
堆積物柱の有用金属元素の垂直分布

積物のカルシウム濃度は 7~12 % で、周囲の石灰岩地質の影響は三つの遺跡の中でもっとも小さい。チャルモではケイ素とカルシウムの量が伯仲しており、10~15% の濃度で推移している。

ヤシン・テペでは、ケイ素濃度が堆積物柱の深い方に減少していくのに対して、カルシウムは 6~13% の間で階段状に緩やかな増加と急激な減少を示し、ほかの元素と全く異なる挙動を示している。急激な減少は地表からおよそ 95 cm と 170 cm，240 cm の位置で見られ、上から L2 と L3、L4 と L5、そして L5 と L6 との境界に一致するようである。ヤシン・テペの堆積物柱の上側ではケイ素濃度が高くなっているものの、下側ではケイ素とカルシウムの量が伯仲する。周囲は石灰岩地質に取り囲まれていることから、下位の高カルシウム堆積物が本地域で素のままに発達する土壌の組成を示しており、上位の高ケイ素堆積物はタンジェロ川の堆積作用によって河床高が上昇し、珪質砕屑性の河川堆積物の影響を色濃く受けるようになったか、あるいは人為的な土壌改良を示唆するかも知れない。緩やかな増加を示すカルシウムの挙動は、下位側にカルシウムが濃集したのではなく、上位側でカルシウムが除去されたと考える方が、理にかなっているようである。

ヤシン・テペが位置する扇状地の北西端には、基盤の白亜紀石灰岩（図 8A の limestone ridge）が露出しており、扇状地堆積物に天然の地下ダムを形成している（Slemani Directorate of Antiquities and University of Tsukuba, 2016）。これによって押し上げられた水頭はベスタンスール集落で湧水として地表に現れ、扇状地の等高線に沿って弧をえがくように張り巡らされた灌漑水路を通してこの地域を潤している。扇状地堆積物をもたらしたアンジラ川は季節性河川で夏期には干上がっているが、扇状地の地下水は乾期にもたえることなく、豊富な水量は夏期の水稲栽培すら可能にしている。豊富な水量によって排水管理もなされており（図 8B）、塩類を含む排水はタンジェロ川に導

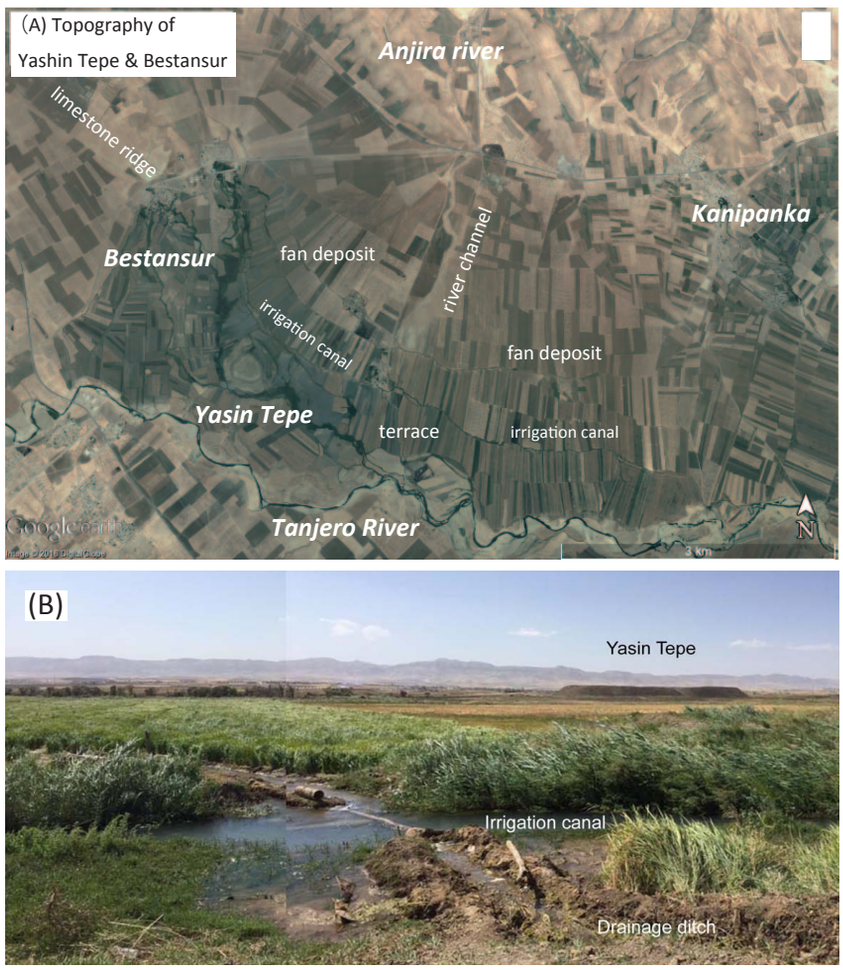


図 8　ヤシン・テペの地形学的な立地条件（A）と灌漑水路（B）

かれて耕作地の地表に塩類を集積させることはない。数万年の地質学的なプロセスを経て成立した豊富な地下水系は完新世を通して利用可能であったろうし、現在行われているような排水管理は、鉄器時代でも可能であったであろう。地表を流れる排水は、周囲の土壌中に含まれ、比較的水に溶けやすいカルシウムを土壌柱から取り除くことができたであろう。ヤシン・テペ南西部の堆積物柱にみられるカルシウムの挙動は、鉄器時代にはすでに適切な排水管理を伴う地下水利用が行われていたことを示唆する。L2 と L3、L4 と L5、そして L5 と L6 との境界には、長期間維持された水路の改変を伴う時代的な間隙があるのではないかと考えられる。

新石器時代から鉄器時代にかけて利用されたと考えられる有用金属元素の堆積物柱濃度を LE=65% レベルで比較すると、銅についてはヤシン・テペで 60~70 ppm、チャルモでは 40~50 ppm、ハッサンケイフでは 30~50 ppm で推移しており、時代がくだるにつれて堆積物柱での有用金属元素濃度が増加していくように見える（図 7）。とくにヤシン・テペでは、堆積物柱の上位に向かっ

て銅、亜鉛、鉛（図 7）および鉄濃度（図 6）が増加していく傾向が顕著であるが、含水比補正をかける前のデータなので、それを差し引いて考えなければならない。亜鉛についてはハッサンケイフでも高い数値を示すものがあり、地域性の影響については、今後データを集積して考察する必要がある。

まとめ

ハッサンケイフ、チャルモ、ヤシン・テペの時代の異なる 3 つの遺跡で土壌柱の元素濃度分布を明らかにした。カルシウムの挙動は、排水を伴う灌漑技術が確立した時代の指標として用いることができるかも知れない。鉄、銅、亜鉛、鉛については時代がくだるにつれて堆積物柱濃度が増加する傾向が認められたが、さらなる研究が必要である。今後は、大集落から都市へ移行する期間の各地の遺構において同様の測定を行い、地域ごとに元素濃度のバックグラウンド値を明らかにし、大人口を維持する生産性を確保するための灌漑技術の発達過程や、堆積物柱への金属元素の濃集過程を調べていく必要がある。

謝辞

本研究で使用した Olympus 社製 pXRF VANTA は、科学研究費補助金（基盤研究 B）17H04493「アッシリア浮彫の石材分析から挑む産地同定と復元」によって購入しました。研究代表者の大阪学院大学　渡辺千香子教授に感謝いたします。

引用文献

黒澤正紀・池端慶・荒川洋二 , 2020. 古代西アジアにおける金属利用と都市鉱山の起源に関する基礎的検討 , 2018-2022 年度文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究（研究領域提案型）「都市文明の本質」2019 年度研究成果報告 ,173-180.

Miyake, Y., Maeda, O., Tanno, K., Hongo, H. and Gundem, C. Y., 2012. New excavations at Hasankeyf Hoyuk: a 10th millennium cal. BC site on the Upper Tigris, Southeast Anatolia, *Neo-Lithic*, 1/12, 1-5.

Nishiyama, S., 2016. Yasin Tepe: topographical survey and surface collection. In: A. Tsuneki, K. Rasheed, S.A. Saber, S. Nishiyama, N. Watanabe, T. Greenfield, B.B. Ismail, Y. Tatsumi and M. Minami, Excavations at Qalat Said Ahmadan, Qaladizah, Iraq-Kurdistan: Second Interim Report (2015 Season). *Al-Rāfidān*, 37, 130–132.

Nishiyama, S., 2020. Provincial control in the eastern reaches of the Assyrian Empire: A view from Yasin Tepe, Iraqi Kurdistan, in "*The Reach of the Assyrian and Babylonian Empires*" (Hasegawa, S. and Radner, K. eds.), Studia Chaburensia, 8, 45-72, Harrassowitz Verlag.

Slemani Directorate of Antiquities and University of Tsukuba, Japanese Mission to Yasin Tepe, 2016. Yasin Tepe Archaeological Project (YAP) Field Report of the 2016 Season of Excavation at Yasin Tepe, *Shahrizor*, Slemani, Slemani Directorate of Antiquities, 29 p.

高山大紀 , 2021. 野外調査における可搬式蛍光 X 線分析装置（pXRF）を用いた最適分析条件の設定 , 徳島大学総合科学教育部修士論文 , 34 p.

Tsuneki, A., Rasheed, K., Watanabe, N., Anma, R., Tatsumi, Y., Minami, M., 2019. Landscape and early farming at Neolithic sites in Slemani, Iraqi Kurdistan: a case study of Jarmo and Qalat Said Ahmadan, *Paleorient*, 45, 2, 33-51.

常木晃・渡辺展也・安間了・辰巳祐樹・サリ ジャンモ・サーベル アハマド サーベル・ラワ カリム　サリ , 2021. 肥沃な三日月地帯東部の新石器化－イラク・クルディスタン、スレマニ地域チャルモ遺跡の調査（2019-2020）－, 第 28 回西アジア発掘調査報告会 , 9-13.

ヤシン・テペ遺跡の石室内の金属濃集堆積物の分析

黒澤正紀[1]・池端慶[1]・安間了[2]・西山伸一[3]
[1] 筑波大学生命環境系 [2] 徳島大学社会産業理工学研究部 [2] 中部大学人文学部

1. はじめに

金属器は、天然の鉱石から抽出・製錬された金属を加工・調整して作成されたもので、完成までに多くの知識・技術や組織的な作業工程を必要とする。そのため、古代遺跡から出土すると、例えば表1のような考古学的情報が抽出可能で、多様な情報を様々なスケールで得られることが金属器の特徴となっている。この中で、金属組織・化学組成・同位体比からの情報を得るには、試料の一部の破壊分析が必要な場合が多い。非破壊での分析が可能な場合もあるが、通常は腐食・被覆等の影響によって試料内部と表面の状態が大きく異なることから、定性的な評価が主体となっている。

金属器の分析には２つの課題が存在する。一つは、貴重な遺物の損傷をできるだけ小さくすること、もう一つは、多くの金属器は土中に埋没してから腐食の影響を受けるため、その影響を最小にして分析することである。前者については、後者のことも勘案し、厚みのある遺物の場合は、表面から内部を薄く切り出したり、ドリルで微小な穴を開け、分析用試料を採取することなどが行われている (Scott, 1991)。後者の課題については、多くの金属で腐食自体は避けられないので、進行や影響の程度が小さい部分を分析することで対応している。但し、サイズの小さい遺物の場合は、土中で充分に腐食が進行し、原形をとどめない場合や土中に金属成分として溶け込んでしまう場合も多い。このような場合でも、土器や土壌に溶存した金属成分を分析することで、有用な考古学的情報が得られることがある (Adan-Bayewitz et al., 2006)。

表１　金属器から得られる情報

・存在・種類：	文化レベル・社会状況・威信財
・形状, 装飾：	文化・類縁・交易
・刻印文字：	社会情勢
・埋没状況：	社会的状況
・金属組織：	製造条件
・化学組成：	材料・製造技術・生産地・交易
・同位体比：	材料産地・産地地質状況

土壌中に金属成分として溶け込んだ場合、様々な分析が可能で、もし、それらによって、元の金属器の情報がある程度復元できるのであれば、非常に好都合である。そこで、今回は、新アッシリア時代のヤシン・テペ遺跡の未盗掘レンガ墓の墓室内で発見された金属濃集堆積物について、組成や同位体の分析を通じて、元の金属器の情報を推定することを試みた。この金属濃集堆積物には、腐食した青銅と銀の微細片が含まれており、今回は特に、青銅微細片について予察的な検討を行った。

2. 古代西アジアでの金属材料

古代西アジアのイランからトルコにかけての地域は、あらゆる種類の金属が多産する世界有数の金属鉱床地帯に属している (石原ほか , 2002; 中山ほか , 2011)。そのため、そうした状況を背景に世界でも早期に金属利用が進んだ地域とされており、紀元前 8 千年紀～前 7 千年紀頃からの自然銅の利用を皮切りに、銅・鉛・銀・金・錫・鉄・亜鉛・水銀など様々な金属が利用されていた (Lambert, 1997)。

また、他の物質と混ぜ合わせることで、物性を大きく変えることができる合金も、紀元前 4 千年紀前半には利用が開始されていた。合金は、それまでになかった硬さや融点をもつ金属材料を提供し、装飾品・農具・武具などへの応用を促し、現在に至る人類史の発展に貢献した。最初に利用された合金は、ヒ素と銅の合金であるヒ素青銅 (4 ～ 12%As) で、金属銅よりも硬く強靭で、融点が低く、かつ溶融銅よりも粘性が低く流動性に富むため、鋳型での鋳造に適していた (Lambert, 1997)。紀元前 4 千年紀前半ごろから北メソポタミア・イスラエル地域などで用いられ、前 3 千年紀末頃まで盛んに利用されていたとされる。

錫と銅の合金である錫青銅は、前 4500 年頃にセルビアで出土の報告があるが、メソポタミア地域で盛んに利用されるのは前 3000 年頃からである (Lambert, 1997)。錫青銅は、ヒ素青銅よりも硬く、耐腐食性があるために武具や農具に適しており、融点もより低く流動性に富むため、複雑な鋳型での鋳造に適していた。さらに、鉛や亜鉛を添加すると、より融点が低下し、微細な文様・装飾の鋳造が可能となるため、それらを添加する技術も広まった (Lambert, 1997)。こうした優れた特性から、青銅は、青銅器時代から鉄器時代、現代に至るまで、美術品や電子部品・水道部品など各所で利用されている。

3. 青銅合金の性質

錫の添加による錫青銅の物性変化は、古代における青銅の利用技術と密接であり、さらに今回は土壌試料中の微細な青銅腐食物を検討対象としているため、その概要について触れることにする。

図 1 は、鋳型による鋳造など、急冷過程での錫 - 銅合金の相平衡図の一部を示したもので、縦軸は温度、横軸は合金中の錫濃度を示す。図中の赤色の線は融点 (加熱した際に最初に溶融体ができる温度) を示し、紫色の線は全てが溶融体となる温度を示す。紫色の線より上の温度では、青銅は完全な溶融体となっている。

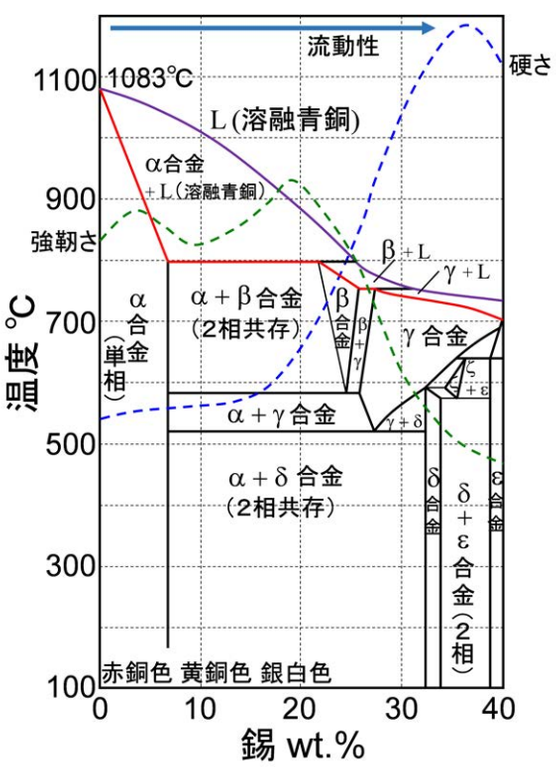


図 1 銅 - 錫系の相平衡図 (Scott, 1991 を改変)

錫を含まない金属銅のみの場合では、融点は 1083℃ となり、その鋳造にはより高温を可能とする特別な炉が必要となる。他方、金属銅に錫 (融点 232℃) を添加すると、添加量に比例して合金の融点は下がり (図 1 の赤色の線)、完全に溶融体となる温度も下がる (図 1 の紫色の線)。

また、溶融体の粘性も添加量に比例して低下し、流動性が増して、複雑な鋳型での鋳造が容易となる (図 1)。固まった合金の硬さ (傷付きにくさ、青色の点線) も、添加量につれて増していくが、錫量が約 37wt.% 付近で最大となり、それ以上の添加では逆に硬さが減じる (図 1)。青銅の錫量が増えると、硬くなるにつれて、ガラスのように脆く割れやすくもなる。また、外力に対する合金の強靭さ (引っ張り強度、緑色の点線) も添加量につれて増していき、約 20 wt.% の錫の添加で最大となる (図 1)。そのため、農具や武具としての利用では、硬さと強靭さ (折れにくさ) を考慮して、錫の添加量が数 % ～ 20 wt.% であることが望ましく、実際、西アジアから出土する青銅製品もそのような錫添加量であることが多い。加えて、合金の色や反射率も錫の添加量によって変化し、錫がほとんど含まれない場合は赤銅色で、添加量の増加につれて、黄銅色 (真鍮色)、反射率の高い銀白色へと変化していく (図 1)。

4. 青銅器の組織と化学組成分析

砂や粘土の鋳型を使った普通の鋳造では、冷却速度が速いため、不均質な急冷組織を持つ青銅が形成される。例として、1100℃ で溶融した 10 wt% Sn を含む青銅を鋳型で固めることを考えてみる (図 2)。鋳型に溶融した青銅を流し込むと、直ちに急冷され、溶融青銅中に、銅に富み錫が少ない α 相の合金 (約 7 wt% Sn) が樹枝状に成長する (図 2)。大きさ数百ミクロン程度の無数の樹枝状の α 相が鋳型表面から鋳型中央に向かって成長する状態となる。残った溶融青銅は、元の組成から銅に富む合金が取り去られたため、相対的に錫に富むようになる。この錫に富む溶融青銅は、樹枝状の α 相のすき間に入り込んで、約 800℃ で α 相の表面と反応し、より錫濃度が高い β 相の合金（約 23 wt% Sn）を樹枝状 α 相の周囲に形成する (図 2)。この段階で完全固結となるが、その後の冷却過程で、 β 相から γ 相と α 相が分離し、γ 相はさらに δ 相と α 相が分離して、最終的に α 相と δ 相の 2 相が混合した状態で固結する (図

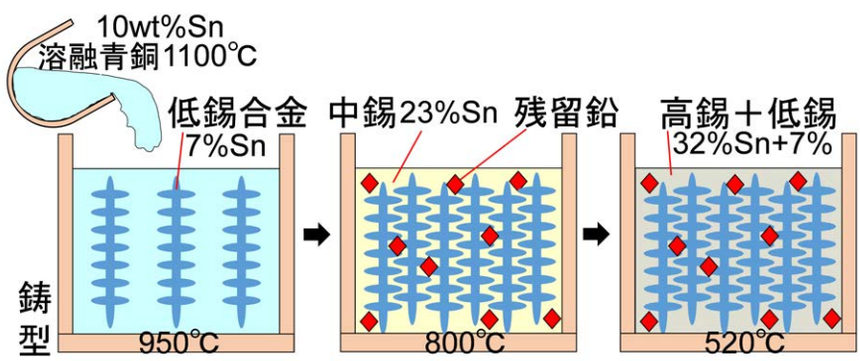


図 2 鋳造青銅の冷却と組織

1)。最終段階で、元の溶融青銅に添加された鉛や亜鉛などはα相やβ相には溶け込めないため、樹枝状のα相やβ相のすき間に微小粒子として分散固化する (図 2)。

このように、青銅内部は、錫濃度が異なる部分が不均質に集合しており、また、錫が濃集した溶融青銅が、鋳型中央部に残留したり、表面に移動して固まることもあるので、周囲と中央部で組成が変化していることがある。そのため、元の原料を混ぜ合わせた段階の溶融青銅の平均化学組成を推定する場合は、ある程度の大きさの試料を使って検討することが望ましい。一部を切り出して分析する場合、青銅内部の組成不均質の影響によって、部分により測定結果の差が生じることもある。

他方、人類による金属利用の段階を検討するには、細かな組成の違いよりも、各成分の指標値との関係が分かればよい場合も多い。例えば、錫の平均濃度が、数～ 20 wt% Sn であれば、硬さと強靭さを備えた実用的な錫青銅であり、錫が低濃度で上述のα相が多い場合は軟らかいので表面での文字の刻印に適するなどの特徴がある。錫の代わりに数 wt% の砒素を含む場合は、一世代前の青銅合金の利用を示す。また、数 wt% の鉛の添加は、複雑鋳型の利用や削り加工に適した青銅の利用段階を示す。数 wt% の亜鉛の添加は、流動性の改良だけでなく、銅や錫の鋳造過程での酸化防止技術や真鍮への発展段階の途上にあるとみることができる。不純物レベルの銀・硫黄・鉄からは、溶融方法や材料との関係が推測できる。

5. 埋没後の青銅器の腐食

土中に埋没した金属器は、温度変化に伴う膨張・収縮による破砕や、空気中の酸素・二酸化炭素および土中の水・塩素イオン・硫酸イオンなどによって腐食を受ける。腐食の進行速度は、埋没環境によって異なり、海水中、大気中、土中の順に遅くなる (Goffer, 1980)。青銅の腐食では、緑青と呼ばれる緑色をした腐食皮膜が表面に形成されることが多く、その部分は銅の炭酸塩・硫酸塩 (酸化物)・塩化物からなることが一般的である（図 3)。この腐食層は、水や塩素・硫黄イオンの金属器内部への浸透を減らすため、腐食速度を遅くすることもある。また、これら緑青の形成に伴って、その下部には、図 3 のように、分離した純銅と錫濃度が濃縮した残存青銅が形成されることが多い (横田ほか , 2002)。錫濃度の濃縮は、腐食が激しい場合、80 wt% Sn に達することもある。元の青銅に添加された鉛や亜鉛は、この残存青銅の中に大部分が残るとされている (横田ほか , 2002)。

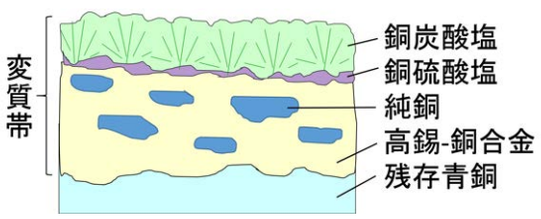


図 3 腐食した青銅の断面図 (Goffer 1980 に加筆)

腐食した青銅器の化学組成の分析では、緑青を避け、分離した純銅と錫濃度の高い部分を考慮して分析する必要がある。通常、緑青の厚みは数十～数百ミクロンに達していることが多いので、厚みの薄い青銅器や微小な青銅器片では分析が難しい場合が多い。緑青で覆われた青銅器を非破壊で分析すると、20 ～ 30 wt.% Sn の高い錫濃度が検出されることがあるが、錫濃度が濃縮された部分を測定している可能性もあるので、注意を要する。また、緑青形成で複数相が形成される際には、元の同位体比と異なった割合で、各相に特定の同位

体が配分される。そのため、青銅器の同位体の分析では、ほぼ閉鎖系で外部への元素放出がないと推定できる場合に、むしろ、腐食相と残存青銅を一緒にして測定すると、元の青銅器の同位体比を推定することができる。厚みのある金属器試料などで、腐食の影響がほとんど無い部分が分析できる場合は、その測定で充分である。

今回は、ヤシン・テペ遺跡の未盗掘墓の室内で発見された金属濃集堆積物に含まれていた微細青銅片から、考古学的に有用な情報が復元できるかどうかを検討した。密閉された墓室内では、腐食速度が遅いと推測されるため、微細青銅片であっても有用情報を残している可能性がある。

6. ヤシン・テペ遺跡の金属濃集堆積物

ヤシン・テペ遺跡は、イラク共和国北東部のクルド自治区スレイマニヤ県にある同県最大級の鉄器時代 (新アッシリア時代) の都市遺跡である (Nishiyama, 2020)。新アッシリアは、紀元前 9 世紀～紀元前 7 世紀に存続した史上初の世界帝国で、同遺跡は、新アッシリアの東の端にあたる辺境地域に位置する。ヤシン・テペ遺跡は、2016 年から日本の中部大学を中心としたヤシン・テペ考古学プロジェクトが発掘調査を行っており、スレイマニヤ県付近で最大級の規模を誇ることから、この遺跡は、新アッシリア時代の主要都市の一つと考えられている。これまでの発掘で、大型建物跡などが発掘されており、2017 年には、紀元前 8 世紀ごろの貴重な未盗掘レンガ墓が発見された。墓室は焼成レンガ造りで、中には、テラコッタ製の棺と四体分の人骨が見つかっており、金製品・銀製品・ビーズ・ガラス製品・土器などに加え、多数の青銅製品が副葬されていた (Nishiyama, 2020)。

また、中部大学ヤシン・テペ考古学プロジェクトの了承のもと、スレイマニヤ文化財局の公式許可を得て、発掘された遺物や未盗掘墓内部及び周辺土壌・堆積物の含有元素を、携帯型の蛍光Ｘ線装置を用いて非破壊で分析したところ、墓室内部の遺物からふるい落とされた堆積物に多量の金属を含む部分があることが見出された。それらの濃度は、墓室付近の表層土壌に比べて、リン･銅･錫･銀が数桁以上も濃集していた (図 4)。そこで、この堆積物について含有金属成分の検討を行った。

実体顕微鏡および偏光顕微鏡で観察すると、墓室内の堆積物には、大きさ 2 mm 程度の暗色の火

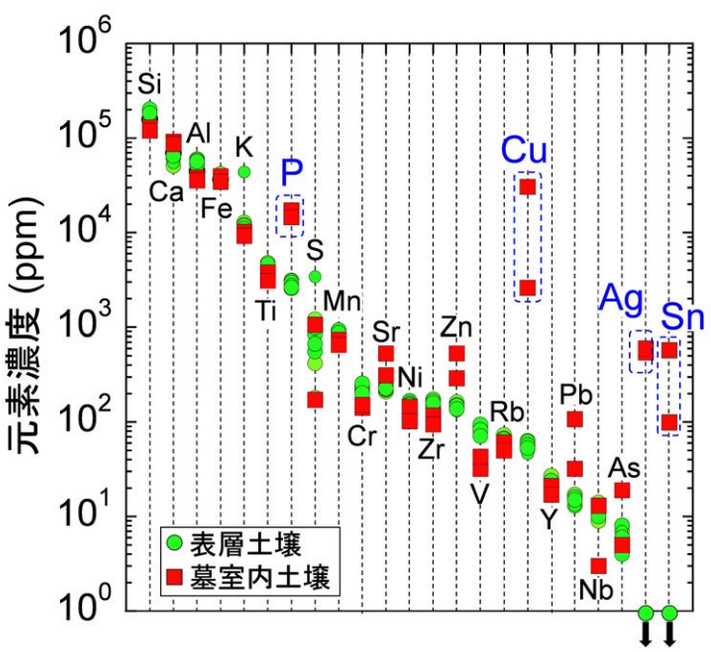


図 4 携帯型蛍光Ｘ線装置で測定した墓周辺表層土壌と墓室内堆積物の元素濃度

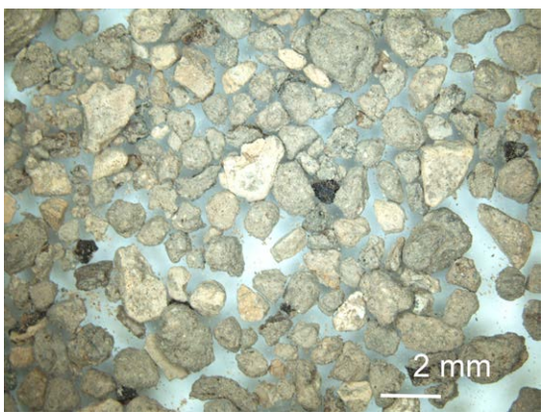


図 5 墓室内堆積物（実体顕微鏡写真）

成岩・堆積岩 (砂岩・石灰岩) の岩片と灰色～褐色 (稀に薄緑色) の非晶質アパタイトの破片、緑色の大きさ 1 mm ～数十ミクロンの腐食した金属の微細片が含まれていた (図 5)。全体は、非晶質アパタイトの破片と岩片からなり、泥粒子は極めて少なく、植物根なども確認されていない。金属の微細片は、岩片と非晶質アパタイトの破片の 100 粒に 1 粒くらいの割合で含まれていた。非晶質アパタイトは、墓室内に埋葬された遺骸から由来した骨片 (バイオアパタイト) と考えられ、金属の微細片は、副葬された金属器の破片由来と推定される。

7. バイオアパタイト片と微細金属片の特徴

バイオアパタイトは、骨の主要無機成分で、非晶質の水酸リン酸カルシウムである。土中に埋没すると、組成の一部が土中のイオンによって置換される。土中のフッ素・塩素・炭酸などの陰イオンはアパタイトの水酸基成分を置換し、炭酸イオン･硫酸イオンはリン酸成分を、ストロンチウム･マグネシウムイオンなどはカルシウム成分を置換したりする。また、そのような置換に伴って、結晶度が向上することもある。

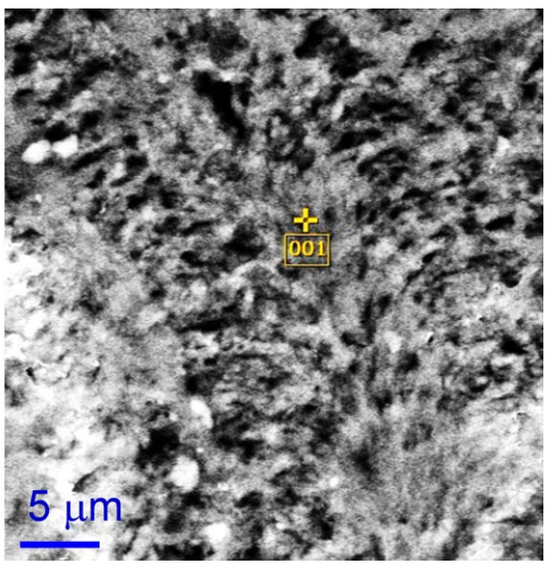


図 6 骨組織のあるアパタイト（走査型電子顕微鏡写真）

今回のバイオアパタイト片を走査型電子顕微鏡 (SEM) で観察すると、骨の組織も観察された (図 6)。さらに、X 線検出器付き走査型電子顕微鏡 (SEM-EDS) で主成分組成を分析すると、基本的に水酸リン酸カルシウムであること (一部炭酸成分を含む可能性もある) が分かり、地下水に由来すると考えられるフッ素・塩素等は確認されなかった。褐色のアパタイトには微量の鉄が確認され、薄緑色のものには少量の銅が確認された。鉄分は遺骸の体液などに由来すると推定され、銅については副葬された青銅器由来のものと推定される。全体として、地下水や土壌中のイオンによる影響は少ないと考えられ、墓室内はほぼ閉鎖系に近い環境にあったことが推定された。このような環境では、金属の腐食の進行が相対的に遅いと考えられるので、有用な情報が金属片にある程度残されている可能性が示唆された。

SEM-EDS の分析によって、微細金属片は腐食した青銅器の破片と腐食した銀の破片であることが分かった。このことは、携帯型蛍光 X 線装置に

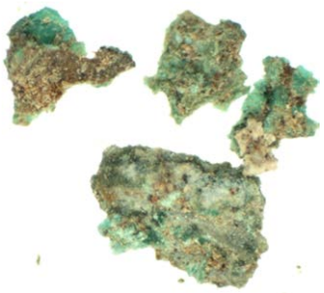


図 7 青銅片 (実体顕微鏡)

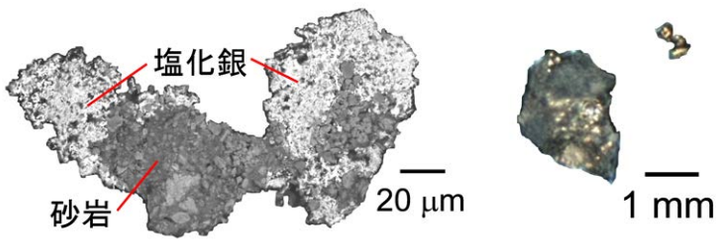


図 8 a. 塩化銀 (走査電顕写真), b. 純銀片 (実体顕微鏡)

よる墓室内堆積物の測定結果と調和的である。青銅破片は、緑色の銅炭酸塩で表面が覆われており、一部に銅 - 錫合金が露出していた (図 7)。表面が青色のものも認められた。また、少量の硫黄・リン・珪素も検出された。銀破片は常に白色の塩化銀となっており、砂岩岩片の表面に付着しているものが多かった (図 8a)。塩化銀には少量の硫黄・リンが含まれており、表面の塩化銀が剥がれて中心部の純銀が露出する小粒も稀に認められた (図 8b)。今回は青銅片について詳しく検討した。

8. 青銅微細片の組織と化学組成分析

青銅片を SEM で観察すると、最表面は針状結晶の放射状集合体となっている銅炭酸塩が、その内部には板状結晶の放射状集合体である銅硫酸塩が少量確認でき、それら集合体の中心部または断面には銅 - 錫合金が観察された (図 9)。顕微ラマン分光法によって、放射状集合体の銅炭酸塩は孔雀石 ($Cu_2CO_3(OH)_2$) と確認され、一部には藍銅鉱 ($Cu_3(CO_3)_2(OH)_2$) も存在した。銅硫酸塩はラングル石 ($Cu_4(SO_4)(OH)_6{\cdot}2H_2O$) と推定された。銅炭酸塩鉱物は、腐食により青銅の表面に普通に形成される鉱物である。一方、土中や地下水の塩素イオンにより形成される塩化銅は全く観察されず、銅硫酸塩も微小量であることから、バイオアパタイトでの結果同様、地下水の影響が極めて少ない、ほぼ閉鎖系の環境で腐食が進行したことが示唆された。それら鉱物に少量含まれる硫黄・リンは遺骸起源のものと推定され、珪素については岩片由来と考えられた。腐食した金属器の同位体分析を行う場合、このように、構成鉱物の種類を特定することが、得られた同位体比の結果を検討する上で重要となる。

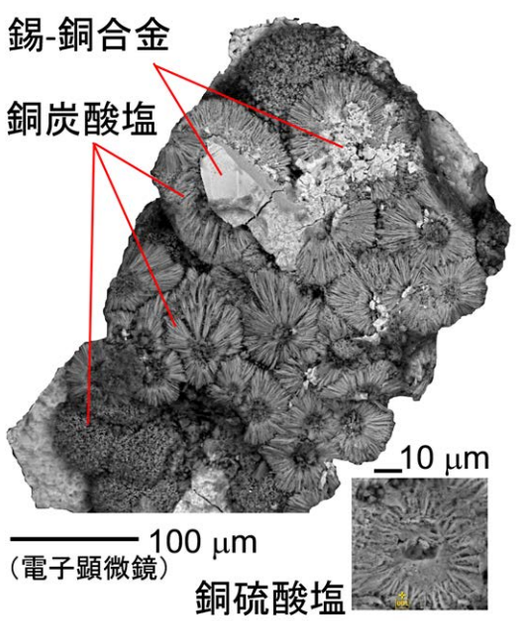


図 9 青銅片の腐食組織（走査型電子顕微鏡写真）

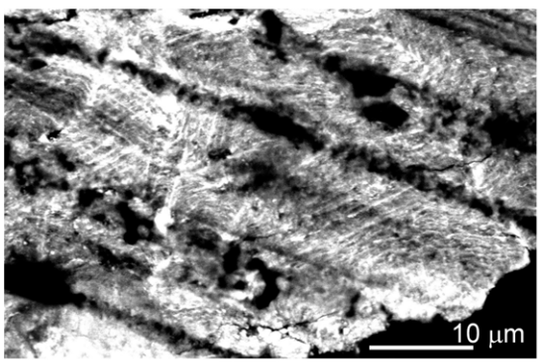


図 10 微細な高錫・低錫合金の共晶組織
（走査型電子顕微鏡写真）

また、直径約 4 mm の青銅片を SEM で観察すると、それら鉱物の被覆の下に、図 3 の様な、純銅部分と錫濃度が濃縮した残存青銅が確認された。青銅片の大部分は腐食されていたが、極わずかに残る部分に、鋳造によると考えられる微細な高錫送金・低錫合金の共晶組織も観察された (図 10)。おそらく、焼き入れなど加熱処理がない青銅器の破片と推定される。

変質の影響が少ないと考えられる青銅部分について、SEM-EDS の分析によって 250 ミクロン四方の面積の面分析を 4 か所で実施し、その平均値を求めた。その結果、今回の青銅片の平均組成は 92.8 wt.% Cu, 5.9 wt.% Sn, 0.9 wt. % Pb と推定された。約 6 wt.% の Sn は、通常の青銅器の値であり、1 wt. % 前後の Pb は不純物とも融剤としての添加物とも考えられる。また、この青銅の平均組成は、ほぼ同時期の新アッシリアの Nimrud 遺跡からの青銅器の平均組成 (約 89 wt.% Cu, 8 〜 10 wt.% Sn, 0.3 〜 0.8 wt. % Pb; Curtis, 2013) と大差がなく、同時期に新アッシリアで流通していた低錫・少鉛タイプの青銅器とほぼ変わらないものであることが推測された。

9. 青銅器片の微量元素組成と銅同位体比

腐食した 2 種類の青銅器片 (試料 1 および 2) について、バルク組成 (主要〜微量元素) と銅の同位体比を予察的に分析した。今回は、それらの分析の手法の概略と予察的結果について説明する。

試料 1 は、実体顕微鏡観察と顕微ラマン分光分析により表面に緑色のラング石と考えられる銅硫酸塩が確認された青銅器片、試料 2 は、表面に青色の藍銅鉱が確認された青銅器片である。腐食した青銅器片の一部には、表面に白色の付着物がみられる試料もあるが、今回の分析では、鏡下において顕著な白色の付着物が存在する試料は除いた。試料は、メタルフリークラス 1000 クリーンルーム内のホットプレート上にて、主に王水を使用して酸分解し、蒸発乾固を行った。その後、試料溶液 (2 % 硝酸) を作成した。酸分解時に肉眼で見える残渣は確認されなかったが、ミクロンレベルの難溶解性物質を除去するため、試料溶液は、孔径 0.22μm のメンブレンフィルターを使用してろ過した。試料溶液中の元素濃度分析（Li から U までの 75 種類の元素の半定量測定）は、2019 年に導入した四重極型誘導結合プラズマ質量分析計 (ICP-QMS)(図 11) を使用して実施した。

分析の結果、試料 1 には、銅 (38 wt.%)、カルシウム (6.9 wt.%)、リン (2.4 wt.%)、鉛 (2964 ppm)、銀 (2122 ppm)、錫 (405 ppm)、ストロンチウム (299 ppm)、バリウム (283 ppm)、マンガン (89 ppm)、バナジウム (66 ppm)、ルビジウム (9.9 ppm)、ビスマス (6.6 ppm) が、試料 2 には、銅 (53 wt.%)、鉄 (1600 ppm)、鉛 (388 ppm)、銀 (113 ppm)、錫 (75 ppm)、ルビジウム (38 ppm) が含まれることが分かった。ICP-QMS は、SEM-EDS では検出できない微量元素も検出可能であるが、測



図 11 バルク元素濃度分析に使用した四重極型誘導結合プラズマ質量分析計（ICP-QMS）



図 12 銅同位体分析に使用したマルチコレクター型誘導結合プラズマ質量分析計（MC-ICP-MS）

定の結果、試料中の含有元素の種類は極めて限られていることが判明した。これらの元素の多くは、前述した SEM-EDS 分析でも検出されており、副葬された青銅器、銀製品、遺骸由来であると推定される。ケイ素やアルミニウムなどの土壌由来の成分は検出されなかったことから、今回分析した青銅器片には岩片の成分は顕著に混入していないと考えられた。

また、試料 1 と試料 2 の銅同位体分析のために、ICP-QMS 分析を行った試料溶液の一部をクリーンルーム内にて採取して、銅濃度が 0.2 ppm の溶液（0.5 % 硝酸）を作成した。銅同位体分析は、2019 年に導入したマルチコレクター型誘導結合プラズマ質量分析計（MC-ICP-MS）（図 12）を使用して行った。

最初に、本 MC-ICP-MS を使用した銅同位体分析の精度と確度を検討するため、銅濃度が 0.2 ppm（0.5 % 硝酸）の In-house スタンダード（JMC Cu）溶液を繰り返し測定した。その結果は、$\delta^{65}Cu\{(({}^{65}Cu/{}^{63}Cu)_{試\ 料}/({}^{65}Cu/{}^{63}Cu)_{NIST976}-1)\times1000\}$ = − 0.22±0.05 ‰ (2σ, n = 7) となり、他機関の MC-ICP-MS にて同じスタンダードを測定した結果 {$\delta^{65}Cu$ = − 0.22±0.05 ‰ (2σ, n = 9); Ikehata et al., 2008 } と良く一致した。試料 1 と試料 2 の銅同位体比は、それぞれ $\delta^{65}Cu$= 0.15±0.06 ‰ (2σ, n = 6)、$\delta^{65}Cu$ = 0.47±0.03 ‰ (2σ, n = 6) であった。前述したように、腐食作用により青銅器に緑青等が形成される際に、青銅部と緑青部との間で同位体分別が起こるため、腐食後の残存青銅の銅同位体比は、元の値を示さないことが予想される。今回は、ほぼ閉鎖系で外部への元素放出がないと仮定し、腐食相と残存青銅との混合物を測定しているため、得られた銅同位体比は、元の青銅器の同位体比を反映している可能性が高い。さらに、青銅器の製作過程での同位体分別が軽微であると仮定すると、試料 1 と試料 2 の銅同位体比は、それらを形成するのに使用した銅鉱石の値を表すと考えられる。銅同位体比を指標として、銅鉱石の種類や成因・産地（初生的 or 二次的、深成鉱床 or 浅成鉱

床）を推定する先行研究によると、深成鉱床を形成する初生的な銅鉱石は、$\delta^{65}Cu = 0\pm1$ ‰ 程度の銅同位体比を示すが、浅成鉱床を形成する二次的な銅鉱石は深成鉱床の銅鉱石よりも高い値を示すことが多い（例：Mathur et al., 2012）。したがって、本研究で分析した腐食した青銅器片の銅は、深成鉱床の初生的な銅鉱石由来である可能性が高いと推定された。

10. まとめ

今回は、堆積物中に含まれる微細金属片から、元の金属器の情報が得られる可能性を検討するため、新アッシリア時代のヤシン・テペ遺跡の墓室内で発見された金属濃集堆積物の化学組成や同位体比を予察的に分析した。金属濃集堆積物には、携帯型蛍光Ｘ線による測定から、リン・銅・錫・銀の濃集が確認され、その中には、ミリサイズの火成岩・堆積岩の岩片・骨片・数百ミクロンサイズの腐食した青銅と銀の微細金属片が含まれていた。腐食状態の検討から、墓室内は地下水の影響が少なく、ほぼ閉鎖系の環境であることが示唆された。そのため、腐食の進行が相対的に遅く、青銅の微細金属片の内部には、当時の情報を残している部分もわずかに確認された。腐食の少ない青銅片の部分には、当時の鋳造によると考えられる組織が残されており、その主成分組成から、当時の新アッシリアで流通していた低錫・少鉛タイプの青銅と大差がないことが推定された。また、銅同位体の分析から、本研究で分析した腐食した青銅器片の銅は、深成鉱床の初生的な銅鉱石由来である可能性が高いと推定された。結果的に、今回の墓室内堆積物は、地下水の影響が限定的であったため、金属器形成当時の情報をある程度推測することができた。今後は、より腐食の進行が速い土中に直接埋没した金属試料からの情報についても検討を進める予定である。

謝辞

ヤシン・テペ遺跡のサンプル資料の取得にあっては、中部大学による「ヤシン・テペ考古学プロジェクト」の了承のもとスレイマニヤ文化財局より国外持ち出し、分析の許可をいただきました。スレイマニヤ文化財局のカマル・ラシード・ラヒーム局長、スレイマニヤ博物館のハーシム・ハマー・アブドゥッラー館長ならびに文化財局職員、博物館職員の真摯なるご協力に対して記して感謝いたします。

引用文献

Adan-Bayewitz, D., Asaro, F. and Giauque, R. (2006) The discovery of anomalously high silver abundances in pottery from early Roman excavation contexts in Jerusalem. *Archaeometry*, 48, 377–398.

Curtis, J. (2013) *An Examination of Late Assyrian Metalwork with special reference to Nimrud*. P. 341, Oxford, Oxbow.

Goffer, Z. (1980) Archaeological Chemistry: A sourcebook on the applications of chemistry to archaeology. *Chemical Analysis, A series of Monographs on Analytical Chemistry and Its Applications* (Eds. P. J. Elving, J. D. Winefordner, and I. M. Kolthoff), vol. 55, p. 376, New York, Wiley.

Ikehata, K., Notsu, K. and Hirata, T. (2008) In situ determination of Cu isotope ratios in copper-rich materials by NIR femtosecond LA-MC-ICP-MS. J. *Anal. At. Spectrom*., 23, 1003-1008.

石原舜三，渡辺寧，内藤耕 (2002) Cordilleran Exploration Roundup 2002― 特にアジアの鉱物資源のポテンシャル評価について . 地質ニュース , 571, 46-59.

Lambert, J. (1997) Metals. In *Traces of the Past.*

Unraveling the Secrets of Archaeology Through Chemistry, pp. 168-213. Cambridge, Mass., Perseus Publishing.

Mathur, R., Ruiz, J., Casselman, M.J., Megaw, P. and van Egmond, R. (2012) Use of Cu isotopes to distinguish primary and secondary Cu mineralization in the Cañariaco Norte porphyry copper deposit, Northern Peru. *Miner. Deposita*, 47, 755-762.

中山健 , 岡崎正次 , Leka, G. (2011) 沈み込み帯域オフィオライトとその金属鉱床－アルバニア共和国ミルディタ・オフィオライトを例として－ . 資源地質 , 61, 77-94.

Nishiyama, S. (2020) Provincial control in the eastern reaches of the Assyrian Empire: a view from Yasin Tepe, Iraqi Kurdistan. In *the Reach of the Assyrian and Babylonian Empires, Case Studies in Eastern and Western Peripheries* (Eds. S. Hasegawa and K. Radner), pp. 45-71, Studia Chaburensia, 8, Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.

Scott, D. (1991) Metallography and microstructure of ancient and historic metals. *The J. Paul Getty Museum*, Los Angeles. pp.155.

Yamada, S. (2020) The conquest and reorganization of the land of Zamua / Mazamua in the Assyrian Empire. In *the Reach of the Assyrian and Babylonian Empires, Case Studies in Eastern and Western Peripheries* (Eds. S. Hasegawa and K. Radner), pp. 167-193, Studia Chaburensia, 8, Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.

横田勝 , 菅谷文則 , 三船温尚 , 小堀孝之 , 清水克郎 , 中井一夫 , 宮原晋一 , 清水康二 (2002) 古代青銅鏡の内部または表面で観察される純銅塊の出現形態を中心とした科学的調査 . 日本金属学会誌 , 66, 708-714.

イラン北東部サンギ・チャハマック遺跡の祭壇に見られる黒色物の地球化学的特徴とその起源物質

中野孝教[1]・古里節夫・倉田恵美子
千本真生・石田温美・常木 晃・三宅 裕
[1] 総合地球環境学研究所

要旨

サンギ・チャハマック（Tappeh Sang-e Chakhmaq）はイラン北東部に位置し、同地域から中央アジアにおける最も古い先土器新石器時代の遺跡である。住居跡には 1.5m 四方程度の遺構があり、大きさ数 cm の円礫～亜円礫からなる厚さ数 cm の層と黒色の薄層がセットとなって積み重なっている。この薄層の黒色物には炭化した植物片が見られるが、タール状であることから、アスファルトなど植物以外の物質の利用も示唆される。予察的ながらＸ線回折と赤外分光分析、蛍光Ｘ線分析を行った結果、黒色物は方解石と石英に富み、炭素など植物灰由来の元素を含むいっぽうで、アルミニウムや鉄、チタンなど植物にもアスファルトにも微量な元素を数％以上含んでいた。赤外分光スペクトルにも、有機物を特徴づける炭素 - 水素結合は見られず、両鉱物や粘土鉱物の存在を示している。黒色物の元素組成は、ケイ酸塩鉱物を主とし（~60%）、それに植物灰（~30％）と方解石（~10％）を加えた三成分の混合物として説明可能であり、各成分の割合から日干しレンガのような物質が母材であったと考えらえる。レンガ内部の植物が炭化することで黒色化した可能性が示唆され、新石器時代における火や物質を利用した技術やその広がりを明らかにする上で、黒色物は有用な情報をもたらすと期待される。そのためには、黒色物とともに祭壇礫、土器さらに周辺の岩石や堆積物について、地球化学的・鉱物学的な特徴を明らかにし互いに比較することが有効と考えられる。

1. はじめに

人々の定住が進み集落が発達し、後期には都市化が始まった新石器時代は、土器の有無により先土器新石器時代と土器新石器時代に区分される。同時代の遺跡はレバント地方からアナトリア地方にかけて多く見られ、先土器新石器時代はA（Pre-Pottery Neolithic A:10000~8800 BCE）とB（Pre-Pottery Neolithic B:8800~6500 BCE）に二分されているが、新石器化の伝播や拡散、交流については不明な点が多い。イラン高原北東部のタペ・サンギ・チャハマック（Tappeh Sang-e Chakhmaq）遺跡は、同地域周辺から中央アジアにおける最古の遺跡で、増田精一らにより 1969 年に発見され、1971 年から 1977 年にかけて発掘された。炭素 14 年代からは、先土器新石器時代後期に相当する西部（7200~6600 BCE）と土器新石器時代前期に相当する東部（6200~5200 BCE）に分けられており（Nakamura, 2014）、様々な彩文土器や、粘土や石で作られた像、黒曜石、矢じり、人骨、動物骨、

小麦などの多くの遺物が発見されている（Tsuneki, 2014; Furusato, 2014）。炉や土器の形態や小麦の多様性には、中央アジア最古のジェイトウン文化（Djeitun）との類似性が強く見られる（Roustaei, 2014; Tsuneki, 2014; Fuller, 2014）。新石器化の拡散や多様性を明らかにする上で、本遺跡は重要な位置を占めている。

先土器新石器時代 B は家畜化も進み、日干しレンガを用いた住居様式も円形や楕円形から長方形へと変化し、石灰プラスターや石膏プラスターが広く利用された（Kingery et al., 1988）。石灰プラスターは、石灰岩の熱分解によって生じた生石灰に水を加えて消石灰を作り、さらに大気中の二酸化炭素と反応して方解石になったものである。野外に穴を掘り石灰岩の塊を木で燃やして生石灰を作ったと考えられており、床や壁の漆喰や接着剤のほか土器や彫刻など多面的に利用されている（Goren et al., 2008）。レバント地方では、そのような火を利用した高度な技術が先土器新石器時代後期に広く普及したと言われている（Kingery et al., 1988）。タペ・サンギ・チャハマック遺跡では、石膏プラスターのみで石灰プラスターは発見されていないが、長方形の住戸跡からは炉や囲炉裏などが発見されている。土器は石英や長石を主とする物質を 900 〜 1000℃ まで加熱して作られたと考えられている（Kurosawa, 2014）。興味深いのは、東部の遺跡の住居内で発見された 1.5m 四方程度の大きさをもつ遺構で、1cm 程度の円礫〜亜円礫からなる厚さ数 cm の層と黒色でタール状の薄層（以下、黒色物）が、セットとなって積み重なっている。黒色物には植物灰も見られることから、遺構は植物を燃やし祭壇として利用されたと考えられている。しかし植物だけを燃焼しても黒色で固体の薄層にはならないので、植物以外の物質が利用されていた可能性もある。天然アスファルトは旧石器時代から接着、防水、コーキング、建材など多目的に利用されていた（Connan et al., 2006; Anntonio et al., 2018）ことから、アスファルトを敷き植物と一緒に燃焼した可能性などもある。土器には生石灰も確認されているが、新石器時代の西アジア東部で火や石灰などの物質を利用する技術については不明な点が多い。

古代における火の利用、遺構や遺物の起源や製造技術については、様々な自然科学的手法が用いた検討がなされている。遺物を構成する無機物の起源については、元素組成や鉱物組成などの情報、有機物については赤外分光スペクトルなどの情報が有効である（Karkanas, 2007; Monnier et al., 2017）。タペ・サンギ・チャハマック遺跡の遺物や写真、調査に関する資料は筑波大学に保管されており、現在、それらの整理が進められている。火や物質の利用技術やその範囲の解明には、未知の点が多い黒色物の物質化学的特徴を明らかにし、それを基に起源物質について検討することが重要である。黒色物の一部について蛍光 X 線を用いた元素組成分析、X 線回折による鉱物の同定および有機物の識別に有効な赤外線分光スペクトル分析がなされており、本研究では、その地球化学的・鉱物学的な検討を行った。

2. 試料と分析法

黒色物から典型的な部分を取り出しメノウ乳鉢で粉末にした。蛍光 X 線分析は、四ホウ酸リチウム（Li_2BO_4）をプレス加工したブリケットの上に粉末試料を展開し、フィリップス社製波長分散型蛍光 X 線装置 Magix（PW2424）を用いて行った。測定元素は、ケイ素を除く主要 10 元素および微量 3 元素であり、ファンダメンタルパラメー

ター（FP）法を用いて濃度を求めた。

X 線回折分析は、アルコールを用いて粉末試料をスライドガラスに展開・乾固した後、リガク社製デスクトップ X 線回折装置 MiniFlex を用いて行った。測定条件は、加速電圧 30kV、電流 15mA、Cu-X 線管、走査範囲 5° ～ 90°、ステップ幅 0.02°、計測時間 2.0sec. である。鉱物同定は、付属の定性分析プログラムを用いて行った。

赤外分光分析は、黒色物から手術用メスなどを用いて 0.5mm 程度の試料片を切り出し、薄く押しつぶした後、厚さ 1mm 程度に裁断した臭化カリウム（KBr）の結晶板の間に挟み、油圧プレスを用い約 7 トンで加圧整形して測定試料とした。フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光（株）社製 FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。天然アスファルトを利用した可能性が示唆されることから、アスファルトもあわせて分析した。これらの分析はパレオ・ラボで行った。

3. 結果

3-1. X線回折と赤外線分光分析

黒色物の X 線回折パターン（図 1）は、石英（θ:26.6°，20.9°，36.5°，38.5°）および方解石（θ:29.4°，39.4°）のピーク位置と一致する。両鉱物以外の明瞭なピークは認められないが、土器の顕微鏡観察によれば、両鉱物のほか緑泥石の存在が確認されている（Kurosawa, 2014）。12° 付近にブロードなピークが見られ、粘土鉱物（緑泥石など）の存在が示唆される。

図 2 に黒色物とアスファルトの赤外線透過スペクトルの結果を示す。黒色物については、10 の吸収帯（波数：3619、3421、2516、1757、1581、1425、1027、875、777、714cm^{-1}）が認められ透過率が減少している。赤外線の吸収は分子の官能基によって異なり、特定の波長や波数に吸収

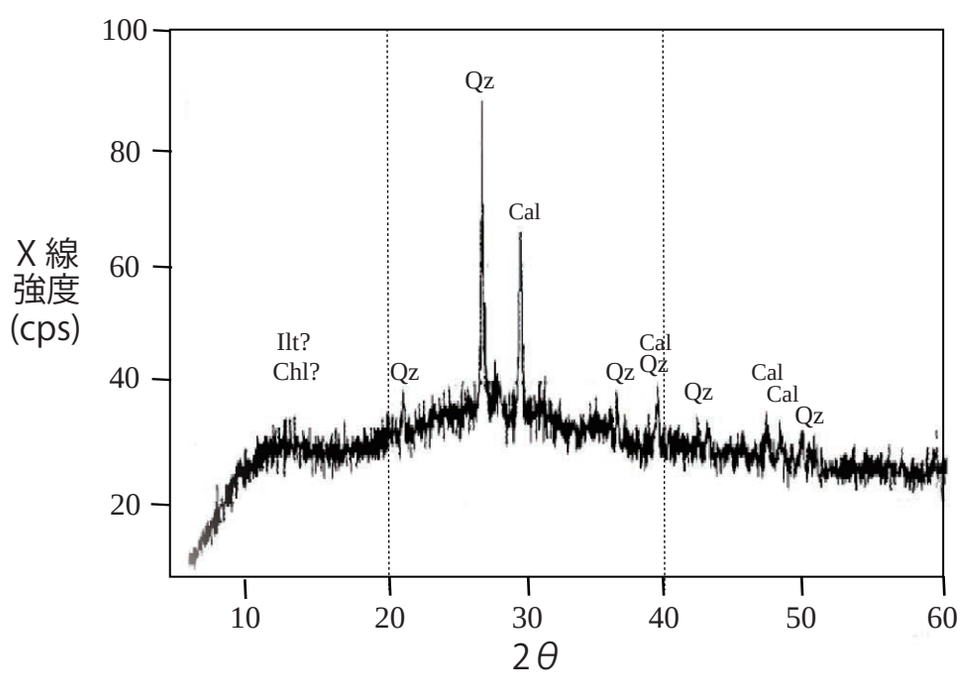


図 1　黒色物の粉末 X 線パターン（Qt: 石英 , Cal: 方解石 , Chl: 緑泥石 , Ilt: イライト）

帯が現れる。アスファルトは 2900 cm^{-1} 前後の波数に顕著な吸収帯がある。この吸収帯は脂肪族 C-H の伸縮運動によるものである（Akrami et al., 1997）が、C-H 基は植物だけでなく生物に共通して存在する。黒色物に C-H 結合を示す吸収帯は見られないが、アスファルトの赤外分光スペクトルは 600℃ 付近で消滅する（吉田ら , 1986；Xu and Huang, 2010）。このことは、黒色物はアスファルトを含んでいないことを示す一方で、植物やアスファルトなどの有機物に由来する物質が含まれていたとしても、高温での燃焼によって無機化していることを示唆する。

方解石（Ca 炭酸塩）は他の鉱物と異なり 1410 cm^{-1} と 1470 cm^{-1} の間に C-O 結合に起因する特徴的な吸熱バンドがある（Kaufhold et al., 2012）。1425、875、714cm^{-1} の各吸熱帯は、方解石に見られる 1424 cm^{-1}、876 cm^{-1}、712 cm^{-1} の吸収帯と一致する（Ohno and Erich, 1990；Reig et al., 2002；Glavcheva et al., 2014）。1581 cm^{-1} は COO^- の非対称伸縮振動（1590cm^{-1}；例えば水渡、1968）、1757 cm^{-1} も CO の伸縮振動によると考えられる。黒色物だけでなくアスファルトも 1400 cm^{-1} 辺りだけでなく、1000 cm^{-1} 以下にも吸熱帯が見られる。これらの吸熱ピークは炭質物による可能性もあるが、方解石でも説明可能である。石英は 1090cm^{-1}，800cm^{-1}、780cm^{-1} 付近に吸熱ピーク（佐藤 , 1972；Reig et al., 2002）がある。黒色物の 777cm^{-1} の吸収帯は石英に相当すると考えられる。方解石と石英の存在は X 線回折から確認されており、赤外線吸収スペクトルの結果と整合する。

黒色物に見られる 1425cm^{-1} の強い吸熱帯は Si-O 結合によるものであり、石英などの無水ケイ酸鉱物だけでなく粘土鉱物によると考えられる。OH の伸縮運動は 3450 ～ 3750cm^{-1} に現れる（Kaufhold et al., 2012）。3619cm^{-1} と 3421cm^{-1} に見

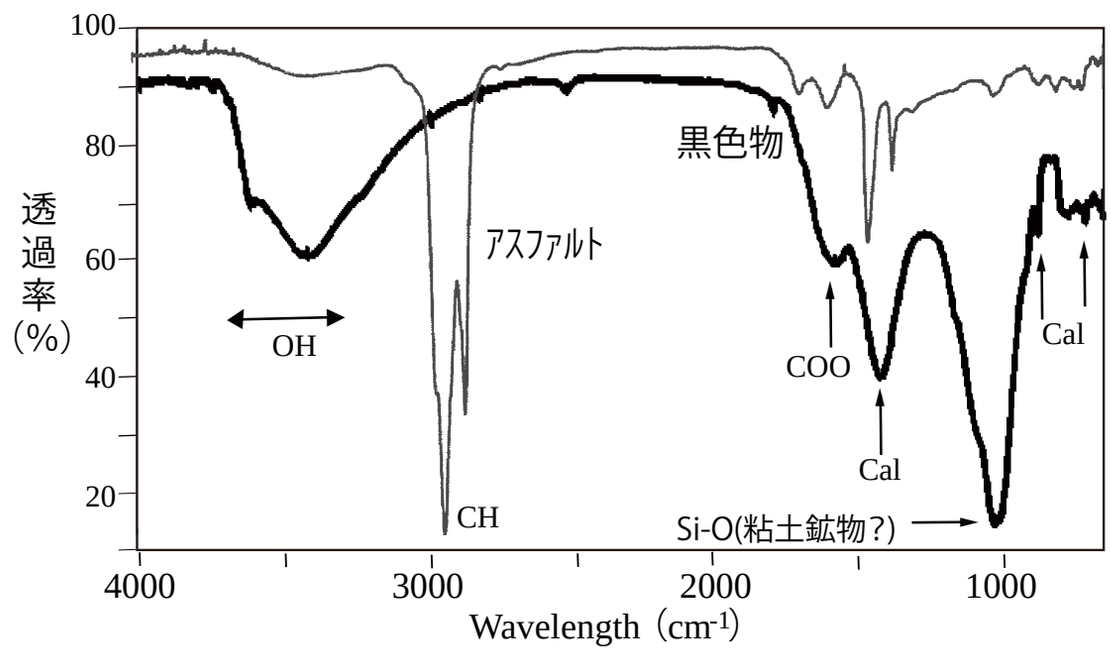


図 2　黒色物とアスファルトの赤外線透過スペクトルパターン（Qt: 石英 , Cal: 方解石 , Chl: 緑泥石 , Ilt: イライト）

られるブロードなピークは OH の伸縮振動によるものである。OH は植物などの有機物にも普遍的に存在するが、粘土鉱物（Karkmes et al., 2012）でも説明可能である。このように赤外線吸収スペクトルの結果も、黒色物が主に鉱物で構成されていることを示している。

3-2. 元素組成分析

蛍光 X 線分析の結果を表 1 に示す。二酸化炭素（CO_2：46％）濃度が最も高く、カルシウム（CaO：16.86％）も高い。黒色物の CaO が方解石（$CaCO_3$）にすべて由来するとした時の CO_2 濃度（13.25％）は、実際の CO_2 濃度の 30％程度である。このことから、黒色物は、植物灰に由来する炭素のほか他の元素も含んでいると考えられる。いっぽうで、植物やアスファルトの主成分でないアルミニウム（Al_2O_3：18.53％）はカルシウムより高濃度である。鉄（Fe_2O_3：5.66％）やチタン（TiO_2：1.07％）など岩石の主成分で動植物には微量な元素も高濃度である。これらの結果は、黒色物は土器と同じように、ケイ酸塩岩に由来する物質を相当量含んでいることを示している。

土器などの原材料は一般に遺跡周辺の土や堆積物が利用されているが（Arnold, 1985；千本 , 2017）、それらの元素組成は母材である岩石によって異なる。タペ・サンギ・チャハマック遺跡周辺の土壌や堆積物、岩石の地球化学データの報告例はないが、石灰岩などの方解石を主とする Ca 炭酸塩岩が広く分布し、砂岩や泥岩、閃緑岩、火山岩（玄武岩～安山岩質）などのケイ酸塩岩を伴っている。いっぽう遺跡は扇状地にあることから、河川堆積物が土器や黒色物に利用された可能性が高い。遺跡の土器は主に石英や長石、雲母などで構成されており、母材が花崗岩質であったことを示唆する（Kurosawa, 2014）。しかし塩基性岩に多い輝石の他、地殻には少ない超塩基性岩を特徴づけるクロムスピネルも報告されている。黒色物についても、様々な岩石の寄与が示唆されるため、河川堆積物とともに平均地殻との比較を試みた。

表 1　黒色物の元素組成

分析元素	濃度	測定誤差
(wt.%)		
CO_2	46.00	0.70
TiO_2	1.07	0.01
Al_2O_3	18.53	0.04
Fe_2O_3	5.66	0.03
MgO	6.06	0.03
MnO	0.089	0.00
CaO	16.86	0.03
Na_2O	1.74	0.02
K_2O	3.18	0.01
P_2O_5	0.57	0.01
(ppm)		
S	670	20
Cr	116	10
Cu	88	10
Zn	482	10

地殻は元素組成が異なる様々な岩石で構成されている。その平均値である平均地殻の主要元素組成については 20 世紀初期から様々な方法で推定されており、安山岩や閃緑岩に代表される中性岩的な特徴を示すことが知られている（Faure, 1991）。いっぽう微量元素については、信頼度の高い分析が 20 世紀後半になって可能になったこともあり、平均地殻の主要・微量元素両者の報告

は 4 例に過ぎない。ここでは主要元素については 11 例、微量元素については 4 例の報告値を用いその平均値を用いた。

黒色物に利用されたと考えられる堆積物は、主に岩石が風化した生じた砂や粘土で構成される。風化に伴い岩石の元素組成は変化するが、河川堆積物のように砂粒子が主体である場合には、多くの元素について、風化に伴う元素組成の違いは小さいと考えられる。日本は大陸地殻に比べて火山が多いものの、国土が狭いわりに様々な岩石が分布している。全国 3024 地点で採取された河川堆積物について、多数の元素の濃度が測定されている（産総研 , 2004）。その元素組成はデータベース化されており、流域の地質による広域的な変化が知られている。ここでは平均地殻と堆積物の組成を用いて検討した。さらに比較のために、被子植物と土壌に関する報告値（高橋 , 1992）を用いた。

黒色物や植物に最も多い炭素は、一般的なケイ酸塩岩には微量で未分析な例も多く、含まれている場合も炭酸塩鉱物として存在することが多い。ケイ素（Si）は岩石の主成分であるが、今回の黒色物については測定されていない。また植物に含まれている無機元素は有機物と結合している場合があり、必ずしも酸化物として存在している訳ではない。黒色物の地球化学的特徴を明らかにするには、岩石や植物にも共通して含まれている元素の酸化物ではなく、元素そのものの濃度で比較するほうが適している。このため、黒色物に含まれている 10 元素（C, Ti, Al, Fe, Mg, Mn, Ca, Na, K, P）を選び、その元素組成の特徴を岩石や植物と比較検討した（表 2）。

表 2　黒色物、平均地殻、日本の河川堆積物、植物、土嚢の元素組成

元素	黒色物	平均地殻	日本河川	被子植物	土嬢
(wt.%)					
C	12.55	0.12	-	45.40	2.00
Ti	0.64	0.51	0.49	-	-
Al	9.81	8.73	5.75	0.05	7.10
Fe	3.96	5.50	4.33	0.01	3.80
Mg	3.65	2.43	1.72	0.32	0.50
Mn	0.07	0.09	0.10	-	-
Ca	12.05	4.16	1.83	1.80	1.37
Na	1.29	2.38	1.60	0.12	0.63
K	2.64	1.97	1.44	1.40	1.40
P	0.28	0.10	0.07	0.23	0.07
	46.94	26.00	17.32	49.33	16.87
(ppm)					
Cr	116	96	78	-	-
Cu	88	170	44	-	-
Zn	482	252	137	-	-

平均地殻はFaure (1991）および野津・清水（2003）より引用.
被子植物と土壌は高橋（1992）より引用.

3-3. 元素組成の特徴

黒色物の元素組成は、炭素とカルシウムを除けば平均地殻や河川堆積物と類似している。しかし上記したように未測定の元素もあり、全体の濃度が異なるために、黒色物とその起源となる物質を元素組成から推定するのは危険である。黒色物の炭素は方解石と植物灰の両者に由来するが、Ca は両物質だけでなくケイ酸塩鉱物にも含まれている。黒色物に含まれている表層地質物質の特徴を明らかにするため、黒色物と岩石の主要元素であるいっぽうで、植物には微量なアルミニウム（Al）を指標に用いて、各元素との濃度の割合を検討した。

各元素と Al の濃度比は、大きく 3 つのグループ（A, B, C）に分けられる（図 3）。黒色物の Ca/Al は平均地殻や河川堆積物と比べて明らかに高く、P/Al や Zn/Al も高い傾向が見られる（グループ A）。これに対して、Fe/Al と Mn/Al（グループ B）は平均地殻や河川堆積物に比べてやや低い傾向が見られるが、グループ A ほどの違いは見られない。他の多くの元素（グループ C）は、これらケイ酸塩岩と同じ範囲に入っている。

植物の主成分である水素、窒素、酸素、炭素は、燃焼により水蒸気や二酸化炭素、二酸化窒素などとなって逸散し、植物灰には揮発しない元素が存在する。今回対象とした主要元素でも、炭素は二酸化炭素として失われ、Na や K などのアルカリ元素も一部揮発するが、他の主要元素は 800°C でもほとんど揮発しない（野中ら , 1981）。したがって黒色物に含まれている炭素や Ca に代表されるグループ A の元素を除けば、基本的にケイ酸塩岩に由来すると考えて良いだろう。植物は岩石に比べて P を多く含み、P/Al が高いという特徴

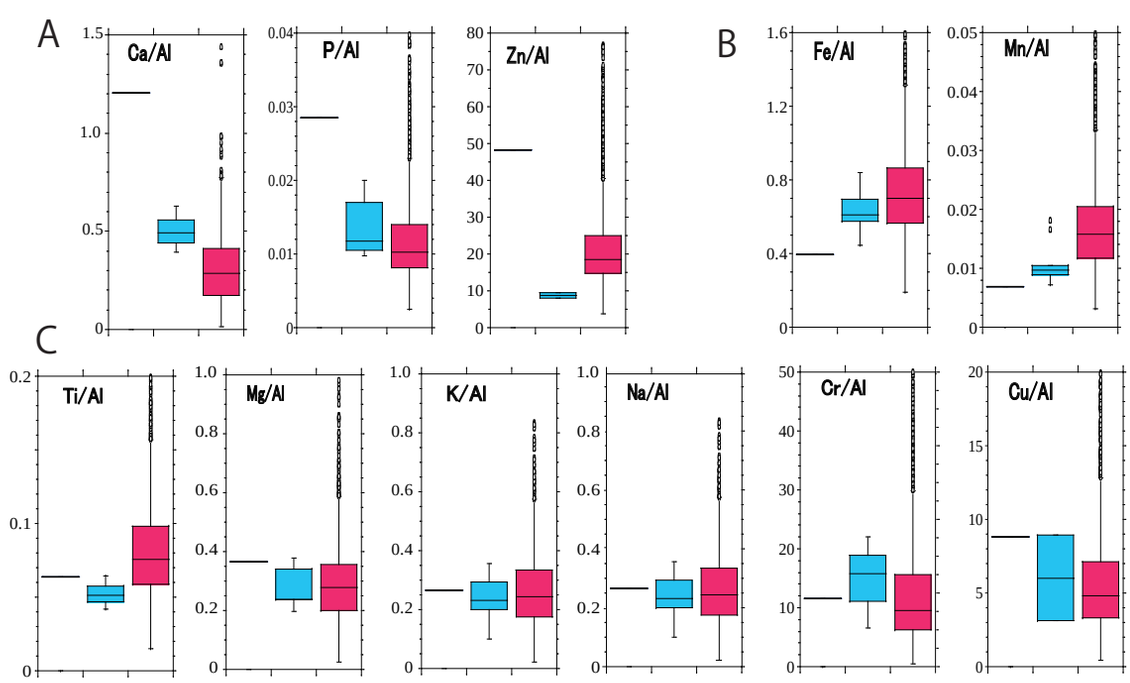


図 3　黒色物（黒線）、平均地殻（青色）、日本の河川堆積物（赤）に含まれている元素のアルミニウムに対する濃度比の箱ひげ図

がある。したがって黒色物の P/Al が高い要因は植物灰によると考えられ、P の一部は植物起源である。

微量元素のうち硫黄（S）の濃度は低く、硫化物や硫酸塩鉱物は存在したとしても無視できるほど微量である。黒色物に石膏プラスターの寄与は認められない。いっぽうクロム（Cr）や銅（Cu）は平均地殻や河川堆積物と同程度であるが、亜鉛（Zn）は明らかに高い傾向が見られる。Bastam 流域には亜鉛鉱山が知られており（Hisada, 2014）、その影響を受けているのかも知れない。

4. 議論

4-1. 黒色物に含まれている方解石、植物灰、ケイ酸塩物質の存在割合

黒色物は方解石と植物灰、ケイ酸塩鉱物を主とする物質（以下、ケイ酸塩物質）の混合物と考えられる。したがって、黒色物に含まれている元素（X）の濃度（$C_{x,黒色物}$）は、次式のように、方解石（以下、炭鉱）とケイ酸塩物質（珪鉱）、植物灰（植灰）の 3 つを端成分とする混合物として表すことができる。

$$C_{x,黒色物}=f_{炭鉱}\cdot C_{x,炭鉱}+f_{植灰}\cdot C_{x,植灰}+f_{珪鉱}\cdot C_{x,珪鉱} \quad (1)$$

$$f_{炭鉱}+f_{植灰}+f_{珪鉱}=1 \quad (0<f_{炭鉱},f_{植灰},f_{珪鉱}<1) \quad (2)$$

ここで $f_{炭鉱}$、$f_{珪鉱}$、$f_{植灰}$は黒色物に含まれている各端成分の割合であり、$C_{x,炭鉱}$、$C_{x,珪鉱}$、$C_{x,植灰}$は各端成分に含まれている元素 X の濃度を示す。

方解石は Al を含まないので、（1）式は

$$C_{Al,黒色物}=f_{植灰}\cdot C_{Al,植灰}+f_{珪鉱}\cdot C_{Al,珪鉱}$$

となる。植物灰からの Al の寄与を無視できる場合には、黒色物の Al 濃度（$C_{Al,黒色物}$=20.89％）に対して、酸素を取り除いたケイ酸塩岩の Al 濃度（$C_{Al,黒色物}$）は 30 ～ 50％の範囲に入る。したがって $f_{珪鉱}$は 0.4 ～ 0.7 の範囲に入る。植物の Al 濃度は一般に微量なことから、$f_{珪鉱}$は 0.4 以上であると考えられる。

植物灰の元素組成は植物と同じではないが、上記したように、ガス成分となる元素などを除けばほとんどの元素は蒸発しない（野中ら , 1981）ので、元素の割合は植物と余り変わらないと仮定できる。黒色物の Ca（25.67％）が全て方解石による場合、方解石の炭素濃度（$C_{C,炭鉱}$）は 7.701％（25.67x12/40）となるので、植物灰起源の無機炭素の濃度は 19.029％となる。すなわち、$f_{炭鉱}$と $f_{植灰}$の間に次式が成立することになる。

$$f_{炭鉱}/f_{植灰}=7.701/19.029=0.4047 \quad (3)$$

Ca はケイ酸塩岩にも含まれているので、この値は $f_{炭鉱}/f_{植灰}$の最大値であるが、黒色物の Ca 濃度を説明するには、$0.4<f_{珪鉱}<0.7$ という条件を満足しなければならないので、$0.3<f_{炭鉱}+f_{植灰}<0.6$　となる。(3) より、$f_{炭鉱}\fallingdotseq 0.4047\cdot f_{植灰}$であることから　$0.214<f_{植灰}<0.427$ という条件を満足することになる。

このように各端成分は、アルミニウム濃度やカルシウム濃度に特徴があるので、その割合は、$0.4<f_{珪鉱}<0.7$、$0.214<f_{植灰}<0.427$、$0.087<f_{炭鉱}<0.141$ を満足することになる。ケイ酸塩物質の割合が最も多く、方解石の割合は最も少ない。黒色物が Ca を多く含み方解石が存在することは、石灰岩あるいは石灰プラスターの二つの可能性を示唆する。しかし方解石の存在割合は多くても 14％程度であることから、黒色物の主体は石灰プ

ラスターではないと考えられる。

4-2. 黒色物の起源物質の割合とケイ酸塩物質の元素組成

黒色物の元素組成が (1)(2)(3) を満足し、黒色物に最も多いケイ酸塩物質の組成がケイ酸岩と妥当であるか、以下に検証する。黒色物に含まれている主要 10 元素の濃度が目的変数であり、植物灰、方解石、ケイ酸塩物質の 10 元素の濃度および端成分の割合が説明変数になる。混合の評価には、各端成分を構成する元素濃度の総和が黒色物と同じように規格化する必要があり、今回は全濃度の合計を 100、すなわち元素濃度を百分率で検討した。また（3）より、端成分の割合は植物灰（$f_{植灰}$）のみを独立変数として検討した。

方解石は $CaCO_3$ とし、植物灰の原材料である植物の元素組成は、高橋（1992）の示した被子植物の平均値を用いた。植物灰の元素のうち炭素は燃焼とともに減少し、Ca や K、P などの元素の濃度は上昇する。上記したように、黒色物の炭素の 65％以上は植物灰に由来する無機炭素と考えられる。いっぽう $f_{植灰}$ は 0.214 より多いので、黒色物の P（0.61％）を説明するためには、植物灰の P 濃度が 2.85％以下という条件を満足しなければならない。植物の C 濃度は 92.03％、P 濃度は 0.47％なので、植物灰の C 濃度は 42.07% 以上である必要がある。このことは、植物の炭素の 40％以上が、黒色物として残っていることを意味している。

植物灰のもととなる植物の元素濃度の割合が燃焼によって変化しないと仮定し、燃焼に伴う元素濃縮が異なる 3 例について計算した結果を表 3 に示す。A は植物の炭素の減少がなく 92％のままであった場合、B は 50％、C は 45％まで減少した場合である。いずれの場合も、ケイ酸塩物質の組成を少し変えるだけで黒色物と同じ元素組成を得ることができる。炭素の減少に伴い $f_{植灰}$ は 0.26 から 0.32 へと増加、いっぽう $f_{珪鉱}$ は 0.63 から 0.57 と減少しているが、前者は 0.30±0.04、後者は 0.60±0.03 程度の変化に過ぎない。$f_{炭鉱}$ は 0.11 から 0.12 と増加しているが、その変化はわずかである。またケイ酸塩物質を構成する元素の多くは、平均地殻や河川堆積物と類似した濃度である。

このように黒色物の起源物質と考えられるケイ酸塩物質と植物灰、方解石の割合は、6：3：1 程度であったと推定できる。$f_{炭鉱}$ は 0.1 程度と最も少なく、方解石つまり石灰の量はそれほど多くない。これは、石灰プラスターが黒色物の母材でないことを示しており、同遺跡で確認されていないことと調和的である。

黒色物の多くはケイ酸塩鉱物を主としているが、推定したケイ酸塩物質の元素組成は平均地殻に類似しているものの、Ca 濃度は明らかに高い。この結果は、方解石との反応によって生じた含 Ca ケイ酸塩鉱物の存在による可能性がある。方解石が石灰岩に由来するのか、あるいは乾燥地域の土壌や堆積物に多い方解石に由来するのかは、今回の結果からは結論できない。しかし方解石の元素組成や炭素・酸素・Sr 同位体比は、起源の違いによって異なる可能性がある。今後の検討が期待される。

一方で、植物灰の割合は 30％程度に達している。日干し煉瓦の強度の向上や熱伝導の改善のために植物繊維や藁などを加えるが、藁の場合、最適な容積量は 30 ～ 40％と言われている（Calatan et al., 2016）。しかしケイ酸塩鉱物や方解石の比重（2.7 前後）に対して、藁の比重は 0.4 ～ 0.5 程度と 5 分の 1 程度であり、日干し煉瓦に含まれてい

表 3 植物燃焼に伴う黒色物に含まれている植物灰（$f_{植灰}$）、方解石（$f_{炭鉱}$）、ケイ酸塩物質（$f_{珪鉱}$）の割合とケイ酸塩物質の元素組成

炭素	(1)	(2)	(3)	(4)	
濃度	92	60	50	45	
$f_{植灰}$	0.264	0.289	0.308	0.323	
$f_{炭鉱}$	0.107	0.117	0.125	0.131	
$f_{珪鉱}$	0.630	0.594	0.567	0.546	
	ケイ酸塩物質の組成 (wt.%)				平均地殻
SiO_2	60.00	60.00	60.00	60.00	60.15
TiO_2	0.94	0.99	1.03	1.07	0.87
Al_2O_3	14.91	15.70	16.35	16.88	15.25
Fe_2O_3	4.98	5.25	5.47	5.65	7.94
MgO	5.22	5.34	5.44	5.52	4.06
MnO	0.08	0.08	0.09	0.09	0.11
CaO	9.54	8.80	8.18	7.68	5.43
Na_2O	1.50	1.53	1.55	1.57	3.37
K_2O	2.43	2.04	1.71	1.45	2.68
P_2O_5	0.40	0.28	0.18	0.10	0.14
合計	100	100	100	100	100

(2)(3)(4) は植物 (1) の燃焼に伴い、植物灰に含まれている炭素濃度

ケイ酸塩物資に含まれている各元素の酸化物濃度は、SiO2 濃度を平均地殻に近い 60%にした時の値で、各元素の酸化物濃度の合計を 100%に規格化

る植物灰の割合は、重量比で言えば 5 ～ 8%程度に過ぎない。黒色物には、ケイ酸塩物質に石灰と植物を加えて作った日干し煉瓦のような薄板に、植物を載せて燃やして生じた植物灰が含まれているのかも知れない。

今回の結果のみでは黒色化の原因は明らかでないが、酸素が十分に供給されない環境で、日干し煉瓦に含まれている植物も燃焼し、炭質物になったために黒色になった可能性がある。アスファルトも 600℃ 以上になれば、O-H、C-H、C-O などの官能基はなくなるので、アスファルトにケイ酸塩岩を加えて植物灰とともに高温で燃焼させた可能性もある。しかし室内で黒煙が発生しないような環境であったと考えれば、植物が燃焼媒体の主役であったとしたほうが考えやすい。

5. 結論

タペ・サンギ・チャハマック遺跡において、祭壇として利用されていたと考えられる室内の遺構に見られる特徴的な黒色物について、蛍光 X 線分析、X 線回折、赤外線分光分析によるデータを解析した結果、以下の点が明らかになった。

黒色物は植物灰に由来する炭素に富みリンを含むいっぽうで、石英や方解石などの無機鉱物が多く、植物などの有機物に少ないアルミニウムや鉄、チタンを数％以上含んでいた。

黒色物の元素組成は、ケイ酸塩岩、植物灰、方解石を端成分とする混合で説明できる。ケイ酸塩岩の割合は 60％前後で最も多く、植物灰由来の元素も見られるが、方解石の割合は 10％と最も少ない。ケイ酸塩岩は Ca に富み、石灰との反応により生じたケイ酸塩鉱物の存在が示唆される。

黒色物の母材は、含アルミニウムケイ酸塩鉱物に石灰岩と植物を加えたもので、日干し煉瓦と同じような物質であったと考えられる。煉瓦を薄板にし、その上に植物を載せて燃やすことで、煉瓦内の植物が炭化したために黒色になった可能性が考えられる。

遺跡には花崗岩的な物質を高温で燃焼した多くの土器が発見されている。黒色物をはじめ土器や遺構の礫、遺跡周辺の堆積物や石灰岩、植物などを含めて総合的な検討を進めることで、火と物

質を利用した新石器化の技術や文化の解明が進むと期待される。

引用文献

千本真生、金成太郎、柴田徹 (2016) ブルガリア前期青銅器時代における土器生産と集落間関係：岩石学・化学的手法による土器胎土分析からのアプローチ . 古代オリエント博物館研究紀要, v .36, 13-35

万木正、岩田ひろ、大熊道男 (1975) セルロースの熱分解 . 日本化学会誌，4, 733.

野津憲治、清水洋 (2003) マントル・地殻の地球化学 . 日本地球化学会監修，地球化学講座 3，培風館，203 p.

野中信博、樋口英雄、浜口博、戸村健児 (1981) 植物試料の乾式灰化に伴う元素の損失 . BUNSEKI KAGAKU, 30, 599–604.

水渡英二 (1968) 粉体としての炭酸カルシウム . 石膏と石灰，94, 87–90. https://doi.org/10.11451/mukimate1953.1968.87

佐藤公隆 (1973) 石英粉末の赤外吸収スペクトルに対する粉砕法の影響 . JAPAN Anal., 22, 824–831. https://doi.org/10.16309/j.cnki.issn.1007-1776.2003.03.004.

産業技術総合研究所 (2004) 日本の地球化学図 . https://gbank.gsj.jp/geochemmap/data/download.htm.

高橋英一 (1992) 元素からみた生物の世界 . 日本農薬学会誌 , 17, 291–296.

吉田明、鏑木裕、菱山幸宥 (1986) 低温処理炭素の FT-IR. 炭素 , 104–107.

Akrami, H.A., Yardim, M.F., Akar, A., Ekinci, E., (1997) FT-i.r. characterization of pitches derived from Avgamasya asphaltite and Raman-Dinçer heavy crude. *Fuel*, 76, 1389–1394. https://doi.org/10.1016/S0016-2361(97)00100-2.

Arnold, Dean E., (1985) *Ceramic Theory and Cultural Process*. Cambridge: Cambridge University Press.

Connan, J., Nissenbaum, A., Dessort, D., (1992) Molecular archaeology : Export of Dead Sea asphalt to Canaan and Egypt in the Chalcolithic-Early Bronze Age (4th-3rd millennium BC). *Geochim. Cos mochim. Acta,* 56, 2743–2759.

Faure, G., (1991) *Principles and Applications of Inorganic Geochemistry*. MACMILLAN, 626 p.

Fuller, D., (2014) Charred remains from Tappeh Sang-e Chakhmaq, and a consideration of early wheat diversity on the eastern margins of the Fertile Crescent. Tsuneki, A eds. *Proceedings of Tappeh Sang-e Chakhmaq and Beyond*, 33-36.

Furusato, S., (2014) Figurines of Tappeh Sang-e Chakhmaq. Tsuneki, A eds. *Proceedings of Tappeh Sang-e Chakhmaq and Beyond*, 23-26.

Glavcheva, Z.I., Yancheva, D.Y., Kancheva, Y.K., Velcheva, E.A., Stamboliyska, B.A., (2014) Development of FTIR spectra database of reference art and archaeological materials. *Bulg. Chem. Commun.*, 46, 164–169.

Goren, Y., Goring-Morris, A.N., (2008) Early pyrotechnology in the near east: Experimental lime-plaster production at the pre-pottery neolithic B site of Kfar HaHoresh. Israel. *Geoarchaeol.*, 23, 779–798. https://doi.org/10.1002/gea.20241

Hisada, K., (2014) Geologic setting of Tappeh Sang-e Chakhmaq. Tsuneki, A. eds. *Proceedings of Tappeh Sang-e Chakhmaq and Beyond*, 1-4.

Kaufhold, S., Hein, M., Dohrmann, R., Ufer, K., (2012) Quantification of the mineralogical composition of clays using FTIR spectroscopy. *Vib. Spectrosc.,* 59, 29–39. https://doi.org/10.1016/j.vibspec.2011.12.012

Kingery,D., Vandiver, P.B., Prickett, M., (1988) The Beginnings of Pyrotechnology, Part II: Production and Use of Lime and Gypsum Plaster in the Pre-Pottery Neolithic near East. *J. Field Archaeol*, v. 15, No. 2, 219-244.

Kraszkiewicz, A., Kachel-jakubowska, M., Niedziolka, I., (2017) The chemical composition of ash from the

plant biomass in terms of indicators to assess slagging and pollution of surface. *Fresenium. Environ. Bull.*, 26, 6383–6389.

Kurosawa, M., (2014) Mineralogical study of pottery from Tappeh Sang-e Chakhmaq. Tsuneki, A. eds. *Proceedings of Tappeh Sang-e Chakhmaq and Beyond*, 19-22.

Monnier, G., Frahm, E., Luo, B., Missal, K., (2017) Developing FTIR microspectroscopy for analysis of plant residues on stone tools. *J. Archaeol. Sci.*, 78, 158–178. https://doi.org/10.1016/j.jas.2016.12.004

Nakamura, T., (2014) Radiocarbon dating of charcoal remains excavated from Tappeh Sang-e Chakhmaq. Tsuneki, A. eds., *Proceedings of Tappeh Sang-e Chakhmaq and Beyond*, 9-12.

Ohno, T., Susan Erich, M., (1990) Effect of wood ash application on soil pH and soil test nutrient levels, Agric. *Ecosyst. Environ.*, 32, 223–239. https://doi.org/10.1016/0167-8809(90)90162-7

Reig, F.B., Adelantado, J.V.G., Moya Moreno, M.C.M., (2002) IR quantitative analysis of calcium carbonate (calcite) and silica (quartz) mixtures using the constant ratio method. *Application to geological samples, Talanta*, 58, 811–821. https://doi.org/10.1016/S0039-9140(02)00372-7

Tsuneki, A., (2014) The Site of Tappeh Sang-e Chakhmaq. Tsuneki, A eds. *Proceedings of Tappeh Sang-e Chakhmaq and Beyond*.5-8.

Tsuneki, A., (2014) Pottery and Other Objects from Tappeh Sang-e Chakhmaq. Tsuneki, A. eds. *Proceedings of Tappeh Sang-e Chakhmaq and Beyond*, 13-18.

Rice, R. M., (1987) Pottery Analysis. p.559, University of Chicago Press, Chicago.

研究項目 C01「中世〜現代の西アジア都市」

計画研究 05

中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究

ガズナとフィールーズクーフ

—歴史的アフガニスタンにおける「都」についての覚書—

稲葉 穣
京都大学人文科学研究所

歴史上のある王朝、帝国に中心となる都市があり、それを近代的な意味で「都 capital」と呼びあらわすことは、日本語でもそれ以外の言語でも研究文献においてしばしば行われている。そもそもイスラーム時代について言えば、アラビア語で *dār al-mulk* (王権の館)、*dār al-khilāfa* (カリフ権の館)、*dār al-salṭana* (政権の館)、ペルシア語で *pāy takht* (玉座の膝元) など と呼ばれる都市が、我々の想定する「都」に類似した響きを持っているのもたしかである。しかしその一方で近代的な「首都」の持つ性格とは異なる要素を見いだしうる事例も前近代には見られる。ヨーロッパで絶対王制が成立する前夜、イギリスでもフランスでもドイツでも、国王や皇帝が一箇所に留まらず、領内を移動し続けていた (いわゆる移動宮廷)[1]のが、王権の強化とともに君主の居所の固定化が生じていくという事例に明らかなように、そもそも「都」というものの性質はそれが存在する国家、政治勢力の性質、その他の環境と大きく関わる。固定された国境と、全般的に管理され階層化された行政構造や、整備された道路網を有する国家、政治勢力の要に置かれる「首都」と、国境も定まらず、権力の階層構造も可変的であり、交通網が未発達で移動・輸送のリスクの高い前近代の政治勢力の「都」とはやはり異なる性質を持つ部分がある筈である。

1. 10 世紀以前の西アジアにおける「都」

一般的に中東地域は都市の発達が極めて古く、またそこからおこったイスラーム教は極めて都市的な宗教である、と言われる。ここでいう都市の特徴として指摘されるのは、たとえば市場によってモノや情報を交換する機能を持っていたこと、および相対的な人口の多さゆえに専業分化が行われたこと、などである (後藤 1993; 加藤 1995)。また人口が多くなるにつれ、血縁や地縁から切り離された人々が混淆して居住する、いわゆるコスモポリタンな空間が出現したことも、都市の特徴として指摘できるだろう。

それでは、たとえばイスラーム時代の国家、帝国の「都」について、その根本的な性質はどのように規定されたのだろうか[2]。預言者ムハンマド

1 近世ヨーロッパの事例については、たとえば、服部 (2015) の第一部、および 小山 (2006) の第一章などを参照せよ。

2 初期イスラーム時代のそれぞれの重要都市については、佐藤次高が初期イスラーム史を解説する中で、時代の中心となった都市をとりあげてわかりやすく説明している。佐藤 1997 参照。

Muḥammad のウンマはメディナ Medina で生まれた。理念的イスラーム共同体の「都」としてのメッカ Makka は現在までも健在であり、毎年多くの信者をカアバ神殿に惹き付けている。しかし冒頭で述べたような政治的意味合いでの「都」は正統カリフ時代を通じてメディナであった。第一次内乱の結果ウマイヤ朝が成立すると、ムアーウィア Mu‘āwiya (位 661-680 年) の拠点であったダマスクス Damascus がそのままウマイヤ朝の「都」となったと考えられている。それでもメディナは預言者一族や教友の家系の者達の拠点として重要な意味を持ち、カルバラー Karbalā の悲劇から始まる第二次内乱も、メディナを巡って起きたといってもよい。

ウマイヤ朝のカリフ達は自ら軍事遠征を率いるなど、ダマスクスから移動することも多かったと覚しいが、これについては未だ十分調査ができておらず、他日を期したい。

これに対してウマイヤ朝を倒して成立したアッバース朝は、初期に「都」を新たに開く、建造するという大事業を行った。ハーシミーヤ Hāshimīya と呼ばれた最初の二つの「都」はおそらく仮のものだったのであろう。本命はマンスール al-Manṣūr (位 754-775 年) の時代に築かれたバグダード Baghdād の円城である。このデザインの起源についてはササン朝時代の都市や、ホラズムの古代都城が指し示されているが、ここで注目しておきたいのはこの円城の構造が、中心に常にカリフがいることを想定してつくられているという点である。なんらかの理由によってカリフが不在の場合もあろうが、円城そのものは中心にカリフを置いてはじめて完成する、と言うこともできよう。カリフの居処のまわりに空間をとり、その外側に幾重にも円が重なって、重臣達や官僚達の住居が配されるという円城の構造は、人間くささに欠ける、というか、ある種象徴的なモニュメントであったのかもしれない。

しかしカリフがその円城にずっと留まっていたのかというとそういうわけでもない。第四代カリフ、ハールーン・アッラシード Hārūn al-Rashīd (位 786-809 年) は 796 年、自らの居処をラッカ Raqqa に移し、その後はそこで暮らした。ハールーン・アッラシードの死後、後を継いだアミーン Amīn (位 809-813 年) はバグダードで即位し、そこに留まったが、メルヴ Marw にいた兄弟マームーン Māmūn (位 813-833 年) との間の内戦に敗れ、バグダードの円城は破壊されてしまった。マームーンの後を継いだ第八代カリフ、ムウタスィム Mu‘ṭasim (位 833-842 年) はバグダードの北サーマッラー Sāmarrā に遷都し、約 60 年の間カリフの館はバグダードにはなかった。この間、バグダードが当時の人々からどのように見なされていたのか、明確にかたる資料を未だに見いだせていないが、ターヒル朝の実質的な統治のもと、バグダードがイスラーム世界有数の大都市であったことは間違いなく、商業活動も活発に行われていたと覚しい (*EI2*, "BAGHDĀD")。

メディナ、ダマスクス、バグダード（あるいはサーマッラー）など、初期イスラーム時代の「都」として論じられる場所は、*dār al-khilāfa* なのであり、その意味するとおり、イスラーム帝国の政治・軍事の中心であるカリフの居る場所、を我々は「都」と考えているのである。一方でイスラーム世界の信仰の中心でありつづけたメッカは、もちろん *dār al-khilāfa* ではないし、現代の研究で capital とか「都」と表現されることもない。このように、上記の原語を「都」と翻訳する段階で、そこにはすでに、「都」というのはある領域国家

の政治／軍事機能の中核であるという、やはり近代的首都像が含意されてしまっている。しかし、そうではない「都」の姿もあったのではないか。以下、11 世紀アフガニスタンのガズナ朝、およびその後継となったゴール朝を例に取りながら、前近代において都を都たらしめる条件とは何か、という視角から覚書程度に記してみたい。

2. 「都」ガズナ

さて、10 世紀後半にアフガニスタン東部に成立したガズナ朝について、なぜガズナ Ghazna (現 Ghazni) のまちが「都」として選ばれ、領域を拡大した後にも「都」であり続けたのか、という点については以前に論じたことがある (稲葉 1994; Inaba 2013)。そこで筆者が得た結論は、ガズナが当初拠点として選ばれたのは、サーマーン朝やヒンドゥーシャー朝、あるいは南方の独立勢力とのパワーバランスの中で、サーマーン朝領から脱出したアルプテギン Alptegin の私兵軍団が落ち着くことができたのがたまたまガズナであったのであり、一方その後もこのまちが「都」として認識され栄えたのは、ホラーサーン Khurāsān とインドの中間に位置し、東西南北に頻繁に移動を繰り返した初期のスルタン達にとって、移動拠点として極めて優れた立地であったからだった、というものである。

そこで示したように、第三代スルタン、マフムード Maḥmūd (位 997-1030 年) や、その息子で第五代マスウード Mas‘ūd (位 1030-1040 年) が移動する様は、ガズナのまちを結節点として八の字を描くルート (図 1) を用いたものであり、ほとんどの移動が、ガズナから東西南北に向けて行われ、

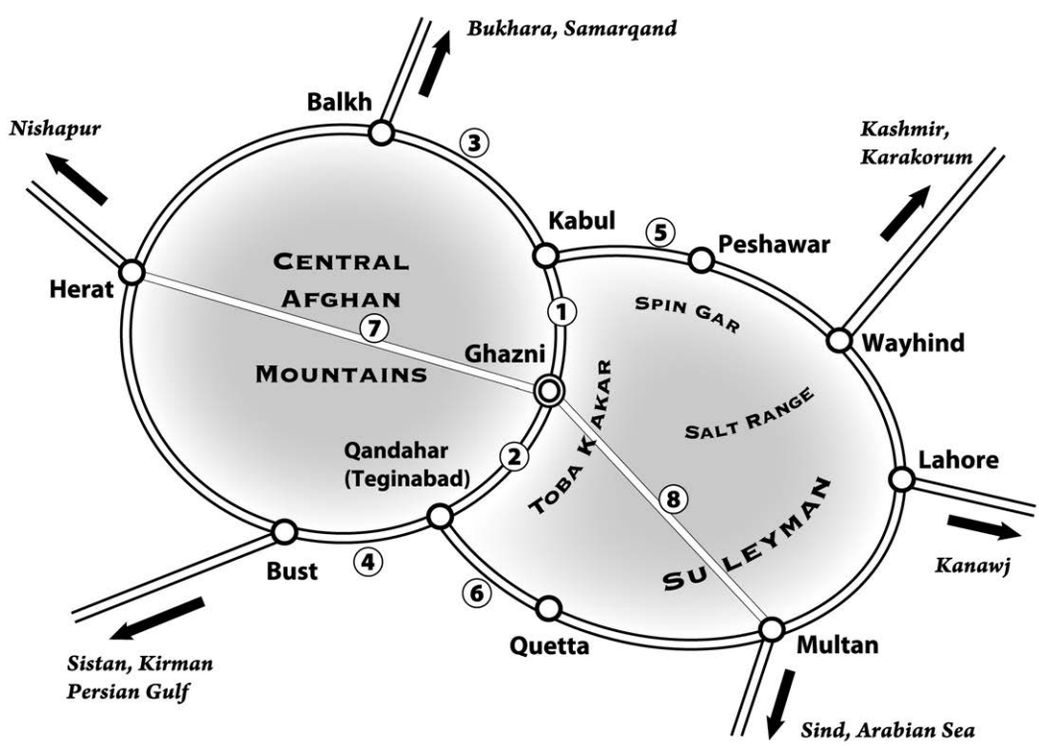


図 1 ガズナを巡る 8 の字の道（Inaba 2013 所収の図）

再びそこに戻ってくる、というものだった。移動の目的は、第一に軍事遠征であったのは間違いない。特にマフムードの時代はガズナ朝の急激な拡大期にあたり、四方八方へ向けてなされたマフムードの遠征の出発点としてガズナは便利だったのだろう。その他にも特に北方や西方に向けての示威行動、冬期に厳寒となるガズナを避けた避寒、などなどの目的が時には複数からみあって、スルタン達を移動させたのであった。

こうして考えると、少なくとも初期においては、スルタン達が移動し続けるという前提で、ガズナはその拠点として非常に便の良い場所であったことが、「都」であり続けた一つの背景になっているように見える。もちろん、移動には政治・軍事の様々な事由があったわけで、そのことと、ガズナが政治・軍事の中心であったと言うことは矛盾するわけではない。

しかしここに示したような構図は 1040 年にガズナ朝がセルジューク朝に大敗し、西方領土を失うまでのことであり、1040 年以後はガズナ朝の領域はもともとのものに比べて東半分だけになってしまった。ガズナは８の字の結節点では無く、東部アフガニスタンとパンジャーブ Punjab、スィンド Sind を巡る大きな円弧の上の点となった (稲葉 2002)。しかしそれでも、ホスローシャー Khusrawshāh (位 1157-1160 年) の時代にグズ Ghuzz の攻撃を受けてラホール Lahore に遷るまで、ガズナは王朝の「都」であり続け、その後ゴール朝時代やモンゴル時代の最初の頃までこの地域の重要なまちとして認識されていたらしいことは、年代記や地理関連の書物に、アフガニスタン東部で唯一ガズナの名が挙げられることからも類推される (稲葉 2013)。

実は、1030 年にマフムードが死去し、二人の息子、マスウードとその兄弟ムハンマド Muḥammad (位 1030, 1040 年) が後継を争ったときに、ガズナこそが最も重要なまちであるという認識が王族から示されていた。すなわち父の訃報を聞き、またムハンマドがさっそくガズナに呼び寄せられて即位したと聞いたマスウードが、イスファハーン Isfahān から急ぎ東へ帰還しようとしたとき、ガズナに居た彼の叔母である「フッタル夫人 Ḥurra-ye Khuṭṭalī」から、急ぎの帰還を促す手紙が届いた。フッタル夫人はそこで「[国の] 根幹 (aṣl) はガズナで、次いでホラーサーン。その他の地域は枝葉末節 (far‘) です」(Bayhaqī: 11) と述べている。この「根幹」と「枝葉末節」という言い回しはその後も何度か用いられ、マスウード自身も最も肝要なのはガズナである、と言明している (Bayhaqī: 13, 15, 16)[3]。

このとき、フッタル夫人やマスウードがガズナにこだわったという事実から、マフムードやマスウードのように移動ばかりしていた王にとってガズナがなぜ重要だったのか、を推測できるかもしれない。

3. 「都」を「都」たらしめるもの？

マスウードは、上述のように父の死を受けて東

3 ちなみにこの時フッタル夫人は、マスウードの実母である王妃サイイダ Sayyida らとともにガズナの内城（qal‘a）に籠もっていた。ガズナの内城は、セビュクテギン Sebüktegin の死 (997 年) の後、遺言によって即位した、イスマーイール Ismā’īl (マフムードの弟) が立てこもり、マフムードがこれを降すまでに随分と時間がかかったという、それなりに堅固な城であったらしく、ガズナの内城は特に *kutwāl* と呼ばれる城代が任命されて、守備に当たっていた。

帰する旅程の最初の頃から、マフムードが残した財庫 (khizāna) がどうなっているのかを非常に気にかけていた。この財庫はもともとガズナに置かれていたもので、マスウードに先んじてガズナに入ったムハンマドは、家臣達の忠誠を買おうとしてここから多額の金品をばらまいた、とされる (Gardīzī: 419-20)。ムハンマドが軍勢とともにガズナを発ち、南方テギーナーバード Tegīnābād 経由でヘラート Herat へと向かった際（おそらくマスウード軍とのあり得べき衝突も考慮していたのであろう）、ムハンマドはガズナの財庫を自身の副官であったフサイン Ḥusayn に託し、グーズガーン Gūzgān (もともとのムハンマドの根拠地) に送っていた。結局ムハンマドはテギーナーバードで廃位され、彼を担いだ者達は、当時すでにヘラートまで帰着していたマスウードのもとへと向かった。しかしこの時も財庫を運ぶフサインは別行動を取っており、マスウードはこの財庫の行方を気にして、幽閉されたムハンマドから情報を聞き出させようとしていた。結局、くだんのフサインは財庫を途上マスウードの信頼できる家臣に託し、自身はメルヴ・アッルード Marw al-Rūd でマスウードに行き会った (Bayhaqī: 62, 81)。マフムードがその 30 年余の治世において集積した金品財宝が、この時運ばれたものだけであったとは思いがたい。たとえば後代の史料は、預言者マニ Mānī が描いた絵画のごとき珍品が、ガズナの財庫に保管されていたと伝える (稲葉 2011)。これらの多くは 1151 年にゴール朝のアラー・アッディーン・フサイン ʻAlā al-Dīn Ḥusayn がガズナを焼いた際に失われたとされるが、そのような貴重な財が当時ガズナに多く集められていたことは、マフムードの 20 回近くに及ぶインド遠征とそこから得られた戦利品のことを勘案するなら、納得がいくことではある。

このガズナの財貨にからんで興味深い事例がもう一つ知られている。マスウードが、1034 年の対グルガーン Gurgān 遠征や、1038 年のホラーサーン親征（セルジュークとの戦いのため）のためにガズナを離れる際、彼は自らの留守を王子に託した上で、財庫や幼い家族達を、ガズナから離れた山中に隠した。遠征において自軍が敗れた際、敵がガズナを攻撃して、財貨や家族が失われるのを怖れてのことだったという (Bayhaqī: 427, 542; 稲葉 2003)。実際、マスウードは 1040 年にセルジュークに完敗し、ガズナに敗走した後、態勢を立て直すべく一旦インド方面に身をかわそうとして、途上、家臣の裏切りに逢い、捕らえられ殺されてしまったが、彼は出立前にガズナ周辺に秘匿してあった財貨を全て持ち出し、インドへと持っていこうとしていた。彼が携えていたこの莫大な富もまた、家臣が彼を裏切った一つの理由だったのかも知れない (Gardīzī: 438-40; Ibn al-Athīr: ix, 181)。ちなみにガズナがセルジューク朝によって征服されたのはもう少し後、1117 年のことで、時のセルジューク朝のスルタンはサンジャル Sanjar (ただし大セルジューク朝スルタンとしては在位 1118-1157 年)、ガズナ朝のスルタンはバフラームシャー Bahrāmshāh (位 1117-1157 年) であった (cf. 稲葉 1990)。

さて、以上のような事柄は、ガズナ朝において、「都」ガズナの持つ重要性の一端を示しているように思われる。つまり、そこには王家の富が集積されていたこと、そしてまた王の一族が住まいしていたこと、の二点である。ありうるべき敵の攻撃からマスウードが守ろうとしたのはこの二つだったのだ。上述のように、ガズナが「都」として選ばれ、機能したきっかけは、スルタン達の

移動の拠点としての優越性にあったと考えた。そうやって政治の中心となったこのまちは、長距離交易の結節点としても機能したであろうこともまた、別稿で示唆したとおりである。中央アジア、南アジア、西アジアを結ぶ人やモノ、情報の流れをコントロールすることでガズナ朝の王家が手にしたであろう富は、王家の財庫としてガズナに積まれていったのであり、それがなお一層、ガズナの政治的経済的重要性を増していった。

しかしどうもこれだけでは、「都」の重みが十分に説明されたようには思えない。特に 1040 年以降のガズナ朝の状況の変化の中で、ガズナが重要であり続けたのにはもう少し別の背景もあったのではないだろうか。そのことを考えさせるのが、ガズナ朝を圧倒してアフガニスタンを掌中におさめたゴール朝の都、フィールーズクーフ Fīrūzkūh である。

4. ゴール朝の勃興

現在のアフガニスタンに北東から貫入する形になっているのが、ヒンドゥークシュ山脈である。この山脈はイラン高原と接した辺りでいくつもの山脈群に別れ、それらはかたまって、アフガニスタン中央部に山塊を形成している。この山の塊のちょうど中央を貫いて西に流れるのがハリールード Harīrūd 川である。ハリールード川の南側は歴史的にゴール Ghor 地方と称されてきた。標高 3,000 mを超える峻険な山なみと渓谷からなるこの地域は現在でもなかなかにアクセスが難しい場所であるとされる。中小規模の土豪が自立し、時に勢力争いを戦っていた。11 世紀前半、ガズナ朝のマフムードはこの地に遠征軍を送り、ゴールの土豪達の平定をはかった。このとき、後にゴール朝を建てることとなるシャンサバーニー Shansabānī 家 (あるいは Shansab 家) のムハンマド Muḥammad b. Sūrī は アーハンガラーン Āhangarān の城に立てこもって抵抗したが、最終的には降伏し、彼と息子のシーシュ Shīsh はガズナに連行された。ムハンマドのもう一人の息子アブー・アリー Abū ʻAlī がガズナ朝の代理者としてこの地域の支配者の地位につけられたという。アーハンガラーンは現在のチャグチャラーン Chagcharān の南西に残る遺跡 Qalʻa-ye Āhangarān のことだとされ、このことは当時のシャンサバーニー家の勢力範囲がこのあたりだったことを指し示しているようにも思われるが、別稿ですでに論じたように、当時シャンサバーニー家の領地はヒルマンド Hilmand 川上流域に中心があり、そこからハリールード中流域までも支配下に入れて勢力を伸ばしつつあった状況だった (稲葉 1999)。

ガズナ朝がマフムードからその息子マスウードに代替わりすると、アブー・アリーの甥 (シーシュの息子) アッバース ʻAbbās が叔父に反旗を翻し、シャンサバーニー家の統領の座を奪った。しかしアッバースも内紛後に即位したガズナのイブラーヒーム Ibrāhīm (位 1059-1099 年) によって除かれ、アッバースの息子ムハンマド Muḥammad がシャンサバーニー家の新たな家長の座につけられた。ムハンマドも、その後を継いだ弟のクトゥブ・アッディーン・ハサン Quṭb al-Dīn Ḥasan もガズナ朝とは良好な関係を保ち、その勢力を背景にゴール内で力を伸張したと考えられる。さらにクトゥブ・アッディーンの息子イッズ・アッディーン・フサイン ʻIzz al-Dīn Ḥusayn は、ガズナ朝だけでなくセルジューク朝のスルタン、サンジャルとも関係を取り結ぶようになった。イッズ・アッディーンは死ぬ前に自分の領地を六人の息子、クトゥブ・アッディーン・ムハンマド Quṭb

al-Dīn Muḥammad、サイフ・アッディーン・スーリー Sayf al-Dīn Sūrī、ナースィル・アッディーン・マフムード Nāṣir al-Dīn Maḥmūd、バハー・アッディーン・サーム Bahā' al-Dīn Sām、アラー・アッディーン・フサインに分配した。このうちワルサール Warsār の地を与えられたクトゥブ・アッディーンは、その地に落ち着かず、自分の居地に相応しい場所を求め、フィールーズクーフの地にまちの造営をはじめた。しかしそれが完成しないうちに、兄弟達と不仲になってガズナに逃れた。当時のガズナ朝のスルタンはバフラームシャーであったが、そこでクトゥブ・アッディーンは、バフラームシャーへの叛意を疑われて毒殺された。ここからゴールの民の復讐と勢力拡大の波が始まる。兄弟の仇を討つべくサイフ・アッディーンがゴールの軍勢とともに進撃し、1149 年にバフラームシャーからガズナを奪取する。しかし冬期に友軍と切り離されたところを逆にバフラームシャーに討たれ、殺されてしまった。今度はこれに対する復讐として、バハー・アッディーンとアラー・アッディーンが再度大軍を率いてガズナを目指した。バハー・アッディーンは途上客死してしまうが、アラー・アッディーンの方はガズナ朝の軍勢を打ち破りながらついにガズナを陥落させ、まちに火をかけて七日七晩燃やし続けたという。アラー・アッディーンはその後セルジューク朝のサンジャルとの戦いに敗れ虜囚の身となるが、後に解放されバーミヤーン Bāmiyān、トハーリスターン Ṭukhāristān なども制圧して、アフガニスタンのほぼ全域を掌中にした (Bosworth 1977; 2015; 稲葉 1999)。

5. ゴール朝とフィールーズクーフ

アラー・アッディーンの死後、息子サイフ・アッディーン Sayf al-Dīn は、父が幽閉していたバハー・アッディーンの二人の息子、ギヤース・アッディーン Ghiyāth al-Dīn Muḥammad とムイッズ・アッディーン Mu'izz al-Dīn Muḥammad を解放した。前者はその後ゴール朝の王位に就き、弟とともにアフガニスタンから北インドにいたる広大な領域を支配下に納めた。

この広大な帝国の「都」として史料に記録されるのが、当初クトゥブ・アッディーンによって造営が始められたフィールーズクーフである。しかしこの「都」がどこにあったのかについては明確ではなく、19 世紀末にアフガニスタンの地理調査を行ったホルディック Thomas Holdich は、ゴールの南西部に位置し、当時のゴール地方の中心であったタイワラ Taywara がフィールーズクーフなのではないかとした (Holdich 1910: 222)。1957 年、フランス・アフガニスタン考古調査団の一員だったマリク André Maricq は、アフガニスタンの著名な考古学者コーフザード Aḥmad 'Alī Kohzad の依頼を受けて、ゴールの山中にあって土地の人のみが知っていたミナレットの調査を行った。世界遺産にも登録されているこの見事なミナレットは、ハリールード川沿いにあって、シャフラク Shahrak のまちから北北東に 40km ほどのところ、ハリールードに支流のジャーム Jām 川が合流する狭隘な谷間の南東岸に立っている（図 2)。

マリクは 1959 年に刊行した調査報告書の中で、このミナレットのある場所、ジャームこそがかつてのゴール朝の「都」フィールーズクーフだったのだと述べた (Maricq & Wiet 1959: 55 ff.)。これに対してレシュニク Lawrence Leshnik はジャーム＝フィールーズクーフ説に異議を唱え、ホルディックのタイワラ説を指示した。レシュニクの論点は大きく三つあり、第一は言うまでもなくジャーム

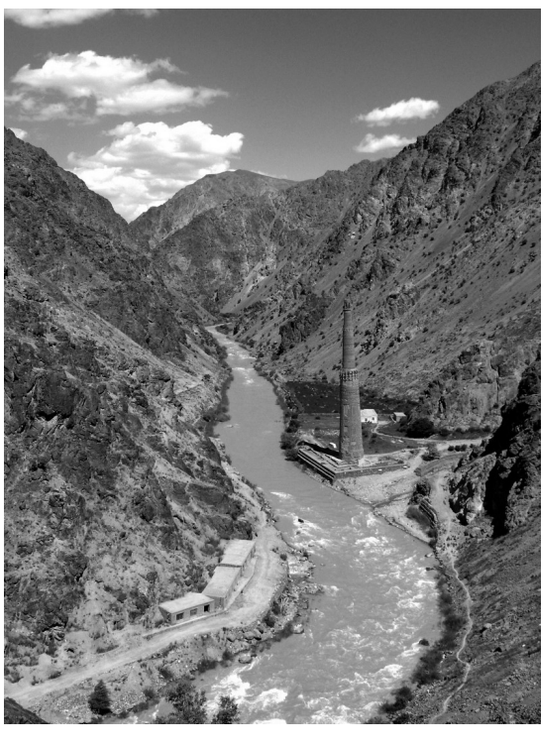


図 2 ジャームのミナレット (David Adamec 撮影)

が人里離れた、極めて孤立したロケーションにあるという点、第二はマリクによって行われた地名比定に関する疑義、第三点目はジャームの北側で遊牧生活を起こるフィールーズクーヒーという部族集団の存在である (Leshnik 1968-69)。これらはいちいち尤もな疑問であるが、とくに問題とされているのは第一の点、すなわちジャームがあまりに周囲と隔絶した場所であり、かつ狭隘な谷間にあるため「都」にふさわしいファシリティーをどうやって確保できたのかという点である。レシュニクの反論が出された後、マリク説を支持する論考も発表されていたが、1970 年代にこの地に到ったヘルベルク Werner Herberg は、ジャームの周囲を踏査したものの、やはり「都」にふさわしいまちがあった地形とは思われないと述べた (Herberg 1976)。ところが 2001 年になってアフガニスタン内戦が小康状態に入ったことを利用し、倒壊の危機に瀕していたミナレットの状況を調査すべく同地に入った調査隊は、あらためてミナレットの周囲に建築物の痕跡を発見し、同調査隊のメンバーだったトーマス David C. Thomas はやはりジャームにそれなりの人が住まえるような構造物があったのではないかと結論づけた (Thomas et al. 2004; Thomas 2007)。結局、地理的な条件はさておき、建築物や遺物の発見（ヘブライ語が刻まれた墓誌銘など）を勘案し、現在ではタイワラ説をとるものはまずおらず、みな留保をつけつつもジャームのミナレットのある場所がフィールーズクーフだったと考えているようである。

6. 儀礼の場としての「都」？

しかしトーマスは、農作物耕作や家畜飼育といった「都」を支える生産活動について言えば、ジャーム近辺が「生産地」であったとは考えにくく、周辺から食料を運び込むこと無しにはまちは存立し続けられなかっただろうとも注記している (Thomas 2007: 137-138)。一方ボール Warwick Ball は、ゴール地方各地の山上や高台に見られる塔や小規模城塞のクラスターを紹介し考察する中で、ジャーム近辺にはそのような防衛設備が全く見られない点が、フィールーズクーフをジャームに同定するにあたっての難点である、と指摘している (Ball 2002: 42)。ボールはこの問題に対して、ゴールの小規模城塞・塔の群の全体的な用途・目的が、個別の地域の防衛では無く、ゴールの南東部（ブスト、カンダハール方面）に対する長大な防御線の形成にあったのではないかとし、また、そもそもアフガニスタン山中のこのような場所で、人々は固定された建築物を建てて暮らしたのではなく、可搬式のテントなどにも住んでいた可能性

があり、フィールーズクーフに一般的な「都」の設備が見あたらないとしたらそのような背景があるのではないかと述べて、二つの面からフィールーズクーフ＝ジャームの存在を説明しようとしている (Ball 2002: 43-44)。一方スルデル = トミン Janine Sourdel-Thomine は、ジャームのミナレットの建築史的分析に関するモノグラフのなかで、やはりこのミナレットの場所とフィールーズクーフのロケーションについて触れている。彼女によれば、ジャームとその周辺の狭小な空間は、ゴール朝の君主が権威をふるうための物質的な舞台装置を容れることもできず、王家の家政が必要とするようなリソースももたない。「帝国の都」という言葉が含意する上記のような条件をことごとく満たしそうにない場所がフィールーズクーフだったとすれば、我々はそのことをどう理解すれば良いのか。スルデル = トミンは、ここが代々のゴール朝の君主の即位儀礼が行われた、ある種の儀礼的な場所だったのではないか、と示唆している (Sourdel-Thomine 2004: 50-51)。先に述べたようにフィールーズクーフの造営はクトゥブ・アッディーンによって始まり、それが中途で放棄されたあと、彼の兄弟バハー・アッディーン によって完成され、アラー・アッディーンによって用いられたと覚しい。しかしそれは、広大な帝国の主になる前の、ゴールの土豪の一つであったシャンサバーニー家に相応しい程度の規模のものであっただろう。我々は残念ながらアラー・アッディーンがガズナを征した後、どこに自身の拠点を置いていたのかを知らない。ただ、サンジャルのもとで一年間囚われの身となっていたのに加え、アフガン山塊周辺の征服活動に勤しんでいて「都」に落ち着く時間はそれほどなかったかもしれない。アラー・アッディーンの息子サイフ・アッディーンが即位後まもなく死去した後、君主の座を争ったのはギヤース・アッディーンとバーミヤーンに拠点を置いていた Fakhr al-Dīn であった。ギヤース・アッディーンはファフル・アッディーンに先んじてフィールーズクーフに入り、即位の儀を行って君主の座に就いたとされるのだから、フィールーズクーフで即位することに象徴的な意味が与えられていたことはおそらく間違いないだろう。しかしギヤース・アッディーン自身は外への展開を求めてヘラートを攻め続け、ついには 1175 年にこれを陥落させ、自らの拠点とした。同じ頃ムイッズ・アッディーンはガズナをグズの手から奪取し (1173 年)、自らの拠点をつくりあげていた。かくして帝国東西の中心は、実質的には深山の中のフィールーズクーフではなく、歴史的に重要であったヘラートとガズナに置かれたのであった (Bosworth 2015: 213)。

このような状況下でのフィールーズクーフの意味、意義とは王家の歴史的拠点、儀礼的「都」であったのではないか、というのが、スルデル = トミンの示唆の背景にある事柄なのだろう。もちろん我々は上記のようなことについていかなる直接的な証拠も持っていないが、似たような事例として、行政の中心スーサ Susa と、儀礼の「都」ペルセポリス Persepolis を有したアケメネス朝の状況を知っている。また、テュルク系遊牧部族の聖地とみなされ、突厥やウイグルの拠点が置かれたウテュケン Ütükän 山などとも類似するのかも知れない。しかしなにより近しい例として、イスタフリー al-Iṣṭakhrī やイブン・ハウカル Ibn Ḥawqal の地理書、あるいは著者不明のペルシア語地理書 *Ḥudūd al-ʿĀlam* といった 10 世紀の文献には、カーブル Kābul の王 (Hindushāh) はカーブルのまちで即位儀礼を行わない限り王として認められない、

という記事がある (Iṣṭakhrī: 280; Ibn Ḥawqal: 450-451; *Ḥudūd*: 104; Minorsky 1970: 111)。よく知られているように、7 世紀半ばにカーブルにはテュルク系の王家の王国があらわれ、イスラーム資料で Kābulshāh と呼ばれた。彼らはカーブル川沿いにガンダーラ Gandhara まで支配したが、9 世紀初め、インド系の王家によって簒奪され、その後のカーブルシャーは別名ヒンドゥーシャーと呼ばれる。彼らもまたカーブル河沿いにガンダーラからカーブルまでを支配したが、主たる拠点はインダス河とカーブル川の合流地点たるアトック Attock の北にあったワイヒンド Waihind（現 Hund）で、カーブルは副都のような存在だったと覚しい (cf. 稲葉 2004; 2010)。アラビア語、ペルシア語地理書が述べるのは、それでもヒンドゥーシャーの即位儀礼はカーブルにおいてなされねばならなかった、という事情なのであろう。この場合、ワイヒンドとカーブルという二都のうち、古くからのカーブルシャーの拠点たるカーブルが、先祖代々即位儀礼がなされてきた場所であったことになる[4]。具体的にどのような儀礼がなされたのかは十分にはわからないが、ビールーニー Abū Rayḥān al-Bīrūnī が紹介する次のような話が関係するのかも知れない。

> 彼ら（インド人達）にはカーブルに住む王達がいた。彼らはテュルクで、もともとはチベットから来たのだと言われている。彼らの最初の者はバルハテギン Barḥategin で、彼はカーブルに来てある洞窟の中に入った。うつ伏せになって這っていく以外にそこに入ることは不可能だった。洞窟の中には水があった。彼はそこに何日か分の食料を置いておいた。この洞窟は今ではその地で bfr と呼ばれている。［今も］それ[5]を吉兆とみるものは中に入り、出てくるときには、大変な苦労をして件の水を携えて出てくる。
>
> ［バルハテギンが洞窟に入った時には］その入り口のところでは農夫達が働いていた。このようなことがらは、誰かと示し合わせていないと可能にはならないのだが、［この時バルハテギンと］示し合わせていた相手は一団の者達を連れてきて、夜も昼も交替で働かせ、その場所から人がいなくなることがないようにしていたのだった。
>
> 彼が洞窟に入ってから数日して、一人の男が洞窟から出てきた。人々が集まってきたが、彼らには、その人物が［洞窟から出てきた様子が］、まるで母親から生まれ出たかのように見えた。その者はテュルク風の服、チュニックや帽子、靴や武具を身につけていた。［人々は］彼が神がお創りになった［特別な］人物で、王となるために創造されたのだと褒め称えた。［結局］彼はこの地を支配して、カーブルの *shāhiya* と称された。王権は彼の子孫に代々受け継がれ、おおよそ六十代を重ねたという。(Bīrūnī: 317; cf. Sachau 1910: ii, 10)

すなわち、カーブルシャーの祖であるバルハテギンは、カーブルにやって来て洞窟の中に入り、何日かしてからまるで生まれ変わったかのように、異なる出で立ちをして洞窟から現れたが、それを目撃した人々は、彼が特別な人間で王になる

4　現代の日本における東京と京都の関係にやや似ているかもしれない。

5　ザハウ Eduard Sachau (1910: ii, 10) は、「バルハテギンという名を吉兆と考える者は」と訳している。

のだと讃えた、としながら、ビールーニー自身は、これがそもそも種も仕掛けもある仕込みであったのだ、と批判しているのである。いずれにせよ、このように洞窟に入って新しい人間として再生されて現れるという話の類例は他の地域でも時代でも見られる。またその再生のために、こちら側とは異なる場所としての洞窟が用いられ、そこから立派になった人間が登場する、というのは、我が国の修験道などで行われる、擬死再生の儀式である「胎内くぐり」などにも共通する。このようなパフォーマンスがカーブルシャーの初代によって行われたかどうか確かめようがないが、ビールーニーがこの話を記すのは、彼に近い時代、実際にカーブルシャーの即位儀礼がこのようなものであり、その儀式の説明として彼が記したようなことが語られた、ということなのかもしれない。

アラー・アッディーンやギヤース・アッディーンの時代、フィールーズクーフが、ヘラートやガズナに比してどれくらい重きを置かれた場所だったのかを定量的に語ることはできない。しかし、スルデル＝トミンの指摘するように、周囲から隔絶されたジャームのロケーションは、逆に非日常的な空間において儀礼を行いうる環境を提供した可能性もある (Sourdel-Thomine 2004: 51)。

7. イメージとしての「都」

ややわかりにくい譬えかも知れないが、こんなことをイメージして欲しい。図 1 で示したようなガズナを取り巻く交通路は、弾力のあるゴムの平面上に描かれている。それぞれのまちは、ある程度の重さをもった球としてこのゴムの平面上に凹みをこしらえている。もちろんガズナを表す球が最も大きく重い。このような状況の中でたとえば８の字の道を移動する人やモノは、それぞれの球の重さで凹んだ窪み（天文学で譬えるなら星の回りに出来た重力井戸）に引かれてこの球 / まちに引き寄せられる。実際の経済交易活動の面からみれば、そのようなまちは人が多く、市場も活発で、富が集積しているために交易従事者が集まる。さて、ガズナのまちの重みは、王家の蓄えた富のゆえにどんどん増加し、平面につくる凹みも大きく深くなる。そのため、彗星が太陽の重力井戸に引かれて長円軌道を描くように、より多くの人やモノ、情報がこのまちめがけて落ちていくのであり、そのような動きが更にこのまちのつくる重力井戸を大きく深くしていった。1040 年までのガズナのまちというのは、まさにそうやって重みを増していったのであるが、一方その重みが減少するにはそこそこの時間を要したようだ。

ガズナのまちは、1173 年にムイッズ・アッディーンの手でグズから奪還された後、ホラズムシャー朝の、ついでモンゴルの支配を受けた。モンゴル時代に発行された貨幣はいくらか知られているが (Schwarz 1995: 60-61)、14 世紀にイブン・バットゥータが訪れた際、まちが衰えていたことが記録されている (家島訳 1999: 217)。その 100 年後に同じくこの地を訪れたバーブルも、ガズナのまちが寒村となっていたのを見て、なぜガズナ朝の王達がこのようなまちを都としたのか、と訝しんでいる (間野 2014:61-62)。しかしこれらは裏を返せば、ガズナが長きにわたって東方イスラーム世界の中心地の一つであり、重要なまちとしての歴史を積み重ねてきたからこその感嘆、感慨であったとも言える。イブン・バットゥータもバーブルも、ともにガズナがまだある程度保持していた重みに惹かれてこのまちを訪れたのかも知れない。外形的には衰退してしまったまちが、そのような重みを保持していたのはなぜなのだろうか。

推測になってしまうが、まちの重力 / 質量は、実際には人々の持つイメージによっても増大するのではないか。ガズナがかつてイスラーム世界有数の「都」として、インドの征服者の拠点として輝いていた、という記憶とイメージ — 別の言い方をすれば「ガズナの歴史」— は、その栄華が消え去っても残り、まちの重力 / 質量が消滅する速度を軽減したのかもしれない。

フィールーズクーフについても、事情は異なるが、このようなイメージが大きな役割を果たしているように思われる。先に挙げたカーブルシャーの即位の事例は、ある国家、政治勢力の始まりの場所が儀礼の場として重視されたことを示唆しているように見えるが、フィールーズクーフについても、クトゥブ・アッディーン以来造営されたシャンサバーニー家の初期の拠点の記憶が、後にヘラート、バーミヤーン、ガズナに一族の拠点が分散した後も保持され、求心的な役割を果たす儀礼の場として存続したのだとすれば、そこで機能しているのは王国初期の記憶とそれが形成するイメージなのであろう。ジャームのミナレットのような並外れた建築物がそのイメージをさらに増大させたことは想像に難くない。

「都」だけでなく都市一般が持つ外形的な機能に加えて、それぞれのまちに人々が抱くイメージとそれが産み出す引力の有り様をどのように考え分析していくか、あるいは心象的歴史地理とでも言うべきものをどう研究すればよいのか、残念ながら筆者にもまだ成案はないのだが、うまくいけば都市の歴史の研究に新しい視角を提供しうるのではないか、と希望的観測を述べて、ひとまず擱筆する。

参照文献

一次資料

Bayhaqī: Abū al-Faḍl Bayhaqī, *Tārīkh-i Bayhaqī* (2 Vols.) ed. M. J. Yāḥaqqī, Tehran: Intishārāt-i Sokhan, 2009.

Bīrūnī: Abū Rayḥān al-Bīrūnī, *Taḥqīq mā lil-Hind*. Beirut. 1983.

Gardīzī*:* Abū Sa‘īd Gardīzī*, Zayn ak-Akhbār*. ed. by ‘A. Ḥ. Ḥabībī, Tehran???

Ḥudūd: anonymous. *Ḥudūd al-‘Ālam*. ed. M. Sutūda, Tehran: Intishārāt-i Dānishgāh-i Tehrān, 1962.

Ibn al-Athīr*:* ‘Izz al-Dīn ‘Alī b. Muḥammad b. al-Athīr, *al-Kāmil fī al-Ta’rīkh*. (13 vols.), ed. C. J. Tornberg, Beirut: Dār Sādir, 1979.

Ibn Ḥawqal: Abū al-Qāsim b. ‘Alī b. Ḥawqal, Kitāb Ṣūrat al-Arḍ. ed. J. H. Kramers, Leiden: Brill, 1967.

Iṣṭaḥrī: Abū Isḥāq Ibrāhīm b. Muḥammad al-Iṣṭakhrī, al-Masālik wa al-Mamālik. ed. M. J. De Goeje, Leiden: Brill, 1967.

二次資料

Ball, W. (2002) "The towers of Ghur. A Ghurid "Maginot LIne"?" In: W. Ball and L. Harrow (eds.), *Cairo to Kabul. Afghan and Islamic Studies Presented to Ralph Pinder-Wilson*. London: Fox Communications & Publications, pp. 21-45.

Bosworth, C. E. (1977) *The Later Ghaznavids*. Edinburgh: Edinburg University Press.

Bosworth, C. E. (2011) (tr.&com.) *The Ornament of Histories*. London: I.B.Tauris.

Bosworth, C. E. (2015) "The Ghurids in Khurasan." In: A.C.S.Peacock & D. G. Tor (eds.), *Medieval Central Asia and the Persianate World*. London: I.B.Tauris, pp. 210-221.

Bosworth, C. E. & M. Ashtiany (2011) (tr. & com.) *The history of Beyhaqi: (the history of Sultan Mas‘ud of Ghazna, 1030-1041)*, 3 Vols., Washington D.C.: Center for Hellenic Studies Trustees for Harvard University.

後藤 明 (1993)「巨大文明の継承者」佐藤次高・鈴木董編『都市の文明イスラーム』(新書イスラーム世界史①）講談社 , pp. 33-58.

服部良久 (2015) 『コミュニケーションから読む中近世ヨーロッパ史』ミネルヴァ書房

Herberg, W. (1976) "Topographische Feldarbeiten in Ghor: Bericht über Forschungsarbeiten zum Problem Jam-Ferozkoh." *Afghanistan Journal* 3(2), pp. 57-69.

Holdich, Th. (1910) *The Gates of India: being an Historical Narrative*. London: Macmillan and Co.

稲葉 穣 (1990)「セルジューク朝と後期ガズナ朝―その国境地帯について ―」『東方学報』京都 62, pp. 637-673.

稲葉 穣 (1994)「ガズナ朝の「王都」ガズナについて」『東方学報』京都 66, pp. 200-252.

稲葉 穣 (1999)「ゴール朝と 11-12 世紀のアフガニスタン」『西南アジア研究』51, pp. 16-42.

稲葉 穣 (2002)「初期イスラーム時代におけるインドへの道 ― アフガン高地からインダス流域へ ―」桑山正進編『石窟寺院の成立と変容』（平成 10 年度 ― 平成 13 年度科学研究費補助金基盤研究 (B)(2) 研究成果報告書 , pp.1-25.

稲葉 穣 (2003)「ナーイ・カラ石窟開窟の歴史的背景について」『西南アジア研究』58, pp. 83-96.

稲葉 穣 (2004)「アフガニスタンにおけるハラジュの王国」『東方学報』京都 76, pp. 313-382.

稲葉 穣 (2010)「8 世紀前半のカーブルと中央アジア」『東洋史研究』69(1), pp. 174-151.

稲葉 穣 (2011)「ヘラートの「カーマ・スートラ」―中世アフガニスタンにおけるトランスカルチュレイション ―」田中雅一・稲葉穣編『コンタクトゾーンの人文学 II: Material Culture』晃洋書房 , pp. 3-37.

稲葉 穣 (2013)「前近代のカーブル：東部アフガニスタンにおける大都市の変遷」『東方学報』京都 88, pp. 359-402.

Inaba, M. (2013) "Sedentary Rulers on the Move: The Travels of Early Ghaznavid Sultans " In: D. Durand-Guédy (ed.) *Turko-Mongol Rulers, Cities and City Life*. Leiden: Brill, pp. 75-98.

加藤 博 (1995)『文明としてのイスラーム ― 多元的社会叙述の試み』東京大学出版会

小山啓子 (2006)『フランス・ルネサンス王制と都市社会』九州大学出版会

Leshnik, L. (1968-69) "Ghor, Firuzkuh and the Minar-i Jam." *Central Asiatic Journal* 12, pp. 36-49.

間野英二 (2014) バーブル著、間野英二訳注『バーブルナーマ：ムガル帝国創設者の回想録 2』平凡社 .

Maricq, A. et G. Wiet (1959) *Le Minaret de Djam*. (MDAFA 16), Paris: Klinksieck.

Minorsky, V. (tr. & com.) (1970)

Sachau, E. C. (1910) *Alberuni's India*. London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co.

佐藤次高 (1997)『イスラーム世界の興隆』（世界の歴史８）中央公論社 .

Schwarz, F. (1995) *Sylloge numorum arabicorum Tübingen: Ġazna/Kabul XIV d ḫurāsān IV*. Tübingen-Berlin: Ernst Wasmuth.

Sourdel-Thomine, J. (2004) *Le minaret ghouride de Jām: un chef d'œuvre du XIIe siècle*. Paris: Boccard.

Thomas, D. (2007) "Firuzkuh. The summer capital of the Ghurids." In: A. K. Bennison and A. L. Gascoigne (eds.), *Cities in the Pre-Modern Islamic World. The Urban Impact of Religion, State and Society*. London and New York: Routledge, pp. 115-144.

Thomas, D., G. Pastori and I. Cucco (2004) "Excavation at Jam, Afghanistan" *East and West* 54, pp. 87-119.

家島彦一 (1999) イブン・バットゥータ著 , 家島彦一訳注『大旅行記 4』平凡社 .

15 世紀のヘラートにおける聖者墓群の形成

―イードガーフを事例として―

杉山雅樹
京都外国語大学

はじめに

現在のアフガニスタンに位置する都市ヘラートは、かつてティムール朝（1370 ～ 1507 年）第 3 代君主シャー・ルフ Shāh Rukh（在位 1409 ～ 47 年）治世に首都として発展し、同朝末期のスルターン・フサイン Sulṭān Ḥusayn（在位 1469 ～ 70、1470 ～ 1506 年）治世にはイスラーム文化の中心地として未曽有の繁栄を迎えた。

ティムール朝期のヘラートに関しては、これまでも建造物の位置の特定、王朝による灌漑施設の建設と農業奨励政策、王朝末期の学芸保護の経済的要因等、様々な視点から研究が進められてきた。一方、この時代のヘラートでは多くのスーフィー・シャイフたちが人々から「聖者」として崇敬され、彼らの墓所が参詣の対象となっていたことが知られている[1]。しかしながら、従来の研究では、15 世紀における聖者墓の増加がヘラートの都市開発に与えた影響について十分に検証されてきたとは言い難い。

そこで、本稿は、この問題に取り組む手始めとして、15 世紀のヘラートの一画に成立した聖者墓群を採り上げる。以下では、まず同世紀のヘラートにおける建築活動や諸地区の発展の過程を概観する。次いで、問題となる墓地に埋葬されたシャイフの経歴や埋葬の経緯を検証した後、この場所が当時のヘラートにおいてどのような機能を果たしたのかについて考察したい。

I. ヘラートの発展

まず、ティムール朝期のヘラートの発展の過程について、15 世紀の前半と後半に分けて概観し、それぞれの特徴を指摘する。

I-1. 15 世紀前半

ティムール死後の後継者争いに勝利したシャー・ルフは、1409 年にティムール朝第 3 代君主として即位し、ヘラートを首都に定めた。その後、ヘラートの市壁北側の西寄りにあるマリク

1 ティムール朝期のヘラートにおける聖者墓の増加は、1459-60 年に編纂されたヘラートとその近郊の墓所案内書『幸運の目的地（*Maqṣad al-Iqbāl*）』でも確認できる。この書ではティムールの死（1405 年）を基準として、それ以前とそれ以降に死去した聖者に分けて紹介されている。この分類によれば、墓所が参詣の対象となっている聖者のうち、イスラームの大征服からティムールの没年までに亡くなった者は合計 85 名であるのに対し、ティムールの死から本書執筆までのわずか半世紀ほどの間に死去した者は合計 54 名にのぼる。さらに、この書物が編纂された時期にも「聖者」とみなされたスーフィー・シャイフが数多く活動していたことを考慮すれば、15 世紀を通じてヘラートではその後も多くの聖者墓が生まれたと考えられる。

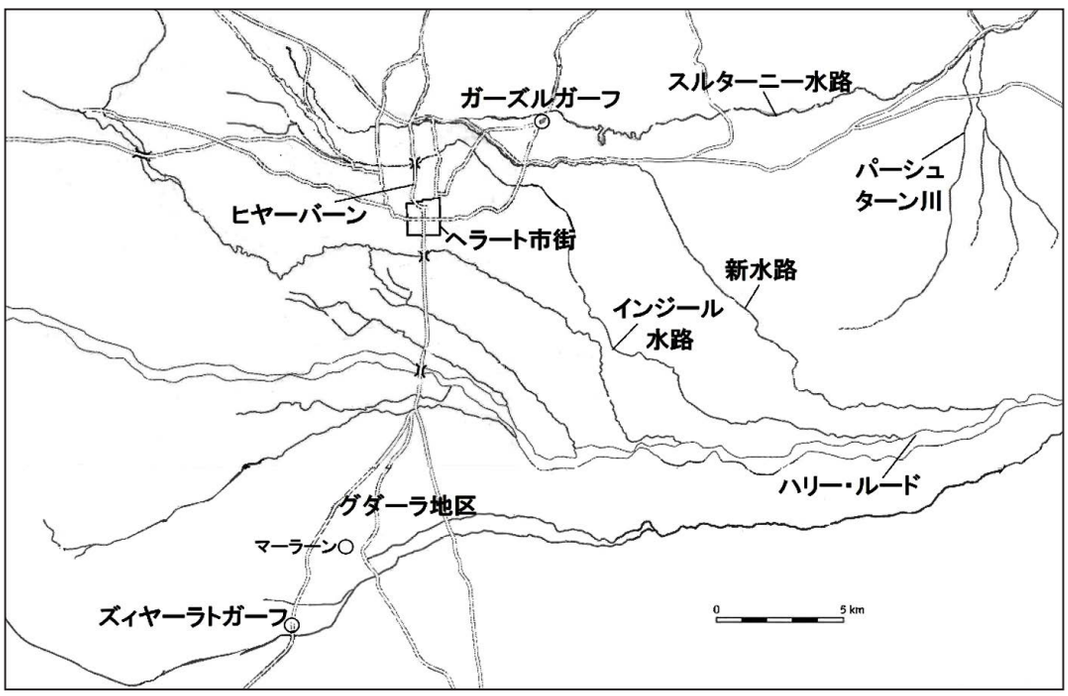


図 1　ヘラートとその近郊（Noelle-Karimi 2014 収録の地図を基に作成）

門を出て北上するヒヤーバーン（Khiyābān：ペルシア語で「大通り」の意）に沿った区域の開発に着手した（図 1、2）。このヒヤーバーンは大バーザールを中心にヘラート市内を南北に縦断するだけでなく、さらに北と南へと延びる交易路にもつながっており、経済上の動脈というべき存在であった。特に、市壁を北上してインジール水路（Jūy-i Injīl）に至るまでのヒヤーバーン沿いの区域には、シャー・ルフの妻ガウハル・シャード Gawhar-shād（1457 年没）によるマスジドとマドラサを含む、様々な宗教関連施設が建設された。

また、シャー・ルフは元々北側の市壁に接する「街の園（Bāgh-i Shahr）」内の宮殿に滞在していたが、即位後にはやはりヒヤーバーン沿いに市壁を北上した西側に位置する「からすの園（Bāgh-i Zāghān）」を居所とした。ここにも、ヒヤーバーン沿いの区域をヘラートの新たな中心地にしようとするシャー・ルフの意図を見ることができる。

一方、シャー・ルフによるスーフィー・シャイフに関わる建築物としては、1425 年にヘラートの市壁から北東約 5km に位置するガーズルガーフ（Gāzurgāh）に建設したアブド・アッラー・アンサーリー ‘Abd Allāh Anṣārī（1089 年没）の墓廟がある。アンサーリーはスーフィー・シャイフとしてだけでなく、厳格なハンバル派の学者としても知られ、その死後にヘラートの守護聖人とみなされるようになった人物であった[2]。

なお、シャー・ルフがアンサーリーに対する尊

2　アンサーリーの生涯、特にムウタズィラ派やアシュアリー派神学者たちとの激しい対立については、［S. de Laugier de Beaureceuil, “’ABDALLĀH AL-‘ANṢĀRĪ,” *Encyclopaedia Iranica*］参照。

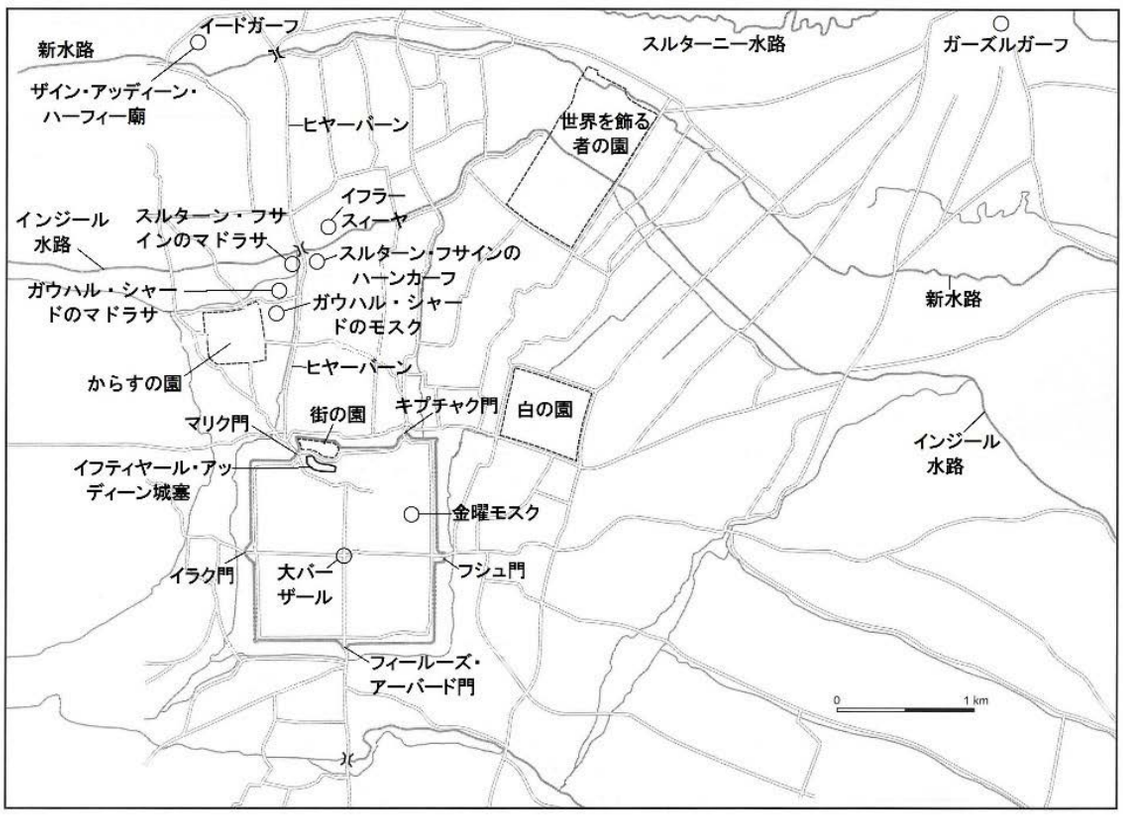


図 2　15 世紀後半のヘラート（Noelle-Karimi 2014 収録の地図を基に作成）

崇を明確に打ち出し、墓廟を建設した理由については、当時シャー・ルフ政権にとって大きな問題となっていた「異端的」救世主運動の活動に対抗するためであったと言われる。すなわち、伝統主義の象徴的存在であったアンサーリーに対する敬意を表明することによって、「正統的」イスラーム復興政策を推し進め、救世主運動に対抗しようとしたと考えられるのである[3]。

I-2.　15 世紀後半

シャー・ルフ死後の混乱を治め、ティムール朝領土の再統一に成功したスルターン・アブー・サイード Sulṭān Abū Sa‘īd（在位 1451 ～ 69 年）の死（1469 年）を契機として、ティムール朝はサマルカンド政権とヘラート政権に完全に分裂してしまう。後者の支配者の地位に就いたのがスルターン・フサインであり、彼の治世にヘラートはさらなる発展を迎えることになった。中でも、スルターン・フサイン治世のヘラートの繁栄を象徴する地域として、以下の 2 つを挙げることができる（図 2）。

3　［Golombek 1969: 83; Subtelny 1994: 381-383］。

① スルターニー水路（Jūy-i Sulṭānī）[4] とインジール水路との間の灌漑地帯

ヘラート市街の北東の山麓から南西に向かって広がり、主にスルターニー水路によって灌漑されていた丘陵地帯を指す。ここにはいくつもの庭園やタフトと呼ばれる高台が造られた。代表的なものが、スルターン・フサインが即位後新たに造園した「世界を飾る者の庭園（Bāgh-i Jahān-ārā'ī）」であり、彼はここをヘラートにおける自身の居所とした。

また、スルターン・フサイン治世にガーズルガーフのアンサーリー廟は政治的重要性を急激に高めることになった。その要因となったのは、スルターン・フサインが自らをアブド・アッラー・アンサーリーの 9 代後の子孫と主張したことである[5]。スルターン・フサインがこのような主張を行った背景には、彼がティムールの長男ウマル・シャイフ 'Umar Shaykh（1394 年没）の家系出身であったことが影響していると考えられる。それまでこの家系には、君主の地位に就いた者も、ヘラートを統治した者もいなかった。さらに、スルターン・フサインの祖父バイカラ Bāyqarā（1425 年没）がシャー・ルフに対する反乱に失敗した後は、この家系に属する者が政治の表舞台で活躍することすらなかった[6]。このことから、スルターン・フサインはヘラートの支配者として必要な正統性を補うために、アンサーリーの血統を利用したと考えられる。そして、この主張に基づき、1477-8 年にアンサーリー廟内にスルターン・フサインの父やおじ、兄弟の墓が設置されたのである[7]。

② ヒヤーバーン沿いの地域

前節で述べた通り、ヒヤーバーンが市壁を越えて北上する区域は既にシャー・ルフ治世に開発が進められており、スルターン・フサインもインジール水路の南にマドラサとハーンカーフを建設した。さらに、スルターン・フサイン治世には、ヒヤーバーン沿いの発展はインジール水路を越えて新水路（Jūy-i Naw）に至る区域にまで拡大し、この一帯は有力者たちが邸宅を構える高級住宅地としても栄えた。

一方、①のインジール水路以北の帯状灌漑地帯におけるガーズルガーフのように、この区域の開発に重要な役割を果たしたと考えられるのが、ヒヤーバーンの北の終点に位置する、イードガーフ（'Īdgāh）と呼ばれる広場である[8]。そこは元々様々な宗教的行事を催すための空間であったが、15 世紀前半以降には聖者として人々から崇敬を受

4　スルターン・アブー・サイード治世に建設が始められ、1468-9 年頃に完成した水路。ヘラートの北東約 22km の地点でパーシュターン川を水源として、ガーズルガーフの北を通過しつつ西へと流れる［Allen 1981: 20-21］。図 1 も参照。

5　この主張の根拠となる系譜は、ホンダミールの『道徳の伴侶（*Ḥabīb al-Siyar*）』に記録されている［HSK: 113］。

6　バイカラが 1415 年にファールス地方で起こしたシャー・ルフに対する反乱とその結末については［Manz 2007: 163-164］参照。

7　［Golombek 1969: 84-85; Subtelny 1994: 388-391; Subtelny 2007: 44-46, 203-204］。

8　本来「イードガーフ」とは何らかの「宗教的儀式・行事が行われる場所」を意味する普通名詞である。実際、ティムール朝期の史料の中には、同じ場所のことを「礼拝する場所」を意味する「ナマーズガーフ（namāzgāh）」［MSS4: 861, 1022］あるいは「ムサッラー（muṣallā）」［RJI2: 175, 329］と呼んでいる例がある。本稿では、便宜上「イードガーフ」で統一する。

けていた複数のスーフィー・シャイフの埋葬地となった。

次章では、このイードガーフの聖者墓群が成立した背景とヘラートの発展において果たした役割について検討したい。

II. イードガーフの聖者墓群

ヘラートの墓所案内書『幸運の目的地』(1459-60年編纂) とその続編 (1783-4 年編纂) の中で、イードガーフに埋葬されたことが確認できる人々をまとめたものが表 1 である。このうち①③④の 3 名は、従来の研究で、15 世紀前半のヘラートを代表するスーフィー・シャイフとしてしばしばその名が挙げられる[9]。上記の『幸運の目的地』におい

表 1　イードガーフに埋葬された人々

	名前	関連情報	典拠
①	ザイン・アッディーン・アブー・バクル・ハーフィー	ハーフ出身。スフラワルディーヤのシャイフに師事。1435 年没。	MIW: 80-1
②	スィラージュ・アッディーン・ムルターニー	ザイン・アッディーン①の弟子。師の死後はその後継者とし弟子を指導。1437-8 年没。	MIW: 88
③	バハー・アッディーン・ウマル・ジャガライー	ファラフ出身。クブラウィーヤのシャイフに師事。1454 年没。	MIW: 88-9
④	サァド・アッディーン・カーシュガリー	カシュガル出身。ナクシュバンディーヤのシャイフに師事。1456 年没。	MIW: 90
⑤	シャムス・アッディーン・ムハンマド・ジャージルミー	著名なウラマー。ジャラール・アッディーン・ユースフ・アルハッラージの弟子。1459-60 年没。	MIW: 94
⑥	ザーヒド・ティフラカーニー	ザイン・アッディーン①のスーフィー教団に所属。1459-60 年没。	MIW: 94
⑦	アブド・アッラフマーン・ジャーミー	ハーフ近郊のハルジルド出身。サァド・アッディーン④に師事し、その孫娘と結婚。1492 年没。	TMIH: 101-2
⑧	ムハンマド・アクバル	サァド・アッディーン④の長男。1499 年没。	TMIH: 102-3
⑨	ムハンマド・アスガル	サァド・アッディーン④の次男。1500-1 年没。	TMIH: 103
⑩	ムハンマド・ジャーミー	ジャーミー⑦の弟。1472-3 年没。	TMIH: 103
⑪	アブド・アルガフール・ラーリー	ジャーミー⑦の弟子であり、伝記の著者。1506 年没。	TMIH: 103-4
⑫	アラー・アッディーン・ムハンマド・ブン・アルムウミン	サァド・アッディーン④の弟子。1487-8 年没。	TMIH: 105
⑬	カースィム・ジャーミー	アフマディ・ジャームの子孫。没年不明。	TMIH: 105
⑭	フサイン・ワーイズ・カーシフィー	ジャーミー⑦の弟子。著名な説教師で、ティムール朝末期を代表する文人の一人。1504-5 年没。	TMIH: 108
⑮	ヌール・アッディーン・ムハンマド	バハー・アッディーン③の息子。1474 年没。	TMIH: 108
⑯	シャー・ムハンマド	スーフィー・シャイフ (詳細不明)。スルターン・アブー・サイードと交際。没年不明。	TMIH: 108
⑰	ミールホンド	ティムール朝年代記『清浄園』の著者。1498 年没。	TMIH: 110-1
⑱	シャムス・アッディーン・ムハンマド・ルージー	サァド・アッディーン④の弟子。1498-9 年没。後に、弟子の一部がガーズルガーフのアンサーリー廟の近くに移葬。	TMIH: 111
⑲	アブド・アッラー・ハーティフィー	ジャーミー⑦の従兄弟。ペルシア語韻文作品『ティムール・ナーマ』の著者。1520-1 年没。	TMIH: 134-5
⑳	マウラーナー・ザーダ	スィラージュ・アッディーン②の弟子。1421-2 年 (？) 没。	TMIH: 139
㉑	シャー・フルド	スーフィー・シャイフ (詳細不明)。スルターン・アブー・サイードと交際。没年不明。	TMIH: 140
㉒	キャマール・アッディーン・フサイン	ウラマー (詳細不明)。1483-4 年没。	TMIH: 140

9　［Manz 2007: 71, 228-235; Paul 2011: 223-230, 236-238; Paul 2017: 73-79］。

て、イードガーフに埋葬された最初の人物として紹介されているのが①ザイン・アッディーン・アブー・バクル・ハーフィー Zayn al-Dīn Abū Bakr Khwāfī（1435 年没）であり、後にその弟子である②⑥も師の傍に埋葬された。さらに、③バハー・アッディーン・ウマル・ジャガーライー Bahā’ al-Dīn ‘Umar Jaghāra’ī（1454 年没）と④サァド・アッディーン・カーシュガリー Sa‘d al-Dīn Kāshgharī（1456 年没）も、ザイン・アッディーンと親しい関係を築いており、彼の墓廟の傍に埋葬されることを望んだ可能性が高い[10]。以上のことから、イードガーフに聖者墓群が形成されるきっかけとなったのは、ザイン・アッディーンの埋葬であったと思われる。そこで、以下ではザイン・アッディーンがこの地に埋葬された経緯とその背景について検討したい。

II-1. ザイン・アッディーン・ハーフィー

1356 年にホラーサーン地方のハーフで生まれたザイン・アッディーン・ハーフィーは、若い頃に修行の旅に出てエジプトでスフラワルディーヤのシャイフの許で学んだ。1409-10 年頃ヘラートに帰還すると、ヘラートの南に広がるグダーラ地区（bulūk-i Gudāra）のズィヤーラトガーフ（Ziyāratgāh）に居を定めた。やがて同地区に修道場（zāwiyya）を建設すると、その建物を中心にダルヴィーシュ・アーバード（Darwīsh-ābād）と呼ばれる村が形成され、以降はそこを活動の拠点にしたという[11]。彼はこの地で多くの弟子を指導していたが、やがて 1435 年にペストのため死去した[12]。ところで、彼の埋葬地に関しては、以下のような記述が残されている。

> かの猊下はマーラーン村（qarya-yi Mālān）に埋葬された。〔しかし、〕あるダルヴィーシュたちはその場所に満足できず、赦しが帰する〔猊下の〕遺体をかのお方が建設したダルヴィーシュ・アーバードに移葬した。〔しかし、〕その場所にも納得出来ない者がおり、〔最終的に〕かの猊下の遺体は〔ヘラート〕市街の北に位置するイードガーフの南に埋葬された。ワズィール位が帰するお方、偉大なるワズィールたちの模範、Khwāja Ghiyāth al-Dīn Pīr Aḥmad Khwāfī が、その光溢れる墓の上に高き建物を建て、農地と収益を〔その墓廟のための〕ワクフとして設定した。［MSS3: 452-453］[13]

この記述から、ザイン・アッディーンの埋葬地は 2 度も変更されていたこと、そして埋葬地の変

10 例えば、『幸運の目的地』では、両名の墓がザイン・アッディーン・ハーフィー廟のすぐ傍にあることが強調されている［MIW: 89-90］。また、②バハー・アッディーンは同時代のシャイフとして互いに認め合う間柄であり、③サァド・アッディーンはホージャガーン（後のナクシュバンディーヤ）の自身の師の勧めで、かつてザイン・アッディーンに弟子入りしていた。

11 現在、ダルヴィーシュ・アーバードの正確な場所は特定できていない。ザイン・アッディーンは当初グダーラ地区のズィヤーラトガーフを拠点にしていたこと、またダルヴィーシュ・アーバードも同じ地区にあったとされていることから［MIW: 81］、ズィヤーラトガーフ周辺が有力と考えられている［Alle 1981: 160］。なお、マーラーンとズィヤーラトガーフの位置については図 1 を参照。

12 ［Manz 2007: 229-230; Norris 1990: 57-59; Paul 2011: 223-226; Paul 2017: 73-74］。

13 埋葬地の変更については［HSK: 12; NUJ: 495］にも記述があるが、そこでは弟子たちの不満については触れ

更は一部の弟子たちによって行なわれたことが明らかになった。

では、埋葬地が変更された理由は何だったのか。先に引用した記述では、弟子の一部がそれぞれの埋葬地に不満があったことが移葬の直接の理由とされているが、なぜ「満足出来なかった」のかについては一切触れられておらず、詳細は不明である。そこで、埋葬地として選択されたそれぞれの場所とザイン・アッディーンとの関係について確認しておきたい。

最初の埋葬地であるマーラーンについては、ザイン・アッディーンが逝去した場所と言われている。このことから、マーラーンは当初仮の埋葬地として選ばれただけで、後に正式な埋葬地に遺体を移葬させる予定であったと指摘されている[14]。一方、二番目の埋葬地であるダルヴィーシュ・アーバードは、先述の通り彼が建造した修道場を中心とする村であった。著名なスーフィー・シャイフが自ら建設した修道場の中、あるいはその傍に埋葬される例は地域や時代を越えてしばしば見られることであり、正式な埋葬地としてダルヴィーシュ・アーバードが選択されたことはごく自然な流れであったと言える。

それに対して、最終的な埋葬地となったイードガーフについては、生前のザイン・アッディーンとの関わりを見出すことはできない[15]。このことから、イードガーフへの移葬はザイン・アッディーン本人の意思とは全く関係がないのは間違いない。一方、シャー・ルフ治世の最も有力なワズィールとして知られるギヤース・アッディーン・ピール・アフマド（1453 年没）が墓廟建設に関わっていることから[16]、埋葬地の変更は政権の意向が反映されたものである可能性もあるが、具体的な証拠はなく現時点では特定困難である。

次に、ザイン・アッディーンの弟子たちの動向について目を向けてみたい。『幸運の目的地』とその続編には、イードガーフに埋葬された②⑥以外にも、ザイン・アッディーンの弟子 11 名が挙げられている。彼らの埋葬地は、それぞれガーズルガーフ（4 名）、イードガーフ以外のヒヤーバーン沿いの区域（3 名）、ズィヤーラトガーフ（2 名）、その他（2 名）となっている。以上のように、師が最終的に埋葬されたイードガーフではなく、他の場所に埋葬された者が数多くいたことになる。このことは、ザイン・アッディーンの遺体をイードガーフに移葬したのは一部の弟子たちによるものであったとする、先の引用文を裏付けるものと言えるだろう。なお、ザイン・アッディーンの死後、彼の教団はザイニーヤと呼ばれるようになったが、教団のシャイフ位の継承やその後のヘラートでの具体的な活動についてはほとんど明らかではない[17]。ただ、先に確認したように、弟子たち

られていない。

14 ［Allen 1981: 75］。

15 ザイン・アッディーンはズィヤーラトガーフやダルヴィーシュ・アーバード以外にも、ヘラート市内の金曜モスクを活動の拠点にしていたことが知られている［Manz 2007: 205, 229］。しかし、イードガーフを始め、シャー・ルフ治世に発展したヒヤーバーン沿いの地域での活動は確認できない。

16 1417 年にシャー・ルフからワズィールに任命された後、シャー・ルフ死去までのおよそ 30 年間その職にあり続けた［Manz 2007: 66, 98-100; Subtelny 2007: 79-81］。

17 ザイン・アッディーンは、優れたスーフィーとして知られた息子 Muḥyī al-Dīn がいたにもかかわらず、シャイフ位の世襲を認めなかったとされている［Paul 2011: 225］。一方、ザイン・アッディーンの後継者は誰であっ

の埋葬地がいくつかの場所にまとまっていることからも、ザイン・アッディーンの死後、彼の高弟たちはそれぞれ異なる場所に拠点を築いていたと考えられる。その中で、当時開発の進んでいたヒヤーバーン沿いの区域を活動の拠点とした一部の弟子が中心となって、すぐ近くに位置するイードガーフをザイン・アッディーンの新たな埋葬地としたのではないだろうか。以上のように、ザイン・アッディーンの埋葬地の変更は、教団内の分裂によってもたらされた可能性が高いと思われる。

II-2. その後のイードガーフ

次に、15 世紀後半以降イードガーフに埋葬された人々についても触れておきたい。④サァド・アッディーン・カーシュガリーがこの地に埋葬された後、その墓の周辺には多くのナクシュバンディーヤのシャイフたちが埋葬されることになった。その代表的な人物が、サァド・アッディーンの高弟の一人であり、著名なシャイフにしてペルシア語詩人であった⑦アブド・アッラフマーン・ジャーミー ‘Abd al-Raḥmān Jāmī（1492 年没）である。その他にも、サァド・アッディーンの息子や高弟、さらにはジャーミーの兄弟や親族、弟子など、ヘラートのナクシュバンディーヤの中心的存在であった者たち 9 名がこの地に埋葬されている。それに対して、①ザイン・アッディーン・ハーフィーの弟子の中で 15 世紀後半以降にイードガーフに埋葬された者は⑥の 1 名だけであり、孫弟子にあたる人物も⑳の 1 名のみであった[18]。

以上のように、イードガーフが聖者墓群として発展するきっかけとなったのは 15 世紀前半にザイン・アッディーンがこの地に埋葬されたことであったが、その後彼の弟子たちが師と同じ場所に埋葬されることは稀であった。それに対して、15 世紀後半以降はサァド・アッディーンの弟子を始めとするナクシュバンディーヤの関係者が数多くこの地に埋葬されるようになった。15 世紀後半はナクシュバンディーヤがヘラートにおける影響力を強めた時期にあたり、史料上他のスーフィー教団に帰属するシャイフたちの活動はほとんど確認できなくなる。イードガーフに埋葬された顔触れの変化は、ヘラートにおいてそれぞれの時代をリードしたスーフィー・シャイフとその教団の移り変わりを見事に反映していると言えよう。

II-3. イードガーフの役割

次に、イードガーフがヘラートの都市開発において果たした役割について考えてみたい。

シャー・ルフ治世に大きく発展したヒヤーバーンの北の終点に位置していたイードガーフは、ザイン・アッディーンを始めとする聖者たちが埋葬され、墓群が形成された後も、「宗教的行事が行われる場所」としての本来の機能は維持されていた[19]。こうして、それまでの様々な宗教的行事が催される公共施設としてだけでなく、市街からすぐに訪れることの出来る身近な参詣地としての要

たのかについて、先行研究の答えは一致していない［cf. Paul 2011: 225; Manz 2007: 231］。

18 『幸運の目的地』続編では、この⑳マウラーナー・ザーダの没年は「〔ヒジュラ暦〕824 年（西暦 1421-2 年）」となっているが、同じ箇所には彼がザイン・アッディーンの墓廟に埋葬されたという記述がある［TMIH: 139］。ザイン・アッディーンの没年が 1435 年であることを考慮すれば、ここに記されたマウラーナー・ザーダの没年は誤りであろう。

19 スルターン・フサインの即位直後（1469 年）にも、イードガーフで犠牲祭の説教が行われていたことが確認出来る［MSS4: 1022; RJI2:329］。

素が加わり、さらに多くのヘラート市民が集う場所になったと思われる。その結果、市街とイードガーフをつなぐヒヤーバーンは、従来のヘラートにおける経済の動脈としてだけでなく、参道としての新たな役割をも果たすようになったと考えられるのである。

また、ヘラート市街からヒヤーバーンを北上してイードガーフに達すると、そこから先はそれぞれ北と西に向かう二つの道に分かれている。このうち、向かって右側、北へと向かう道が主要な交易路であった。この道を真っ直ぐ進むとやがてムルガーブ川に達し、そのまま川に沿って北上すれば、マルウ（Marw al-Shāhijān）に至る。一方、途中で東寄りの進路をとると、バーラー・ムルガーブ（Bālā Murghāb）あたりでムルガーブ川に達する。その川を渡って、さらに東に向かえばアンドフード（Andkhūd）やバルフ（Balkh）に、さらに東に進んでアム川を越えればティムール朝サマルカンド政権の支配領域であるマーワラーアンナフル地方に至る。一方、イードガーフで分岐している道のうち、向かって左側の西へと向かう道を進むと、ジャーム（Jām）を経由してマシュハド（Mashhad）に[20]、さらに西に進めばホラーサーン地方西部に位置するその他の諸都市へと至る（図 3）。

以上のように、ヒヤーバーンそのものはヘラートの市壁を越えて北上した後イードガーフで終わるものの、そこからさらに北や西へと延びる交易路と結び付いており、それらの道はティムール朝ヘラート政権の支配領域北部に位置する多くの主要都市につながっていたのである。ヘラート市街

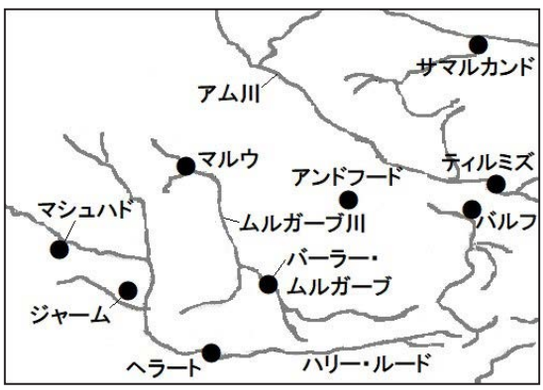


図 3　ティムール朝支配領域の主要都市（Subtelny 2007 収録の地図を基に作成）

からこれらの諸都市に向かう際、または逆に周辺の諸地域からヘラートにやって来る際にも、このイードガーフを通過することになる。こうしたことから、ヘラートの人々だけでなく、ホラーサーンの主要都市やその他の諸地域とヘラートとを往来する人々にとっても、重要な参詣地になっていたと考えられるのである。

おわりに

これまで確認してきたように、かつてシャー・ルフ治世にアンサーリー廟が建設されたガーズルガーフはヘラートにおける最大の参詣地となったが、やがてスルターン・フサインの支配の正統性を担保する存在へと変貌した。それに対して、シャー・ルフ政権による後援と商業活動から得られる利益を基にヘラートの発展を象徴する存在となったヒヤーバーン沿いの区域は、15 世紀のヘラートを代表する多くのスーフィー・シャイフが埋葬されたイードガーフを中心として、同世紀後半以降徐々に宗教的重要性を増していったと考え

20　実際にティムール朝君主の一人が、このルートを使用してマシュハドとヘラートを往復していたことが確認できる［MSS4: 775-776, 783; RJI2: 185-188］。

られる。

本稿では、ティムール朝期に聖者墓群が形成されたイードガーフを採り上げ、それがヘラートの都市開発において果たした役割について検証してきた。ただ、今回は数ある墓所の中の一つを扱ったに過ぎず、ヘラートの他の聖者墓や、別の都市における事例との比較を行うには至らなかった。今後の課題としたい。また、ガーズルガーフを除いて、ヘラートでの聖者廟の建設にティムール朝の君主自身が関わった事例は確認出来なかった。これは、マスジドやマドラサなど様々な宗教施設の建設が君主主導で行われたのと対照的である。先に示した通り、イードガーフでの墓群の形成はヒヤーバーン沿いの区域の発展に重要な役割を果たしていたことからも、ヘラートにおける聖者墓の存在は政権が推し進める建築活動や都市開発とも密接につながっていたはずである。今後はイードガーフだけでなく、様々な聖者墓とティムール朝政権との関わりについてより詳細に検証を進める必要があるだろう。

参考文献

HSK: Khwāndamīr, *Ḥabīb al-Siyar fī Akhbār Afrād Bashar*, vol. 4, eds. J. Homā'ī & M. Dabīr-Siyāqī, Tehran, 1333kh.

MIW: Sayyid Aṣīl al-Dīn ʻAbd Allāh Wāʻiẓ, *Maqsad al-Iqbāl al-Sulṭāniyya wa Marṣad al-Āmāl al-Khāqāniyya*. ed. M. Heravī, Tehran, 1351kh.

MSS: ʻAbd al-Razzāq Samarqandī, *Maṭlaʻ-i Saʻdayn wa Majmaʻ-i Baḥrayn*, vols.2- 4, ed. ʻA. Navā'ī, Tehran, 1383kh.

NUJ: ʻAbd al-Raḥmān b. Aḥmad Jāmī, *Nafaḥāt al-Uns min Ḥiḍrāt al-Quds*, ed. M. ʻĀbedī, Tehran, 1386kh.

RJI: Muʻīn al-Dīn Zamchī Isfizārī, *Rawḍāt al-Jannāt fī Awṣāf-i Madīnat-i Harāt*, 2 vols., ed. S. M. Kāẓem Emām, Tehran, 1338kh.

TMIH: ʻAbd Allāh b. Abū Said Harawī, *Taʻlīq bar Maqṣad al-Iqbāl* yā *Risāla-yi Duwwum-i Mazārāt-i Harāt*. In: MIW, 97-141.

Allen, T. (1981) *A Catalogue of the Toponym and Monuments of Timurid Herat*. Cambridge.

Allen, T. (1983) *Timurids Herat*. Wiesbaden.

Golombek, L. (1969) *The Timurid Shrine at Gazur Gah*. Tronto.

Manz, B.F. (2007) *Power, Politics and Religion in Timurid Iran*. Cambridge.

Noelle-Karimi, C. (2014) *The Pearl in its Midst: Herat and the Mapping of Khurasan (15th-19th Centuries)*. Wien.

Norris, H.T. (1990) The *Mirʻāt al-Ṭālibīn*, by Zain al-Dīn al-Khawāfī of Khurāsān and Herat. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 53, 57-63.

Paul, J. (2011) The Khwājagān at Herat during Shāhrukh's Reign. In: I.E. Binbaş & N. Kılıç-Schubel (eds.) *Horizons of the world: Festschrift for İsenbike Togan*. Istanbul, 217-250.

Paul, J. (2017) The Rise of the Khwajagan-Naqshbandiyya Sufi Order in Timurid Herat. In: N. Green (ed.) *Afghanistan's Islam: From Conversion to the Taliban*. Oakland.

Subtelny, M.E. (1994) The Cult of ʻAbdullāh Anṣārī under the Timurids. In: A. Giese & J.C. Bürgel (eds.), *Gott ist schön und Erliebt die schönheit / God is Beautiful and He loves Beauty*. Bern, Berlin, New York, 377-406.

Subtelny, M.E. (2007) *Timurids in Transition: Turko-Persian Politics and Acculturation in Medieval Iran*. Leiden, Boston.

職人のまちイスファハーン
―19 世紀の手工業者一覧にみる伝統産業―

守川知子
東京大学大学院人文社会系研究科

イスファハーンは「職人のまち」である。それはひとえに、サファヴィー朝（1501-1736 年）のもとで 16 世紀末にここに都が置かれ、その後 100 年以上にわたって宮廷があったことによる。17 世紀のイスファハーンが国際色豊かで繁栄した都市であったことはすでに多くの研究で述べられてきているが、本稿では 19 世紀のイスファハーンの手工業者について検討することにより、サファヴィー朝の「都」としての「遺産」がどのようなものであったか見ていこう。

I. イスファハーンの手工業者

1873 ～ 97 年の 20 年以上をイランで過ごした E・ホルツァー[1] は、19 世紀後半のイスファハーンに関する詳細な記述（1881 年）を残している。その中で、人口数万人[2] のイスファハーンの住民が携わる職業とその人数について、「専門用品を扱う商人」「専門職の学者・医者」「市内でみられる手工業者」「女性が携わる職業」「男性が携わるその他の職業」「農民」に大別して挙げている。この中には、「天文学者―多数」や「農民―1000 人」といった概数のものや、女性従事者や個人雇いの料理人などの数字の記載のないものもあるが、記載されている人数をみると総勢 12,000 人近くになる。本稿で検討するのは、上記の「市内でみられる手工業者（Künste und Gewerbe in der Stadt）」（表 1）である[3]。ここには 69 の職種が挙がり、従事者の総数は 4,095 人である[4]。

1　Ernst Höltzer（1835-1911 年）。1864 年に電線敷設の技師としてイスファハーンに赴任する。アルメニア人女性と結婚した後にドイツに帰国、写真技術を身につけ、1873 年にイランに戻る。イスファハーンの新ジュルファー街区に暮らし、人びとや風景の膨大な数の写真を残した。墓はイスファハーンのアルメニア人墓地にある。

2　ホルツァーのドイツ語部分では人口は「9 万人」となっているが、ペルシア語訳では「35,000 人」である。原文のドイツ語にはタイプミスを含め誤字が多く、どちらが正しいか判断がつきかねる。後注で挙げる『イスファハーン地誌』では、19 世紀には人口が大幅に減少し、「5 万人以上はいない」とされる［Höltzer, *Persien vor 113 Jahren*, p. 14 (Persian ver., p. 5); Taḥvīldār, *Jughrāfiyā-yi Iṣfahān,* p. 65］。

3　Höltzer, *Persien vor 113 Jahren*, pp. 21-23 (Persian ver., pp. 12-14). ホルツァーは「Naggasch - Maler」のようにペルシア語の音写をした上でドイツ語の意味を記している。本書を編纂して 1975 年に出版した Mohammad Assemi 氏は音写部分のみペルシア語に置き換えており、表 1 ではそのペルシア語表記を利用した。また職業の訳出にあたっては、ホルツァーの説明部分と、ヴルフ（2001）『ペルシアの伝統技術』（原ほか訳）を参照した。

4　なお、同時代のイスファハーンの手工業者などについては、収税吏（taḥvīldār）であったミールザー・ホセイ

表 1 市内でみられる手工業者

	職種	ペルシア語表記	分類	人数
1	画工	*naqqāsh*	王室	20
2	室内装飾画工	*naqqāsh-i ʻimārat*	建物	27
3	建築職人	*miʻmār*	建物	10
4	彫石工	*ḥakkāk*	王室	5
5	金細工職人	*zargar*	王室	50
6	彫金職人	*qalam-zan*	王室	30
7	石工	*sang-tarāsh*	建物	91
8	指物大工	*najjār*	建物	122
9	弓旋盤職人	*kharrāṭ*	王室	80
10	鍛冶職人	*āhangar*	—	40
11	鉄砲鍛冶	*tufang-sāz*	王室	40
12	時計職人	*sāʻat-sāz*	王室	60
13	銅細工職人	*misgar*	王室	100
14	染物職人	*rang-raz*	捺染	1456
15	綿布織り職人	*qadak-bāf*	布地	25
16	馬具職人	*sarrāj*	馬具	46
17	ロープ職人	*lavvāf*	—	17
18	ゴザ織り職人	*ḥaṣīr-bāf*	—	6
19	フェルト職人	*namad-māl*	—	30
20	フェルト帽子職人	*kulāh-māl*	—	20
21	金箔象嵌職人	*kūftgar, ṭalā-kūb*	王室	14
22	テント職人	*chādur-dūz*	布地	5
23	キルト布団職人	*laḥāf-dūz*	布地	45
24	ガラス職人	*shīsha-sāz*	王室	15
25	鏡職人	*āʼina-sāz*	王室	21
26	盆職人	*sīnī-sāz*	王室	25
27	上着職人	*kalīja-dūz*	布地	65
28	絹布織り職人	*kaj-bāf*	布地	7
29	ショール織り職人	*shāl-bāf*	布地	110
30	金糸つむぎ職人	*zarī-kash, zarī-bāf*	布地	30
31	ブーツ職人	*chakma-sāz*	靴	180
32	毛織物縫製職人	*khayyāṭ, māhūt-dūz*	布地	46
33	飾り紐編み職人	*ʻalāqa-band*	布地	56
34	真鍮細工職人	*davātgar*	王室	25
35	外套織り職人	*ʻabā-bāf*	布地	20
36	帆布織り職人	*karbās-bāf*	布地	120
37	寄木細工職人	*khāṭam-sāz*	王室	26
38	刺繍職人	*sūzan-dūz*	布地	112
39	ビロード職人	*farsh, terma va malmal-sāz*	布地	14
40	？(Galahgir)	--	—	15
41	米つき職人	*birinj-kūb*	—	9
42	ブリキ職人	*ḥalabī-sāz*	王室	3
43	皮なめし	*dabbāgh*	—	15
44	ヘンナ職人	*ḥanā-sāz*	—	15
45	製本職人	*ṣaḥḥāf*	王室	35
46	火薬づくり職人	*bārūt-kūb*	王室	7
47	靴職人	*kafsh-dūz*	靴	250
48	帽子職人	*kulāh-dūz*	—	40
49	鎖職人	*zanjīr-sāz*	—	27
50	靴直し	*pāra-dūz*	靴	50
51	絨毯直し	*rufūgar*	布地	14
52	箱職人	*ṣandūq-sāz*	王室	14
53	絹糸つむぎ職人	*tirma-bāf*	布地	3
54	荷鞍職人	*pālān-dūz*	馬具	17
55	布靴職人	*gīva-dūz*	靴	21
56	鋳掛職人	*dīgha-band*	—	7
57	灯火づくり職人	*shammāʻ*	—	11
58	菓子職人	*qannād*	—	50
59	蹄鉄職人（靴底づくり）	*naʻl-band*	馬具(靴)	30
60	革袋職人	*charm-sāz*	—	36
61	水入れ職人	*ẓarf-i āb sāz*	—	12
62	パイプ職人	*sar-i qaliyān sāz*	—	10
63	筏づくり職人	*shāna-sāz*	布地	12
64	綿打ち職人	*ḥallāj, panba-zan*	布地	110
65	籠職人	*kappa-dūz*	—	15
66	水タバコ管づくり職人	*nay-pīch-sāz*	—	4
67	桶・革かばん職人	*dabba-sāz*	—	12
68	宝石箱職人	*majrī-sāz*	王室	10
69	ろうそく職人	*shamʻ-sāz*	—	30
	計			4095

まずもって興味深い点は、19 世紀後半のイスファハーンでの手工業者の呼称として、画工（*naqqāsh*）や彫石工（*ḥakkāk*）などのアラビア語由来の伝統的な職名よりも、ペルシア語で「つくる人」を意味する「〜サーズ（*sāz*）」、「織る人・編む人」の「〜バーフ（*bāf*）」、「縫う人」の「〜

ン・ハーンの『イスファハーン地誌（*Jughrāfiyā-yi Iṣfahān*）』（1890 年）がある。著作の完成には 10 年ほどの開きがあるものの彼らは電信局という同じ職場にいたようであり、相互に影響関係があったと考えられている。『イスファハーン地誌』ではイスファハーンの学者・医者・詩人・曲芸師・手工業者・商人・役人など 199 の職種が挙がり、そのうちの 169 の職種については Floor の翻訳がある。Philipp によると、ホルツァーの 148 職種とミールザー・ホセイン・ハーンの 178 職種のうち、共通するのは 83 しかない［Taḥvīldār, *Jughrāfiyā-yi Iṣfahān*, pp. 66-128; Philipp (1984), “Isfahan 1881-1891,” pp. 392-394, 396; Floor (2009), *Guilds, Merchants & Ulama*, pp. 159-210］。

ドゥーズ（*dūz*）」、「滑らかにする人」の「～マール（*māl*）」、「打つ人・すり潰す人」の「～クーブ（*kūb*）」など、ペルシア語の動詞からの派生語を組み合わせた「職人」が大半を占めている点であろう[5]。同時に、たとえば「つくる人」の場合は、製造する製品を表す名称として、鉄砲、時計、ガラス、鏡、真鍮製の盆、ブーツ、寄木細工、ビロード、ブリキ、ヘンナ、鎖、箱、革袋、水入れ、パイプ、織り機に用いられる筬（おさ）、水タバコ管、桶・革かばんの容れ物、宝石箱、ろうそくと、20 もの多岐にわたる製品が個別に挙がる[6]。品目が多彩という点は 1890 年に完成したミールザー・ホセイン・ハーンの『イスファハーン地誌』ではより顕著である。同書では 170 種近くもの異なる品を扱う専門の職人や商人が挙げられることからしても、当時のイスファハーンでは個別の“モノ”に特化した分業化や専業化が進んでいたと解釈することができよう。

市内の手工業者の中で最大の業種は 1,456 人を数える染物職人（*rang-raz*）である（図 1 参照）。圧倒的多数の染物職人に次いで多いのは、靴職人（250 人）とブーツ職人（180 人）である。これらの靴職人に次いで、指物大工（122 人）、帆布織り職人（120 人）、刺繍職人（112 人）、ショール織り職人（110 人）、綿打ち職人（110 人）、銅細工職人（100 人）が続く。250 人という第二位の規模を誇る靴職人以下の職種もまた 100 人以上の同業者がいるとはいえ、手工業者全体の 3 割以上を占める染物職人には遠く及ばない。

II. 「織物のまち」として

（1）捺染業

表 1 や図 1 からも明らかなように、1,456 人を数える染物職人が 19 世紀後半のイスファハーンで最大の手工業者であった。彼らだけで全体の 36％を占めており、「ガラムカーリー（*qalam-kārī*）」と呼ばれるプリント更紗をつくる捺染業がイスファハーンの基幹産業であったことがうかがわれる[7]。ホルツァーは「（イスファハーンの）最も重要な基幹産業」の筆頭に「捺染した綿布（Tschit）をつくる職人を“Tschitsaz”（*chīt-sāz*）と呼ぶ」としてこの捺染業を挙げている（ペルシア語の「chīt」は英語の chintz のことである）。このグループは、年間で総額3,300トマンの税金を支払い、イスファハーン随一の建物である「カイサリーエ（皇帝の市場）」と「王のキャラバンサライ」[8]（いずれも王の広場の北辺に位置）という 2 つの専用のキャラ

5　ちなみに「商人」の場合は「～フォルーシュ（*furūsh*）」となる。ホルツァーは「専門用品を扱う商人」として 20 種を挙げるが、薬種商（*ʻaṭṭār*）や米穀商（*razzāz*）といった 8 種を除く残りの 12 種は、タバコ、果物、絨毯、宝石、ガラスなど、何らかに特化した商品を「売る人（-ferusch/-*furūsh*）」と表記されている［Höltzer, *Persien vor 113 Jahren*, pp. 20-21］。

6　『イスファハーン地誌』では、更紗、剣、帷子、弓、ハサミなど、さらに多くの「～をつくる人（*sāz*）」が見られるとともに、ペルシア語の「～する人」を示す接尾辞「～ギャル（*-gar*）」のつく職種が 14 種にのぼる［Taḥvīldār, *Jughrāfiyā-yi Iṣfahān,* pp. 94, 104-111］。「織る人」および「縫う人」については後述する。

7　プリント綿布（ガラムカーリー）は現在でもイスファハーンの主要な土産物であり、イマーム広場（旧「王の広場」）界隈に多くの店舗が並んでいる。

8　「王のキャラバンサライ」とその北隣の「厩舎のキャラバンサライ」は 1924 年の市街図では「プリント更紗職人（Chīt-sāz-hā）のキャラバンサライ」と呼ばれている。サファヴィー朝末期には、前者のキャラバンサライでは金細工師や宝石研磨師が作業し、イラン各地からの織物が販売され富裕なインド人商人や「商人王」が常駐していた。また後者では主にインドから輸入される布地が販売され、「更紗商人のバーザール」に通じ

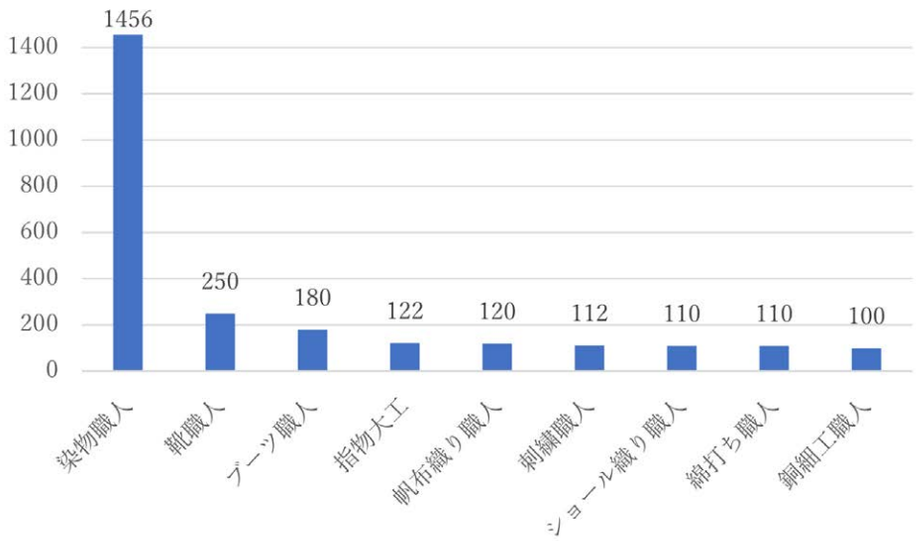


図 1 100 人以上の職人のいる職種

バンサライを有し、152 人の親方が 7,000 人以上の徒弟や職工を抱えていた。この 7,000 人の中には、195 人の藍染め職人と 46 人の染料づくり職人、そして 95 人の染料煮出し職人、295 人ののり染職人、123 人の図案・型枠職人、および 6,452 人の徒弟らが含まれる。さらに、染布を洗ったり、荷運びする者たちがいた。染物職人の仕事は薄暗い部屋の中で 1 年間を通じて季節を問わず朝から晩までであり、収入は中ほどで決して悪くはなかった。捺染された綿布は駄馬の背に載せられてザーヤンデルード川に運ばれ、水にさらして川岸で乾かされた。19 世紀後半には、このようにして毎年 28,000 片の綿布が色付けされたという[9]。

ホルツァーの伝える染物職人（*rang-raz*）には、収税吏ミールザー・ホセイン・ハーンのいう「染布職人（*ṣabbāgh-i qadak*）」と「プリント更紗職人（*chīt-sāz*）」が含まれる。いわく、前者は王の広場のそばに 2 つの連結した長いバーザールをもち、井戸や釜、洗い場のある 136 軒の立派な店舗がある。この専用のバーザール以外にも、染布職人の店舗や工房は市内中心部のバーザールや街区のあちらこちらにあった。また、後者のプリント更紗職人は、金色絵付けの「ガラムカーリー」をつくる職人らであり、4 つの連なったバーザールをもち、その門の 1 つは王の広場のカイサリーエに面している。また、この職人ら専用の店舗や工房 284 軒からなる「王のキャラバンサライ」をはじめとする 5 つのキャラバンサライをもっていた。ただどちらも大規模な職人集団であったものが、19 世紀末にはヨーロッパ産の綿布に押され、

る扉があった［守川（2020）「近世イランの王都の中のキャラバンサライ」、209-211 頁］。

9 Höltzer, *Persien vor 113 Jahren*, pp. 40, 43-44 (Persian ver., pp. 29, 31-32); Philipp (1984), “Isfahan 1881-1891,” p. 398. イスファハーンやカーシャーンの捺染方法については、ヴルフ『ペルシアの伝統技術』、230-233 頁が詳しい。染色については同 196-202 頁を参照のこと。

職人の数が半減したという[10]。

（2）織物業

イスファハーンの主要な産業として捺染業に次いでホルツァーが挙げるのは、織物職人（Weberei）である。ホルツァーは、「かつて、イスファハーンの人びとの主要な職業は帆布、長シャツ用綿布、白綿布、ショール、シャツ用上質綿布、ビロード、絹布のほか様々な粗布や上質布を織ることであった」と述べる。彼らは年間総額 1,000 トマンの税金を支払い、その技術は高度なレヴェルに達していたが、この時期にはすでにヨーロッパからの輸入品のために機織り機の数は減少し、都市や周辺の村落でもわずかしか見られず、年老いた女性や村人が冬のあいだに細々と手仕事をしているにすぎないという。収税吏ミールザー・ホセイン・ハーンも織物職人（*nassāj*）について同様のことを述べる[11]。確かに表 1 では、帆布織り職人は 120 人、ショール織り職人は 110 人を数えるも、綿布は 25 人、ビロードは 14 人、絹布にいたってはわずかに 7 人しかいない。

ただし、ここで注目すべきことは 2 点ある。ひとつは、織物職人だけではなく、綿打ち職人（110 人）や刺繍職人（112 人）、毛織物縫製職人（46 人）、金糸つむぎ職人（30 人）、絹糸つむぎ職人（3 人）、筬づくり職人（15 人）といった布地をつくる上で欠かせない職種もあわせると、「布地」に関係する手工業者はイスファハーンの手工業者全体の 2 割を占めている点である（図 2 参照）[12]。捺染業も実際は布地関連業であることから、両者をあわせると布地に関連する職人は 56％を占める。すなわち、イスファハーンでは手工業者の半数が捺染・織工・紡糸・縫製・刺繍といった布地製造および加工にかかわっているのである。

もうひとつは、布地関連業もまた分業化が進んでおり、多種多様となっている点である。史料からは織る人（織工）や縫う人（縫製工）を示す「～バーフ」や「～ドゥーズ」が実に数多く確認される。たとえば布地そのものでは、更紗（綿布）・絹布・帆布・毛織物・ショール・ビロードなどの種類がありそれぞれを専門に扱う職人がいる。また、仕立てた製品としては、テント（*chādur*）、キルト布団（*laḥāf*）、上着（*kalīja*）、外套（*ʻabā*）が挙がる。ここに『イスファハーン地誌』の情報をあわせると、錦織り職人（*zarī-bāf*）、ヨークシャー産の毛織物を指す「ロンドン織り」専門の縫製職人（*landra-dūz*）、絹布機織り職人（*shaʻr-bāf*）、バーザールの縫製職人（*khayyāṭ-i bāzār*）、既製品縫製職人（*bāzārī-dūz*）、夜用チャードル織り職人（*chādur-i shab bāf*）、黒絹布織り職人（*mishkī-bāf*）、リボン織り職人（*jahk-bāf*）、鎖組み紐のモール織り職人（*zanjīra-bāf*）、腰巻き織り職人（*lung-bāf*）、跪拝用布職人（*iḥrām-bāf*）といった職人が追加される。これらの商品を織ったり仕立てたりする職人の数はわずか数人しかいない場合もあるものの、ここで重要なことは、当時のイスファハーンには「20 種の織工がいた」と評されるほど、布

10　Taḥvīldār, *Jughrāfiyā-yi Iṣfahān*, pp. 93-94.

11　Höltzer, *Persien vor 113 Jahren*, pp. 40, 45-46 (Persian ver., pp. 29, 32-33); Taḥvīldār, *Jughrāfiyā-yi Iṣfahān*, pp.100-101. 織物については、ヴルフ『ペルシアの伝統技術』、181-233 頁参照。

12　表 1 および図 2 の「業種による分類」は本稿で便宜的に設けたものである。

地の種類もその製品も多様性に富んでいることである[13]。

同様に、糸にかかわる職人も多様である。30 人を数える金糸つむぎ職人（*zar-kash*）や 3 人しかいない絹糸つむぎ職人（*tirma-bāf*）のほか、『イスファハーン地誌』では、銀糸つむぎ（*sīm-kash*）、染糸職人（*ṣabbāgh-i rīsmān*）や絹糸染付職人（*ṣabbāgh-i abrīsham*）、主にユダヤ教徒が従事していたとされる絹糸をなめらかにする職人（*abrīsham-kār*）、ロープ撚り職人（*mū-tāb*）への言及がある[14]。

そして多様性の点で最後に特筆すべきは刺繍職人である。ホルツァーのリスト（表 1）では刺繍職人（*sūzan-dūz*）は 112 人を数えるが、説明書きによるとそのうちの 100 人は女性となっている。一方、別途挙げられる「女性が携わる職業」では、金銀のラメ糸での刺繍（*naqda-dūzī*）や銀糸の刺繍（*malīla-dūzī*）やかぎ針編みの刺繍（*qullāb-dūzī*）、真珠あしらったりする（*murvārīd-dūz*）ほか、糸つむぎや靴下編み、仕立て、面紗や下着紐や帯、縁なしの刺繍帽づくりなど、19 種の大半が刺繍や布地の縫製に関連している。刺繍や縫製以外の女性の職業は、産婆（*qābila*）と油搾り（*rawghan-zanī*）のみである[15]。表 1 からはほかに、56 人の従事者がいる絹糸での飾り紐やレースを編む職人（*‘alāqa-band*）が数えられるにすぎないが、『イスファハーン地誌』を見ると、上述の特殊な刺繍に加えて、金糸や銀糸を用いる花刺繍職人（*gulābitūn-dūz*）、図柄刺繍職人（*naqsh-dūz*）、十刺し刺繍職人（*dah-yek-dūz*）、スパンコール刺繍職人（*pūlak-dūz*）、花柄刺繍職人（*gulcha-dūz*）、レース模様刺繍職人（*sukma-dūz*）など、刺繍やステッチの方法によって異なる専門性の高い職人集団の名が挙がる[16]。すなわち、イスファハーンでは女性を中心に、お針子や刺し子が様々なかたちで織物業――なかでも刺繍――に従事し、インド産の輸入綿布やイラン特産の絹布といった高価な布地の上に金や銀や色付けをした絹糸で刺繍し、レースやリボンやスパンコールで飾りつけをすることによって布地の付加価値をいっそう高めていたことがうかがわれるのである。

イスファハーンでのこのような布地関連業の隆盛は、サファヴィー朝期のイスファハーンがインドやヨーロッパからの布地輸入の中心地であったことと無関係ではない。サファヴィー朝末期に著された『イスファハーンのキャラバンサライ案内』では、インドからの布地を扱う王の広場周辺のキャラバンサライが複数紹介されている。それによると、オランダやイギリスの東インド会社のみならず、特にスィンド地方の商人らもこれらの

13　Taḥvīldār, *Jughrāfiyā-yi Iṣfahān*, pp. 97-98, 101-103; Philipp (1984), “Isfahan 1881-1891,” pp. 396-398. このほか、Floor (1999), *The Persian Textile Industry* も参照のこと。本稿では「ギーヴェ」と呼ばれる布靴を「靴」の項目に入れたが、布地の加工品であることから、ここに加えることも可能である。

14　Taḥvīldār, *Jughrāfiyā-yi Iṣfahān*, pp. 97, 107, 117-118, 121.

15　Höltzer, *Persien vor 113 Jahren*, p. 22 (Persian ver., pp. 13-14). なお、イスファハーン中心部のバーザールには、「油搾りのマクスードのキャラバンサライ」として知られるキャラバンサライがある［守川（2020）「近世イランの王都の中のキャラバンサライ」、215-216 頁］。現在ここは民俗博物館となっており、前近代の油搾りの様子が再現されている。ラクダなどの大型動物を利用した重労働の油搾りとは別に、すり鉢での油搾りは女性の仕事であった。

16　Taḥvīldār, *Jughrāfiyā-yi Iṣfahān,* pp. 24, 97-100.

布地を扱った。また、藍、アカネ、ミロバランといった染料として用いられる商品を扱うキャラバンサライもあることから、イスファハーンにインド産の綿布が輸入されるのに伴い、その綿布に色絵付けをする捺染業が栄えていったであろうことが推察される[17]。

もっとも、19 世紀後半のイスファハーンの収税吏は、「かつてはこの町の職業（*aṣnāf*）の少なくとも 10 分の 1 は織工（*nassāj*）であったが、今はその 5 分の 1 も残っていない」と述べている。女性や寡婦もまたその影響を大きく蒙り、織工業が廃れるのと同時に、染色、綿打ち、布洗いなどの関連産業も消滅してしまったという[18]。ホルツァーも同様に、ヨーロッパからの廉価な布地の流入で、イスファハーンの“伝統工芸”である織物業は著しく落ち込んだという。そうではあるが、インドから輸入される布地に捺染し、あるいは布地や織物に刺繍や飾りを施し加工することがイスファハーンの織物業の最大の特徴であり、かつそれは 17 世紀にイスファハーンで発展し、その後 19 世紀にいたるまで細々とではありながらも連綿と続いていたことが確認されるのである。

III. サファヴィー朝期の王室工房と伝統工芸

ホルツァーにしてもミールザー・ホセイン・ハーンにしても、彼らの挙げる 1870 ～ 80 年代のイスファハーンの職人たちはほぼすべてが手仕事で作業する“伝統的”な手工業者であり、近代的な工

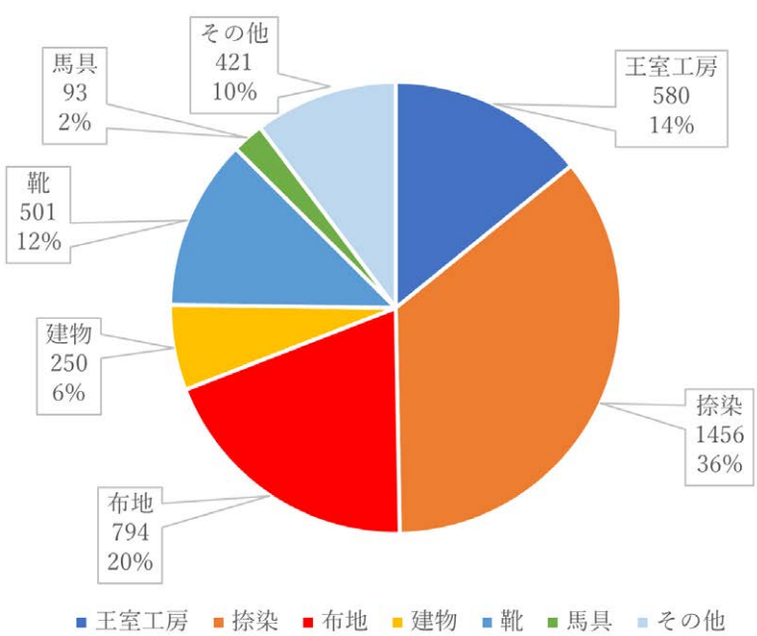


図 2 業種ごとの割合

17　守川（2020）「近世イランの王都の中のキャラバンサライ」の訳出部分を参照のこと。

18　Taḥvīldār, *Jughrāfiyā-yi Iṣfahān*, p. 101. ヨーロッパ製品の流入や合成染料のアニリンの普及に伴う 19 世紀のイランの織物業の衰退については、Froor (1999), *The Persian Textile Industry*, pp. 98-127 で非常に詳細に検討されている。

場労働者のたぐいではない。布地関連の職種と同じく、いずれも以前から存在していた手工業である。このような歴史的経緯の中で看過してはならないのは、サファヴィー朝期のイスファハーンの王宮内に設けられた「王室工房（*kārkhāna*）」の影響である。

サファヴィー朝期の王室工房については、1680年代にイスファハーンに滞在したケンペルの記述が参考になろう。ケンペルは、王室工房には王の衣食住に関連した穀物貯蔵庫や物品の倉庫などを含めて 50 以上の部署があるという。王室用の製品をつくる職人らの主な工房としては、以下の 12 の工房が挙がる [19]。

① 絹布機織り工房（*sha'r-bāf-khāna*）
② 綿打ち工房（*ḥallāj-khāna*）
③ 縫製工房（*khayyāṭ-khāna*）
④ 毛織物ズボン縫製工房（*chāqchūr-khāna*）
⑤ 靴縫製工房（*kafsh-dūz-khāna*）
⑥ 錦織り縫製工房（*ṭalā-dūz-khāna*）
⑦ 皮革縫製工房（*pūstīn-dūz-khāna*）
⑧ 金細工工房（*zargar-khāna*）
⑨ 銅細工工房（*misgar-khāna*）
⑩ 造幣工房（*żarrāb-khāna*）
⑪ 画工工房（*naqqāsh-khāna*）
⑫ 指物大工工房（*najjār-khāna*）

ここから判断するに、サファヴィー朝期の王室工房では種々の布地から様々な衣類が仕立てられ、細かな細工の施された金・銀・真鍮・錫・ブリキなどの金属製品がつくられるとともに、指物大工のもとでは鏡細工やガラスづくりも行われ、アトリエでは画工や能書家らの手による稀覯本が制作され、王室用の絨毯工房では絨毯の保管だけではなく、アウトドアに関連するテント職人や灯火づくり職人、「ロンドン織り」縫製職人や箱づくり職人が働いていた。また、おそらくは外国人の職人を中心とする時計づくり工房もあったとされる [20]。これら 12 の主な工房のうち造幣工房を除くと、ほかはすべてホルツァーの挙げる「市内でみられる手工業者」（表 1）でも確認される。

以上を踏まえ、表 1 および図 2 では、サファヴィー朝期の「王室工房」にゆかりの職種として、画工、彫石工、金細工職人、彫金職人、弓旋盤職人、鉄砲鍛冶、時計職人、銅細工職人、金箔象嵌職人、ガラス職人、鏡職人、真鍮製の盆職人、真鍮細工職人、寄木細工職人、ブリキ職人、製本職人、火薬づくり職人、箱職人、宝石箱職人を含めた。19 世紀後半のこのような手工業者たちの割合は 14％（580 人）で、数の上では決して多くはない。

一方、上掲の表 1 では、室内装飾画工（*naqqāsh-i 'imārat*）、建築職人（*mi'mār*）、石工（*sang-tarāsh*）、家具職人の指物大工（*najjār*）に関しては別立てした「建築」に分類し、圧倒的多数を占める捺染業や布地関連業も別項を立てている。だが「建築」に関しては、サファヴィー朝末期の『便覧』によると、金細工職人長官らと並んで「建築職人長官（*mi'mār-bāshī*）」を擁するほどに王室工房においても建物職人は重要な立ち位置を占めていたこと、およびホルツァーのリストでは、いわゆる実質的な作業員である煉瓦積み職人（*bannā*）80 人は市中の職業（表 1）とは別の「男性が携わるそ

19 Kaempfer, *Exotic Attractions in Persia*, pp. 106-108.

20 サファヴィー朝期の王室工房については、Mīrzā Rafi'ā, Floor & Faghfoory (trans.), *Dastur al-Moluk*, pp. 230-240, 275-307 の註釈が非常に参考になる。このほか、Minowa & Witkowski (2009), "State Promotion of Consumerism in Safavid Iran" や Floor (1975), "The Guilds in Iran," pp. 105-107 も参照のこと。

の他の職業」の中に入っていることから、建築物の内装を手掛ける特別な画工や設計に携わる建築職人、装飾用の石を削る石工、そして色鮮やかなガラスの入った木枠の窓やテーブルや椅子を作る指物師らもまた、サファヴィー朝期の王室工房の伝統を受け継いだ特殊な技巧を有した職人であったと考えることができよう[21]。同様のことは、少なくとも「布地」関連業に分類した職人らについても言えるであろう。すなわち、「建築」や「布地」もまた、明らかにサファヴィー朝の「王室工房」の影響を受け継いでいるのである。

ここで、比較対象としてバンダレ・アッバースの事例を見てみよう。Floor (2009) によると、1900 年ごろのバンダレ・アッバースでは、412 人を数える商人や職人のうち、食料雑貨や青果の行商人、タバコ売りや菓子屋、穀物商、薬種商、魚売り、パン屋、洋ナシ売りといった生鮮食品を扱う人びとが全体の 6 割（251 人）を占める一方、手工業者はわずかに、仕立て屋（3 人）、時計職人（1 人）、染物職人（1 人）、金細工職人（6 人）、靴修理職人（5 人）の 5 職種・16 人しかおらず、全体の 4%にも満たない[22]。バンダレ・アッバースが外洋へと向かうイランの窓口たる港市であったという特殊性に鑑みても、“ 都市 ” の性質において、サファヴィー朝期の首都であったイスファハーンとは大きく異なる様相が浮かび上がる。

以上のことから、表 1 に挙がる 69 の職種は、ほぼすべてがサファヴィー朝期の王室工房に由来するか、あるいは密接な関係があったと考えてよいのではないだろうか。基本的に、これらの職種の多くがサファヴィー朝期には王宮に隣接する王の広場の内外で専用のバーザールを有していた[23]。すなわち、イスファハーンに都を置いたサファヴィー朝のもとで、新都市計画とともにバーザールやキャラバンサライが整備され、国内外からの商品がイスファハーンに集うようになると、たとえ王室工房に直接の関係がなかろうとも、手工業者たちはそのような環境を利用し、舶来品をはじめ様々な品物が手に入る王のおひざ元で技術を磨いていった。そして、サファヴィー朝の滅亡後も、他の都市の追随を許さないほどにイスファハーンでは手工業の分業化や専門化が進んでいったのである。

IV. 結びにかえて

19 世紀後半のイスファハーンには、少なくとも 69 種、4,000 人以上の手工業者がいた。彼らがつくり出した手工芸品は日常使いのものもあるが、主として金や銀、真鍮やブリキなどの希少な金属製品に打ち出し細工や彫金や浮き彫りを施したり金箔を貼ったりするものであり、綿布に捺染プリントし、イラン特産の絹布や絹糸を用いて刺

21 Mīrzā Rafīʿā, *Dastūr al-Mulūk*, pp. 553-559 (Floor & Faghfoory (trans.), pp. 117-124); Höltzer, *Persien vor 113 Jahren*, p. 23 (Persian ver., p. 14); Taḥvīldār, *Jughrāfiyā-yi Iṣfahān*, p. 97. 19 世紀後半には、イスファハーンの石工と指物大工は刀剣職人とともに免税対象であり、指物大工は 1880 年代にはその数を半減させ、かつての精巧さは失われた一方で、ヨーロッパ・スタイルのテーブルや椅子を製作する職人として復活したという。イランの指物については Floor (2006) 参照［Floor (2009), *Guilds, Merchants, & Ulama*, p. 143; Philipp (1984), “Isfahan 1881-1891,” pp. 406-407; Floor (2006), “The Woodworking Craft and Its Products in Iran,” pp. 173-183］。

22 Floor (2009), *Guilds, Merchants & Ulama*, p. 115.

23 Tavernier, *Voyages de Perse*, Tome I, pp. 397-403. 1924 年のイスファハーン市街図に基づく各専門バーザールの後世の位置については、Gaube & Wirth (1978), *Der Bazar von Isfahan* を参照のこと。

繍や飾りをあしらい加工するものであった。

これほど多種多様かつ精巧な技術を身につけた「職人」を有した「職人のまち」たるイスファハーンは、19 世紀には「織物のまち」でもあった。更紗、絹布、綿布、帆布、毛織物など様々な布地があり、それにプリントしたり、刺繍や飾りを施してさらに価値を高めるのが長らくイスファハーンの主要産業であった。このことは捺染業と布地関連業で全体の半数以上を占め、とりわけ捺染業にはさらに数千人規模の従事者がいることからも明らかである。

もっとも、Philipp (1984) は、ホルツァーとミールザー・ホセイン・ハーンの記述をもとに、19 世紀後半のイスファハーンでは 178 ある職種のうちの 62 の職種が衰退か消滅しかかっていたとする。その要因としてヨーロッパ製品の流入、最新技術の導入、サファヴィー朝の滅亡という政治的要因や都市の消費者が減ったことによる技術継承の断絶、およびテヘランやタブリーズへの移住を挙げる[24]。しかしながら、たとえいくつかの職種では「サファヴィー朝時代の技術水準に達しない」[25] と言われようとも、“ 伝統の継承 ” という観点からみるならば、19 世紀のイスファハーンの手工業者たちは明らかにサファヴィー朝期の「遺産」を引き継いでいる。これほど多様な手工業および手工芸品の存在は、日本の京都や城下町の金沢のように、都であったイスファハーンならではのことである。サファヴィー朝期の「遺産」としてのその “ 伝統 ” は、19 世紀の手工業者たちの手を通じて、プリント更紗や寄木細工、真鍮製の器や盆などの “ 伝統工芸品 ” として現代に受け継がれていくのである。

参考文献

一次史料

“Dar Dānistan-i Kārvānsarāy-i Iṣfahān,” British Library, MS. Sloane 4094.

Höltzer, Ernst, *Persien vor 113 Jahren*, Ed. and Persian trans. by M. ʻĀṣemī, Tehran: Kultur- und Kunstministeriums Zentrum fur die Persische Ethnologie, 1975.

Kaempfer, Engelbert, *Exotic Attractions in Persia, 1684-1688: Travels & Observations*, Trans. by W. Floor & C. Ouahes, Washington, DC: Mage Publishers, 2018.

Mīrzā Rafīʻā, *Dastūr al-Mulūk*, Ed. by M.T. Dāneshpazhūh, *Majalle-ye Dāneshkade-ye Adabiyāt va ʻOlūm-e Ensānī*, 63-64(5-6), 1968, pp. 475-504; 65-66(1-2), 1968, pp. 62-93; 67(3), 1969, pp. 298-322; 68(4), 1969, pp. 416-440; 69-70(5-6), 1969, pp. 540-564. (Trans. by W. Floor & M. H. Faghfoory, *Dastur al-Moluk: A Safavid State Manual,* Costa Mesa: Mazda Publishers, 2007).

Taḥvīldār, Mīrzā Ḥusayn Khān, *Jughrāfiyā-yi Iṣfahān: Jughrāfiyā-yi ṭabīʻī va insānī va āmār-i aṣnāf-i shahr*, Ed. by M. Sotūde, Tehran: Chāpkhāne-ye Dāneshgāh-e Tehrān, 1963.

Tavernier, Jean-Baptiste, *Les six Voyages de Jean Baptiste Tavernier*, Paris: Gervais Clouzier et Claude Barbin, 1676.

二次文献

Floor, Willem (1975), “The Guilds in Iran — an Overview from the Earliest Beginnings till 1972,” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 125(1), pp. 99-116.

24 Philipp (1984), “Isfahan 1881-1891,” pp. 403-404. 反対に、廉価な輸入品にプリントする捺染業や外套づくり、絨毯、金属製品の加工、革靴（ロシア靴）、アヘン関連などの 11 の職種がヨーロッパとの商機から伸長もしくは再興したとされる［*Ibid*., pp. 405-407］。

25 Taḥvīldār, *Jughrāfiyā-yi Iṣfahān*, pp. 94-95, 97.

Floor, Willem (1999), *The Persian Textile Industry in Historical Perspective 1500-1925*, Paris: L'Harmattan.

Floor, Willem (2006), "The Woodworking Craft and Its Products in Iran," *Muqarnas*, 23, pp. 159-189.

Floor, Willem (2009), *Guilds, Merchants, & Ulama in Nineteenth-century Iran*, Washington, DC: Mage Publishers.

Gaube, Heinz and Eugen Wirth (1978), *Der Bazar von Isfahan*, Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert.

Minowa, Yuko & Terrence H. Witkowski (2009), "State Promotion of Consumerism in Safavid Iran: Shah Abbas I and Royal Silk Textiles," *Journal of Historical Research in Marketing*, 1(2), pp. 295-317.

Philipp, Thomas (1984), "Isfahan 1881-1891: A Close-up View of Guilds and Production," *Iranian Studies*, 17(4), pp. 391-411.

ヴルフ、ハンス・E（2001）『ペルシアの伝統技術――風土・歴史・職人』（大東文化大学現代アジア研究所監修、原隆一・禿仁志・山内和也・深見和子訳）平凡社

守川知子（2020）「近世イランの王都の中のキャラバンサライ――『イスファハーンのキャラバンサライ案内』を中心に」新学術領域研究『都市文明の本質――古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究２』研究成果報告 2019 年度、207-221 頁

研究項目 C01「中世〜現代の西アジア都市」

計画研究 06

西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究

CIAM アルジェの展示パネル（1953）にみる マヒーッディンのビドンヴィルのトポロジー

松原康介
筑波大学システム情報系

はじめに

本年度の筆者の成果の一つはアルジェの近代都市計画史、特に離村農民の居住地であったビドンヴィル（スラム）事業史に関わるものであった[1]。本稿では、その核心部分である CIAM アルジェの展示パネルの分析結果を概括し、それ自体が極めて興味深い、ビドンヴィルのトポロジーの特徴について報告したい[2]。

本稿で使用する一次資料は、1953 年にエクス＝アン＝プロヴァンスで開催された第 9 回 CIAM 会議で発表された 200 以上のパネルからなる CIAM アルジェのプレゼンテーション・パネルで、現在はパリのル・コルビュジエ財団（FLC）に保存されている。パネルは、写真、デッサン、プラン、テキストなどを通して、居住者やスラムの実情について克明に伝えるものである。

次章では、パネルから読み取れる 1950 年代までアルジェの中心市街地に存在したマヒーッディンのビドンヴィルの実情について、(a) 都市問題の形成過程、(b) マヒーッディンの都市社会問題、(c) 過密化と劣悪な衛生環境、(d) 居住動態と空間構成の地域性、の 4 つの視点から整理する。カッコ内の数字はパネルに付されたシリアルナンバーを示す。

CIAM アルジェの展示パネルにみるビドンヴィルの実情

(a) 都市問題の形成過程

まず、アルジェの全ビドンヴィルの概要が述べられている（211-1）。1941 年時点におけるビドンヴィルの数は 16 ヶ所、人口 5,000 人であった。しかし、53 年までに 87 カ所にまで拡大し、人口は 35,000 人となった。また、アルジェのカスバには、1881 年にはヘクタールあたりの人口は 1,436 人であったとされているが、1953 年にはヘクタールあたり 3,000 人にまで増加している。同パネル

1　本年度は、アルジェの都市計画史については、6 班分担者の渡邊祥子 (アジア経済研究所) とともに研究会を実施した（渡邊の報告「植民地期後期アルジェのカスバのイメージ」も参照）。また、在学中に本プロジェクト RA を務めた牧野奈央（日建設計）による修士論文「アルジェリア人からみた仏植民地期カスバの都市空間－マフード・カッダーシュの報告の分析を通じて－」も本研究の成果の一環である。特に、植民地時代末期にアルジェのカスバに関する卒業論文を執筆した後年の歴史学者・マフード・カッダーシュのカスバ論を共同で検証し、アルジェリア人にとってのカスバの見方を検討した。いずれ学術発表を行う予定である。

2　筆者の学術論文として、文献 11 を発表した（本報告書の執筆時点で Early View として公開されている；掲載誌は 2021 年 4 月号の予定である）。本報告は、ここから当該部分を抽出し、和文により作成した。

は、アルジェが世界最大の「カビール村」[3]になる危険性があると警告している。住民のほとんどは、村を離れた元農民であり、その出身地もパネル（111-1）に示されている。

マヒーッディンのビドンヴィルは、今日の 1er Mai 広場や Champs de Manouevre がある新市街から数キロ離れた丘陵地帯に位置している。この土地では中央市場や港、及び約 1,000 人程のアルジェリア人労働者が働いていた、小さな工場の付近に位置している (212-1)。ヨーロッパ系植民者向けに作られた新市街は、幅の広い道路が計画的に整備されていたが、丘陵地帯の道路は狭く、自然の斜面に沿って曲がりくねっていた (213-1)。ヴィラ・マヒーッディンと呼ばれる 2 つの古いヴィラがあり、1948 年に政府によって歴史的建造物として登録された。写真は、中心街の丘陵地にあるマヒーッディンの様子で、湾に向かって下る細い道に沿って形成されている（102-1）。

また、マヒーッディンの形成過程が、1928 年、1942 年～ 45 年、1948 年～ 50 年の航空写真とともに概説されている。1928 年には、マヒーッディンの土地は富裕なムスリムの家族が所有していた。マヒーッディン最初のバラックは、この土地の周辺部に作られた。土地の使用料は無料であったが、これは伝統的なムスリムの寄付の習慣ハブース（標準アラビア語ではワクフ）の名残であった（ハブースはフランス政府によってアルジェリアで正式に取り壊されていた）。最も古いバラックは 1900 年頃に西側に建設されたものである（201-1）。

1945 年にはマヒーッディンの一部が海上警察の敷地として収用され、ムスリム家族の土地もヨーロッパ人により買収された。ヨーロッパ系住民のための巨大な集合住宅が建設され、政府と市が所有した。跡地の東側はムスリム商人の住宅地となった。戦争中の貧困と闇市が形成され、ビドンヴィルは拡大した。バラックの数は 1,079 棟となり、人口は 879 世帯からなる 3,241 人に膨らんでいた（201-2）。

1948 年には、2 棟のヴィラ・マヒーッディンの周囲の土地が歴史的景観保存地区に登録された。更に、国立看護学校のための巨大な住宅団地が建設され、南部には男子校が建設された。ビドンヴィルもこの時期に拡大した（201-3）。1952 年（昭和 27 年）のバラック数は 1,650 戸、居住者は 7,200 人で、2,000 世帯が住んでいた。

(b) マヒーッディンの都市社会問題

職を求めて離村して都市部にやってきたものの、他に行き場がなく、ビドンヴィルにやってきた農民向けに、8 ～ 10 人程度収容の安宿（ドヤ）が存在していた。そこで、農地を出たばかりの人たちがビドンヴィルにおいて組織化されていたのである。下宿人は板かマットの上で寝た。私物は小さな籠に入れられ、ロフトで保管されていた。料金は一泊 200 フランであった。安レストランが存在し、定食が 25 フランからで、ノンアルコールの飲み物も提供されていた。壁はむき出しの日干し煉瓦か木の板材でできていた（151-2）（図 1）。床は粗く打ったコンクリートでできている。調理には石炭油が使われ、照明にはアセチレンランプが使われていた（121-2）。

もともとマヒーッディンの土地所有者はバラック居住者から家賃を取っていなかった。アル

3　アルジェリア北部のカビリア地方の先住民族である。

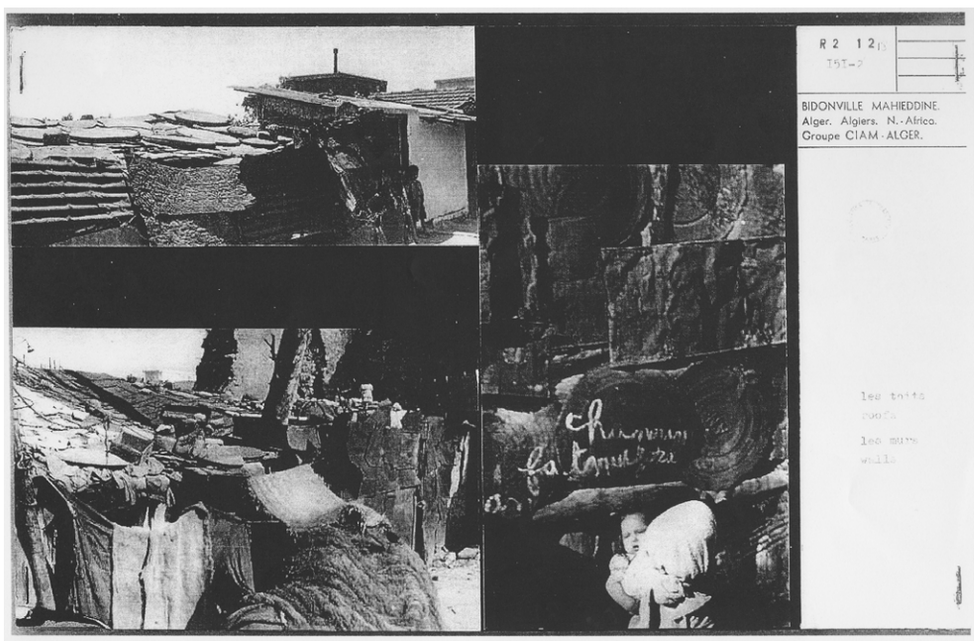


図 1

ジェ市の HLM 事務局がビドンヴィルの管理を引き継いだ後、その管理費を賄うために税金を課すようになったとされている。 また、ヴィラ・マヒーッディンでは、1 つのヴィラはアイン・ファクランの大株主が所有しており、もう 1 つのヴィラは警察が借りていた。

バラックの「オーナー」の中には、自分でバラックに住んでいる者もいるが、他の者に貸して家賃で生計を立てている者もいた。こうしたオーナーは、自分のバラックに加えて、賃貸用のバラックを「建築」している。バラックの平均的な大きさは 6.6m×8m で、そのレンタル料は通常 1 日あたり 12 ～ 14 フランである。バラックを購入するとなると、40 ～ 70 ポンドが相場である。売店の場合はレンタル料は月 8000 フラン程度で、購入価格は 500 ～ 600 ポンドである（133-2）。

ビドンヴィルの治安に関する統計をみると、1951 年から 53 年にかけて、25 名が巻き込まれる致傷事件が発生し、犯人は 15 日から 20 日の間、刑務所で労働を行っていた。しかし、殺人事件は発生していない。マヒーッディンの住民の中には、1930 年以降、犯罪は発生していないと証言する者もいた。売春に関する統計は存在しない。住民の中には、10 種類程度の手に職を持つ者もいるが、それを活用することはできなかったと述べる者もいた（132-1）。

このビドンヴィルがあったことで、マヒーッディンの町並みと新都市の町並みのコントラストが鮮明になった。写真は、ビドンヴィルのすぐそばに教会、スタジアム、屋内プールがあったことを示している（211-2）。教会は独立後にモスクになった。別の写真では、現在、ビドンヴィルとフランス人学生のための共同学校を隔てる壁があることを示している（162-1）。

(c) 過密化と劣悪な衛生環境

CIAM-Alger がマヒーッディンの生活環境について作成したパネルのうち、有名なものはバラッ

クの過密状況について報告したものである。ベッドは木の板を 80cm の高さに積み上げたもので、マットレスがないこともある。過密居住のため、夜は 1 つのベッドで 2 ～ 3 人が寝ていた。マットの上で寝る者もいれば、裸地に毛布をかけて寝る者もいた。バラックには窓がなかった（142-1）。バラックの生活環境は、過密状態、寝具、換気不足、極端な気候（夏は非常に暑く、冬は非常に寒い）、湿度のため、衛生面で非常に劣悪であった（142-2）。

件の安宿や安食堂では、男性のみに限られ、夜の暖房や明かりには、石油やアルコールランプ、石炭を使っていた。衣服は自前であった。彼らの家はバラックで、亜鉛メッキを施した鋼鉄が建材として利用されることもあった。

水は主要通り沿いに設置された 9 つの井戸から供給された。便所はそれぞれ一つの便器が備えられたものが 3 か所に設置されていた（図 2）。シャワーや街灯もあった（221-1）。しかし、便所からは排泄物が垂れ流されていた（図 3）。生活排水も垂れ流しであり、通りには害獣だらけのゴミが散乱していた（144-1）。

ビドンヴィルの中には医療施設は存在しなかった。しかし、付近にオピタル・アシストンス（現ムスタファ・パシャ病院）という巨大な病院があり、そこがビドンビル住民の健康管理を担当していた。マヒーッディンの周辺には小さな診療所や保健所がいくつかあったが、住民のためには稼働しなかった（124-1）。

(d) 居住動態と空間構成の地域性

上記のような多くの困難にもかかわらず、マヒーッディンの住民とそのコミュニティに関する興味深い現象がいくつか見られた。住民は、もともとカビール（Kabyle）、バリカ（Balika）、ジェルファ（Djerfa）、タブラート（Tabrat）と



図 2



図 3

いった地域の出身であった。彼らは出身地別にグループに分かれて生活していた（111-2）。例えば、バラックを建て始めたばかりの 2 つの家族の写真があり、それぞれの文化の違いを示している (183-1)。

CIAM アルジェの作成した調査地図によると、小さなバラックは不規則な路地に沿って形成されており、後背には小さな中庭もみられる。別の航空写真によると、バラックは極めて密集しており、新市街の組織化された都市空間とは明らかに異なっている。しかし、マヒーッディン（201-4）では、バラックながら商店街を形成する主要な通りがいくつかあったようである（図 4）。商店は、住民 153 人に対して 1 軒の割合で存在していた。ほとんどの商店は食料品店であった。店舗では肉、牛乳、油、野菜などが売られており、行商人が魚や卵を持って訪れることもあった（161-1）（図 5）。大通りには配送のために車が入ってきていた（214-2）（図 6）。

コミュニティリーダーのバラックは実測を含めた調査がなされており、これによると、中庭式であり、中庭の周囲を巡るように部屋があり、水場、便所が存在していた。つまり、バラックはプライバシーを尊重するというムスリムの伝統的な慣習に基づいて形成されていたのである（143-3）（図 7）。通行人の視線はバラックの内側や中庭には届かないように工夫されている一方、バラックの内側からは、見事な海の景観を見ることができた（144-3）（図 8）。これは視線計画といえ、やはりムスリムの伝統的な空間構成に好まれるプライバシー尊重の原則に則ったものをみることができる。

マヒーッディンの居住実践

このように、CIAM アルジェによるパネルは、マヒーッディンのビドンヴィルの内容に関する豊


R 2 14
201-4
BIDONVILLE MAHIEDDINE.
Alger. Algiers. N.-Africa.
Groupe CIAM-ALGER.
Situation en 1953
Le bidonville vit sa propre vie.
rue commerçante
rues principales
Terrains maraîchers
Hôtel de célibataires
en 1952, on dénombre
1650 baraques
2000 familles
7200 habitants
Dans le grand pré au sud entouré de barbelés pature une seule vache.

図 4

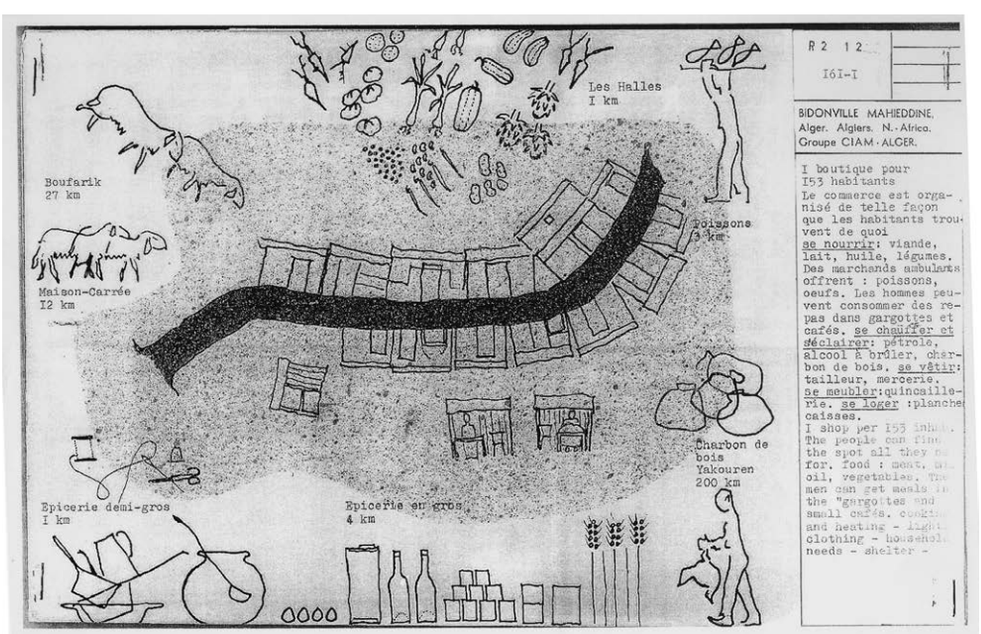

R 2 12
161-1
BIDONVILLE MAHIEDDINE.
Alger. Algiers. N.-Africa.
Groupe CIAM-ALGER.
Les Halles
1 km
Boufarik
27 km
Maison-Carrée
12 km
Poissons
3 km
Charbon de bois
Yakouren
200 km
Epicerie demi-gros
1 km
Epicerie en gros
4 km
1 boutique pour
153 habitants
Le commerce est organisé de telle façon que les habitants trouvent de quoi
se nourrir: viande, lait, huile, légumes. Des marchands ambulants offrent : poissons, oeufs. Les hommes peuvent consommer des repas dans gargottes et cafés. se chauffer et déclairer: pétrole, alcool à brûler, charbon de bois. se vêtir: tailleur, mercerie. se meubler:quincaillerie. se loger :planches caisses.

図 5

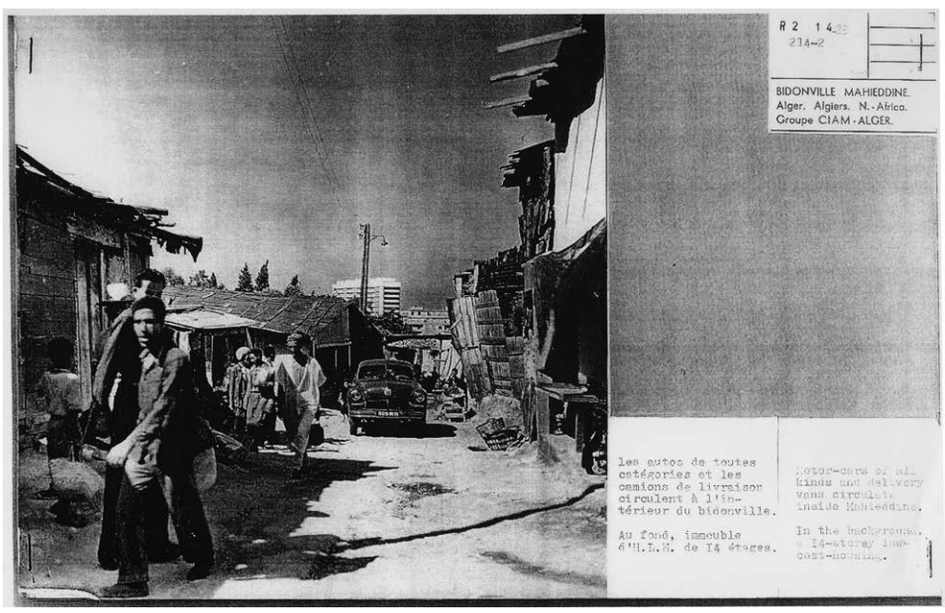

R 2 14
214-2
BIDONVILLE MAHIEDDINE.
Alger. Algiers. N.-Africa.
Groupe CIAM-ALGER.
les autos de toutes catégories et les camions de livraison circulent à l'intérieur du bidonville.
Au fond, immeuble d'H.L.M. de 14 étages.
Motor-cars of all kinds and delivery vans circulate inside Mahieddine.
In the background, a 14-storey low-cost-housing.

図 6

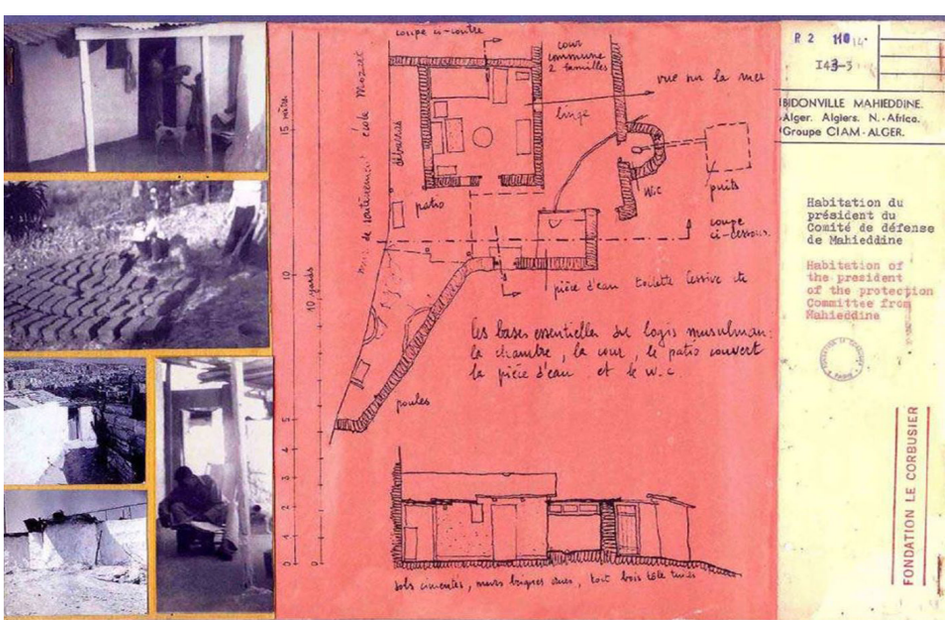

R 2 HO 14
I43-3
BIDONVILLE MAHIEDDINE.
Alger. Algiers. N.-Africa.
Groupe CIAM-ALGER.
Habitation du président du Comité de défense de Mahieddine
Habitation of the president of the protection Committee from Mahieddine
FONDATION LE CORBUSIER
coupe ci-contre
cour commune 2 familles
vue sur la mer
linge
W.C
puits
patio
coupe ci-dessus
pièce d'eau
douche
Les bases essentielles du logis musulman: la chambre, la cour, le patio couvert la pièce d'eau et le W.C
poules

図 7

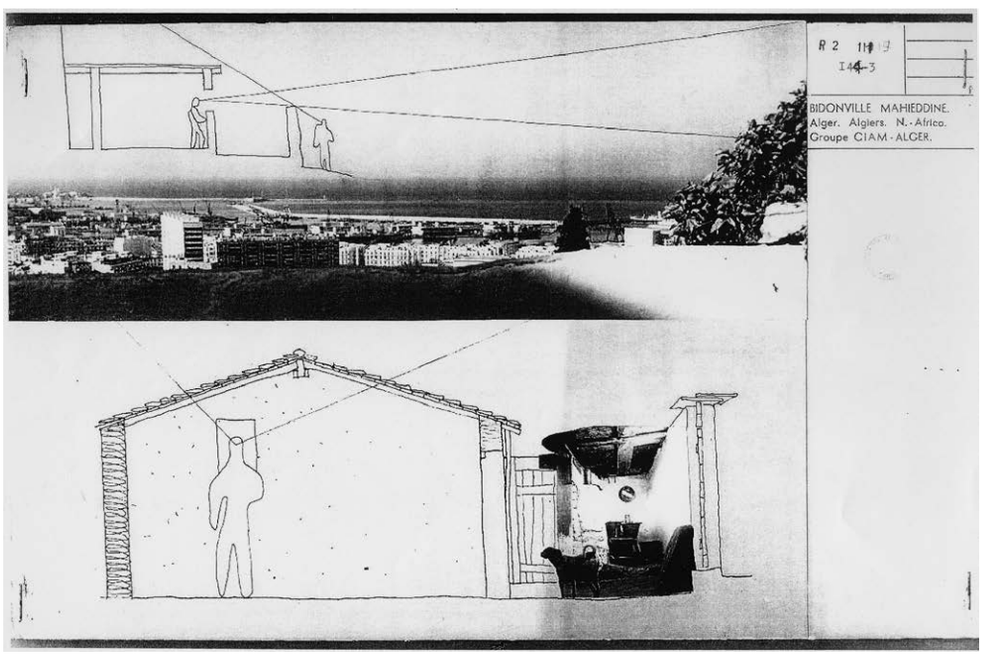


図 8

富な知見を提供している。まとめると、(a) の視点では、農民が村を離れて都市に流入する現象や、立地、人口、形成過程ついての基本的情報が示されている。(b) の観点からは、ビドンヴィル社会の基本的な構造として、新規参入者の吸収と組織化、土地やバラックの有料化、税金の賦課、土地所有の格差が認められた。(c) の視点では、狭いバラックの混雑、不衛生な便所、医療施設の不足など、ビドンヴィルの生活環境の劣悪さがリアルに描写されていた。最後に (d) の視点では、住民の出自に由来する地域文化の多様性、一部に大通りがある公私の空間構成、中庭を中心とした住戸の空間構成など、ビドンヴィルにも集住的生活があったことが伺われた。

モロッコ、カサブランカのビドンヴィル事業を担当したジョルジュ・キャンディリスに関する研究[4]において、トム・アヴァーマートは、「アビタ（habitat)」とは、その地域の気候的、地理的、地質学的特性に基づく居住実践であり、文化的に適応したアビタ（アビタ・アダプテ（habitat adapté)」であると定義している[5]。「アビタ」の観点からは、マヒーッディンの住民が行う空間形成についても、一つの居住実践とみなすことができ、そこにはイスラームの要請に基づく空間形成の原理との関わりもみることができる。

この点については、1980 年代にアブー・ルゴドが提唱した『イスラーム都市』論に対する有名な批判との兼ね合いから慎重に検討する必要があ

4 “The ATBAT conception took its point of departure from the existing notion of habitat adapté and broadened it. Climatological, geographical and geological characteristics were added to the specific cultural aspects of dwelling practices”. (Avermaete 2006, p.142)

5 Matsubara (2020)

る。ルゴドは、『イスラーム都市』を「西欧のオリエンタリストが作った文学的構築物[6]」と批判した上で、都市を現代的な生活の視点から評価すべきであるとして、「防御的ではなく相互扶助的な近隣（単位）」「女性のためだけではない家庭のためのプライバシー」「慣習法を矛盾なく運用しながらも、隣人の権利を守ること」などを具体的な例として挙げている[7]。マヒーッディンの場合、住民の生活環境は、裕福な設備はもたないものの、本当に必要な材料を住民自身が用意し、巧みに築きあげたものであった。マヒーッティン住民が示した居住実践を「イスラーム的」とみなすことはできるだろうが、それは物理的な都市や空間の典型的な構成を意味するものではない。それは、生活環境の「進化」を示すプロセスや現象として理解されるべきものではないだろうか。

参考文献

Abu-Lughod, L. Janet. “The Islamic city – Historic Myth, Islamic Essence, and Contemporary Relevance.” *International Journal of Middle East Studies* 19 (1987): 155–176

Avermaete, Tom. *Another Modern. The Post-War Architecture and Urbanism of Candilis-Josic-Woods*. Rotterdam: NAi Publishers, 2006.

Groupe CIAM-Alger, *Présentation du bidonville Mahieddine au congrès CIAM 9 d’Aix-en Province*, 1953.

Haneda, Masashi and Miura, Toru (ed.). *Islamic Urban Studies,* Routledge, 2014.

House, Jim. “Shantytowns and rehousing in late colonial Algiers and Casablanca”, In *France’s Modernising Mission: Welfare, Citizenship and the Ends of Empire*, edited by Ed Naylor, 133163. Basingstoke : Palgrave, 2018.

Kaddache, Mahfoud. *La Casbah*, circa 1950.

Matsubara, Kosuke, *Conservation et Modernisation de la ville historique de Fès, Maroc*, Recherches sur les langues et les cultures d’Asie et d’Afrique, 2014.

Matsubara, Kosuke. “Japanese Cooperation for Evolutional Housing and Slum Upgrading Projects under Mayor Chevallier : Spatial Experience of Gyoji Banshoya in Algiers”, In *Sustainable North African Society : Exploring Seeds and Resources for Innovation*, edited by Hiroko Isoda et al., pp.267-284. New York: Nova Science Publishers, 2015.

Matsubara, Kosuke. “A shift from “habitat pour le plus grand nombre” to “habitat évolutif” in post-war francophonie: A study on the history of international and regional exchange activity of ATBAT(Atelier des Bâtisseurs), part 2.” *Japan Architectural Review*, 2020: 610-614.

Matsubara, Kosuke. “Some Learnings Gyoji Banshoya Acquired from the Spatial Composition of the Ancient Shantytown of Mahieddine, in 1950’s Algiers: Research on Dwelling Practice around the ‘Bidonville (Shantytown)’ Project in Algiers during the Late Colonial Period, Part 1.” *Japan Architectural Review*, 2021: 1–13.

牧野奈央「アルジェリア人からみた仏植民地期カスバの都市空間－マフード・カッダーシュの報告の分析を通じて－」筑波大学システム情報工学研究科修士論文 , 2021.

6 “They have been influenced, whether wittingly or not, by a body of literature produced by western Orientalists purporting to describe the essence of the Islamic city”. Abu-Lughod (1987), p.155.

7 Abu-Lughod (1987), p.173.

オールド・ダマスクスの交通解析

岡野圭吾[1]・松原康介[2]・谷口守[2]
[1] 筑波大学システム情報工学研究科 [2] 筑波大学システム情報系

1. はじめに

1-1 ダマスクスの都市計画

中東シリアの首都ダマスクスは、継続的に人が居住してきた都市としては世界最古と言われており、その歴史は 7000 年にも及ぶとされている。ダマスクスが都市として確立されたのは紀元前 12 ～ 10 世紀頃といわれ、以降様々な王朝の支配下に置かれてきた．紀元前 334 年から始まったアレクサンドロス大王による東方遠征の結果、ダマスクスはギリシアの支配下に置かれ、紀元前 63 年にはローマに併合、635 年にはイスラムの支配下となる [1]。

ダマスクスの中心部には城壁に囲まれた旧市街があり、旧市街全域がユネスコ世界文化遺産「Ancient City of Damascus」として登録されている。旧市街の骨格は紀元前 1 世紀頃、ギリシアの支配下で形成され、格子状の道路区画を基礎にアゴラや円形劇場、神殿などが築かれた。その後時代とともに、アゴラはキリスト教徒の居住区に、神殿は教会、モスク（世界最古のモスクといわれるウマイヤ・モスク）へと変化を遂げる。また、街区もギリシア時代のグリッドの骨格の上に、イスラム都市の特徴である細い街路や袋小路が形成された。このように、ダマスクスの旧市街はギリシア、ローマ、イスラムの各文化が重なり形成されてきた [2]。

その後 16 世紀になるとオスマン帝国の支配下におかれ、ダマスクスはイスラムの聖地ヒジャーズ地方への交通拠点として栄える。1869 年のスエズ運河の開通に対抗し、1900 年にはヒジャーズ鉄道（ダマスクス・ヒジャーズ駅－メッカ）が建設されるなど、インフラ整備が進められてきた。そして現在では、旧市街の外側へと新たな市街地が拡大しており [2]、主に旧市街の西に広がる新市街がシリアの政治、経済の中心地となっている [3]。

ダマスクスでは、1968 年にミシェル・エコシャールと番匠谷堯二（UNDP：国連開発計画の専門家）により策定された都市基本計画（以降、68 年計画）が、都市計画の基礎となっている。68 年計画は旧市街、新市街のいずれをも扱っており、モータリゼーションへの対応という時代の要請のなか、ダマスクス外縁部では高速道路ネットワークを計画、旧市街でも街路の拡幅などが計画されている。旧市街での道路計画に対しては都市文脈の破壊などという批判がユネスコを中心になされてきた。しかし、松原 [1] は 68 年計画の核心である「古代都市の再構築」というアイデアは、道路計画のための方便ではなく、保全と近代化の狭間で重層的な空間の成り立ちを想起させるための手法であったと指摘している。

ダマスクスでは番匠谷らによる 68 年計画をきっかけに、日本による技術協力が継続されてきた [4]。90 年代後半、計画人口 150 万人とする 68 年計画の策定から約 30 年が経過し、ダマスクス市域で 150 万、周辺部を含めると 340 万の人口に達していた。次の 20 年を見通す計画の策定を必要としたダマスクス市から、シリア国政府を通じ日本国政府は要請を受け、1997 ～ 1999 年に「ダマスクス市都市交通計画調査」が実施された [5]。本調査では、現況交通状況調査・マスタープラン策定・マスタープランのうち早期に実行されるべきプロジェクトの実行可能性調査の 3 点が実施された。

その後 2003 年にシリア政府から 68 年計画の改定支援要請を受け、2006 ～ 2008 年に「ダマスクス首都圏総合都市計画策定調査」が実施されている [4]。本調査では、ダマスクス首都圏の開発方針等が検討されており、経済効率・人間の安全保障・文化都市の 3 点が計画概念として定義されている [6]。また、本調査の事前調査報告書において、ダマスクスの交通の概況についてまとめられており、以下はその抜粋である [7]。

- ダマスクスの市内交通は自動車である。
- 鉄道は長距離用であり、地下鉄はまだない。
- 庶民の足はミニバス（セルビスと呼ばれ、決まった路線を走るが停車場は確定していない）である。
- 普通サイズのバスもあるが、数は限られている。
- タクシーもよく使われている。
- 路上駐車、セルビス、交通管理システムの遅れにより道路混雑が発生している。

以上のように、ダマスクスは長い歴史の中で様々な文化が複雑に重なりながら形成されてきた。特に、城壁に囲まれ狭い街路が入り組む旧市街では、全域に歴史的な文化遺産が分布している [7]。外縁部では 68 年計画のもと道路ネットワークが形成される一方、ダマスクスでは人口流入が続き、山の麓に不法住宅群が形成される等の課題も生じている。

1-2　JICA によるパーソントリップ調査

JICA（独立行政法人国際協力機構）では、先述のダマスクス市都市交通計画調査も含め、多くの途上国でマスタープランの策定などを目的とした都市交通開発調査を実施してきた。その一環として、パーソントリップ調査（以下、PT 調査）が各国で行われており計画策定に用いられてきたが、2004 年から JICA ではその結果を研究用途向けに公開している [8]。

途上国を中心に世界各国の交通特性を把握できるという特徴から、都市間比較を行った研究などがみられる。例えば、兵藤 [9] はトリップ開始時刻やトリップ所要時間、トリップ目的、交通分担率などの比較を行っている。また、佐々木ら [10] はこれらの項目に加え収入別交通分担率や所要時間別交通分担率などについて、25 都市の交通特性の比較を行っている。

1-3　本報告の内容・構成

ダマスクスでは、日本の技術協力のもと近代化と保全の狭間で都市計画が行われてきた一方、自動車の普及に伴い道路混雑等の課題が生じている。またダマスクスは、細い街路が入り組む旧市街、計画された道路ネットワークのある郊外、などという地域特性を有する。そこで本稿では、ダマスクスの交通実態について、旧市街・新市街などの地域特性による差異を明らかにする。まず、

2. で使用データの概要整理を行う。地域特性を考慮した交通実態について、3. ではトリップ目的、4. では交通手段に着目し明らかにする。最後に、5. で本稿の成果や今後の展望をまとめる。

2. データ・分析概要

2-1　ダマスクス市都市交通計画調査（ダマスクス PT）

先述の通り、ダマスクスでは 1998 年に「ダマスクス市都市交通計画調査」が JICA により実施されている [5]。本稿では、この調査において収集された PT データを用いて交通行動を分析する。なお本稿では、ダマスクス PT・東京都市圏 PT ともにトリップごとに付与されている拡大係数を用いて拡大した結果を示している。

まず、調査回答者の性別・年齢構成を図 1 に示す。男性の比率が約 70% と女性より多い。25 都市を比較した佐々木ら [10] において、多くの都市では男女比が概ね 1 対 1 になるが、ダマスクスも含め、イスラム教徒が多い都市では男性の比率が高いと指摘されている。また、年齢構成をみると 5 ～ 29 歳が約半数を占めている。図 2 に示す人口ピラミッドをみると、PT 調査が実施された 1998 年当時のシリアでは、若年層が多く発展途上国に多く見られる「富士山型」となっており、これを反映していると考えられる。

次に、年齢階級によるトリップ目的の構成（帰宅トリップを除く）を図 3 に示す。5 ～ 19 歳では School が約 60% を占めている。20 歳以上では to Work および Business の比率が大きく、特に 30 ～ 59 歳では約 70 ～ 80% とトリップの大半を占めている。また、年齢が高くなるにつれ to Work および Business の比率が小さくなり、Social Activity および Shopping の比率が大きくなっている。

2-2　東京都市圏パーソントリップ調査（東京都市圏 PT）

本稿では、ダマスクスにおける交通行動の特徴を把握するにあたり、東京都市圏における PT 調査を比較参照しながら考察を行う。東京都市圏では、1968 年以降 10 年おきに PT 調査が実施されており、本稿では 2018 年に実施された第 6 回東京都市圏 PT 調査 [12] の結果を用いる。図 2 に示す人口ピラミッドからは、1998 年のシリアとは大

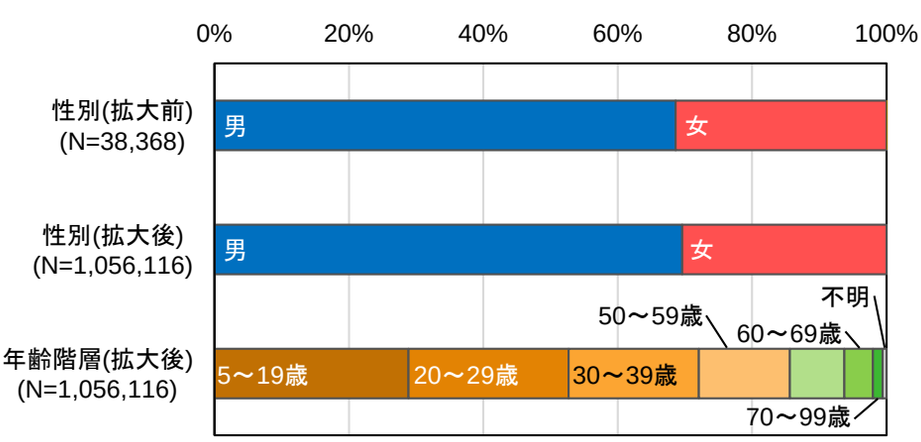


図 1　ダマスクス PT 回答者の性別・年齢構成

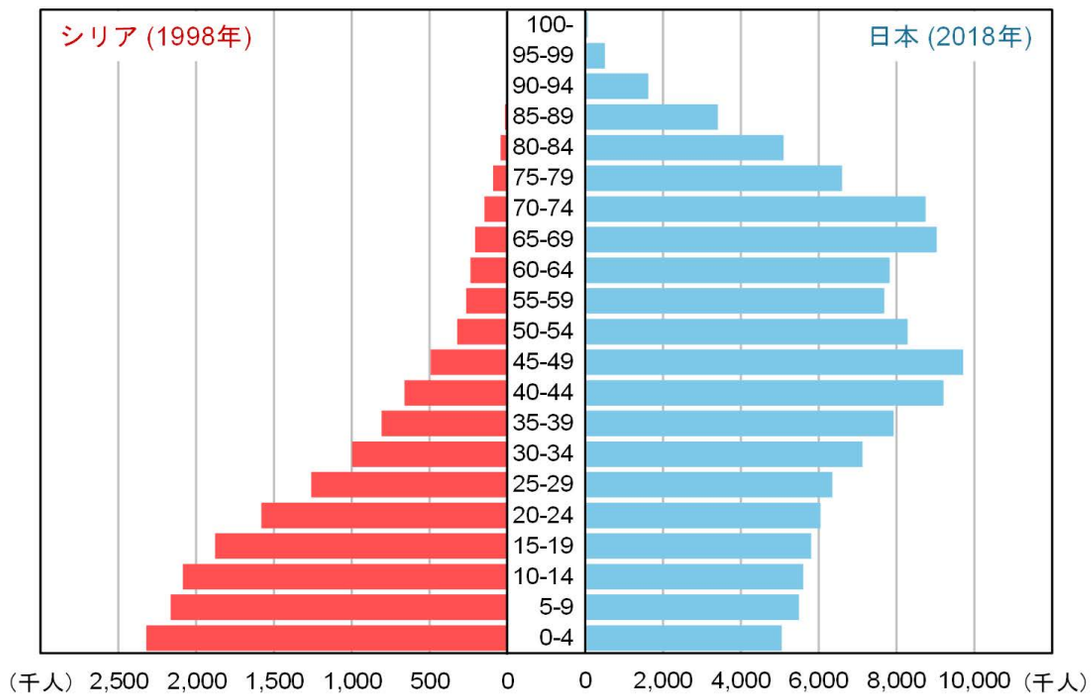


図 2　1998 年シリア・2018 年日本の人口ピラミッド

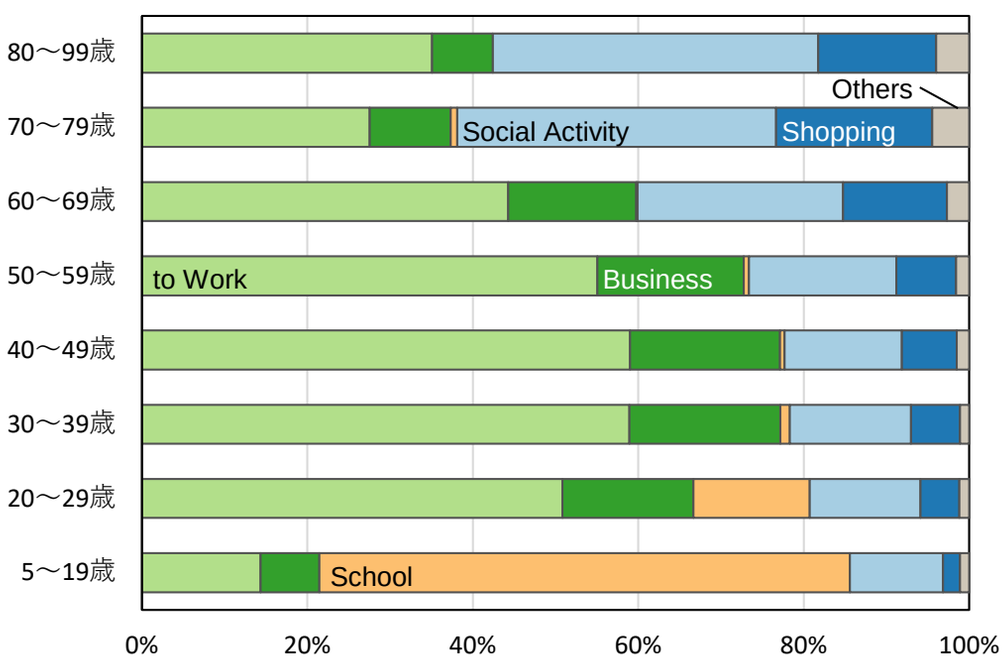


図 3　年齢階級による目的別トリップ構成（帰宅除く）

きく異なり、2018 年の日本では少子高齢化が進んでおり「つぼ型」となっていることが分かる。

2-3　分析概要

ダマスクスの交通実態について、旧市街・新市街などの地域特性による差異を明らかにするため、調査範囲を同心円状に区分けし分析を行う。ダマスクス PT における調査ゾーンと本稿におけるエリア区分を図 4 に示す。中心から、エリア A：旧市街（Old Damascus）・エリア B：ダマスクス県（Damascus Governorate Area）・エリア C：ダマスクス PT の調査範囲（Damascus Country side）とした。エリア A は旧市街であるため、先述の通り細い街路が入り組む地区となっており、スーク（市場）やモスクが存在する他、古い住宅が多く建ち並んでいる [3]。エリア B には、19 世紀以降に計画された広く真っすぐな道に、中高層のビルやマンション等が建ち並ぶ新市街が含まれる [13]。先述のヒジャーズ駅や現在のダマスクスの鉄道ターミナル Al Kadam Railway Station の他、The Central Bank of Syria や Syrian Presidential Palace などもエリア B に立地し、経済・政治的機能が集積している。特に、図 4 に示すヒジャーズ駅と The Central Bank of Syria の間一帯はダマスクス中心部とされている [3]。なお、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県・茨城県南部を調査範囲とする東京都市圏 PT については、東京 23 区・東京 23 区外の 2 区分としている。

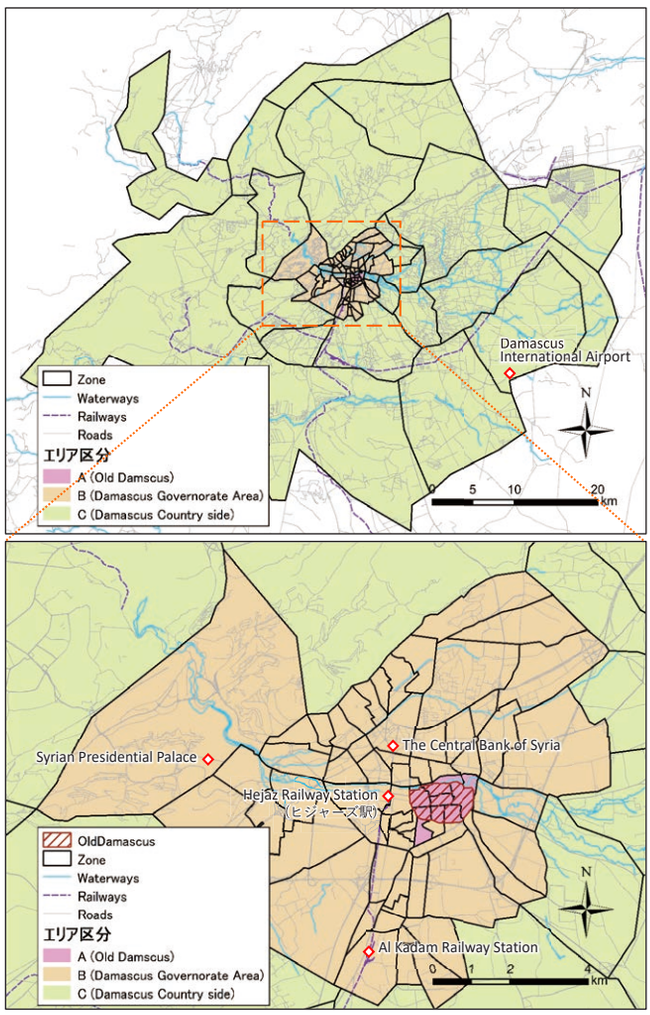


図 4　ダマスクス PT のエリア区分
地図：OpenStreetMap[14]

表 1　エリア間トリップ数（拡大後）

		到着エリア		
		A	B	C
出発エリア	A	12,608	54,552	26,433
	B	59,596	914,621	239,786
	C	26,309	239,431	610,143

ダマスクス PT におけるエリア間のトリップ数を表 1 に示す。エリア B・C での内々トリップが特に多く、エリア A での内々トリップや、距離のあ

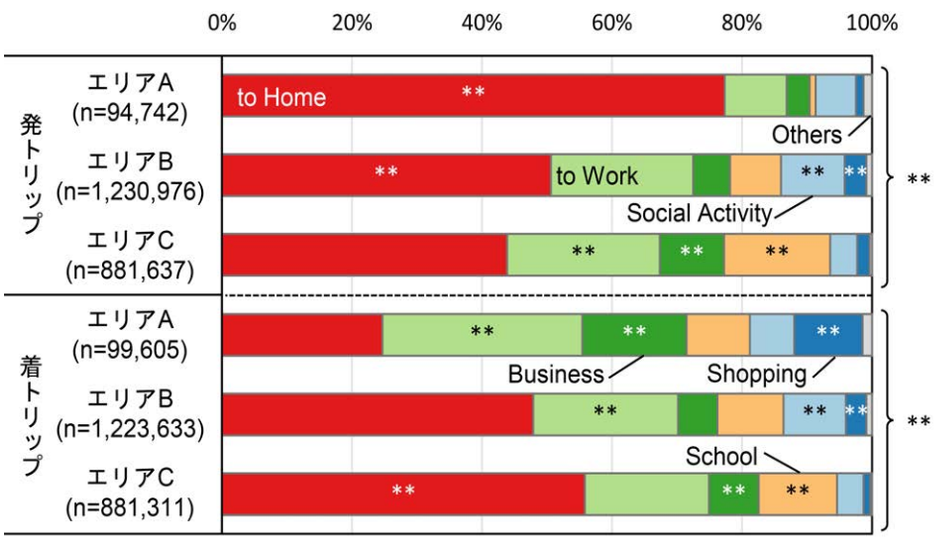
るエリア A・C 間のトリップは少ない。なお、本稿ではリンクトトリップを対象としており、1 つの目的での移動を 1 トリップとして分析を行う。

3. 発着エリアによるトリップ目的構成

3-1 各エリアの発トリップ・着トリップに占める目的構成

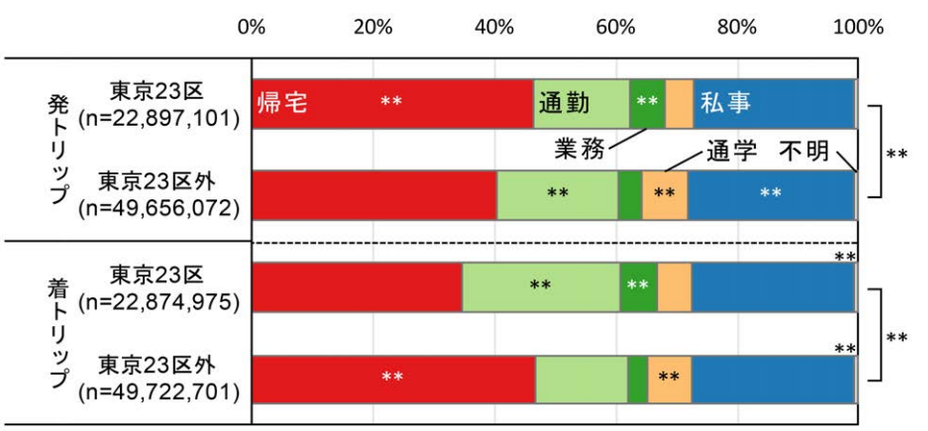
本節では、発トリップと着トリップそれぞれについて、エリアごとの目的構成を明らかにする。ダマスクス PT の発着エリアごとのトリップ目的構成を図 5 に、東京都市圏 PT の発着エリアごとのトリップ目的構成を図 6 に示す。なお、発トリップと着トリップそれぞれにおいて独立性の検定および残差分析を行い、その結果を併せて示している。

まず、トリップに占める帰宅目的の割合につい



［独立性の検定　**：1%有意　*：5%有意］［残差分析　**：1%有意で高い　*：5%有意で高い］

図 5　発着エリアごとのトリップ目的（ダマスクス）



［独立性の検定　**：1%有意　*：5%有意］［残差分析　**：1%有意で高い　*：5%有意で高い］

図 6　発着エリアごとのトリップ目的（東京都市圏）

て、東京都市圏では発・着トリップ、エリア問わず約 40% となっている。ダマスクスにおける帰宅トリップ（to Home）の割合については、エリア B で発トリップ、着トリップともに約 50% となっている。また、エリア C では発トリップの 40 ～ 50%、着トリップの 50 ～ 60% と、エリア B・C では発トリップ・着トリップともに約半数が帰宅目的であることが分かる。一方、エリア A で帰宅トリップの割合は発トリップの約 80% を占めるが、着トリップでは約 20% にとどまり、訪問先となっていることが示された。旧市街にはイスラム教第 4 の聖地であるウマイヤ・モスクや、アラブ世界でも有数の大きさであるスークが存在している [3] ためと考えられる。

図 5 および図 6 に示した残差分析の結果から、帰宅トリップ（to Home）はダマスクス、東京都市圏ともに都心（エリア A・B、東京 23 区）で発生し、郊外（エリア C、東京 23 区外）に集中するという傾向がみられた。他にも通勤トリップ（to Work）や通学トリップ（School）も、ダマスクスと東京都市圏で共通する特徴がみられた。通学トリップは発生・集中ともに郊外のほうが多く、ダマスクスではエリア C で、東京都市圏では 23 区外で有意に多い。また、ダマスクスでの通勤トリップは郊外で発生し市内に集中しており、エリア A および B が通勤先となっていることが分かる。

3-2　内々・エリア間トリップに占める目的構成

前節では、発トリップ・着トリップそれぞれについて目的構成を明らかにした。その結果、通学トリップ（School）では発生・集中とも郊外で多く、通勤トリップ（to Work）の発生は郊外、集中は都心で多いといった特徴がみられた。つまり、エリア内移動・エリアをまたぐ移動、また移動の方向（都心から郊外・郊外から都心など）により目的構成は異なると考えられる。そこで、本節ではトリップ OD ごとの目的構成を扱う。ダマスクスにおけるトリップ OD ごとの目的構成を図 7 に示す。

内々トリップでは帰宅トリップ（to Home）が各エリア共通して約 50% となっている。また、全体の傾向として都心に向かうトリップでは帰宅以外の割合が大きく、郊外に向かうトリップでは帰宅の割合が大きいことが分かる。特に、エリア A→C では約 90%、エリア A→B でも約 80% が帰宅トリップとなっている。

次に図 5 で発トリップ、着トリップともにエリア C で多かった通学トリップについて、エリア C を発するトリップでは目的地のエリアを問わず有意に多い。一方、エリア C に到着するトリップでは、内々トリップのみ有意に多く、エリア A→C および B→C では多くない。また、通勤トリップは、エリア問わず郊外から都心に向かうトリップで有意に多いことが示された。そして各エリアから旧市街（エリア A）に向かうトリップと、新市街（エリア B）での内々トリップにおいて、Shopping の割合が多い。

以上のようにトリップの OD ごとに目的構成が異なるが、内々トリップ、都心から郊外へ向かうトリップ、郊外から都心に向かうトリップの 3 つに集約すると、エリア問わず概ね同様の傾向であることが明らかとなった。

4. 発着エリアによる交通手段構成

4-1　各エリアの発トリップ・着トリップに占める交通手段構成

本節では、発トリップと着トリップそれぞれに

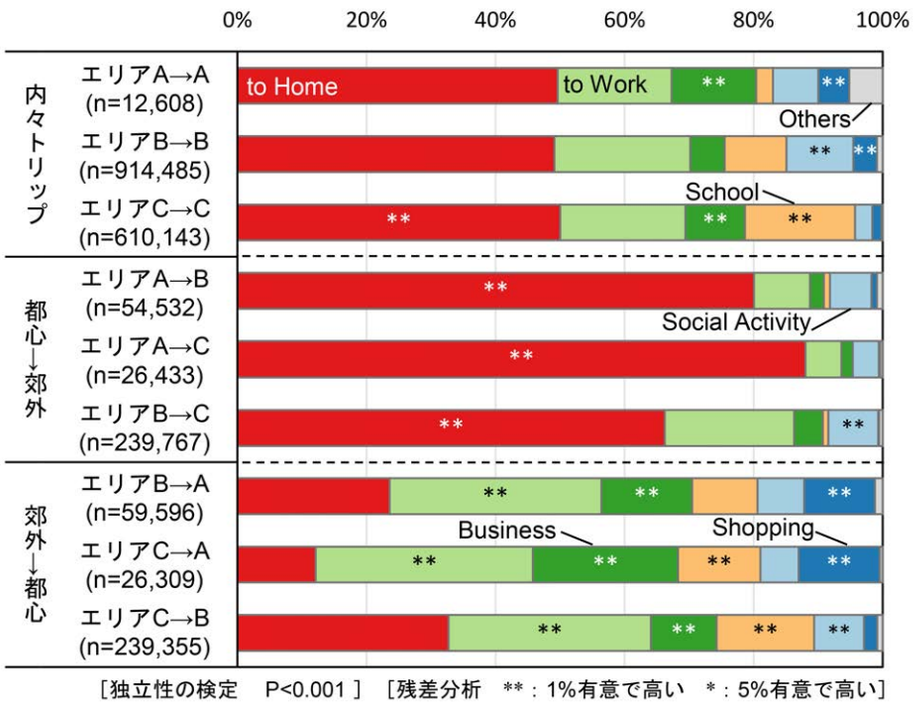


図 7　トリップ OD ごとのトリップ目的（ダマスクス）

表 2　代表交通手段の決定順位

優先順位	東京都市圏PT	ダマスカスPT
1	鉄道	Bus
2	バス	Microbus
3	自動車	Taxi
4	二輪車	Passenger Car
5	自転車	Bicycle and Motorcycle
6	徒歩	Walking
7	その他・不明	Others

ついて、エリアごとの交通手段構成を明らかにする。本稿ではリンクトトリップを扱っているため、各トリップにおいて代表交通手段を設定し分析を行った。「東京都市圏パーソントリップ調査 データ利用の手引き」[15] を参考に、東京都市圏 PT とダマスクス PT それぞれについて表 2 に示す順で代表交通手段を設定した。

ダマスクスにおける公共交通について、文献等[3) 5) 7) 16)] を参考に表 3 に整理する。中長距離の移動には鉄道もしくは大型バスが用いられているが、

表 3　ダマスクスの公共交通

種別	PT区分	運行経路	乗降車地	車両・定員	運賃	主な用途
鉄道	Others	固定	固定	—	—	中長距離
都市間バス	Bus	固定	固定	大型バス 55人程度	—	中長距離
市内線バス	Bus	固定	固定	一般バス	一律	市内
セルビス	Microbus	固定	自由	ワゴン車 14人程度	路線内一律	市内
タクシー	Taxi	自由	自由	4人	メーター制	市内

鉄道は運行頻度が少なく、都市間輸送の多くはバスが担っている。また市内移動では、ワゴン車により決められた路線を多頻度運行するセルビス（ミニバス、ミクロバス）が多く用いられている。バスやセルビスが共用しているバスターミナル「ガラージュ」が、市街地外縁部に方面別に分かれて設置されており、郊外へ向かうバスはガラージュに発着し、市街地へはセルビスや市内線バス等へ乗り換えることとなる。

ダマスクス PT の発着エリアごとの交通手段構成を図 8 に、東京都市圏 PT の発着エリアごとの交通手段構成を図 9 に示す。なお、発トリップと着トリップそれぞれにおいて独立性の検定および残差分析を行い、その結果を併せて示している。

トリップ目的ではダマスクスと東京で概ね似た傾向がみられたが、交通手段構成は大きく異なっている。東京都市圏では鉄道網が充実しているため鉄道の分担率が高く、特に東京 23 区では約 50% が鉄道となっている。23 区外では、鉄道に代わり自動車の分担率が高く、自動車の分担率が 30 ～ 40% 程度に上る。一方のダマスクスでは、市内（エリア A･B）では Microbus が約 40% を占め、郊外（エリア C）では Walking が約 40% を占めている。

ダマスクスのエリア A と B はほぼ同様の傾向であり、市内と郊外とで差がみられる。旧市街には自動車が入りにくく、徒歩や二輪車の割合が高いことが想定されたが、表 1 に示した通りエリア A での内々トリップは少ないため、エリア B と似た傾向になったと考えられる。市内と郊外で有意な差がみられたこととして、Passenger Car、Taxi、Microbus の分担率が市内で高い一方、Walking の分担率が郊外で高いことが挙げられる。

また、公共交通の分担率に着目すると、表 3 に示した通り主に市内交通を担う Microbus の分担率が市内を発着するトリップで高く、都市間輸送を担う Bus の分担率は郊外を発着するトリップで高いことがわかる。

4-2　内々・エリア間トリップに占める交通手段構成

前節では、発トリップ・着トリップそれぞれについてエリアごとの交通手段構成を明らかにした。その結果、市内と郊外で各交通手段の分担率に違いがみられた。しかし、利用する交通手段は移動する距離などにも依存すると考えられ、例えばエリア A での内々トリップとエリア A から C に向かうトリップでは交通手段構成が異なること

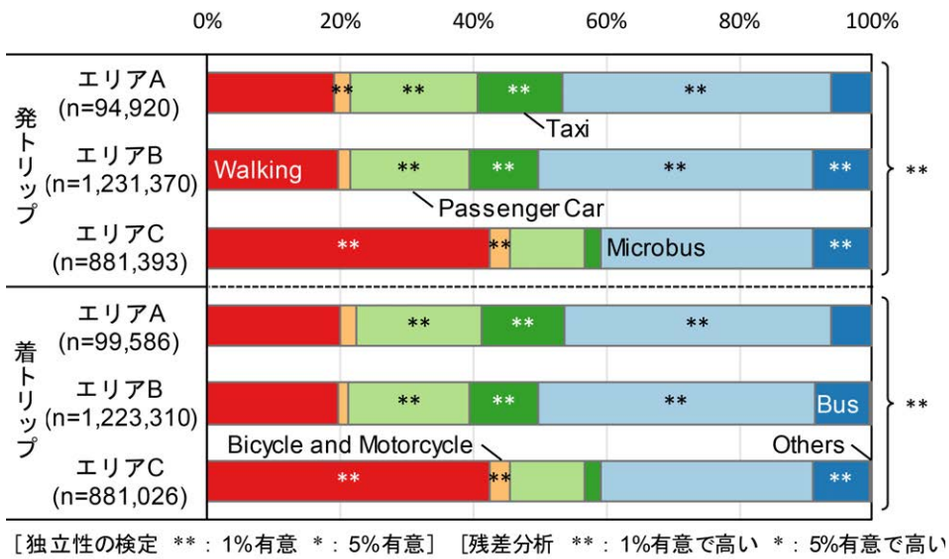


図 8　発着エリアごとの交通手段構成（ダマスクス）

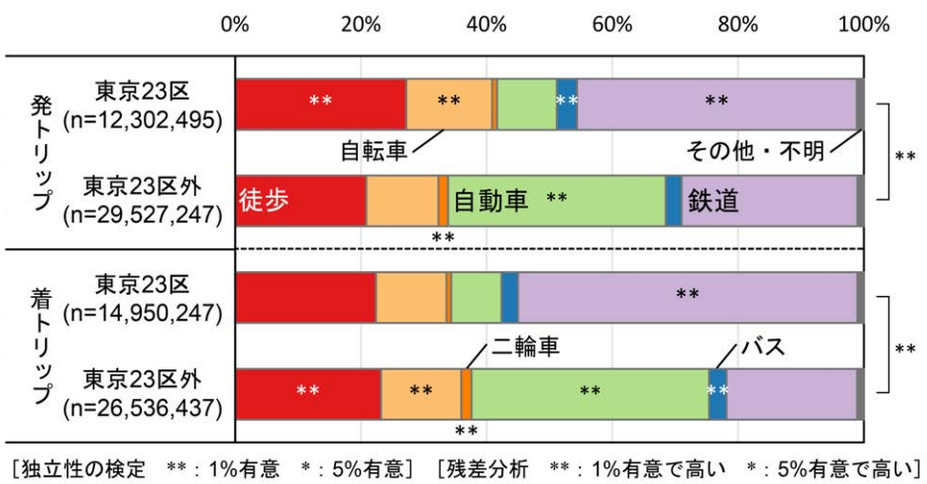


図 9　発着エリアごとの交通手段構成（東京都市圏）

が想定される。そこで、3-2 同様トリップ OD ごとの交通手段構成を明らかにする。ただし、図 8 において発トリップ・着トリップによる違いはあまり見られなかったため、トリップの向きは考慮せず移動区間に着目して分析を行う。トリップ区間ごとの交通手段構成を図 10 に示す。

まず、内々トリップに着目すると、エリア A において Walking が 80% を超えている。ダマスクスの旧市街は細く狭い街路が入り組んでいるため、自動車の侵入が難しいことを反映したものと思われる。また、内々トリップのうちエリア B では Walking の分担率が低く、自動車（Passenger

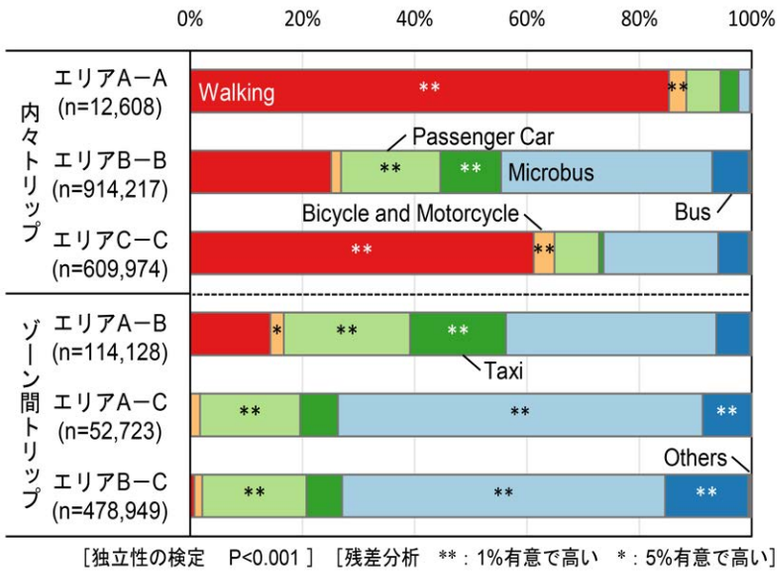


図 10　トリップ区間ごとの交通手段構成（ダマスクス）

Car、Taxi、Microbus、Bus）の分担率が高い。2-3 で述べた通り、新市街は 19 世紀以降に計画された自動車の普及に対応した道路形態となっているため、このような結果となったと考えられる。エリア B の内々トリップは、エリア A と B をまたぐトリップの交通手段構成と似た傾向を示しているが、これはエリア A がエリア B に内包される形で市街地が連続しているためと考えられる。

ゾーン間トリップでは、エリア C を発着するトリップ（A-C、B-C）が似た傾向を示しており、Walking や Bicycle and Motorcycle などの利用が極めて少ない。エリア C は郊外であり、移動距離も長くなるためこのような結果となったと想定される。一方で、Bus や Microbus の分担率が 70% 以上を占め、Passenger Car の分担率は約 20% であり、公共交通が多く用いられていることが分かる。

5. おわりに

シリアの首都ダマスクスは、数千年に及ぶ歴史の中で様々な文化が多層に重なりながら形成されてきた都市であり、近年は番匠谷らの 68 年計画をきっかけに日本の技術協力のもと、歴史の保全と近代化という狭間で都市計画が行われてきた。城壁に囲まれた旧市街では狭い街路が入り組む一方、新市街ではモータリゼーションに対応した道路ネットワークが形成されている。

このような都市特性を踏まえ、本報告ではダマスクスの交通行動について目的、交通手段の地域による違いを分析した。その結果トリップ目的については、郊外で通学トリップが多いこと、郊外から都心へ通勤するトリップが多いことなど、東京都市圏と似た傾向がみられた。また、交通手段については、鉄道網が未整備であることもあり、Microbus（ワゴン車により決められた路線を多頻度運行するセルビス）の分担率が高いほか、旧市街と郊外での内々トリップでは徒歩の分担率が高いなどの傾向がみられた。

ダマスクスではこれまで、人口流入や山麓での

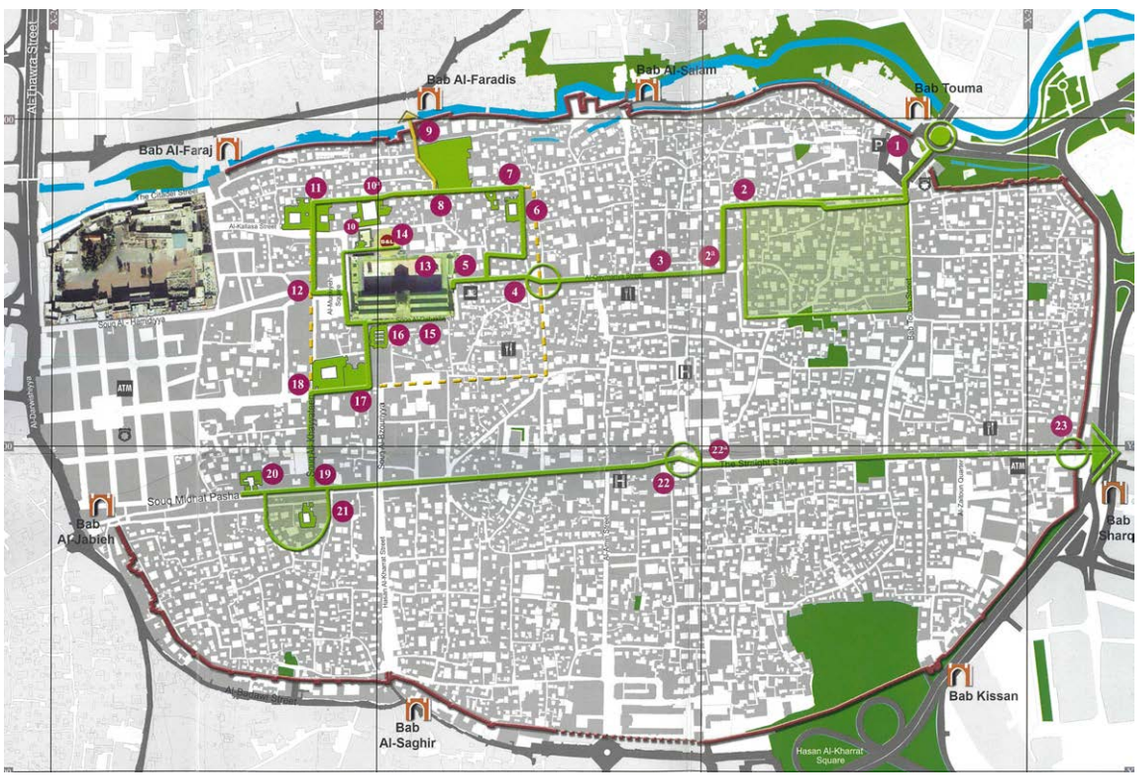


図 11　旧市街の観光ルートマップ「古典古代の道」

不法住宅群の形成等の課題を生じてきた。また、本稿で利用した PT 調査の実施時点では若年層が非常に多い人口構成であったが、数十年後には高齢化することが想定されている。現在ダマスクスではセルビスの利用が多いが、少人数乗り・多頻度運行であるが故、セルビスによる道路混雑が課題となっている。シリアは 2011 年から始まった内戦下にあるが、今後復興とあわせ、将来を見据えた公共交通体系の構築が望まれよう。

本報告ではあくまで交通行動の分析にとどまっており、文化や生活習慣などまでは踏み込んでない。しかし、近年は旧市街の重層的な空間をより意識的に学びながら観光できるよう、ルートマップが作成されたりもしている（図 11）。これらやバスの路線網、施設・人口の分布など、交通行動の背景を踏まえた分析・考察を通して、より地域の特徴を踏まえ実態を明らかにすることが必要だろう。また、本稿で利用した JICA による海外の PT データを利用した研究はまだ少なく、更なる活用が期待される。

謝辞

本報告は、2020 年度日本都市計画学会報告集（査読無し）に掲載されたものをベースに若干の加筆を行ったものである。研究にあたり、独立行政法人国際協力機構作成「都市交通分野の開発調査における交通調査統合データ」を借用した。記して謝意を表する。

参考文献

[1] 松原康介：ダマスクス 1968 年計画におけるヘレニズム基盤の再構築事業、都市計画論文集、Vol.54、No.3、2019.

[2] 山田耕治：住み続けられた最古の都市「ダマスカス」、Consultant（建設コンサルタンツ協会 ）、Vol.252、pp.52-54、https://www.jcca.or.jp/kaishi/252/252_doboku.pdf（2020 年 6 月最終閲覧）

[3] 地球の歩き方編集室：地球の歩き方 ヨルダン / シリア / レバノン編 2012-2013 版、ダイヤモンド・ビッグ社、2011.

[4] 松原康介：継続的な国際協力に基づく途上国の都市計画技術協力史－シリア国ダマスクスの事例から－、都市計画論文集、Vol.47、No.3、2012.

[5] 国際協力事業団・シリアアラブ共和国内務省・ダマスカス市：ダマスカス市都市交通計画調査ファイナルレポート、八千代エンジニヤリング株式会社・株式会社片平エンジニアリングインターナショナル、1999、https://openjicareport.jica.go.jp/710/710/710_313_11511870.html（2020 年 6 月最終閲覧）

[6] 国際協力機構・シリアアラブ共和国地方自治環境省・ダマスカス市・ダマスカス郊外県：シリア国ダマスカス首都圏総合都市計画策定調査最終報告書 要約、株式会社レックス・インターナショナル・八千代エンジニヤリング株式会社、2008、https://openjicareport.jica.go.jp/618/618/618_313_11880614.html（2020 年 6 月最終閲覧）

[7] 国際協力機構：シリアアラブ共和国 ダマスカス首都圏総合都市計画策定調査 事前調査 報 告 書、2006、https://openjicareport.jica.go.jp/618/618/618_313_11856333.html（2020 年 6 月最終閲覧）

[8] 中村昭・兵藤哲朗・山村直史・紺屋健一：JICA 都市交通開発調査データベースの紹介、交通工学、Vol.37、pp.39-43、2004.

[9] 兵藤哲朗：アジアを中心とする都市交通特性と交通問題の諸相、運輸と経済、2008 年 11 月号、2008.

[10] 佐々木葵・兵藤哲朗：JICA パーソントリップデータを用いた 25 都市の交通利用実態比較分析、土木計画学研究・講演集、Vol.61、2020.

[11] United Nations, Department of Economic and Social Affairs：Population Division. World Population Prospects 2019、https://population.un.org/wpp/Download/Standard/Population/（2020 年 6 月最終閲覧）

[12] 東京都市圏交通計画協議会：第 6 回東京都市圏パーソントリップ調査、https://www.tokyo-pt.jp/data/01_02（2020 年 6 月最終閲覧）

[13] 新井勇治：50 ダマスクス < シリア >、松原康介 (編) 地中海を旅する 62 章、明石書店、pp.300-304、2019.

[14] OpenStreetMap、http://www.openstreetmap.org

[15] 東京都市圏交通計画協議会：東京都市圏パーソントリップ調査 データ利用の手引き、https://www.tokyo-pt.jp/static/hp/file/data/tebiki.pdf（2020 年 6 月最終閲覧）

[16] 国際協力事業団：シリア国ダマスクス市都市交通計画調査 事前調査報告書、1997、https://openjicareport.jica.go.jp/710/710/710_313_11407855.html（2020 年 6 月最終閲覧）

[17] 広田憧子「オールド・ダマスクスの観光ルート ― テーマ別ルートが示す歴史都市の重層性 ―」筑波大学システム情報工学研究科修士論文、2021 年 .

西アジア及び周辺都市に尽力したフランスの都市計画家ユルバニストに関する研究の成果報告

－アンカラとイスタンブールにおける 3 つの都市計画案に関する考察－

三田村哲哉
兵庫県立大学環境人間学部

はじめに

20 世紀前半のフランスでは前世紀の都市改良とは異なる新たな都市計画ユルバニスムが国内外で提案・実施されるようになり、数多くの建築家や造園家、測量士らがヨーロッパを中心にアメリカ大陸から東アジアに至るまでの世界各国の主要都市で建築と都市の提案や建設に参画するようになる。こうした新たな都市計画のうち、国外におけるその原点の 1 つと見なすことのできるものが、マダガスカルの首都アンタナナリボ近傍の集落アンカソベとアビ＝ピハオナナに、後に元帥となるモロッコ初代総督ユベール・リヨテ（1854-1934）が提案・建設した都市であること、そのリヨテに委ねられたフランスの建築家・都市計画家アンリ・プロスト（1874-1959）がモロッコ（1913-23）を皮切りに晩年最後のイスタンブール（1933-58）に至るまでの国内外の各都市で実施したことはすでに指摘した通りである[1]。こうした当時のフランスによる建築・都市の提案及び建設活動の範囲は広く、西アジアの建築と都市に関心を示すとともに、それぞれトルコやエジプトなどですでに報告や実作を残していたプロストとフランスの建築家アレクサンドル・マルセル（1860-1928）によって提案そのものは我が国にも至ったことを明らかにした[2]。

また 1911 年のフランス都市計画家協会創設者 10 名の中でも国内外で活躍した 3 名の建築家およびプロストの推薦に基づき参画した建築家が、1923 年に初代大統領ムスタファ・ケマル・アタトゥルク（在位 1923-38）が共和国を樹立した後、ドイツの建築家や都市計画家とともに招聘され、新首都アンカラ[3]（1927）の建設計画や古都コンスタンティノープル[4]（1932）の都市改良ばかりでなく、1922 年のイズミル大火後の復興計画（1926）、

1　前者は次稿を参照。拙論「仏領におけるユルバニスムの萌芽と興隆－西アジア都市の位置付け－」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』兵庫県立大学、第 22 号、2019 年、67-79 頁。

2　本案は実現に至ることはなかった。拙論「最初に描かれた在日本国フランス大使館の計画案」『建築史学』建築史学会、第 75 号、2020 年、18-47 頁。

3　アンカラの設計競技に参加したドイツの建築家・都市計画家はヘルマン・ヤンセン（1869-1945）とジョゼフ・ブリックス（1859-1943）で、当初の都市計画は当選者のヤンセンが担当した。尚、フランスの建築家テオドール・ルヴォ（1896-1971）は 1935 年から 42 年まで土木省建築専門官としてアンカラに従事した。

4　イスタンブールの設計競技に参加したドイツの建築家・都市計画家はヘルマン・エルグーツ（1880-1943）で、その後、設計者はプロストに決定した。

ブルサの都市開発（1944）などに参画しており、トルコにおけるこうした新たな都市計画、つまりフランスによる建築と都市の近代化の影響は少なくない[5]。

このように当時のフランスは大陸を超えた広範な地域に視野を広げて建築と都市の提案と建設を試みたが、その中でも西アジア、とりわけトルコは地理と質・量の両面でその中心に位置づけられる。本稿は、こうしたユルバニスムという新たな都市計画の波及の範囲と、その 1 つの要点であるトルコの主要事業アンカラとイスタンブールに視点を当て、それぞれの計画案の図面や報告書に基づき、フランスの建築家・都市計画家レオン・ジョスリー（1875-1932）、アルフレッド・アガシュ（1875-1959）、ジャック＝アンリ・ランベール（1884-1961）による基本計画の概要を報告するとともに、両都市における提案の特徴を明らかにしたものである。

1. アンカラにおけるレオン・ジョスリーの提案（1927）

海抜がおよそ 900m にある、当時の人口が 20,000 人の小都市アンカラは、オスマン帝国の首都コンスタンティノープルに代わる新首都に定められ、その都市開発はドイツの建築家・都市計画家カール・クリストフ・ロルヒャー（1884-1966）に委ねられた。この都市の計画は、1924 年にビザンティン様式の城壁で囲まれた旧市街を破壊し、格子状及び放射状の道路を巡らして、居住地域のほか官庁街、教育研究施設、病院などの公共施設や公園や広場を整備することを描いたロルヒャーの案に始まる[6]。この中でロバの通る小道の入り組んだ旧市街がほぼすべて破壊され、官庁街となる周辺部を含む地域全体が近代都市に生まれ変わることが示された。ロルヒャーは翌年にさらに開発の対象地域を南側に拡張し、用途地域が全 16 点の土地利用計画と住宅地計画を兼ね備えた案を策定した。しかし出資者がこのロルヒャーの案を拒否するとともに、より広範な地域を対象とした案が要求されたため、1927 年に都市拡張を主題とした設計競技が開催された。

この設計競技の参加者は、ベルリンの設計競技（1910）で 1 等に選出されたヤンセンとブリックス、在トルコ･フランス大使アルベール･サロー（1872-1962）が両ドイツ人と再会させるために推したジョスリーの 3 名で、このうち最も広範な範囲を対象に案を描いたヤンセンが 1 等に選出された[7]。ジョスリーの敗因は、両案の相違に基づき考察を重ねると、おそらく旧市街の破壊、首都における工業地域の規模、計画案の密度であったと考えられる[8]。

ジョスリーの案は、旧市街及び南側の開発地に

5　イズミルの復興計画はプロストの後、測量士ルネ・ダンジェ（1872-1954）が継ぎ、1948 年にル・コルビュジエ（1887-1965）も提案した。

6　IŞIN (Ekram) édit., *Ankara: City of the Black Calpac, 1923-1938*, İstanbul: İstanbul araştırmaları enstitüsü, 2009, pp.34-40.

7　ジョスリーはフランスの建築家シャルル＝アンリ・ニコ（1878-1967）とベルリンの設計競技（1910）に参加したが、入選には至っていない。

8　PÉROUSE (Jean-François), “La Concurrence entre experts urbanistes français et allemands en Turquie dans l›entre-deux-guerres: l›exemple de la planification d›Ankara”, *Istanbuler Texte und Studien*, Würzburg : Verlag, no.12, 2008, pp.117-134.

対する 1925 年のロルヒャーの案を踏襲したものであったが、その骨格は都市の交通、用途地域、構成という点で全く異なるものであった（図 1）。ベルリンの設計競技で提案した鉄道網の計画と同様に、旧市街から南側の広大な開発地を連結させるために、南北になだらかに広がる傾斜地を考慮しつつ、全 20 点に及ぶ各省庁の庁舎で形成された新たな共和国広場を中心に[9]、大小 2 つの環状道路が整備され、その内側ばかりでなく郊外地の外側に向かい放射状の街区を形成することが示されたからである[10]。さらにその土地利用計画は、旧市街の北東が工業地域、北西が議員用住宅地、共和国広場を中心に新市街の西側と南側に学校と運動場、商業施設を中心に外側の集合住宅と内側の戸建住宅で構成された郊外住宅地[11]、西端部に競技場、東端部に墓地、点在する公園と帯状の散歩道という形で、詳細な用途地域を定めて示されている（図 2）[12]。一方、都市の構成という観点から見て顕著な点は、共和国広場の上段、すなわち南北を結ぶ対称軸

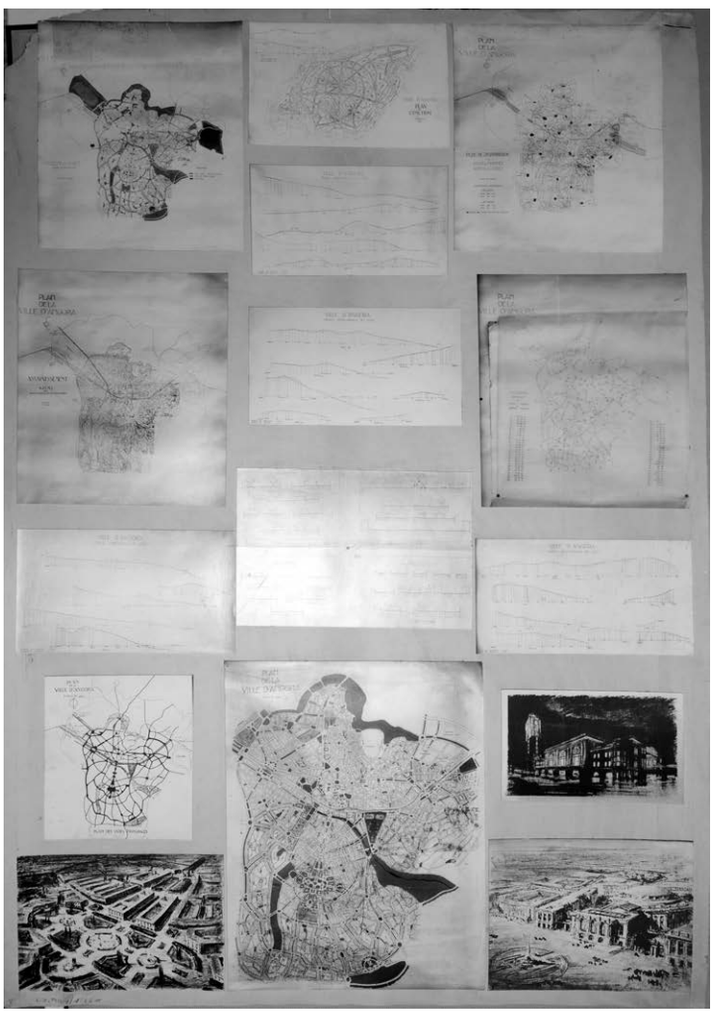


図 1　アンカラ都市計画案の図面パネル：レオン・ジョスリー 1927 年 Fonds Léon Jaussely 312AA32/1.（最上段の左から公園計画、墓地計画、公共施設の配置計画、左列上から 2 段目：下水道計画、中列上から 4 段目：道路断面計画、右列上から 2 段目：道路・空地計画、左列：下から 2 段目：道路計画、左列最下段・右列最下段及び 2 段目：建築計画の鳥観図、中列最下段：全体計画、その他：主要道路の勾配を示した断面図）

9　JAUSSELY (Léon), Place de la République et édifices publics de cette place, 1927, Planche extraite du rapport sur le projet, Fonds Léon Jaussely 312AA32/1.

10　JAUSSELY (Léon), Diagramme du plan général, Projet du concours pour l’aménagement de la ville d’Angora, 1927, Fonds Léon Jaussely 312AA10/13.

11　JAUSSELY (Léon), Projet du concours pour l’aménagement de la ville d’Angora, 1927, îlots, zone mixte, Fonds Léon Jaussely 312AA32/1.

12　JAUSSELY (Léon), Projet du concours pour l’aménagement de la ville d’Angora, 1927, Fonds Léon Jaussely 312AA32/1.

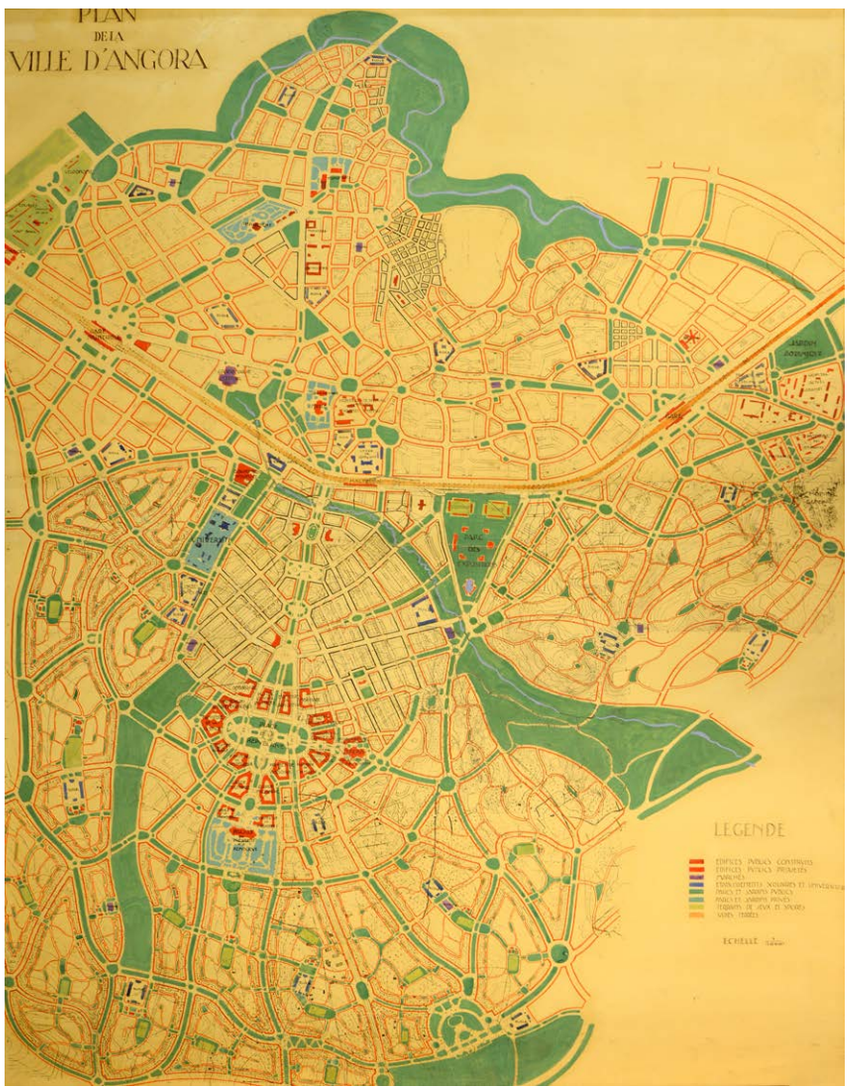


図 2 アンカラ都市計画案：レオン・ジョスリー 1927 年（図 1 の中列最下段の拡大図）Fonds Léon Jaussely 312AA40/4.（真紅：既存の公共施設、赤：計画された公共施設、紫：市場、青：教育施設と大学施設、緑：公共の庭園、水色：私有の庭園、黄緑：遊び場・スポーツ、橙：鉄道）

の焦点に当たる位置に大統領府を配置することによって与えられた求心性で、それは建築計画の中にも示された。

当時のフランスは政治家や軍人、大使らを通して国外に派遣する建築家を決定していた。リヨテによる北アフリカのプロスト、それに倣ったインドシナ総督モーリス・ロン（1866-1923）による東南アジアのエルネスト・エブラール（1875-1933）のように、サローが中東に位置付けることを試みたジョスリーは敗退し、その後フランス国内の地方都市で着実に功績を残すこととなるが、詳細な用途地域を定めて都市計画を描き出す手法をこのアンカラで着実に発展させており、ユルバニスムの輸出入という視点から振り返ると、このアンカ

ラにおける提案は大きな契機になったに違いない。

2. イスタンブールにおけるアルフレッド・アガシュの提案（1934）

イスタンブールの世界遺産はスレイマニエ・モスクとその保全地区、ゼイレク・モスクとその保護地区、イスタンブールの城壁を含む 4 点である。これらの登録事業は、プロストによる 1947 年 9 月 17 日の報告書「イスタンブールの考古学公園の開発 [13]」に記された通り、トプカプ宮殿からスルタンアフメト・モスクに至る歴史遺産の集まった半島の先端部「考古学公園」の保全活動に始まった。この活動の発端の 1 つが、アガシュが報告書の中に記した「考古学遊歩道」あるいは「考古学センター」の提案に始まることはすでに指摘されている [14]。しかしアガシュの主張は、必ずしも提案の主題の 3 番目に記された要語「美化 [15]」に基づくこうした保全事業に傾倒したものではなく、むしろフランス国内の都市計画における要語にない 1 番目の「Remodelation 再編」ばかりでなく、提案書の冒頭に記された通り、包括的な都市開発に基づいた古代都市、近代都市、未来都市の調和にあり、過去のトルコ繁栄の栄光に並び、革命の象徴としてアタトゥルクの功績が刻まれることを目指すものであった。

こうしたアガシュの主張は、都市生活がより一層優位であるために、その新たな都市全域において利便、衛生、魅力が適切にいずれも享受できることであるとしている。これらの要語に基づく具体的な提案は、主題に明確に記された通り、すでに広く発達した都市においてさらなる均一なイスタンブール及びその周辺地域を形成することであった。つまり再編は、郊外地ばかりでなく衛星都市に及ぶ言及が示す通り、既存の都市域にとどまらず都市そのものを拡張するとともに、こうしたそれぞれ異なる地域や街区を 1 つの統一した案に基づいて形成することであった。

またこのような都市拡張の基盤である交通網の全体計画が、合理的な道路網の整備ばかりでなく駅舎、港湾、飛行場などの都市施設を、地区や手段毎に明確に提示したに止まらず、その対象は下水道などの浄化設備、遊び場や公園などの空地を例に都市の衛生にも及んでおり、アガシュが近代都市から未来都市を、つまり将来の新たな都市像を提案しようとしたことは明らかである。こうした提案の大半は近代主義に基づくもので占められており、「考古学公園」に代表される歴史主義に基づく遺産の保全活動に関するものはこれらの提案のうちのごく一部に過ぎない。

プロストがアガシュの提案を下敷きにしたとされるが、それは単なる考古学公園の保全活動ばかりでなく、こうした交通や衛生に対する提案も同様で、一方、プロストが実際に直面し、直ちに対応の求められた土地を巡る法律の整備と不良地

13 PROST (Henri), “Communication de Henri Prost 17 septembre 1947 à l’Institut de France”, in *Les Transformations d’Istanbul*, no. VII, pp. XVIII.

14 AGACHE (Alfred), *Grand-Istanbul: Un Programme d’urbanisation: Remodelation, Aménagement et embellissement de Grand-Istanbul et de sa region*, Istanbul: Selâmet, 1934. Bibliothèque, Institut Français d’Études Anatoliennes, Obs/Urb/29.

15 フランスで最初の都市計画法に基づく国内における要語は「開発 Aménagement」「拡張 Extenstion」「美化 Embellissement」。Loi du 14 mars 1919 concernant les plans d’extension et d’aménagement des villes. Loi du 19 Juillet 1924 modifiant et complétant la loi du 14 Mars 1919 sur les plans d’aménagement, d’embellissement et d’extension des villes.

区の収用は、アガシュによるこれらの全 12 点に及ぶ主張に含まれていない課題であった。このようにアガシュの案は「大イスタンブール」という表題の通り、未来の都市あるいは都市の拡張、施設の整備という観点に傾倒しており、こうした近代主義の側面が強調された案であることは、次のランベールによる提案と比較することによっても顕在化するに違いない。

3. イスタンブールにおけるジャック＝アンリ・ランベールの提案（1934）

プロストはモロッコの後、リヨテの後押しで手掛けたイズミル大火後の復興計画（1926）でトルコの信頼を得て、イスタンブールの設計競技に招聘されたが、パリ地域圏計画（1928-1934）を手がける最中であったため、プロストが推奨したランベール[16]がアガシュとともに案を残した。その内容は非常に明確で、「産業」「文化」「スポーツ・観光」という 3 つの新たな要となる提案は、火災という当時の都市問題への対応、交通の規則と都市の治安からなる統制、都市の形態とその構成要素、居住環境の改善と建設市場の活性化という 4 つの課題に寄与するという考え方に基づいていた[17]。

これら 3 つの案はイスタンブールにおける地中海・オリエント経済の中心地、世界的に進む文明化の拠点、スポーツ文化と国際観光の発信地の形成というそれぞれの具体案に基づいており、経済の中心地の形成には海路、鉄道と道路からなる陸路、空路、さらにこれらの交通網にそれぞれ対応した港湾、駅舎、空港という具体的な施設が、文明化の拠点には学術と技芸を担う機関として、国際的な大学と地域の文化施設、工芸施設、美術施設、国立図書館、国立劇場、都市遺産博物館、公共庭園ばかりでなく、この都市計画の対象地内に点在する記念建造物全体の価値を高める芸術施設、大学機関、城壁地帯、噴水、廟、霊廟が、スポーツや観光のためには競馬場、競技場、競技施設、トルコ浴場、展望施設に加えて考古学地区、都市の夜景、街路の照明設備などが必要であるという、ランベールが目指す都市像と新たな都市施設がそれぞれ対応する形で具体的に示された。

アガシュとランベールが提示した施設は、道路や鉄道ばかりでなく港湾施設や鉄道駅舎などの共通点が多々あるが、これらのうち海路への着眼ばかりでなく都市の現状把握や都市遺産の尊重、スポーツや観光という視点はアガシュにない、もしくは勝るランベール案の特徴である。特に火災による被災地区は、プロストが最初に対処を求められた当時のイスタンブールにおける都市の重要課題であったが、この課題はプロストが手掛ける以前から、ランベールがすでに指摘・検討済みであったということになる。その一方、プロストが最初に手掛けた課題である土地を巡る法律の整備と不良地区の収用は、交通の規則や都市の治安を検討していたランベールでさえもアガシュとともに把握しきれていなかった課題であった。このようにアガシュの案は都市の未来と規模の面でランベー

16 ランベールはパリ、ニューヨーク、シカゴ、ワシントンで研鑽を積み、フランス国内のみならず南米諸国、中東、西欧、北欧、東欧で、トルコではイスタンブールの後、内陸都市エルズルムや沿岸都市トラブゾンなどの複数の都市で都市計画を手がけた。

17 LAMBERT (Jacques-Henri), *Correspondance de l’architecte Lambert*, [s.l.][s.d.], Bibliothèque, Institut Français d’Études Anatoliennes, Obs/Urb/407.

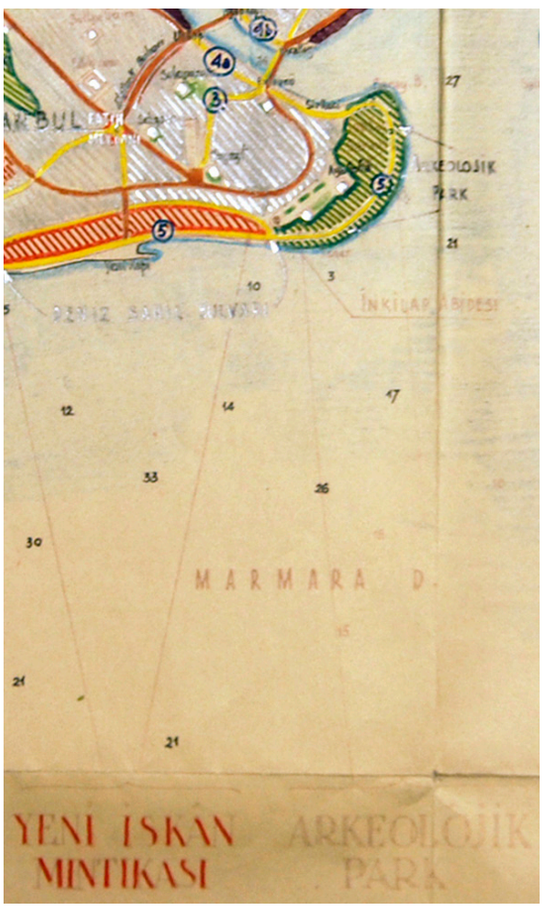


図 3 イスタンブール及び周辺部の計画案：1943-53
Fonds Henri Prost 343AA7/2.（筆者が図面の一部を切り取ったもの。）

ルの案に勝っていたが、将来像の具体性と都市の現状把握の面ではランベールの案の方がより明確で、アガシュの案にない提案がプロストの計画案に継承されたことが見えてくる。

その中で最も注目すべきはランベールが注視した海路である。アガシュの案が「考古学公園」の世界遺産登録につながる 1 つの起点とされるが、ランベールも決してこうした都市遺産に触れていないわけではない。むしろ、全 3 点のうちの 2 つの提案の中でイスタンブールの記念建造物を尊重し、観光という新たな観点、そのうち特に東西の要衝とされるボスポラス海峡からの都市遺産の見え方に関する提案は、こうした考察の視点が遺産保全そのものに傾倒したアガシュの案にない特徴で、現にプロストによる計画案にも示されており、こうした海からの景観の継承は、海路に着眼したランベールの成果の 1 つであると考えてよい（図 3）。

おわりに

20 世紀前半トルコの 2 大都市で実施された都市計画に関する設計競技においてフランスの建築家・都市計画家が描いた提案を比較すると、その内容は都市毎にそれぞれ異なる。それらは新都市と古都の違い、つまり新たな土地に描いた都市の提案と歴史ある発達した大都市の相違に基づいていることは明らかである。こうした相違が都市計画に最も顕著に表れたのが詳細な用途地域の明示の有無である。ジョスリーが提案したアンカラの案は北側の旧市街に対して南側に新市街を示したばかりでなく、それらの周辺部に居住地域や産業地域などの都市の領域が明確に定められており、バルセロナ（1904）やベルリン（1910）の設計競技で鍛錬された均衡ある新たな設計手法、当時の技芸から科学に基づく新たな都市計画の有効性が試された。

一方、アガシュやランベールが描いたイスタンブールの案はジョスリーによるアンカラの案とは明らかに異なり、それぞれが独自に都市の将来像を描き出すことを試みたもので、地域毎に用途を定めるのでなく、中東における都市の規模や国際的な役割に基づき社会資本や社会基盤を描き出すというものであった。両者ともに、道路や駅舎などの都市の資本や基盤の提案が主題であることにほかならないが、その背景にある建築家・都市



図 4 イスタンブール・欧州側計画案（道路計画）：1943 Fonds Henri Prost 343AA66/11.

計画家による提案の要点は、これらの両都市で明らかに異なる。

プロストは設計競技の後、晩年にあたる 15 年以上の期間、不良地区への対応から法制度、基本計画の策定、ヨーロッパ側及びアジア側、ボスポラス海峡沿いのそれぞれ各地域毎の実施計画に至るまでアロン・エンジェル（1916-2010）らとともに都市計画に従事し、トルコ人の都市計画家を育成した（図 4）。このうち世界遺産となる「考古学公園」に関するアガシュによる初案が着目されたが、イスタンブールの都市計画ではジョスリーがアンカラで描き出した当時の科学に基づく新たな都市計画とも異なる、さまざまな提案の集積がプロストによる基本計画につながっており、それら個々の提案にはアガシュやランベールが設計競技において描き出したものがかなり参考にされたと考えられる。こうした点においてプロストの基本計画に関する考察にはアガシュとランベールの案、ドイツの建築家・都市計画家 3 名ほかの案、さらにアンカラにおけるドイツの建築家・都市計画家による案に関する考察も加える必要がある。

参考文献

ANGEL (Aron), *Turkey's first town planner: Aron Angel. Istanbul's development and urban policies*, Istanbul: Boyut Yayin Grubu, 2014.

BERDOULAY (Vincent), CLAVAL (Paul), *Aux De-*

buts de l'urbanisme Français, regards croisés de scientifiques et de professionnels, (fin XIXe-début XXe siècle), Paris: Harmattan, 2001.

BERDOULAY (Vincent), SOUBEYRAN (Olivier), *L'Écologie urbaine et l'urbanisme: aux fondements des enjeux actuels*, Paris: La Découverte , 2002.

BILSEL (Cânâ), PINON (Pierre) édit., *From the imperial capital to the republican modern city : Henri Prost's planning of Istanbul (1936-1951)*, İstanbul : Araştırmaları Enstitüsü, 2010.

CHALINE (Claude), *Urbanisme et développement : évaluation de quatre schémas directeurs métropolitains, Ankara, Le Caire, Rabat, Tunis*, Paris : SEDES, 1989.

HAUTECŒUR (Louis), MARRAST (Joseph), ROYER (Jean), LEVEAU (Th.), *L'Œuvre de Henri Prost: architecture et urbanisme*, Paris: Académie d'architecture, 1960.

LUKE (Sir Harry), *The Old Turkey and the New: from Byzantium to Ankara*, London: Bles, 1955.

GÜL (MURAT), *The Emergence of Modern Istanbul*, London: Tauris Academic Studies, 2009.

ÖZLER (Şener), PROST (Henri), *Cumhuriyet dönemi İstanbul planlama raporları 1934-1995*, Istanbul: TMMOB Mimarlar Odası İstanbul Büyükkent Şubesi, 2007.

ROYER (Jean), LYAUTEY (Hubert), DU VIVIER DE STREEL (Edmond), PROST (Henri), *L'Urbanisme aux colonies et dans les pays tropicaux*, tome I^{er}, La Charité-sur-Loire: Delayance, 1932.

ROYER (Jean), LYAUTEY (Hubert), DU VIVIER DE STREEL (Edmond), PROST (Henri), *L'Urbanisme aux colonies et dans les pays tropicaux*, tome II, Paris: Les éditions d'urbanisme, 1935.

土田哲也・土肥真人「トルコ共和国アンカラ新首都建設における近代都市計画技術の受容」『都市計画論文集』日本都市計画学会、no.42-3、2007 年、358-390 頁。

三田村哲哉「歴史的街区の保全と新市街の建設の両立－イスタンブールにおける建築家・都市計画家レオン＝アンリ・プロストの功績」『第 38 回 2013 年度年報』公益財団法人鹿島学術振興財団、2014 年 10 月、118-124 頁。

三田村哲哉「歴史的街区の保全と新市街の建設の両立－イスタンブールにおける建築家・都市計画家レオン＝アンリ・プロストの功績」『第 39 回 2014 年度年報』公益財団法人鹿島学術振興財団、2015 年 10 月、197-202 頁。

植民地期後期アルジェのカスバのイメージ

渡邊祥子
アジア経済研究所

I. はじめに

北アフリカはアルジェリアの首都、アルジェの旧市街にあたる一帯をカスバと呼ぶ。アルジェのカスバは 1992 年にユネスコの世界遺産に指定され、地中海ムスリム文化独特の街並みを今日に伝える地区として知られている。アルジェにおける人間集落の建設は、フェニキア人が交易のための保管基地を同地に建設した紀元前 1200 年ごろにさかのぼる[1]。カスバの街並はズィール朝の時代（973–1148 年）に原型が作られ、オスマン期（1519–1830 年）に拡張したものである。フランスの植民地支配（1830–1962 年）によって街の景観が激変する一方で、伝統街区としてのカスバのイメージが、長い時間をかけて構築されていった。

よく知られているように、フランスの植民地支配において現地社会を統治する手段として、科学としての都市計画が積極的に取り入れられた[2]。当時の都市計画政策は、同時代のオリエンタリズム（東洋学、あるいは東洋趣味の芸術）が表象した現地社会イメージの大きな影響を受けた[3]。東洋学において積み重ねられた中東・北アフリカ地域の都市の研究は、「イスラーム都市」論として知られる都市の構造や機能についての一連の議論を生み出した。また、東洋趣味の絵画、小説や紀行文、観光写真、映画などは、植民地の現地人のエキゾチックな生活様式や、独特の風習に着目した。これらの影響を受けつつ、植民地の都市計画政策は現地社会を効率的、合理的、さらには人道的に支配するための都市のデザインを考案していった。他方において、アルジェリア現地の人々も、アルジェのカスバを自分たちの真正な伝統文化を代表するものとして表現することで、そのイメージの発展に参加した。

エドワード・サイード（1935–2003 年）の研究以降、植民地主義の文化表象に関する研究は枚挙にいとまがないが、こうした表象が被植民社会の側にいかなる影響を残したか、さらにイスラーム都市論のような学術的な枠組みが被植民者側の言

1　Miriam Hoexter and Tal Shuval, “Algiers,” *Encyclopaedia of Islam Three*, http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_ei3_COM_0017 (accessed January 29, 2021).

2　都市計画による空間の再編成がいかにして植民地権力と結びついていたかについては、以下を参照。Timothy Mitchell, *Colonizing Egypt* (Berkeley: University of California Press, 1991), Chapter 2.

3　オリエンタリズムの定義は、エドワード・サイード著, 板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳『オリエンタリズム』（平凡社, 1986 年）に基づく。

論構築においていかなる役割を果たしたかについては、マグリブ研究の分野では蓄積が比較的少ない[4]。そこで本論文では、植民地期後期（第二次世界大戦後から、1954–1962 年のアルジェリア独立戦争期にかけて）を中心に、アルジェのカスバが被った社会経済的な変容をふまえつつ、アルジェリア人にとってカスバが帯びていた象徴的な意味の変遷を分析する。それにより、イスラーム都市論が示唆する現地社会の精神生活の本質としての旧市街という概念を結節点として、植民地政策とアルジェリア・ナショナリズムの双方がカスバのイメージをそれぞれの政治的目的に利用していたことを明らかにする。

II. アルジェのカスバとイスラーム都市論

アルジェのカスバの語源は、アラビア語のカサバ（qaṣaba）、つまり城塞である。マグリブ地域においてカサバは戦略的目的に基づいて建設された城塞を指し、その多くは城壁に囲まれた城下町を有している[5]。16 世紀に地中海の覇権を握ったハイル・アッディーン・バルバロッサ（1478–1546 年）によってアルジェがオスマン朝領に組み入れられたのち、艦隊の停泊するアルジェ港を見下ろす丘陵地帯に、周囲 3100 メートルの城壁を持つ都市が建設された[6]。カスバは当初、丘陵地の上部に建設された城塞の部分のみを指していたが、のちにその下部に広がる城下町を含めた 50 ヘクタール程の区域がカスバと呼ばれるようになった[7]。

18 世紀終わりごろのカスバには、オスマン朝アルジェ属州の君主であるデイの居城、デイの軍隊であるオジャク（アナトリアなどからアルジェ属州に送られてきた軍人 = 官僚たち）の居住地があったほか、バラディーと呼ばれた地元出身の都市民が住んでいた。このほか、アンダルスから移住してきたムスリムたちの子孫や、私掠船によってとらえられたキリスト教徒の捕虜たち、ユダヤ教徒たち、アルジェ外からやってきた商人たちも居住していた[8]。

1830 年にアルジェがフランス軍によって占領されて以来、オスマン期のアルジェの街並みはまず戦闘によって、のちに植民地化によって、破壊されていった。まず、アルジェ属州の支配層をなしていたデイとオジャクの多くはアルジェリアを脱出してしまい、アルジェ属州の管轄下にあった不動産、支配層の人々の私財、ワクフの一部など

4 マグリブ研究においてこの分野の研究が遅れた原因は、マグリブにおいてはフランス語圏の学術的影響が歴史的に強かったのに対し、表象と植民地主義に関する研究は英語圏で発達してきたことによる。マグリブに関して重要なこの分野の先行研究は以下の通り。Patricia Lorcin, *Imperial Identities: Stereotyping, Prejudice and Race in Colonial Algeria* (London: I.B. Tauris, 1995); James McDougall, *History and the Culture of Nationalism in Algeria* (Cambridge, UK: Cambridge University Press, 2006); Edmund Burke III. *The Ethnographic State: France and the Invention of Moroccan Islam* (Oakland, Calif.: University of California Press, 2014); Jonathan Wyrtzen, Making *Morocco: Colonial Intervention and the Politics of Identity* (Ithaca and London: Cornell University Press, 2015).

5 G. Deverdun, “Ḳaṣaba,” *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*, http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_COM_0455 (accessed January 29, 2021).

6 Hoexter and Shuval, “Algiers.”

7 Deverdun, “Ḳaṣaba”; Hoexter and Shuval, “Algiers.”

8 Hoexter and Shuval, “Algiers”; Tal Shuval, *La ville d’Alger vers la fin du XVIIIe siècle: Population et cadre urbain* (Paris; CNRS Editions, 2002[1998]), 16–17.

がフランスに押収された[9]。カスバの下部(海に近い側）にはもともとアルジェ属州の行政地区、軍事地区、商業地区が位置しており、個人の住宅が多かった上部と異なる街並みを形成していたが、下カスバの部分は 19 世紀に形成された新市街（ヨーロパ人街）に徐々に統合されていった。下カスバが海につながる地点にはフランス軍の展開のために広場が形成されて「政府広場」と名付けられ、政府広場周辺の街区は海浜地区（Quartier Marine）として整備された[10]。直線的な大通りとヨーロッパ風の建築に特徴づけられる海浜地区によって下カスバは浸食され、もともとの街並みが失われたため、フランス植民地期において「カスバ」といえば、上カスバの地区のみを指すようになった。

植民地期においても、上カスバでは地中海地域の伝統的な建築様式で建てられたムスリムの住宅を見ることができた。その特徴的な建築は、カスバを訪れたヨーロッパ人たちを魅了した。そもそも 19 世紀の植民地当局の介入主義的な都市計画政策による破壊を上カスバが免れたことの背景には、上カスバが住宅街であり、アルジェリア現地人の生活様式がヨーロッパ人とは全く異なるゆえに、現地人はヨーロッパ人街では暮らすことができないという考え方があった。20 世紀に入ると、現地人の生活様式は、その独特の建築様式と結び付けられて「科学的」に考察されるようになる[11]。フランスの人文地理学、民族学の研究者たちは、植民地の伝統的な現地人の家屋を取材し、記録し、その構造を分析した。シャルル・ジョナール総督の時代（1903–1911 年）にネオ・ムーア様式の建築が流行したことに見られるように、建築家たちは自らの設計に植民地の建築様式を積極的に取り入れていった[12]。1931 年のパリ植民地博覧会においては、各植民地の土着の建築が精密に再現されたパビリオンは訪れる人々を驚愕させた[13]。このようにして、植民地の現地人の住む家屋と都市の構造はフランス人の好奇心の対象となり、研究され、その成果が植民地政策に生かされていった。

アルジェのカスバにおいて典型的な建築は、四角い回廊を持つ中庭式の邸宅（ダール）で、小型のものはドゥウィーラと呼ばれた[14]。建物は屋上同士が連なりもたれあうように建築され、白い外壁には外部の通りからの視線を遮りプライバシーを守るような様々な構造上の工夫がみられる。狭く暗い通りから家の中に入ると中庭からの光が差す明るい空間が広がっており、このコントラストがヨーロッパ人たちを惹きつけた。カスバの家の様式がヨーロッパ人建築家による住宅建設に活用された事例としては、例えば、フランソワ・ビア

9 François Dumasy, “La grande spoliation d’Alger, 1830-1834: Codifications et énonciations d’un bouleversement urbain,” in *Villes maghrébines en situations coloniales*, ed. Charlotte Jelidi (Tunis and Paris: IRMC and Karthala, 2014), 47.

10 Zeynep Çelik, *Urban Forms and Colonial Confrontations: Algiers under French Rule* (Berkeley: University of California Press, 1997), 26–28.

11 Çelik, *Urban Forms*, 37, 39.

12 Saïd Almi, *Urbanisme et colonization: Présence française en Algérie* (Hayen: Mardaga, 2002), 68–69.

13 パトリシア・モルトン著 , 長谷川章訳『パリ植民地博覧会：オリエンタリズムの欲望と表象』（ブリュッケ , 2002 年）. とくに第 5 章を参照。

14 Mahfoud Kaddache, *La Casbah: Mémoire*. Typewritten and copied document, n.d. Centre d’études diocésain, Algiers, Algeria, 51–55; Shuval, *La ville d’Alger*, 98.

ンブニュによって計画された現地人向けアパート計画（1933 年）がある。この計画では、カスバの中庭式住宅をモデルとした屋上テラスが連なる住宅のモチーフが、中庭を公共空間として共有する（伝統的な中庭式住宅において、中庭は家族の私的な空間）集合住宅としてデザインに利用された[15]。この住宅は最終的に実現しなかったが、現地人の生活様式を尊重しつつ、これを近代的にアレンジする建築の試みとして注目される。

フランスの植民地の中でも、アルジェリアを含むイスラーム世界の都市の構造や機能はヨーロッパ人研究者たちの関心の的であった。エミール・マスキュレイ（1843–1894 年）の『アルジェリアの定住民による都市形成』（1886 年）に見るように、その関心は 19 世紀から見られたが、アルジェリア（1830 年から植民地化）、チュニジア（1881 年）に続いてモロッコが保護領化された 1912 年以降に研究蓄積はいよいよ増加していった[16]。イスラーム美術・建築学を専門とするジョルジュ・マルセ（1876–1962 年）とアラビア語マグリブ方言を専門とする言語学者ウィリアム・マルセ（1872–1956 年）のマルセ兄弟、マグリブ史家のロジェ・ル＝トゥルノー（1907–1971 年）ら北アフリカ在住の研究者や行政官による一連の研究は、のちに「イスラーム都市」論として知られることになる膨大な蓄積を生み出すことになる[17]。これらの文献の特徴は、イスラームを都市的な宗教とみなし、都市生活をイスラーム教徒の生活の特性の一つと位置付けたことであり、具体的なケーススタディの多くは北アフリカの都市の分析に基づいていた[18]。また、ワクフや職人ギルドなどの仕組みを調査し、ムスリム都市民の宗教、経済活動の実態を研究した。このような植民地期のオリエンタリストたちによる研究の蓄積は、のちの欧語によるイスラーム都市研究において参照され続けた。アメリカの研究者ジャネット・アブー＝ルゴトは、1987 年に出版した有名な論文の中でイスラーム都市論の歴史を概観し、20 世紀前半のオリエンタリストたちが少ない事例から過度に単純化されたイスラーム都市のモデルを導き出したことを批判した。すなわち、モスク、スーク（市場）、ハンマーム（公衆浴場）の三点セットのみでイスラーム都市を定義したり、迷路のような街区、男女の空間分離といった特徴に中東・北アフリカの都市一般を還元したことである。しかし、アブー・ルゴトはこうした批判をふまえつつも、イスラームに基づく生活様式と結びついた都市の形態は存在していると述べた。彼女の議論では、イスラーム都市の特徴は以下の 3 つにまとめられる。まず、イスラーム法に基づきイスラームとそれ以外の宗教の信者に法的な地位の際が存在していたことから、宗教コミュニティが街区を形

15　Çelik, *Urban Forms*, 133–135.

16　Émile Masqueray, *Formation des cités chez les populations sédentaires de l’Algérie: Kabyles du Djurdjura, Chaouïa de l’Aourâs, Beni Mezab* (Paris: Ernest Leroux, 1886).

17　William Marçais and Georges Marçais, *Les monuments arabes de Tlemcen* (Paris: A. Fontemoing, 1903); Roger Le Tourneau, *Fès avant le Protectorat. Étude économique et sociale d’une ville de l’Occident musulman* (Casablanca: Publication de l’IHEM, 1949); Georges Marçais, *Mélanges d’histoire et d’archéologie de l’Occident musulman* (Algiers: Imprimerie officielle du Gouvernement général de l’Algérie, 1957).

18　Janet L. Abu-Lughod, “The Islamic City: Historic Myth, Islamic Essence, and Contemporary Relevance,” *International Journal of Middle East Studies* Vol. 19, No. 2 (1987): 156–157.

成する役割を果たしていること。次に、男女の区分や公私の区分に基づく空間編成や、空間利用が実際に観察できること。最後に、シャイフ等と呼ばれる指導者が統制する街区の自治能力がきわめて高く、しばしば国家の介入を排除して、政治的、軍事的単位として機能したことがあげられた[19]。

このように、イスラーム都市論は、そのすべてが植民地主義の偏見とは断言できない地域研究上の議論であり、日本の研究者の間でも大きな影響力を持っている[20]。しかしながら、本論文においては、植民地時代のアルジェのカスバのような事例に対して、イスラーム都市論を用いることの難しさを指摘しておきたい。まず、アブー＝ルゴトが挙げたイスラーム都市の特徴のうち、一番目と三番目の要素（宗派別の街区編成、街区の自治能力）は植民地化の進展によって消滅することに注意が必要である。アルジェリアでは、植民地化以前に非ムスリムに与えられていたズィンミーの法的地位は消滅し、植民地当局の政治的、軍事的な支配がムスリムにいきわたることで、カスバにおける街区の自律性もなくなったからである。そこで、ただひとつ、二番目の男女や公私の空間分離の原則だけが、ムスリムの居住する街区の本質的特徴として強調されることになる。

植民地期の絵画、文学、映画、広告に現れたいわゆる東洋趣味の表現においても、アルジェのカスバはエキゾチックな空間としてとくに好まれた題材だった。19 世紀半ば以降期のヨーロッパ人街の拡大によって大都市となったアルジェであるが、ムスリム住民が密集して暮らすカスバは、ヨーロッパ風の新市街のさなかにぽっかりと出現した異空間としてヨーロッパ人の観光客を惹きつけてきた。20 世紀の東洋趣味的表現においてカスバはしばしば女性として表象され、神秘的で魅惑的なイメージを与えられた。現地人の女性は、身にまとったヴェールやムーア風の家の奥深くに隠され、ヨーロッパ人にとっては接触を禁じられているゆえに欲望をそそる存在として描かれるか、あるいは、ヨーロッパ人観光客にとって最も容易に交流することのできる存在である、娼婦の姿で描かれた[21]。このことは、植民地主義の被植民地化された社会に対するステレオタイプ的なまなざしを特徴づけているとともに、先述したイスラーム都市の特徴のうち、男女や公私の空間が分離されているという認識が一般に良く広まっていたことも示している。

上記のように、アルジェリア現地社会を調査対象とする社会科学や東洋趣味の言説によって、アルジェのカスバやそこに生きる人々に関するイメージが作られていった。ヨーロッパの言説は、20 世紀前半から半ばのカスバをめぐるアルジェリア人の言説に大きな影響を与えた。

III. アルジェリア人の語るカスバ

1905 年、アルジェ旧市街委員会（Comité du Vieil Alger）という民間の研究グループが設立され、オスマン期のアルジェのカスバについての本格的な学術研究が開始された。オラン出身の教員アンリ・クライン率いるこのグループには、フランス人の研究者や画家などに加えて、アルジェ大

19　Abu-Lughod, “The Islamic City,” 162–163.

20　例えば、以下を参照。羽田正・三浦徹編 ,『イスラム都市研究：歴史と展望』（東京大学出版会 , 1991 年）.

21　Jean-François Staszak, “Exotisation et érotisation d’un haut-lieu et bas-fond touristique : la Casbah d’Alger,” *Téoros* Vol. 37, No. 2 (2018) https://id.erudit.org/iderudit/1055638ar (accessed January 29, 2021).

学で文学博士号を取ったアルジェリア人研究者、ムハンマド・ベン・シェネブ（1869-1929 年）が参加していた。ベン・シェネブは、フランス式の学校で高等教育を受けたアルジェリア人の最初の世代に属しており、アルジェリアで発見されたアラビア語の様々な文書の文献学的な研究や、口頭で伝わってきたことわざなどについての民俗学的な研究を残している[22]。いわば、最初のアルジェリア人オリエンタリストである。

アルジェ旧市街委員会は、アルジェリアのオスマン期に関する研究が当時多くなかった中で、断続的に研究成果を雑誌論文の形で発行し続け、1937 年にそれまでの成果をまとめた[23]。その関心は主に、カスバの歴史的建造物（モニュメント）の由来や歴史であった[24]。カスバ各地区のモスクや墓地などの宗教施設、オスマン期の要人の宮殿や私邸、教育施設などが研究対象となっている。また、アルジェ旧市街委員会は活発な政策提言も行い、モスクや水場、聖者廟、ムスリム墓地、昔ながらの屋敷などが行政の都市計画によって破壊されるのを阻止した[25]。

アルジェ旧市街委員会の研究がアルジェのかつての都市生活に歴史的関心を寄せる研究者の作品であったのに対し、両大戦間期以降、カスバは別の文脈で研究者の関心を集めることになる。この時期に農村人口の急激な流入によってカスバのスラム化が進んだことで、カスバは首都における一大社会問題として研究されるようになるのである。カスバをアルジェ郊外に発展しつつあったスラム街と同様のプロレタリア街区と見て、行政的な努力によるスラム問題の解消を模索する視点からの研究が増加することになる。

農村の貧困化と都市への移民の増加を背景として、1936 年から 1948 年の間に、カスバのムスリム人口は 2 倍に増えていた[26]。アルジェの新市街のほとんどがヨーロッパ人の住む街区であったので、流入したムスリム人口は自然と旧市街であるカスバと、都市郊外に新たに形成されたスラムに集中した。アルジェはもともとオランと並び、アルジェリア内のヨーロッパ系入植者の人口が集中する都市であったが、ムスリム人口のアルジェへの流入によってヨーロッパ人とムスリムの人口比に変化が生じていった。表 1 の通り、アルジェリアの人口 10 万人以上の都市において、全人口に占めるムスリムの割合は 1954 年までにヨーロッパ人を上回って過半数となった。アルジェにおいては、1954 年時点で市内のヨーロッパ人とムスリムの人口比率は 54 対 46 であったが、ムス

22　Mohammed Ben Cheneb, *Proverbes de l'Algérie et du Maghreb* (Paris: Maisonneuve & Larose, 2003).

23　フランス人のアルジェリアの歴史に関する最初の研究は考古学と古代史の分野に集中した。オスマン期を含むイスラーム時代への関心は、これよりも遅れて現れることになる。例えば、アルジェリア歴史学会の雑誌『アフリカ誌』（*Revue africaine:* 1856–1962 年）に 1856 年から 1881 年の間に掲載された論文のなかで圧倒的に数が多いのは「考古学・古代史」の関連論文で、次が「アフリカ史」であり、その他「地理」「民族学」「文学、美術、文法学」「しきたり、慣習と伝説」「天文学、気象学」などが続く。“Table analytique par ordre de matières,” *Table alphabétique et méthodique des inscriptions romaines, libyques, arabes et autres de la Revue Africaine, 1856–1881* (Algiers: Adolphe Jourdan, n,d,[1881]), 59–101.

24　Comité du Vieil Alger. 2003. *Les Feuillets d'El-Djezaïr*, 2 vols. Algiers: Éditions du Tell.

25　Almi, *Urbanisme et colonization*, 73–77.

26　Kaddache, *La Casbah*, 22.

表 1 アルジェリアの都市人口におけるムスリムの割合

年	人口 10 万人以上の都市における ムスリム人口の割合(%)
1886	25
1906	25
1926	30
1936	35
1954	52

出典：Robert Descloitres, Jean-Claude Reverdy, and Claudine Descloitres, *L'Algérie des bidonvilles : Le tiers monde dans la cité* (Paris and The Hague, Mouton, 1961), 30.

リム人口の 3 分の 2 はムスリム街区に集中しており、例えば上カスバでは人口の 97％がムスリムであった。アルジェの著名なスラム街であるムフイッディーンではムスリム率は 100% であった[27]。

フランス当局は、カスバのスラム化を都市の治安や衛生状況を悪化させる望ましくない現象としてとらえていた。人口過密と住環境の不衛生、建物の老朽化、肉体的・社会的病理の蔓延などを理由に、フランスは第二次世界大戦後、カスバの住宅に対する介入政策にかじを切っていった。老朽化した建物の一部の取り壊し、共同水くみ場の創設や電気の導入などが実行されていった[28]。アルジェに急増していった農村からのムスリム移入民やスラム街の実態についての研究も盛んになっていった。例えば、1953 年から 1954 年にかけてアルジェリア歴史学会の雑誌『アフリカ誌』（*Revue africaine*）に掲載されたアナヌの論文「アルジェのサヘル地方におけるムスリム農村住民」は、1936 年から 1948 年の間に移入民による急激な人口増が見られたアルジェ郊外の地域（サヘル地方）に関するエスノグラフィーであり、移民たちの住む様々なタイプの家の見取り図も掲載されている（図 1 ）[29]。リヨン大学の教授ジャン・ペルティエは、アルジェリア総督府の統計局、アルジェ市の都市計画局（Les Services de l'Urbanisme et du Plan）の資料を用いてアルジェの地理、人口、社会経済変容、住居の状況を分析した『アルジェ 1955 年：社会地理学的研究』（*Alger 1955: Essai d'une géographie sociale*）を 1959 年に出版した[30]。この中ではムスリムとヨーロッパ人の分布やそれぞれの生活様式が分析されている。さらに、リベラル派の政治家ジャック・シュヴァリエ（1911–1971 年）がアルジェ市長を務めていた時代（1953–1958 年）の都市計画局（L'Agence de Plan）に参加していたロベール・デスクロワトルらによってアルジェのスラムの状況が調査され、1961 年『スラムのアルジェリア：都市の中の第三世界』（L'Algérie des bidonvilles : Le tiers monde dans la cité）として刊行された[31]。こうした出版物は、ヨーロッパ人研究者や行政官たちのスラム問題への関心の高さを示している。都市問題の把握と解決は、「ヨーロッパ人とムスリムの二つの共同体の間の最良の相互理

27 数値は Robert Descloitres, Jean-Claude Reverdy, and Claudine Descloitres, *L'Algérie des bidonvilles : Le tiers monde dans la cité* (Paris and The Hague, Mouton, 1961), 41 を参照。

28 Çelik, *Urban Forms*, 43–46.

29 P. Ananou, "Les populations rurales musulmanes du Sahel d'Alger," *Revue africaine* Vol. 97 (1953): 369–414; Vol. 98 (1954): 113–139.

30 Jean Pelletier, *Alger 1955: Essai d'une géographie sociale* (Paris: Les Belles Lettres, 1959).

31 Descloitres, Reverdy, and Descloitres, *L'Algérie des bidonvilles*.

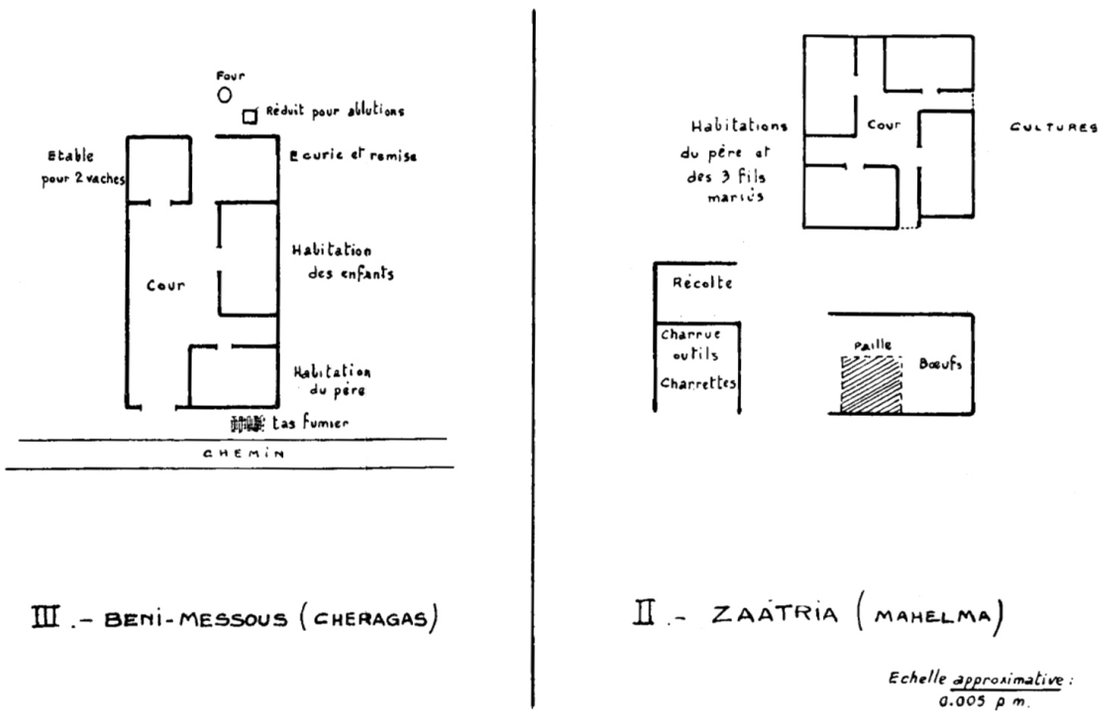


図１　P. アナヌの論文に掲載されたサヘル地方の農家見取り図の一部
出典：P. Ananou, “Les populations rurales musulmanes du Sahel d’Alger,” *Revue africaine* Vol. 98 (1954).

解」につながると理解されていたからである[32]。

フランスがカスバへの不介入から介入へと政策を変更した背景には、植民地政策全体の路線変更があった。第二次世界大戦でドイツに占領され、形式上は戦勝国であったものの国土が荒廃しきっていたフランスは、本国の戦後復興のために、海外のフランス領を経済的に積極活用する政策を打ち出した。すなわち、植民地の労働者の生産性を向上させ、植民地に投資を行って産業を育成し、フランス帝国を一大経済圏として復興の礎にするというものである。それ以前の植民地経営においては、基本的に各植民地の予算は各植民地で賄うという考え方が強固であったため、これは大きな政策転換であった[33]。1946 年にフランス領と本国フランスの間で形成されたフランス連合、1958 年にその後を継いだフランス共同体は、フランス帝国を統べる新たな枠組みとしての役割を期待された。さらに、アルジェリアにおいては、1954 年 11 月に始まるアルジェリア独立戦争がもたらした社会的緊張の高まりの中で、1950 年代を中心にアルジェリア人に対する社会福祉政策を充実させ、フランスへの政治的支持を再び取り付ける

32　Pelletier, *Alger* 1955, 5.

33　Samir Amin, *L’Économie du Maghreb*, vol.1 (Paris: Minuit, 1966), 106–107; Jacques Marseille, *Empire colonial et capitalism français: Histoire d’un divorce* (Paris: Albin Michel, 1984), 332–349; Frederick Cooper, *Decolonization and African Society: The Labor Question in French and British Africa* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), Chapter 5.

努力が行われた。例えば、ド・ゴールの立ち上げた 1958–1961 年のコンスタンティーヌ計画は、大規模雇用創出とともに、住宅、鉄道、道路などのインフラへの投資を約束していた。アルジェ市においては、先述のジャック・シュヴァリエ市長が、アルジェとその郊外におけるアルジェリア人労働者向けの大規模団地の建設を指揮した。スラム街を取り壊し、その住民を段階的に低家賃住宅（Habitation à Loyer Modéré: HLM）に移住させる大規模な計画も実行に移された[34]。

以上のように、第二次世界大戦を境に、カスバに対するフランスの認識は、保全しておくべきエキゾチックな町から、行政の介入を必要とする危険なプロレタリア街区へと変わっていた。マフフーズ・カッダーシュ（1923–2006 年）のカスバ論は、このような変化の時期に、アルジェリア人の手で書かれた本格的なカスバ論であり、1950 年前後のアルジェリア人知識人がカスバに対して持っていた認識を示す貴重な資料である。カッダーシュは、カスバ出身の高校教師、ボーイスカウト指導者であり、アルジェリア独立後はアルジェリア・ナショナリズムの研究で知られる著名な歴史研究者となる[35]。カスバ論は、カッダーシュが 1949 年にアルジェ大学文学部に提出した学位論文であり、1951 年に『アルジェリア資料』（*Documents algériens*）に掲載された要約（後述）を除けば未刊行であるが、著者はアルジェのカトリック司教区研究所に保管されていた論文全文と『アルジェリア資料』の記事をまとめたタイプ打ちの冊子（1951 年以降に作成されもの）を参照した[36]。

カッダーシュのカスバ論は、歴史学と人文地理学の手法で書かれており、19 世紀以前のカスバを訪れたヨーロッパ人の手記、人口統計などの経済データ、おそらくは現地調査に基づくものと思われる建築と家屋の構造に関する詳しい描写、人々の生活様式の歴史的変容に関する記述を分析に用いている。カッダーシュは論文の序論において、カスバを近代文化との接触で現在進行形の変容を被りつつある北アフリカの旧市街の一典型と位置づけている。そして、「ハリウッドのカスバ」、すなわちヨーロッパ人による東洋趣味の映画や絵画・文学作品が描いた、奇妙にして神秘的、退廃的で蠱惑的、近代都市の中で遠い過去の姿を永遠にとどめ続ける異空間としてのカスバのイメージを批判する[37]。カッダーシュは、徹底した実証主義と客観的記述に基づき、栄華を誇ったオスマン朝アルジェ属州の首都から 20 世紀のプロレタリ

34　アルジェのスラム街・ムフイッディーン地区のスラム街移転計画は、結局途中までしか完了しなかった。Kosuke Matsubara, “Some Learnings Gyoji Banshoya Acquired from the Spatial Composition of the Ancient Shantytown of Mahieddine, in 1950’s Algiers: Research on Dwelling Practice around the ‘Bidonville (Shantytown)’ Project in Algiers during the Late Colonial Period, Part 1,” *Japan Architectural Review*, 2021: 10.

35　カッダーシュの学術業績については、以下を参照。Fouad Soufi, “Mahfoud Kaddache, 1921–2006: La Quête du pays réel, l’exigence de l’archive,” *Insaniyat* Vol. 37 (2007) https://doi.org/10.4000/insaniyat.9240 (accessed January 29, 2021).

36　この資料の構成、内容については次の論文を参照。牧野奈央「アルジェリア人からみた仏植民地期カスバの都市空間 — マフード・カッダーシュの報告の分析を通じて —」筑波大学システム情報工学研究科修士論文 , 2021 年 .

37　Kaddache, *La Casbah*, 1.

ア街区へという街区の変容を明らかにすることをこの論文で試みたのである。

カッダーシュの論文はオスマン期（植民地化以前）のカスバを描写した歴史的な分析、カスバの伝統的な生活様式や建築の詳細な描写、同時代におけるカスバの社会経済変容についての記述を含んでいる。それによると、オスマン期のカスバはトルコ系のエリート、クルグリ（トルコ系エリートと現地人との混血）、ムーア人（北アフリカ現地人の都市民）、黒人、ユダヤ教徒などからなるコスモポリタンな社会であったが、植民地化によってトルコ系住民がアルジェリアを離れ、その後の社会変容でムーア人の富裕層などもカスバを出たために、20 世紀のカスバ住民は地元民（バラティー）を失って内陸部から来たよそ者ばかりで構成されることになった[38]。カッダーシュは統計資料を丁寧に読み解くことで、20 世紀前半におけるカスバの人口増加が、すでにカスバに住んでいた住民人口の自然増ではなく、農村部からの急激な人口流入を主因として起こったことを示している。アルジェから東に 100 キロほどのところにあるカビール山地などから来たこれらの移民たちは、本質的に農民的な生活様式をカスバにおいても守っており、決して都市化することはないとカッダーシュは述べた[39]。つまり、ムーア式住宅などにその名残が見られるかつてのカスバの華やかな都市生活は、20 世紀前半にはすでに失われて過去のものとなり、カスバは農村からの移民たちのあふれる大きなスラム街のようになったというわけである。このような変容について、カッダーシュは過去を懐かしんでも意味がないとロマンチックな復古主義を拒否しつつ、衛生状況の悪化などの社会問題については対処が必要であると述べている。具体的には、農村の貧困化に歯止めをかけることでアルジェへの新たな人口流入を防ぎつつ、カスバの建築過密を解消する廉価住宅（Habitation Bon Marché）の建設を進言している[40]。とりわけ、ムスリムの生活様式を考慮したタイプの住宅の建設が望まれるとし、以下のように述べている。

> キャトル・キャノンの新しい住宅地に建設された『アメリカ式』簡易住宅や、タルギン地区に整備された、ムスリムの習俗を考慮し原価の高くないグルファ［レンガのみを使って作られた簡易住宅］は、もし数多く建設されれば、カスバの過密人口の解消に役立ちうるだろう[41]。

ここで描写されている政策は、第二次世界大戦終結から 1950 年ごろまでに行われたアルジェ市による住宅危機解決のための再開発の一環と考えられる[42]。ムスリムの習俗を考慮した住宅は、前節で述べたとおり、民族学や社会学などの調査成果を吸収した 20 世紀のヨーロッパ人建築家たちが提唱していた概念である。このようにカッダー

38　Kaddache, *La Casbah,* 12–22.

39　Kaddache, *La Casbah*, 66–67.

40　Kaddache, *La Casbah*, 78–79.

41　Kaddache, *La Casbah*, 40. このアメリカ式住宅建設の詳細は不明。キャトル・キャノンはアルジェ中心部の上部に当たる丘陵地帯の街区。タルギンもこれに隣接する。

42　Çelik, *Urban Forms*, 44.

シュの提言は、懐古趣味を政策に反映させることを批判してカスバの問題を社会経済問題として認識し、他方でアルジェリア人の文化をヨーロッパ人とは異なるものとして社会政策において相違を尊重することを求めた点で、彼の同時代の植民地当局のリベラル派が提唱していた考え方に近いと言っていい。伝統的な都市生活の様式に従わない農村出身者の存在を、都市計画の瑕疵とみなす認識も共通している[43]。実際に、カッダーシュは論文の一部を上記の政策提言の部分を含む 2 つの短い記事にまとめ、アルジェリア総督府の発行する雑誌『アルジェリア資料』（*Documents algériens*）の文化版に掲載している[44]。この雑誌はアルジェリア総督府の情報局が刊行していたものであり、カッダーシュの提言は当時の政策決定者たちに向けられたものであることがわかる。

このように、同時代のフランス人行政官とさほど変わらない結論を導きながら、カッダーシュの論文が魅力的であるのは、カスバに長年住み、人々のくらしや伝統をよく知る者にしかできない細やかな描写が見られるからである。例えば、カスバの住居に関する節では、伝統的なムーア様式の中庭住宅の構造、部屋や空間のローカルな呼び名、その機能などの詳しい描写がある。中庭式住宅のうち、ダールと呼ばれる住宅はブルジョワ階級が住む屋敷で、伝統的には一つの屋敷に一家族のみが住まう（この慣行は 20 世紀のスラム化により失われる）。外側から見て開口部は少なく、家の内側が想像できない構造である。ノッカーは通行人用途馬上の人用との二つがあったが、上部のノッカーは現在はなくなりつつある。家に入ると長い廊下の後、スキッファ（squiffa）と呼ばれる部屋があってやがて中庭に通じる。中庭は採光と換気という重要な機能を担っており、家に開放感を与えている。中庭の周りの部屋は貯蔵、食堂、料理などをする場所である。二階にも同じように部屋が配備され、屋上につながっている。屋上のうち最も高いところにステハ（steha）と呼ばれるテラスがあり、家の人々はそこでゆったりとした時間を過ごす。ダールがブルジョワジーや商人、職人の家であるのに対して、ドゥウィーラは使用人や貧民の家であった。こうした伝統的な形式の家は 18 世紀にさかのぼると、カッダーシュはジョルジュ・ギオーシェン（1840–1912 年、アルジェリアで活動したフランス人建築家）の著作を引きながら論じている[45]。カッダーシュは中庭式住宅の描写において、上記のギオーシェンと、中庭式住宅の大まかな建築的特徴について述べたディエゴ・デ・アエド（16 世紀末にアルジェで捕虜として過ごしたスペインのカトリック聖職者）を参考文献として挙げている。これに対して、家の内部構造の細部について描写した部分には注が付されていないことから、カッダーシュ本人の調査（あるいは、彼の実生活の経験）に由来する知識に基づいた記述であると推測される。

また、論文には「カスバに住む女性たちの生活

43　植民地当局がスラムを含むアルジェリアの都市問題について持っていた認識については、以下を参照。Jim House, “Intervening on ‘Problem’ Areas and their Inhabitants,” *Histoire & mesure* Vol. 34, No. 1 (2019): 121–150.

44　Mahfoud Kddache, “La Casbah sous les Turcs,” *Documents algériens*, Série culturelle, No. 55 (1 Septembre 1951); “La Casbah de nos jours,” *Documents algériens*, Série culturelle, No. 56 (10 Septembre 1951), cited in Kaddache, *La Casbah*.

45　Kaddache, *La Casbah*, 51–56. 家の構造に関する文中の用語の綴りは、カッダーシュによるものを尊重した。

と経済活動」という興味深い節がある[46]。この節は以下のように始まっている。「家は男性だけでなく、家族の生活の秘密をも隠し持っている。誰も外側からは、これらの家の内部で起こっていることを推測することはできない」[47]。カッダーシュはこの節で現地人女性の生活というヨーロッパ人にとって最も知りがたいトピックを扱うが、この節においてもカスバの内部を知り、家族生活を内側から知っているコミュニティの一員としてのカッダーシュの知識が生かされている。この節で論じられるのは、カスバにおいて住民の女性が他の世帯の男性の視線を避けるための慣習であり、とくに人口過密の結果、部屋ごとに異なる家族が住まうようになった同時代の中庭式住宅においてプライバシーを守る工夫が述べられている。また、女性たちの公共生活への奉仕についても記述がある。カッダーシュによれば、女性たちは家の共有部分の清掃、内壁の漂白を担っており、それ故に中庭式住宅を貸し出している大家は借家人として家族を好み、単身者は決して受け入れないという。女性の外出については、冠婚葬祭のための家族友人訪問、ハンマーム通い、聖者廟への参拝などの機会があることが説明されている。さらに、同時代における内職の増加や労働の多様化による、女性賃金労働者の出現という新しい現象についての分析もこの節に含まれている。

これらの記述は、カスバの住民共同体の外部にいるヨーロッパ人からは隠された日常の家族生活の諸側面を明らかにする試みであるとともに、オリエンタリズムにおいては常に客体として扱われてきた現地人の女性 — それはカスバそのものの隠喩でもある — の主体性や生産性に対する、カッダーシュの意識的な注目が表れている部分でもある。その証拠に、カッダーシュはこの論考でカスバの女性に関してはこのように一節を設けているのに対して、男性については、労働者の経済的な状況についての記述はあるものの、その私的な生活について特に論じてはいない。つまり、オリエンタリズムの創り上げたアルジェの表象においても、カッダーシュの意識においても、女性はカスバの伝統的な家や、コミュニティの内なる生活と結びつけられて捉えられている。カッダーシュの説く女性の社会的・経済的な役割は、確かにオリエンタリズムにはない指摘であるが、中庭式住宅の管理の必要や夫の収入が不安定なゆえの家計上の必要といった観点から説明されており、男の空間と女の空間、公的生活と私的生活の間の分離というよく知られた前提は維持されている。

上記のように、カッダーシュの論文は、カスバのスラム化への政策的な介入の必要性という、フランス人行政官にも共有されていた認識を強調しつつ、ヨーロッパ人にはまねのできない分析や指摘を含んでおり、とくにカスバの家の内部構造や家庭生活についての叙述は斬新な側面を持っていた。カッダーシュはオスマン期の文化的遺産については科学的距離をとり、ノスタルジーを前面に出さないが、かつてのアルジェの都市生活、ムーア風の家の構造と調度品の数々、人々の暮らしぶりなどの詳述を通じて、カスバの文化遺産の記録と保全を試みているようでもある。住宅政策についての提言の部分のほかに、ヨーロッパ人読者が価値を見出したのもやはり論文のこの部分であっ

46　Kaddache , *La Casbah*, 68–73.

47　Kaddache, *La Casbah*, 68.

た。例えば、『アルジェリア資料』に載ったカッダーシュ論文の要約を読んだアルジェ大学教授のマルセル・エムリ（1899–1985 年）は、カッダーシュの研究をかつてのカスバの経済活動やブルジョワの生活を知ることのできる貴重な分析であると評価している。カスバの街並みを保全する政策が長く不在だったゆえに街区の破壊が進んで記憶が失われつつあり、オスマン期のアルジェリアに関する研究も希少であるゆえ、カッダーシュの論文は重要だというのである[48]。このように、カッダーシュの論文は空白だったカスバの過去を書き記し、さらに現在の変容を望ましい方向に導こうという試みであったということができる。

IV. アルジェリア独立戦争（1954–1962 年）によるカスバの変容

この後カスバの状況は、アルジェリア独立戦争の開始によって大きく変わることになる。1954 年 11 月 1 日、アルジェリア各地で同時多発的な武装蜂起がおこり、民族解放戦線（FLN）が創設を宣言した。ナショナリスト政党・民主的自由の勝利のための運動（MTLD）の地下組織出身の 9 人の若手指導者が率いる FLN は、当初こそ少人数であったが、既存のアルジェリア・ナショナリストたちを味方につけて勢力を伸ばしていった。それとともに、農村から始まった戦線は次第に都市部へと広がっていった。戦闘は、コンスタンティーヌ計画が約束していたカスバを含むアルジェの大規模な都市再整備計画の遂行を困難にした[49]。1957 年にはアルジェを舞台にした市街戦、いわゆるアルジェの戦いが行われ、ムスリム人口の集中していたカスバは、ゲリラ戦やストライキ、デモの中心地となった。

ラルビー・ベン・ムヒーディー（1923–1957 年）率いる FLN の「アルジェ自治区」は、フランス空軍のエリート部隊であるパラシュート部隊に全面対決を挑んだ。カスバは、FLN の戦闘員や幹部が多数潜伏していたために、フランス軍にとって脅威となった。そこでフランス軍はカスバを鉄条網で封鎖し、チェックポイントを設けてヨーロッパ人街との行き来を統制した。パラシュート部隊は FLN の殲滅のため、カスバの狭く曲がりくねった通りを巡回し、家々の扉をたたいた。通りに代表されるカスバの公的空間（男の空間）がパラシュート部隊の監視下に置かれる中で、FLN は、私的空間（女の空間）とされていた家の中を巧みに戦闘に利用した。アルジェの女性たちも、FLN の連絡係や戦闘員として戦闘に参加することになった。FLN メンバーではないカスバの住民たちも、逃げてきた FLN の戦闘員を家にかくまうなど、支援を惜しまなかった。

このように、独立戦争のさなかでカスバは新市街と切り離されてゲットー化し、フランス軍の直截の監視と介入を受けた。他方で、のちに映画『アルジェの戦い』でも描かれることになる、カスバに生きる人々すべてを巻き込んだ戦闘の日々から、アルジェリア人ムスリムの抵抗戦争の場としてのカスバについての集合的記憶が生まれていっ

48　Marcel Emerit, “Kaddache Mahfoud, La Casbah sous les Turcs (*Documents algériens*, no. 55, 1er septembre 1951) ; La Casbah de nos jours (*ibid*., no . 56, 10 septembre 1951), Service d’Information du Governement Général de l’Algérie,” *Revue africaine* Vol. 95 (1951): 421–423.

49　Çelik, *Urban Forms*, 46–47.

た[50]。アルジェリア独立戦争中にアルジェリア人によって創作された文学作品の中に、その例を見ることができる。

アルジェの戦いから 2 年後の 1959 年、FLN の専属演劇団がカスバを舞台とした戯曲を上演した。『カスバの子供たち』（Ibna el-Casbah）と題されたこの戯曲は、戦争状態のアルジェリアを避けて演劇団が活動していたチュニスで最初に上演された。このような活動は、言うまでもなく FLN の対外宣伝活動の一環として行われた。戯曲はアルジェリア方言で書かれ、上演されたものであることから、第一義的にはアルジェリア方言を理解するマグリブ人などのアラブ人観衆と、国外にいるアルジェリア人難民を対象にしたものと考えてよい。さらに 1959 年から 1960 年にかけて、FLN のフランス語機関紙『エル＝ムジャーヒド』（*El Moudjahid*）紙上にこの戯曲の一部が翻訳出版されている。戯曲の紹介記事には、その著者らへのインタビューが含まれており、戯曲に込められた政治的な意図についても知ることができる[51]。以下ではこれらの翻訳やインタビュー記事をもとに、戯曲の概要を分析する。

物語の舞台は 1957 年のアルジェの戦いの時期のカスバで、カスバに昔から住む中産階級の一家が主人公である。一家はカスバの昔ながらのムーア風の中庭式住宅に住んでいる。この戯曲の手法で特徴的な点は、戦争という大きな出来事がカスバで展開しているにもかかわらず、物語がこの一家の家の中で展開することである[52]。戦争中の様々な外界の出来事は、ラジオ放送や新聞をめぐる家族の会話を通じて語られたり、ある日家の中に逃げ込んでくる FLN の連絡員という形で家の中に闖入してくる。家族構成は父親と母親、若い息子 2 人とそのうちの 1 人（長男）の嫁である。この一家はスラム化が進んでいたカスバの中にあって親族のみで中庭式住宅に住んでおり、父親がヨーロッパ人とビジネスの話をするなどカスバの中では裕福なようである[53]。ノンポリで戦争を傍観しているように見えた家族は、政治のうねりの中に次第に巻き込まれていく。

もっとも決定的な出来事は、FLN の連絡員をしている若い女性がフランス軍に追われてこの家

50　1966 年のジッロ・ポンテコルヴォ監督の映画『アルジェの戦い』は、アルジェリア独立後に撮られたものであるが、史実調査に基づくドキュメンタリータッチの作品であり、カスバの人々の戦闘への関与をうかがい知ることができる。映画では、FLN の兵士たちはフランス軍を避けるために、迷路のようなカスバの街並みや、女性の空間である家の中、そして女性のヴェールを利用したことが語られ、通りなどの公的空間（男の空間）と家の中の私的空間（女の空間）の対比も意識的に描かれている。また、男性たちが戦闘や日々の仕事で姿を消す中で、カスバに残された女性や子供たちの戦争における主体的な役割が強調されている。映画はアルジェリアでも広く観られ、映画に現れる戦うカスバのイメージは、独立後のアルジェリア人のカスバ・イメージの構築に大きく貢献した。

51　“Entretien avec les artistes algeriens,” *El Moudjahid*, 25 mai 1959; “Les enfants de la Casbah,” *El Moudjahid*, 31 mai 1960; 20 juin 1960; 16 juillet 1960; 5 aout 1960.

52　アルジェリアの国立劇場のウェブサイト（http://tna.dz/fr/ibna-el-casbah-les-enfants-de-la-casbah/）で、当時の上演風景の写真が見られる。

53　前節で述べたとおり、中庭式の賃貸住宅の多くは部屋ごとに異なる家族に貸し出されていた。この家族の家には血縁者、姻戚者しかおらず、持ち家と考えられる。

に逃げ込んできたことだった[54]。連絡員がごく若い女性であったことで、男性たちだけではなく女性たちも彼女の勇気に大きな感銘を受け、主婦である長男の嫁は自分と同じ年頃の女性が犠牲を払って戦っている以上、自分も FLN による独立戦争のために何かしなければならないという責任感に目覚める。一家にかくまってもらい、巻き込んだことを申し訳なく思っていた連絡員の女性に対して、一家の父親は、「フランスが私らの内部を侵略したから、私らの娘たちが通りを走るようなことになっているんだよ」と優しく応じる。「私らの内部」という言葉には様々な読みが可能だが、最も直接的には街区としてのカスバを指していると考えられる。フランス軍がカスバの通りを統制したことで、男性たちが通りを自由に動きづらくなり、女性たちが代わりに連絡係などとして働くようになったという事情が、このセリフで説明されている。すなわち、男女、公私の空間分離の境界が戦争によって動揺し、女性たちが公的な空間である通りを走るようになったわけである。

この戯曲のもう一つの特徴は、この FLN の若い女性、一家の母親や長男の嫁など、女性たちの独立戦争への貢献に特に焦点を当てていることである。舞台が家の中であることで、女性たちは常に在宅しているゆえに舞台に登場し続けている。これに対し、食事と就寝以外は出たり入ったりしている男性たちのほうはむしろ影が薄い。例えば、一家の長男は表向きは警察官として働き、陰で FLN の活動家として働いている二重生活者という設定である。つまり彼は当初から FLN のメンバーであるにもかかわらず、家の外における彼の活躍は描かれず、家族には FLN 闘士としての顔を隠しているためにむしろ歯切れの悪い曖昧な人物に見えている。このように FLN の闘士である男性を英雄的に描かなかったことについて、戯曲の著者たちは批判を受けたとインタビューで述べている。この点について筆者たちは、アルジェリア独立のために戦う人々を、人間を超越したスーパーマンとしてではなくごく身近な存在として描くため、とくに女性らの活躍に焦点を当てたと言明している。そのほうが一般の観客たちの感受性に訴えるという判断であろう。

このように、『カスバの子供たち』はカスバを、「私ら」、つまりカスバの住民（カスバの子供たち、カスバっ子）であるアルジェリア人ムスリム共同体の生活の場（兼抵抗の場）として描き出す。共同体の精神生活（「内部」）を象徴する家庭生活は、通りの視線から巧みに守られた中庭式住宅の家の空間と重ねられている。外部からやってきた戦争がこの繊細な「内部」をむしばむ中で生活は変容していき、カスバの女性たちは私的空間から飛び出して危険を賭して自由のための戦いに身を投じていく。ここでの女性たちは、抵抗する都市としてのカスバそのものの象徴であるとともに、伝統的で慎み深く、しかし必要があれば自分の身を守るために勇敢に戦うアルジェリア・ネイションの道徳的価値の象徴でもある。ナショナリストが共同体内の女性をネイションの内面的な価値のシンボルとして扱い、経済、政治領域における世界の変容からこの価値を守ることをナショナリズムの大義として掲げることは、アルジェリアに限らずアジア・アフリカのナショナリズム一般に見られ

54　著者らへのインタビューによるとこの連絡員の女性は、アルジェの戦いにおける FLN の女性活動家ジャミーラ・ブーヒレード（1935 年 –）をモデルにしている。“Entretien avec les artistes algeriens,” *El Moudjahid*, 25 mai 1959.

る現象である[55]。『カスバの子供たち』は舞台をカスバの家の中に置くことで、戦闘の具体的な状況や事件史よりも、ネイションの精神的な価値の不変性を強調した内容になっている。

アルジェリア独立戦争中のカスバを舞台にしたもう一つの戯曲として、ホシン・ブーザヘル（1935 年生まれ）の「サルカジ監獄（バルベルスの陰で）」がある。ブーザヘルは FLN フランス代表部の指導者（1960–1962 年）で、のちに歴史家となる人物である。「サルカジ監獄（バルベルスの陰で）」は、彼が 1960 年にフランスで出版した戯曲集『カスバの声』の中の一遍である[56]。物語の舞台は、カスバの頂上にあったサルカジ監獄という刑務所であり、副題のバルベルスはオスマン期のアルジェの盟主だったハイル・アッディーン・バルバロッサのことで、サルカジ監獄のあだ名である。サルカジ監獄はカスバの一部だったオスマン期の屋敷の敷地にフランス期に建てられたもので、監獄らしく窓が少なく壁の厚い重厚な造りだが、ドームやアーチ型の門などに伝統的なアルジェリア建築への言及が見られる。アルジェリア独立戦争当時、サルカジ監獄には数多くの FLN の闘士たちが投獄されていた。サルカジ監獄はカスバの一部をなすとともに、アルジェリア人が自由を得るために払った犠牲を象徴する場なのである。

『カスバの子供たち』と同様この戯曲においても、アルジェの都市空間は独立戦争という政治的現象そのものを象徴する小宇宙として描き出されている。カスバは、ヨーロッパ人街にほとんどの空間を占拠されたアルジェの中で、現地人の共同体（そして、アルジェリア・ネイションそのもの）の抵抗を表すものとして扱われる。戯曲の最初に舞台に登場する語り手（ナレーター）は、次のように口上を述べる。

> 語り手「白いアルジェ、抵抗するアルジェ、お前の歴史はなんと美しく栄光に満ちていることか[57]。」

「白いアルジェ」はアルジェの地中海都市としての風光明媚さを示す植民地期のあだ名であるが、この陳腐な表現が、何物にも染まらず潔白な「抵抗するアルジェ」と読み換えられるわけである。このあと語り手は、難攻不落であったアルジェがフランス軍によって征服（1830 年）された歴史に言及する。サルカジ監獄は次のように描写される。

> 語り手「丘陵の頂、小高い丘の側面に、サルカジ監獄がある。これは首都の呼吸を制御する肺のようなものだ。私はここに至るすべての道を知っている。これらの道は、曲がりくねって狭く、階段で隔てられた、しばしば薄暗いカスバの道だ。私は何度もこれらの道を通った。これらの道は私のものだ。私に属するべきものだ。
>
> 下方にあるのは、ヨーロッパ街の大通りや通りだ。ここでは私はよそ者だと感じる。占領者は彼の幻想をさまよわせ、家々の階層を

55 Partha Chatterjee, *The Nation and Its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories* (Princeton, NJ: Princeton Univ. Press, 1993), Chapters 6 and 7. 本論文の結論も参照。

56 Hocine Bouzaher, “Serkaji (à l’ombre de Barberousse),” *Des voix dans la Casbah* (Paris: La Découverte, 1960).

57 Bouzaher, “Serkaji,” Kindle 版位置 No.845.

数え、満足した様子で、広場のところで立ち止まる。彼は自分の家にいると感じたいし、恐怖を追い払いたい。彼は明日、つまり新たな昨日のことを考えたがる。彼は、これは彼の町なのだと信じたがる[58]。」

このように、サルカジ監獄は抵抗する都市であるカスバの一部、すなわちアルジェリア人ムスリムの共同体の一部として描写される。カスバの狭く曲がりくねった道は、サルカジ監獄という肺につながった血管網のように表現されることで、まるでカスバ全体が一つの大きな有機物のような印象を与えられており、アルジェリア現地人のネイションの隠喩となっている。さらに、アルジェリア・ネイションに属するカスバは、占領者つまりヨーロッパ人入植者たちの住む新市街の街並みと対比されている。ヨーロッパ人たちはアルジェが彼らの所有物だと思いたがるが、実のところアルジェにおけるヨーロッパ人の存在の正統性は危機にさらされている。アルジェリアを現地人の手に取り戻すための FLN の戦争が始まっていたからである。ヨーロッパ人の支配はゆらいでいるが、彼らは自分たちの存在が脅かされるという「恐怖を追い払いたい」ために植民地主義の幻想に縋りつく。

このような世界観を提示した後、戯曲の舞台はサルカジ監獄に移っていく。監獄の部屋が一つ一つ描写され、アルジェリア独立のために戦ったために収監されている囚人たちの会話が展開する。ここでサルカジ監獄は外界と隔絶した空間、人間が孤独の中で自らの内面と向き合う空間として描かれており、会話も実際の発話というよりは囚人一人一人が心情を吐露するような内容が多く、会話とモノローグの差異が曖昧になっている。場面は罪の比較的軽い被告人共同部屋に始まって、十人部屋、死刑囚の部屋、老宗教知識人の部屋、女性の囚人の部屋へと移っていく。囚人たち、看守たちの語りの内容自体はかなり抽象的ながら、監獄内の異なる囚人部屋を次々に戯曲の舞台にするという構成には、性別も社会階層も様々な人間集団が FLN に参加していたことを描きだそうとする筆者の意図があったと考えられる。囚人たちは部屋ごとに隔離されていて互いに連絡を取ることができず、孤立しているが、どこからともなく聞こえてくる愛国歌が囚人たちが一つのきずなで結ばれていることを示唆している。さらに、監獄には中庭があり、そこにはギロチンが置かれていることが説明される。死刑囚は時が来ると房から中庭に連行されて、このギロチンで処刑されるのである。

サルカジ監獄の建物は伝統的な中庭式住宅とはかなり異なるつくりであるが、中庭は建物に生きる人々の間に共有されるものの隠喩である。処刑がどのようにして起こるかはこの戯曲では詳しく描かれないものの、中庭という場所はその出来事の監獄生活における決定的な重要性を示している。旧囚人の証言によると、死刑囚が連行される気配や「神は偉大なり」「アルジェリア万歳」などの呼びかけはほかの囚人たちにも知れるので、監獄中の囚人たちが壁に隔てられつつも連行と処刑の様子を目の当たりにしており、愛国歌を歌うなどして死刑囚を送り出していた[59]。つまり、死

58　Bouzaher, “Serkaji,” Kindle 版位置 Nos.855–861.

59　ʿĀshūr Shurfī, “Sarkājī,” *Maʿlamat al-Jazāʾir* (Algiers: Dār al-Qaṣaba li-l-Nashr, 2009), 811. サルカジ監獄のギロチンと処刑の場面は映画『アルジェの戦い』にも登場する。

刑執行は壁で隔てられた囚人たちにとって共通の恐怖の体験だっただけでなく、死刑囚を称える行為によって囚人たちが心を合わせる機会でもあった。ネイションのための犠牲はその内部の結束を強めるのである。

このように、ブーザヘルの戯曲のなかでは、アルジェリア人の闘争の象徴としてカスバが描かれ、抵抗するアルジェリア・ネイションの「家」としてのサルカジ監獄に象徴的な役割が与えられた。監獄に収容された様々な抵抗者たちは、アルジェリア・ネイションの多様な構成員を代表しており、彼らをつなぐ共通の運命として、フランス軍の暴力が、中庭のギロチンに象徴される形で描き出された。

V. 結論

オリエンタリズム（東洋学及び東洋趣味）によるイスラーム都市のイメージ構築以後、アルジェリア人自身がカスバの表象に参加したことによって、カスバの伝統的な家、そして家の中の女性たちは、アルジェリアの民族的生活を代表するという意義付けを与えられてきた。オリエンタリストたちとアルジェリア人たちは、政治的な文脈では多くの点で対立していたが、実はある側面においては共通点があった。すなわち、イスラーム都市論が強調した公私・男女の空間分離というテーマにおいて、女性の空間＝私的空間に分類される家の中の空間への注目と、それへの政治的な意義付けである。

家族、家、女性がナショナリストたちに注目されたのは、これらがネイションの内的、精神的な領域を象徴するものとしてとらえられていたからである。ポストコロニアル理論の論者パルタ・チャタジーは、アジアやアフリカのナショナリズムの特徴として、経済的、技術的、政治的生活におけるヨーロッパの優位がゆるぎないと認識されている状況ゆえに、ナショナリストたちは精神や道徳といった内的領域に固執するとした。そこで女性は、ネイションの精神的な生活を支え、道徳や伝統を担う存在として重視された[60]。アルジェリア人にとって抵抗する都市というカスバのイメージは、それが内部に秘めたもの ― 伝統的な家、そして家に属するものとしての女性 ― が、ネイションの道徳、独自の文化、不可侵の精神性を象徴するものとして重視されるようになったことと結びついている。

このように、カスバの都市イメージの構築には、オリエンタリズム、並びにナショナリズムという政治的な変数が大きくかかわっているがゆえに、男女の空間分離を純粋にイスラームから派生するものと論じるような議論は、高度に政治化した近現代の都市を読み解く分析としては不十分なものであるといえる。

また、独立戦争中のカスバ表象がアルジェリア・ネイションの抵抗と不屈の精神の象徴へと集約されていったことで、カッダーシュがカスバ論を執筆したころには存在していたカスバへの社会経済的な関心は置き去りにされてしまった。FLN の戯曲に見たようなナショナリズムによるカスバのイメージの再構築により、カスバは具体的な歴史性を持った都市としてよりは永劫不変のネイションの本質として認識され、オスマン朝時代の遺産は忘却され、理想化されていった。アルジェリア独立後、『アルジェの戦い』の映画はアルジェ

60　Chatterjee, *The Nation and Its Fragments*, 119–121. Chapter 6.

リア国民に広く親しまれ、カスバの「抵抗する都市」としてのイメージは確固たるものとなったが、独立アルジェリアの社会経済政策の立案者たちは、カスバの街並みの積極的な保全、再開発、あるいは観光地化といった発想になかなか向かわなかった。カスバの家々の多くは老朽化するままに放置され、新市街のより快適な住環境を求めて多くの住民が街区から出て行った。カスバのユネスコ世界遺産への指定は 1992 年であり、国内にあと 6 つ存在する世界遺産よりも時期が遅い[61]。サルカジ監獄については 2005 年までアルジェリア当局によって監獄として利用され、反政府運動の活動家らも収監された。その後、カスバの一部として博物館になることが決められた。

このように、あらゆる介入を拒絶し抵抗する都市と謳われたカスバは、その大目的であるアルジェリア独立が達成されて以降、新しいインスピレーションを生み出す必要に迫られることもなくなっていた。アルジェリア独立戦争を直接知る世代が少なくなり、記憶の継承が危機にさらされて初めて、アルジェリア革命の記憶の場としてのカスバの役割が呼び起されたのである。

参考文献

Abu-Lughod, Janet L., 1987. “The Islamic City--Historic Myth, Islamic Essence, and Contemporary Relevance.” *International Journal of Middle East Studies* Vol. 19, No. 2: 155–176.

Almi, Saïd. 2002. *Urbanisme et colonization: Présence française en Algérie*. Hayen: Mardaga.

Amin, Samir. 1966. *L’Économie du Maghreb*, vol. 1. Paris: Minuit.

Ananou, P. 1953–1954. “Les populations rurales musulmanes du Sahel d’Alger.” *Revue africaine* Vol. 97: 369–414; Vol. 98: 113–139.

Ben Cheneb, Mohammed. 2003. *Proverbes de l’Algérie et du Maghreb*. Paris: Maisonneuve & Larose.

Bouzaher, Hocine. 1960. “Serkaji (à l’ombre de Barberousse).” *Des voix dans la Casbah*. Paris: La Découverte.

Burke, Edmund, III. 2014. *The Ethnographic State: France and the Invention of Moroccan Islam*. Oakland, Calif.: University of California Press.

Çelik, Zeynep, 1997. *Urban Forms and Colonial Confrontations: Algiers under French Rule*. Berkeley: University of California Press.

Chatterjee, Partha. 1993. *The Nation and Its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories*. Princeton: Princeton University Press.

Comité du Vieil Alger. 2003. *Les Feuillets d’El-Djezaïr*, 2 vols. Algiers: Éditions du Tell.

Cooper, Frederick. 1996. *Decolonization and African Society: The Labor Question in French and British Africa*. Cambridge: Cambridge University Press.

Descloitres, Robert, Jean-Claude Reverdy, and Claudine Descloitres. 1961. *L’Algérie des bidonvilles: Le tiers monde dans la cité*. Paris and The Hague, Mouton.

Dumasy, François. 2014. “La grande spoliation d’Alger, 1830-1834: Codifications et énonciations d’un bouleversement urbain.” In *Villes maghrébines en situations coloniales*, edited by Charlotte Jelidi, 41–58. Tunis and Paris: IRMC et Karthala.

Emerit, Marcel. 1951. “Kaddache Mahfoud, La Casbah sous les Turcs (*Documents algériens*, no. 55, 1er septembre 1951) ; La Casbah de nos jours (*ibid*., no. 56, 10 septembre 1951), Service d’Information du Gouvernement Général de l’Algérie.” *Revue africaine* Vol. 95: 421–423.

61 ほかの世界遺産は、ベニ・ハンマード城塞（登録年 1980 年）、タッシリ・ナジェール国立公園、ティムガード遺跡、ジャミーラ遺跡、ティパザ遺跡、ムザブの谷（同 1982 年）である。

House, Jim. 2019. “Intervening on ‘Problem’ Areas and their Inhabitants.” *Histoire & mesure* Vol. 34, No. 1: 121–150.

Kaddache, Mahfoud. n.d., *La Casbah: Mémoire*. Typewritten and copied document. Centre d’études diocésain, Algiers, Algeria.

Le Tourneau, Roger. 1949. *Fès avant le Protectorat. Étude économique et sociale d’une ville de l’Occident musulman*. Casablanca: Publication de l’IHEM.

Lorcin, Patricia. 1995. *Imperial Identities: Stereotyping, Prejudice and Race in Colonial Algeria*. London: I.B. Tauris.

Marçais, Georges. 1957. *Mélanges d’histoire et d’archéologie de l’Occident musulman*. Algiers: Imprimerie officielle du Gouvernement général de l’Algérie.

Marçais, William, and Georges Marçais. 1903. *Les monuments arabes de Tlemcen*. Paris: A. Fontemoing.

Marseille, Jacques. 1984. *Empire colonial et capitalism français: Histoire d’un divorce*. Paris: Albin Michel.

Masqueray, Émile. 1886. *Formation des cités chez les populations sédentaires de l’Algérie: Kabyles du Djurdjura, Chaouïa de l’Aourâs, Beni Mezab*. Paris: Ernest Leroux.

Matsubara, Kosuke. 2021. “Some Learnings Gyoji Banshoya Acquired from the Spatial Composition of the Ancient Shantytown of Mahieddine, in 1950’s Algiers: Research on Dwelling Practice around the ‘Bidonville (Shantytown)’ Project in Algiers during the Late Colonial Period, Part 1.” *Japan Architectural Review*, 2021: 1–13.

McDougall, James. 2006. *History and the Culture of Nationalism in Algeria*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Mitchell, Timothy. 1991. *Colonizing Egypt*. Berkeley: University of California Press.

Pelletier, Jean. 1959. *Alger 1955: Essai d’une géographie sociale*. Paris: Les Belles Lettres.

Shuval, Tal. 2002[1998]. *La ville d’Alger vers la fin du XVIIIe siècle: Population et cadre urbain*. Paris; CNRS Editions.

Shurfī, ʿĀshūr. 2009. *Maʿlamat al-Jazāʾir*. Algiers: Dār al-Qaṣaba li-l-Nashr.

Soufi, Fouad. 2007. “Mahfoud Kaddache, 1921–2006: La Quête du pays réel, l’exigence de l’archive.” *Insaniyat* Vol. 37 (https://doi.org/10.4000/insaniyat.9240).

Staszak, Jean-François. 2018. “Exotisation et érotisation d’un haut-lieu et bas-fond touristique : la Casbah d’Alger.” *Téoros* Vol. 37, No. 2 (https://id.erudit.org/iderudit/1055638ar).

Wyrtzen, Jonathan. 2015. *Making Morocco: Colonial Intervention and the Politics of Identity*. Ithaca and London: Cornell University Press.

サイード , エドワード著 , 板垣雄三・杉田英明監修 , 今沢紀子訳 . 1986 年 .『オリエンタリズム』平凡社 .

羽田正・三浦徹編 . 1991 年 .『イスラム都市研究 - 歴史と展望 -』東京大学出版会 .

牧野奈央 . 2021 年 .「アルジェリア人からみた仏植民地期カスバの都市空間－マフード・カッダーシュの報告の分析を通じて－」筑波大学システム情報工学研究科修士論文 .

モルトン , パトリシア著 , 長谷川章訳 . 2002 年 .『パリ植民地博覧会：オリエンタリズムの欲望と表象』ブリュッケ .

長期化・複雑化した紛争における平和構築アプローチ
―シリア紛争を事例に―

武藤亜子
独立行政法人国際協力機構
緒方貞子平和開発研究所

はじめに[1]

武力紛争は平均で数年続くとされ、一国内の紛争であっても外部のアクターが関与すると、複雑化する傾向にあるという[2]。このような状況に対処するため、当初は紛争後に焦点を当てていた平和構築の概念（例えば次を参照。UN 1992）は、近年、紛争の継続や激化にも対処する概念ととらえられるようになった（UNSC 2016; UNGA 2016）。本稿は、シリア紛争を事例として、長期化し、複雑化する武力紛争におけるいくつかの平和構築アプローチを検証し、更に文脈に即した平和構築アプローチの可能性を論じる。

リベラルな平和構築アプローチと文脈に即した平和構築アプローチ

文脈に即した平和構築アプローチは、リベラルな平和構築（Newman, Paris, and Richmond 2009）の批判概念として、進展してきた。リベラルな平和構築アプローチは、平和構築の概念において主流となっており、民主的な国家間の紛争は起きにくいという民主的平和論（Doyle 1983）を踏まえて、紛争後の民主的な国家建設を、共通の価値観とする。紛争の解決に際しては、国際的な専門家が武力紛争を分析してその根本原因を診断し、外部のアクターが主導して現地のアクターと協働し、決まったプログラムを実施するという、決定論的な方法を取ることが多い。

これに対し、現地の文脈に即した平和構築アプローチも、多数提唱されている。例えばレデラックは、紛争の影響を受けるすべての当事者、つまり上層部だけではなく、中間層や草の根層のニーズを反映させるアプローチの重要性を主張した (Lederach 1997)。ラムズボサムら (Ramsbotham et al. 2005) は、レデラックを踏まえつつ、上層部

1　本稿で示された見解は著者のものであり、所属先の公式見解を代表するものではない。本稿は、JICA 緒方研究所の「持続続的な平和に向けた国際協力の再検討：状況適応型の平和構築とは何か」研究プロジェクトの成果の一つ、次の論文を下敷きにしている。Ako Muto and Rui Saraiva, 2020, “Assessing Context-Specific Peacebuilding Approaches in Contemporary Armed Conflicts: From High-Level Mediation to Middle-Out Linkage in Syria and from Adaptive Mediation to Nationally-Owned Peacebuilding in Mozambique,” *Asian journal of peacebuilding*, Volume 8 Number 2, November 2020, pp. 241-264.

2　紛争の平均年数は 7 年で再発率は約 44％とする見解や、1980 年代以降の紛争の平均年数は 4 年以下に減少した一方で、再発率は 2000 年代に入って 60％を超えたとする見解がある（Collier et al. 2003; Merz 2012）。また、一国内の紛争に外部アクターがかかわって国際化すると、紛争は長期化する傾向にあるという（Jenne et al. 2017）。

（リーダー、国連、国際機関・地域機関、政府、国際金融機関）、中間層（リーダー、国際 NGO、教会、学者、民間企業）、草の根層（地域のリソース）の間の縦と横の関係を通じた、武力紛争への取り組みの重要性を指摘した。さらにデ・コニングは、紛争の影響を受けたコミュニティが、自らの複雑性や回復力に即して、歴史や文化に沿って独自の政治制度、司法制度を構築し、外部のアクターはこれをファシリテートするという、適応的平和構築のアプローチを展開した（de Coning 2013, 2018, 2019, 2020）。リベラルな平和構築概念とこれに批判的な平和構築概念の間の論争は、本稿で紹介した以外にも、文脈に即した様々な平和構築のアプローチを生み出し、その議論は今も続いている。

次節では、シリア紛争に対応した、主としてリベラルな平和構築アプローチを概観する。

外部が主導する平和構築アプローチ

2011 年より続くシリア紛争は、現代の長引く複雑な武力紛争の事例であり、文脈の認識は、平和構築について考慮する際に、特に重要である。シリア紛争は早期に国際化し、国連安保理常任理事国は、政権を支持する国々と反体制組織を支持する国々に分かれていたため、平和構築のための統一的な対応を取れないことが多かった。このため、国連シリア担当特使は、リベラルな平和構築アプローチを段階的に適用した。つまり、まず暴力の軽減に取り組み、その後、すべての勢力が参加する移行政府を樹立する戦略を立てたのである（Hinnebusch et al. 2016）。初代特使のアナンは 2012 年 6 月、移行政府の樹立を含む和平プロセスを定めたジュネーブ・コミュニケ（UNGA and UNSC 2012）に、国連安保理常任理事国の合意を得ることに成功した。しかし、安保理常任理事国の支持する勢力が変わったわけではなかった。また、ジュネーブ・コミュニケは紛争当事者同士の合意文書ではなかったこともあり、対立は解消されなかった。

国際的な文脈に見る対立に加えて、紛争当事者のレベルでは、反体制勢力が結集できないことにも、シリア紛争の複雑さがある。反体制勢力は百とも千以上とも言われ、武装／非武装集団に、また国内／在外拠点に分かれている。政権交代の方法も、対話か武力か、また大統領は和平プロセスの中で退陣するのか和平プロセスの前提として退陣するのかをめぐり、対立した。アメリカ、イギリス、フランス、一部のアラブ連盟加盟国といった反体制勢力を支持する国々は、人道支援や安定化支援を実施したが、反体制勢力の分断が続く状況に即して、場合により、政権が撤退した地域の行政機構を代替した地方議会（local council: LC）や、市民社会組織を直接、支援した（DfID 2015; DAI 2013）。こうしたことから反体制勢力はまとまらず、執筆時点で、政権に対峙する代表的な反体制組織は現われていない。

国際的な文脈に即してシリア担当特使が採った、現実的なリベラルな平和構築アプローチと、地域の文脈に対応した人道支援及び安定化支援が並行するアプローチは、シリア紛争の複雑性に、実際的に対処するように見えた。しかし、このアプローチは、紛争当事者間の対話をもたらせなかったため、紛争を終結させるという観点からは効果は限定的であり、平和を持続させる道筋を描くことはできなかった。

紛争の文脈は、2015 年に変化した。ロシアが政権の要請を受け、「テロとの戦い」の名のもとに、過激派組織 ISIL(Islamic State of Iraq and the

Levant) が実効支配する地域に空爆を開始したことを契機[3]として、対立してきた安保理常任理事国は歩み寄ったのである。2015 年 11 月、安保理常任理事国やアラブ連盟など、政権／反体制勢力を支持する 20 か国・機関から成る、国際シリア支援グループ（International Syria Support Group: ISSG）[4]が結成され、ジュネーブ・コミュニケに基づき、当事者同士の和平プロセスを進めることで合意した。国連安保理も同年 12 月、ISSG の合意を支持する決議を採択した (UNSC 2015)。和平プロセスは、国連だけではなく、ISSG も関与することになった。このように、外部から促される形で、2016 年に入り、当事者同士の対話がようやく開始した。

しかし、和平に向けて進むかに見えた紛争の文脈は、更に複雑化していった。もともと政権と反体制勢力のそれぞれを支持していた ISSG の結束は、半年程度しか続かなかったのである。反体制勢力の分断も解消されたわけではなかったので、当事者同士の和平交渉も、進展しなかった。ロシアはトルコ及びイランと共に、2017 年には、国連が決議 2254 号に基づいて主導する和平プロセス（いわゆるジュネーブ・プロセス）とは別の和平プロセス（いわゆるアスタナ・プロセス）を立ち上げ、二つが並立する事態になった。アスタナ・プロセスは政権に優位に機能し、政権は支配地域を奪還したとされる (Lundgren 2016) が、本稿の執筆時点では、停戦合意は成立していない。

このように、シリア紛争には、国連のシリア担当特使、安保理常任理事国、とりわけロシア、ISSG が次々と関与した。リベラルな平和構築と地域の文脈に即した支援が並行するアプローチは、当事者同士の対話の開始に 4 年を要し、対話の開始以降も、国際的な文脈の一層の複雑化を受け、安定的な和平合意に至っていない。和平プロセスに参加する上層部の対話や各種の支援活動が現場で十分に機能するには、ラムズボサムらが言うところの上層部と草の根層を繋ぐ、中間層の活動を加えて、現地の状況を把握し、技術的な観点からニーズを分析し、上層部の対話につなげる必要がある。中間層のリーダーシップは、上層部の対話や草の根のイニシアティブにも波及することで、平和を持続させる基盤を構築する上で、大きな可能性を秘めている（Lederach 1997）。次節で紹介する「シリアの未来のための国家アジェンダ」（National Agenda for the Future of Syria: NAFS）プログラムは、将来の復興に向けたシリア人の技術専門家間の連携を作り出し、中間層の機能という文脈に特化した、平和構築の一例となる可能性がある。

文脈に即した平和構築アプローチ

NAFS は 2012 年に立ち上がった、紛争後の復興計画を準備する枠組みである（UNESCWA 2013）。NAFS のシリア紛争の文脈への適応性について、3 点を挙げたい。まずは、シリア人が主導したという点である。164 名のシリア人専門家が、53 のセクターで国レベルの分析を行い、報告書にまとめ、復興のための基礎文書を準備した。1,400 人以上のシリア人関係者と 200 以上のシリ

3　空爆は ISIL の支配地域だけではなく、反体制勢力の支配地域に及び、テロとの戦いに乗じて政権を支援したと批判されている（Roth et al. 2015）。

4　国連安保理常任理事国、エジプト、ドイツ、イラン、イラク、イタリア、ヨルダン、レバノン、オマーン、カタール、サウジアラビア、トルコ、アラブ首長国連邦、アラブ連盟、欧州連合、国連。

アの市民社会組織も、積極的かつ匿名のインプットを行った。NAFS は豊富なデータと研究論文をそろえ、シリア担当特使による交渉や、国連シリア国別チーム、他の国連や国際機関の活動などを支援した（Bymolt 2016）。つまり、NAFS は、草の根層が持つ情報を分析・加工して、上層部に繋ぐ役割を果たしたのである。

第二に、NAFS は、シリア人専門家がアラビア語で議論でき、かつ安全な空間を提供した。政権支持者、反体制勢力支持者、中立的な立場の者などの専門家が集まったにもかかわらず、参加者は、シリアの紛争後の復興に向けた政策の選択肢について、直接、議論した (Bymolt 2016)。NAFS の事務局のある UNESCWA は、和平プロセスに関与しない中立的な国連機関であり、シリア人の議論をファシリテートする役割に徹している (NAFS 1 2020)。NAFS は、紛争後の融和を想定し、分断されたシリア人の中間層のネットワークを維持する役割を果たした（NAFS 2 2020; NAFS 3 2020）。

第三に、NAFS を通じて、シリア人自身が、自国の将来の政策を直接協議した。このことは、参加した専門家の意識の変化や能力強化に繋がっている (NAFS 2 2020)。つまり、NAFS は復興時に備え、シリア人の中間層のネットワーク維持だけではなく、復興を担う技術専門家集団の確保・維持という役割も果たしたことになる。

NAFS の専門家は中間層を構成し、トップレベルと対話を行ったり草の根のアクターと結びつき、垂直的かつ水平的なネットワークを通じて、紛争後の平和構築に関与する準備ができているように見えた。しかし、シリア紛争は、NAFS が当初、紛争後の復興計画の起点として設定した 2015 年になっても、終結しなかった。NAFS の活動は続き、変動する紛争状況に適応して、各種政策の選択肢を更新し、再考する必要があるという (NAFS 1 2020; NAFS 4 2020)。国際社会は、すべての介入を再定義し、目に見える結果だけを探るのではなく、紛争の文脈を考慮しながら、平和構築をどのように支援するか、検討する必要がある。

結論

リベラルな平和構築アプローチに基づく外部の介入は、国際的な専門家を通じ、武力紛争の根本原因に対処してきた。それは地域の文脈に即した支援とともに、ある程度の成果を上げたものの、複雑性が時間と共に増していった武力紛争には、有効に対処できなかった。これに対し、文脈に即した平和構築アプローチは、より持続可能な平和構築のために、地域の主体性を重視する。適応的平和構築は、外部のアクターが紛争の利害関係者ではなく、和平プロセスのファシリテーターとなることを促す、実際的なアプローチに焦点を当てている。

本稿では、シリア紛争を事例に平和構築の取り組みを分析し、NAFS の文脈に即したアプローチは、現場の状況を踏まえた和平プロセスや紛争からの早期の復興に、効果をもたらす可能性があることを確認した。第一に、シリア人の中間層が主導し、UNESCWA はファシリテーションに徹したことが、シリア人の自主性を持続させた。第二に、中間層、上層及び草の根層とのつながりは、新たな平和構築の取り組みに結びつく可能性がある。文脈に即したアプローチは、長期化し、複雑化する紛争において、紛争の影響を緩和し、平和に向かうための可能性を秘めているという仮説が導き出される。

引用・参考文献

Bymolt. Roger. 2016. “Executive Summary: Evaluation of the National Agenda for the Future of Syria (NAFS) Programme.” https://www.unescwa.org/sites/www.unescwa.org/files/page_attachments/nafs-eval-executive-summary.pdf (accessed September 20, 2019).

Collier. Paul. Elliott.V. L. Hegre. Håvard. Hoeffler. Anke Reynal-Querol. Sambanis. Nicholas 2003 *Breaking the Conflict Trap: Civil War and Development Policy.* A World Bank policy research report. Washington. D.C.: World Bank and Oxford University Press.

DAI. 2013. “Syria Regional Option (SRO) Final Report.” Washington D.C.: USAID.

de Coning. Cedric. 2013. “Complexity Theory and the Local in Peacebuilding.” https://www.peaceinsight.org/blog/2013/06/complexity-theory-and-the-local-in-peacebuilding/ (accessed January 20, 2020).

de Coning. Cedric. 2018. “Adaptive Peacebuilding.” *International Affairs* 94 (2): 301-317.

de Coning. Cedric. 2019. “Complexity Thinking and Adaptive Peacebuilding. What Can It Contribute to Our Understanding of Inclusive Political Settlements?” https://www.cr.org/downloads/Complexity%20thinking%20and%20adaptive%20peacebuilding.pdf (accessed January 20, 2020).

de Coning. Cedric. 2020. “Insights from Complexity Theory for Peace and Conflict Studies.” In *The Palgrave Encyclopedia of Peace and Conflict Studies*. eds. Oliver Richmond and Gëzim Visoka. 1-10. Cham: Palgrave Macmillan.

DfID (Department for International Development). 2015. “UK Non-Humanitarian Aid in Response to the Syria Conflict.” December 1. https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/481277/Syria_UK_Non-Humanitarian_Support_-_Public_Document.pdf (accessed February 6, 2021).

Doyle. Michael W. 1983. “Kant, Liberal Legacies, and Foreign Affairs.” *Philosophy and Public Affairs* 12 (3): 205-235.

Hinnebusch. Raymond. and I. William Zartman. Elizabeth Parker-Magyar. Omar Imady. 2016. “UN Mediation in the Syrian Crisis: From Kofi Annan to Lakhdar Brahimi.” New York: International Peace Institute.

Jeen. Erin K. and Milos Popovic. 2017. “Managing Internationalized Civil Wars.” *Oxford Research Encyclopedia of Politics*. https://doi.org/10.1093/acrefore/9780190228637.013.573

Lederach. John Paul. 1997. *Building Peace: Sustainable Reconciliation in Divided Societies.* Washington D.C.: United States Institute of Peace.

Lundgren. Magnus. 2016. “Mediation in Syria: Initiatives, Strategies, and Obstacles, 2011–2016.” *Contemporary Security Policy* 37 (2): 273–88. https://doi.org/10.1080/13523260.2016.1192377.

Merz. Sebastian. 2012. “Less conflict, more peace? Understanding trends in conflict persistence.” *Conflict, Security & Development.* vol.12, no.3. pp. 201-226. https://doi.org/10.1080/14678802.2012.703532.

NAFS 1. 2020. Riwa Nasreddine. Program Manager. Interviewed by Ako Muto through Skype between Tokyo and Beirut, January 15.

NAFS 2. 2020. Interviewed by Ako Muto through Skype between Tokyo and Beirut, January 15.

NAFS 3. 2020. Interviewed by Ako Muto through Skype between Tokyo, Beirut, and Germany, January 16.

NAFS 4. 2020. Interviewed by Ako Muto through Skype between Tokyo, Beirut, and Syria, January 16.

Newman. Edward. Roland Paris. and Oliver P. Richmond. eds. 2009. *New Perspectives on Liberal Peacebuilding.* Tokyo: United Nations University Press.

Ramsbotham. Oliver. Tom Woodhouse. and Hugh

Miall. 2005. *Contemporary Conflict Resolution, Second Edition*. Cambridge: Polity Press.

Roth, Andrew. Brian Murphy and Missy Ryan. 2015. “Russia begin airstrikes in Syria; US warns of new concerns in conflict.” *Washington Post*. https://www.washingtonpost.com/world/russias-legislature-authorizes-putin-to-use-military-force-in-syria/2015/09/30/f069f752-6749-11e5-9ef3-fde182507eac_story.html (accessed February 9, 2021).

UN (United Nations). 1992. *An Agenda for Peace; Preventive diplomacy, peacemaking and peace-keeping*. A/47/277-S/24111. New York: United Nations.

UNGA (United Nations General Assembly). 2016. *Review of the United Nations Peacebuilding Architecture*. A/RES/70/262. New York: United Nations.

UNGA and UNSC (United Nations General Assembly and United Nations Security Council). 2012. “Identical Letters Dated July 5 2012 from the Secretary-General Addressed to the President of the General Assembly and the President of the Security Council.” A/66/865–S/2012/522.

UNSC (United Nations Security Council). 2015. “Resolution 2254”. S/RES/2254.

UNSC (United Nations Security Council). 2016. “Resolution 2282”. S/RES/2282.

UNESCWA (United Nations Economic and Social Commission for Western Asia). 2013. “National Agenda for the Future of Syria Programme. Thematic Working Group on Reconstruction.” http://syrianexperthouse.org/wp-content/uploads/2013/06/Concept-note-for-Project.pdf (accessed February 6, 2021).

Post-Conflict Reconstruction and the Decline of Urban Vitality in Downtown Beirut

Allam Alkazei[1] · Kosuke Matsubara[2]

[1]Graduate School, Systems and Information Engineering, University of Tsukuba

[2]Faculty of Engineering, Information and System, University of Tsukuba

1. Introduction

Many war-torn cities in the Middle East are now moving toward reconstruction after the increase in urban hostilities since 2010. Therefore, it is important to look at previous examples in order to understand the critical steps for achieving progress in reconstruction. This context has placed a spotlight on Beirut City Center as a valuable reconstruction example after 15 years of civil war in Lebanon (1975-1990). The post-war era marked the beginning of reconstruction efforts by 'Solidere', a holding company that was created to rebuild the city centre. Solidere reinvented Downtown Beirut through a comprehensive reconstruction plan. This included a new waterfront, upgraded open spaces, a high-end retail centre, and restorations for historical buildings. The reconstruction project drew fierce debates on constitutional, economic, and heritage conservation aspects of its approach. Furthermore, Downtown Beirut has experienced stagnation in recent years as seen in fewer visitors and many closed businesses, thus creating a situation of declining urban vitality. In the context of these conditions, this study utilised field, archival, and interview surveys to clarify the connection between reconstruction planning and stagnation in the three areas Beirut's historical centre: Beirut Souks, Foch-Allenby, and Place de l'Etoile.

2. Reconstruction approaches and neoliberalism in Downtown Beirut

By examining different post-conflict contexts, we can identify different attitudes held by planning authorities towards the memory of trauma in addition to gaining a better understanding of the balance between conservation and new development. Following one approach, some reconstruction cases have actually memorialised conflicts that preceded the recovery period. For instance, in the unification of Berlin, maintaining parts of the Berlin Wall conveys the story of the city, especially after the failure of the memory-erasing 'critical reconstruction' policies. Another example of this can be seen in the reconstruction of Hiroshima after the atomic bombing in 1945 which demonstrates a unique case of reconstruction that was driven through memorialism to create a peace memorial city.

On the other end of the spectrum, some post-war

reconstruction efforts have placed less emphasis on the conflict's memory conservation. An example of this is found in the Old Town of Warsaw following the Second World War. The reconstruction aimed to protect the city's urban form from Western influences using 'creative reconstruction' which pushed the Old Town back to pre-1830. Furthermore, the situation in Downtown Beirut following the Lebanese Civil War is another example of recovery efforts that were focused on new development while deliberately avoiding memories of the conflict. Led by the private sector, the reconstruction process followed a 'tabula rasa' planning model that was driven by market-oriented neoliberal policies. Experts pointed at profit incentives since the early stages of the reconstruction and later works highlighted the neoliberal character of the project (Krijnen and Fawaz 2010) . Nonetheless, the current literature does not clarify how this neoliberal character has influenced the vitality in Beirut historical centre.

3. Chronicles of planning and vitality in Downtown Beirut

Four periods are highlighted in the context of the downtown's spatial development and livelihood by tracing key events and planning efforts. These range from the pre-conflict state to current stagnation, as follows:

I. The need for plan implementation (pre-1975)

Change to Beirut's urban fabric came under the Ottoman Tanzimat in the late 19th century and continued under the French mandate. Planners seized the opportunity of a razed historic centre after the fall of Ottoman Empire to implement their modernist planning concepts. Specifically, Danger's Plan of 1932 followed the radial streets pattern seen in the Parisian Place de l'Etoile. Post-independence governments maintained the tradition of commissioning plans, thus continuing such endeavours from the early 1940s to late 1960s. Nonetheless, very few elements of these plans were actually realised due to inefficient bureaucracy, weak institutions and opposition by private developers (Salam 1998). In general, plans of that time were aimed at dealing with an alarming rate of motorisation and the uncontrolled growth of the city. The Chehabist era of the early 1960s then witnessed the development of a national policy designed to address unbalanced development. These reforms gave momentum to public planning authorities working in both the areas of urban development and infrastructural improvement, however, on-ground implementation remained limited.

II. Reconstruction attempts and new actors (1975-1990)

The Lebanese Civil War not only marked a long era of decline in the downtown area, but also set the stage for new key players to enter its planning and development processes. The downtown area became a battlefield for conflicts between combatants in the city. These hostilities reflected widescale destruction to the city centre, thus creating a no-man's land that persisted for 15 years. Planning efforts mainly responded to this through reconstruction, with

several such attempts calling for assistance from foreign agencies. However, continued hostilities rendered any attempt to realise these reconstruction plans futile. The later years of the war witnessed an on-ground intervention in 1983 to allow for a debris-removal project led by the Oger-Liban company, was then managed by businessman Rafic Hariri. Oger-Liban then took the initiative to prepare a reconstruction plan for the BCD in 1986. These interventions played an important role in putting forward the private sector, represented by Hariri's Oger-Liban, as an alternative to the conflict-exhausted public sector. When seen in a larger perspective, the increasing role of the private sector also coincides with a global movement towards a neoliberal economy. The general rise of private-sector intervention was largely seen in the following period as reconstruction efforts throughout the city centre were carried under the banner of a public-private partnership.

III. Return under the neoliberal model (1990-2005)

The end of the civil war under the Taif Agreement in 1989 opened the door for re-construction (Traboulsi 2012). In the planning domain, the passing of Law N91-117 paved the path for the private sector to replace public authorities in large-scale reconstruction projects. Under the new law, Solidere was created to steer reconstruction efforts in the city centre. The vision of the reconstruction was for post-war Downtown Beirut to return as an international business hub in the region. The company established a masterplan that adopted flexible mixed-use zoning and on-demand parcellation, thus dividing the city centre into sectors while setting its density, building regulations, and development briefs[1]. After public debate, a conservation area was also designated in Foch-Allenby and Etoile, where the facades of buildings considered to have historical and architectural value were slated for restoration. International design competitions were launched for the creation of public spaces and souks. The early years of reconstruction witnessed a return of the downtown area once historic area restorations were finalised. Feelings of nostalgia for the city centre also revived the vital atmosphere of Place de l'Etoile. However, the downtown ambiance was redefined as the country entered a period of political turmoil in 2005.

IV. Political tension and stagnation (post-2005)

The vision of a regional financial hub was far from reality under the emerging role of the downtown as an arena for political discourse in the aftermath of Prime Minister Rafic Hariri's assassination in 2005. In addition, its function as the political and governmental heart of the capital based on the presence of both the Grand Serail and parliament turned it into a target for frequent protests and prolonged sit-ins. The conflict-prone character of the country, deteriorated infrastructure, and tense political relations with

1 For further information on the planning of the BCD, refer to Gavin and Maluf 1996.

some countries in the region led a drastic decrease in tourists' numbers especially after 2011. This period also witnessed a decay in areas with limited accessibility, mainly in Place de l'Etoile, which was caused by tightened security measures accompanying the sit-ins and later demonstrations in 2015 and 2016. As shown in Fig. 1, barricades and security gates were installed along the entrances to some areas in the historic centre. Such measures are reinforced by public and private

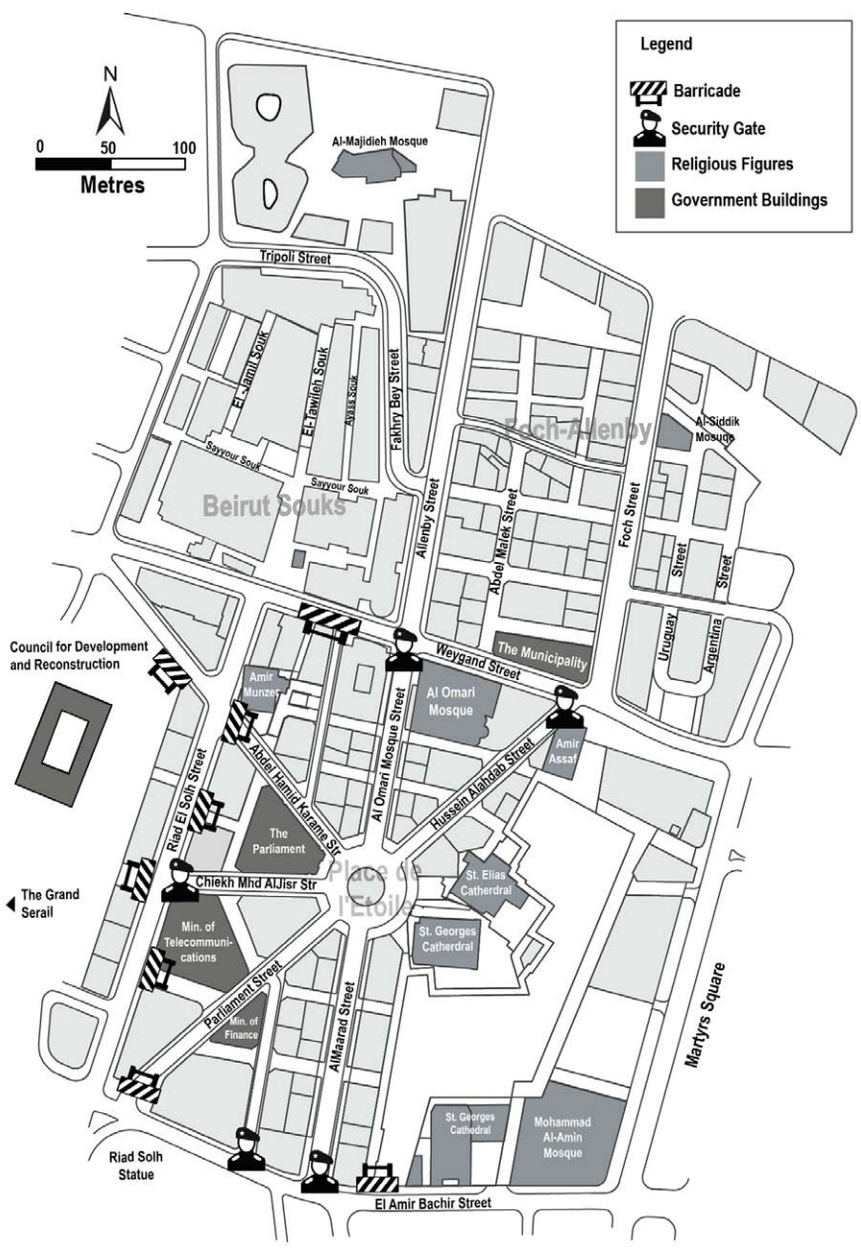


Fig. 1 Security measures in Beirut historical centre (November 2016)

security wardens.

The application of such security measures had a significant impact not only on the vitality in the historical centre but on commercial activity as well. Field observation in December 2018 that covered six streets in the three areas of the historical centre revealed that many shops, especially cafes and restaurants, went out of business or were 'for rent' in Place de l'Etoile and Foch-Allenby (Fig. 2). There were also high

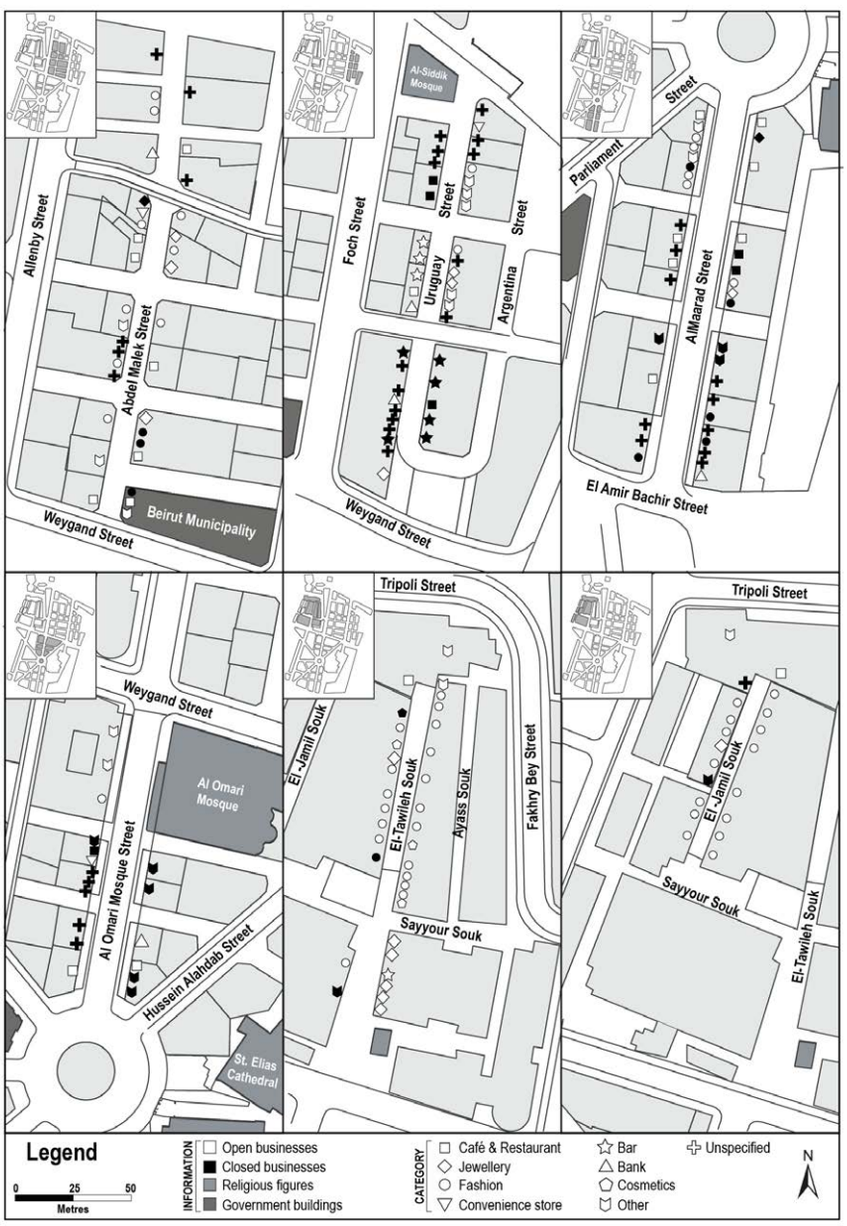


Fig. 2 Status and type of businesses on each street (December 2018)

numbers of closures in the food and beverage categories, showing that businesses which depend on large customer gatherings were more vulnerable to decline than others.

In addition, Fig. 3 shows the ratio of closed to open businesses, which provides further insight into the situation on each street. While the security relaxations helped some businesses (re)open in Place de l'Etoile, large numbers of businesses in both Al Omari Street and Al Maarad Street

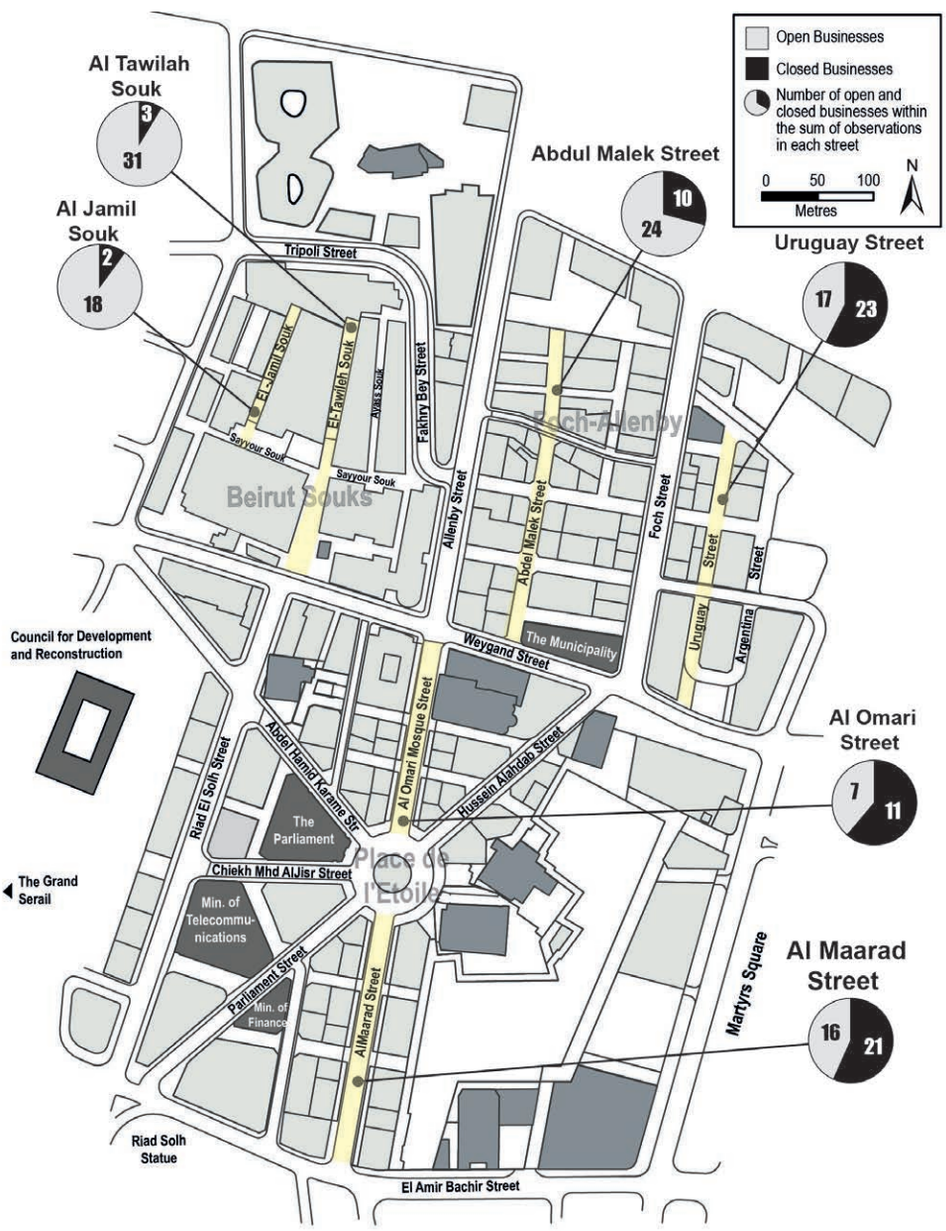


Fig. 3 Status of businesses in Beirut historical centre (December 2018)

remain closed. Although there were fewer closed businesses in the observed areas of Foch-Allenby when compared to Etoile, a considerable number of businesses remain closed in Abdel Malek Street, and even more in Uruguay Street. More specifically, many of the once-vibrant bars in Uruguay Street are now closed, which has deprived the location of its active nightlife environment. As for the souks, almost all businesses in El-Tawileh Souk and El-Jamil Souk were open for business.

4. Neoliberal planning policies and urban vitality

In the context of the reconstruction of Downtown Beirut, several neoliberal policies could be identified such as city marketing, gentrification, public-private partnership, and privatisation of public space[2]. This study conducted interviews with key informants for the purpose of clarifying the factors behind the declining downtown area as well as their relationship to the neoliberal character of the project. Data regarding the reconstruction and decline of vitality were coded and arranged into categories which were ultimately integrated into themes (Fig. 4).

Three themes emerged in regard to the declining vitality of the downtown, including on-ground conditions, a mismatching approach, and planning/strategy factors. When discussing the on-ground conditions, interviewees referred to the downtown's expensive image as a factor for declining vitality. This not only severely impacts business viability under current conditions, as seen in many shop closures during field observation, it also discourages diverse visitors due to an image of 'class-specific' development. However,

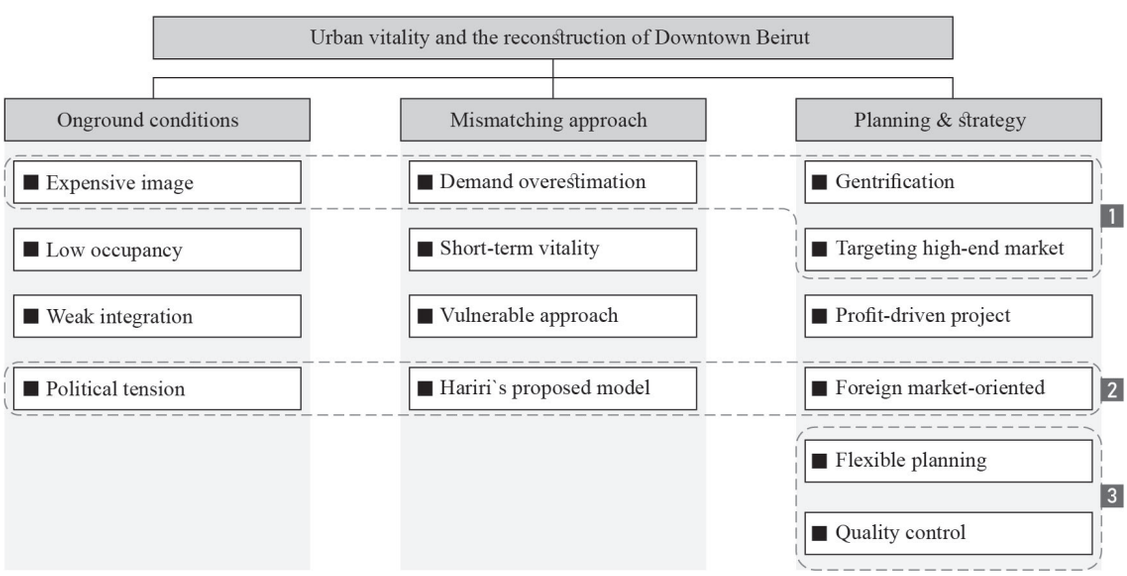


Fig. 4 Themes and relationships between categories

2 Several of the neoliberal policies identified by Sager (2011) were implemented in the reconstruction.

most interviewees also considered that political instability under current demonstrations that target government buildings in the centre (especially the parliament house) was a key factor as it results in limited access and public space securitisation. In addition, many interviewees linked the decline to low occupancy rates alongside weak social and physical integration. In regard to planning and strategy issues, many believed that flexible planning policies and quality control practices for buildings were positive aspects, but they also associated other neoliberal characteristics with declining vitality, including the high-end market orientation, profit-driven nature, and gentrification. As for the mismatch between intent and actual downtown conditions, most interviewees simply believed that the project's concept did not fit with the political and economic realities of Beirut. Several even referred to an overestimation of actual demand when compared to the project size and market.

5. Conclusion

This study clarified the relationship between declining urban vitality in Downtown Beirut and reconstruction planning. It assessed the shift towards neoliberalism within the planning paradigm and discussed declining vitality based on field observations. The implemented neoliberal policies were also identified and interviews were conducted with key informants who associated some of those policies with stagnating conditions in the downtown area. The case of Downtown Beirut epitomises an ambitious project that was planned to work as a catalyst for economic recovery. However, the project's vision of an international hub ultimately failed to achieve the former vitality of the pre-war centre. Beirut's case emphasises the need to recognise the specific character of the target area. This requires a local market approach instead of focusing on large foreign investments, especially in conflict-prone urban areas.

Reference

Alkazei A. and Matsubara K. Post-conflict reconstruction and the decline of urban vitality in Downtown Beirut International Planning Studies. *International Planning Studies* 26 (1). 2020: Published online, DOI: 10.1080/13563475.2020.1839388

Gavin, A. and Maluf, R. *Beirut Reborn: the restoration and development of the Central District*. Academy Editions, 1996.

Krijnen, M. and Fawaz, M. Exception as the rule: High-end developments in neoliberal Beirut. *Built Environment* 36 (2), 2010:117-131.

Sager, T. Neo-liberal urban planning policies: A literature survey 1990–2010. *Progress in Planning* 76 (4), 2011:147-199.

Salam, A. The role of government in shaping the built environment. In *Projecting Beirut: Episodes in the Construction and Reconstruction of a Modern City,* edited by Peter Rowe and Hashim Sarkis, 122-133. Prestel, 1998.

Traboulsi, F. *A History of Modern Lebanon*. Pluto Press, 2012.

カッパドキア遺跡・凝灰岩製の岩窟群の保全とその課題

谷口陽子
筑波大学人文社会系

はじめに

私たちの研究班は、本科研の考古学的・歴史学的研究の成果を踏まえて、現代における都市計画、文化財保全、サスティナビリティといった視点から「都市の本質」にアプローチすることを目的としている。西アジアのテルや教会遺跡群など、現在遺跡として存在するのは「再生」されなかった廃棄された都市やその機能であることが多い。しかし、破壊されずに現存していることにも意味があり、社会の中で何らかの位置づけがなされていたからこそ、完全に喪失していない、ともいえるだろう。しかし、その機能が再生されなかった理由としてどんなことが考えられるのか。水など基本資源の枯渇、塩類の析出のほか、戦争、災害等によるインフラの喪失とそれに伴う土地の放棄、宗教の変化、社会的役割の変更など多様な要因が考えられる。ここでは、再生されるものとされなかったものとの違いは何なのか。廃棄、そして復興のきっかけをいくつかの遺跡から探りたいと考えている。

トルコ・カッパドキアにおける現地調査

公募研究「トルコ・カッパドキアの都市文化・景観保全に向けた岩窟教会の風化対策に関する研究」（代表　伊庭千恵美）との連携として研究を行っている。2019 年 9 月からトルコ・カッパドキア遺跡のパシャバー地区にある聖シメオン教会（10 世紀初頭）を対象として、文化遺産の劣化と構成材料に関する理化学的調査、分析を実施している。2019 年度は、現地フィールド調査を実施し、岩窟教会の近傍に、気象ステーション、水分ポテンシャル計、温湿度計等を設置し、継続的にデータを収集、解析しているところである。今まで実施していたレッドバレー地区のウズムル教会（9 世紀）のデータとも比較し、微気象の差異や岩質の差異などから生じている劣化現象の進行状況の違いについても考察を行っている。その結果、岩窟として凝灰岩からなる小山が教会として利用しやすかった半面、結露等による水の供給による含水比変化、温度変化等によって劣化、崩壊しやすいものであることも明らかになってきた。そのため、オスマン朝の影響だけでなく、そもそも岩窟が物理的に長期利用しにくかったであろう状況も明らかになってきている。

聖シメオン教会は、内部に 10 世紀初頭の壁画や祭壇があり教会としての機能が備わっていた。しかし、祭壇は破壊され、壁画は、非キリスト教徒によるさまざまな落書きや破壊行為（ヴァンダリズム）によって大きく損なわれた状態にある。まずは、そのような状態を記録し、現在進行形で

生じている観光に関わる破壊行為をどう抑制するか、という試みを実施している。一方、破壊行為の落書きの中には、中世のキリスト教徒による信仰の言葉や文様を刻み込む行為もまぎれて残されているが、それらについても歴史的な重要性があるため、記録を行い、解析を行っている。

2020 年度も、同様に、カッパドキア遺跡においての調査・解析を継続的に実施する予定であった。トルコ文化省と在日本トルコ大使館領事部から、2020 年度の調査許可を取得し、現地調査を実施する準備も整っていたが、COVID-19 の世界的流行はトルコでも例外ではなく、2020 年 9 月で一日の死亡者数が 60 － 70 名（日本ではこの時期 10 － 15 名）であり、外国からの調査の受け入れができない状況にあった。そのため、本年度はフィールドにおけるすべての調査を中止し、昨年度までに得られたデータの解析等を行うように方針を変更せざるを得なかった。他機関からの助成金を含め、研究費用は来年度へ繰越措置を行った。

微小資料の分析

研究室には、工業用顕微鏡 BX53M（オリンパス社製）、X 線回折装置 MiniFlex（リガク社製）を導入している。それらを用いて、パシャバー地区の聖シメオン教会の凝灰岩の躯体、壁画の下地等から析出している白色物質や下地そのものの材質を同定した。SS14 などから、下地から二水石膏（ジプサム）が、赤い彩色からは赤鉄鉱（ヘマタイト）を含むオーカーが検出されており、いずれも基本的には、在地的な材料であることが確認された。ここで使用されている緑は、緑土（セラドナイト）であり、鉄、マグネシウム、カリウムなどの含水ケイ酸塩から構成され、玄武岩質の空隙に形成されるものである。デカン高原などに類

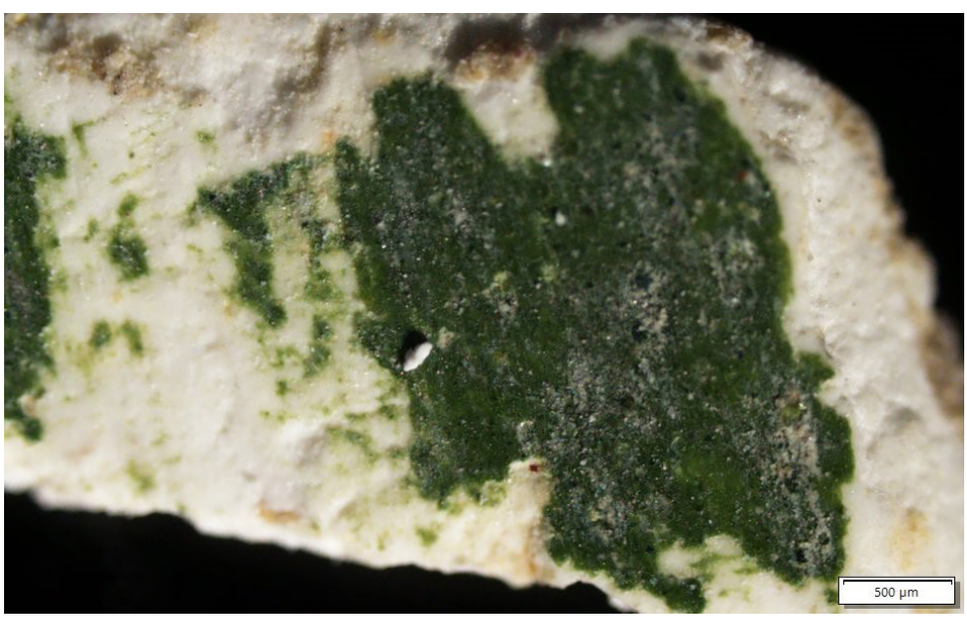


図 1 聖シメオン教会壁画の緑色部分。石膏下地にテールベルト（緑土：セラドナイト）を使用している（SS08）。テールベルトはキプロスにおける産出量が多いことが知られている（Eastaugh et al. p.181）。

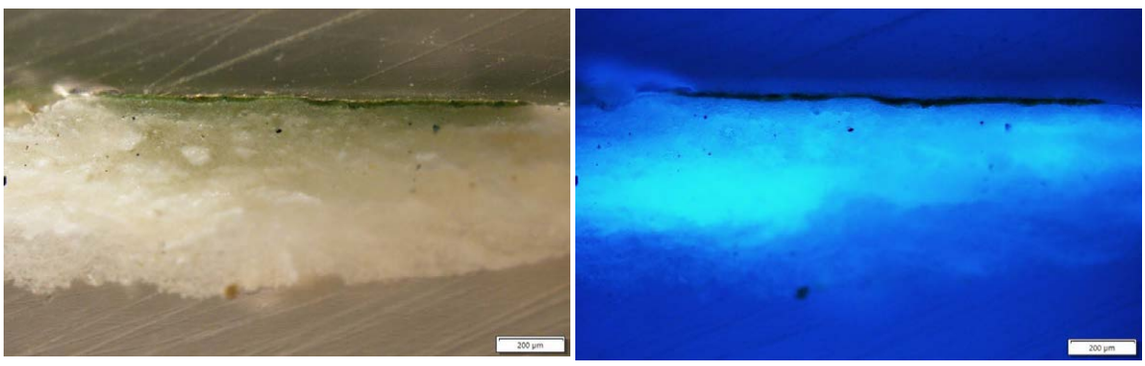


図 2　緑色部分のクロスセクション像（左：通常光、右：紫外線励起蛍光）（SS08）。石膏を用いた下地にテールベルトの彩色を施している。明らかな有機質の目止めは見られない、比較的単純な構造となっている。

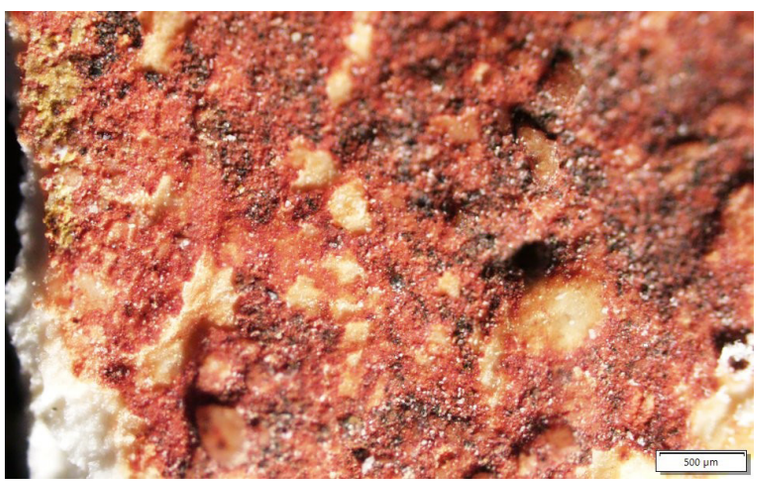


図 3　赤色部分の実体顕微鏡像（SS14）。赤鉄鉱を含んだレッドオーカーによる彩色。これも周辺地域で産出する。

似の鉱物が産出することが知られるが、カッパドキアの場合は、近隣のキプロスなどで産出され、聖人など人物像の顔の下地などに使用する事例が多い。ビザティン世界を特徴づける鍵となる材料のひとつである。

電子顕微鏡付属の XRF による元素分析や、LCMS、MALDI-MS、ELISA など微小サンプルの無機・タンパク質の分析を、現地調査ができない今の期間に実施しているところである。タンパク質の分析ではすべての試料にアミノ酸が含まれていなかったことが確認され、この壁画には膠やカゼインなどのタンパク質由来の膠着材が利用されていなかったことを裏付ける結果となった。

カッパドキアの凝灰岩をもちいた強化処理の試験や、基礎的な物性の調査などもこの期間を利用して進めている。

おわりに

カッパドキアの聖ニキタス教会ならびに聖シメオン教会の調査から、教会堂の躯体である凝灰

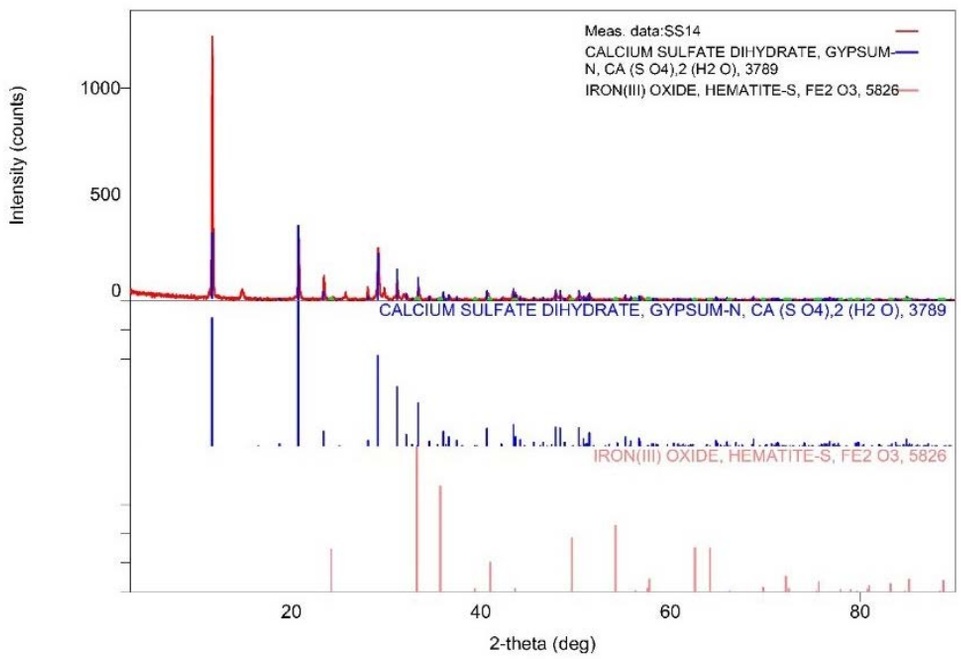


図 4　赤 SS14 のＸ線回折像。下地の二水石膏（ジプサム）と赤色のオーカーに含まれる赤鉄鉱（ヘマタイト）が確認された。

岩の物理的、化学的特性と、内部に描かれている壁画の技法材料に関する知見を得ているところである。どちらも、きわめて在地的な材料を用いて作られていることが明らかになった一方、物理的強度や凍結融解に脆弱であるという側面があり、また、壁画については簡単なひっかき程度でも柔らかい石膏下地は傷つきやすく、落書き等が目立つ材料であることも確認された。ゆえに、宗教的な記念行為としても利用しやすく、教会の廃棄後には、簡単にヴァンダリズム行為を満足させることができた側面もあるといえるだろう。

今後、カッパドキアの解析を進めるとともに、アフガニスタン・バーミヤーン遺跡やエジプトのギザ地区の再開発のフィールドの調査を通じて、比較研究を実施する予定である。

参考文献

Eastaugh, N., Walsh, V., Chaplin, T., 2008, *Pigment Compendium: A Dictionary and Optical Microscopy of Historical Pigments*, Elsevier.

2020 年度に開催した研究会・シンポジウム・講演会

C01- 計画研究 06 第 9 回研究会
日時：2020 年 7 月 28 日（火）18:30-
会場：Zoom を用いたオンライン開催
プログラム：
牧野 奈央 (筑波大学大学院)「マフード・カッダーシュの青年期におけるアルジェ・カスバ論」
松原 康介（筑波大学）「CIAM アルジェの報告書にみるスラムの空間秩序」
渡邉 祥子（アジア経済研究所）「アルジェリア人ムスリムにおけるカスバのイメージ」

領域全体研究会
日時：2020 年 8 月 8 日（土）13:00-17:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
プログラム：
1. 領域代表の挨拶と説明（中間評価と公募研究募集について）
2. 公募研究代表者による研究内容の紹介
3. 全体討議
4. 計画研究代表者による各計画研究の活動スケジュールについて

C01- 計画研究 05 第 15 回研究会
日時：2020 年 9 月 14 日（月）15:00-17:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
発表者：阿部 尚史（お茶の水女子大学）
題目：「19 世紀後半タブリーズの街区と家族：世帯調査史料の研究」

C01- 計画研究 06 第 10 回研究会
日時：2020 年 9 月 17 日（木）15:00-18:00
会場：Microsoft Teams を用いたオンライン開催
プログラム：
佐野 勝彦「カッパドキア・パシャバー地区の凝灰岩へのパーミエイト試験施工」
渡辺 晋生「パシャバーの降水／地中水分データ解析」
伊庭 千恵美「カッパドキアの岩窟教会にあたる風の影響」
成田 朱美「聖シメオン教会壁画の調査」

A02- 計画研究 02 第 13 回研究会
日時：2020 年 9 月 18 日（金）16:00-18:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
発表者：西山 伸一（中部大学）
題目：「アッシリア帝国東部辺境の拠点都市：ヤシン・テペ考古学プロジェクトの最新成果」

A01- 計画研究 01 第 11 回研究会
日時：2020 年 9 月 19 日（土）15:00-17:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
発表者：庄田 慎矢
題目：「東アジア先史時代の土器の用途をさぐる」

A02- 計画研究 03 第 6 回研究会
日時：2020 年 9 月 26 日（土）9:30-11:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
発表者：Dr. Peter Lacovara (Director, The Ancient Egyptian Archaeology and Heritage Fund, USA)
題目："The New Kingdom Royal City"

A02- 計画研究 03 第 7 回研究会「ヘレニズム時代におけるエジプトの都市の景観と構造」
日時：2020 年 10 月 18 日（日）14:00-17:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
プログラム：
長谷川 奏（早稲田大学）「アレクサンドリア後背地のウォーターフロントにみる都市村落景観」
周藤 芳幸（名古屋大学）「ヘレニズム時代のエジプト領域部における都市景観と社会構造」

C01- 計画研究 05 第 16 回研究会
日時：2020 年 10 月 26 日（月）15:00-17:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
発表者：大稔 哲也（早稲田大学）
題目：「ワクフ文書から見たエジプト死者の街 : ワクフ財源としての墓地」

C01- 計画研究 05 第 17 回研究会
日時：2020 年 11 月 9 日（月）15:00-17:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
発表者：深見 奈緒子（JSPS カイロ研究連絡センター）
題目：「ナポレオン地図の分析からみえてきた前近代のカイロ」

A02- 計画研究 03 第 8 回研究会
日時：2020 年 11 月 15 日（日）16:00-18:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
発表者：深谷 雅嗣（愛知県立大学）
題目：「テーベの祭礼と宗教都市景観」

B01- 計画研究 04・C01- 計画研究 06 第 1 回合同研究会
（計画研究 04 第 3 回研究会・計画研究 06 第 11 回研究会）
11 月 12 日 -26 日日本地球化学会年会における特別セッション「S3 考古と文化財の地球化学」
日時：2020 年 11 月 19 日（木）14:00-17:00、21 日（土）10:00-12:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催

A01- 計画研究 01 第 12 研究会
日時：2020 年 11 月 28 日（土）15:00-18:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
プログラム：
菊地 大樹（総合研究大学院大学）「東アジア古代国家の馬匹生産体制：秦帝国を手がかりに」
新井 才二（総合研究大学院大学）「古代都市と動物考古学」

A02- 計画研究 02 第 14 回研究会 "The Shape of Mesopotamian Cities: Archaeological and Philological Approaches"
日時：2020 年 11 月 28 日（土）22:00-24:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
プログラム：
Prof. Mirko Novák (University of Bern) "Mesopotamian Cities: Different Traditions and Diverging Concepts in Babylonia, Assyria and Upper Mesopotamia"
Dr. Heather D. Baker (University of Toronto) "Planning Versus Process in Urban Babylonia: City Layout in a Long-Term Perspective"

C01- 計画研究 05 第 18 回研究会
日時：2020 年 12 月 10 日（木）15:00-18:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
プログラム：
報告 1 ：柳谷 あゆみ（(公財）東洋文庫研究員）「ザンギー朝期のモスル構築」
報告２：木村 暁（東京外国語大学）「スンナ派学の牙城ブハラ」

A01- 計画研究 01・B01- 計画研究 04 第 1 回合同研究会
（計画研究 01 第 13 回研究会・計画研究 4 第 4 回研究会）
日時：2020 年 12 月 12 日（土）15:00-17:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
発表者：中野 孝教（総合地球環境学研究所）
題目：「考古遺物の産地研究としてのマルチアイソスケープ法ー考古学と地質学、環境学との統合に向けて」

A01- 計画研究 01 第 14 研究会
日時：2020 年 12 月 26 日（土）15:00-17:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
発表者：下釜 和也（古代オリエント博物館）
題目：「メソポタミア銅石器時代と都市化 —研究の現状と課題— 」

A02- 計画研究 02 第 15 回研究会
日時：2020 年 12 月 26 日（土）10:30-12:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
発表者：渡辺 千香子（大阪学院大学）
題目：「アッシュルバニパルのライオン狩り　北宮殿 C 室浮彫の解読」

C01- 計画研究 05 第 19 回研究会
日時：2021 年 1 月 18 日（月）15:00-18:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
プログラム：
報告 1 ：大矢 純（東京大学大学院人文社会系研究科修士課程）「ポルトガル人支配期の港市マスカト」
報告 2 ：栗山 保之（大東文化大学）「インド洋の港市アデン」

C01- 計画研究 06 第 12 回研究会「地中海からの連想ふたたびーシリア編」
日時：2021 年 1 月 28 日（木）16:00-18:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
講師：土居 義岳（九州大学名誉教授・建築史）
題目：「『東方旅行』の回想」
コメンテーター：
藤田 康仁（東京工業大学）
川本 智史（東京外国語大学）
コーディネーター：松原 康介（筑波大学）

C01- 計画研究 05 第 20 回研究会
日時：2021 年 2 月 24 日（水）14:00-17:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
プログラム：
報告 1 ：中村 妙子（早稲田大学総合人文科学研究センター）「シリア諸都市の立地形態と対十字軍戦略：大都市と小都市の比較検討を中心に」
報告 2 ：櫻井 康人（東北学院大学）「フランク人支配下の都市エルサレム」

X00- 総括班「西アジア都市」公開講演会
日時：2021 年 3 月 15 日（月）13:00-15:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
発表者：陣内 秀信（法政大学江戸東京研究センター特任教授）
題目：「地中海地域と西アジアとの比較都市論―空間人類学の視点から―」

領域全体研究会
日時：2021 年 3 月 15 日（水）15:00-17:00
会場：Zoom を用いたオンライン開催
発表者：安間 了（徳島大学）、黒澤 正紀（筑波大学）、池端 慶（筑波大学）
題目：「新規導入した分析機器による物質科学・地球科学的分析と考古学的調査」

A02- 計画研究 02 第 16 回研究会 "Displaying Nineveh"
日時：2021 年 3 月 19 日（金）19:00-21:20
会場：Zoom を用いたオンライン開催

プログラム：

Gareth Brereton (The British Museum)　"'The greatest king you've never heard of': exhibiting Ashurbanipal at the British Museum"

Jonathan Taylor (The British Museum)　"The library of Ashurbanipal, king of the world"

科研費新学術領域研究
都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 3 研究成果報告 2020 年度

発　行　日：　2021 年 3 月 31 日
編　　集：　山田重郎（領域代表）
発　　行：　文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究（研究領域提案型）平成 30 年度～令和 4 年度
「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」
URL: http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city/
〒 305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学人文社会系 西アジア文明研究センター
Email: rcwasia@hass.tsukuba.ac.jp
印刷・製本：　前田印刷株式会社

2018-2022 年度
文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究（研究領域提案型）
都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 3
研究成果報告 2020 年度
http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city/